
靈異戦記

股切拳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霊異戦記

【Nコード】

N9022H

【作者名】

股切拳

【あらすじ】

大学一年の夏季休暇に実家へ帰省した日比野涼一は、御迦土岳へと釣に向かった。だがそこで、鬼神復活阻止に手を貸して欲しいと、涼一の前に鬼一法眼と名乗る老人の幽霊が現れる。しかし、この出会いによって涼一の中で眠っていた厄介な力が目覚めってしまう事になり、お陰で今までの平穏な生活から一転、波乱の生活へと幕を上げるのだった。涼一の運命や如何に……。

巻ノ巻

いかぬ……このままでは鬼神の封印が解けてしまう。

早く封印の呪法を施さねば、この地に未曾有の災いが降り掛かる。じゃが、今の我にはそんな嘗ての力など最早持つてはおらぬ。

我が術を施す事は叶わぬことじゃ。

もう十夜もつまい……。

このまま封印が解けるのをただ待つばかりなのか。

ああ、クチオシヤ……クチオシヤ

F県 物部市の北東に御迦土岳みかつちだけと呼ばれる標高2000m程の山がある。

緑溢れる山で、山中には幾種類もの野鳥や野生動物の生息が確認されている。物部市を代表するといっても過言ではない、美しい山である。

また、この御迦土岳みかつちだけには、F県を横断する一級河川 石守川いしがみがわの源流があり、非常に澄んだ綺麗な水が山中を流れていた。その流れの速い水流の音や水飛沫みずしぶき、そして生い茂る木々とのコントラストは、訪れる者に癒しを与えてくれる。そんな美しく優しい空間を作り出しているのであった。

だがしかし、その美しい溪流からやや離れた位置に、不気味で巨大な、黒い大岩のある開けた場所があった。その大岩の周囲は草や木々は生えておらず、土と砂利だけの荒れ果てた地面が剥き出しになっているのである。

その様は、まるで大岩が大地の養分を吸い上げる様にも見え、この緑溢れる美しい御迦土岳みかつちだけにおいて、大岩のあるこの場所だけが別世界のよう、重苦しい空気で満ち溢れているのであった

俺の名前は日比野涼一。歳は19で彼女はいない。趣味はフライフィッシング。身長は180cm、体重65kg。容姿は友人に言わずと、好みの分かれるタイプだと言われた事がある。俺は友人にこう言われた時、「皆そうやる！」と突っ込みを入れたのを憶えている。容姿の特徴を敢えてあげるなら、髪をかなり短かくカットしたくらいかな。俺的には、かなり爽やかヘアースタイルやと思っている。

あと、職業は学生で、今年の春に入学したF県の高天智市にある高天智市立大学の工学部・電気電子工学科に通っている。因みに高天智市はF県の県庁所在地だ。

と、まあ、自己紹介はこの位にしておくとして、ここからは俺の人生を狂わせた……嫌、狂ったというか世界観が大幅に変わったというか……。まあ、そういう大きな変化が伴うくらいの世にも恐ろしい体験の話しようと思う。

人生というのは往々にして、避けて通れない重大な選択をしなければならぬ時があるが、この話も正にその選択によって生まれた話である。こんな話をこうやって記録しようと思ったのは、これから書き綴る内容を読んで貰えば分かる筈だ。

それでは、始めよう……。

それは、今から遡る事2ヶ月前……8月13日に起こった話だ。そう、その日の事は今でも鮮明に憶えている。朝から暑い日差が降り注ぐ真夏日で、蝉達のやかましい絶叫で俺は目を覚ましたのだった……。

当時、俺はお盆という事もあり、物部市にある実家に帰省していた。

因みに、物部市は山や田んぼが市の7割は占めているもの凄いい田

舎である。

実家には親父とオカン、そして、爺ちゃんと6つ下の妹の4人が暮らしている。まあ、ごく普通のありふれた一般家庭だ。大学のある高天智市と物部市は約90km程離れている為、俺自身は高天智市で一人暮らしをしている。

同じF県という事もあり、偶に用事で家に帰ったりする事もあるせいか、『遠路はるばる返ってきたぜ』なんて感じには、全然ならない。それは、家族にしても同じ様で、いつもと変わらない日比野家といったところだ。

そして今回、俺は帰省したついでにある計画を立てていた。

上にも書いたと思うが、俺の趣味はフライフィッシング、まあ、早い話が擬似餌の魚釣りだ。毛ばりという虫に似せた釣針フライを使い、それを水面に浮かべて魚を釣るというシンプル且つ奥の深い釣法だ。念のために言うが、ハエ捕りやフィッシング詐欺とは全然関係ない……。

話を戻そう。

その日は、地元で有名な溪流釣りの名所にてフライフィッシングをする計画を立てていた俺は、朝食を食べて暫く寛いだ後に、用意しておいた釣り用のベストやシューズを身に着け、各種釣り道具、タオル等を詰め込んだリュックを背負うと玄関を出たのである。

そして、高校時代に使っていたチャリみかつちだけンコを物置小屋から引つ張り出して、今回の釣り場所である物部市の北東に聳える御迦土岳へと向かったのだった。

御迦土岳みかつちだけは、実家から10km程離れており、久しぶりにチャリみかつちだけンコに乗ったという事もあったせいか、麓に着いたところには肩で息をしていたのを憶えている。呼吸を整える為に暫く休んだ後、俺は溪流釣りのポイントへと向かい歩き始めた。

御迦土岳みかつちだけの山道は、舗装こそされていないが、車でもある程度までは上つていける。その為、山道には二本の轍が何処までも道と共

に伸びていた。それなりに車も良く通るのだろう。

また、山に来る途中まで聞こえていた蝉の鳴き声は、何時の間にか聞こえなくなっていた。

物音も少なくなり、聞こえてくるのは野鳥の鳴き声と、俺が歩く度に鳴るリュックに括り付けた熊避けの鈴の音色だけの様である。

山の中に入った俺は、周囲の景色にも目を向ける。

山道の両脇に何本も生えた木々は殆どが植林された杉で、結構上のほうまで枝打がされており、木々が密集している割に、すごく見通しが良くなっていた。地元の森林組合とかが、恐らく手入れしてるんだろう。

山道の真上は遮るものが無い為、当然、強い日差しが照り付けてくる。しかし、不思議と山に入ってからそれはそれ程暑さは感じず、逆にやや肌寒いくらいだった。木々の間から時折吹く風のせいかもしれない。

そんな事を考えながら更に奥へと進んで行く。

歩きだしてから約20分程経った頃だろうか、右側の方から「サアアア」という水の流れる音が聞こえてきた。どうやら、目的の溪流に近づいて来たみたいだ。

そして音が近づくにつれ、音源である川の姿も徐々に見えてくるのであった。

それから更に進むと、山道と川の間比較的、障害物の少ないんだらかな傾斜地が俺の視界に入ってきた。

俺は此処が川に降りるのに一番楽な場所に思えたので、早速、降りることにした。

遠目では分からなかったが、その傾斜地には幅50cm程の一筋の歩道が川に向かって伸びている。

俺はその歩道を進んで川のほとりへと辿り着いたのだった。

川の付近は水の冷気もあり、山道と比べると、更に肌寒い気温となっていた。

俺は周囲にある適度な大きさの岩に、背負ったリュックを降ろす

と、とりあえず、大きく深呼吸をする。

そして、自然の作り出す不思議な癒しの空間を暫く堪能した後、リュックからフライロッドや道具を取り出して、釣りの準備に取り掛かった。

ここまでは何の変哲も無い、ただの釣りに行った話だ。だが、厄介な出来事はこの暫くの後にやって来たのだった……。

ムツ、近くに人の気配がする……。

どうやら、川で何かをしている様じゃ。

今の我身は、ただの霊体じゃ。

術を施す霊力はないが、あの若い男の霊力を操り、術を行使すれば鬼神の復活は止められるかも知れん。

じゃが、あの男の体が術に耐え切れるじゃろうか。

あの若さなら死ぬ事は無いかも知れんが、暫くの期間は身体を動かすことは出来んじやろう。

しかし、これを逃せばもう後が無い。

もはや、悠長に方法を選んでいる場合ではない。

早くあの男をこの大岩の場所まで呼ばねばならん。

許せ…… 見ず知らずの男よ

魚に見えないように適度な岩に身を隠し、フライロッドを振る。

そういうのを想像しながら、キャスティングの練習を重ねてきた。

フライフィッシングはハッキリ言って余り釣れない釣りだ。けど、

この釣りは一度はまると抜け出せない。この釣りは技術力と観察力が一つになって釣果が上がる、マニア向けの釣法である。

だいぶ前だが、ネットでフライフィッシングの事を調べていた時にキャスティングだけの大会なども行われていると知り、驚いたのを憶えている。

まあ、熱く語ったが、俺自身もキャスティング技術が向上してきた時に山女やまめを釣り上げて以来、釣の奥深さを身をもって知る事とな

り、ここまでのめり込む様になったのである。
と、話がマニアックになってきたのでこれで終わりにする。

釣を始めてから2時間程経った頃の事である。
丁度、キャスティングの最中に、誰かが俺に声をかけてきた気がしたのだった。

俺は周囲を見回す。しかし、誰もいない。
空耳かと思い、再度キャスティングをしようとする。
だがその時、今度はハッキリと声が聞こえてきたのだった。

(その男よ、頼みがある)と。

俺はビククリして後ろに振り向く。

「ウワァア。あ、あんた何時の間に!」

俺は大声を出して驚き、後ずさった。

なんと其処には、えらく古風な格好をした爺さんが宙に浮いていたからだ。

その爺さんはとても長い白い髪と髭が特徴で、服装も以前見た鎌倉時代物の大河ドラマにでてくる武士のような服装をしている。

そして、その爺さんは体全部が透けており、後ろの風景がおぼろげながら見えるのだった。

こんなのに遭遇したら誰が見てもこう言うだろう。

「ゆ、ゆ、ゆ、ゆウウれエエエ!」

この時の俺は、多分、声が裏返っていたと思う。

そして、お約束のように次の行動に移っていた。

そう……俺はフライロッドを放り出して、一目散に逃げ出したのだった。

しかし、直ぐにまわり込まれてしまう。

気が動転している俺は、また一目散に逃げ出す。

そして、またまわり込まれる。

そんなドラクエのような事を何回か繰り返すと、幽霊爺さんは突然、土下座をして懇願する様に俺に訴えかけてきた。

（ま、待つのはじゃ。驚かせたのは謝る。この通りじゃ。まず、話を聞いて欲しいのじゃ）

幽霊爺さんの必死な眼差しと、土下座という意外な行動が、俺を少しだけ現実に戻した。

そして、徐々にはあるが、落ち着きを取り戻し始め、目の前にいる幽霊に向かい、若干震えながらではあるが声を掛けたのだった。「じ、爺さんは幽霊なのか？」

（似たようなものではあるが、我は幽霊ではない。意思を持つ霊体だと思ってくれ）

「い、意思を持った霊体？ ま、ま、まあ、いいや。お、俺に話があるって言ったけど」

まだ、完全には落ち着けてない俺は、若干どもりつつも質問を続けた。

（おお、それなんじゃが……。実は、今、大変な事がこの地に起きようとしておるのじゃ）

「た、大変な事？」

（そうじゃ……。今から800年程前の話になるのじゃが。その昔、この地で、してはならぬ禁術・鬼降ろしの呪法を行った者がおつたのじゃ）

「鬼降ろしの呪法？」

何の事が知らんが、ヤバそうな名前である。

幽霊爺さんは続ける。

（人の身に鬼神を宿らせる呪法じゃ。じゃが、この呪法を行った者は強大な力を得る代わりに、自我を失い暴走するという諸刃の剣でもあるのじゃ）

「なんじゃそりゃ、何の為にそんな事すんの。自我を失うって事は力をコントロールできんやんか。意味ねえやん」

訳の分からん話だ。

そう考えていると、幽霊爺さんは悲しい表情で言うのである。

（深く悲しい経緯があるのじゃ。その昔、怒りと復讐心で荒れ狂い、

暴走した男がおった。その男は鬼の力を手に入れて鬼神となり、不条理な世を破壊しつくそうとしたのじゃ……)

俺も最初は爺さんの話を疑って聞いていたが、目の前の非常識な現実と照らし合わせて考えるとまんざらでもない様に思えてきた。

それに、この時の幽霊爺さんは当時の事を噛み締めているのか、最後のくだりの部分は弱々しく、そして、悲しい声で語っていた。後から聞いた話ではあったが、理由を知ったときは俺もいたたまれない気持ちになったのを憶えている。

しかし、当時の俺はそんな事は分かるわけも無い為、今起きている事を頭に巡らせていた。

そして、疑問を問いかける。

「それで、その鬼降ろしの呪法の事は分かったけど、それと俺が一体どういふ関係があるんだ？」

(まあ待て。順を追って話す。鬼降ろしを行つたその男は、それはもう恐ろしい程の力を手に入れよつた。大地を震え上がらせる位にな。まさしく鬼神と呼ぶに相応しい力じゃ。そして、我等も一度は挑んでみたものの、倒す事は不可能という結論に至つた。それから策を練り直し、龍穴から噴き出す大地の靈力を借りて封印の呪法を施すという方法にしたのじゃ)

なんか知らんが、色んな意味で壮大な話である。

俺はとりあえず尋ねた。

「それで、うまくいったのか？」

(ああ、結果から言うとうまくいった。其処までの道筋は口で言うほど容易ではなかったがの。しかし、この封印の呪法には最後にやらねばならぬ事があるのじゃ)

「やらねばならぬ事？」

(それは、術者自身が人柱にならねばならぬのじゃ。これだけは避けて通れぬ)

「って事は……まさか……爺さんが？」

(ああ、そうじゃ。我の命と引き換えに封印を施した。そして、我

自身が霊体となり龍穴から噴き出す地霊力を操り、鬼神を封印し続けて来たのじゃ）

爺さんの説明に聞いた事ないような単語が次々と出てくる。

俺は少々面食らいつつも、疑問を爺さんに問いかけてみた。

「それじゃ、今までは良かったけど、現在は良くないことでもおきたのか？」

（……ほう、お主なかなか物分りがいいの。そうじゃ、龍穴から噴き出す地霊力が弱まって来たのじゃ。このままでは鬼神の封印は解けてしまう。そこでお主に協力して欲しい為に今に至るといふ訳じゃ）

「ん」でも、それが原因なら俺にはどうする事も出来んぞ。そんなオカルト関係とは無縁の生活を今まで送ってきたからな。俺は唯の一般人やから、他の人間を当たった方が良いと思うぞ」

俺の意見を聞いた爺さんは、首を左右に振ると言った。

（実はな、もうそんなに悠長に構えてられぬくらいに事は切迫しておる。それに、地霊力が弱まった原因も分かっているし、何より我には策がある。どうか我を信じて力を貸してくれぬか？ この通りだ（すまぬ……許せ））

爺さんは、さっきと同じ様に、また俺の前で土下座をして頼み込んできた。

俺はそんな爺さんを見て、複雑な心境になりつつ、暫くの間考えるのだった。

どうすつかなあ……。

まあ、話してみた感じそんな悪い爺さんにも見えんが。

話の内容がすごい重いしな。しかも鬼神で……物凄く重いわあ。

RPGやないんやから。

危険な事かどうかだけ聞いとくかな、どうせ俺に出来る事なんて簡単で安全な事しかないしな。

危険やったら撤収で、安全で尚且つ簡単やったら手伝ってやるか

そう結論した俺は未だに土下座を続ける爺さんに問いかけた。

「な、なあ、爺さん。因みにそれって危険な事なん？」

(……………だ、大丈夫じゃ。何も心配するような事ない)

爺さんは少し間を空けてからそう返事した。

後になって冷静に考えてみたが、爺さんの目はかなり泳いでたように思う。

しかし、この時の俺は色んな事が沢山起こりすぎていたので、こんな簡単な状況証拠をも見逃してしまっていたのだった。

「そ、そっか。危なくないなら、手伝ってもいいぞ。あ、そうだと一つある。簡単な事なのか？」

(ああ、それは心配せんでもエエ。お主は、ただ立っているだけで良いんじゃない)

「エツ、立ってるだけなの？ その位なら構わんよ」

それを聞いた爺さんは、明るい表情になって言う。

(おお、やってくれるか、見ず知らずの旅の男よ)

「やめてくれよ爺さん、俺は旅人なんかじゃねえよ」

(では、早速、龍穴の所まで行くでしょう。こっちは。暫くは歩かねばならぬが、それは堪忍してくれ)

そんなやり取りをした後、俺はその龍穴の所にまで爺さんに案内されたのだった。

で、問題の龍穴は10分程歩いた所にあっただが、現場に着くなり俺は、あまりの光景に言葉を失った。

其処は確かに、一般人の俺でも何かがおかしいと分かるほどの、異様な重苦しい空気に満ち溢れており、その光景の真中には不気味な黒い大岩が、恐ろしく存在感を放ちながら鎮座していたのだった。辺り一帯は、不気味な大岩に大地の養分を吸い取られたかのように、その大岩を中心として草木一つ生えてない荒れ果てた大地が展

開されているのである。

俺はこの地に立ち入った瞬間、今までとは違う別の世界に入ったかのような錯覚を覚えるのだった。

生唾を「ゴクリッ」と飲み込み、爺さんにこれからの事を尋ねた。「お、おい、爺さん。一体どうするんだ？ それと、あの岩がすごい不気味なんやけど……」

（あの大岩が封印石の役目を果たしておる。その下が龍穴じゃ。そして、この地が荒れておるのは地霊力の弱まりが原因じゃ。……さて、それでじゃが。お主にはこの封印石の前に立っていて貰いたいのじゃ……大体、この辺りかの）

「お、おう。其処だな」

爺さんの雰囲気は、この地に入ってからうってかわり、恐ろしく切羽詰まった表情をしていた。

恐らく、もうギリギリの状態だったのだろう。

爺さんは説明を終えると、俺を立ち位置の所まで案内する。大体、大岩から15m程離れた所だ。

そして、俺がその位置に移動し終わると、爺さんは次の指示を示してきた。

（お主は此処で目を閉じて立って居てほしいのじゃ。そして、大きく息を吸い、大きく息を吐く、これを暫く繰り返してくれ）

「目を閉じて、大きく深呼吸すりゃ良いんだな。分かったよ」

俺は、この行動に一体どんな意味があるんだろうと、当時、不思議に思っていた。

しかし、まあ、大して面倒な事でも無かったので、爺さんの言うがままに、俺はそれらを実行したのだった。

すまぬ、見ず知らずの男よ……。

お主の霊力を封印の強化に使わせてもらうぞ。先程、会って分かったが、中々に強い生命力をお主から感じた。

恐らく術に何とか耐えられるじゃろう。暫くの間は動けぬ日々が続

くじやろうが、死ぬわけではない。

術を行使した後は、我が責任を持ってお主を麓まで送り届けてやる。恐らく、麓の村の者達がお主を介抱してくれる筈じゃ。

さて、ではお主に憑依して封印の強化を施すでしょう。

許せ……。お主の力でこの地の平穏が保たれるのだ。

俺は爺さんから言われたとおり目を閉じ大きく深呼吸を繰り返していた。

その最中、ふと意識が朦朧とするような感覚が俺に襲い掛かる。

そして、次の瞬間、俺は意識を手放したのだった

式ノ巻

《 式ノ巻 》 鬼神 二

(…… 良し、うまくいった。さて、もう幾許いくばくの猶予も無い。このままでは明日にでも鬼神が目覚めしまふ。この男の靈力を使い封印せねば)

日比野涼一に憑依したこの老人は、掌を合わせて人差し指と中指を伸ばして印を組む。

そして、拳銃を構えるかのように前に突き出して、呪文をゆっくりと唱え始めた。

《 オン・コロコロ・アーク・シャ・ソワカ 》

すると、なんと！

呪文を唱えるにつれ、印を組んだ指先に青白い光が収束しはじめたのであった。

涼一の身体自体も仄かに光っているようにみえる。

そして、呪文を唱え終えた老人は「ハッ」という掛声と共に、収束した青白い光を大岩に向かい撃ち出したのであった。

この光景をもし人が見ていたならば、SF映画でレーザー銃を撃つシーンの様に見える事だろう。

しかし、レーザー銃の様に破壊を伴うのではなく、大岩自体がその光を吸収しているという事が両者の違いを明確にしていた。そう、『力を大岩に分け与えている』というのが正しい表現のようである。

だが、術を行使し始めてから5分程経過したところで、突然、異変が起きた。

老人が涼一の身体から弾き飛ばされるように出てきたのである。

そして、涼一は老人が弾き出されると同時に、バタリとその場につつ伏せに倒れ込むのであった。

(そんな馬鹿な！ 何故、突然、操れぬようになったのじゃ。クツ仕方ない。成らばもう一度……)

老人がそう呟いたところで、今度は先程まで術を当てられた大岩に異変が現れた。

なんと、大岩に大きな亀裂が走ったのである。

そして、それと同時に、大地も震え始めた。

【ゴゴゴゴゴゴゴゴ】

(い、いかん！ 封印が解けてしまう。先程の不完全な術の反動で封印が一時、弱まったのか。クツもう、止められぬ！)

大地の震えは酷さを増して行く。

そして、大岩に走った大きな亀裂が更に広がりを見せ、岩が崩れ始めたのだった。

その時であった

完全に崩れて行く大岩から一閃の強烈な光の柱が、天に突き抜けていったのである。

崩れ落ちた大岩からは、深紫色に発光し、禍々しい空気を身体に纏う人型の存在が現れた。

それは人型ではあるが、人からは明らかにかけ離れた存在であった。

姿こそ人間に似ているが、目は怪しく赤い光を放っており、髪は天に向かい逆立っている。服装は鎌倉時代から室町時代の武士の姿である直垂姿ひたれすがたで、頭に侍烏帽子さむらいえぼしを被っていた。そして青白い光を発する、長さ80cmはあるつかという刀身の日本刀を右手にもち、口からはこの世の物とは思えぬ程の呻き声をあげているのだった。

(クツ、鬼神・建御雷神たけみかすちのかみが復活してしまったか。だが、このまま引き下がる訳には行かぬわツ。復活して間もない今ならば、まだ、何とかできるやも知れぬ。その為には、もう一度あの男に憑依せねば)

老人はそう決意し、涼一にもう一度憑依を始めた。

憑依して5秒程すると涼一の身体がムクリと起き上がる。

そして、右手を鬼神に向かい突き出し、呪文を唱え始めた。

《 ノウモ・キリーク・カンマン・ア・ヴァータ 》

老人は呪文を唱え終えると、掌から直径30cm以上はあるうかという青い炎の玉が現れる。

そして、建御雷神たけみかすちのかみの右手に狙いを定め、老人は術を放ったのだった。

まだ、復活したばかりでフラフラと足元がおぼつかない建御雷神たけみかすちのかみは、迫り来る炎の玉の存在にまったく気付いていない。

青き炎の玉が建御雷神たけみかすちのかみにアツサリ命中すると爆発が巻き起こった。

「グオオオオオオオ」

建御雷神たけみかすちのかみは、物凄い雄叫びを上げながら片膝を着き、命中した右手を左手で押さえてうづくまる。

老人は命中したのを見届けると、距離をとり森の中に身を隠す。

そして、注意深く敵の被害状況を確認するのだった。

建御雷神たけみかすちのかみの右手は肘から下が吹き飛んでおり、それを見た老人は、少しだが安堵の表情を浮かべる。

（今の段階で、奴の右手に持つ布都御魂剣ふつのたまのつるぎを吹っ飛ばす事が出来たのは大きい。これで奴の霊力の源は少しの間は断つことが出来る。

後は、奴がそれを拾う前に、再封印せねば……な、何じゃ、また弾き出されッ……）

老人が再封印を施そうと考えた丁度その時。

またもや老人は涼一の身体から弾き出されたのだった。

（クツ、何故じゃ！ も、もう一度）

早く再封印をしようと焦る老人は、もう一度、涼一の身体に憑依しようと試みる。

だが今度は憑依する事すら出来ないのだった。

（！……こやつ、まさか『幽現なる体』の持主なのか。しかし、どうすればよいのだ。グヌウ……もはや、これまでか……）

「ウオオオオオオオオオオオオオ」

だがその時、建御雷神たけみかすちのかみは物凄い咆哮をあげ、膨大な霊力を体中から放出する。その威力は、周囲の木々が折れそうな程大きく揺らし、

砕けた封印石等を吹き飛ばす程であった。

しかし、異変はそれではない。

先程吹き飛んだ建御雷神の肘から下は、たけみかすちのかみ靈圧を放出した時に、何事も無かったかのように新しい腕が生えてきていたのである。

そして、腕を再生させた建御雷神は、たけみかすちのかみ腕の動きを確認しながら、攻撃者を探す為に周囲を見回すのであった。

一方、老人が再封印を諦めかけた頃、涼一の意識も戻り始めていた。

「ウ、ンンン……ウン？　って、ウワアアアアアアアアアア！」

涼一は目を覚ますと起き上がり、またそれと共に、視界に飛び込んできた惨状を見て、顎が外れそうになるほど絶叫した。

涼一の目に飛び込んできた建御雷神の姿は、それはもう恐ろしい形相で周囲に恐怖と物凄い靈圧を撒き散らしており、一般人の涼一でも本能で生命の危機を感じるくらいであった。

「な、な、何だよこれッ」

（……すまぬ、旅の男よ。お主の折角の助けが無駄になってしまった。復活を止められなんだ我を好きにだけ恨むがいい）

老人は涼一に向かい土下座をしながらそう述べる。

「へ？　し、失敗？　ってことは、この後の展開は……」

（お主の想像通りじゃ。物凄い災いがこの地に降り掛かり、未曾有の危機が到来する……）

それを聞くなり、涼一は老人に詰め寄るとまくし立てる様になった。

「アツサリ言うなあああ。ちょっと待てよ爺さん、何とかしてくれよ。つーか、何とかできるんじゃないやなかったのかよ」

（何とかできる予定じゃったんじゃが……想定外のこと起きての。もう完全に手詰まりじゃ……すまぬ）

老人は再度土下座をする。

だが、そんな老人の返事を聞いた涼一は、頭を両手で抱えると叫

ぶ様に言うのであった。

「マ、マジかよ。俺の家族や友人が下の街や村に居るんだよ！ あんなんが麓に降りたら米軍だつて対処できねえよ。チクシヨオオ、俺だつてまだ遣り残した事が沢山あるのにイイイ。こんな所でこんな化け物に殺されるなんて嫌じゃああああ」

涼一は心の底から今の境遇を呪い、号泣した。

そんな号泣する涼一を見た老人は、ここである一つの策が閃いたのであった。

しかし、涼一にそれを説明すべきかどうかを躊躇する。が、成功する確率は低いがそれしか方法が無い為、意を決して涼一に語りかけたのだった。

(……策はひとつだけある)

「グス……どんな策だよ」

涼一は鼻を嚙り、涙を拭きながら聞き返す。

(お主は恐らく『幽現なる体』の持主。もしそうであるならば、我が吹き飛ばした布都御魂剣ふつのみたまのつるぎをお主自身が使い、奴の魂を切り捨てれば、鬼神返しが完成する)

「ハア？ 『幽現なる体』の持主イ、何だよそれ」

(その説明は後じゃ。今は、やるか、やらぬか。ただそれだけじゃ) 「もし、俺がその『幽現なる体』の持主とやらじゃなかったらどうなるんだよ？」

(剣に触れた瞬間お主は剣に生気を抜かれて死ぬ。もう一度聞く。このまま座して死を待つか、それとも可能性に賭けて打って出るか。どっちじゃ?)

涼一はその二択を思い浮かべたが、この状況で選べる選択肢は一つしかない。

その為、吐き捨てるかの様に返事するのだった。

「クソツ、分かったよ。分かりましたよ。やるよ、やりや良いんだろうが。チクシヨオオ」

(分かった。では、手短かに話す。先程言った布都御魂剣ふつのみたまのつるぎはアソコだ。

そして、奴の魂だが、心の臓に剣を突き立てる事が出来ればそれで鬼神返しは完成する。これだけじゃ。では、我が奴の気を引いておく。その間に剣を拾い、問題なければ奴を討て。大丈夫、お主は『幽現なる体』の持主だ。我の言う事をもう一度だけ信じて欲しい」
「……分かったよ」

(今の奴はまだ復活したで、動きも鈍い。それにまだ我々の隠れている所にも気付いてない。今ならお主でも討てる筈だ。では、行くぞ)

老人は鬼神返しの方法を説明してから剣の落ちている場所を指差すと、この場を離れ、建御雷神たけみかすちのかみの居る所に向かって行った。

その後、涼一の方も無然としながらではあるが、老人に指示された剣の所まで向かうのであった。

涼一は剣の落ちている場所に辿り着くと、青白く妖しい光を纏う布都御魂剣ふつのみたまのつるぎを見て「ゴクリ」と生唾を飲み込んだ。

「ハアア。ただ、フライフィッシングに来ただけなのに、何でこんな目に会うんだよ。クソッ」

悪態を吐きつつも、徐々に剣に近づく。

意を決した涼一は緊張した顔付きで、ゆっくりと剣の柄へと手を伸ばした。

そして、熱い物を触るかの様に指先を一瞬だけチョンと剣に触れて、すぐに手を引っ込める。

もう一度、同じ行動をする。

何回かこれを繰り返した後、自分の体に異変が無いのを確認すると、思い切って柄を握り締めるのだった。

「おお、なんか知らんけど大丈夫みたいや。とりあえず、あの何とかなる体とかいうやつみたいだ。……そ、それじゃ、あまり気が進まんけど。い、行くかあ」

自分を励ますように、自分自身に号令をかけ、忍び足でコソコソと建御雷神たけみかすちのかみのいる方向に移動を始めた。

丁度、その頃。

たけみかずちのかみ

老人は建御雷神の周囲を付かず離れずの距離を維持しながら飛び回り、注意を引き付けていた。

(むう……。しかし、復活したばかりとはいえ、何という霊圧じゃ。あまり奴に近づき過ぎると我までお陀仏じゃ。さて……。あの男はうまくいったかの)

たけみかずちのかみ

涼一は、砕けた封印石の陰に隠れて、建御雷神に攻撃を仕掛けるタイミングを窺う。

一方、老人の方も涼一の姿を捉え、無事、剣を手に入れたことを知ると、更に引きつける為に、大胆に奴の前に躍り出たのだった。

さて、あの男はどう見ても武士ものふではない。

我がもう少し隙を作ってやらねば恐らく斬りかかれまい。

少々危険ではあるがやむをえん。

それに……。800年の永きに渡る呪縛からお主ももう解放されるべきじゃ。

お主と我が生きていた時代はとうに過ぎ去ってしまった。

今生きる者達には、我等の事など最早関係の無い事じゃ。

もう終わりにしようぞ、嘗ての弟子よ。

ようやく我等を解放してくれる者に巡り逢えたのじゃ。

さため

あの『幽現なる体』を持つ男がこの地に来たのも、運命に導かれたのかも知れん。

少々頼りないが

老人が大胆に前に出てきた為、

たけみかずちのかみ

建御雷神は歩みを止め、老人に掴

みかかろうと右手を伸ばす。

しかし、老人の方も自由の利く霊体である為、うまく避けていく。

一方、涼一はまだ様子を窺っていた。

涼一はフライフィッシングで岩陰に隠れ、魚に見えない角度からキャストイングするというシチュエーションを想像する事が日常で

偶にある。

状況はまったく違えど、やり取りは若干似た部分が今の涼一と建御雷神の間にはあった。

だからなのかもしれない。老人とのやり取りを涼一は冷静に良く見定めていた。

そして、好機とみた涼一は岩陰からサツと飛び出して、後ろから建御雷神の心臓に布都御魂剣を突き立てたのだった。

【グギヤアアアアアアアアアアア】

布都御魂剣を心臓に突き立てられた建御雷神は一瞬動きを止めた後、雄叫びをあげ、身体中から閃光と共に靈力がほとばしった。

それはまるで体内にある靈力全てが噴出するかのようである。

真後ろにいた涼一は、その煽りをモロに受け、5m程吹き飛ばされた。

そして、台風が来たかのような風が周囲の木々を揺らし、木の葉や枝などを巻き上げる。

しかし、それらも1分程で治まり、その中心に居た建御雷神は燃え尽きたかのように灰になって崩れ去ったのであった。

辺りを静寂が包む……。

老人は両手を合わせ先程まで確かに存在していた建御雷神に黙禱を捧げる。

そして涼一は、仰向けで大の字になり、焦点の定まらない目で青い空を見上げていた。

「は、ははっ。この話多分、親やダチに言っても信じてくれんやろうなあ……俺自身、夢でも見てた様な気分やし」

（間違いないかつた話じゃ。それと、良くやってくれた……。あの鬼神の正体は、我の嘗て弟子であった男じゃ。お主は我等を長きに亘る呪縛から救ってくれたのじゃ。改めて礼を言うぞ）

「そうだったのか……。爺さんも色々あったんやな。ま、それは

置いておいてだ。もうこれ以上怪物は出て込んだらうな、爺さん？」
（さすがにもうおらぬわ。安心せい。これで我も800年の永き呪縛から解放された。お主のお陰じゃ）

「800年か……。あ、そうだ。爺さんが言っていた『幽現なる体』の持主だっけ、あれって何なんだ？」

（オおお、そうじゃった。お主、一度周りの森に目を向けてくれぬか）

「へ？ 森がなんか関係あんの……って、何じゃこりゃアアア」

涼一は老人にそう言われ、ゆっくりと体を起こす。そして、森に目を向けた。

視界に入ってきた光景に、涼一は息を呑む。

なんと、周囲の森には大小様々な優しい光を放つ球体が漂っているのであった。

「オ、オイ、爺さん。何なんだよコリヤ……変な光が沢山漂っているぞ」

（やはりか、ンン）。答えを言うとそれは全部靈魂だ。ただし、この世に生を受け死んだ生き物全ての靈魂じゃがな）

「ナンダツテエエエ。今までこんなに見た事なかったぞ。何で突然こんなに見える様になるんだよ」

そう言うと共に涼一は周囲の靈魂を指差した。

（それなんじゃが……。我が先程、お主に憑依して大岩に封印強化の術を施したとき、何回か弾き出されたのじゃ。恐らく、我がお主の靈力を使ったのがきっかけになり、魂の波長と生命の波長が同じになって一体化してしまったようじゃ。ほぼ全ての人間の、魂と生命の波長はズレておるからの。生まれつき靈感の強い人間でも、波長のズレが少ないというだけで、まったく同じ波長というわけではないんじゃない）

「一体化？ なんか良く分からんけど、言いたい事はなんとなく分かる。ハア、そうなんや……って、ちょっと待て！ その前の憑依って何だよ……まさか途中の記憶がないのってもしかして」

そう言いながら涼一は、目を大きく見開くと頭を抱えた。

(もしかしてじゃなくて、その通りじゃ)

「マジかよつ。聞いてねえぞ、そんな話。俺を騙したな、このジジイ。簡単に安全な事じゃなかったのかよ」

(しょうがないじゃろが、本当の事言ったら手を貸してくれたか？
我も嘘など吐きとうなかったわ。もはや、手段を選べる状態じゃなかったのじゃ)

このまま言い争っても平行線を辿ると思った涼一は渋々、怒りを納める。

「ハア、まあいいや。取り敢えず話を戻すぞ。さっきの説明を聞く限りやと、『幽現なる体』の持主というのは、四六時中幽霊が見えるって事か？」

(そうじゃ。じゃが見えんようにする方法が無い訳ではない)

「今すぐ教えるツ、その方法とやらを」

涼一は老人に今にも掴みかかろうとするぐらいに体を寄せ言う。

(いいじゃろ。どの道、お主には避けては通れん事やしの。さて、その方法じゃが。お主、我の弟子になれ)

「は？ 何でそうなんの」

(今、避けて通れんと言ったのには理由があるのじゃよ。『幽現なる体』というのは非常に珍しい才でな。霊の住む幽世かくりよと生命の住む現世うつしよという二つの世界の理を知る事ができるのじゃ)

「そんなもん、知りたくないけどな」と老人に流し目を向けながら涼一は言った。

(まあ、そう言わずに聞け。それで問題なのは、今のお主が、幽世かくりよと現世うつしよの本来交わる筈の無い両方の世界で存在しておるといふ事じゃ。当然、幽世かくりよの者達にも今のお主は見えておる。そして、幽世かくりよの者達の中には害の無いのも居れば、当然、悪霊もいる。という事はどうなるかわかるじゃろう。つまり靈障に人一倍遭いやすいといふ事じゃ)

「な、なんだよ、それ。さ、最悪じゃねえか」

涼一は口元をひくつかせる。

老人は言う。

（だから、お主はこれから術や霊力を操れる様に修行せねばならぬ。私の責任でこうなったのも事実じゃしせめてもの償いじゃ。私の全ての知識と技をお主に伝えよう。その中の術を使えば見えぬ様にする事も見える様にする事も可能じゃ）

老人の説明を聞いた涼一は、ロダンの考える人のような仕草をすると、溜息混じりに言うのだった。

「一難去つてまた一難か……。はあ、他に方法がないしな。俺自体がそつち方面は素人やし。ところで爺さん一体何者だ？ やけにマニアックな職業のようやけど」

（我か、私の名は鬼一法眼きいちほうげん。その昔、京で陰陽師をしておつた事もある）

「へえ、爺さん陰陽師なんか。俺も安倍清明なら知ってるぞ。映画にもなつてたし」

（ほう、安倍清明か。有名どころじゃの。だが、我も京ではそれなりに名は知られておつたぞ。今の世ではどうか知らぬがな）

「へえそつなんだ。あ、そついえば俺も名乗らないとな。俺の名前は日比野涼一。涼一って呼んでくれ。これからよろしく頼むわッ鬼一爺さん」

（鬼一爺さんか、まあよかろう。好きに呼べ。ところで我は800年後の世がどう変わったのかずつと気になつておつたのじゃ。これからは自由に動けるからの。楽しみじゃわい）

鬼一法眼はそつ言うと、ニコヤカに笑顔を作りながら大きく背伸びをする。

「多分、驚くと思うぜ。もう、武家社会じゃないからな。ま、それだけじゃないけどな」

（ほう。おつと、そつじゃ言い忘れておつた。涼一、建御雷神たけみかづちのかみが消滅した所をしてみる）

涼一は、鬼一法眼きいちほうげんにそつ促されて視線を向け驚愕の表情を浮かべ

た。

何故ならば、先程、自分が振るった布都御魂剣ふつのみたまのつみぎが未だに青白く妖しい光を発しながら、其処に存在していたからである。

それを見て驚きつつも、涼一は立ち上がる。そして、剣の付近に恐る恐る近づくのだった。

涼一は、切羽詰っていたさつきと比べると大分落ち着いている為、剣をじつくりと眺める事ができた。

「なあ、鬼一爺さん。この刀は一体なんなんだ？ 名前はどっかで聞いた事があるような気がするけど」

（この刀には、建御雷神たけみかすちのかみの分霊、布都御魂ふつのみたまが宿っておる。これも、鬼降ろしの呪法で出来た代物じゃ。本体の建御雷神たけみかすちのかみを降ろす為に必要な術具だからの）

涼一はそれらの名前に聞き覚えがあつたので、首を傾げつつ尋ねた。

「さつきから気になってたんだけど。その二つの名前って、鬼というより神様じゃないの？ 八百万の神々だったっけ」

（……鬼と神は同じ存在じゃ。人の都合で勝手に神と鬼に分けているだけじゃからな。まあ、神にしておけば民の心を集めやすいからの、世の支配者には色々都合がよいじゃろ）

「なんか妙に納得する話だ。ま、それはそれとして。この刀はどうするんだ？」

（先程も言ったが、分霊とはいえ鬼神の武具に生身で触れる事が出来るのは『幽現なる体』と鬼降ろしをした者のみじゃ。依ってこれから先は、お主の元で管理した方が良いじゃろな）

「ウワア、やっぱりか。でも、人の生気を吸い取るような超危険物は、確かに此処に放って置くには不味いよなあ。しゃあないか」

涼一は観念したかのように頂垂れると、恐る恐る刀を手に持つ。

そして、その研ぎ澄まされた刀身が発する妖しい光に、薄ら寒い雰囲気を感じとるのであった。

「これって元は唯の刀なんだろ？ 鬼一爺さん」

(ああ、当時の非常に優れた刀匠、五郎入道正宗が鍛錬した業物だと聞いた。この刀も元を辿れば御神体として何処かの神社に奉納されていたものだそうじゃ。文字通り御神体になったのは皮肉な事じゃがな)

「確かにね……。でも、どうすつか。これ隠していかないと警察に通報されて銃刀法違反で捕まっちゃうよ」

(なんじゃ、今の世はそんな法があるのか?)

「そうなんだよ。参ったなあ。あ、そういえばリュックにタオルを入れてきた筈だ。タオルでグルグル巻きにして隠しとこう。うん、そうしよう」

　　とまあこんな感じで俺は鬼一爺さんと出会っ羽目になって、今に至っている。まあまだ二ヶ月目やけど。

それにしても、鬼一爺さんのお陰で『幽現なる体』というものに目覚めてしまった俺は、これから先、恐ろしいほど苦勞する事になる。二つの世界が見えて、見られてしまうというのは想像以上に厳しい事だった。

そして、次々と起こる理不尽なトラブルに疲れた俺は、誰にも言えない体験をこうやって書き綴る事でストレスを解消し、いつの日か俺と秘密を共有できる様な人間に出会った時の事も考えて、体験を記しておこうと思う。

　　ま、最近鬼一爺さんから術や靈力の理論を学んでいるお陰で、最初の頃と比べると大分マシになったのが救いかな。

　　長々と書いたけど、ま、頑張るしかねえか。

　　という事で今回はおしまい。

参ノ巻

《 参ノ巻 》 始動

あの御迦土岳みかじちだけでの恐ろしい体験から2日後の話だ。

取り敢えず、超危険な布都御魂剣ふつのみたまのつるぎを実家に置いておくのが怖くなつた俺は、1日だけ実家に滞在して翌日には高天智市にある自分のアパートに運んできたのだつた。

因みに、刀は実家にあつた幅の広い布を何重にもグルグルに巻いて、その上から丈夫な紐で細かい間隔できつく縛つた状態になっている。

家のみんなは俺の様子がいづれと違つていたので不思議がつていたが、俺は刀の心配の方が勝つていたのでそれらは無視をした。

そして、本当はその日のうちに高天智市に帰りたかつたが、色々と疲れていた事もあり、一晩だけ実家に泊まつて、朝一のバスで帰る事にしたのだつた。

バスに揺られている間は、はつきり言つて生きた心地がしなかつた。朝一とはいえ多少は人が乗つていた為である。そして、周りの人が俺の持つている布都御魂剣ふつのみたまのつるぎに一度は目を向けるからだ。

だが、正直、何事もなく自分のアパートに運べたので、すごくホツとしたのを憶えている。

話は変わるが。俺の部屋は、ワンルームで面積が15平方mと少し狭い。その為、刀を隠せる場所もクローゼットくらいしかない状態だ。

そのクローゼットの奥に布都御魂剣ふつのみたまのつるぎを仕舞つた俺は、朝から色々で大慌てで草臥くたひれたので、エアコンのスイッチを入れると、冷蔵庫から麦茶を取り出して一息入れることにしたのである。

そして、落ち着いた所で、鬼一爺さんと俺は今後の方針について話し合うのだつた。

「さて、鬼一爺さん。これからの事なんやけど、俺は如何して良いか分からんから、鬼一爺さんに任すわ」

（まあそうじゃろうな。我の方も最初に教えねば成らん事はもう決めておるしの）

「へエ、そうなんだ。で、最初はなににするの？」

（今のお主はまず靈力の扱いを覚えねばならぬ。符術や靈術等の全ての術の基本じゃ。これが出来ねば術は使えぬ。しかし、おぬしの場合は他の人達と違い、『幽現なる体』の負の部分を一刻も早く克服せねば成らぬ立場でもある。そこで、当面は符術と靈力を平行しながら鍛えて行く方法でいく）

「フーン。で、具体的にどうすればいいんだ」

（涼一、目を閉じよ）

俺は鬼一爺さんに言われたとおり目を閉じる。

そして、次の言葉をまいった。

（まずはお主に靈力というものがどういうものか感じてもらおうと思う。それが手っ取り早いからの。では、封印石の時と同じ様に、大きく息を吸い大きく息を吐くのを繰り返してくれ。但し、今度は鼻から吸って、口から吐く様に）

「まさか、憑依するの？」

（安心せい。『幽現なる体』に目覚めたお主にはもう憑依する出来ぬからの。そんな事より、始めてくれ）

「ああ、分かった」

鬼一爺さんに言われたとおり、大きく深呼吸を始める。

呼吸を始めてから2分程経った頃からだろうか。

俺の鳩尾の辺りから下腹部にかけて妙に熱い何かが渦巻いている様に感じ始めるのだった。

そして、それが段々と大きくなうねりとなって体全体に広がるような、そんな感覚に捉われた。

そこで鬼一爺さんは俺に語りかけてきた。

（どっじゃ、なにか熱いものが渦巻いてるように感じるじゃろ？

これが靈力の流れじゃ。我は、靈圧を上げる為にお主の靈体に刺激を与えておる。我も憑依は出来ぬが、刺激を与えるくらいは出来るというわけじゃ。さて、この辺にしとこうかの)

鬼一爺さんが刺激をするのをやめたとたん、俺の身体から熱く渦巻いていたものが徐々に終息していくのが分かった。

それと同時に、どこからこの流れが出てきていたのかも俺は何となくだが分かった気がしたのだった。

「鬼一爺さん。何となくやけど、どこから靈力が湧いてくるのか分かった気がした」

（おお、そうじゃ。やはり、自分の身体で感じるのが一番わかりやすいからの）

「で、意識を集中させて靈力を操るのか？」

（まあ、その方法だけでもいつかは出来るようになるかも知れんが、最初からそれだと要領が悪い。最初の内は補助する事も兼ねて呼吸法も一緒に取り入れてやるべきじゃな）

「呼吸法……。さつきみたいなのか？」

（あんなのは呼吸法の内に入らん。あれは、我が靈体に刺激を与えるのをやりやすくする為にして貰っただけじゃ）

「ま、鬼一爺さんがそう言うんならそれに従うよ。こっちは完全に素人やから」

（今日はさわりの部分だけじゃ。明日から本格的にやってゆくからの）

鬼一爺さんには、この後に符術の基本も教えてもらった。

それでこの符術というのが俺の中で目から鱗だった。

というのも、今まで色々はこの類の呪符ってインチキくさいな。

なんて思っていたんだが、鬼一爺さんが説明してくれた符術の理論は、俺が大学で学ぶ電気の理論に似ているところがあるので興味が湧いた。

符術というのは、大雑把に言うと一枚の符の中で靈力を使う回路

を構築して結果を導く術らしい。

中には灵力そのものを一杯に溜め込んでおく電池みたいな役割のものもあるようだ。

この説明を聞いた時、符術は俺に意外とピッタリな術に思えた。

因みに、符によく漢字で色々書いてあるのは、あまり術には関係ないらしい。寧ろ模様がその符術の特性を表すそうだ。

と、まあこんな感じで色々と術の事をさわりではあるが教えてもらい、この日は終わったのだった。

それから一週間後

その日のAM11時頃に突然、大学の友人である山崎義孝 通称ヤマツチから携帯に連絡があった。

内容は、今から暇なら昼飯を食べに行こうぜ、という他愛ない話だった。

しかし、今の俺は、映画6センスのコール少年以上に幽霊が見えちゃう体質になっていたので、断ろうと思ったのだが、鬼一爺さんがたまには外に出ると言うので渋々「行く」と返事をしてしまった。

そんな訳で、俺は白地のTシャツとジーンズという簡単な服装に着替えると、待ち合わせになっている高天智中央公園に向かったのである。

外は炎天下で、確実に気温30度以上だ。かなり暑い。おまけにアスファルトの熱も容赦なく下から上がってくる。

俺の住むアパートの周囲は住宅が多い為、都会の様なコンクリート特有の熱が籠る現象は無いが暑いものは暑い。

風でも吹いてくれれば少しはいいのだが、無いものをねだつてもしょうがないので、待ち合わせ場所へサッサと向かう事にした。

公園の場所は俺の住むアパートから、徒歩で大体15分位の所だ。

鬼一爺さんも勿論ついてきている。

巨大な噴水が特徴の公園で、夜になると噴水がライトアップされて『幻想的な雰囲気を出す公園』として、何かの雑誌に載っていたのを憶えている。

まあ、そんな事は置いておくとして。実は、『幽現なる体』になつてしまつてからこの一週間、極力外出は控えるようにしていた。理由は、言わなくても分かるだろうとは思ふ。勿論、幽霊が見える事と、あの刀の存在だ。

しかし、今回は、必要以上に閉じこもつてばかりいるのを見かねた鬼一爺さんが、出かけるのを強く勧めてきたのもあつた為、おれは重い腰を上げた。

それに、もし悪霊が出たとしても、鬼一爺さんが『追い払つてやる』とも言つてくれた事も動機のひとつだ。

さて、それで久しぶりに外に出てみた俺は、いつもよりやや強張つた表情をし、よそよそしく歩いてたと思ふ。

以前の俺ならば街を歩いていてもあまりキョロキョロとする事は無かつたが、見えなくていいものが、やはり視界に入る為、どうしてもそうなつてしまう。

霊の見えなかつた毎日が最近懐かしく感じる事が多くなつてきた。だいぶ疲れがたまつてきているようだ（おもに精神的に）

しかし、鬼一爺さんが言っていた『現世うつしよと幽世かくりよは近くて遠い世界』というのは、何となく分かる気がする。

俺もこんな身体になつてみるまで分からなかつた事だ。目に見えない世界の表と裏……これが、『世界の理ことわり知る』という事なのだろう。

しかし、鬼一爺さんは、天国や地獄は存在しないと聞いていた。悪い人間だろうが良い人間だろうが死ねば行き先は一つらしい。

要するに、肉体を持つか持たないかで住む世界が変わるという事だそうで、なんか拍子抜けのような話だ。

じゃあなんで神や鬼の存在があるのか？ と聞いたら、人々の強い善悪の關係ない思念が形となつて大地の地脈を駆け巡り、それら

が威霊いれいとなり、地上に現れるらしい。

威霊いれいとは別名で神霊かみのみたまとも呼ばれ、それらが神や鬼として人々の伝承に残ったのだそうだ。

まあ、そんな鬼一爺さんとの遣り取りを思い返しながら歩く事、約15分。

俺はようやく高天智中央公園に辿り着いた。

で、早速、ヤマツチの姿を探す。すると、公園東側にあるベンチに、赤い帽子を被り、青いTシャツと黒のハーフパンツを穿いたヤマツチの姿を視界に収めた。

そこには、女の子二人とヤマツチ、そして、この三人の内の関係者である幽霊のおじさん一人が一緒にいたのだった……ハア。

俺がそんな光景を見て呆然と立ち止まっていると、ヤマツチは此方に気付いたのか、俺の名前を呼びながら右手で大きく手招きしました。

青白い顔をした幽霊のおじさんも俺を見ている。悪意のある幽霊ではないようだ。

「オ、イ、日比野お。コツチだ」

「あ、ああ、スマンスマン」

俺は若干引きつった笑顔を作りながらヤマツチ達の所へトボトボと歩いていった。

「おお、元気にしてたか？ お盆に電話したけど携帯通じんかったぞ？」

「ああ、実家に帰った時、実は携帯の充電器を忘れてきてな。アハ、アハハ」

「なんだそうだったのか。日比野ってたまにそういう時あるよなあ。ハハハ」

ハハハ……幽霊が一杯で外に出たくなかったから電源切っていた……とは、さすがに言えん。

「ところで、こちらの方々は？」

「ああ、そうだった。高校の時の同級生。紹介するよ。左が中野亜

衣ちゃん、右の子が高田琴美ちゃん。二人ともこの間の同窓会で意気投合してね。それで呼んでみたんだよ、そしたら来るって言ってくれたからさ」

卒業してからまだ半年も経ってないのに何で同窓会やねん！っていう、突っ込みを入れたくなる衝動を抑えながら、俺は二人に爽やかに挨拶した。

「そうなんだ。はじめまして。中野さんに高田さん。俺、日比野って言います。宜しく」

「宜しくね。日比野さん」と中野さんが挨拶する。

中野さんは、小柄で可愛らしく、茶色く染めたショートヘアの子で、七分丈のデニムに黄色のTシャツをきており、活発そうな雰囲気だ。

「こちらこそ、あなたが日比野さんですか。この間の同窓会で山崎君から日比野さんの名前が出てきたんでどんな人だろう？って思ってたんですよ」

今、話しかけてきた高田さんは、長い黒髪が特徴で、白いワンピースと七分丈のデニムといった着こなした。

言葉のニュアンスと雰囲気は、中野さんとは対照的で、どこことなく落ち着いた印象の女の子だ。

「へえ、例えば？」余計な事言っていないだろな山崎い」

「物凄いい釣好きな人って聞きましたよ」

「ああ、なんだ。その事か」

俺はいつもおちゃらけたヤマツチを見ていた事もあったせいか、何か余計な事を言ったんじゃないかと少しドキドキしていた。

ここまでは、別に良かったのだが……俺はヤマツチと高田さんの間にいる、幽霊おじさんと目が合ってしまった。

やはり、向こうにも俺の姿が見えているようだ。しかし、敢えて無視をしてヤマツチに話しかける。

「ところで、これから何処の店に行くんだ？」

「オウ、そうだった。2ヶ月程前にこの近くオープンした『エ・ブ

ウオナ!』ってイタ飯屋に行こうと思うんだ。結構旨いらしいぜ」
「ああ、そういえば。近くに出来たなそんな名前の店が」
俺も場所は知っていたが、店の中には入った事がない。
「じゃ行こうか。もうそろそろ昼になるし」
「そうだな」
俺達四人+2人は、イタ飯屋のある東方向に歩き出した。

この高天智中央公園のある辺りは繁華街からは若干離れている。
一応、この辺りは学園町という名前が付くくらいに、大学や小・中・高校等の教育機関、そして予備校等が集まる場所になっていた。そのため、夏期講習をする高校生や予備校生の姿が所々に確認出来る。

まあ、自分も去年、経験したことではあったが、終わってしまった後は後の祭りだ。

俺はそんな事を考えながら、鬼一爺さんに視線を向けた。
鬼一爺さんは、周囲の行き交う沢山の人々や建物等に驚きながら、俺の頭上を飛んでいる。

そして、幽霊おじさんに視線を向ける。おじさんは高田さんの隣にいた。どうやら高田さんに関係する幽霊の様だ。余り触れないようにしよう。

そんな事を考えている内に、目的の『エ・ブウオナ!』に俺達は到着した。

『エ・ブウオナ!』は白と黒を基調としたシックな感じの店で、大きな看板にはイタリアの国旗をモデルにした緑・白・赤の背景の上にE b u o n a!と書かれていた。

俺達は店の入り口になっているガラス扉を押して、中へと入ってゆく。

店の内外は、オープンしてからそんなに経ってないこともあり、非常に新しく感じる。

中は若干薄暗い感じで、エアコンの効いた室内は、外の気温と比

べると別世界のような。

俺たち4人は奥の方に丁度4人用のテーブルが空いていたので、そこに座る事にした。

テーブルに座ると、この女性スタッフがオーダーを取りに来る。各々が自分の食べたいものを注文し終わると、ヤマツチが俺に話し出した。

「この間の同窓会でさ、亜衣ちゃんや琴美ちゃん達のグループと一緒にキャンプしようって話が持ちあがったんだよ。それで、日比野にも声をかけておこうって思ってな。どうだ？ 結構そこの好きだろ日比野って」

「へえ、キャンプか……。いいなあ」

俺は、普段この提案を受けていたら迷わずイエスと答えたと思うが、またも選択に迷いが出る。

鬼一爺さんの方にチラツとだけ視線を向けると、首を傾げていた。恐らく、キャンプという耳慣れない単語が分からないせいだと思う。

それは兎も角、俺はヤマツチに言う。

「で、スケジュールとか場所とかはもう決まってるの？」

「一応、9月の第一週位に予定してるんだ。場所は高天智市となり中津市の『中津の森キャンプ場』って事で話が進んでる。そのへんで何も予定はないだろ？」

「まあ、予定は無いけど……。あつ、スマン。ちょっとお手洗いに行ってくる」

俺は鬼一爺さんに相談を持ち掛ける為、トイレに直行した。

「オイ、鬼一爺さん。いるか？」

（ンン、どうしたんじゃ涼一？）

「実はさっきの話なんだけど、気になることがあってさ……」

俺はキャンプのことや幽霊の事、部屋に置いてある刀の事等の心配な点を説明し、アドバイスを求めた。

(なるほどの。問題は布都御魂剣ふつのみたまのつるぎじゃな。余り長くあおして置く訳にもいくまい。一応、一つ打開策がある。今、お主に教えている符術の種類の中に、物を空間に保管する術があるのじゃ。余り大きな物は保管できんがの。それを使えばこの問題は解決じゃな)

「へえ、すごいな。そんな事もできるのか。でも、今の俺にそんな事出来るのか？」

(割と基本的な構成の術じゃから大丈夫じゃろ。じゃが、もう少しお主が進進するのが前提じゃがな)

「ま、まあそれは分かってるよ。とりあえず、行ける目処は立った訳か」

鬼一爺さんと会談を終えて席に戻った俺は、ヤマツチに大丈夫だと返事をする。

ヤマツチの方も、詳しいことが決まったらまた連絡をするという事でこの話はおわった。

そして、幾分か気分が楽になった俺は、頼んだ旨そうなカルボナーラがやってくると、久しぶりの外食を堪能したのだった

四ノ巻

《 四ノ巻 》 霊符術

イタ飯屋の『エ・ブウオナ！』で昼食を終えた俺達はその後、ついでに学園町内のショッピングセンター等に足を運んだ。暫くそこで買い物やゲームセンター等で遊んだ後、俺達は一旦、高天智中央公園に戻る事にした。

時刻は5時半頃。まだ空は明るかったが、今日はこれで一応解散することにし、また9月になったら中津の森キャンプ場で再会する約束をして、家路に着いたのだった。

俺は霊に遭遇しまくって少し疲れていたので、早く帰ろうと思い、寄り道せずにアパートへと向かう。

しかし、その帰り道。とある住宅街の交差点付近で、今までと様子の違う女の幽霊に出会うのだった。

その霊は若い女性で、住宅の壁に向かい、シクシクと悲しく泣いている。

俺は、少し気になったのでその霊に近づき、迂闊にも声をかけてしまった。

そして、直ぐにこの行動を後悔するハメになるのだった。

「どうしたのですか？」

「……………ヴヴヴ…ヴ」

おれが霊にそう声をかけると、霊はピタッと泣き止み、体を小刻みに震わせた。

そして、次の瞬間！

「ヴアアアアアアアア」

女性の霊は恐ろしい形相で俺に振り向き、襲い掛かってきたのだ。

俺は余りに突然の出来事だったので、後ろに尻餅をつく形で倒れこむ。

そして、身動きが取れない俺の上から、恐ろしい形相の女が覆い被さる様に飛び掛る。

悲鳴を上げることすらも忘れた俺は、金縛りに逢ったかのように何も出来ず、ただそれを見ているだけだった。

もう駄目だ！ そう思った次の瞬間……。

ドン！

横から鬼一爺さんが現れ、女の霊を突き飛ばしたのだった。

（大丈夫か？ 涼一！）

俺は今の出来事が余りに強烈だった為、焦点の定まらない目で、呆然と前方を眺めながら動揺をしていた。時間が経つにつれて、しだいに今の出来事が頭の中で整理できるようになってくる。そして、あの女の霊の形相を思い出し、身を震わせるのだった。

周囲をみまわして、先程の女の霊がないのを確認すると、俺はゆっくりと立ち上がり、鬼一爺さんに礼を言った。

「き、鬼一爺さん。あ、ありがとうございます。助かったよ」

（……涼一、無闇に霊に声を掛けてはならぬと、この間言ったではないか。今のお主には、まだ霊障に対する手段が無いのだぞ）

「ゴメン……。なんか知らないけど、あんな風に悲しく泣かれるとさ……完全に俺のミスだ」

（涼一、これだけは言っておく。悪霊というのは、人々の怒りや悲しみ、恐れや憎悪、そういった強い負の感情から生まれるのだ。これらの強い負の感情が感じられる霊は全て悪霊だと思え。そして、悪霊には意思が無い。つまり悪霊を諭す事など不可能なのじゃ。強い負の感情が悪霊として存在する事を許しているのじゃからの。まあ、これも良い経験になったじゃろ。以後、気をつけるのじゃぞ）

「わ、分かった。肝に銘じておくよ」

その後は、何事もなく無事、自分の部屋に戻る事が出来た。

しかし、先程のあの女幽霊の形相を思い返す度に、鳥肌が立つ。
「暫くはトラウマになりそうだ」と、おれは心の中で呟いたのだっ
た。

とりあえず、先程の嫌な体験を洗い流す意味もこめて、俺はシャ
ワーを浴びる事にした。

シャワーから上がると、俺の寝床である、床に直接敷いた布団の
上に寝転がる。

そして、鬼一爺さんにイタ飯屋で聞いた符術の話をもう一度尋ね
た。

「鬼一爺さん、昼に聞いたあの空間に保管する符術ってどんな構成
なの？」

（ん、送還の符術の事か？ フム……符の四方に反発する靈力を配
置するだけの術じゃ。行使するときはその反発する靈力を符の中心
でぶつけて、符上の空間を歪めるんじゃないよ。まあ簡単に言うところ
な感じだの。当然、符に配置した靈力量によって、保管できる用量
も変わるがの）

「それって、すごいよね。鬼一爺さんの頃の陰陽師と違って、皆、
その術使ってたのか？」

（いんや、使っておらぬ。我等の使う術は限られた者達にしか伝え
ておらぬからの）

「エ、そうなの？」

（そうじゃ。我等の術は秘匿とされる部類の術じゃ。陰陽師でも限
られた一握りの者にしか伝えておらぬ。力という者は持つ者次第で
天地の開きが出るからの。そんな簡単に誰にでも伝えて良いものじ
やないのだ）

「へえ、まあ言ってる事は分かるよ。それじゃ、何で俺に教えよ
うと思ったの？ やっぱり同情か？」

（そうではない。確かにそれも多少はあるが、本質はそこではない。
一番の理由は、お主が幽現なる者だからじゃ。幽現なる者は二つの
世の悲しみを知り、また二つの世の喜びを知る。そして、嘗て我の

師がこう言っておった。……幽現成る者は即ち陰陽成る者、そして世の理ことわりの中心にいる者だと。我がお主に術を教えるのは同情ではなく、陰陽の教えを受けた者としての我に与えられた使命だと思っておる）

「よせよ、爺さん。そんな風に言われると照れるじゃねえか」

俺は背中せなかの辺りが、むず痒くなり、ソワソワとする。

鬼一爺さんはそんな俺を見て少し笑うと、部屋むらに置いてある時計に目を向けた。

（ははは、それは兎も角、そろそろ水戸黄門の時間じゃろう？）

「あ、もうそんな時間か。しっかし、鬼一爺さんも好きだな。まさか、こんなにはまるとは思わなかったよ……」

俺がテレビの電源を入れると丁度、あのお約束のテーマが流れてきた。

そして、鬼一爺さんはアリーナ席で食い入るように水戸黄門を見始める。

どうやらこの爺さんは捕り物帳の時代劇が大好きなようだ。昼の4時頃から再放送している必殺！仕事人にも反応していた。

部屋むらにテレビは置いてあるが、俺自身は殆ど見る事が無い為、鬼一爺さんのお陰で、テレビも存在価値が出てきたようだ。

鬼一爺さんがテレビに夢中になっている間、俺はお湯を沸かして夕食のカップラーメンを食べるのだった。

8月28日、この日は朝から雨だった。

雨が降る日というのは、俺はいつも憂鬱ゆううつになる。なにか特別悪い思い出がある訳ではないが、何となく嫌な気分になってしまうのだ。そんな俺は机の前にある窓から外の景色を眺めている。雨はやむ気配は無い。っていうか、さつきから余計に酷くなっている。

しかし、俺が見ているのは雨ばかりではない。

窓の外には雨の他に、空にゆらゆらと漂っている靈魂達の姿が否応無く視界に入ってくるのだ。

それに雨の日は靈魂がやたらと多く感じる。

空に沢山漂う大小様々な靈魂は、天に向かい雨乞いでもしてるんじゃないだろうか？

そんな風にネガティブに考えていると、鬼一爺さんが横で、符術に必要な道具の説明をし始めるのだった。

(涼一、靈符術はの、紙と筆と硯すずりと墨すみ、そして、靈力と術式とお主の血が少量必要じゃ。今言った物は手に入れぬとならぬぞ)

「え〜と、質問が……」

(何じゃ？言うてみい)

「最後の方の、俺の血が必要というのはどういう事なのでしょう？」

(墨にお主の血を混ぜて使うのじゃ。符に込めるのはお主の靈力じゃからな。血を少量混ぜることで墨とお主の靈力の親和性を高めるのじゃ)

「へえ〜、それじゃ鬼一爺さんも現役の頃はやっぱ血を混ぜてたん？」

(あたりまえじゃ。言うておくが避ける方法はないぞ。それと血といても少量じゃ。指先を針で刺せばどうって事ないじゃる。他に疑問は？)

「ハア、余り痛いのは嫌やけど、しゃあないか。それと、紙とかは何でもいいの？ それと墨汁というのもあるけど？」

(紙は今の世の物でもよいじゃる。ただ、出来れば丈夫な物がいい。それと、今言った『ぼくじゅう』というのはなんじゃ？)

俺は鬼一爺さんに墨汁の説明と、その他のインクや絵具の事等もついでに説明した。

墨汁以外の説明をしたのは、鬼一爺さんにも、今の文明的な製品の事を多少は説明しておかないと代用が利かないと思っただからだ。

そして、思っただとおり、鬼一爺さんはうなりながら関心するのだった。

(なるほどの。あの『てれび』というやつといい、今の世は便利な

物が沢山あるのじゃな)

「まあな。で、墨汁で代用きくかな？」

(話を聞く限り、多分問題ないじゃろ。何事もやってみねば分からぬしの)

「そっか、まあどっちにしてもここには無いな。雨が降るので気が進まんけど買に行くか」

そういう訳で、俺はこの雨の中、近くのホームセンターに行き文具コーナーから墨汁と筆、紙と必要な物を買ってきた。

ただ、硯は置いてなかった為、他の容器で代用する事にした。

さて、話は変わるが、今日、霊符の実習をする事になったのは理由がある。

俺が符術の考え方と霊力の扱いを修練し始めてから今日で、一応2週間が経過した訳だが、鬼一爺さんは、俺の霊力を扱う上達が早いのに驚き、霊符術の初歩の術を実際にやってみるといいう事になったのだ。

そういうわけで、買出しから戻った俺は早速机に向かい、鬼一爺さんの指示の元、霊符の作成に取り掛かるのだった。

(涼一、今回作る霊符の術式は憶えておるな?)

「ああ、一応ね。霊籠リウリウの符とか言うやつだろ。霊力を符に籠めてストックしておく術だよな、確か……。で、術式は「籠める・溜める・放つ」の三つの術構成を順に書くんだよな」

(そうじゃ、そこまで分かっているなら。実際にやってみようぞ。さ、まずはお主の採血からじゃな)

「ハア、余り気が進まんが。観念するか」

俺は、爺さんの指示に従い裁縫針で左手の人差し指を刺す。

当然、俺は痛さで顔を歪めるが我慢し、墨汁を入れた容器に数滴の血を垂らした。

そして、ませあわせる。それが終わると鬼一爺さんは次にすべき事を指示する。

(さて、それじゃ次は紙を机に置き。そして、呼吸を整え、心を落ち着かせてから書くのじゃ。さ、はじめよ)

俺は背筋を伸ばし、大きくゆっくりと深呼吸をする。

そして、幾分か頭の中が穏やかになった状態で、目の前の紙に向かい筆を走らせた。

ゆっくりと筆を走らせた為、符が出来上がるのに10分程掛かった。時間をかけたのはそう急ぐ必要も無いだろうと思ったからだ。

そして書き終わると、ゆっくりとした動作で筆を置き、鬼一爺さんに確認してもらった。

(ほう、書いておるな。ま、初步の符術じゃからそれ程難しくも無いからの。それでは、涼一、その符に靈力を籠めてみよ。但し、籠の術式の所からじゃぞ。そこが入口じゃからの)

「おう」

俺は今書いた符上部の籠の術式に人差し指と中指を当て、呼吸法と意念で靈力を練り上げる。次に、指先に向かって放出する様に靈力の流れを変えたのだった。

そして、驚く。何故なら、符に書いた術の回路上をまるで電気が駆け抜けていくかのように青白い光が走って行くからだ。

俺は、その光景に若干感動を覚えつつ鬼一爺さんを見た。

(フム、うまくいったようじゃな。それじゃ、涼一。後、200枚は今日中に書いてもらおうかの)

「エエエ！ これを200枚も書くの？ マジかよ」

(馬鹿も〜ん。当たり前じゃろうが。これも修行じゃ。今みたいにチンタラチンタラ書いておいたらイザと言う時、困るじゃろうが。分かったらサツサと始めい)

「うう、分かったよ」

俺には今の鬼一爺さんが鬼教官の様に見えた。

そして、爺さんに言われたとおり200枚書き終えた後、余りに何枚も書いたもんだから手首が吊るくらいに痛くなつたのを憶えている。因みに終わったのはPM7時過ぎだ。

この時、俺の中で一つの仮説が出来たのだった。恐らく、符術をする人達は職業病として慢性の腱鞘炎に悩んだに違いないと……。そんな他愛ない事を霊籠の符を書き終えた俺は考えていたが、実は『この日からが本当の術の修行の始まりだという事に』その時の俺はまだ気が付いてなかったのだった。

特にこの次の日は本当に参った。

前日に書いた霊籠の符に、霊力を籠めなければなら無かったからだ。これは本当にしんどかった。

正直、干からびているんじゃないのかと、鏡で自分の顔を確認するくらい、霊力を符に籠めなければならなかったからだ。

しかし、これらの荒行のお陰か、更に一週間経った頃には霊力の操作は飛躍的に向上していた。

もう暫くすると呼吸法を使わずに意念のみで霊力を操れるかも知れないと思うぐらいに。

うれしくなつてこの話を鬼一爺さんにしたら、次からは更に量を増やすような事を言い出した。正直、しまったと思つた。

そして、俺はそんな爺さんを見てこう呟いた。

「あんだ、ほんまに鬼やん……」と

それから、1週間後の9月5日

今日は、空間保管の術である送還の符をついに実践する事になったのだ。

とりあえず、これが成功すれば、部屋のクローゼットの奥に忍ばせた『ふつのみたまのしるみ生氣を吸い取る超極悪な魔剣・布都御魂剣』の悩みが解消される。

この日ばかりは俺も術への期待が大きかった為、心待ちにしていたのを憶えている。

前の晩に鬼一爺さんは、何時もの紙よりも若干大き目の紙を用意するよう、俺に指示をしてきた。

そして、今、机の上にはいつもの二倍の大きさの紙が広げられて

いる。

俺は、鬼一爺さんの号令を待った。

(それでは涼一、その紙に昨日説明した通りに術式を書くのだ)
爺さんのその言葉を聞き、術の構成を思い浮かべる。そして、大きく深呼吸をし頭の邪念を振り払い、俺は筆を手に取った。

送還の符の術式……それは霊籠の符の術式を応用したものであった。

符の四方に霊籠の術を配置し、符の中心には結界を書く。その結界の中に四方から放たれる霊力を誘導し、結界の中のみ空間を歪ませる。

大雑把にいうとそういうプロセスの術だ。まあ、厳密には霊籠の術以外にも併用する術式があるのだが。

俺は、それらを丁寧に符に書き込んで行く。

書き終わると鬼一爺さんに確認してもらった。

(フム、よく書いておるわ。では、符を床に置いて霊籠の術式に霊力を籠めるのだ)

俺は鬼一爺さんに言われたとおりに霊力を籠める。

そして、爺さんにまた確認を仰いだ。

(よし、いいじゃろ。では、四方の力を解放せよ)

俺は四方の霊籠の術をやや慎重に解放した。その途端、中心の結界に異変が起きる。なんと深紫色の空間が結界の中に現れたのだった。

俺は恐る恐る爺さんの顔を見た。

鬼一爺さんは無言で頷くと俺に布都御魂剣ふつのみたまのつるぎを持ってくる様に指示した。

俺は言われたとおりにクローゼットの中から取り出し、符の前に置いた。

(涼一、その縛ってある紐と布を解け)

「お、おう、分かった」

グルグル巻きにしておいた布と紐を外す。中には、やはり以前と

変わらずに妖しく光る刀が出てきた。当たり前だが……。

(フム、それでは刀をその空間に入れてみよ)

俺は布都御魂剣ふつのみたまのこころぎを結界の中に入れる。

すると、まるで水の中に入るかのようにズブズブと入ってゆくのだった。

そして、刀が全部入ったのを確認すると鬼一爺さんは次の指示をした。

(よし、では結界を一旦閉じよ。それで終わりじゃ)

結界を閉じるといふのは符を畳めという事だ。俺は言われたとおりに符を畳むと爺さんは更に続ける。

(涼一、この術はな、物を取り出すときは符の結界を切れれば良いのじゃ。結講便利な術じゃから良く憶えておいた方がいい)

「そうだよな。これすげえよ。でも、人に知られてはいけない術の様な気がするな」

(まあ、世の中には何でも悪い事に使いよる馬鹿がいるからの)
「でも、これで一つ悩みが減ったよ」

(そういえば、明日じゃなかったのか。キャンプとか言うのにいくのは)

「いっけねえ！ そういえば、ヤマツチから買い出しを頼まれたのがあるんだった。送還の術のことで一杯だったから忘れてたよ」

俺はこの後、大慌てで、ホームセンターに向かい小物類の調達に向かった。

とりあえず、明日はキャンプだ。ここ暫くずっと術の修行詰めだったので、久しぶりにのんびり羽を伸ばそうと考え、俺は若干ウキウキしながら明日に胸を躍らせていたのだった。

伍ノ巻

《 伍ノ巻 》 野外活動

今日は9月6日、キャンプの日だ。

天候にも恵まれ、9月だというのに夏のような暑さは変わらない。天気予報も今日と明日は晴れになっていたから、雨の心配はなさそうだ。

俺は今、ヤマツチの運転するトヨタ・ハイエースの助手席に乗っている。この車は、ヤマツチの親が所有する車だそうだ。因みに紺とシルバーのツートンカラーの車で8人乗りである。

そして、勿論、今回のキャンプにも鬼一爺さんは同行している。まあ、俺にしか見えないけどね。

今日の俺は、黒と白の半袖のカットソーと茶色のカーゴパンツというラフな感じの服装だ。その方が動きやすいしね。

さて、話は変わるが、昨日、荷物の用意をしていた時、鬼一爺さんは以前作成した霊籠の符を、最低でも10枚程持つていく様に薦めてきた。

何があるか分からないから念のためにだそうだ。それに、今の俺の唯一の悪霊退散兵器でもある。

霊籠の符は、俺の霊力を溜めた電池の様なもので、溜めた霊力を解放すれば、そこらへんの悪霊程度なら、これ一枚で消滅させる事が出来るらしい。

その話を聞き、まだ、あの女幽霊のトラウマから抜けきってない俺は、10枚といわずに、30枚ほど荷物の中に入れてきたのだった。

そんな昨晚の遣り取りを思い出しながら、流れ行く外の景色を車窓からおれは眺めていた。

俺達の後ろの席には、ヤマツチの同級生である女子4人と男子2人が和気藹々とした雰囲気では賑やかに話していた。

皆も結構ラフな感じの服装で、外見も内面も開放的になっているようだ。

この中では俺一人だけが部外者であったが、疎外感というものは全然なく、親しみやすい人達ばかりだったのを憶えている。

また、高田さんの隣にはやはりあのおじさんの幽霊がいた。他の人には何も憑いてないところを見ると、何かあるのだろうか？

ふと、そんな事が気になったが、今の自分はなんの知識もないので、後で鬼一爺さんに聞こうという結論をし、これについては深く考えるのをやめたのだった。

そんな中、運転手のヤマツチが俺に話しかけてきた。

「日比野、結構賑やかな連中だろ？俺らのクラスってやかましいのばかりだったからな」

「でも、賑やかなのいいじゃんか。陰気なのと比べたら全然いいよ」

「はは、まあな。そういえば、日比野って車の免許持ってるの？」

「いや、持ってない。っていうかヤマツチが持っていたのが驚きだよ」

「俺の場合は、推薦で大学に入ったから結構、時間が取れたんだよ」
「なるほどねえ。まあ、俺も免許は欲しいとは思ってるんだけどね」

俺とヤマツチがそんな会話をしていると、後ろの席にいた中野亜衣ちゃんが俺達の会話に入ってきた。

今日の亜衣ちゃんは、デニムパンツと膝下辺りまである白色のチユニックという服装で、小柄な亜衣ちゃんが一層小柄に見えてしまった。

そして、この間会った時から変わらずに元気な感じだ。

「へえ、日比野君も車の免許取る予定なの？」

「欲しいんだけど、金と時間がなあ。フウ」と、俺は溜息混じりに亜衣ちゃんに言う。

「亜衣ちゃんも免許持ってるの？」

「エへ。実は……」

亜衣ちゃんはもったいぶった仕草をする。

「実は……？」

まさか、と思い俺は体を起こす。

「持ってませ〜ん」

しかし帰ってきたのは予想通りの返事だった。

一体、何の為に引き伸ばしたのだろう？ などと考えながら俺は苦笑いを浮かべた。

そして、亜衣ちゃんは続ける。

「でも、進学しない人達とか、専門学校に行く人達は、今年1月頃から自動車学校に通ってたよ」

それを聞き、自分のクラスの奴等もそうだった事を思い出した。

「そうだよ。俺の高校でも同じだった。少し羨ましかったよ」

「そう言えばさ、日比野って物部市出身だよな？」と、そこで、ヤマツチが尋ねてきた。

「ああ、それがどうかした？」

「実はさ、嘘か本当かは分からないんだけど、すごい胡散臭い話を聞いたんだよ。なんでも、お盆の時期の話らしいんだが。物部市の御迦土岳山中にUFOが墜落したとか。日比野ってこの噂知ってるの？」

俺はヤマツチのその話を聞いた時、体温が2度ほど下がったような気がした。

おれは、動揺を押し殺し、変な素振りを見せない様に平静を装いながら、爽やかに話した。

「そういえば、そんな事を親父が言ってたような気がするな。でも、俺自身はそんなの見たことないからね、ははは」

「あつ、そういえば日比野君て物部市出身で言ってたもんね」と、亜衣ちゃん。

「そうなのか。でも、その光景を見た人の話では、凄かったらしいぜ。山から空に向かって光の柱が出来たって言ってたからな」

「ひ、光の柱？ へえそうなんだ。なるほどねえ。……おつ、キャンプ場まで後10kmだつてさ。もうすぐだね」

これ以上この話が續くと辛い為、道路脇にあつた中津の森キャンプ場の看板を見るなり、俺は強引に話題を変えた。

それから中津市の北部の山中を移動する事、20分後。俺達は今回の目的地である中津の森キャンプ場に到着したのだった。

キャンプ場は、市街地の位置から比べると結構、標高の高い所にあるようだ。気温が市街地とは全然違う。

幅60m程の川が近くに流れており、水の流れる低い「サアア」とした音が、気分をリラックスさせてくれる。

この雰囲気だけでも、ここ最近色々と疲れていた俺にはありがたく、非常に貴重な空間に思えるのだった。

キャンプ場の利用客は今日は少ないようだ。平日で、おまけに小中・高校の夏休みが終わつた今となつては当然だろう。

俺の大学は夏季休暇が、丁度、お盆前から9月の下旬までなのでこんなことが出来る。他の皆も学校は違えど、大体同じなようだ。

車から降りた俺達は、用意した荷物を各自が持ち、キャンプ場の受付をしている管理棟へと向かつた。

管理棟は『北の国から』にでてきそうなログハウスで、結構、周囲の景色にマッチしていた。

これで、田中邦 みたいなのが受付にいたらもつとよかつたんだが、いたのは普通のおっさんだった。

それはさておき。このキャンプ場は、テント・サイトとログケビン・サイトに分かれており、俺達はログケビン・サイトの方を予約していた。

管理棟にて、キャンプ場の説明や注意事項を聞き、料金の精算を済ませた俺達は、鍵を受け取ると、鍵にかかれた番号のケビンへと移動し始める。

予約したログケビンは丁度8人用で、ベットルーム・キッチン・

シャワー・トイレ・冷蔵庫・暖房・給湯等が完備している。

ログケビンの装備は文明的過ぎて、アウトドア野朗の俺的にはあまりキャンプっぽくない雰囲気だった。

まあ、それは兎も角。こういったログハウスのような丸太小屋とこの俺は昔から憧れている。

一度はこういった家を持って住んでみたい……そんな風に思わせる何かがある。いつかは手にいれたいな。

俺は平屋のログケビンを前にそんな事を考えつつも、入口の鍵が開くと他のみんなと共に中に入っていた。

ケビンの中は内装材の檜ひのきの仄かな香りが充満しており、非常に落ち着いた気分になされる。まるで、ケビンの中で森林浴をしているようだ。

ケビンの間取りはケビン両端にベッドルームがあり、ベッドルームに挟まれる形で真ん中がダイニングルームとなっている。

そして、ダイニングルームの前方にキッチン・シャワー・トイレがパーテーションに仕切られて設置されているのだった。

俺達は、まず男女で左右どちらのベッドルームを使うか決め、それが決まると、各自の荷物をベッドルームに置き、昼飯の準備に取り掛かる。

因みに男が左の部屋で、女子が右となった。

各自荷物を運び終えると、一旦、中央のダイニングルームに集まり、昼のバーベキューの準備を各自に振り分ける。

内容は、男達は力仕事、そして、女子は調理といった具合だ。

それらが決まると、各自、自分の仕事に取り掛かるのだった。

男4人は管理棟へ、毛布を借りると、木炭や薪を買いに向かう。そして、それらが終わると、ヤマツチが持参したバーベキューコンロに木炭を入れて火を起こし始めた。

その時、西田君と笹島君と呼ばれる他の男子2名が俺に話しかけてきたのだった。二人ともよく似た体型をしており、背は俺より若

干低いくらいだ。

ただ、二人は対照的で、西田君という子は眼鏡をかけており、ぱつと見はインテリにみえる。対して、笹島君は肌も浅黒く体育会系といった感じだ。

「日比野君は物部市出身なんだって？」と笹島君が俺に言う。

「そうだよ。まあ高天智市と比べると結構田舎だけどね」

「うちの大学にも物部市から来てる人がサークルの先輩でいるよ」と西田君。

「へえ〜。そういえば西田君で、確か東京の大学に行ってるんだよね？」

「そう。今回は、里帰りでこっちに来たんだ。お盆は家に帰れなかったからね」

そこで、笹島君はヤマツチに呼ばれて向こうに行ってしまった。

「日比野君は、山崎と同じ高天大こつてんだいだよな？」

高天大こつてんだいというのは、勿論、俺の通う大学の名前で、F県に住む人達は皆こつて呼んでいる。

「ん？ そうだよ」

「家の兄貴も高天大にいつてるんだ。経済学部の3回生だけどね。ところで、日比野君はサークルって何か入ってるの？」

「いや、俺もヤマツチもまだサークルには入ってないんだな」

俺の返事を聞き西田君は何かを考えてるのか、20秒程「ソーン」という声と共に黙り込む。

そして、遠慮がちに言った。

「実はさ、家の兄貴が高天大の剣道愛好会に所属してるんだ。それで今朝、同年の高天大の子がキャンプに来るって兄貴に言ったら、剣道愛好会に誘ってみてくれてお願いされたんだよ。で、どうか？ まあ別に深く考えないでいいよ。嫌なら嫌で問題ないしさ」「そうなんだ。剣道かあ、やった事はないけど。……まあ、考えておくよ」

いきなり断るのも悪いと思った俺は、その場凌ぎに、曖昧な返答

をした。

しかし、この曖昧な返事が後で俺に不幸をもたらすという事が、この時の俺には知るよしもなかった。

「そう、分かった。それじゃそう言っておくよ」

俺達が、そんな会話をしていると、高田さんと今回初めて会う女の子の一人皆川さんが此方に来る。

皆川さんは、髪は茶色く染めたボブスタイルで、紫のフリルのついたタンクトップと茶色のベーカーパンツという感じだ。

結構、胸の大きな子で、ついついそつちに目が行ってしまう。これはもう仕方が無い。だって男の子だもん。三度の飯とオツパイだけは譲れない。

そして、高田さんの今日の格好は、以前よりも上の露出が多く、黒のキャミソールにデニムスカートといった具合だ。二人に言える事だが、胸がケシカラン！

今日来ている子はおまけに綺麗な女子達ばかりなので目の保養にもなり、『来てよかった』などと思いつつ、俺はさわやかな笑顔を振り、高田さん達に労いの言葉を掛けた。

「高田さんに皆川さん、お疲れさま」

高田さん達も俺達に力仕事の労いの言葉を掛け、それと共にコップ一杯の麦茶を振舞ってくれた。

「はい、おつかれさま。日比野君に西田君、麦茶をどうぞ」

「ありがとう、高田さん」

俺達がヒンヤリと冷えた麦茶を飲んでみると、ヤマツチは、簡易ガスバーナーで木炭に火をつけていた。「パチッパチッ」っと木炭の弾ける音が聞こえてくる。

約5分程バーナーで炙ると、真っ赤な色の木炭が出来上がった。近くにいるだけで木炭の放つ遠赤外線効果の熱気が伝わってくる。

それらの火の起きた木炭を笹島君は内輪で仰ぎ、更に火を起こしていた。

そして、バーベキューコンロの上に金網を乗せて、「もう焼けるぞ」とヤマツチの準備完了の宣言が出たのだった。

その後、俺達は大自然の中で、肉や野菜を焼き、空腹を満たす。青空の下で食べる食事は格別で、俺の最近の疲れも吹き飛ばしそうな感じだ。

そしてバーベキューの最後は、お約束の焼きそばで締めをしたのだった。

食事を終えた俺達は、夕飯まで自由行動になる。

小さな靈魂はあたりに沢山漂っているが、特に害はないので気にしないようにし、俺は暫く皆と一緒に休んだ後、川を見に行く事にした。

ここ一週間は雨が降ってない事もあり、川の流れは比較的穏やかで、澄んだ色をしている。

キャンプ場を横断するこの川には、山女やまめや岩魚等いわなが居そうな雰囲気きずなで、釣をしたい衝動に襲われるのだった。

しかし、今日は釣り道具自体を持ってきていないのと、おまけにこの川の漁業券も持ってはいないので諦めるしかない。

そんな事を考えながら川縁を歩いていると、亜衣ちゃんとヤマツチ、そして今回のキャンプで初めて会う朝川 美香ちゃんが俺のところに来てきた。

朝川さんは、ブラウンカラーの長髪で眼鏡を掛けており、背は亜衣ちゃんとよく似ている。二人並んで歩いていると兄弟のようだ。

服装は水色のキャミソールとデニムパンツといった感じで、亜衣ちゃん共々、可愛い子達である。

「日比野、釣道具は持ってこなかったのか？」

「ああ、俺も持つてくれば良かったと思っただよ」

「日比野君が釣りが好きって言ってたもんね」と亜衣ちゃん。

「日比野、4人でそこらへんを散歩でもしようぜ。向こうに遊歩道があるようだしな。つうか、このキャンプ場広すぎだろ、1000へ

クターもあるぞ」

「へえ散歩か。かまわんぞ」

そういうわけで俺達は、ヤマツチの提案でキャンプ場を散歩する事になった。

散歩中、俺はあまり話す機会のなかった朝川さんに話しかける。

「朝川さんは、県内の学校に通ってるの？」

「ん？ 違うよ。隣のG県の女子大に通ってるの。日比野君は山崎君と同じ大学だよ」

「うん、そう。大学で一番最初に仲良くなったのが山崎なんだよ」

「へえ、そうなんだ。ところで日比野君で幽霊って見た事ある？」

俺は突然、そんな質問をされたので、戸惑ってしまふ。

しかし、あまり不自然な感じになるのもまずいから、いつもどおりに話しをするよう心掛けた。

「いや、無いけど。それがどうかしたの？」

「実は、このキャンプ場って『出る』って聞いたよ。何でも自殺者がこの山に多いらしくて。私、そういうの見た事ないんだけど、親戚の子が見たらしいのよ」

「で、朝川さんはぜひ見たいと？」

「へへ、分かる？」

分かりますとも……ええ、分かりますとも。朝川さんのその顔は好奇心で一杯といった感じだから。

「へえ、でも意外だね。女の子って、そういうの嫌いだと思ってたから」

「実はわたし、女子大でオカ研に入ってるのよね。女の子って両極端だからオカルトとかは好き嫌いハッキリとでるよ」

俺は一瞬、朝川さんが危険人物に見えた。

そして、絶対に幽霊が見えるといえないなこれは、と自分に言い聞かせるのだった。

「へえ、そうなんだ。見れるといいね、幽霊が」

「でも、駄目なのよね。私、靈感が無いのか見た事ないのよ。一度

でいいから見てみたいわ」

朝川さんは力強くそう語る。

俺はそれを聞き、出来る事なら俺の体質を全部朝川さんにあげたいと思った。

「今晚もしかすると……出るかもね」と、おれは幽霊の真似をして少し怖い雰囲気を出しながら朝川さんに言う。

「本当よ。みてみたいわ」

朝川さんは、俺の幽霊の真似を華麗にスルーすると、力強くそう言った。

そして俺は、そんなアグレッシブな朝川さんを見て、たくましいなと思い、少し引くのだった。

「美香、またオカ研の話をしてるんでしょ」

そこで亜衣ちゃんが話しに加わる。

「そうよ。亜衣は怖がりだから、そっち方面の話は苦手だもんね」

「朝川、あまり日比野を変なのに勧誘するなよ」とヤマツチが言う。

「日比野君も、オカルト関係好きなの？」と亜衣ちゃんが俺に聞いてくる。

「いや、別に好きという訳じゃないんだが、まあ嫌いでもないかな。関わった事ないからなんとも言えないけど」

この質問に俺はこう答えたが、方便とはいえ、この時の俺は確実にオカルト関係が嫌いだったから嘘をついたようで後味が悪かったのを憶えている。

「エへへ、日比野君でオカルトとは無縁な感じだもんね」

亜衣ちゃんはこう言ってるが、俺の現在の状況を知ると気絶するかもしれない。

だって、この中で一番オカルトに接しているのは紛れも無い自分だからだ。

まあ、こんな会話をしながら散歩をした俺達は、一通り見回ると、またケビンへと戻ったのだった。

だが、その夜……待ってたかのようにトラブルは訪れるのだった。
勿論、普通じゃない方のトラブルが

六ノ巻

《 六ノ巻 》 囁き

夕食を終えた俺達は、一旦ダイニングルームに集まる。因みに夕食はカレーだった。

まあ、それはさておき。暫くダイニングルームにて寛いだ後、俺達は花火をする為に川沿いへと移動した。

懐中電灯を手に持ち、その明かりを頼りに川縁の開けたところまで移動する。そして、花火を始めるのだった。

先程、ビールを2L程飲んでいるヤマツチは超ハイテンションモードになり、手に持ったまま打ち上げ花火に火をつける。

そして、各自もロケット花火等に火をつけその場は最高潮に達していた。

ヤマツチが花火をこちらに向けそうになった時は、ヒヤヒヤしたが、何事もなく花火は終了した。

花火を終えた俺達は、ケビンに戻り、また酒盛りを始める。

その時、朝から少々気になっていた、高田さんに憑いた幽霊の事を鬼一爺さんに聞く為、俺は一人外に出たのだった。

今、大体PMの9時をまわったところだ。この時間になると山中という事もあってか、気温も結構低くなり、肌寒い感じになっている。

所々にあるキャンプ場内の水銀灯が夜のキャンプ場を照らす。虫が水銀灯の周りを飛び回る為、虫の影が出来る。そして、それらが動く為、まるで何か得体の知れないものが地面を這うように動いて見えるのが、はっきり言って不気味であった。

しかし、その水銀灯のお陰で、懐中電灯が必要なほど暗くも無い為、俺は手ぶらで夜のキャンプ場へと足を踏み入れたのだった。

そして、周りに人がいないことを確認すると、俺は小声で鬼一爺

さんに話しかけた。

「鬼一爺さん。ちょっと聞きたいことがある」

(何じゃ?)

「実はさ、俺達の中にいる女の子で、おじさんの霊が取り付いている子がいただろ」

(其れがどうかしたのか? 言っておくが、あれは悪霊ではないぞ)

「それは俺も雰囲気で大体分かるんだけど、あの霊は何の為に高田さんに憑いてるんだ?」

(フム……。涼一、お主の子が生まれ、そして、可愛がっていた子が育ち、お主がこの世を去る事になったらどうする?)

「どうする? って聞かれてもどうする事も出来ないけど……。つまりアレか。高田さんの隣に居るのは彼女の父親の霊か?」

(そうじゃ。しかしあの男は、あの女子の肉体が見えている訳ではない。前にも言うたが特殊な霊で無い限り幽世かくりよの者でも現世うつしよを窺い知る事は出来ぬからの)

「じゃ、なんでピツタリくつついてるんだ?」

(肉体は見えぬが女子の魂はおぼろげながら見える。特に親族ならその感じも憶えておろう。じゃからあの男は、生前に感じた娘の魂の波動に寄せられてくつついておるのじゃよ。特に可愛がっておった娘なら、尚更、魂の波動はわかるじゃろ。そして、あの男はよほど娘が気掛かりだったという事じゃ。話す事も見る事も出来ぬが、娘の傍に居たいという思いがああいう行動になっておるのじゃよ)

「なるほどねえ。ン? てことは、高田さんの親父さんはもう亡くなっていると言うことか」

(そうじゃ。しかも、あの感じじゃとここ一年程の月日間の事じやろうの。しかし、あの男の靈魂も何れは大地の地脈を駆け巡り、また新たな生命へと転生をはたす。世の理の輪ことわりに入るのじゃ。そうやって生命と魂の終わりの無い旅が永遠と紡がれて行くのじゃよ)

「そうなのか……。じゃあ、今見えるこの靈魂達もこれからその輪に入って旅にでるのか?」

(勿論そうじゃ。全ての生命は大地に帰り大地から生まれるのじゃからな)

爺さんからその話を聞いたとき、以前聞いた威霊いれいの話思い出す。そして、尋ねた。

「以前、鬼一爺さんは、善悪の関係ない人々の思念が地脈を駆け巡ると言ってたけど、魂も同じなのか？」

(涼一、思念とはある特定の感情を含んだ分霊の事だ。人はそれを生霊と呼ぶがの。ある意味魂とも言える。確かに魂と分霊は地脈を通るが同じ道を通るわけではないのじゃよ。まあこの辺の話はまた今度ゆっくりとしてやろう。さて、そろそろ戻らぬと不思議がられるのじゃないのか?)

「そうだな、そろそろ戻るか」

俺は鬼一爺さんにその話を聞き、途方も無い世界の広さを感じ、また、同時に少し寂しい感じも覚えたのだった。

しかし、これも世の理ことわりの一つなのかと納得し、またケビンへと戻る事にした。

ケビンに戻ると丁度、高田さんが扉を開いて出てきた。

前方から戻ってきた俺に高田さんも気付いたようだ。

高田さんは俺を視界に収めると歩み寄り、そして、話しかけてきた。

「あら、日比野君は外にいたの？」

「酔いを醒まそうと思つて少し外を散歩してたんだ」

まあ、嘘は言つてない。実はそれもあつたからだ。

「そうなんだ。私も、少し酔い醒ましに来たの」

高田さんは露出の多かった昼の服装の上から、長袖の灰色のカ―ディガンを着ていた。

やや、ほろ酔いで火照つた顔になっている高田さんは、昼間よりも可愛らしく見えた。

いつもは落ち着いた感じの女性だから、こういった感じになると

そう見えるのかもしれない。

「高田さんも結構飲んだの？ 顔に出てるよ」

「私、お酒弱い。そんなに飲んでないんだけどな」

「何杯くらい飲んだの？」

「ん、焼酎を3杯と酎ハイが500mlと冷酒を2杯程かな」

「それ、結構飲んでるよ。つーかあんまりちゃんぽんすると明日辛いよ」

思ったより飲んでたので、そういった。

「御忠告、ありがとう。……そう言えば日比野君で、釣が趣味なんだよね？」

「ん？ そうだよ。まさか高田さんも釣が趣味とか？」

俺は若干砕けた感じに高田さんに言う。

「クスクス、私はしないわよ。私のお父さんが釣好きで、良く行ってたわ」

「……へえ、そうなんだ」

俺はそれを聞き高田さんの隣にいる親父さんの幽霊を見る。

今までは気付かなかったがこの幽霊は、非常に穏やかな表情で高田さんの隣に居るのだった。

恐らく、この親父さんの靈魂は此処に娘がいる事を知っているのだ。

この幽霊の安らぎの表情は、恐らく、娘の傍に居る安心感からきているのかもしれない。

「ウン、本当によく釣に行ってたわ。県外の川とかにも遠征に行ってたくらいだから」

「へえ、じゃ俺と意外に気が合うかもしれないね」

俺がそう言うと、高田さんは少し寂しい顔になる。

「そうね。多分、意気投合したと思うわ……もう死んじゃったけどね。去年の夏に……」

高田さんは、やや視線を落とす。

そして、昼のバーベキューの時出しておいたパイプの椅子に座る

と親父さんとの事を話し始めた。

「私、謝らなきゃいけないんだ。お父さんに……」

「エ、謝らなきゃいけない？」

「そう。去年、お父さんが亡くなる前の話なんだけど。私、お父さんと凄い喧嘩をしたのよ。理由は、他愛の無い事なんだけどね。私の普段の行動にお父さんが口喧しく言ってきた事から始まったわ」

俺は黙って高田さんの話に耳を傾ける。

「それから暫くは口も利かなかった。顔も合わさない毎日だったわ。そんなある日、授業中に家から連絡があったの。お父さんが仕事中の事故で病院に運ばれたって。それですぐに病院に向かったわ。でも、私が着いたときにはもう昏睡状態で……医者ももう手の施しようがなかったそう。それから数時間後、お父さんは一度も目を開かずにこの世を去ったわ」

「……謝らなきゃいけない事って、その喧嘩の事？」

俺の言葉を聞いた高田さんは首を横に振り、続ける。

「それもあるけど。違うの。葬儀が終わった後に、お父さんの机からある預金通帳が出てきたの。お母さんもこんな預金通帳知らないって言ってたわ。それで、その銀行にお父さんの同級生の人がいいたので通帳について聞いてみたの。そしたら、そのお金は私の将来の為に、お父さんがずっと積み立てていた預金だったのよ。私は自分勝手に生きてきて、全然お父さんの気持ちなんか考えた事なかった。だから……」

高田さんは色々と今までの葛藤を思い出したのか、話しながら涙を流していた。

そして言葉が詰まった。

「だから……今までの勝手な自分を謝りたい？」と俺が最後に来るであろう言葉を言う。

高田さんは無言で頷く。

しばらく俺達は無言の状態が続いた。

ロケケビンの中からはヤママッチ達の賑やかな笑い声が漏れて小さ

く聞こえ、キャンプ場の周囲からはコオロギや鈴虫の鳴き声が、俺達に遠慮したように小さく聞こえてくる。

そんな中、俺は口を開いた。

「……多分、親父さんは琴美ちゃんの事が心配で心配でたまらんかったんやろうな。琴美ちゃんて確か一人っ子だったよね？」

「ウン……」

「俺の親戚にさ、一人娘を溺愛している家があつてさ。まあ俺の従兄弟とこなんだけど。そりゃ凄いや。正月とかその家に行ったりするんだけど、その叔父さんは酒に酔うと娘の話ばかりするんだよ。しかも、話の内容は過激でさ。やれ、『娘の為なら何でも出来る！』だとか、やれ『娘を貰いに来る不屈者は、先祖より賜ったこの刀で全て成敗してくれる！』とか、『娘を目や鼻や耳に入れても全然痛くない！』だとかそんな物騒な話ばかりするんだよ。おまけに酔ってるから娘本人にも同じ事いつてるしね。ただ、その叔父さんの事分かる気がするんだよ。特に男の親はそうらしいんだけど、『一人娘は目に入れても痛くない』ってのが正直なところなんじゃないかな。早い話が、娘の為なら自分はどうなってもいい位に思ってるんだよ。ただ、娘の行動まではさすがに自分の管理下にはおけないから毎日ハラハラしてるんだと思う。特に年頃になると変な虫も寄ってくるしね。だから、親父さんはそんな事くらいでは琴美ちゃんの事嫌ってもいないよ。まあ、凹んではいたかもしれないけどね」

俺の話聞いた高田さんは、狐につままれた様な顔で俺を見ている。

そして笑い出した。

「アハハハッ、何よそれ。男の人ってそうなの？」

「その叔父さんはそうだったね。まあかなり特殊な部類かも知れんけど」

おれは今年の正月の事を思い返してみた。

酒によって日本刀を抜こうとする叔父さんの姿が目に見えかぶ。

r z

「そうなんだ……ありがとう日比野君。少し元気だた」

さつきまでの寂しい表情から幾分か明るい表情になった高田さんを見て、とりあえずホツとすると、俺はつい聞いてしまった。

でも、後悔はしてない。

「そうだ、高田さん。……もしだよ。もし、死後に親父さんが幽霊になったとしたら、親父さんはどうするかな？」

「お父さんが幽霊になったら、どうするんだろ………日比野君ならどうするの？」

「そうだなあ。俺だったら、高田さんの傍にずっといるかな。だって一人娘だよ。今までそんな事出来なかったからね。そうなるよ、絶対に」

「私の傍に、か」

高田さんはそう言うと言つと自分の周囲を見回す。

「なんだつたら、謝つたら？ 居るかもしれないよ。分からないだけ」

「もう、日比野君たらそんなこと言つて。もしかして、幽霊とか信じてるの？」

「いや、信じては居ないよ。でも……信じてみたい時くらいあつても良いんじゃない？ 罰は当たらないよ」

俺の言葉を聞き、高田さんは一瞬考える素振りをして、俺に向かい笑顔で言つた。

「そうね。日比野君に騙されたと思つて謝るわ。』 お父さん、今までごめんなさい 『」

その時、気のせいかも知れないが、高田さんのお父さんは笑つたような気がしたのだった。

幽霊関係のドラマとかなら、ここで親父さんは成仏して大団円を向かえそうだけど、高田さんの親父さんはいつもと同じ様に、娘の隣にくっ付いているのだった。

凄く穏やかな表情で

「ありがとうね。日比野君。こんな話に付き合わせちゃって。でも、不思議よね。なんであんなに細かい所まで日比野君に話したんだろっ？」

高田さんはお礼を言った後、俺とのやりとりを不思議がって首をひねっていた。

俺はあんまり深く考えるのもどうかと思い、「冗談を言う。」

「さあ。多分、俺にカウンセラーの資質があるのを高田さんが無意識の内に見抜いてたんだよ」

「クスクス、また変な事言う。日比野君て結構、面白いわね」

「まあね」

「普通は自分で言わないわよ。それと、日比野君てさっき私の事名前で呼んでたのに、また苗字に戻ってるわよ」

「あれは、話の演出上どうしても必要な事でした。え、今なら無料で名前呼びに変更できますが？」

「じゃ名前呼びでお願いするわ」

「承りました。当店のまたのご利用をお待ちしております」

「何よ、それ。日比野君て傑作ね。アハハハ」

と、高田さんも元気になった所で、俺達はまたログケビンの中に入ってしまったのだった。

その夜

【「……こだ………ここだ………ここ……に居るんだ………だれか………」】

俺は妙な囁き声を聞き、目を覚ました。

ベッドルームの部屋の時計を見ると、夜中の2時15分頃で、悪名高い丑三つ時とかいう時刻だ。

俺は妖気なんぞ分かんが、さすがに鬼太郎じゃなくても、怪しいと分かる時刻とその出来事だ。

周囲を見ると、皆はぐっすりと寝ておりこの声に気付いてないよっだ。

俺は万が一の事も考え、霊籠の符をズボンのポケットに入れると、ベッドルームの壁に設置されている懐中電灯を手に取り、ダイニングルームの方へと移動した。

ケビンの中はひっそりとした静寂に包まれており、ちょっとした物音でもビクツと反応してしまう。

皆を起こさないようにそっと忍び足でダイニングルームを歩いてみると、また、あの声が聞こえてきた。

【こ……こだ……こ……こだ……ここ……に……るんだ……だ……れか……】

ここ最近のオカルト漬けの毎日のせいか、こんな事では驚かなくなりつつある自分が悲しくなってくる。

俺はこの声の主が悪霊じゃない事を祈りつつ、外にでようとしたところで、右側の女子の部屋から「ガチャリ」と扉の開く音が聞こえてきたのだった。

そして、振り返る。扉からは、亜衣ちゃんが枕を持ったままダイニングルームにやってきたのだった。

亜衣ちゃんは俺の姿を見つけるとそっと駆け寄ってくる。

俺は皆を起こさないように小声で亜衣ちゃんに話しかけた。

「どうしたの？ 亜衣ちゃん」

「ひ、日比野君こそどうしたの？」

「ああ、なんか変な物音がしたからちょっと気になってね」

「へ、変な物音って、こ、声じゃないよね？」

亜衣ちゃんは震えながら言う。どうやらあの声を聞いてしまったようだ。

「亜衣ちゃんも聞いたの？」

亜衣ちゃんは油の切れたロボットの動きの様に無言でカクカクと震えながら頷く。

相当、恐ろしいようだ。

「俺が少し外を見てくるから、亜衣ちゃんは部屋に戻ってていいよ。どうせ、風か何かだろうから」

俺は亜衣ちゃんを少し安心させてから部屋に戻すと、玄関の扉を

開いた。

昨晚や昼の賑やかな時には気付かなかったが、玄関扉は蝶番ちょうばんから「ギィィィ」という油の切れた様な音がする。

しかも、この静かな中では異様に大きい音の様に感じられた。不気味である。

そして、誰も起きてこないのを確認すると、そつと扉を閉めて外に出たのだった。

外は若干霧がかつており、やや視界が悪い。

俺は、持ってきた懐中電灯に明かりを付けると、とりあえずログケビンの周囲を見回った。

ケビンの周囲にはとりあえず幽霊の姿も人の姿も見当たらない。

俺はログケビンから少し離れ、鬼一爺さんと呼んだ。

「鬼一爺さん、いるか」

（なんじゃ？）

「さっきの声は一体何処から聞こえてくるんだ？」

（フム……。お主は、聞こえた声の雰囲気はどういう風にした？）

「どうって……。なにかを訴えてるような感じじゃったかな、多分だけ」

（なるほどの。涼一、これも学びの機会じゃ。ここはお主の考えで行動してみよ。幽現なる者なら、この霊が何を訴え、何を苦しみ、何を求めているのかを知るのじゃ。さすれば道が開けようぞ。さあ、やるのじゃ。早くせねば夜が明けるぞ）

「何を訴え、何を苦しみ、何を求める……。教えてくれないの？」

（お主はこれから幾度となくこのような経験をするだろう。その時、とつさの判断が求められる時もある。しかし、その様な場合の修練などない。残念ながら経験に勝る修練はないのじゃよ。だから言うておるのじゃ。それに、もう手がかりは言ったぞ。よく考えるのじや）

「……分かった。確かに避けて通れないもんな。やるよ」

不安ではあった。

だが、俺はもう非日常的な世界へと足を踏み入れてしまい、もう既に退路は絶たれた状態だ。

これから先、これ以上の事が俺を待ち受けているかもしれない。その時になって判断を誤り、命を捨てるような事にだけは絶対に成りたくない。

そう考えた俺は気を引き締め、言葉の主が何を訴え、何を苦しみ、何を求めるのかを考え、真相を探るのだった。

しかし、闇雲に歩き回った所で、恐らく夜明けまでに解決しないだろうと考えた俺は、先程の鬼一爺さんの手掛かりの言葉を思い出す。

幽現なる者なら、この霊が何を訴え、何を苦しみ、何を求めているのかを知るのじゃ

この言葉をそのまま捉えるならば霊の声となるが、恐らく、鬼一爺さんはその事を言ってるのではないんだろうと思う。

となると、『幽現なる者なら』にヒントがある筈だ。

幽現なる者とは二つの世界の理を知る。二つの世界の悲しみを知り、また喜びを知る。

しかし、今までの俺は世界の喜びも悲しみも知ろうとはしてこなかった。

現世の喜びや悲しみなどは生活基盤が此方だから大体分かる。しかし、幽世の悲しみや喜びなどは分からない。

靈魂の喜怒哀楽なんて考えた事もない。強い負の感情が剥き出しの悪霊等は別だが、普通の靈魂はどうやって喜怒哀楽を見分けるのだろうか？

その時、鬼一爺さんが高田さんのお父さんの事を説明した時の内容を、俺は思い出すのだった。

あの男は、生前に感じた娘の魂の波動に寄せられてくっついておるのじゃよ

俺は方法が分かったような気がした。

そう、魂が語るのは、声や姿にあらず。魂の波動が全てを語ると

いうことを。

これが鬼一爺さんが俺に課した今回の課題なのだろう。そう結論付けた俺は先ず、この聞こえたであろう方向へ目を閉じ意識を集中する。

意識を集中し始めてから分かった事だが、周囲を漂う靈魂達とは違う靈の波動が、ある方向の森から感じたのだった。やはり間違っ
ては居ない。

俺はその森の方向へと懐中電灯を照らし向かう。

そして、森の前で立ち止まるともう一度、意識を集中した。

2分程経った頃だろうか。あの声がようやく、聞こえてきた。

【お……れ……はここ……にいる。だれ……か……】

「おれは此処に居る。だれか」たしかにそう聞こえた。

森の中に入るのを少しためらったが、声の主の訴える様な感じが頭から離れない。

意を決した俺は、森の中へと足をゆつくりと踏みいれるのだった。そして、草や木々を掻き分け進んで行く。するとまたあの声が聞こえてきた。

【お……れ……はここ……にいる。だれ……か……】

この声の主は、よほど誰かに自分を見つけて欲しいようだ。言葉の節々からは苦しい感じが伝わってくる。

一体、この声の主の身に何があったのだろうか？ ふとそんな事を考える。

そんな魂の波動を感じながら進んで行くと、崖のような切り立ったところにでたのだった。

崖の下からは生暖かい風が吹き上がり、あの魂の波動も感じる。

俺は恐る恐る、崖下にライトを照らす。

すると人の衣服のような物を懐中電灯の光が捉えた。よく見ると人であった。人形の様にも見えたが確実に人である。

その人の周囲には先程の訴えかけるような波動の魂が纏わり憑いている。間違いないとおれは確信をした。

また、服には血糊がついており、体はびくとも動かない。

無駄だとは思ったが一応、呼びかけては見た。勿論まったく動く気配は無かった。

そして、更に近づこうとは思うが、下は崖で良い方法が無い。

俺は無理をして怪我をするのもなんなので、一旦、戻る事にし、皆の意見を聞く事にしたのだった。

森の中を歩いていた時は気付かなかったが、東の空は朝日が昇り始める前の朝焼けになっており、非常に美しかったのを憶えている。

また、鳥達も活動を始めたのか、森のなかから時折鳴き声が聞こえてくるのだった。

そんな朝の光景を見ながらログケビンに戻ると、ケビンには明かりが点いていた。

どうやら、俺の帰りが遅いのを心配した亜衣ちゃんが皆を起こしたらしい。

ケビンに着いた俺は、今あった出来事を大分ぼかしながら皆に説明するのだった。

俺の話聞いた7人は、驚愕の表情を浮かべる。怖がる子もいたがそれは当然だろう。

亜衣ちゃんも俺の側に加わって、あの声の事を皆に説明するので、皆も複雑な表情をしたのを憶えている。

その話を聞いたオカ研の朝川さんだけは、何で自分に声を掛けてくれなかったのなどと訳の分からない事を言っていたが……。

しかし、崖の下にあるのは死体である可能性が高い為、俺達はこのキャンプ場の管理人に報告をして後は任せる事にしたのだった。

夜が明けると何台かの警察の車両がキャンプ場内に入ってきた。

管理人さんがちゃんと通報してくれたのだろう。

そして、第一発見者の俺は、警察に呼ばれて色々と昨日の事や夜の事等を説明をさせられた。他の皆も少しは事情聴取を受けた様だ。

警察もさすがに幽霊の声が聞こえたからとは信じてくれなかったが……。

拳句の果てに酒に酔っ払って、山の中を徘徊してたんじゃないのなんて言われる始末だ。

で、崖の下の仏さんだが、この辺りの山を所有する家の人だったらしい。後日、警察の現場検証で誤って崖に足を滑らしたのが原因と分かったそうだ。

一昨日から帰ってなくて、一応家の者も、昨日搜索願を警察に出してみたいだ。

まあ、色々と大変だったが、最後に家族の方からお礼の封筒を頂いた。（中にはお金が入っていた。不謹慎だから金額は秘密だ）

今回のキャンプは、最後の最後で度肝を抜くような展開だったが、皆、結構楽しんだのか、口々にまたキャンプしようと言っていた。

俺もまたこのメンバーとならキャンプをしたいなと思い、また次の再会を約束したのだった。

ま、キャンプの話はこんなところかな。

ただ、このキャンプのお陰で、俺は幽現成る者としても人間としても少しはあるが、成長したような気がしたのだった。

これで今日は終わり

七ノ巻

《 七ノ巻 》 悪霊

今はPM11時頃。

其処はこの時間帯になると、人の往来が殆どないくらいにぱったりと途絶えてしまう寂しい通りだった。

薄暗い夜空を見上げると、雲に若干覆われた悲しげな三日月の姿が見える。

そして、所々に見える星達はその雲の影響もあってか、本来の輝きを失い、おどろおどろしく地上を包み込んでいるように見えるのだった。

そんな不気味な夜空の元、俺は人通りのない寂しい路地を前へと進んで行く。

周囲を見ると、このあたりは今は稼動していない廃工場等の姿も見える。どうやら嘗ては工業地区だったようだ。

そういつた廃工場の存在がより一層この路地を寂しくさせる。

また、時折風が吹くと聞こえてくる剥がれかけたトタンの壁が「キィキィ」と悲しく鳴っていた。

このおどろおどろしく不気味な雰囲気、霧の漂う空間を進んで行くと、前方から、怒りと憎しみの負の感情を撒き散らす存在が、俺の視界に入ってきた。

今回この路地に来た目的の存在である。

俺はその存在にある程度近づき、意を決して声を掛けたのだった。「なあ、貴方も、もうそろそろ、楽になったほうがいい。無関係な人に悪さしちゃいけないよ」

俺がそう、前に居る男に言い放つ。

それを聞き、男は俺に振り向いた。歳は30〜40歳位だろうか。

その顔は、^{いか}厳つく、口は裂けており、透き通ったやや赤い体からは、物凄い負の感情を発している。おもに怒りの感情が。

何ゆえ悪霊として此処に存在しているのか分からないが、こうなってしまう以上消滅させるしか方法は無い。

男は、声を掛けた俺を暫く品定めをするように見ると、大きく裂けた口を開き、俺に目掛けて飛び掛ってきたのだった。

飛び掛ることを予想していた俺は、用意しておいた霊籠の符を一枚サツと取り出す。

そして、霊符に籠められた霊力を解放し、悪霊に向かい投げつけた。

【グギャアアア】

悪霊は霊符から放たれた青白く光る霊力を正面から浴び、断末魔の声と共に消滅した。

俺はその消滅した場所を暫く眺めた後、踵を返し表の通りへと歩き始める。

その途中、同行者に今夜の仕事の終了確認をする為、声を掛けた。「なあ、鬼一爺さん。これで今日は本当に最後だろうか？」

俺の横をユラユラと宙に浮いて漂う鬼一爺さんは、笑いながら俺に言う。

(フオフオフオ、心配せんでも『今日は』お仕舞いじゃ)

「ったく。『今日は』かよ。まさかこの一週間、悪霊退治なんかするとは思わなかったよ。ハア、肩も凝るし」

俺は連日の悪霊退治で疲れていた為、肩を回しながら爺さんに言う。

(何を言うておる。これも修行じゃ。しかもワザワザ弱い悪霊を我が選別してお主に除霊を斡旋しているのに、その言い草はなんじゃ)「はいはい、感謝してますよ。フウ」

と、言いながら両手をヒラヒラさせ、やる気の無いように言い放つ。

しかし、それを見て気を悪くした鬼一爺さんは、また俺に説教を始めるのであった。

(涼さんや……。人の世が創りだす暗く淀み荒んだ思念が、このよ
うな者達を生み出しておるのじゃ。これは世直しじゃ。お主にはも
っとその気概を持ってもらわねばならぬの。カツカツカツカツ)

「……………また、始まったよ」

俺は悩んでいた。

最近始まった鬼一爺さんの悪い病気に

話は一週間前に遡る。

キャンプから帰った俺は、またいつもの通り、鬼一爺さんから術
の手解きを受けていた。

符術や霊力を洗練させる為、基本の繰り返しではあったが、俺は
文句一つ言わずにそれらを続けていた。

しかし、そんなある日、それは起こったのだった。

鬼一爺さんが水戸黄門を見た後に……………。

その日、俺はシャワーから上がると、いつもの様に夕食の準備に
取り掛かる。と、いつてもお湯を沸かすだけだったが。

買い置きのカップ麺を棚から取り出すと、俺は早速、調理に取り
掛かった。小さな袋に入った、かやくと粉末スープを取り出して封
を切り、カップ麺の上に遠慮なくふりかける。

お湯が沸騰したのを確認するとコンロを止めヤカンを手に持つ。
そして、カップ麺の上にこの沸騰したお湯を注いだのだった。

丁度その時、鬼一爺さんが俺にせがんで来た。

(涼一、もうすぐで水戸黄門が始まるのじゃ。早く『てれび』を点
けるのじゃ)

「わかったよ、ちょっと待っていてくれ」

鬼一爺さんは、物に触れる事が出来ない。そこは霊体である為し
ようがない。

俺はテレビのリモコンを手に取り、電源を入れた。

電源を入れて、暫くするとあのお約束のテーマが流れてくる。

番組が始まると爺さんは途端に静かになり、テレビの前でかぶり

つきになって見始めるのだった。
そこまではいつもある風景だったが、その後、問題が起きたのだ
った。

俺はカップ麺を食べ終わると、机の上にあるノートPCを立ち上
げた。WindowsXPのロゴが出ていつもの起動音が流れる。

そして、ブラウザを起動し、ネットで情報収集を始めた。

暫くの間、俺がPCと戯たわむれていると、水戸黄門の終わりに出てく
るナレーションが聞こえてきた。

どうやら終わったようだ。と思い、鬼一爺さんを見る。

しかし、そこにはいつもと様子の違うテレビの前で小刻みに震え
る鬼一爺さんの姿があったのだった。

今にも『痛みを耐えてよく頑張った。感動した』と、某元首相の
様な事を言わんばかりの雰囲気を感じながら……。

俺はいつもとだいぶ様子の違う鬼一爺さんに少し引きながらも声
を掛けた。

「じ、爺さん。そんなに面白かったのかい？」

(……………)

返事がない。ただの屍のようだ。ツて違う！

俺はもう一度話しかける。

「爺さん？ どうしたんだ一体」

俺が二度問いかけると、少し間を空けてからゆっくりと鬼一爺さ
んは話し出した。

(……………涼さんや。何故人なにゆえの世はこんなにも荒すさんでおるのじゃろうの
?)

「はあ？ りよ、涼さん？ まあいいや。さ、さあ。なんでだろう
(人々の荒すさみは積もり積もって悪霊となる。そして生まれた悪霊は
人々に災いをもたらす。この堂々巡りがいつの世も絶える事はない
のじゃ。しかし、絶える事はないと諦めていては何も始まらぬ)

俺は爺さんのこの話を聞きながら非常に嫌な予感がしていた。

なにかとんでもない事を言う前触れの様を感じたのだった。
そして、予感的中する。

（我自身が悪霊を退治する事は最早叶わぬ事。この役目、今の世を生きる弟子のお主が担うべきじゃ。しかし、そなたはまだ初歩の術を覚えたてのヒヨッコ。いきなり大きな霊団や物の怪と化した者共を相手になど出来る筈もない。そこで我が今のお主に丁度良い悪霊を見繕い、宛がってやろうぞ）

鬼一爺さんはそう言うのとテレビの前から俺の前に移動し、いつにない真剣な表情で俺に言うのだった。

（我がお主を立派な術者にしてやる。世の為人の為に己の力を行使する立派な陰陽師にの。涼さんや、待つておれや）

爺さんはそう言うのと俺に背を向け飛び立とうとする。

俺はこの状況についていけない為、一旦爺さんを呼び止めた。

「ちよ、ちよつと待てよ。何処行くんだよ。こんな時間に？」

（決まっておろう。悪霊探しじゃ。待つておれ。明日の夜は楽しみにしておくんじゃ）

「オーイ……。ハア、行つちまった。だいぶ水戸黄門に毒されてた様だけど大丈夫かな。なんか明日は凄く嫌な予感がする」

鬼一爺さんは、呼び止める俺を振り切り、夜の街へと旅立つて行ったのだった。

翌日の夜……。

俺は鬼一爺さんに連れられて、生暖かい風の吹く中、学園町の外れにある妙な家の前に来ていた。

妙と言ったのは、その家には最近まで人が生活していた様な形跡がない為である。

庭のあるそれなりに大きな和風建築の家ではあったが、肝心の庭は草木が荒れ放題に伸び、風で飛んできたのかは分からないが、ゴミ等も散乱していた。

また、家の玄関には、野良猫の棲家になっているのか、魚等の食

い散らかしが悪臭を放ちながら散乱しているのであった。

以前住んでいた人は夜逃げをしたのか、また代が途絶えてしまったのかは分からないが、今は確実に居ない様であった。

そして、爺さんが此処に連れてきたという事は、要するに幽霊屋敷というやつなのである。家の中からは、高ぶる負の魂の波動が感じられた。

俺はその光景を見るなり、『なんか此処には入りたくないなあ』等と思い立ち止まっていると、後ろから鬼一爺さんが言うのだった。(涼さんや、懲らしめてやりなさい。目的の悪霊はこの中にある。大丈夫じゃ。お主の持つ霊符で十分戦える相手じゃ)

「ど、どうしても行かないと駄目？」

あまり気の進まない俺は、爺さんにもう一度聞いた。

だが、鬼一爺さんは笑顔でこう言った。

【サツサと行け】

鬼一爺さんは笑顔だったが、一瞬、中に居る悪霊よりも怖い霊圧を放ったので、俺は渋々幽霊屋敷内へと足を踏み入れた。

爺さんから明かりを前もって用意してくる様に言われた俺は、懐中電灯を点け辺りを照らし出す。

家の中は、埃だらけでおまけに嘗ての調度品や食器類、雑誌や新聞紙等が散らかっている。

俺は、新聞の日付を見た。1999年12月26日と書かれている。恐らく、その頃はまだこの家には人が住んでたんだろう。

周囲を見回しながら進んで行く。居間を抜け、更に奥の襖を開く。そして、目的の悪霊は、その奥の仏間の様な所に居たのだった。

仏間には何やらブツブツと独り言を言う50歳くらいの男の霊がいた。

体は透き通り、顔は醜く歪んでいる。そして、よく聞いてみるとその男の独り言は恨み辛みばかりなのであった。

そして、その悪霊は俺の存在に気が付くなり俺に飛び掛ってきた。

「ウワァア」

俺は突然飛び掛ってきたのでビックリし、居間の方まで逃げ、そして後ろを見た。悪霊は後ろに迫って来ている。

先程の事でテンパッていた俺は、散乱した雑誌に脚をとられて転んでしまった。

俺はすぐさま体を起こそうとするが、悪霊の方が行動は早かった。もう無理だ！ そう思った俺は目を閉じながらヤケクソで、手に持った霊籠の符を悪霊のいるであろう方向に出し、力を解放した。

【ギヤアアア】

俺は、その悲鳴を聞き、恐る恐る目を開ける。

すると、視界には青白い光に包まれ消滅しようとしている悪霊の姿があった。

呆然とその光景を眺めていると、後ろから鬼一爺さんが声を掛けしてきた。

（フオフオフオ、危なかったのお。万が一の時は、また我が吹っ飛ばしてやるつもりだったが、旨くいったようじゃな）

「い、居たんなら助けてくれよ。俺は今まで平和に生きてたんだから、突然こんな事出来るわけないだろ」

（何事も経験じゃ。それに、不恰好とはいえ、一人で悪霊を退治できたではないか。これはお主にとって大きな力になるぞ）

「そ、そうか。まあ爺さんがそう言っんなら。へへへ」

俺は爺さんに少し褒められて気をよくしてしまい、それ以上の文句は言わなかった。

後で考えてみたが、飴と鞭の使い分けの旨いジジイである。

また、この日の悪霊退治はこの一件だけで帰る事となり、爺さんは明日用の悪霊を探すべく、また夜の街に旅立ったのだった。

俺は勿論、帰って寝た

と、まあ、そんなわけで話は冒頭に戻る。

工業地区の悪霊退治を終えた俺と鬼一爺さんは、一旦、アパートに戻った。

そして、ここ最近の俺の除霊ぶりを爺さんが総括すると、これからの事について鬼一爺さんが説明しだした。

(涼一、今の符術だけでは心許ないじゃろ。そこでお主には真言の術もそろそろ教えようかと思う)

「真言の術？ なにそれ」

(本当は、術を覚え始めてから一月ひついきしか経たぬ人間にはまだまだ早いのだが、今のお主の霊力成長は目を見張るものがある。恐らく幽現なる体の資質なのじゃろ。それに、次の段階に行く為にも真言の術は避けて通れぬしの)

「へえ、俺って霊力練る才能あるんだ」

俺は爺さんにそう言われ自分の体を見回す。

(で、真言の術じゃが。簡単に言えば呪文を唱えて己の霊力を変化させる術じゃ。別名、言霊ことだまの術ともいうがの)

「呪文を唱えて……ドラクエのホイミとかパルプンテみたいなもんか。で、それを始めるの？」

(そうじゃ。しかし、その為には色々と覚えねばならぬ事や、お主の霊力の質を調べねばならんがの)

「霊力の質？ 何それ」

俺の問いかけに爺さんは少し難しい表情をする。

色々と整理して喋ろうとしてるようだ。

(実は、真言の術は人によって霊力変化の仕方がだいぶ違うんじゃ。原因は分からぬが、恐らく、其の者の育った環境で違いが出るのじゃろ)

「へえ、変わった術だね。それでどうやって調べるんだ？」

(で、真言の術で先ず理解せねばならぬのが、霊力は特定の音の波に対して、特定の変化を伴うという事じゃ。早い話が、真言という音の波を唱える事で霊力は変化するという事じゃの)

「ホオオ、それは新しい事実だな」

俺は腕を組み、感心したように頷いた。

(ただ、さっきも言ったと思うが。人によって霊力変化の仕方が違

うのはここに大きな問題がある。人によって反応する音の高さがバラバラなんじゃよ。従って、最初にどの高さの音程で霊力が変化するのか？を調べねば、幾ら真言を唱えても変化は起きんという事じやな。ここまでは理解したかの？)

「ああ、言ってる事は分かるよ。で、調べる方法は？」

(まあ、それは明日になったら説明してやろう。今晚はもう遅いしの。それに、お主には明日も、世の為人の為に頑張つて貰わねば成らぬからの)

「明日もかよ。新しい術の話をしだしたから、明日は無いと思つたのにイイ」

(涼さんや、それはそれ。これはこれじゃの。カツカツカツカツ)

鬼一爺さんは、頭の中までドツプリと水戸の御老公に毒されており、出てくる言葉まで真似をする有様だ。

正直、この時の俺は水戸の御老公役である里見 太郎を恨めしく思い、それと同時に、水戸黄門を見せた事も悔いていたのであった。「爺さん。その笑い方やめてくれないか？ なんかム力つくんだだけ」

(カツカツカツカツ、涼さんや。そんなどうでもよい事にかまけている場合じゃないぞ。精進あるのみじゃ)

「……駄目だこりゃ」

この時の俺の一言は、故・いかりや長介氏も認めてくれたに違いない。

鬼一爺さんの演じる水戸黄門様にゲンナリとしながらも、俺は寢床に就いたのであった。

まあこんな感じで俺の新たな修行が幕を上げた。

この先に何が待っているのか？ そして、俺は何を成すのか？ それは分からないが進むしかない。

何故なら、もう後戻りは出来ないのだから

八ノ巻

《 八ノ巻 》 靈道

今はAM4時前。まだ人々の活動し始めるまえの時間帯である。当然、お日様もまだ昇って来てはいない為、外はほぼ真っ暗だ。学園町にある各家々も、まだ誰も起きてはいないので、勿論、明かりなどは点いてない。

この辺りで今の時間帯に明かりがあるのは、電柱に設置された街灯か、コンビニの明かりくらいのものである。

その所為か、外の様子は暗く寂しい雰囲気なのであった。

また、やや肌寒い風が時折吹いてくるが、今はもう9月下旬。秋の訪れが始まっていてもおかしくない時期である為、当たり前前の事であった。

そんな中、重い瞼を擦りながら俺は外を歩いていた。

鬼一爺さんに連れられて……。

俺が何故こんな時間帯に外に出歩いているのかというと、勿論、理由がある。

それは、3日前から始めだした真言の術の修行の為である。

実はこの術、俺の狭い部屋で練習するには少々危険な為、屋外で始める事になったのだ。

おまけに、人に見られるのも不味い為、こんな相撲取りの朝稽古の様な時間帯になった訳である。

で、この術だが。

以前、爺さんは人によって霊力が反応する真言の音の高さがバラバラだといっていた為、2日前に一応俺の霊力を調べたのだった。その結果、俺の霊力は、結構低い帯域の音で反応する事が分かった為、今に至るといふ訳である。

因みに、どのくらいの低さかというと。歌っていない時のGA

K Tとかラ　クのHYD　みたいに、低くボソボソと言わないといけなくらいの音程なのだ。今までこんな音域で話した事が無いので、非常に唱えにくいのである。

その時、『正直、何で？』って思ったのを憶えている。

あと、どうやって音の高さを調べたのかは恥ずかしいので割愛させて貰いたい。一応、カラオケBOXで調べただけ言っておく。

さて、それで今向かっている場所だが。

この学園町には学問の神様である菅原道真を祭った神社、高天智天満宮がある。

その天満宮の裏には、この学園町内において唯一緑溢れる自然界を形成している、高さ100m程の小規模な山があるのだ。

まあ、早い話が、その裏山に向かっている訳である。人目につかない場所を探したところ、此処しかなかった為だ。

そうこうしている内に高天智天満宮に辿り着いた俺達は、境内を通り、懐中電灯の明かりを頼りに裏山へと向かう。

裏山には、植林された所と手付かずの雑木林とが半々くらいで混生しており、紅葉の季節になると美しい色彩を見せてくれそうである。

フトそんな事を考えながら裏山の山道を登ってゆくと、俺はある事に気が付いたのだった。

それは、沢山の靈魂達をこの裏山で見かけた事である。

どうやら靈魂達は、無機質な鉄筋コンクリートや鉄骨の建物よりも、大自然の営みの感じられる所の方が良い様で、確認出来る靈魂の数は街の中の比ではない。

その為、『靈魂にも好き嫌いがあるのかも』などと俺は考えるのだった。

まあよくは分らんが、兎に角、この裏山には靈魂が沢山いるのだ。

そして、そんな靈魂達を眺めている内に、俺はいつの間にか裏山

の頂にまで上り詰めていたのだった。

頂に到着した俺は、とりあえず、周囲を見回す。

山の頂には小さな祠ほらこがあり、少ないスペースではあったが広場もあつた。

また、その広場には登頂者が休む為の東屋とベンチ等も置かれており、ちょっとした休憩場といった感じになっているのである。

まあそれは兎も角、俺は広場の真ん中に移動し、鬼一爺さんに話しかける。

「鬼一爺さん。で、これから真言を唱えてみる訳だけど、注意事項とかは無いの？」

（そうじゃな。もう一つ言うておくと、霊力がある一定の練度にまで高めぬと、幾ら正確な音程で真言を唱えてもはつきりとした変化は現れぬ。これも肝に銘じよ。まあ練り過ぎも良くないがの。全ての調和を大事にするのじゃ、涼一）

「ああ、分かった。それじゃ、昨日教えてくれた『浄化の炎』の真言を唱えるよ」

俺は爺さんにそう言つと、身体を楽にして両足を肩幅くらいに広げて背筋を伸ばす。

そして、目を閉じ、昨夜の鬼一爺さんの説明を思い浮かべたのだった。

（よいか涼一。真言の術はお主の身体にある霊力を変化させて身体の外に放出する術じゃ。前の段階で練り上げた霊力に比してその変化も大きくなる。じゃが、変化が大きくなると喜んでいてはいかぬ。これは一つの例じゃが。練り過ぎた高い霊力を放出する言う事は、一時いっときとはいえ、お主の身体に必要な霊力までも放出する事に成りかねんという事じゃ。つまり、霊圧を上げすぎると、諸刃の剣となつてお主に襲い掛かってくるという事じゃな。で、何が言いたいのかという。明日の修練の前に、今のお主が普段の霊力はどの位で、また、どこまで霊力が練れるのか？ を知っておかねば

成らぬと言つ事じゃ)

俺は鬼一爺さんの忠告に注意し、靈力を練り上げる。

高い靈圧になり過ぎると不味い為、俺はいつも修行で練り上げる靈力の6割程度に抑え、右の掌に靈力を集中させた。

そして、右の掌を正面に突き出して、真言を某ビジュアル系の人様に低い声で唱え始めたのだった。

《 ノウモ・キリーク・カンマン・ア・ヴァータ 》

真言を唱え始めてから、靈力が何かに変わってゆくのを感じられた。それと同時に力が抜けて行くような感覚に襲われる。

俺はこの始めての出来事にビツクリして目を開く。そして驚愕した。

何故なら、右手の掌に10cm程の青白い炎の玉が出来ていたからである。

その炎の色は、悪霊退治でいつも使っている靈籠の符を解放した時の様に、青白く強い輝きを放っていた。

だが、それだけではなかった。練り上げた靈力を燃料として燃えているので、当然、靈力消耗による疲労が俺を襲うのだ。

約1分程、燃え盛る炎を眺めていた俺は、靈力消耗による疲労の為に集中を切らし、片膝を突いたのだった。

それと同時に術も中断する。そして、俺は大きく息を吐いたのである。

(フオフオフオ、やはり初めて行使すればそうなるの。お主だけじゃないぞ。皆、最初はそうなるのじゃ)

「じ、爺さん。真言の術って結構、疲労感が凄いね。靈力の制御が難しいよ」

(そりや当然じゃ。お主は今日初めて使うんじゃないからの。まあ、これでどういう術かは分かったじゃろう。じゃが、初めてで術を発現させた事だけでも良くやった方じゃ)

俺は鬼一爺さんにそう言われ、苦笑いを浮かべると、ベンチに腰掛けて呼吸を整えた。

そして、自分の掌を繁々と見つめると同時に、先程の青白い炎を思い浮かべるのだった。

「爺さん。この術は靈力を炎に変化させた後は目標に放つんだよな？」

（そうじゃ。じゃが、お主はもう少し大きな靈力を練れるように精進せねばの。我がお主の身体に憑依してこの術を行使した時は、今の3倍以上の炎を生み出したのだ。本人ではない我が操ってじゃぞ。じゃから、お主本人ならそれ以上の靈力を練り上げられる筈じゃ。それだけの天稟てんびんも持っておる）

「マジでか？ つつーかこの間の時、この術使ったのかよ。初耳だぞ」

俺はやや驚きながらもそう言った。

（フオフオフオ、じゃから最初の術に選んだんじゃよ。身体が覚えておると思ったからの）

「まあ、いいけどさ。ところで、これからこの術の練習をする時は、人目につかない様にしないと不味いよな。下手すりゃ放火魔に間違えられるよ。なんか此処でも不安だ」

俺はそう言うつと周囲を見回した。
幾ら早朝で人の姿が見えないとはいえ、民家等はこの下に沢山ある。

此処で修練をする限り、その悩みは尽きないように思えたからだ。すると俺の不安を察したのか、鬼一爺さんは暫く考え込むと一つの提案を出してきたのだった。

（フム……確かにの。なら、人払いの結界もついでに教えるかの）
「人払いの結界？ 何それ」

（読んで字のごとく、人を近づけ無いようにする結界じゃ。まあ、ある種の幻術に似たような物じゃな）

「ホオオ、そんな術まであるのか？ もう何でもありだな」
俺はまた新しい術の存在を知り、腕を組んで感心する。

（ま、それはまた後で教えるとして、今は真言の術じゃ。さ、日が

昇る前にまだ少しある。修練を続けるのじゃ)

「オウツ、じゃあ、また最初から行くか」

俺と鬼一爺さんはこの後も暫く真言の術の練習をし、人々が活動を始めるようになると共に、裏山を降りて自分のアパートへと帰ったのだった。

学園町から西にやや離れた位置に、高天智ニュータウンと呼ばれる新興住宅地がある。

元は田畑や森であったのだが、F県の都市開発・住宅地基盤整備事業と都会からのU・I・Jターン希望者を募って10年前に実施された、人材勧誘事業との兼ね合いで出来た新しい住宅街である。建っている家屋は当然新しく、殆どが洋風の建物ばかりで、屋根の色なども赤や青、黒や白色等カラフルなものが目立つ。

また、この住宅街の北には小高い丘があり、その上には滑り台やジャングルジム等、子供の遊具施設等も設置されていた。

そして、今現在も変わらず住宅は増え続けており、住宅のまだ建っていない空いた土地が全部埋まる日もそう遠い日ではないのかも知れない。そう思わせるくらい、此処は勢いのある新興住宅地なのであった。

だがしかし……。

新しい物を招くという事は、当然、古い物を淘汰して行く事にもなる。

淘汰して問題の無い物もあれば、淘汰してはいけない物も……。

この高天智ニュータウンに、2ヶ月前に引っ越してきた家族がいた。

3人家族で苗字は高島という。一家の大黒柱のUターン転職に伴い、関東地域から此方のF県に引っ越してきた家族であった。

その高島家の一人娘は学園町の西にある高天智聖承女子学院に通

っており、名前を高島瑞希たかしみみずきという。現在中等部の二年生である。身長は140cm程で性格は明るく、また、髪をサイドテールで纏めているのが特徴の、可愛らしさと元気を合わせ待った子である。

瑞希も転校してきてからは、その持前の明るさですぐに友達もでき、順風満帆の学園生活の様に見えた。が、最近の瑞希はどこか元気がない表情であった。

勿論、それには原因があった。そして、瑞希は苦しんでいた。真夜中になると決まって起きる出来事について……。

話は1ヶ月程前に遡る。

瑞希の父は昨年、高天智ニュータウンにある丘の丁度下にある土地を買い、其処へ今年になって家を建てた。

そして2ヶ月前に建築業者から住宅の受け渡しが進み、引越しを始め此処に移り住んだのである。

だが、1ヶ月程経ってから異変が起き始めたのだった。

瑞希の父や母には特に何も無いようだが、瑞希にだけソレが訪れた。

当時、瑞希は風呂から上がると、2階の自室に戻り髪を乾かしていた。

鼻歌交じりで鏡に映る自分を見ながら、髪にドライヤーを当てていると、鏡の中で何かが動いた様に感じ、瑞希は振り向く。

しかし其処には、何も動く物など無い為、瑞希はまた髪を乾かし始めたのだった。

最初はそんな何でもない事からだったが、それからというもの、瑞希の部屋には変な物音が聞こえたり、窓を叩く様な音が聞こえたりと、おかしな事が次々と起こり始めるのだった。

そして、この一週間程前から事態は深刻化する。

瑞希は真夜中になると、首を絞められているかのような感覚に目を覚ますようになるのである。

それも最初のうちは錯覚だと瑞希は思っていた。

だが、昨夜はいつもと違っていたのだ。

昨夜も瑞希は真綿で首を絞められる苦しさで目を醒ます。

そして、瞼を開いたその時だった！

瑞希の視界に入ってきたのは、怒りに目をギラつかせて醜く歪んだ、見た事も無い女の顔なのであった。

それを見た途端、瑞希は金縛りに遭ったかのように身動きがとれず、ただ苦しむだけの状態になるのである。

だがそれも終わりを迎える。

瑞希は暫くの間、首を絞められ続けていたが、女の姿はいつの間にか消えており、それと同時に金縛りも解けたのだ。

自由になった瑞希は、醜く歪んだ女の顔を思い出すと身震いし、それからは一睡も出来なかったのであった。

夜が空けると早速、瑞希は朝食の席で父と母に昨晚の事を打ち明け相談した。

しかし、両親は「夢でも見たのだろう」とまったく取り合わず、瑞希の必死の訴えも届かない。

そして、やりきれない不安と共に、瑞希は意気消沈したまま、学校へと向かったのであった。

家を出た瑞希は近くの駅へと向かう。そこには友人である加奈の姿があった。

加奈は瑞希より若干背が高く、長く伸びた髪をポニーテールで纏めており、瑞希同様可愛らしい子である。

また、瑞希と同じく高天智聖承女子学院に通っており、二人は同じクラスでもあった。

高天智聖承女子学院の制服は紺のブレザーで、下はグレーのスカートとなっており、割と一般的な色合いの制服である。

二人は朝の挨拶を交わすと近くのベンチに腰を下ろす。

そして加奈が口を開いた。

「瑞希、どうしたの？　なんか元気ないよ」

「ん？　ちよつとね……。なんか最近眠れないんだあ」

瑞希は昨夜の事を友人に話そうか話すべきか迷ったが、変な風に思われるのもアレなので言わないことにした。

加奈は言う。

「眠れないような事でもしてるの？」

「何よ、その眠れないような事って」

「だって、瑞希って剣道部でしょ？　毎夜、竹刀の素振りでもしてるのかなあって」

加奈はそう言うと共に、竹刀を振る仕草をする。

すると瑞希は、頬を膨らまして加奈に抗議した。

「加奈って私を誤解してるよ。もうっ、そんな熱血じゃないよ、わたし」

「ゴメンゴメン。ちよつと試ってみただけだよ。アツ、電車来たよ。行こっ瑞希」

二人は学園町行き電車に乗ると、いつもの定位置に座り、そこでもニコヤカに話を続ける。

悩んでばかりいたら身体に良くないと考えた瑞希は、とりあえず、昨夜の女の事は忘れようと自分に言い聞かせ、学校へと向かったのだった。

その日の夕方……。

俺は鬼一爺さんに連れられて高天智ニュータウンに来ていた。

理由は、いつものごとく世直しの悪霊退治であったが、今回はある人物からの頼みで此処に来ているのだ。

何でも、孫が大変な事になっているから何とかしてくれと俺に泣きついてきたのである。

それを見た鬼一爺さんは、最近よく見かける黄門様モードになると、俺に断りも無く「そなたの思い確かに受け取ったぞ」と訳の分

からない事を述べて、勝手に引き受けたのである。

さすがに、いい加減にしてくれとは思ったが、そんな事を言った日にはまた長い説教が待っている為、俺は渋々引き受ける事にしたのであった。

で、今に至ると……。

俺は鬼一爺さんに言う。

「おい、鬼一爺さん。高天智ニュータウンには来たけど、家の場所は分かるのか？」

（おお、場所は一応調べがついておる。あそこにみえる丘の前の家じゃ）

俺は爺さんが指差す方向を見る。

すると、ここ最近建てられたと思われる、真新しい白い壁の家が俺の視界に入ってきた。

「ああ、あれか。じゃ、行くか。なんか気が進まんけど」

目的の家が分かった俺は、サツサと終わらせる為にその家へと向かった。

そして玄関に辿り着くと、壁に付けられた呼び鈴を押すのである。しかし、誰も出てこない為、俺は首を傾げた。

「アレッ、あの人の話では、この時間帯なら娘が帰ってきてる、とか言ってたかったっけ？」

（さあ。まあもう少し待ってみたらどうじゃ？）

「しゃあないな。それじゃ向こうで少し待つか」

そう思い、俺は踵を返す。

するとその時、この家に向かって歩いてくる制服を着た女の子が居たのだった。

「この子かな？　と思い、俺は尋ねてみる事にした。

「ええと、高島さんの家の方ですか？」

「は、はい。ええと貴方は？」

「という事は、君が瑞希ちゃん？」

「はい。そ、そうですか」

いきなり名前を聞かれたので瑞希ちゃんは若干驚いたようだ。
俺は続ける。

「実は、君の部屋の除霊を頼まれて此処に来ただけ。心当たりあるよね？」

「じよ、除霊ですか？」

瑞希ちゃんは驚いてはいたが、暫く思案すると、頭を下げ俺にお願いしてきたのだった。

「……分かりました。お願いします。私の部屋は二階です」と。

私は除霊をしにきたと言った、この男の人をジッと見た。

歳は若く10代後半くらいに見える。服装はジーンズと白いカットシャツを着ており、上のシャツはだらりと前に出していた。

姿を見る限りではあまり除霊関係の仕事をしている様な人には見えない。寧ろ大学生とか専門学校生といった感じ。

少し、胡散臭くは見えたけど、父か母が朝の私を見て依頼したのだろうと考え、私は除霊をお願いする事にした。

私が頭を下げると、この男の人は笑顔で私に頷く。今の笑顔を見た感じでは、結構、優しい人なのかな。

そんな事を思いながら私は家の中に、彼を案内したのでした。

「コッチになります」

すると男の人は無言で私の後についてくる。

家上がった私は、部屋がある二階へと男の人を案内する。

そして階段を上る途中、ふと後ろを見ると、その男の人は顎に右手を当て何かを考えているような感じでした。

大分厄介なのかな？

そんな事を思っているうちに、私は部屋の前まで来ていた。

そしてやや緊張しながら、私は部屋の扉を開いたのです。

「ここが私の部屋です。どうぞ入ってください」

私がそう促すと、男の人はゆっくりと足を踏み入れた。

その男の人は部屋に入ると同時に目を閉じる。多分、幽霊を探っているのかも。

だがその時でした。

再び目を開くと、男の人は私のベッドのある壁に向かい、ズボンのポケットから一枚の紙を取り出したのです。

そして、壁に向かいその紙を投げつけたのでした。

【ギャアアアアア】

私は今夢を見ているのかと思った。

何故ならば、紙を投げつけた瞬間、青白い光が発生し、昨夜みたあの女の幽霊が現れたのだから。

そして女の幽霊は悲鳴と共に、男の人が投げつけた紙の光で消えてしまったのです。

私はその衝撃にビククリしてしまい、床にへたり込んでしまう。

「ン、大丈夫？ 瑞希ちゃん」

男の人は優しくそう言うと、私に手を差し伸べてきた。

私はその手を取り立ち上がると、今の事を質問したのでした。

「い、今は一体何なんですか？」

「まあ、今が瑞希ちゃんの部屋に住み着いた悪霊かな。さて、まだ終わりじゃないよ。原因はまだあるからね」

男の人はそう言うと、今度は一階を案内するように言ってきた。

私は、言われるがままその男の人を一階へ案内する。

階段を降りて一階に辿り着くと、男の人はまた目を閉じる。

そして再び目を開くと、今度は物置の方へ向かい歩き出したのでした。

男の人は物置の前に立ち止まると私に話しかけてきた。

「瑞希ちゃん。ここは何になってるの？」

「エエツと、其処は物置ですけど……。何か不味い事があるんですか？」

私はさっきの事もあり、何かあるのだろうか？と脅えながら聞いた。

「そうだね。ちょっと開いて見させてもらっよ」

「は、はい。ど、どうぞ」

男の人は物置の扉を開いた。

しかし、私の目には別段なにも異変が無いように思えたのだけど、この男の人には違った。

男の人はまた一枚の紙を取り出すと、外にある丘に面した壁に向かって投げつけたのです。

そして私はまた驚愕した。

何故なら、その紙の模様から青白い光が発しており、それだけでなく壁に張り付いているから。

これも私には理解できない為、また男の人に尋ねた。

「こ、これは何をやったのですか？」

「ああ、これ？ これはね、道切みちぎりといって霊の通る道を遮断したんだよ。さて、家の中はこれでおしまい。次は外だな」

男の人はそう言うと玄関の方へと移動する。

私もそれに続いた。

次に男の人は、家の裏にある丘の上へやってきた。

一体こんなところにどんな原因があるんだろう？ と思った私は

この男の人を目で追う。

すると、男の人は丘のある一角に立ち止まり、何かを考えているような感じだった。

私は不思議に思い尋ねてみた。

「あのお……裏の丘に、こうなった原因があるんですか？」

「ん？ ま、そうなるのかな……。瑞希ちゃん、スコップかハンドシヨベルのような土を掘る物って家にある？」

「あ、はい。確かあったと思います。持ってきますか？」

「ああ、お願い」

私は玄関の角に置かれたスコップを手に取ると、また丘まで移動し、男の人にスコップを手渡した。

スコップを手を取ったその人は、早速、足元の土を掘り始めた。掘り始めて暫くすると何かに当たったのか、その手を止め、男の人はゆっくりと素手で土を掻き分けてゆく。

そしてようやく、スコップの当たった物体が見えてきたのでした。私は最初はただの石かと思ったら、なんと、それはお地蔵さんでした。

流石に、驚いた私は口に手を当て息を呑みました。

それと同時に、「なんて罰当たりな事をしたの」と、これを埋めた人に言いたくなりました。

でもこんな所に埋まっているという事は丘の工事の時だろうか？

フトそんな事を考えながら、私は男の人に尋ねた。

「こ、これが、げ、原因ですか」と。

「ん？ まあこれがというか。これを元あつた位置に戻さないとなんつとこら辺かな。ヨイシヨ」

男の人は掘り出したお地蔵さんを丘の一面に移動させる。

それが終わると、男の人は笑顔になり、陽気な口調で私に言った。

「さて、これで突然できた不完全な霊道は塞がる筈だ。そして一応これで除霊は完了かな。瑞希ちゃんも、もう悪霊に悩まされずに済むよ」

「あ、ありがとうございます」

私は思わずその笑顔に見惚れてしまう。

彼は続ける。

「ああ、それと瑞希ちゃん。一つお願いがあるんだ。今回の除霊は誰にも言わないで欲しい。俺自身、別に仕事でやってる訳じゃないからね。約束出来る？」

「え？ あ、は、はい。だ、誰にも言いません」

「そう、ありがとうございます」

私は今の言葉を聞き、少し不思議に思ったのでした。

何故ならば、私の両親がどうして、秘密にしている彼の事を知ったのだらう？ という疑問が頭をよぎったから。

それが不思議だったので、とりあえず、私は問いかけてみる事にしました。

「あの、今日の除霊は私の両親からお願いされたんですよね？」

「いや、君のお爺さんからだよ」

「え？ でもお爺さんは3ヶ月前に……って！！！」

「そう、お爺さんが瑞希ちゃんの事が心配で心配で俺に何とかしてくれってね。まあ、線香の一本でも立ててあげてね。あ、それとこれを渡しておくよ」

男の人はそう言うと、さっきも使っていた紙を私に差し出した。

「これは、魔除けの符って言って、悪霊が近寄ってこない御札だ。霊障にあっただけりだから、暫くは持っていた方がいいよ。さて、それじゃ俺はもう帰るよ」

そう言うと男の人は踵を返す。

「あ、待ってください。お、お爺ちゃん何か言っていましたか？」

「ンン？ そうだな、引越したばかりで大変かも知れんけど、頑張れって言ってたよ。それじゃね。くれぐれも俺の事は秘密にね」

男の人は口に人差し指を立てると、私の前から去って行った。

陽気な感じの人だったけど、ああいうのを本物の霊能者っていうのかな。

とりあえず、私の中で彼との出会いは衝撃的なものでした。

そして、私はあの人を使わしてくれたお爺ちゃんに心から感謝したのでした。

お爺ちゃん、ありがとう

一方涼一は……。

「なあ、爺さん。今夜も悪霊退治とかって言わないよな。こんな早い時間にやったもんだから疲れたよ」

（なんじゃ、情けないの。まあ良いわい。しかし、明日からは再開じゃからな）

「はいはい、分かったよ」
「いつもと同じだった。」

九ノ巻

《 九ノ巻 》 再会

今はもう10月。

俺の人生を斜め上に変えてくれた夏季休暇も4日前に終わり、大学の後期授業がもう始まっている。

そんなわけで俺は今、高天大こうてんだいにて物理学の講義を受けている最中だ。

今朝も、真言術の朝稽古をしてきた俺は、やや眠い目を擦りながら講師の話を聞く。そして、黒板の文字をノートに書き写しているのだった。

今までも眠い時はあったが、流石に連日の悪霊退治と術の修行を続けていると、大学の授業に影響を及ぼす事は避けられなくなってきた。

近い内にも鬼一爺さんにこの事を言わなければ。と思う今日この頃だ。

で、その肝心の鬼一爺さんは、この間から学校に好奇心を刺激されたみたいで、大学内を自由に徘徊している。物好きな爺さんだ。

そして隣を見ると、いつもはおちゃらけた感じのヤマツチも真剣に講義を聴いていた。別人のようだ。

高校の3倍はあるであろう横長の教室を見回すと、白い壁と黒い黒板、そして多少段差のある横長の机といった物が視界に入ってくる。

その机の席には、夏季休暇前とは違い、やや厚手の服装を着た同じ学生達の姿がある。俺自身も黒い長袖のやや厚手の服とジーンズといった感じであるから、まあ季節を考えれば当たり前前の事である。また、今の俺の視界には当然、幽霊の姿も入ってくる。生きてい

る者と同じ様に講義を受ける幽霊の姿が……。なので、実際に講義を受けている人数よりも多く見えてしまうのだった。

学校は幽霊話が多いというが、この現状を見る限りでは納得せざるをえない。噂は事実だったようだ。このままでは学園七不思議とかも本当にありそうで怖い気がする。

まあ、そんな事を考えていてもしょうがないので、俺は目の前の講義をしっかりと理解するように意識を変えたのだった。

そして、講義が始まって90分が経過すると、終了を告げるいけ好かないチャイムの音が聞こえてきた。

いけ好かないと言ったのは、何と言う曲かは知らないが、気の抜けるメロデーだからだ。

小中高と同じチャイムで育ってきた俺には非常に違和感があり、未だに馴染めない事の一つであった。

多分、俺と同じ事を思ってる奴は一人や二人くらいじゃ無い筈だ。そんな事を考えていると、隣のヤマツチが俺に声を掛けてきた。

「日比野、飯行こうぜ。腹減ったよ」

俺はヤマツチのその言葉を聞き、時計を見た。時計は12時10分を示している。

今は、二時限目ということをしつかり忘れていた俺は、ヤマツチの言葉を聞くなり、急に腹が鳴り出した。

「俺も、昼だという事を今知ったよ」

「何だそれ？ あはは。まあいいや行こうぜ」

俺は肩掛け鞆をタスキに掛けるとヤマツチと共に教室を後にした。

高天大キャンパスの中心近くに厚生会館という建物があり、そこに売店や学生食堂や医務室等といった学生支援施設が集まっている。結構、横に長い建物で、正面に見えるガラスの壁や窓ガラスはマジックミラーになっており、天気の良い日などは光が反射して凄く眩しい時がある、ある意味派手な建物だ。

で、俺達は今その厚生会館へと向かっている。理由は勿論、学食

だ。

金のない学生がガツツリと安く食べれるのはこのF県の中を探しても自宅か此処くらいのものである。

そんなわけで、俺達は食堂へと向かっているのだ。

それから程なくして食堂に着いた俺達は、厨房付近にある食券の自販機へと歩を進める。

周囲を見回すと食堂は昼という事もあって人で溢れかえっていた。その為、俺達が座る席があるかどうか不安だったが、奥の方はまだまだ空きがあるようだった。

俺は350円のカツカレーを注文しそれを受け取ると、ヤマツチと共に、誰もいない奥の窓際にあるテーブルへと移動する。

そして、昼食を食べ始めたのだった。因みにヤマツチはハンバーグカレーだ。

久しぶりに頼んだ学食のカツカレーは、B級グルメになれている俺の下を喰らせるまではいかないが、普通に旨かったとだけ言うておく。

因みに俺はカレーには煩い男だ。街の中には学食のカレーより不味くて学食より高い金を要求してくる店もあるから、困ったもんだと嘆いた事がある。

たかがカレー、されどカレーだ。俺にとってはカレーが旨いか不味いかでその店の星の数が決まる。ミシュランの星の数よりも重要なポイントである。

まあ、どうでもいい話なのでもう終わろうと思う。

食事を食べ初めて暫くすると、村田健二・通称ムラケンという名の、同じ工学部の友人が俺達のテーブルにやってきた。

「ヤマツチと日比野、俺もいいかい？」

「おつムラケンか。いいぞ、ここ座れよ」

ヤマツチはそう言って隣の空いている席を引いた。

ムラケンは隣のN県出身で、気さくで配慮深くて凄くいい奴だ。

ただ惜しい事に外見で誤解されやすい人間だ。身長は俺より少し

高く、身体もゴツイ。おまけに顎髭を生やしているから、余計に厳つく見える。

見た目はこんな感じだが、話してみると本人は繊細な性格の持主で、特技が大正琴と聞いた時、その見た目とギャップがありすぎたので笑ってしまったのを憶えている。

「ムラケンは今日、これからどんな予定になってるの？」と俺が尋ねる。

「3時限目は英語だよ。そっちは？」

俺とヤマツチは声を揃えて言った。

「俺らは電気計測基礎だよ」「

こんな感じで前期と変わらないように振舞いながら、俺は後期の学生生活を送り始めていた。

俺の人生は8月13日の御迦土岳での出来事に遭遇してから目まぐるしく変わった。

だが、夏季休暇が終わった事で、今までは気にせずにおけた事が、そもいかなないようになってきた。

しかし、今の俺の現状は誰かに話したところで、恐らく変人扱いか、下手をすれば精神病扱いされる可能性が高い。なので、親友にも言えないのが悲しいところだ。

そう考える俺は、どこかで皆との距離に線を引き始めているような気が自分でもする。どこか違う世界の住人の様に……。

だが、確実に俺という人間は此処に存在しているし、皆も変わらず接してくれている。

確かに幽世かくりよという新しい世界が見えてしまう様になった俺は、皆とは世界観の共有は出来なくなったが、現世うつしよの世界観を忘れた訳ではない。

とりあえずは今の生活を崩れさせない為にも、それだけは忘れないうように心がけよう。

この時の俺はそう自分に言い聞かせていたのだった。

その日の夕方……。

俺は大学を後にすると、学園町内にあるショッピングセンターに来ていた。

真つ白い三階建ての結構大きな建物で、テナントも沢山入っている。

一階が生鮮食品等を扱うスーパーやレストラン、日用雑貨等を扱うテナントが入っており、2階は服飾関係、3階はホビーや本、音楽といった感じに振り分けられている。

今、俺は3階の本屋に来ている。今日の目的は1階の食品だが、最初に手荷物が多くなると寄り道がしにくい為、先に寄り道している訳である。因みに鬼一爺さんは、またその辺を徘徊している筈だ。まあそんな訳で、俺はアウトドア雑誌とかが置いてあるコーナーに行くのと、早速、フライ関係の雑誌を手に取りパラパラと立ち読みを始めた。

ここ最近、フライフィッシングの事を考えられるほどのゆとりは無かったが、嫌になったという訳ではない。また機会があれば当然やりたい。

しかしながら、色々起きる厄介な出来事は、中々、俺にその機会を与えてくれようとはしない。

だが、世の中というものは山あり谷ありが常だ。俺の場合は人よりの輪を掛けて酷い為、山と谷の部分にエベレストやマリアナ海溝を当て嵌めなければいけないと言っただけで……。

いつかそんな事を考えずに済む日が、必ず来る筈さ。

そう信じて読みふける事15分。

後ろから俺を呼ぶ声が、突然、聞こえてきたのだった。

「あ、あのお……」

妙に遠慮したその声に気付いた俺は、後ろを振り向いた。

そこには、高天智聖承女子学院の制服を着た女の子が立っていた。背は低く、髪を横に纏めた可愛い女の子である。

しかし、良く見ると以前会ったことがある子だった。

そこに立っていたのは10日程前に、妙な幽霊爺さんに依頼されて、除霊を行った当人が居たのだった。

「ン？ 君は……確か……え〜と。あ、思い出した。高島昭三さんたかしまじょうぞうの孫娘だ」

依頼をこなした後は、もうどうでもよくなっていった俺は、名前をすっかり忘れていた為、こんな答え方になってしまった。

「……思い出してないです。瑞希みずきです。私の名前は」

俺の受け答えが気に入らなかつたのか、この女の子はムキになつて返してきた。

難しい年頃だ。

「そうそう、瑞希ちゃんだったね。忘れてた訳じゃないよ。知ってたけど名前が出てこなかつたんだよ。ハハハ」

「それは、『忘れてる』と言っくんじゃないんですか？」

「ハハハハ……。君、結構手厳しいね」

俺は若干引きつった笑いを浮かべながら、そう言った。本当に難しい年頃だ。

俺は続ける。

「で、どうしたの瑞希ちゃん？ また何かあつた？」

「あ、すいません。えと、この間はどうもありがとうございました。俺がそう聞くと、瑞希ちゃんは丁寧に頭を下げてこの間の礼をする。礼儀正しい子だ。」

「いや、別にいいよ。気にしないで」

「でも、何のお礼もせず貴方は帰ってしまったので、私もなんか悪いなあと思ってたんですよ。それで、今日、本屋に立ち寄ったら貴方の姿が見えたので……」

若干、言葉を選びながら喋っている感じだが、誠意は伝わってくる。

「本当に気にしなくていいよ。それにこんな可愛い子が困ってたら助けるのは当然じゃないか。でも、決して人に言っではいけないよ」

俺は念押しする為に、最後にもう一度、口外しないよう口到人差し指を当て言う。

しかし、この子は別の部分で反応していた。

「か、可愛い……。ほ、本当ですか？」

「あ、ああ、瑞希ちゃんは可愛いよ。それで、この間の事は誰にも……」

俺は肝心な部分が伝わっていないと思い、もう一度言おうとするが、瑞希ちゃんはさっきの俺の言葉に酔っていた。

「私が可愛い……」

「おーい」

瑞希ちゃんは両手を頬に添え、顔を赤らめモジモジしている。色んな意味で難しい年頃だ。

駄目だこりゃっと思つた俺は、「オホン」と大きく咳払いをして瑞希ちゃんの注意をこちらに引く。

そして、もう一度改めて言うのだった。

「瑞希ちゃん。いいかい。この間の事は本当に誰にも言っちゃ駄目だからね」

「は、はい。でも。どうして秘密にしておくんですか？」

「まあ、色々複雑な事情があるんだよ」と、俺は遠い眼をして言う。

「そうなんですかあ。あ、そうだ。名前をまだ聞いてませんでした。お名前はなんと仰るんですか？」

「ああ、名前は、日比野涼一。まあ、平凡でありふれた名前だよ」

瑞希ちゃんは俺の名を聞くと、ポケットから携帯電話を取り出し俺の名前を登録しだした。

「……」

俺は瑞希ちゃんその突然の行動をただ無言で見ている。

そして、名前を打ち込むと、顔をまた俺に向けた。

「あ、そうだ。ついでに携帯の番号教えてください。もし、何かあったとき、連絡先を知らない和不味いですし」

俺は、今の「ついでに」の使い方が間違ってるような気がしたが、とりあえず言ってる事も一理ある為、教える事にした。

そして、勿論、これも聞かれた。

「あとは、メアドもお願ひします」

何故か分からないが、目に見えない自白装置が働いているかのよ
うに、瑞希ちゃんは俺から必要な事を聞き出していく。

そして、知りたい事を聞きだすと、今度は自分の携帯で俺に電話
を掛けてきたのだ。

俺は、ルパン3世のテーマがなる携帯をズボンのポケットから取
り出すと、ディスプレイに表示される番号を見た。

「えっと、それが私の携帯番号になります。これで、何かあったら
すぐ連絡できますね」

瑞希ちゃんはそう言うつと屈託の無い笑顔を俺に向けた。

「そ、そうだね。瑞希ちゃんて、結構自分のペースで物事進めるの
旨いね」

俺は淀みのない今の一連の流れから、思わずそう言ってしまった。
「そうですかあ？ でもよかった。日比野さんの連絡先を知る事が
出来て。この間の一件以来、なにもおかしな事は無いんですけど、
やっぱり不安じゃないですか」

瑞希ちゃんはホッとしたのか、胸を手で押さえる仕草をする。

俺はそんな瑞希ちゃんを見て、少し罪悪感が湧いた。

何故なら、『早く終わらせて帰ろう』そればかりを考えてこの間
は除霊作業をしたからである。

自分の事ばかり考えて、霊障に悩むこの子の心のケアまでは頭が
回らなかったからだ。

また、こうやって知り合ったのも何かの縁かも知れない。

そう考えた俺は、この子の不安を取り除いてやれるくらいまでは
相談に乗ってやろうと考えたのだった。

「瑞希ちゃん。もし、またあんな事があつたら相談に乗るよ。人生
相談は出来ないけど。そつち方面なら多少は知識があるからさ」

「は、はい。お願いします。あの、もう一つ聞いてもいいですか？」
「なんだい？」

「日比野さんは、お仕事は何をされてるんですか？」

「エッ？ やだな。俺はこう見えても学生だよ。此処から東に行つたところにある高天大に通つてるんだ」

俺はジェスチャーを交えながら説明する。

「やっぱりそうだったんですか。この間見たときからそうじゃないかと思つたんですよ。スイマセン、変なこと聞いて」

「いや、いいよ。まあ、この間の感じでは胡散臭い詐欺師と思われても仕方ないしね。ハハハ」

「そこまでは思わないですよ。クスクス」

と、まあ、何となく立ち寄つた本屋で意外な人物と出会い、そして接点を持つ事になった。

しかし、俺はこの時気づいてなかった。

今の時点で、俺がオカルトに通じている事を知る初めての人間が、瑞希ちゃんであるという事に。

そして、良くも悪くも、これから起きる出来事に色々と関わる事になってゆく事を……。

G 県・葦原市

F 県との県境に位置するG 県・葦原市。その中心市街地から更に南西に離れた所に水無原と呼ばれる地区がある。

周囲を山や田畑に囲まれた場所で、点在する集落等は農村といった感じの所である。

丁度、今は米の収穫時期という事もあり、それぞれの区画の水田ではコンバインが四角を描く様に忙しく走っていた。

また、上空には秋の風物詩である大量の赤とんぼが飛び回っており、見る者を陽気な気分させる。

そして、そのほのぼのとした光景は、街とは時間の進み方が違うと思わせる程、ゆったりとした錯覚を与えるのであった。

しかし、この辺りはそういった田園風景だけが特徴の地区ではなかった。

この地区は、遙か昔にこの地域一帯を支配していた豪族がいたとされる場所で、古墳や住居遺跡、そして土器や鉄器等が多数発見されている場所でもあった。

そして、今現在も出土品が出てくる為、発掘作業等は現在進行形で行われていたのだった。

日本古代史を専攻する考古学者達にとってはまさに楽園のような所なのである。

そして、その発掘現場の一面にて先程、幾何学な模様が刻まれた大きな壺が出土された。

壺の口は嚴重に塗り固められて塞がれており、まるで何かを外に出さないように閉じ込めている様である。

また、その壺は一抱えはある大きさで、見方によれば水瓶にも見えるのであった。

しかし、水瓶には不必要なほど、周囲に幾何学な模様が彫られ、奇妙な装飾が成されている為、発掘作業に携わっていた者達は、皆が一様に新種の出土品を連想した。

その壺が出土されると、其処にいた者がすぐさま県の埋蔵文化財担当の責任者に連絡をする。

そして、知らせを受けた担当者は、考古学者の一人である白川という男を連れて現れたのであった。

白川は歳は40歳くらいの男で、頭に白いハンチング帽被り、丸い眼鏡と口に沢山蓄えた髭が特徴の小太りの男である。

グレーのスラックスと青いカッターシャツという格好で、ネクタイはしていない。所謂クールビズいわゆるという感じだ。

知らせを受け駆けつけた白川は、その壺を見るなり驚愕した。

何故ならば、今まで見たどの文献にも載ってないような奇抜な出

土品だからである。

白川は出土した区画と見た感じで、大体4世紀〜5世紀頃の物と想像すると、早速、調べる事にしたのだった。

その夜の話し……。

茶色い外装を施した二階建ての水無原歴史資料館には、沢山の出土品がガラスケースに陳列されていた。

それらを眺めていると太古の息吹を感じられる様、色々工夫してあるようで、展示物の隣には由来を示す資料や当時を推測する絵等も一緒に並べられていた。

この歴史資料館は、午前9時〜午後4時まで営業しており、県内外からの訪れも多い水無原地区唯一の観光スポットでもあった。

そんな歴史資料館の隣に別館である建物があった。床面積10平方mくらいの二階建ての建物で、倉庫といったほうがしっくりくる建物である。

その水無原歴史資料館の別館である倉庫に、白川はいた。

何故、白川が此処にいるのかというと、水無原の発掘作業で出土した物は、すべてこの歴史資料館の別館であるこの倉庫に、一旦は納める事になっているからである。

通常、こういった出土品は、県の委託を受けた外注の業者を介して洗浄作業や記録作業が行われるのだが、考古学者としての血が騒いだ白川はいても立ってもいらねずに、この歴史資料館の隣にある倉庫に来ていたのだった。

この倉庫には、その壺だけではなく、それは沢山の出土品が洗浄されるのを待っていた。

シートに覆われた一画に所狭しと様々な出土品が並べられており、その隣には一旦外に運び出す為の梱包処理をする部屋まである。

そんな出土品等に囲まれながら、白川は上着を脱ぐと、早速作業に取り掛かるのであった。

白川は、壺の周囲に付いた泥を傷をつけないように、軽く擦って汚れを落としてゆく。時間の掛かる事ではあったが、白川は笑顔でそれらの作業を進めていった。

そして、粗方ではあるが落とし終わると、周囲の模様や装飾等を余す事無く、拡大鏡を使い眺めて行くのである。

それから1時間後。

同じ姿勢で作業をしていた為、肩が凝った白川は一旦休憩することにし、用意しておいた500mlのペットボトルのお茶を手に取り喉を潤した。

だが、白川は気付いてない。この時、異変が起きたのを……。

塗り固められた壺の口の部分に亀裂が出来たのである。

白川が手を触れたときの圧力かは分からないが、兎に角、壺の塗り固められた口の部分に亀裂が入ったのだった。

そして、亀裂は広がりを見せ、塞いでいた物は壺の中へと落ちていった。

ゴトンッ

白川は、今の音に気付き、ペットボトルを床に置くとすぐさま壺の所へと移動した。

そして驚愕する。

「なッ！ 塗り固められていた壺の口が割れている。何故だ？ さっきまでは何とも無かったのに……」

白川は不思議ではあったものの、とりあえず目の前の壺に意識が行く。

壺の口を封じていた物は既に無い。という事は中を覗けるといふ事である。

もし此処にいるのが白川ではなくとも、誰でも同じ行動をするだろう。当然、白川の脳裏にもソレがよぎる。

白川は生唾をゴクリと飲み込むと好奇心から近づき、壺の中を覗き込んだ。

そっか……。

【ウアアアアアアアアアアアアアアアアア】

拾ノ巻

《 拾ノ巻 》 土蜘蛛 一

今の時刻は3時45分。

俺は鬼一爺さんに起こされると、またいつもの様に真言術の朝稽古へと向かう。

眠い目を擦りながら大きな欠伸をし、紺のアイダスのジャージに着替えるとアパートの玄関扉を開いて、まだ真つ暗な外の世界に足を踏み入れた。日が経つにつれて外の気温は下がってきており、段々と着る物も厚着になっていく。あと2週間もすればジャージだけで出歩くのもままならなくなるだろう。

そんな先のことを考えながら俺は高天智天満宮へと歩を進める。しかし、この朝稽古を始めてから良い事もあった。朝飯が旨いと感じられる様になった事だ。今までの俺は、朝飯と言うとただの作業の様に腹に詰め込んでいただけだが、朝稽古から帰ってきてからというもの、何を食べても旨く感じるのだった。身体を動かすという事はいいことだ。などと最近健康オタクの気持ちが何となく分かるようになってきたのだった。

さて、話は変わるが。

大学の後期授業が始まったことでライフスタイルの変更をせざるをえなくなった俺は、鬼一爺さんに悪霊退治の方を暫く中止に出来ないかどうかを昨夜持ちかけてみた。爺さんも悪霊退治にかまけて学業が疎かそかになるのは頂けない。と、一応の理解はしてもらえた為、ホツとしたのだが中止にまでは流石に持つてはいけなかった。まあ、今までより件数は大幅に減らすことで合意に漕ぎ着けたというところだ。

そんな昨夜の遣り取りを思い返してる内に、高天智天満宮につい

た俺は、いつも通りに裏山へと続く道へ向かう。そして、裏山の入口と中腹辺りの木々に人払いの符を何枚か貼り付けた。一応これが結界の役目をしている。

以前、鬼一爺さんは人目に付かない方法として、人払いの結界というものを俺に薦めてきた。で、この符術を覚えてくれた訳である。この『人払いの符』は、悪霊を寄せ付けないようにする『魔除けの符』の対極に位置する符で、術式も正反対の物である。この符は人間の恐怖心や嫌悪感を煽って近づけないように幻覚を与える効果がある為、山道の中腹と入口に張っておけば先ず普通の人間はこの領域に入ってこないそうだ。まあ、普通じゃない人間は分からないとは言っていたが。そんな奴はあまり居ないから心配するなとも鬼一爺さんに言われた。

で、それらを張ってから山頂での修行を行うようにしており、今の所、誰も登ってきていない事を考えると効果はあるのだろう。と思う。

山頂に着いた俺は、広場の中央に来ると、背筋を伸ばし深呼吸をする。

そして、ゆっくりと靈力を練り靈圧を徐々に上げてゆく。

今日は、大分慣れてきたこともあり、いつもより高い靈圧で行う予定である。

その為、俺は更に意識を集中し、いつもよりも大きな靈力を練り上げるのだった。

（ホオ。涼一もだいぶ様になってきたの。この調子じゃと、呼吸法に頼らずに靈力を練り上げる日が来るのも、そう遠い日じゃないの）
鬼一爺さんは、そう言う俺から少し離れた所に行き、これから行う術の出来を見守る。

俺は目を閉じて、練り上げた靈力の奔流ほんりゅうを制御しながら右掌へと奔流ほんりゅうの流れを変える。

そして、いつもの様に『浄化の炎』の真言を唱え始めたのだった。

《 ノウモ・キリーク・カンマン・ア・ヴァータ 》

真言を唱え終えると、いつもより高い霊圧で創られた青き炎が掌から現れる。

直径20cm程の炎の玉で、今回は霊圧が高い為、いつもの2倍の大きさである。

俺はその光景を視界に納めると、次に霊力の放出量を調節する。すると、炎が弱まってゆくのが分かる。丁度、ガスコンロを強火から弱火に調節したような感じだ。

それらの強くしたり弱くしたりと繰り返す行為を5分ほど続け、最後は自分の意思で霊力の供給を停止し、炎を消化したのだった。

そして、鬼一爺さんに感想を求めた。

「どう、爺さん？ 術を発動させている間でも、大分、制御が出来るようになったよ。まあ、霊力の練り上げる量はまだまだかも知れないけどね」

（イヤイヤ、それでも大したもんじゃ。確かに霊力を練る量はまだまだじゃが、術を習い始めてから二月経ふたつきっておらぬ者が、それだけの事をやってのけるのを我は今まで見た事無い。まあ、かといって慢心はイカンがの）

爺さんは、嬉しそうにそういっているので、俺も少し気をよくした。

「へえ、そうなんだ。ま、確かに慢心は怪我の元だしな。これからも精進するよ」

（そうじゃ。さて、まだ時間はある。続けるのじゃ）
「オウ」

それから俺達は6時頃まで術の修練をし、アパートに戻ったのだった。

部屋に帰った俺は、とりあえずシャワーを浴び、服を着替えると朝食の準備に取り掛かった。

最近の俺は、今までの不規則な生活から一定の生活リズムを保つようになった為、体の調子もすこぶるいい。その為、今まではインスタントで済ませた食事も、最近では自らの手で作るようになってき

た。といつても、簡単な物しか作れないが。

とりあえず、今日の朝食は、目玉焼きとベーコンを焼いた物、そして食パンとインスタントのポタージュスープといった感じた。簡単ではあるが、こうやって自分で朝食を作るようになりだしてからまだ二週間程ではあるが、悪くない、そう思い始めている。

そして、テレビの電源をいれて朝のニュースを見ながら食事を取るのだった。これが最近の朝のパターンになっている。

その食事中、奇妙なニュースが俺の耳に入ってきた。

ニュースの内容はこんな感じだ。

> 朝7時のニュースです。

> 昨日の明方あけがたG県 葦原市あしはら 水無原みなぼらの山林で、死後半年以上は経過と見られるミイラ化した遺体が発見されました。

> 遺体の発見現場は、県道402号線沿いの山林で、明方あけがた、付近を通りかかった近隣住民によって発見され、葦原警察署に通報された模様です。

> 男性の身元は不明で、所持品等も現場には見当たらず無いかから、葦原署は至急身元の確認を急ぐとしております。

> 尚、遺体の状況や不自然な場所での発見という経緯もあり、葦原署は事件性も含め捜査を開始しているとの事です。

> それでは、次のニュースです……

このニュースを聞いた俺は。

「フウーン。山林でミイラ化した遺体ねえ。どう考えても死体遺棄って感じじゃなか。また、どこぞの自称『グル』とか言う、イカレたアホな教祖の教えを実行した馬鹿がいるんじゃないかねえの」

と、一人でテレビに突っ込んでいた。

俺がそんな独り言を言っていると、隣から鬼一爺さんが聞いてくる。

(涼一、なんじゃ。その『グル』ちゅうのは?)

「ヘツ？ 『グル』か？ グルっていうのは……」

俺は爺さんにそう聞かれ、どう説明したものか考える。

そして、フト鬼一爺さんをみるとある事に気が付いたのだった。

今から10年近く前にミイラ化遺体事件で逮捕された某教団の某教祖に微妙に似ていたのだ。

鬼一爺さんも結構浮世離れた風貌だからだと思ふ。しかも、思わず笑いがこぼれるくらいに。

「アハハハッ」

（なんじゃ、涼一。その不愉快な笑みは！ 一体何じゃというのじや）

「嫌、アハハ、ゴメンゴメン。いやあ、世の中色んな事があるね。

まあいいや。エエと、グルっていうのは確かインドっていう国の言葉で指導者とか言う意味なんだけど……」

俺は爺さんにそのミイラ化遺体事件とグルの説明をする。

当然、爺さんは憤慨した。『我は干からびた屍が生きてるなどという戯言たわごとなど吐かぬわあ！』と。

おまけに悪霊退治をまた復活させるぞ、とか脅しも掛けてきたのでこれ以上からかうのはやめる事にしたのだった。

鬼一爺さんを怒らせるのはやめとこう。そう思い、この話は終了した。

まあ、今朝はこんな感じで過ごし、そして大学へと向かったのだった。

G 県 葦原市 葦原警察署 刑事・生活安全課に浅野という

中年の刑事がいる。

身長は170cmと男にしては低いが、体はゴツく、100kg級の柔道家の様な体型をしている。歳は40半ばといったところで、頭が丸坊主の一見すると堅気じゃない人間にも見える強面こわもての刑事であつた。

その浅野は、先程から署内の一室にある窓から外の景色を眺めていた。部屋には他にも数人の人間がおり、忙しそうに事務作業に追われている。

浅野は外を暫く眺めた後、窓の近くにある事務机に座り大きく息を吐く。机の上には警察手帳や携帯電話、そして灰皿や書類等が乱雑に置かれている。浅野はそれらの書類に暫く目を通すと、また、元の位置に戻して椅子の背もたれに寄りかかった。そして、灰色の上着のポケットからセブンスターを取り出してタバコに火をつけるのだった。

今、浅野は昨日発見された遺体の検死の結果を待っていた。勿論、ニュースで報道もされていたミイラ遺体の検死結果を、である。

浅野は思う。昨日のミイラ遺体は一体誰なのだろう？ と。

昨日発見されたミイラ遺体は今も鮮明に浅野の脳裏に焼きついており、その光景を思い返すたびに身震いするくらいであった。何故ならば、今まで色んな遺体を見てきた浅野でさえも萎縮する程の異様な死に様だったからである。

実は、昨日の現場検証で遺体自らが県道から這うように山の中を移動しており、その道半ばで力尽きたようだ、と鑑識のほうから報告があった。それも普通の死体なら話が分かるのだが、遺体は死後半年は経っているかもしれないミイラである。常識的に考えてありえないのだ。

また、そのミイラの状態も凄まじいものであった。何しろ、遺体は壮絶な悲鳴を上げているかのように大きく口を開き、体は不自然に捻じれていたからだ。

ミイラというだけでも不自然なのに、その状況からしてありえない事になっていた為、浅野は昨日から頭を悩ませているのだった。

と、そこへ紺色のスーツを着た小島という男が小走りで浅野のところに来てきた。

歳は30くらいで眼鏡を掛けた中肉中背の平凡な雰囲気のある男である。

「浅野さん。検死の結果ができました。それと、とんでもない事実が」
「おう小島、何だ、そのとんでもない事実ってのは？」

小島は先ず何枚かのA4の紙を浅野に手渡した。

「これが、検死報告書です。それから、とんでもない事実の方ですが。実は一昨日おとといの夜から今朝に掛けて行方不明になっている考古学者の白川という男と、このミイラ遺体は同一人物だという事です」

浅野は小島から今の報告を聞き、顎が外れそうなほど驚く。

「はあ、なんだってえ！　じゃなにか？　一昨日おとといまで生きていた男が、一晩でミイラ化してあの山林に居たという事か。そんな馬鹿なありえんぞ、そんな事」

「しかし、それがどうも事実のようで……。気味の悪い話ですが」

浅野は今この男が持ってきた検死報告書を見る。

先ず一枚目の死体検案書から目を通し始めた。

浅野は気になつていた死因に真つ先に目がゆく。

そこには、直接の死因は胸に数箇所ある刺創しそウによる外傷性血気胸と見られる、と書かれていた。

「死因は胸の刺創しそウか……。しかし、肝心のミイラ化した原因までは書いてないな。一応、異常死体になつてはいるが」

「浅野さん。自然界で、人がミイラ化するには最低でも20日〜3ヶ月は掛かるそうですが、それはあくまでも乾燥状況や気温等の好条件に恵まれた一部の場合に限りだそうです。特に、この日本のような気候の下で、今回の様な屋外においての完全な形でのミイラ化はありえないそうです。場所も雨ざらしの山林ですし、先ず、自然にミイラ化した線は消えますね。第一、仏さん自体が一昨日の昼までは生きてますし。ですので、恐らく人為的にミイラ化したと考えるのが妥当だと思われまます」

小島の意見を聞いた浅野は、机の上で頬肘を付き、大きな溜息を吐くと共に頷垂れた。

「まったく。こんな田舎で何て厄介な事件だ。しかし、この犯人は頭がイカレてる。刺し殺したあとにわざわざミイラ化させるなんて

正気を疑うぞ。変な猟奇殺人事件に発展なんかしないでくれよ、本当に……」

浅野はそう言うと立ち上がり、机の上の手帳や携帯電話を上着に仕舞い始めた。

「浅野さん。周囲の警戒と聞き込みに出かけますか？」

「ああ、部屋に籠っていると気分が悪いからな。外に行くよ」

「そうですか。では一緒にしますよ」

浅野と小島は葦原署の外に出ると、白のトヨタ・チェイサーに乗り込み、目的地である水無原みずはらへとアクセルを吹かした。

ミイラ遺体が発見されてから5日後。

G県葦原市に隣接するF県中津市との県境けんさかいふきん付近の山中で奇妙な物が発見された。

それは昆虫の抜け殻のような物で、蟬の抜け殻の様に背中からパツクリと割れており、薄茶色の殻の中には半透明のアンモニア臭のする粘液が付着していた。その抜け殻には足が8本あり、大きな腹と二つの牙が見える醜悪な口は、蜘蛛くもを連想させる気味の悪い物であった。

しかし、問題はその大きさだ。その抜け殻は、この辺りに生息する熊、ツキノワグマと同じくらいの大きさなのである。

これを発見した人物はそのあまりの異様さから、すぐにその場を離れると、何故か分からないが、とりあえず葦原警察署に連絡を入れたのだった。

葦原署からその無線連絡を受けた浅野と小島は、現場へと車を走らせる。そして、比較的近い場所にいた為、二人は15分程で現場近くに到着したのだった。

二人は県境を示す看板のある路肩に車を停車すると、ドアを開け降りてくる。

そして、降りるなり、ややダルそうに浅野は呟いた。

「フウ、幾らなんでも、俺らが来る様な仕事じゃないだろ。猟友会

の連中を寄越させりや良いのに。ったく」

「まあまあ、我々が一番近くにいたのですからしょうがないですよ。それに、ミイラ事件の進展が余り無い今は、少し息抜きが必要ですよ」

小島は浅野を宥める^{なだ}様に言う。

「お前は、何でそう前向きなんだ。で、無線じゃ、得体の知れない生物の抜け殻があるから見に来てくれって話だったか……何度考えても警察の仕事じゃないぞ。ったく。どうせ誰かの悪戯だろ」

「はい、署からの無線でそう入りましたね。ともかく、行ってみましょう。話しでは、県境の看板付近にある登山道を少し行った所だそうです」

「やれやれ、じゃ行くか」

二人は15m程先にある登山道入口へと向かい歩き始める。

そして、やや狭い登山道に足を踏み入れたのだった。

周囲が木々や背丈の高い雑草ばかりの中で、スーツを着た二人は非常に場違いに見える。

二人もそれは心の底では思っているが、一々気にしていたらやっていけない職業な為、二人は黙々と山道を登ってゆくのだった。

入口から100m程行った所で、先頭を歩いていた小島は突然立ち止まる。

そして、驚愕の表情で、前方にある物体を指差したのであった。

「あ、浅野さん！ あ、あれを見てください」

後ろにいた浅野はダルそうに視線をそちらに向ける。

「あん？ って、な、なんだありや！」

二人は、その物体を見て驚愕した。それは見た事も無い生物の抜け殻だったからである。

とりあえず、二人はその抜け殻に近寄った。

「あ、浅野さん。これはなんていう虫なんですか？」

「知るかッ。そんなの分かる訳ないだろ。お前こそ知らないのか？」

「知りませんよ。こんなの。でもなんかこの殻、蜘蛛^{くも}に似てますね。」

とりあえず写真を撮っておきます」

小島は中腰になると、眼鏡の眉間のフレームを中指で押し上げ、
抜け殻を繁々と見つめる。

そして、ポケットからデジカメを取り出すと何枚かシャッターを
切った。

「こんな馬鹿でかい蜘蛛くもがいたら、たまったもんじゃねえよ。作り
物じゃねえのか？」

「ウーン、作り物にしてはやけに生々しいですね。ただ本物か？と
言われると辛いですけど……ン？」

小島はゆつくりと立ち上がると、抜け殻から20m程後ろの方に
ある木陰に奇妙な物体が転がっているのを見つけた。

「なんだ小島？　なんか見つけたのか」

「浅野さん。アソコに見えるのって何ですかね？」

小島の視線の先を浅野も追う。

「アアン？　なんだありゃ。とりあえず、行ってみるか」

二人は、木陰にある物体に近づく。そして、またもや驚愕するの
だった。

なんと、そこにはカモシカと猪の干からびた死骸が何体が転がっ
ていたのである。

「浅野さん。これってミイラ化した死骸ですよね……。こんな所で
完全なミイラ化するなんてありえないですよ。これも念の為に写真
を撮っておこう」

意外と冷静な小島はカモシカと猪の死骸をデジカメに何枚か収め
る。

だが、これを見た浅野は、今までのミイラ遺体事件と今日のこの
出来事が、何故かは分からないが無関係じゃなく思えたのだった。

そして、そう考えると同時に非常に嫌な予感がしたのである。

「こ、小島、さっきの抜け殻の所に戻るぞ」

「は、はい」

二人は、先程の抜け殻の所に戻ると、抜け殻から出たであろう生

物の痕跡を探す。

約30分程抜け殻の周囲を調べると、ある痕跡を小島が発見したのだった。

「浅野さん。この粘液が付着した跡があちらの方向にずっと続いています」

小島はF県の方向を指差した。

「F県側か……。小島、お前はどう思う？」

「どう思うとは？」

「この抜け殻から出た生物の事だよ。なんかおかしいと思わないか？ この間のミイラ事件から今まで何も分からず仕舞いだつたが、今回此処に来てパズルのピースがはまったような気がするんだ」

「浅野さん。ミイラ事件にまで飛ぶのは考え過ぎじゃないですか。

それに、あの動物達の干からびた死骸も何かの偶然かも知れないですし」

浅野は小島の意見を聞き、溜息を吐くと抜け殻を指差し言った。

「小島、これを見る。良く考えてみたら、こんな生物ありえないんだよ。それに、白川のミイラ化もありえない。あそこで転がる野生動物のミイラ化もありえない。でもな、有り得ないんじゃないかって、俺達が受け入れられないだけで、有り得るかもしれないんだ。そう考えると、この化け物が今回の一連の騒動の黒幕だとは思わないか？」 小島

小島は浅野の熱い自論を聴き、暫く考える。

そして、今の現実問題を浅野に言うのだった。

「浅野さんの言いたい事は分かります。でも、報告書にそう書くのですか？ 恐らく誰も信じないと思います。化け物を実際に見ない限りは。それに、邪推すれば葦原署に連絡してきた人物の悪戯の線もあります。その場合はあの抜け殻は作り物という事になります」

「確かに。報告書に書いても化け物を見ない限り信じてくれんやろうな。そこが問題だ。まあいい、一旦戻るぞ、小島」

「そうですね。一旦戻ってもっと煮詰めてみましょう」

二人はそう結論をすると、車の所まで今来た道を降りるのだった。

一方その頃、涼一は……。

「日比野さん」

夕暮れの学園町の歩道で、俺の苗字を呼ぶ、聞き覚えある女の子の音が後ろの方から聞こえてきた。

声の発生源を確認する為、俺は後ろを振り向く。

すると、思ったとおりの人物が笑顔で俺に小走りで近寄ってきたのだった。

「オウ、瑞希ちゃん。今日も元気だねえ」

「へへ、日比野さんは学校の帰りですか？」

「そうだけど、そういう瑞希ちゃんも学校の帰りだよな？」

俺は瑞希ちゃんの制服姿を見て思わずそう言ってしまった。

「はい、そうです。今日は部活の帰りですけどね」

「へえ、そうなんだ。瑞希ちゃんて部活何やってるの？」

「私、剣道部に入ってるんですよ」

「へえ、剣道部かあ。なるほどねえ……ン、剣道？……」

俺は最近何処かで、この単語を聞いた事があったような気がしたが、気のせいだと思いそのまま流した。

仮に憶えていたとしても、多分、どうでもいいことなんだろう。

「日比野さん、明日から連休ですけど、何か予定とかあるんですか？」

「連休ねえ、何しようかな。まあ、とりあえず予定は未定という事で」

俺は特に何も無いので、そう答えておいた。

まあ連休といっても、多分、術の修行に費やされる可能性が大だが……。

「へえ、日比野さん未定なんですか。じゃ、日比野さんを元気付ける為に明日メールしますね」

瑞希ちゃんはそう言つと可愛らしい笑顔を俺に見せる。

「そいつは楽しみだなあ。というか俺ってそんなに元気ない様に見える?」

「そういう意味で言つたんじゃないですよ。あ、私、駅がコッチなので此処でお別れですね。それじゃ、さようならあ日比野さん」

「じゃ、気を付けてね。さよなら」

瑞希ちゃんは元気な子で、俺に右手を大きく振って駅のある方向へと走っていったのだった。

俺はその姿を見送つた後、自分のアパートへと歩を進める。

瑞希ちゃんと別れてから10分程歩くと、俺の住む二階建ての白いアパートが視界に入ってきた。

二階にある自分の部屋の前に着くと、ポケットから鍵を取り出し扉を開け中に入る。そして、先ず最初にテレビの電源を入れるのだった。

最近、鬼一爺さんもニュースを見る様になり、色々今この世の中に関心があるようだ。

おまけに、今の世を知るには『にゆうす』を見るのが一番いい、と自分で言うようになってる。

テレビをつけた俺は、荷物を机の上に置くと、床に敷いた布団の上に寝転がり、暫く休む事にした。

横になっていると夕方六時のテレビニュースが流れてきた。

そして、冒頭の全国ニュースが終わると、次はF県のスタジオに切り替わり、凄く質素なスタジオで、凄く質素な男が、凄く質素にニュースを読むのだった。

> それでは、Fのスタジオから県内のニュースを続けます。

> 今日、中津市の山林で鹿や猪等の干からびた死骸が多数発見されるという変わった現象が起き、県内の専門家が調査に入りました。

> 現地を調査した専門家の話では、死後三ヶ月以上は経過しているものが殆どらしく、未だ原因は不明との事です。

>また、その当時の気象条件や餌となる山の食料事情等の調査を行い、より深い所まで原因を追究する方針との事です。

こんな感じのニュースが、沢山の干からびた猪やカモシカ等の映像と共に流れてきた。

俺は「ふうん」という感じで聞いていたが、鬼一爺さんは信じられない物を見るかのようにその映像を見ていた。

そして、今のニュースが終わった後に、こう呟いたのだった。

【……………こ、これは……………まさ…か……………土蜘蛛ちぐもの仕業か】と

拾巻ノ巻

《 拾巻ノ巻 》 土蜘蛛 二

【……………こ、これは……………まさ…か……………土蜘蛛つちぐもの仕業か】

鬼一爺さんは、驚愕の表情でそう呟いた。

爺さんのこんな表情を見るのは、御迦みか土岳つちだけで出会った時以来である。

俺は、爺さんをそこまで驚かせるその土蜘蛛つちぐもというのがどんな蜘蛛なのか興味が湧いたので、好奇心から尋ねたのだった。

「爺さん、何だ？ その土蜘蛛つちぐもつてのは」

俺がそう問いかけると、鬼一爺さんはゆっくりとした動作で俺に振り向く。

そして、非常に険しい表情で話し始めた。

（土蜘蛛つちぐもというのは蜘蛛に似た、人や獣を食らう恐ろしい物の怪の一種でな。これが大きく成長すると手が付けられん程厄介になるのじゃ。今、驚いたのは、てれびに写っておった沢山の獣の干からびた屍を見て、嘗て我が土蜘蛛つちぐもと関わった時と重なって見えたからじゃ……………）

爺さんは当時の大変だった時の事を考えているのか、緊張感のある話し方をする。

しかし、俺は今の話の中で気になったところがあったので、それを尋ねた。

「爺さん。今、成長したら厄介になるって言ったけど、どういう事なん？」

（土蜘蛛つちぐもは小さい頃は、人や獣の体液を養分としながら土中で過します。そして脱皮を繰り返して成長するのだが、成長した土蜘蛛つちぐもは獐

猛で、食欲も恐ろしく貪欲になる。それも、一つの村や町の沢山の
人々を根こそぎ喰らっていく程にの。じゃからもし、てれびに写っ
ていた屍が土蜘蛛つちくずの仕業なら、早く手を打たねば大惨事になりかね
んのじゃよ)

俺は爺さんの話を聞き、背筋にゾゾツと何かが走ったような気が
した。

それと同時に、一週間程前に朝のテレビニュースで流れた話を俺
は思い出し、凄く不安になった俺は、自分を安心させる為に爺さん
に確認したのだった。

「鬼一爺さん。あのさ、7日程前にミイラ遺体のニュースを爺さん
も見ていたと思うけど、あれもこれに関係あるのかなあ？」

（オオ、そう言えばお主が我を怒らせた時の事じゃな。憶えておる
ぞ。フム……。あれは何処であった話なのじゃ？）

「あれは確か、このF県の隣、G県の話だったような気がする。多
分だけだ」

俺はうる覚えな為、やや自信なくそう答えた。

そして、それを聞いた鬼一爺さんは、暫く目を閉じて何かを考え
るのだった。

「爺さん？ どうしたんだ」

先程の俺の話を聞いてから、一向に口を開く素振りを見せないの
で、とりあえず問いかける。

すると、やや鋭い目になり口を開いた。

（涼一、明日は学業は休みだと言っておったな？）

「ああ、それがどうかしたか？」

（明日、先程『てれび』で言っておった所に我を案内してくれぬか
？ 行けば、真まことに土蜘蛛つちくずの仕業かどうか、判断できるやも知れぬ）

俺は爺さんから今の話を聞いたばかりな為、少し躊躇したが、あ
の話が本当なら確かに放つて置くのは不味いと思い返事をした。

「なんか、怖いけど。良いよ、案内するよ。といっても、行った事
ないから地図見て案内する事になると思うけどな」

(すまぬな、涼一。土蜘蛛つぐぐもでなければ問題ないんじゃないが、そうであった場合は、靈術に長けた者でない限り対処が難しいのでは)

俺は今の部分で少し引つかかった事があったので尋ねる。

「爺さん。今、『靈術に長けた者でない限り対処が難しい』と言ったけど、どういう事だ？」

(フム、そうじゃな、お主には悪霊や威霊いれいの話はしたが、物の怪の話はまだしていなかったの。良い機会じゃ、話しとくしよう。特定の威霊いれいが眠る地だけにおいての話じゃが、その周辺に住む生き物は凄まじい負の靈氣に当てられ、普通の生命とは違った過程を辿ることになるのじゃよ。そして、それが物の怪となって現れるのじゃ。じゃから、ある意味では人の創りだした化け物とも言えるし、世の理ことわりが生んだ化け物とも言える。まあ、それはよいとして。靈術に長けた者ではないと対処が難しいと言ったのは、その生まれた過程から、我等の使う靈術に対して奴等は脆弱であるからなのじゃ。負の靈氣が生んだ化け物じゃからの。当然、悪霊と同じ性質たちになる。早い話が、実体を持つ悪霊だと思えばよい。まあ物の怪に関してはこんなところかの)

「へえ、なるほど。また新しい世の中の神秘に触れた気がするよ」
俺は腕を組んで唸るように頷く。

そして、日本昔話とかでよくある妖怪等の逸話もそれが絡んでいるのだろう、と自分で納得していたのだった。

また、俺はもう一つ気になった事があった為、それも聞いてみた。
「さつき、『土蜘蛛は小さい頃は人や獣の体液を養分として土中で過すごす』とも言ってたけど、どういう事なん？」

(ああ、それか。小さい頃は土中で待ち構えて獣や人から体液を啜すすり、糧かてとしておるのじゃ。じゃから、人も獣も体の水気を殆ど奪われて干からびてしまうのじゃよ。じゃが、成長すると顎も発達しておるから、人も獣も骨ごと食べてしまっぞ)

「……子供の頃から最悪な生物じゃないか。そう言えば、脱皮を繰り返して大きくなるんだろ？」

(そうじゃ。最終的にはかなり大きな巨体になる。人なんぞ丸呑みするくらいの大きさなの。それとも一つ、奴は夜行性で夜にしか狩をせぬという特徴がある)

「ゴクリツ……。もし土蜘蛛つちぐもだったら、必ず、成虫になるのは阻止しないとイケないね」

俺は巨大な蜘蛛が自分を丸呑みするのを想像すると、寒気がした為そう決意したのだった。

そして、爺さんの説明を聞いて色々と考えたところで、明日の簡単な段取りを俺は言った。

「あと、場所だけど。多分、中津市とG県とを隔てた山だと思うから、此処からだとして1時間位の所だな。朝8時頃から行けば、結構な時間調査できるよ。それで良いかい？」

(まあ、その辺の事は、この地に住まうお主に任せた。我はお主に従うのみじゃ)

「そうか。なら、それで行くよ」
と、そんなわけで俺達は土蜘蛛つちぐもの調査をするために明日の朝、中津市に向かう事になったのだった。

そして、翌日の朝……。

俺は、いつもの日課である朝の術稽古を終えると中津市に行く為の準備をする。

山の中に入るかも知れない為、俺は釣に行くとき使う布製のトレッキングシューズを用意し、服装も動きやすい格好を選ぶ。

上は茶色いミリタリージャケットに下はジーンズといった感じだ。また、昨日の夕方。つまり、あの中の事だが。鬼一爺さんは、大工さんが木材に線を引くとき使うような墨壺はないのか？ と聞いてきた。

そんな物は当然持ってない為、『無い』と答えたら、あると助かると言ってきたので買いに行く事になった。

因みにホームセンターの投売りコーナーにあった500円くらい

の安い墨壺だ。

そして、その墨壺と霊符等の術具、幾つかのアウトドア用品、救急用品等をリュックに入れるとアパートを出て学園町の駅に向かうのだった。

今日の天気は快晴で、外はやや肌寒い空気と斜め上から照らす太陽の熱で、あつたかいのか寒いのかよく分からない気温だったが、非常に心地良く感じた。

朝8時前の学園町は人の動きや車も疎^{まば}らで、いつもの忙しい雰囲気はない。恐らく、休日だからだろう。此処は平日の方が活気のある町だから。

そんないつもと違う学園町の様子を眺めながら、俺は駅へと進み続ける。

部屋を出てから10分。俺は駅に到着すると中津市までの切符を購入し改札を抜ける。

そして、ホームに向かったのだった。

俺がホームにある青いベンチに腰掛けてまっついていると、中津市方面行きのローカル線である白っぽい車両がやって来た。

因みにこの電車、田舎の方へ行くので2両編成のシヨボイ車両だ。ホームに停車すると扉が開く。

そして、俺はその車両に乗るなり驚いた。意外と人が沢山乗っていたからだ。

まさか、こんな時間帯でこんな休日のこんなローカル線で、俺は吊革を握る事になるとは思ってもいなかった。

電車内には、ピクニックに行くような格好の親子やカジュアルな着こなしの女の子等が乗っていた。あと、二日酔いで頭の痛そうなサラリーマンのオッサンと。

俺はそんな室内の人々をジロジロと見るのもアレなので、車窓の景色を眺めながら中津市までの短い電車の旅を過ごすのだった。

中津駅に着いた俺は市営バスの停留所へと向かう。

昨日、インターネットで例のニュースの事を調べたところ、中津市の霧守高原きりがみこうげんというところで起きた事が分かった。

公的な移動手段を探した所、駅の近くの停留所から霧守高原行ききりがみの市営バスが走っているのを知った為、俺は其処に向かったのだった。

バス停で待つ事、約10分程。綺麗な彩いろとりの模様が描かれたバスがやってきた。恐らく、客寄せの演出と宣伝の為に派手な模様を描いているのだろう。

俺はそのバスに乗ると、手前の方の空いている席に座る。そして俺が座ると直ぐに、バスは霧守高原へと向かい走り出した。

バスが中津市の市街地を抜けると、段々と人通りや車の交通量も減っていき、田園風景へと切り替わる。

それから更に進むと田園風景も見えなくなり、草木だらけの森の中をバスは走っていくのだった。

まるで、人生の縮図のような景色の移り変わりだ。

バスの窓からみえる景色をそんな風に思いながら見ていると、今度は一気に開けた場所になる。其処は見渡す限りの草原が広がっていたのだ。

俺は道路脇にある看板を見る。すると、どうやらこの辺りが霧守高原きりがみらしい。

草原には放牧された牛がムシャムシャと草を食べていた。

そんな、ほのぼのとする光景を眺めていると、車内にバス停の位置を知らせるアナウンスが流れてきた。どうやら、もうそろそろ着くようだ。

俺は忘れ物がないように荷物の確認をすると、また暫くの間、外の景色を眺めるのだった。

バスを降りた俺は、周囲を見回す。

バス停の周囲は道の駅になっており、この地域の特産品等の販売が行われていた。結構、人も集まっており、そこそこ賑やかになっ

ている。

また、クレープや焼きそば、たこ焼き、岩魚の塩焼き等も野外テントの下で販売しており、非常に食欲のそそる旨そうな匂いがあたりに漂っていた。

あと、このあたりは民宿が多いらしく、看板が近くの巨大な掲示板みたいなのに幾つも張られている。その他に、温泉もあるようで、結構外部の人の出入りが多そうな印象を受けたのだった。

そんなバス停付近の景色を見終えると、昨夜ネットからプリントアウトしたこの地域の地図を持ち、目的の山の方へ俺達は進み始める。

山へと続く道は結構急な坂道なので、いくらアスファルトで舗装されているとはいえしんどい。

その為、俺は1km程歩いた所で一旦休憩する事にしたのだった。丁度、周囲には人も見かけなくなっていたので、休憩ついでに俺は鬼一爺さんに話し掛けた。

「鬼一爺さん。目的の山はこの先のようだけど、相手は化け物かもしれないから、霊符の用意もしておいた方がいいよな？」

（とりあえず、魔除けの符を持っておけ。もし、奴ならば嫌な感じがして、無理してまで近寄ってこんじゃる。それに夜行性じゃしの）
「それは、もう既にそうしてるよ。昨日の説明聞いたときからそんな気がしたしね」

（なんじゃ。もうそうしておったのか。なら、今の所は何もないぞ）
「了解」

こんな感じの会話をしていると、俺達の後ろから一台の車が坂道を駆け上がっていった。

大きなクロカン4WDの車で、ブラックとゴールドのツートンカラーの三菱パジェロだった。

因みに俺の結構好きな車だったので、一目見て分かった。

徒歩の俺と比べ、比べ物にならないスピードで駆け上がっていったその姿を見ると、若干羨ましく思ってしまう。

だが、無い物ねだりしても仕方がないので、俺も適度に体力が回復すると、また坂道を歩き始めるのだった。

それから、15分程歩いた所で、坂道の終わりが見えた。

丁度、山の麓まで伸びたこの道の終わりは大きな駐車場になっており、その駐車場の奥には、この辺り唯一の温泉宿である霧守ハイランドホテルの姿が視界に入ってきたのだった。

また、駐車場には大型の観光バスが何台か止まっており、丁度、団体の観光客がそのバスに乗り込んでいる所だった。

それらを見てみると、先程、俺達を追い抜いていったパジェロが、ホテルからやや離れた位置にある山道の入口手前の所に駐車してあるのが視界に入った。

あの車の人も山に行くのだろうか？

そんな事を考えながら、俺達もその山道の入口へと向かい歩き始めた。

俺は入口に来ると、パジェロの運転席を見る。しかし、中には誰も乗っておらず無人である。どうやら、山の中にもう入っているみたいだ。

まあ、そんな事を詮索してもしょうがないので、俺も山中に入るべく山道の入口に足を踏み入れたのだった。

山の中は標高が高いのと日光が届かない為、結構冷える。少し厚着をしてきて正解だったようだ。

また、周囲の木々の葉には露が至る所に付いており、森全体を余計に冷たく感じさせていた。

それらの周囲の薄暗い光景を見るなり肩を窄めながら、俺は山道を登ってゆく。

そんな中、鬼一爺さんが俺に話し掛けてきた。

（涼一。土蜘蛛の痕跡を探すには八つの足跡と、奴独特の鼻にツンとする匂いがある。匂いにも気を配れ。そして、脱皮した抜け殻も注意せよ）

「了解。ところで、持ってきた墨壺と糸って何に使うんだ？ 後で教える、とは爺さんも言ってたけど」

（墨壺は奴の存在が真^{まこと}であった場合に備えての物じゃ。今は先ず奴の存在の有無をハッキリさせねばならぬ）

「分かった」

俺と鬼一爺さんはそんな会話をしながら山道を登ってゆく。

すると、前方に茶色のアドベンチャーハットを被った中年のオッサンが一人、佇んでいた。

服装は水色の作業服の様な物を着ており、靴はゴツイ登山靴を履いている。体型はやや小太りな感じのオッサンだった。

オッサンも、下から俺が上ってきている事に気付いた様で、此方の方を見ている。

そして、その差が10m位になった時、オッサンの方から俺に話しかけてきた。

「おう、兄ちゃん。こんな山の中に一体何しに来たんだ？ まさか、首を吊りに来たんじゃないだろうな」

いきなりこのオッサンは俺にこんな失礼な事を聞いてきた。

少し不愉快な気分になった俺は、嫌な顔でオッサンに言う。

「はい？ 俺はただ登山に来ただけですが」

何も嘘は言っていない。

山に来たらどの道登ることになるのだから……。

「登山ねえ。まあいいや。それと一つ忠告しておく。あまり、山中をウロウロしない方がいい。この山には凶暴な獣が居そうだしな」

「凶暴な獣……。一体、何のことですか？」

俺はオッサンが妙な脅しを掛けて、これ以上進ませないようになっている気がした。

その為、このオッサンが何を知ってるのか？ それが気になり聞き返してみた。

「兄ちゃん、昨日のニュース見なかったのか？ 言ってただろう。干からびた動物の死骸が沢山見つかったって。ありゃ、自然に成っ

たものじゃない。俺は凶暴な何かがやらかしたとみている」

オッサンの話を聞き、思わずもつと踏み込んで聞きたい衝動に駆られたが、我慢して冷静になる。

そして、何故そんな事を言うのか聞き返した。

「ええ、そんな事を二ユースで聞きました。何を根拠にそう仰るのですか？」

「俺の勘だ。それに、此処だけでもないしな……」

「どういうことですか？」

俺がそう聞くと、オッサンは少し躊躇した気がしたが、二枚の写真を見せてくれた。

一枚は猪やカモシカの干からびた死骸で、もう一枚は見た事も無い巨大な蜘蛛の様な生き物の抜け殻であった。

俺はそれを見るなり、ゴクリと息を呑む。

しかし、此処で予定外の事が起きる。

鬼一爺さんが写真を見て突然、興奮したのだ。

【お主、一体この抜け殻を何処で見つけた！ 教えるのだ】

普段は霊圧を下げて人からは見えなくなっている鬼一爺さんだが、実はこうなると話が違ってくる。

そして、予想通りオッサンに爺さんの姿が見られてしまうのだ。た。

「ヒッ、ヒイイ！ な、何だ、一体……この爺さんはアア」

「オッ、オイ。じ、爺さん。興奮しすぎだよ。見えてるよ」

オッサンは目を引ん剥いて鬼一爺さんを見ると、直立不動でヒキツケを起こしかねん位になる。

そして、俺は今のこの展開について行けず、右手で頭を抑えながら、ただただ頂垂れていたのだ。た。

鬼一爺さんの迂闊な行動を呪いながら

で、それから20分後。

俺とオッサンはとりあえず腹を割って話をする事にした。

オッサンは浅野 健次郎という名前で、G県葦原市の葦原警察署に勤務する刑事だそうだ。

で、俺も素性を隠していてもしょうがなくなった為、オッサンに鬼一爺さんを紹介し、ついでに俺の素性も話した。

まあ、一応、俺と爺さんの事は納得してくれた。それでも、最初は爺さんに少しビビっていたが。

で、俺と浅野のオッサンはお互いに持つ化け物の情報を交換すると、爺さんがオッサンに話を切り出したのだった。

（フム……。なるほどの、浅野殿といったか。お主の持つその写真とやらに写っておるその殻は、土蜘蛛の抜け殻に間違いない。それで聞きたい。これを見つけたのは何時の事じゃ？）

「一応、一昨日の事だ。俺達が署の方から連絡を受けて山に入ったらこの抜け殻があった。で、これの付近にさっきの獣の干からびた死骸も転がっていたという訳だ。そして、コイツがF県の方へ進んだ痕跡があったから、丁度、連休って事もあって俺の独断で今此処に調査に来ている訳だ。ニュースでも出てたしな。ところで爺さん、今の話は本当か？ コイツが成長すると村や町の間人を根こそぎ喰らうつてのは……」

浅野さんも、あまりのぶっ飛んだ展開に、いくら非常識の塊である爺さんの事を受け入れても、そればかりは少し疑っていた。

刑事としての職業柄それは仕方ないのかもしれない。

（本当じゃ。しかし、問題は何故、突然現れたのかが分からぬのじや。この辺りの土蜘蛛は嘗ての昔、我等が滅ぼしたはずだと思っておったのじゃが……）

爺さんの話を聞いた浅野さんは、フト上を向き、何かを思い出しているようだった。

一分ほど何やら考えていたが、思い出したようで、俺達に念押しをしてから話した。

「これはオフレコだ。他言しないで欲しい。俺はミイラ化遺体事件を葦原署で担当してるんだが、そのミイラ遺体の身元は考古学者の

白川という男だと分かっている。で、その白川だが。水無原の遺跡^{みなはらのいし}発掘現場で出土した変わった壺をえらい熱心に調べていたそうだった。出土した当時、一緒にいたG県の埋蔵文化財担当の者がそう言っていた。で、この壺だが、白川が行方不明になってから少し変わった所があつたそう。何でも、出土した当初は壺の口が何かで塗り固められていたらしいんだが、それを境に、塗り固められていた物がなくなつて壺の口が露^{すい}になつていたそう。このくらいかな、俺の今知っている情報は」

浅野さんの説明を聞くと、爺さんは何やら考え込む。

そして、ボソツと呟いた。

(それは、蟲壺^{むしつぼ}かも知れぬ)

「「蟲壺^{むしつぼ}?」」

俺と浅野さんは綺麗にハモツた。

爺さんは続ける。

(そうじゃ、今から凡そ1500年程前の話じゃが。当時の日ノ本には呪禁師^{じゆいんし}という世の支配者のお抱え術者があつてな。その呪禁師の使う呪禁道呪術^{じゆいこんどうじゆいじゆつ}というものの中に厭魅蠱毒法^{えんみこくぼう}という術がある。己の靈力で蟲、この場合は土蜘蛛^{つちぐも}じゃが。それを壺の中で調伏^{てうふく}して、己の呪術具として操る邪法じゃ。まあ小さい頃の土蜘蛛^{つちぐも}しか操るなんて事は無理じゃがの。で、恐らくそれが出て来たのじゃろう)

「ちよつと待てよ、鬼一爺さん。1500年も壺の中に居た土蜘蛛^{つちぐも}が何で生きてるんだよ」

俺は、解せない部分があつたので爺さんに聞く。

すると、意外な答えが帰つて来た。

(涼一、お主は普通の虫と同じ様に考えておるのかも知れんが。土蜘蛛は最早虫として、嫌、生き物としての枠をはみ出しておる。物の怪は、例え生きる為の糧^{かて}が得られんでも、己を仮死状態にしてでもその苦難を乗り切つてしまふのじゃ。そこ等に居る虫と同じ様に考えてはならぬぞ)

「お、おう、分かつた」

今の説明を無言で聞いていた浅野さんはこれからの対策を爺さんに尋ねた。

「まあそれは兎も角。どうするんだ？ そんな化け物を野放しになんて出来ないぞ」

（我等も、土蜘蛛つちぐもだった場合の事も考えて、用意だけはしてこの地にやってきたのだ。それで、今からその対処を説明しようと思う）

俺と浅野さんは身を乗り出して、鬼一爺さんの話に耳を敬そはてる

そして、それを聞き終えると俺達は土蜘蛛退治の準備に早速取り掛かるのだった

拾式ノ巻

《 拾式ノ巻 》 土蜘蛛 三

鬼一爺さんから土蜘蛛退治の説明を受けた俺と浅野さんは、各々が別の仕事を爺さんから与えられた。

まず、俺は自分の血と墨汁を混ぜ合わせた墨を作り、墨壺にあるスポンジ部分にその合わせた墨を注入する。そして、沢山持つてきたやや太目の白い裁縫糸に墨壺を使い染み込ませる。そんな作業を俺はしていた。

浅野さんは爺さんから、水と塩の割合が100:1の濃度の食塩水を5升と、重湯を茶碗5杯分程作ってくれと言われていた。良く分からないが、その食塩水の濃度に重湯を混ぜる事で土蜘蛛が寄って来るそうだ。

浅野さんに頼んだ内容は元々爺さんの計画にはなかったそうで、ただ、こういう展開になってしまったので、よりやり易くする為に浅野さんをお願いしたとの事だ。

因みに、その誘き寄せる餌を用意してなかった当初はどういう予定だったのか？ を俺は爺さんに問いたですとこんな答えが返ってきた。

（決まっておるじゃろう。お主が奴の餌として困になる以外ないじやろうが）と。

爺さんがあまりにも簡単に言い切ったので、俺は「ふざけんなよ、ジジイ」と憤慨した。

この後は予想通り爺さんも噛み付いてきて、俺との口喧嘩が始まるのだった。

浅野さんはその光景を見て少しあきれていたが……。

で、話を戻すと、それらの用意が終わったら、罌を仕掛けて夜まで待つというのが大まかな流れだ。

そして、罨を仕掛ける場所だが。

爺さんは先程の作業を終えた俺に『土中にいる土蜘蛛の放つ負の波動を探してくれ』と言ってきた。『幽現なる体』の霊感力ならば、土蜘蛛の凡その位置が分かるかもしれないからだそうだ。

土中にいる土蜘蛛の波動を探すのは俺もイマイチ自信がなかったが、とりあえずやる事にした。

俺はいつもと同じ様に目を閉じると、霊魂が放つ波動を敏感に感じる様に意識を集中する。

いつもと同じ様な霊魂の波動が山中に沢山あるので、東西南北の四方全てをゆつくりと調べていったのだった。

調べ始めてから30分程経過した頃だろうか。北の方角から、僅かではあるが何時もと違う負の波動を感じた。

俺は、これが土蜘蛛だ。とは流石に言えなかったが、一応、その方角を爺さんに報告した。

すると、爺さんは暫く思案顔でいたが意を決し、そこへ実際に行ってみる事になったのだった。

浅野さんとはここで一旦、別行動となり、俺と鬼一爺さんは北の方角に山を進んで行く。

北の方は木々が多く密集しており、かなり山中は薄暗く感じる。まさしく夜型の土蜘蛛の寝床としては最適な環境のような気がした。

そして、進むにつれて何となくだが、先程の何とも言えない波動に近づいているのが分かる。

俺はやや脅えながら周囲を見回していると、途中の木陰から奴の食べ残しであるミイラ化した獣の姿が目飛び込んできたのだった。死骸にビククリした俺は、その場で立ち止まって爺さんに言った。「き、鬼一爺さん。この死骸は奴の仕業だろ？　ならこの方角で間違いないよな。地面を良く見ると沢山の足跡が向こうに伸びてるし」（フム……そうじゃな。これ以上近づくと奴に我等の事が気付かれるやも知れぬ。とりあえず、場所は大体分かった。一旦戻ろうかの）

「ああ、俺の持つ魔除けの符に気付くからな。そうしよう」

俺の感知した方角で凡そ間違いないことを確認すると、またさっきの所にまで戻るのだった。

俺達が帰って来た頃には、もう浅野さんも戻ってきており、食塩水の入った青いポリ缶と重湯、そして、それらをあける桶の用意は終わっているようだ。

青いポリ缶に腰掛けた浅野さんは俺達の姿を見つけると、労いの言葉と共に成果を尋ねてきた。

「オウ、二人ともご苦労さん。で、どうだった。奴の足取りは掴めたか？」

「あ、どうもお疲れ様です。はい、奴の足跡は一応見つかりました。やはり、北の方角で間違いないですね」

「そうか。しかし、なんだな。兄ちゃんも色々大変だな。こんな奇妙な事に毎日毎日首を突っ込んでるなんて」

浅野さんは、俺にやや同情しながら微妙な表情で言う。

「ハア、そうなんですよ。俺、ついこの間まで普通に学生をしたたのに、何時の間にかX-FIELDに携わってるなんて……トホホ」

俺は今の状態を初めて人に同情されたので口が良く動くのだった。

この浅野さんは、口は悪いが話してみると意外といい人だ。まあ、こんな話し方になるのも職業上仕方ないのかも。

「まあ、そういうな。これが終わったら、今度飲みに連れてってやるよ。しかし、世の中には俺のしらねえ事がまだまだ沢山あるみてえだな。職業柄、奇妙な凶悪犯罪とかはたまに経験するが、化け物は流石に専門外だからな」

浅野さんは腕を組むと、首を上下に揺らしながら唸るように言った。

確かに浅野さんの言うとおりだ。俺自身もついこの間までは、幽霊や悪霊等といった単語を聞くものなら、「居る訳ねえだろ！」と笑い飛ばしてたくちだ。

だが、そんな浅野さんを見ていて、ここで俺にある疑問が湧いた。

こんな不思議な事が頻繁に起きてるのに何故誰も知らないのだから？ という疑問が……。

鬼一爺さんはその昔、京で陰陽師をしていた、と言っていた。という事は、今現在もそうだった事を生業なりわいとする人々が居るのだろうか？ 俺にこんな考えが突如浮かんでくる。

もしそうであるならば、これから先、そういった靈術を駆使して悪霊や物の怪に立ち向かう人々と、出会うことがある気がしたのだった。

と、俺がそんな事を考えてると、鬼一爺さんがこれからの指示を始めたのだ。

（さて、それでは必要な物も揃った事じゃ。先程の足跡があった所までいこうかの）

爺さんはそう言くと、先頭に立ち俺達に進むよう促したのだった。

俺と浅野さんは荷物を互いに持ち合いながら、先程の所にまで進んで行く。

その途中、浅野さんは俺に話しかけてくる。

「兄ちゃんの名前は日比野 涼一っていうんだっただか？」

「はい、そうですよ」

「じゃ、これからは涼一って呼ぶようにするよ。折角、名乗りあったんだ。何時までも『兄ちゃん』じゃなんだしな。ガハハハッ」

浅野さんはそう言くと豪快に笑い出した。

見た目と話し方、そして笑い方までこれほどピッタリと一致する人も珍しい。

「ハ、ハハ、……どうぞ。お好きなように」

俺は、そんな浅野さんを見て、若干引きながらそう答えた。

「しかし、涼一。あの爺さんは一体何者だあ？ 何となくだが、幽霊とはいえ凄い人物のような気がするぞ。妙なオーラを感じる」

浅野さんは先頭に行く爺さんを見ながら顎に手を当てそう言った。それを聞き、俺も爺さんの後ろ姿を見る。当然、向こう側が透け

て見えた。それだけだ。別に何も感じない。まあ、浅野さんには何か感じたのだろう。

そんな透ける爺さんを見つつ、俺は浅野さんに言う。

「その昔、京の都で陰陽師をしていたと言ってたけど」

「ホオ、陰陽師ねえ。一時、テレビでもブームになってたからな。」

その単語はエラクミールハーなものに感じるな」

俺はそれを聞き、「確かに」と呟く。

浅野さんは続ける。

「まあ、でも。あの爺さんなら陰陽師と言ってもあんまり違和感はないけどな。ガハハハハッ」

と、言う浅野さんはまた豪快に笑い出すのだった。

俺達がそんな話をしながら進んでいると、さっき来た獣の死骸の転がる場所に辿り着いた。

そして、鬼一爺さんも一旦ここで立ち止まり、俺達に振り向いた。（それでは、早速、用意を始めようかの。涼一は先程説明した通りに始めるのじゃ。そして、浅野殿は塩水に重湯を混ぜた後は、涼一を手伝ってやってくれぬか）

鬼一爺さんの号令で俺達は作業に取り掛かった。

俺は自分の隠れる為の結界を先ず作ることから始めた。

さっきの墨を染み込ませた糸を木々に張って直径4mほどの囲いを作り、その糸が通過した木々に霊籠の符を貼る。因みに糸は霊籠の符の『放』の術式部分に触れさせている。

それを終えると、今度は結界の外にある浅野さんが作った土蜘蛛の餌を入れた桶を中心に、糸で直径5m程の円を描く。

そして、その円の中に霊籠の符と同じ術式を糸と墨を使って地面に描いてゆくのだった。

因みにこれを『霊籠の陣』と呼ぶらしい。陣という名前に変わるのには単に規模の問題のようだ。

で、それが完成したら、当然、次は俺の霊力を籠めなければならぬ。ない為、いつもの要領で籠の術式から霊力を籠めるのだった。但し、

量は符に籠める何倍もだが。

丁度この作業をしていると、浅野さんが感嘆の声を上げた。

「へえ、なんとまあ。爺さんの話を聞いたときは眉唾もんかと思っただが、実際にしちまうと否定できねえなあ」

浅野さんは腕を組みながらこの光景を眺めている。実は、高度に練り上げられた霊力は、常人にも目視可能だ。だから浅野さんにも糸を伝う霊力の流れが見える。

そして、約20分程ぶつ続けて霊力を籠めていた俺は、終わると地面に腰を降ろし、大きく息を吐くのだった。

その後、ある程度呼吸が整えてから爺さんに次の指示を仰いだ。

「爺さん。とりあえず、言われたとおりにしたけど。この後はどうするんだ？」

（フム……では次じゃが。涼一、お主は土蜘蛛の位置が大体は分かるな？）

「ああ、大体はな。正確には無理だよ」

（いや、それでいいんじゃない。で、お主と浅野殿には土蜘蛛からやや離れた所にある周囲の木々に、魔除けの符を貼り付けていって欲しいんじゃない。土蜘蛛にはこの場所に来てもらわねば成らぬからの）

「そういうことか。分かったよ。こつちに誘き出すように反対側や左右の領域に貼っておけば良いんだろ？」

（まあ、そういう事じゃ。では頼むぞ。早くせねば日が暮れるからの）

俺と浅野さんは爺さんから言われた通りに、沢山用意してきた魔除けの符を張り始めた。

余談ではあるが、結構範囲が広い為、『しんどかった』というこ

とを付け加えておく。

なんとか夕暮れ前に、符を貼り終えることが出来た俺達は、結界の所に一旦戻り爺さんに報告した。

「爺さん、符は貼り終わってたぞ。これで終わりか？」

（ああ、とりあえず、これで準備は終わりじゃ。後は奴が此処に来

るのを待つだけじゃな。ところで浅野殿はどうする？ もう後は我等で対応できる。無理して危険な事に付き合わぬでも良いのだぞ」

浅野さんは爺さんの話を聞き、暫く考える。

そしてある決意をしたのか真剣な表情で言うのだった。

「俺は残ってこの結末を見させてもらう。俺は一応刑事だ。犯人は人ではないが、コイツは人を殺してる。だから最後を見届ける義務がある」

先程までとは打って変わり、真剣な表情でそう言った浅野さんは凄く凛々しく見えた。

やはり、長年刑事をやっているだけあって、ここぞという時の貫禄が俺には感じられたのだった。

（フム……そうか。わかった。お主のその心意気あっぱれじゃ。では涼一、お主が浅野殿を土蜘蛛の危険から守るのじゃ。今は魔除けの符は使えぬからの）

「了解……。でも、いいんですか浅野さん？ かなり危なそうな化け物ですけど」

「フン、俺も一応刑事だ。体は鍛えてあるからな。こう見えても柔道4段だ。まあ、あの化け物には意味がないかも知れんがな。ガハハハハッ」

俺がそう聞くと浅野さんはさっきの調子に戻り、また豪快に笑うのだった。

この人は結構肝っ玉が据わっているようだ。俺なら確実にトングラしてる。

そんな事を思いながら豪快に笑う浅野さんを俺は眺めていた。

また、これで準備も整ったので、夜に向けて俺達は静かに鋭気を養うのだった。

そして日が落ち、暗闇が周囲を支配する時間帯がやってきた。俺と浅野さんは結界の中で息を潜める。

因みにこの結界、霊籠の符に籠めた霊力を少しずつ系に流して、

結界内のみ悪霊や物の怪にわからないよう隠行効果があるそうだ。

しかし、同時に此方からの霊感知力も働かなくなる諸刃の結界だと鬼一爺さんが言っていた。

要するに俺がいくら意識を集中しても、近づく霊波動を感知できなくなるという事だ。まあ、こればかりは仕方ない事だとは思う。

これを聞いた俺は、何かを得る為には何かを捨てなければならぬ事の典型例の様に思えたのだった。

そして、初めて使う結界術なので結界の効果も、俺としては爺さんを信じるしかない訳である。

で、俺と浅野さんはやや硬い表情になりながら5m程先に見える桶に注視している。

俺は携帯の時計を確認する。今はPM8時頃だ。携帯は圏外になっている。こんな山の中だし当然だろう。

その時、フト思い出したことがあった。確か昨日、瑞希ちゃんが帰り際に「日比野さんを元気付ける為に明日メールしますね」と言っていたのを。

流石に今までそんな事を考える余裕など無かったのですっかり失念していた。

だが、思い出したところで圏外だ。メールセンターに接続も出来ない。まあいい、明日確認しよう。と結論し、また意識を土蜘蛛へと向かわせるのだった。

それから一時間が経過したころの事である。

周囲に異変が起きた。

先程まで聞こえていた梟等の夜行性の鳥の音が聞こえなくなり、異様な感じの静寂が辺りを包み込んでいたのだった。

今の俺には靈魂の波動は感じられないが、重苦しい雰囲気くらいは伝わってくる。

隣に居る浅野さんに目を向けると、浅野さんも同じで何か得体の知れない緊迫感を感じ取っているようだ。

そんな空気の中、目の前にある桶の周囲に熊の様な大きさで不気

味に蠢く物体が、俺の視界に入ってきたのだった。

暗い夜の森に慣れた俺の目にはそれがなんであるかハッキリと分かった。

間違いなく奴である。そう、浅野さんの持っている写真に写っていた抜け殻と同じ物が俺の前に居るのだった。

俺は生唾を飲み込む。そして隣の浅野さんを見る。

浅野さんも土蜘蛛を視界に捉えており、正面にいる熊の様な土蜘蛛を信じられない物を見るかのように、大きく目と口を広げて驚愕していたのだった。

そんな状況の中、俺は爺さんに指示された事柄を思い浮かべる。

（涼一、この結界で潜み、奴が桶の汁を啜り始めて暫くしたら、この糸にお主の霊力を送り込み地面に描かれた『靈籠の陣』を解放するのだ）

爺さんのその言葉を思い出し、俺は右手に持つその糸に目をやる。

この糸は靈籠の陣の『放』の術式に伸びている。早い話が、ダイナマイトの導火線の様なものだ。

そして、これに俺の霊力を送り込んで点火し、向こうに描かれた『靈籠の陣』の蓄積された霊力を解放して、土蜘蛛を葬る算段となっている。

それらの事をもう一度、頭に思い浮かべると、俺は起爆するタイミングを計るのだった。

土蜘蛛は今、桶の液体を啜ろうとしている。

その蜘蛛に似た醜悪な顔から、幾つかの触手の様な物が桶に伸びてゆく。

その姿は昔見た『風谷のナシカ』に出て来たオウムの触手のようである。

正直、キモイ。サブイボもんである。ただでさえ虫嫌いな俺には目を逸らしたくなるような光景だ。

俺がそんな土蜘蛛に嫌悪感を全開にしていると、奴はとうとう桶に触手をつけ啜り始めるのだった。

チューチューと吸い込んでいる音が聞こえてくる。

俺は土蜘蛛が完全に桶の液体に気を許しているように見えた。そう確信すると、隣の浅野さんと鬼一爺さんに目配せをする。

そして、糸に俺の霊力を流し込み霊籠の陣を発動させたのである。

【グキイイイイイイ】

土蜘蛛の悲鳴と共に、霊籠の陣から強烈な青白い光が円を描き発動する。

陣が発動した途端、土蜘蛛は身体を仰け反らせて八本の足をバタつかせていた。

相当、苦しいようである。

そんな苦しそうな土蜘蛛を見て、うまくいったと安心していた俺はホッと一息ついた。

だがしかし！

そう簡単に事は進まないのであった。

土蜘蛛がバタつかせた足が桶に命中しひっくり返ったのだ。

桶に残っていた液体が霊籠の陣の上に降り掛かって墨を薄め、一箇所だけ霊力が放たれない所ができてしまった。

生への執着を見せる土蜘蛛は当然そこへ飛び出して来る。

そして、術は不完全なまま終わってしまうのだった。

「な、なんで!？」

気が動転した俺は思わずそう呟いた。

陣から飛び出した土蜘蛛はグツタリしているように見える。

しかし、その土蜘蛛に直ぐ止めを刺さなければいけない俺は、次の行動が思い浮かばずただ焦っているだけだった。

その時！

【涼ー！　しっかりせいッ。今のうちに霊符を使って奴に攻撃するのじゃ。早くせねば奴は何処か雲隠れしてしまうぞ。お主しか奴に對抗する手段が無いんじゃないぞ】

「ハッ!?　そうだった」

鬼一爺さんのその言葉で我を取り戻した俺は、ジャケットのポケ

ツトから霊籠の符を取り出す。そして、結界を飛び出しグツタリした土蜘蛛に投げつけた。

土蜘蛛に命中はしたが、やはりそこ等へんの悪霊の様にはいかなかった。

まだ、ピンピンしている。おまけにグツタリしていたのも終わり、今度は俺に触手を伸ばし威嚇し始めるのだった。

今の攻撃によって土蜘蛛は俺を敵と認識したようだ。

そして、俺と土蜘蛛の睨み合いが始まった。

ここ最近の悪霊退治以上の緊迫感が俺を襲う。

なんといつでも相手は巨大な蜘蛛の化け物だ。ビビるなという方が無理がある。タランチュラなんかこれと比べれば超可愛いもんだ。しかも見れば見るほど醜い怪物で、ハッキリ言ってコイツに食われて死ぬのだけはゴメンだ！ そう思いたくなるくらいの物の怪である。

そんな恐怖感と戦いながら、俺は霊符を震える右手に持って攻撃のタイミングを窺う。

だが、そうやって対峙している内に、俺の手持ちの符でコイツを倒せるのだろうか？ という疑問が湧いた。

何故ならば、先程の攻撃があまり効いて無い様に見えるからである。

更に、霊符の枚数にも限りがある。残りは5枚程といったところだ。隠行結界のバッテリー代わりに何枚も使用した為だ。

俺の今使える術で一番威力のあるものは、毎朝修練を積んできた真言術『浄化の炎』だ。

しかし、この術を発現させる為の霊力を練るには、今の俺には最短で1分ばかりの時間がある。

霊圧を上げている最中に、突然飛び掛られては対処の仕様が無い。だが、少しづつ霊圧を上げながらチャンスを探い、飛び掛つてきた時は霊符で対処してかわすのは戦略として悪くは無い。

時間は掛かるがその戦法でいこうと考え、俺は土蜘蛛の出方を気

にしなから己の霊圧を徐々に上げてゆくのだった。

一方、結界の中では……。

鬼一法眼きいちほうげんと浅野は、土蜘蛛と涼一の対峙を緊迫した表情で息を殺し見守っていた。

だが、丁度その時、土蜘蛛は触手をくねらせて素早く前進し、涼一に襲い掛かってきた。

涼一は霊符を投げつけ牽制し、何とか離れて難を逃れる。

しかし、見ているものからすると非常に危なかく、ハラハラさせる光景であった。

そんな中、浅野が鬼一法眼きいちほうげんに話し掛ける。

「オイツ、爺さん。涼一の腰がえらい引けて見えるけど、大丈夫なのか？ こんな化け物とやりあうのは初めてなんだろ。違うか？」

（確かにそうじゃ。今まで対峙した中で、恐らく一番強い敵じゃなじゃが、涼一には今の手負いの土蜘蛛なら止めをさせる術を持っている。後は涼一がそれに気づくかじゃ）

「なら、俺達が涼一に少しでも援護してやると涼一も助かるだろ。どうだ？」

（いや、今は不味い。奴が他に仲間が居ると分かれば、多勢に無勢と判断し逃げてしまいかもしれぬ。奴は、幸いにも涼一一人と思っておる。じゃから襲い掛かるうとしておるのじゃからな）

「グツ、じゃあ俺達は、ただ見てるだけしか出来ないのか？あの調子じゃ何れやられちまうぜ」

鬼一法眼きいちほうげんは浅野の言葉を聞き暫く考える。

そして、涼一を見た。

二人がそう話をしている間にも土蜘蛛は襲い掛かり、涼一は懸命に霊符を投げつけかわして行く。

だが、今の土蜘蛛の触手攻撃で、涼一は肩を若干掠め負傷した。

痛みで顔をゆがめる涼一の痛々しい姿が二人の目に入ってくるのだった。

しかし、ここで鬼きいちほうげん一法眼は涼一が徐々に霊圧を上げていく事に気が付いた。

そこである事を閃いた鬼きいちほうげん一法眼は浅野に説明をする。

（浅野殿、恐らく涼一は己の使える一番強力な術で土蜘蛛を仕留めるつもりじゃ。その為の準備に入っておる。そこでお主に頼みたい事がある。我が合図したら、この木に貼り付けた符を石にくるみ、奴に投げつけて欲しいのじゃ）

浅野は結界のバッテリーの役目を果たしている霊符に目を向ける。「……ああ、分かった。で、どれでもいいのか？ 糸の張った全ての木に符が貼り付けてあるが」

（構わぬ。どれでも良い。符に籠められた霊力に多少は奴も反応するじゃろうからの。兎も角、我が合図したら結界をでて投げつけるのじゃ。浅野殿が奴の気を逸らせば、後は涼一が片付けてくれる。頼んだぞ）

その言葉を聞き、浅野は非常に真剣な表情になると結界の外にまた視線を戻すのであった。

イツテエ、クソツ。肩を掠ったか……。

気持ちわりい触手を伸ばしやがって。

けど、霊力は練り続けないとコイツを仕留められない。後もう少しだ。もう少しで術を発動させられる霊圧になる。

それまでは何とか逃げ回り、耐えるしかない。しかし、そうそう何時までも逃げられない。

霊符の残りは2枚だけだ。これが尽きればもう牽制しながら逃げるなんて出来ない。

落ち着け、落ち着くん。出来るものも出来なくなる

俺はそう自分に言い聞かせながら、目の前の土蜘蛛と己の霊力に意識を集中していた。

そして、霊圧が術に必要なくらいに上がった頃、土蜘蛛は俺目掛けて、今度は飛び掛ってきた。

の悪霊との戦いで、大分戦況を冷静に見れるようになったの。まだまだ未熟じゃが、それでも今回のお主の判断は間違っではおらぬぞ」「そうかい、ありがとうさん。でも、今回は初めて死ぬかもって思ったよ。フウウ」

俺はマジでそう思ったので、今の言葉を吐くと同時に緊張の糸が切れ地面にへたりこんだのだった。

そんな俺を見て浅野さんは言う。

「ご苦労さん、涼一。中々凄いものを見せてもらったよ。それに殺人犯の最後を見とれたから俺も安心して帰れるってもんだ。ガハハハハハッ」

浅野さんはそう言うつと最後は豪快に笑い出した。

しかし、今回、土蜘蛛を仕留められたのは浅野さんが隙を作ってくれたからだ。

残念ながら、自分ひとりの力ではない。そう思った俺は浅野さんに御礼を言った。

「浅野さん。あの時、隙を作ってくれたお陰で倒せたようなもんです。ありがとうございました」

「あん？ ああ、ありやこの爺さんの指示だ。俺の判断じゃない。礼なら爺さんに言つときな」

「いや、それでも。浅野さんがあそこまでしてくれなければ倒せませんでしたよ。それに、やはり刑事なだけあってここぞという時の行動は凄いですよ。俺が浅野さんの立場ならトンスラしてます。確実に」

俺がそう言うと、浅野さんはまた豪快に笑って言うのだった。

「そんなに褒めても何も出てこんぞ。俺からすりゃ、お前の方が良くやってると思うがな。まあいい。さて、これで終わりだろ。そろそろ山を降りようや。寒くてしょうがねえ」

「そうですね。俺も早くこんな所から立ち去りたいし。爺さん、もういいんだろ？」

（ああ、もう終わりじゃ。そろそろ下山しようかの）

と、まあ、こうして俺達は土蜘蛛退治を無事終えることができ、怪現象が続いたこの山にも平穏が訪れたのだった。

今回、この浅野さんと俺達は知り合ったわけだが。当然、この事は秘密にしてもらわないと俺が困る為、山を降りる途中、浅野さんにはこの事を強調しておいた。

浅野さんも、その辺の事情は薄々分かってたようで快い返事をしてもらえた。

そして、麓につくと浅野さんのパジエロに乗せてもらい、中津市の市街地で屋台ラーメンを浅野さんの奢りで食べさせてもらったのだった。結構旨かった。

その後、俺の住む学園町のアパートにまで送ってもらい、ここで浅野さんとはお別れしたのだった。

俺達は一応最後に、連絡先等を交換した。浅野さんが、「また訳の分からん事があつたら連絡する」と言った時は思わず苦笑いをしてしまったが……。

で、部屋に着いた俺は荷物を机の上に降ろすと、テレビをつけ暫く寛ぐ。

その時、丁度、携帯からメールの着信音が流れてきたのだった。

俺は携帯を手に取りメールを見る。

すると、そこにはこう書かれていた。

「日比野さん、オハヨーございます。昨日、予定は無いと聞いたので提案させていただきマース。今日は天気もいいので一緒に外に出ませんか？ 返事待ってマース。Am10時・着信……」

俺はこのメールをボソボソと朗読した後、部屋の時計を見た。今の時間はPM11時30分だ。

うーん不味いな。とりあえず、夜遅いけど連絡だけしておこう。

そう思った俺は、瑞希ちゃんの携帯に謝罪文と明日なら大丈夫と書いたメールを返信した。

その5分後。瑞希ちゃんから「じゃあ、明日また詳細をメールし

ます。今夜はオヤスミナサイ」と書かれたメールが届いた。

俺はそれを見た後、一息ついてからシャワーを浴びる。

シャワーを終えた俺は、冷蔵庫にあるビール350ml缶を空けると、グイッと飲み干して最後はゲップする。

その空き缶を缶専用のゴミ袋に入れると歯磨きをして寢床へと向かった。

そして、今日は色々と疲れた為、布団に横になるや否や意識が遠退きすぐに寝てしまっただった。

結構いい夢を見ながら

拾参ノ巻

《 拾参ノ巻 》 古いにしえの秘術

チュンチュン。

外からは小鳥の鳴き声が聞こえてくる。どうやらベランダの手摺に鳥が居るようだ。

その鳥の声で目を醒ますと、俺はやや薄暗い部屋のカーテンをあける。カーテンの向こう側は、丁度、昇り始めたお日様の眩い光がやや浅い角度から降り注いでいた。俺は眩しさの為、右手で日除けを作り目を細めると、窓を全開にして大きく背伸びをする。「フワアアア」と、ついでに欠伸も……。

冷たくて新鮮な空気と心地よい暖かさの光を浴びた俺は、部屋の時計に目をやる。今の時刻はAM6時だ。いつも起きるより若干遅い時間帯だが、それでも以前の俺ならばまだ夢の中の時間帯だ。

暫くそうやって外気に触れた俺は、寒くなってきたので窓を閉めると、洗面所に行つて顔を洗うのだった。

いつもならこの時間帯に、真言術の朝稽古から帰ってくる頃だが、今日は朝稽古は無い。

昨夜の土蜘蛛との戦いでかなり俺も疲労がある為、爺さんの計らいで今日の朝稽古は中止になったのだ。勿論、明日から通常メニューが開始される。

そんな久しぶりの静かな朝を迎えた俺は、いつに無く朝の時間の流れがゆっくりと感じられるのだった。

丁度その時、外を散歩に行つてた鬼一爺さんが窓から現れて俺に声をかけてきた。

（おお、おはよう、涼一。お目覚めじゃな。さて、早速で悪いが、てれびを点けてくれぬか）

「お、爺さん。おはようさん。ちょっと待っててくれ。もう洗い終わるからさ」

俺は濡れた顔をタオルで拭くと、折りたたみ式のローテーブル上にあるリモコンでテレビの電源をいれた。

テレビはニュース番組がやっており、丁度、今の時間帯は全国ニュースをしていた。

聞こえてくる内容は政治家の汚職関係や外交会談の話がメインのようだ。

霊体の鬼一爺さんが、テレビの前でジツクリと腰を下ろし、それらのニュースを見ている様子は非常に奇妙な光景に見える。

今の日本の政治や諸外国とのやり取りなど理解できるのだろうか？ と、そんな事を考えてみたが、どうでもいい事なのでとりあえずスルーする事にした。

そして、俺は朝食の準備に取り掛かる。

今日の献立は食パンとスクランブルエッグと焼きベーコン、そして、和風ドレッシングの野菜サラダ+いつものインスタントポタージュスープだ。

家の親が俺の作ったこの朝食風景を見ると、涙を流して感動するかも知れない。

明らかに超面倒くさがり屋の息子というイメージでいる筈だからな……特にオカンが。

そんな事を考えつつ、俺は早速、出来たばかりの朝食に手をつけるのだった。

それから3時間後。

俺は、ノートPCを立ち上げネットで情報収集をしていた。

最近はおカルト関係のサイトとかも結構見るようになり、色々とその類を物色している。

あまり参考になる様な物はないが、掲示板とかを見ていると意外に濃い連中が多いので、それなりに楽しませてもらっていた。

そうやってマウスをクリックしていると、机の上で充電中の携帯

が鳴る。

ディスプレイを見ると瑞希ちゃんからだ。

「おはよう瑞希ちゃん」

「あ、日比野さん、おはようございます。エへへ」

瑞希ちゃんは少し高い声だが、電話越しでも元気が伝わってくる。そんな瑞希ちゃんに、とりあえず昨日のことを謝っておいた。

「瑞希ちゃん、昨日はゴメンね。突然、用事が出来てね。電波の届かない所だったから気付かなかったんだ」

「いいですよ、もう。それじゃあ、今日は10時10分学園着の電車に乗っていくので、お出迎えお願いしまーす」

「了解。じゃあその頃に駅で待ってるよ」

「はい。それじゃあ、また後で……プツッ」

と、いう訳で俺の今日の予定は、瑞希ちゃんと昨日の埋め合わせの外出と相成った訳である。

電話を終えた俺は、PCの電源を落とすと、服を着替え始める。

今はもう10月の中旬に入っており、幾ら快晴といっても流石に寒い風も吹いてくるので、灰色のニットシャツに黒いジャケットと青いジーンズといった、割とシンプルな感じのやや厚めの着こなしで行く事にした。

そして、粗方の用意を終えると、俺は時計を確認する。今は9時40分。あと30分で瑞希ちゃんは駅につく。

昨日のすっぱかした罪悪感から「今日は先に行って待ってるか」という結論を俺は下し、少し早いが出かける事にしたのだった。

アパートを出てから15分程で学園の駅についた俺は、駅の改札付近にあるベンチに腰掛けて暫くの間待つ事にした。

因みに、鬼一爺さんも同行している。今の世の男女の逢引を見てみたいなどと訳の分からない事を言ってたが……。

まあ、そんな事は置いておいて。俺はそのベンチから周囲を見回す。

時刻も10時頃という事もあり、駅には鉄道を利用する人々で混

雑し始めている。

また、学園町の駅は最近改修工事をしたばかりなので、よく見ると所々新しくなっていた。

いつもはこんな風にベンチに座ってゆっくり見る事など無いせい
か、意外なところが改修されているのを見過ごしてしまつた。

例えば、窓枠やスピーカー、そして階段の手摺等、こういったあまり気にしない所も新しく生まれ変わっているのだった。

まあ、当然といえば当然であるが、色々細かい所も工事しているのだな。と感慨深く俺はそれらを見つめていた。

そんな風にベンチから見える景色を見つめていると瑞希ちゃんの姿が視界に入ってきた。

今日の瑞希ちゃんは、上が白いパーカータイプのジャケットで、下は青っぽいチエツクのスカートと膝上まである黒いニーソックスという姿である。

中学生の瑞希ちゃんに良く似合う可愛らしい着こなした。あと、肩にかけて薄いピンク色の可愛らしいバッグが印象的だった。

その瑞希ちゃんはベンチに座る俺を見つけると、大きく右手を振り笑顔で此方に小走りで近寄ってきた。

走る振動で瑞希ちゃんのサイドテールに纏めた髪が不規則に揺れる。

そして、勢い良く俺の前に来ると、少し息を整えてから俺に話しかけるのだった。

「日比野さん。待ちましたか？」

「いや、そんなに待ってないよ。俺もさっき来たところだしね。ところで、今日は何処行くの？」

「エヘヘ。今日は私に付き合ってくれますもんね。昨日の謝罪メールにもそう書いてありましたしい」

瑞希ちゃんはそう言つと悪戯っぽく小悪魔のような微笑を俺に向ける。

俺は昨夜のメールにそういえばそんな事書いたかな？ などと思

いながら、やや引き気味に瑞希ちゃんに言った。

「ハ、ハハッ。お、お手柔らかにね。瑞希ちゃん」

「エヘヘッ、それじゃあ、行きましようか」

瑞希ちゃんは可愛らしい笑顔を作ると俺の右手を取り、やや高めのテンションで歩き始める。

俺は「まあいいか」と思いながら、瑞希ちゃんの進む方向に従い、学園町の中心街へと進むのだった。

一方その頃、中津市 霧守高原の山中にて……。

涼一達が土蜘蛛を退治した翌日の朝、3人の男女がこの山に登っていた。

男二人と女一人という年齢もバラバラの少し変わった三人組である。

男の内、一人は初老といった感じの年齢で、口と顎に白髪交じりの髭を蓄えており、白髪が7割を占める頭髪は短く刈り上げられている。

背は高く、やや硬い厳格な顔つきをしており、幾多の経験をつんだ猛者を思わせる風貌である。また、この中で一番の年長者であった。

もう一人の男は、凡そ10代後半から20代前半といった年齢で、精悍な顔つきではあるが、日本男児といった感じの凛々しい眉毛をした若い男だ。

背は凡そ180cm程でその太い首は体型が分からずとも鍛えられているのが良く分かる。

そして、女性の方はこの中では一番若く、恐らく歳は10代半ば程といった感じの背はやや低めの少女である。

髪を左右に纏めたツインテールが特徴で、可愛らしい顔つきではあるが、やや鋭い目つきをしており、一見すると気の強そうな雰囲気纏う少女である。

しかし、この3人は歳はバラバラであるが、唯一つ共通している事があった。

服装が3人共、神社の神主や巫女が着る装束を纏っているのだ。この山中に似つかわしくないその姿は、普通の人間が見れば一種異様な光景であった。

その3人はその姿で黙々と、山を北の方向に進んで行く。

そして、熊を一回り大きくした黒い物体が転がる場所に到着したのだった。勿論、この黒い物体は涼一達が昨晚仕留めた土蜘蛛の亡骸である。

三人は土蜘蛛の亡骸とその周囲を見回した後、亡骸を囲んで話を始めた。

「お父様、この黒く焦げた物はもしかして……」と、少女が年長者の男に向かい言う。

「ウム、どうやら、我等より先にこの地に来て妖怪を退治した者が居る様だな。しかも、その者は私の知る情報と照らし合わせると、どうやらこの地に住まう者かも知れぬ」

「しかし、父上。まだ幼虫とはいえ、この古き言い伝えにある凶悪な妖怪を倒すほどの術者が、このような地にいるのでしょうか？」
と若い男が初老の男に言う。

話の感じからすると、どうやらこの3人は親子の様である。

若い男の問いかけに、初老の男は顎に右手をあてて何やら考え込む。

そして、やや間を空けてから口を開いた、

「居るのだろうな。しかも、どうやら唯の術者ではない様だ。一樹かずき、
そして沙耶香さやか。其処の地面を見てみよ。それと向こうの結界もだ」

一樹かずきに沙耶香と呼ばれたこの若い男と少女は、初老の男に促された方向を見る。

そして、目を見開くのだった。

それを見るや、少女は複雑な表情で初老の男に言う。

「お、お父様。こんな術式の法陣は見た事ありません。でも……こ

の術式は何処と無く、私達の使う術と少し似ているような気がするのですが」

「父上は、どうお考えなのですか？ あそこの結界の木々に貼り付けられた霊符も、私達が使うものとは違い、見た事ありません。沙耶香さやかが言うように何処と無く似てはいますが」

一樹かずきは黒い糸が張られた結界の方向を見ながら言う。

初老の男は、目を瞑り二人の意見を聞いた後、ゆっくりとしたテンポで話し始めた。

「お前達は、この術式の一端を見た事がある筈だ。我等、道摩家だいまけに伝わる焼け残った秘法伝書の切れ端に、一部分だけだがこれと同じ術式が書かれている。恐らくこの術者は、現在では失伝した古の秘法いしえに通じた者だ。そして、私の知る情報と照らし合わせると、どうやらこの地に住まう者かも知れぬ」

初老の男の話に耳を傾けていた二人は、目を見開き、結界と地面に描かれた霊籠の陣を注視する。

そして、一樹は言う。

「父上、まさかそのような術者がこの地にいるのですか？ 成らば、その術者を何とかして探し出し、失われた秘術を手に入れる事を考えなければいけないのでは」

「その通りです、お兄様。我が道摩家だいまけが失った古の秘術を取り戻せるチャンスなのです。これは」

沙耶香は、若干興奮した口調で一樹に同調する。

しかし、初老の男は興奮する二人を鎮めるように穏やかに言う。

「まあ、そう逸はやるな二人とも。あくまでもその可能性があるというだけだ。少し落ち着きなさい」

「あ、す、すいません。お父様」

父に諭された二人は、やや興奮した高ぶる感情を徐々に抑えてゆく。

そこで一樹が父に問いかけた。

「父上、先程『私の知る情報と照らし合わせると、どうやらこの地

に住まう者かも知れぬ』と申されましたが、情報とは一体どのような事なので？」

「そうだな、まずはそこから話そう。お前達も知ってると思うが。今回、妖怪退治の依頼を受けた我等、道摩家が所属する修祓結社・『鎮守の森』からの情報だ。それによると、ここ一ヶ月程の事らしいのだが、このF県 高天智市において、修祓依頼があつた結構な霊障件数を正体不明の何者かが、知らず知らずのうちに解決しているそう。恐らく、それと照らし合わせても今回の件も無関係では無いだろうと私は思う」

《注・修祓と言つて御祓いの別名です》

「修祓依頼を横取りするなんて、その人は何を考えてるのかしら。『鎮守の森』に喧嘩を売つてるようにしか見えせんわ。どうせ、お金に目がくらんでそんな事してるのでしょうけど」

沙耶香はやや強い口調でそういい終えると、左右に馬の尻尾の様に垂らした髪を弄りながら、「フンツ」と悪態をつく。

そんな沙耶香を苦笑いで見ていたこの父親は、ゆっくりと諭すように話し始める。

「沙耶香、知らぬ人をそんな風に言つてはいけない。それに、この修祓を行つている者は無償でやつている様だし、そんな悪い人では無い様に思うがな。兎も角、このF県に失われた秘術を使える者がいるかもしれないという事だ。術を現在に蘇らせたのか、それとも古来から伝承してきたのかは知らんがな……」

男は木の葉の間から差し込んでくる光を見ながら、何かに思いを馳せるように穏やかにそう話すのだった。

そして、何かを暫く考えた後、この男は鋭い目になり続ける。

「二人とも、今、話した事はすべて黙つておいてくれ。特に『鎮守の森』とそれに属する修祓者達には知られないようにな」

「はい、勿論、分かつております。父上」と一樹。

「お父様、ご心配なさらずに。こんな大事な事は誰にも言いませんわ」と沙耶香。

二人は強い決意を胸にそう誓うのだった。

そんな二人の表情と答えに満足したこの男は、これからの作業を二人に説明し始めた。

「さて、一応、後始末くらいは我等がしておくか。一樹はその死骸を土に埋めるのだ。その後、結界や法陣を撤去せよ。それと、靈符に関しては持ち帰るのだ。沙耶香と私は周囲の森を見回ってくる。恐らく此处に妖怪を誘き寄せた罫を仕掛けてる筈だからな。では頼んだぞ」

「分かりました。痕跡は消しておきます。父上達もお気をつけて。目的の妖怪は居らぬかも知れませんが、山には冬眠前の熊等がおりますので獣にも注意してください」

「ああ、分かっておる。心配するな。さて、では行こうか、沙耶香」「はい、お父様」

指示を終えた男は、沙耶香と共に更に奥の北方へと進んで歩き始めた。

今の時刻はAM10時半頃、太陽の光が遮られてはいるものの、森林に照らしつける熱のお陰で、丁度、森の中の気温も少しではあるが上がり始めていた。

二人の歩く山中には光が殆ど入ってこないが、長い間山中にいる為、それだけは二人とも肌身にかけて分かるのだった。

そんな森の中を移動する途中、歩き始めてから何やら考え事をしていた沙耶香が意を決し、父に話しかけた。

「お父様、先程の事ですが。確か、このF県 高天智市には私の通う女子学院と同系列である高天智聖承女子学院があったと思います。もし何でしたら其処に私が編入して、この地で、その術者の事を調べるといふのはどうでしょう?」

「ン? そんなに先程の内容が気になるのか?」

男はそんな提案を出す娘に、何とも言えない複雑な表情を向ける。「はい、だって失われた道摩家の歴史の一端を取り戻せるかも知れないのですよ。私は道摩家の事を思いそう言っているのです」

「ウム。それは私も考えておる。沙耶香、お前も知っていよう。遙か昔、道摩家は陰陽術の大家として存在していたが、凡そ700年前に始まった南北朝の動乱に巻き込まれ、大事な道摩家当主とその跡取り、また、秘法伝書や術具等の大半が炎によって灰となって失ってしまった。その後、残った者達でなんとか再興をしようとしたが、残念ながら術法に関しては焼け残った秘法伝書以外手掛かりが無い為、どうしようも無かったのだ。そして、術の失われた部分は残った者達が独自に編み出した術式を代用して今に至るといふ訳だ。これについては沙耶香も良く知っていよう。だが、失われているのは我等、道摩家だけではない。安倍清明の流れを汲む土御門の者や陰陽道宗家である賀茂家でも、数々の歴史の動乱において嘗ての秘術の大半を失伝してしまっているのが現状だ。まあ、土御門家の場合は安倍清明が特定の秘術だけ後世に伝えなかつたのでは、とは言われてはいるがな。兎も角、そういう裏事情が渦巻いているだけに我等は慎重に事を運ばねばならん。隠密に調べねば、そういった輩が湧いて来て横槍が入る可能性もあるのだよ。しかし、沙耶香がこの地で勉学に励むと言う手は悪い手ではないがな。それに、あそこの理事長とは知り合いだしな。一応、考えておこう。とだけ言っておく」

男は今の現状と、それが周囲に漏れた場合のデメリットを沙耶香に説明すると、優しく微笑み娘の頭を撫でるのだった。

沙耶香も父の話に耳を傾け、今の事情を納得したようであった。「分かりました。今結論を急ぐ事でも無いですしね。ン？ お父様、あの木々に貼り付けられた霊符のような物は何でしょうか？」

沙耶香は自分達が進む方向の左側にある一帯の木々に、白い霊符が貼られているのを見つけ、父にそれを見るよう指を差して促す。

男もそれを聞くと、一旦立ち止まり、沙耶香の指差す方向を目で追った。

「そこそこ強い霊波動を感じるな。とりあえず行って見よう」

二人は霊符の張られた木々の所へと進んで行く。

そして、辿り着くなり、沙耶香は驚きの表情で目を見開いた。

「お父様、何なのですか。この強い霊波を出す符は……。こんな霊波を出していたらそうそう悪霊など寄ってこれませんわ」

沙耶香はそう言うのと霊符を手に取りまじまじと見つめる。

何かを閃いたのか、男は娘の意見に頷きながら自分の推測を説明しだした。

「沙耶香、その通りかもしれない。これは恐らく、妖怪をあの場合に向かわせる為に貼られた霊符だ。私もここまで強い波動を放つ符は始めてみる。そして、これもまた我等の知らぬ術式が書かれておる。……沙耶香、少しばかり時間が掛かりそうだ。すまんな。その目的で貼った符なら広い範囲で貼られてるかも知れない。早く回収に取り掛かるぞ」

男は顎に手を当てそう言うのと「パンツ」と手を叩き、気合を入れるような仕草をする。

沙耶香もそれを見て気を引き締めると、笑顔で言った。

「はい、お父様。誰かに先を越されてはたまりませんものね。頑張っ
って回収しましょう」

そして、二人は霊符の回収作業に取り掛かるのだった。

一方、涼一達は。

俺は今、瑞希ちゃんと一緒に夕暮れの高天智中央公園にいた。

シヨツピングセンターや映画館等、色々と学園町内を歩き回って
疲れた為、公園のベンチに座って休憩をしている所だ。

公園には、沢山の人が老若男女問わずおり、皆も憩いの一時ひとときをこの夕暮れの見える空間で堪能しているように見える。当然、堪能しているのは生きた者ばかりじゃないが……。

そんな光景を、ベンチの背もたれに寄りかかりながら見て大きく息を吐くと、瑞希ちゃんが俺に話しかけてきた。

「日比野さん。今日はありがとうございました。それと、一緒にい

て分かったんですけど、日比野さんといると楽しいです。エヘッ」
瑞希ちゃんはそう言っていると屈託の無い笑顔を俺に向ける。

「おお、そうかい。楽しんでもらえたなら何よりだよ。ハハハ」
夕焼けの影響かも知れないが、その表情はいつもの瑞希ちゃんよりも幾分か大人っぽく見えたのだった。

まあ、気のせいだ。と思い、そんな瑞希ちゃんをみていると、俺は6つ下の妹の事を思い出した。

歳は瑞希ちゃんの一つ下になるので、二人は良く似た体型をしている。性格は家の妹と正反対だが。

俺がそんな事を考えていると、瑞希ちゃんは不思議に思ったのか、人差し指を唇にあて問いかけてきた。

「日比野さんどうしたんですか？ 変な顔して」

「へ、変な顔。そんな顔してた俺？」と、やや慌てる俺。

「ムウ、してましたあ。何考えてたのか気になるう」と、やや膨れっ面になりながら瑞希ちゃんは言った。

「ハハツ、まあいいか。実は俺、妹がいるんだよ。丁度、瑞希ちゃんの一つ下になるのかな。で、正反対の性格だなあと思ってね。感慨深く思っ見てたんだよ」

俺の話聞き終わると瑞希ちゃんは好奇心満載の表情で尋ねてきた。

「エッ、そうなんですか？ 日比野さんて、妹さんがいたんだ。それで、何て名前なんですか？」

「名前は日比野 美涼みすずって言うんだけど、これが男の様な性格の妹で、俺の事兄貴って呼ぶんだよ。結構突っかかってくる事多いしね。ハハハツ、瑞希ちゃんの様なお淑やかな面も持ってくると良いのにね」

「へえ、美涼みすずちゃんて言うんですか。話を聞いていると楽しそうな兄弟ですね。でも、いいなあそういうの。私、一人っ子だからそういう経験がないですよ。羨ましいです」

瑞希ちゃんは今までの事を振り返ってるのか、時折、空を見上げ

ながら話していた。

「もし機会があれば会わせて上げるよ。歳も近いから話は合うんじゃないかな」

「エヘヘッ、その時はお願いしますね。あ、それと話は変わるんですけど、日比野さんて何処に住んでるのですか？ 確か一人暮らしだとは聞いたんですけど」

「ヘッ、俺の住んでる所？ この公園から歩いて10分か15分位の所だよ。それがどうかした？」

俺がそう瑞希ちゃんに問いかけると、瑞希ちゃんはモジモジしながら言い出した。

「あのお。私、日比野さんがどんな所に住んでるのか気になるなあ。教えてくれませんか？ それに、電話連絡以外にも連絡手段が欲しいですしい……」

「まあ、減るもんでもないし。別にいいか。でも、瑞希ちゃんの電車の時間もあるから、行くんなら早めに行かないと」

「はい、それじゃ早速行きましょう。エヘッ私、日比野さんがどんな部屋に住んでるのか前から気になってたんですよ。日比野さんは私の部屋を見てるのに、私が知らないなんて不公平です」

瑞希ちゃんは何を想像してるのか妙にテンションが高い。

そんな瑞希ちゃんを見ているうちに、俺は簡単に返事した事の迂闊さを後悔し始めていた。

だって男の子だもん、スケベDVDとかエロ動画は多少は見るもん。

そして、瑞希ちゃんに見せられないような、卑猥な物が無いかどうかを先に入ってチェックしようと思俺は自分に言い聞かせ、夕暮れ時の学園町を俺は瑞希ちゃんと共に歩いて行くのだった。

で、それから約15分後。

俺達は白い二階建ての横に長い築10年程の建造物の前にいた。要するに俺の住むアパートだ。

俺は建物の横にある階段を登り二階に上がると、部屋の前で大きく深呼吸してから瑞希ちゃんに言った。

「み、瑞希ちゃん。ちょっとだけ待って貰えるかな。少し散らかってるかもしれないからね。八八八ッ直ぐ戻るよ」

俺は瑞希ちゃんの返事を聞く前に恐ろしいスピードで扉の鍵を開け中に入ると、テーブルの下にあるDVD関連の入った箱を漁る。

すると、出てくるわ出てくるわ。『中し女子高生10連発+』とか『絶頂・病みつき超特急』等、はつきりいって「何なの一体？このタイトルは」といった作品が箱の中から出てくる。

その作業をしている時、後ろで鬼一爺さんが（ほほうッ）と顎に手を当て何やら感心してたが、今はほっとく事にする。

俺はそれらをクローゼットの奥に収めると、額の汗を右腕で拭ってから、玄関の扉を開いたのだった。

「やあ、お待たせ。然程は汚れてなかつたから大丈夫だったよ。どうぞ、入って」

俺は不自然ではあるが、爽やかな感じで瑞希ちゃんに言う。

「へへへッ、楽しみです。それじゃあ失礼しまーす」

瑞希ちゃんはそういつて玄関で靴を脱ぐと、周囲を物珍しそうに眺めていた。

そして、テーブルの前の座布団に座り荷物を横に置くと、俺に話しかけてきた。

「へえ、日比野さんの部屋って結構片付いてるんですね。それにこの建物まだ新しいので床のフローリングも綺麗ですし、狭いけど良いんじゃないですか」

「瑞希ちゃんて、家のオカンと同じ事言うね。俺の親も此処に来て直ぐ言った言葉がそれなんだよ」

「そうなんですか？へへッ。でも、もう少し飾りつけのある部屋にしたらどうですか？なんかスッキリし過ぎて殺伐とした感じがしますよ」

瑞希ちゃんにそう言われ、俺も周囲を見回す。

まあ確かに飾りつけは無い。

というか必要な物以外置いてないので当然だ。

「まあね。あまり余計な物は置かないようにしてるからなあ。それに、大学を出たら此処にずっと居る訳でもないしね」

「アツ、そつか。今だけなんですもんね。それじゃあ、余計な物を置いておくのも躊躇しますね。納得しました」

瑞希ちゃんはそう言うのと頭をポリポリと人差し指で掻き出した。

「そつだ。瑞希ちゃんなんか飲む？ オレンジジュースとスポーツ飲料程度しか置いてないけど」

「それじゃあ、オレンジジュースをお願いします」

「了解」

俺はそう返事をする、キッチンの下にあるワンドアの冷蔵庫から100%のオレンジジュースを取り出しコップに注ぐ。

そして、瑞希ちゃんのいるテーブルの前に運んだ。

「アツすいません。いただきまーす」

それから暫く他愛の無い話を俺達はしていた。

しかしその会話中に、瑞希ちゃんがややもつたいぶつた仕草をする事があった。

不思議に思った俺は何だろう？ と思い尋ねてみると、意を決し聞いてくるのだった。

「日比野さん……前から気になっていた事があるんですけど。いいですか？」

俺は一体なんだろう？ と思ったが、そんな事を考えても分るわけがないので「いいよ」と返事をした。

「あのお、話したくなければ別にいいんですけど。日比野さんてこの間の様な霊能力とか誰に習ったんですか？ 秘密にしているようなので、嫌なら別にいいですけど」

なんか聞きづらそうに話しているのは伝わってくる。

どうしたもんか？ と考えていると、俺の斜め前の宙に浮く爺さ

んと目が合った。

爺さんは頷いている。話してもいい、という事なんだろうか。

俺が怪訝な表情で明後日の方向を見ているので、瑞希ちゃんも釣られて其処を眺めていた。

そして言っ。

「あのおく、其処に何かあるんですか？」

この子は俺がオカルトに関わっているのを初めて知った子だが、鬼一爺さんを見ると流石に驚くかもしれない。どうしようと考えていると、爺さんがジエスチャーで「言ったれ、言ったれ」とやっていた。一体、どういうつもりなんだこの爺さんは。

などと思っていたが、散々悩んだ末、意を決して話してみる事にしたのだった。

そのかわり、前もって念押しはしておかないといけないが……。

「あのお、瑞希ちゃん。言っても良いけど、この事は黙っていて欲しい。前回の除霊の事もただけだね。もう一度念押しする為に聞くけど、どう？」

「大丈夫です。絶対に誰にも言いません。私と日比野さんだけの秘密なんです」

瑞希ちゃんはそう言っ目^めを輝かせる。

何かを期待してるようだが、却って驚かせる事になる予定なので、それも念押ししておいた。

「あのお、もう一つあるんだ。今回の少しばかりビビると思うから覚悟しておいてね。いい？」

「え、お、恐ろしい事でも起きるんですか？」

瑞希ちゃんは少し肩を萎縮して脅えた様に尋ねてくる。

「まあ、人によると思う、多分。それに最初だけだと思うしね」

浅野さんの時もそうだったが、人間と言っのは受け入れてしまえば、後は然程問題ないような気がしたのだった。

「そうなんですか。分かりました。私頑張ります！」

「ま、まあ、あまり頑張ってもしょうがないんだけど。まあいいや。

それじゃ、後ろを向いてくれるかい」

瑞希ちゃんはその音を聞き恐る恐る後ろを向く。

俺はそれを確認すると、爺さんに視線を移し頷くのがあった。

爺さんはそれを合図と受け、霊体の霊圧をあげる。

そして、準備OKのサインをだした。

「瑞希ちゃん。もういいよお、ゆっくり振り向いてね。刺激が強いかもしれないから」

俺は一体どんな反応するんだろう？　と思っただが、凄く意外な反応を瑞希ちゃんはしたのだった。

「あれ？　お爺さん何時の間にか此処に来たんですか？」

「瑞希ちゃん。この爺さん身体透けてるよね？　どう思う？」

「本当だ。透けてる。という事は幽霊なんですね」　とアッサリ受け入れたのだった。

俺はそんな意外な反応をする瑞希ちゃんを驚きながら尋ねた。

「瑞希ちゃん。こ、怖くないの？」

「いいえ、別に。だってこの間の悪霊と比べたら普通のお爺さんでしょ。それに怖い感じなんてしなくていいです」

（フオフオフオ。この娘はお主よりも肝が据わっておるわ。お主が初めて我を見たときは、慌てふためいて逃げ出したからの）

「わわッ喋った。お爺ちゃん喋れるんだね。スゴイ」

瑞希ちゃんは喋る鬼一爺さんを見ながら感動していた。

そして、そのあまりの違和感の無さに観念して俺は話すのだった。

「え〜と……このお方が、私の霊術の師匠である鬼一きいちほつげん法眼氏ほつげんで在らせられます。以後、お見知りおきを」

「お爺ちゃんが日比野さんを鍛えてるんですね。分かりました。だって不思議だったんですよ。さっきの話を聞いてても家族の人は普通の様だし」

「瑞希ちゃんて、結構鋭いね。まあ、そういう訳だよ。良かったな爺さん。俺以外の話し相手が出来て」

（フオフオフオ、まあそういう訳じゃ娘よ。これから宜しく頼む

ぞい)

「あ、此方こそ。お爺ちゃん宜しくね」

鬼一爺さんは俺以外の話し相手が出来て喜んでるようだ。

俺はそんな光景を眺めると、「ふう」と一息入れ肩の力を抜いた。

そして、そうやってリラックスしていると、鬼一爺さんが突然とんでもない事を言い出すのだった。

(ところで、涼一。先程の『絶頂・病みつき超特急』ちゅうのは何じゃ?)

俺は体温が3度ばかり下がったような気がした。

「何言つてんだよジジイ。ボケたんじゃないのか? 八、八八、八

八八八」

「何ですか? そのなんとか超特急って」

瑞希ちゃんも身体を乗り出して聞いてくる。

「いや、何でもないんだよ。ステイブン・セガールが超特急の列車で格闘するのが病みつきになって絶頂に達する、つまらない映画の話さ。アハツアハツアハハハハツ」

俺は適当にでまかせを言う。

「え、何か気になりますねえ」

焦りまくった俺は、何か話の逸らすネタを探すと、丁度ブラウン管テレビの上の時計に目がいく。

そして、実行した。

「いや、気にしちゃ駄目だよ。っていうか瑞希ちゃんもう電車の時間だよ?」

「あつ本当だ。でも、気になるなあ。今度来た時はちゃんと教えてくださいよ」

(フオフオフォ、涼一、お主なかなか面白いの)

「このジジイ……」

と、まあ、俺は半分涙目になりながらこの修羅場を切り抜けると、駅まで瑞希ちゃんを送って行って今日の予定は終了した。

そして、帰ってきて部屋に着くなり床に突っ伏すと、暫くその場で屍と化していたのだった

拾四ノ巻

《 拾四ノ巻 》 剣道愛好会 一

土蜘蛛退治から4日後。

今日予定していた講義を終えた俺は、高天大の正門へと向かい歩いていた。

今の時間はPM4時半といったところだ。最近は何も短くなってきた為、この時間帯になるとやや寂しい感じの風景に変わる。

通路の周囲に植樹された木々も、以前の青々としたものから茶色っぽい葉へと変わり、何枚かは地面に散っていた。

更に、地面に目をやるとそれらの茶色い葉が時折吹く旋風つむじかぜに舞い、螺旋模様を空中に描いている。

俺はそれらの情景を眺めながら秋の深まりを感じると共に何処か切ない気分になるのだった。

しかし。役目を終えた木の葉がただ散ってゆくだけなのを憂いて、心の奥底で儂く思っていた……などと詩人のような事を考えていた訳ではなく。それは、単純に空の暗さと寒さからくるものだった。

そんな風に思いながら俺は一人黙々とアパートへ帰る為に進んで行く。

因みにヤマツチは、これからバイトがあるとかで先にもう帰ってしまった。

一人寂しく薄暗い秋の夕暮れ時の中をトボトボと歩いていると、突然、俺を呼ぶ声が無処かから聞こえてくるのだった。

「君、日比野君だよな？」

それは男の声だった。妙に遠慮した感じではあるが。

俺はその声のした方向へ振り向く。

すると、其処には俺と同じくらいの背丈で、眼鏡を掛けた男の人

が立っていた。

やや癖のある短くカットした髪は、整髪料で跳ねさせて全体的にツンツンした感じになっている。

また、茶色のジャケットに黒いパンツといった出で立ちで、体型は結構スマートな感じだ。

しかし、何と言つてもこの人の特徴は、顔に掛けた金縁の眼鏡だろう。この薄暗い中においても其処だけが異様に存在感を出していたからだ。

そういつた眼鏡の影響もあつてか、この男の人の第一印象は凄くインテリな感じに俺には映つたのだった。

そして、パツと見た感じは年上のようなのである。

俺は『先輩だろうか?』と思いつつ、その男の人に返事をした。

「はい、そうですか……」

俺が肯定する返事を聞くや否や、この男の人は口元を綻ばせ、先程よりも幾分か柔らかい表情で話し始めた。

「オオ、良かった。いや、突然呼び止めてすまないね。ハハハハッ。実は、君に用があつて声を掛けたんだよ」

用もないのに呼び止める奴がいたら見てみたいわ! などと思いつつも、俺はやや愛想笑いを作りながら丁寧に尋ねる。

「ハハッ、えくと、初めてお会いしますが、どちら様でしょうか?」

「お、そうだったそうだった。スマンね。名乗るのを忘れてたよ。

えくと、俺の名前は西田茂樹にしだしげきっていうんだけど。日比野君てさあ、この間、確か家の弟と中津市の方にキャンプに行ったよな?」

俺はそれを聞き、9月上旬に行ったキャンプの事と、その時一緒にだった西田君の事も同時に思い出す。

「ああ、あの西田君のお兄さんですか? すいません。そう言えば高天大に通っているって、確かその時、西田君から聞きました」

「そうそう。ハハハッ。それでね、その時に弟から剣道愛好会の事について聴かなかったかい? 今日はその返事を聞きたくてね。

呼び止めさせて貰ったんだよ。ゴメンね、帰る途中に」

西田君のお兄さんにそう言われ、俺は当時の事を思い浮かべる。

同年の高天大の子がキャンプに来るって兄貴に言ったら、剣道愛好会に誘ってみてくれってお願いされたんだよ

そして、思い出した。確かにあのキャンプの時に、西田君からその話が出ていたのを……。

その話をすっかり忘れてしまっていた俺は、後頭部を右手で掻きながら愛想笑いを浮かべて誤魔化し、曖昧な返事をした。

「あはは、いやあ。そうだったのですか。へえ、なるほど」

「それで、どうだろうか？ 一度やってみない、剣道を。心身鍛えられるからいいと思うよ。それに見たところ、まだ何処にもサークルに入っていないんだろう？」

「え……まあ、そのお、え」と。何と言いますか。確かに入っておりませんが。え」と

俺はややシドロモドロになりながら視線を明後日の方向に向かわせ、何とか断る口実を考えた。

そんな俺をニコニコと眺めながら、西田君のお兄さんは続ける。

「そんなに萎縮しなくていいよ。結構、楽しい所だからさ。面白い奴や可愛い女の子もいるよ。どうだい？ 折角の学生生活だ。そういうた人間達とコミュニケーションを深めるのも大事だと思うよ」

「え」と、すいません。俺、すっかりその話の事忘れてまして。そのお、もう少し考えさせてもらってもいいですか？」

とりあえず、この場だけでもなんとかやり過ごそうと考えた俺は、一番無難な妥協案を相手に提示した。

すると、西田君のお兄さんは顎に手を当てニコリと、凄く人の良さそうな笑顔をつくり微笑む。

そして言う。

「そうだね。まあ、今日は突然だったかもしれないね。それじゃあ、こつこつのはどうだろう。明日、剣道愛好会の部室に来ないか？

やはり、一度は体験してから決めるべきだよ。断るのはそれからでも遅くないしね。ハハハッ」

西田君のお兄さんはそう言うと、爽やかな笑顔を作る。

俺はそれを聞き『それもそうか』などと簡単に納得し返事をした。「そうですね。やる前から断るのもなんですし。それじゃあ、明日一度見てから決めます。それで良いですか？ 八八ハッ」
見たら速攻で断るつもりのは俺は、爽やかな笑顔の西田さんに対し、負けじと爽やかな笑顔で返すのだった。

「今日、呼び止めて良かったよ。やつぱり、見てみない事には日比野君も返事しづらいからね。これで俺も肩の荷が下りるといわけだ。ハハハハッ」

「へッ、肩の荷が下りる？」

「ああ、いや、な、何でもないよ。アハ、アハハハッ。ここ最近肩が凝っててね。ハハハッ」

俺は今の遣り取りで、最後の方に聞こえた言葉が妙に思ったため聞き返した。

すると、西田さんは爽やかな笑いから、突然、不自然な笑いになった様な気がしたが、俺は気のせいだと思いつルした。

そして、西田さんは中指で眼鏡の眉間のフレームを押して、笑っている最中にズレた眼鏡を直すと、最初のインテリな雰囲気に戻り話し始める。

「さて、明日だけど、この時間に一号館の前で待っててもらえるかい？」

「あ、はい。良いですよ。一号館の前ですね」

一号館は正門から入ってゆくと一番最初に目に飛び込んでくる、横長で白い壁の大きな建物だ。

因みに5F建てで、高天大の顔とも言える建造物でもある。真中の白い時計台が特徴だ。

「それじゃあ、あまり呼び止めておくのも悪いからこれで失礼するよ。また明日ね。忘れないでね」

「ええ、それではまた明日」

西田さんはそう言うと、右手をズボンのポケットに突っ込み、『

アディオス』といいそんな仕草をしてこの場を去って行く。
そんな西田さんを見送った俺はフウと大きく息を吐くと、自分の
アパートへと向かい、また歩を進めるのだった。

その夜。

夕食を終えた俺は、食器類を洗いながら夕方の出来事を思い浮か
べていた。

剣道かぁ。やった事はないけど面倒そうだしなァ。

通気性の悪そうなスポーツヤから汗臭そうやし、防具とか酸っぱ
い匂いがしそうや。

アカン！ 想像したら鼻がツンとしたわツ。

どうしよ……。部屋に来て言ってたけど、熱血漫画とかに出
てきそうな人達ばかりやったら嫌やなァ。

そんな連中が俺に迫ってきたら、意思に関係なく「ウン」て言っ
てしまいそうや。俺は熱い連中が苦手やからなァ。

まあでも、やる気が無いのに居ても周りに迷惑かけるだけやから、
明日はどんな状況になってもしっかり断ろう

そんな事を考えていると、7時のテレビニュースを見ていた鬼一
爺さんが、目的のものは見終えたのか「フム」と言いながら立ち上
がり、俺のいるキッチンの方へとやってきた。

そして、口を開く。

(涼一、今日の悪霊退治じゃがな……)

鬼一爺さんは何かを考えてるのか少し間を空けて続ける。

(今日は中止じゃ)

「中止？ 何でまた。珍しい」

爺さんはそう言った後、妙に難しい顔をする。

俺はその表情が少し気になったので、尋ねてみる事にした。

「何だよ爺さん。エライ難しい顔して。何かあったのか？」

(実はの、最近妙なんじゃ。我が見つけた悪霊のおる所を遠くから
見ている輩やかいがあるのじゃよ。何か気持ち悪くての)

「何だよ、それ。もしかして監視されてるのか？ 俺達」

俺は爺さんの話を聞くなり不安になった。

そして、俺は続ける。

「何時からだよ。そんな風に感じ始めたのは？」

（土蜘蛛退治の翌日辺りからかの。我がお主に宛がう悪霊を見繕っている、遠くに視線を感じての。まあそれで我も訝しげに思っ
て、気付かれん様に霊圧を下げてその者の近くまで行ったんじゃ。そしたらジーンとその場所を見て居るんじゃよ。それを見てから気持ち悪くての）

爺さんはその体験が余程嫌だったのか、しかめっ面をして言う。

俺はそんな嫌がる爺さんを見ているうちにある事を思いついた為

爺さんに言った。

「爺さんの様に悪霊退治する人間で、昔は結構居たんだろ？」

（ああ、そりゃそうじゃ。当たり前じゃろ）

何を馬鹿なことを、とといった感じで爺さんは言う。

そんな爺さんを見ながら俺は続ける。

「爺さんさあ。俺、この間から少し気になっていたんだけど、今の

世にも当然そついった類の者達が居ると思わないか？」

（まあ、のう。そりゃ居るじゃろうの）

「それともう一つ。昔はそついうのとか無料ただでやってたのか？」

（貰える所からは貰うておつたの）

「だよな。普通金取ると思うよ。だって命掛けてんだもん。まあ、それは良いとしてだ。問題は、今の世でもそついった事を引き受ける人間なり組織なりがあるかも知れないってとこだよ。そして、勝手に縄張り荒らして悪霊退治している俺達に気付いた人や組織が、その現場を押えようと監視してるのかも知れないのじゃないかな。どう？ あくまでも憶測だけど……」

爺さんは天井を見上げたまま暫く考える。

そして、考えが纏まったのか、すっきりした表情で俺に言うのだ。
「た。」

(そうじゃな。涼一の言う通りじゃ。我は善き事と思いお主に宛がってきたが、今の世には今の世の理ことわりがある。我はそれを無下むげにし過ぎてきたようじゃな。少し反省せねば。当分は悪霊退治は中止じゃ。じゃが、その分は術の修練に当てるからの。楽は出来ると思っでないぞ)

「はいはい、分かってますよ。で、とりあえず今日はどうするの?」
(フム、そうじゃな。今宵は、新しい符術でも教え始めようかの)
「新しい符術? へえ、今度はどんな術式の符だい」

(フム、障壁の符というやつじゃ。これは一枚の符だけではなく、何枚かの符を使って連動させる符術じゃから今までとは違い、ちと難しくなるからそのつもりでの)

「ホオオ、て事は、これから習うのは応用編でところか。よっしゃ、いつちよやってみるか」

先程の爺さんの話でやや不安になったものの、話を聞く限りでは、まだ俺達の正体まではバレてないだろうと結論することにした。

また、今の俺は新しく習う符術に興味が向かっており、直ぐにそんな事はどうでも良くなっていったのだった。

そして、翌日の夕方。

俺は講義を終えると、昨日約束した1号館の正面へと向かう。

1号館の入口には沢山の学生がおり、皆ももう目的の講義を終えたのか各々が帰るなりサークルに向かうなりしているようであった。そんなやや混雑した中、俺は入口付近へと歩を進める。雑踏を掻き分けて進み、ようやく正面にたどり着いたところで周囲を見回す。すると、正面の大きな白い柱に寄りかかる様に西田さんが待っていたのだった。今日は全身黒っぽいシックな感じの服装である。

西田さんは俺を視界に捉えると、此方の方へと歩み寄ってくる。俺との距離が10m程になった所で西田さんの方から話かけてきた。

「お、日比野君。ご苦労さん。待ってたよ。さて、それじゃ早速行

「こうか」

「あ、はい。それじゃあ、お願いします」

その道中、西田さんは気軽に話しかけてきた。

大学での学生生活はどうだ？ とか。この近所にある旨い飯屋に今度連れてってやるう、とか。えらく気さくな感じの人のようだ。

俺はそんな西田さんに部室に向かうまでの間、やや緊張した気分を解されながら進んで行くのだった。

俺達は1階の東にある渡り廊下を進むと、次は体育館のある方へと進んで行く。

そして、その更に隣にあるやや小さめの体育館のような所に案内された。

その建物の正面入口には、木の板に筆書きで力強くこう書かれていた。

高天智市立大学 武道場 と。

俺は入口でボーと立ち尽くしていると西田さんは言う。

「日比野君、外靴は此处の下駄箱に置いてくれるかな。此处からは何も履かずに行くから。じゃあ付いて来て」

西田さんにそう促された俺は入口を潜る。

そして、靴を脱いで下駄箱に俺の靴を入れると、西田さんの後に続き歩いて行くのだった。

その途中、俺は武道場内を好奇心から見回した。

武道場はまだ作られてから然程年月が経ってないせいか、結構新しい感じがする。

壁は木の板張りになっており、中心部分には神棚が置かれていた。新しい建物ではあるが、妙に伝統と格式が見え隠れする室内であった。

今、武道場の奥では柔道部が畳を敷いて組み手をしているところだ。

「バタン、バタン」と受身をとる音が武道場内に響いている。ついでに暑苦しい掛声も……。

しかし、武道系の暑苦しい連中が汗だくになって稽古に励む場所
なだけあり、気分的にかもしれないが、やや酸味の効いた匂いがし
たような気がするのだった。

こんな事は此処では口が裂けても言えないが。

また、手前側の方は誰も使っていないようなので、結構スペースが
空いていた。

俺は、此処で剣道愛好会が練習するのかな？ などと思いながら

西田さんの後を付いて行く。

丁度その時、西田さんは立ち止まった。

武道場の一画にある、乱暴な字で剣道愛好会と書かれた紙が張り
付いた木製の引き戸の前で。

俺は、中に一体どんな人達が居るのだろうか？ と息を呑みながら
西田さんが戸を引くのを待つ。

西田さんは意を決したのか、ズボンのポケットに突っ込んでいた
手を出すと、徐に右へと戸を引くのだった。

そして、部室の全容が明らかになる。

引戸の先には広さ6畳程の狭い部屋があり、パイプ椅子が5脚と
横長の会議机が二つというエライ殺風景な光景が現れた。

その部屋の片隅にはロッカーがあり、その手前には竹刀や防具類
が置かれていた。

因みにそれらは幾多の修羅場を潜ってそうな『汗臭い甲冑』や『
握りの臭さそうな竹刀』といったところだ。

別に某シミュレーションRPGのパクリで言っている訳ではない。
話を戻そう。

そのやや狭い部室内に置かれた机に、漫画を読む男が一人だけが
いるだけで、他の部員達の姿は見えない。

恐らく、まだ来てないのだろう。

俺がそう考えていると、西田さんは机に居る男に向かい声を掛け
た。

「オイ、田島あ。他のみんなは？」

田島と呼ばれた男の人はかなり太った大きな人で、漫画を片手にコラのマーチを食べていた。その前には1.5Lボトルのポカリス エットが置かれている。

頭は丸坊主で、パツと見は住職！ といった感じである。この人も眼鏡をしており、黒縁のまん丸眼鏡なのが特徴だ。

また、上は白いシャツに下は茶色のパンツといった格好をしている。勿論、サイズは俺の行く店では置いてなさそうなサイズである。色々大変そうな人ではあるが、結構ニコヤカな笑顔を作る人で、性格はいい人そうであった。

その声を掛けられた田島さんは、漫画を机の上に置くと、西田さんに振り向き口を開いた。

「まだ、皆は来てないよ。さっき姫会長は顔をだしたけど。ん？ え〜と、隣の人は、もしかして今日入るっていう新入りさん？」

田島さんは西田さんの隣に居る俺を視界に入れるとそう聞いてきた。

「あ、紹介するよ。日比野君って言うんだ。今年入ったばかりの一年生だよ」

「へえ〜そうなんだあ。俺は二年の田島って言うんだ。よろしくね、日比野君」

田島さんはそう言うのと緩い感じで俺に自己紹介をしてきた。

「ああ、此方こそ。でも、まだ、入るかどうかは…」ところで、田島。 姫は何処いったんだ？」

俺が話していた途中で西田さんが割り込んできた為、肝心の部分と言えなかった。

しかし『まあいい、皆が揃ってから言ってやるっ』と考え次の機会を待つ事にしたのだった。

「ん、姫かい？ 少し用事があるって言ってたけど直ぐ来るんじゃないの？」

「そうか。まあいい。俺達も待つとしようかな。日比野君そこ座りなよ」

西田さんはそう言うと、パイプ椅子を俺に向かわせる。

俺は一応、お礼を言ってからその椅子に腰掛けると、二人と一緒に他の部員達を待つのがあった。

それから15分後、ガラツという音と共に一人の女性が現れた。

その女性は黒髪のサラツとした長い髪の女性で、もう既に面と籠手以外の防具と袴を身につけていた。

顔立ちは美しい大和撫子という感じで、その佇まいからは非常に気品が溢れているように見える。

また、パチクリとした目と、スツと輪郭がハッキリした鼻が特徴の非常に美しい女性だ。

俺はその女性の美貌にやや目を奪われたが、次の瞬間、それらの幻想が雪崩のごとく崩れて行くのだった。

「オイツ、西田と田島ア、他の奴等はまだ来てねえのか？」

女性は恐ろしく迫力ある話し方で二人に言う。

その様は、見た目のギャップが激しすぎて俺は少しばかりついていけなかった。

「はい、まだ来ておりません」

二人は訓練された兵士のようにハモリながら言った。まるで、いつか見たアメリカの軍隊物の映画のワンシーンのようだ。

しかも二人は先程までのリラックスした感じから一転し、これでもかっというぐらい背筋を伸ばして椅子に座っていた。

まるで、椅子に座るときの見本の様な佇まいである。

俺はそんな3人の遣り取りを口を開け呆然と眺めていると、女性は俺の存在に気付き声を掛けて来たのだった。

「オウ、オメエはアレか。今日入ってくるのか言ってた新人かあ？」

「エツ？ エと俺は……」

俺は突然の出来事にシドロモドロになっていると、この女性は凄じ迫力で俺にメンチ切ってきた。

そして言う。

「ああん、ナンダオメエ。はっきり言えよ。キン マ付いてんだろ

お。オイツ、西田あ、お前言ったのはコイツか？」

西田さんはやや脅えた表情で丁寧はこの女性に俺を紹介する。

「は、はい、姫。彼の名前は日比野君と言いまして、今年入った新入生であります」

幾分か強張った表情の西田さんは、敬礼をするかのようにこの女性に言う。

まるで、上官に伝聞を読み上げるかのような光景である。俺はそれを見て悪い夢を見ているような錯覚に陥る。

それを聞いたこの姫と呼ばれた女性は、俺に向かい悪魔の微笑を向けるのだった。

「なるほどなあ。新入生か。最初からビビらせるのもアレだ。今日は控えめにしといてやるう。それじゃあ日比野とかいったか。ようこそ、剣道愛好会へ！」

「え〜と……僕……入るつもりは……無いかなあ……なあんて言ってみたりして……ハハハッ」

俺は小声になりながらも必死に訴えてみた。

しかし……。

【なんか言ったか！】

「い、いいえ、べつに」

俺は己の優柔不断さを呪った。

何故なら、昨日、西田さんがこの話を持ちかけてきた時が、俺にとつて最後のチャンスだったのだから。

そして、俺は嘆いた。これも因果応報なのか？ と

拾伍ノ巻

《 拾伍ノ巻 》 剣道愛好会 二

今の時刻はPM5時半。

俺は武道場のやや薄暗い壁際から体操座りで、周囲にドンヨリとした空気を撒き散らしながら、剣道愛好会の練習を見学していた。今日は本当に災難だ。この愛好会に顔を出して、入会の断りを入れて帰ろうとしただけなのだが、本人の意思に関係なく、何時の間にか会員にさせられたのだ。

姫会長の有無を言わせぬ迫力に、俺の心が負けてこうなった訳であるが、なにか納得のいかないモヤモヤした物が俺の胸の中で渦巻いていた。

で、隣を見るとそんな複雑な心境の俺とは裏腹に、鬼一爺さんは偉く感心した様子で剣道の練習風景を眺めている。

おまけに、先程から小声で俺にこう囁いていた。

（コリヤええわい。涼一の心身を鍛えるにはもってこいじゃわい。フオフオフオフオ）

などと、ふざけた事を抜かしてるのだった。おのれ、ジジイ。

さて、今の俺の表情は生気が抜けた様に見えるかもしれないが、大丈夫、一応生きてはいる。

そして、イヤイヤではあったが、剣道の練習風景を眺めながら先程の一連の遣り取りを思い返していたのだった。

会長は本当に、今思い返しても恐ろしい迫力を持った女性だ。見た目は美しい方なのだが、その美貌から飛び出す暴言や威嚇の数々はハッキリ言って初対面の人には想像できないであろう。

俺自身、最初は腹話術で別の人間が喋っているのでは……と思っただけだ。

気の弱い人間なら、軽い発作か失禁をしていたかもしれない。それ程に見た目と言動のギャップが凄いのだった。これも陰陽の理か？^{ことわり} と思ってしまうほどに。

まあ、そんな事はとりあえず置いておくとして。

その姫会長だが。今、俺の目の前で男子4人と女子2人に構えや足裁き等を細かく指導をしているところだ。

姫会長の本名は姫野由香里さん^{ひめのゆかり}と言うらしい。現在、西田さんと同じく3年で、学部も同じ経済学部のような。そして、姫会長は剣道の有段者らしく、高校時代は県の大会で1・2を争うほどの武者だったようだ。そういう経緯もあり、この剣道愛好会では会長兼監督といった立場のようである。

また、これは西田さんからあの後に聞いた話だが、高天智市にある姫野興産株式会社の社長令嬢だそう。因みにこの会社、893さんと繋がりがあると言われているヤバい雰囲気を持った会社とされている。

西田さんはこの話を言った後、本人の前では絶対にするなよ！と念押ししてきた。どうも実家の話をされるのが嫌いなようだ。

俺は自分の身に危険が及ぶと思った為、言われたとおり、今の話は絶対にしないようにしようと思っただけだった。

さて、話は変わる。

先程、俺は西田さんに「こうなると分かかってて此処に連れてきたのですか？」と問い詰めた。

すると西田さんは「そうだよ。ゴメンな、日比野君。俺も辛かったんだよ。……スマナイ」

と、声を嚙殺すようにそう言い残して練習へと向かったのだった。そういう風に返されると俺も辛い、これはある意味詐欺のようにも思えたので抗議は続けるつもりだ。

そんな事を考えながら俺は剣道の練習を眺めていると、姫会長が竹刀を片手に此方の方へとやってきた。

その足取りは物凄く重量感が感じられる。

俺は姫会長が近づいてくるにつれ、心臓の鼓動が早くなる。

そして、俺の前に来ると高圧的に言い放った。

「オイ、お前。日比野といったか。立ちなッ」

「ハ、ハイッ」

逆らったら竹刀でシバかれる可能性が高い為、俺はすぐさま背筋を伸ばし立ち上がった。

姫会長は、立ち上がった俺の周囲をまるで品定めをするかの様に眺めてゆく。

そして、上から下まで一通り眺めると俺の正面に来て言うのだった。

「へえ、思ってたよりヤワな身体じゃなさそうだ。オメエ剣道の経験はあんのか？」

「い、いいえ。ありません」

俺の返事を聞き、姫会長は右肩に竹刀を預けながら、何やら考え出した。

暫く思案顔をした後、また俺に話しかけてくる。

「オウ、お前。今日からこの愛好会に入るに当たり、これから知っておかなきゃならねえことがある。いいか、良く聞けよ。この剣道愛好会に入ったからには、学校側に部として認めさせるのが皆の目標だ。その為には人員と活動実績がいる。よってお前にはその実績作りのためにも、これから頑張ってもらわなきゃならねえ。ここまでは理解できたか？」

「え？ え、エ、エと…」

凄じい剣幕で言うので俺はどもってしまった。

しかし、そんな俺を見て姫会長は大きな声ですかさず言う。

【理解できたのか？ どおなんだ】

「ハ、ハイッ。理解できましたあ」

今のドスの利いた一声でキン マが半分くらいに縮み上がったよ
うな気がした。

そして姫会長は続ける。

「よし。で、その実績作りの一環として、お前には来月の終わりにあるF県・剣道県民大会の団体戦に出場してもらおう」

「あのお、俺、剣道の経験無いのに大会なんか出て良いんでしょ
うか？」

俺はなんとか勇気を振り絞り、問いかけてみた。

「心配するな。それまでにある程度は鍛えてやる。覚悟しとけよ。
あとの細かい事は西田とか他の部員に聞いとけ。それと、今日のと
ころは皆の練習風景をしつかりと目に焼き付けておけ。以上だ」

会長長はそれを言うなり、また皆の所へと戻って行った。

俺は今の緊迫した空気から解放されたので、とりあえずフウと大
きく息を吐く。

そして、今の説明をもう一度頭の中で復唱するのだった。

そこでまた鬼一爺さんが小声で俺に話しかけてきた。

（涼一、今の世でも剣の腕を磨く事があるのじゃのう。我は武士は
もう居らんと思つておつたが、意外な形でそれらの名残を見つけた
わい）

爺さんは、感慨深い表情で、皆が竹刀を振る光景を眺めている。

恐らく、嘗ての懐かしさが込み上げているのだろう。

「まあな。先人達の残した遺産は、スポーツや学問の中で継承して
いる部分が多いからな。無くなるというより、少し形を変えて今の
世の中に溶け込んではいるよ」

（フム。なるほどのお。おっと、これ以上話をすると不味いの。我
は暫く口を噤んでおくとするかの）

爺さんは俺に気を使って話すのをやめると、ユラユラと浮かびな
がら、隣の柔道部の方へ見学に行った。

そして俺は、一人寂しく皆の練習風景を眺めるのだった。

それから1時間後。

練習も終わり、皆は武道場の中央に集まる。俺も西田さんに呼ば
れその中に加わった。

そして、男女合わせて7人が横に整列すると正面にいる姫会長に向かい「ありがとうございます」と挨拶をして解散となったのであった。

その直後、西田さんが申し訳なさそうに俺に声を掛けてきた。

「日比野君、今日は本当にゴメン。俺も悪気は無いんだよ」

「西田さん……理由ぐらいは聞かせてもらえますか？」

俺は少しムカついてはいたが、先程の出来事からだいぶ時間が経過していたので、冷静に物事を見れる様にはなっていた。

その為、落ち着いた口調で西田さんに尋ねた。

「り、理由かい……。理由は姫からも聞いたと思うけど、この愛好会を部に昇格させる為にどうしても人が必要だったのさ」

「でも、俺じゃなくても他に人はいますよ」

俺がそう言っていると西田さんは困った表情で話し出す。

「実はさ、もう既に色々当たっては見たんだけど、全部駄目だったんだよ。おまけにこの時期になると、大概の奴は他のサークルや専攻科目の研究、バイト等に落ち着いてしまってるからね。昨日、日比野君を呼びに行った時も駄目元で行ったんだよ。そしたら、まだ身の振り方が決まってる感じがなかったからさ。コリヤイケル！と思ってこうなったという訳さ」

西田さんは言い終えると、肩の力を抜く。

そして、俺に向かい深く頭を下げて謝るのだった。

「すまない。悪いのは俺だ。それと姫の事はあまり恨まないでやって欲しい。こんな事言つと虫が良すぎるかも知れないけど」

そんな西田さんを見ていたら俺もどうでも良くなってしまい、とりあえず許す事にしたのだった。

「もういいですよ。あそこで姫会長に断れない俺にも責任があるんで。頭上げてください」

俺の言葉を聞き、西田さんは少し明るい表情になる。

そして大きく息を吐いた後、身体に装備した防具類を外しながら言うのだった。

「日比野君に今日は悪い事をしたから、帰りに飯を奢るよ。ちよつと待っててくれるかい？」

「あ、はい……」

西田さんは部室へと戻って行った。

一人になった俺は、武道場の壁に寄りかかり、腕を組んで目を閉じる。

そして、これからの学生生活を憂いながら溜息を吐くのだった。

ハア、なんかここ最近、今までの俺には無かったような展開が怒涛のように訪れるなあ。

まさか、サークル活動で剣道をやる事になるとは。トホホホ。

しかも、夜の悪霊退治と入れ替わるかのようなこの展開。勘弁して欲しいわ。

けど、剣道って色々揃えなアカン物とか多そうやし金もかかりそうやなあ。

まあこの辺の事は西田さんに聞いておくかあ。

あああ憂鬱や

俺がネガティブにこれからのキャンパスライフを考えていると、部室から袴姿の女子3人が出てきた。勿論、その中には姫会長の姿がある。

しかし、その時の姫会長の表情は、非常に穏やかな笑顔を作っており、練習中の様な夜叉の雰囲気は纏っていないかった。

寧ろ、その辺の女子学生といった感じで、3人は冗談を言い合いながら武道場の玄関へと歩を進めているのだった。

そんな姫会長を見るなり、ある一つの仮定が俺の脳裏に過ぎった。そう、『二重人格？』と。

俺がそんな風に考えていると、3人の内の一人が此方に気付き挨拶をしてきた。

「あ、新入り君。それじゃあ、また明日ね。さようなら」

シヨートヘアの子で、眼鏡を掛けた女性だ。首にはタオルが掛かっている。

顔はやや幼さの残る童顔で、先程の練習風景を見る限りでは初級クラスの腕前の様だ。

因みに名前は知らない。何故なら自己紹介をまだしてないからだ。「お疲れ様でございました。お気をつけてお帰りください」

俺は頭を下げ丁寧に挨拶をした。

その様は何処かの執事のように、他の人には見えなかもしれない。恐らく、視界に入った姫会長に恐怖する俺の深層心理がそうさせたのだろう。

その女性が俺に挨拶を終えると、姫会長達3人は武道場をあとにしたのだった。

それから暫くすると、男4人がゾロゾロと部室から出てきた。服装は皆、普段着になっている。

男連中がここで着替えているという事は、女子は別の場所に着替えるようだ。

そんな事を考えていると、西田さんが俺の元にやってきた。

「お、すまんね。待たせてしまつて。それじゃあ、行こうか。安くて旨い飯屋がこの近くにあるんだよ」

「はい。それじゃ、宜しくです」

西田さんは先程の申し訳なさそうな表情から一転。

昨日からのインテリっぽい雰囲気に戻っており、昨日と同じようなテンションで俺をその店に案内するのだった。

大学を出た俺達は正門正面の大通りを左に進んで行く。

外は日もすっかり沈み、暗い夜空がこの高天智市を包み込んでいた。

今の時間帯は丁度、仕事を終えたサラリーマンの姿等も多く、歩道は若干混雑している。

大通りには沢山の自動車が行き交っており、ディーゼル車の出す独特の匂いがする排煙が、時折、俺の鼻を刺激するのだった。

そんな夜の学園町を進んで行くと、西田さんは途中やや狭い路地

に入っけてゆく。

その先は、アパートやマンション、公営住宅等が多く建ち並んでおり、よくある住宅団地の様になっていた。

俺達はその団地を更に進んだ所にある一軒の古い民家のような建物の前で立ち止まった。

俺は青い暖簾のれんが掛かった玄関の上に目を向ける。

其処には『大衆食堂 大権現だいこんげん』と、江戸書体で書かれた大きな看板が、ライトアップされて入口に掛けられていた。

色んな意味で凄い名前の飯屋だ。大権現だいこんげんという大層な名前と、大衆食堂という微妙なカテゴリーが一致してない。

ここ最近、ギャップの激しい物ばかり目にするな……。
などと思いつつも、俺達は暖簾のれんを潜り店の中へと入っけてゆくのだった。

店の中はそれなりの広さで、間取りはカウンター席と通路を挟んで、壁面側に座敷といった感じのよくある定食屋である。

時間帯が丁度夕飯時な為、結構人は入っていた。それなりに繁盛しているようだ。

俺達は奥のカウンター席が空いていたので其処に移動する。
席に着くと西田さんのお勧めメニューである、天麩羅大権現定食てんぷらだいこんげんていしょくという物を注文した。恐らく金比羅大権現こんひらだいこんげんにかけた名前だろう。

注文を終えると今日の愛好会での事についてまた話を始めるのだった。

「日比野君、剣道の事で分らない事があつたら聞いてくれよ」

「はあ、自分は何も分らるので、何から聞いてよいやら。八八八八」
そんな俺の返答を聞いて、西田さんは言う。

「そうだねえ。先ず、自前で用意したほうがいい物を言うよ。剣道着と竹刀は自分の物が欲しいね。防具類は愛好会の物を使えばいいからさ」

「剣道着は分りますが、竹刀は借りれないんですか？」

「まあ、一応予備でそういう竹刀も部室にあるんだが、皆、自前の

を使ってるよ」

俺はそれを聞き、とりあえず幾ら位する物なのか気になったので尋ねた。

「因みに剣道着と竹刀で幾ら位かかるんですか？」

この質問に西田さんは唸りながら考え込んで答える。

「ウーン。難しいな。ピンキリだからね。姫に頼んでみた方がいいかも。姫ならこの業界良く知ってるから、良くて手ごろな値段の物を取り寄せてくれるよ」

「姫会長ですか……。俺、恥ずかしい話なんですけど。あの人コワイです」

「ハ、ハ、ハハ、ハハハツ。まあね。俺もだよ」

西田さんは乾いた笑いをした後に、ボソツと呟いた。

そして続ける。

「確かに姫は怖いけど、悪い子じゃ無いんだ。ただ、剣道着に着替えると一段、いや二段程性格がきつくなるんだよ」

普段はどんな感じなんだろう？ と気になり問いかける。

「へえ、それじゃ、いつもはお淑やかなんですか？」

「ハハハツ。流石にそこまではいかないよ。普段から男勝りだからね。ただ剣道に関しては、今まで真剣に取り組んできた経緯が、彼女をそういう風に駆り立てているんじゃないかな。あくまでも俺の推論だけだね」

それを聞き、武道場で説明を受けていた時の強い意志を秘めた姫会長の雰囲気を思い出すのだった。

俺がそんな事を思い返していると、西田さんは続ける。

「あ、そうそう。言い忘れてたけど、この愛好会を立ち上げたのも姫だからね」

「そうなんですか？ 剣道愛好会って姫会長が創ったんだ。へえ」

「そうなんだよ。大学に入った後に剣道部が無い事に気付いたとか言ってたよ。ちょっとオツチヨコチヨイなところがあるからね。姫は」

そんな話をしていると俺達のカウンターに注文した定食がやってきた。

そして、目を見開くのだった。

なんと其処には！

エビゾリになった巨大な海老天が真中に鎮座し、その周りに、これまたデカイ芋天や椎茸等の野菜天麩羅が海老を称える様に盛り付けられていたからだ。

敢えて宗教の構図のように例えるなら、海老天が教祖で野菜天が信者という感じだろうか。ちょっと違うか……。まあ兎に角そんな感じだ。

盛られた皿も妙にデカイ。定食の構成としては、味噌汁と漬物とご飯と天ツユといった感じになっている。因みにそれらは普通だった。

パツと見、全部食べれるかな……なあんて思ってしまったそうな程、ポリユーム感たつぷりの定食なのである。

俺はその作りたての湯気が立つ定食を眺めながらそんな事を考える。

しかし、目の前から漂う定食の匂いは、そんな事を忘れさせるくらいに旨そうな匂いを放っているのだった。

俺はこれを見てこう総括した。

恐るべし、天麩羅大権現定食！てんぷらだいこんげんていしょく と

そんな風に感動していると、隣の西田さんが話し出す。

「凄いだろ。この定食。このポリユームで700円だよ。しかも旨いしね。遠慮せず食べてよ。今日は俺の奢りだからさ」

「すみません。少し感動してしまいましたよ。この威圧感に」

「ハハハッ。俺も初めて来た時、何じゃコリヤアって驚いたからね。分かるよ、その気持ち」

俺達はそんなやりとりをした後、早速その巨大天麩羅をパクついたのであった。

その後も色々と愛好会の事や大学の事、弟さんの事等を話しながら

ら食事を進め、俺達は親睦を深めていった。

最初の方こそ若干ヨソヨソしかったが、この定食屋を出る頃には大分気軽に話せる感じになり、俺ももう愛好会での出来事についてはあまり深く考えない様になっていたのだった。

店を出た俺達は元来た道を戻り、一旦大通りに出ると其処で解散する事にした。

そして、「また明日な」と西田さんは言つと、俺とは反対の方向に向かい歩いてゆく。

俺はその後ろ姿を暫く眺めた後、アパートへ向かい歩き始めたのだった。

此処は愛知県 名古屋市。

名古屋市の高層ビル群が建ち並ぶ中心街から北に10km程離れた住宅地の一角に、この辺りでは珍しい四方を林と石垣に囲まれた古い屋敷がある。

屋敷の周囲に建つ住宅は、最近建てられた現代建築の建物ばかりで、此処だけが別世界の様に違う空間と化しているのだった。

敷地正面入口には威風堂々とした佇まいの長屋門があり、その入口には『道間』と書かれた表札が掛かっていた。

石垣と屋敷の間には広い日本庭園があり、色彩鮮やかな錦鯉が泳ぐ瓢箪ひょうたんの様な形の池や綺麗に刈り込まれた松などが存在を強く主張している。

また、庭に置かれた大きな岩や石には苔が所々覆っており、手入れされた木々と自然の美しさが相俟って、非常に心休まる空間になっているのだった。

そんな庭園の中心に武家屋敷を思わせるような大きな造りの屋敷がある。

壁は白塗りの壁で、黒い古木の外梁が白壁に線を引いたかのよう
に剥き出しになっている。

また、屋敷の玄関は幅広く、左右に立つた黒光りする大きな柱が門番の様な存在感を出していた。

そして、日本古来の伝統家屋に良く見られる木製の重厚な玄関戸には、碁盤の目の様な細かい格子細工が施してあり、繊細さと豪胆さを訪れる者にアピールしているのだった。

恐らく、ここに訪れた者は、その浮世離れた霧囿気を見て江戸時代にタイムスリップしたかのような錯覚を覚えるに違いない。

そんな歴史を感じさせる所なのであった。

今、その屋敷に向かい歩を進める一人の少女がいた。

以前、霧守高原の山中に親子3人で来ていたあの沙耶香さやかと呼ばれていた少女である。

沙耶香は学校帰りのようで、右手には学生鞆を持っており、赤いブレザーとグレーのスカートという組み合わせの制服を着ていた。

時折吹くやや強い風が、彼女のトレードマークである左右に垂らした長いツインテールの髪を強く靡なびかせる。

しかし、沙耶香はそんな事など別段気にした様子も無く、寡黙な表情で屋敷の玄関に向かい、凜として歩を進めているのだった。

それから程無くして、沙耶香は玄関の前に到着すると一旦立ち止まる。

そこで衣服に付いた埃を払い、一呼吸おいてから木製の分厚い玄関戸を引いた。

玄関戸を引いた先には、風景を描いた豪華な金箔の屏風が、先ず目に飛び込んでくる。

そして、左右の壁には美しい木目の下駄箱があり、その上には華やかな壺や皿などの焼き物が綺麗に並べられているのだった。

初めて訪れる者は恐らく、それらに目を奪われて暫くは立ち尽くすかもしれない。

しかし、沙耶香にとってはいつもと同じ光景な為、別段意に返した風も無く自然体で中に入って行くのであった。

「ただいまあ」

と、大きな声で言った後、沙耶香は玄関戸を閉めると靴を脱いで家にかかる。

そして、広い廊下を進んで二階にある自分の部屋へと向かうのだった。

沙耶香は部屋に鞆を置くと、すぐにまた一階に降りて東側にある渡り廊下を抜け、母屋おもやの隣にある蔵へと進んで行く。

だが、蔵の入口に近づくなり沙耶香は立ち止まった。入り口が若干開いていた為である。

「あら、戸が少し開いてる。お兄様かしら？」

そう言つて少し首を傾げる仕草をすると、自分も蔵の中へと入つて行った。

蔵の中は外界から切り離されたかのように静かで儼かな雰囲気か漂つていた。これは蔵特有の分厚い土壁が外の物音を遮断している為である。

また、天井には二つの40W蛍光灯が点いており、蔵の中を白い光が明るく照らしていた。

蔵は二階建てになっており、一階部分には、年代を感じさせる古い木箱等が納めてある棚が周囲の壁にあつた。

しかし、沙耶香はこの一階には用がないのか、目もくれずに奥の階段へと歩を進める。

そして、階段を上がつて左側にある棚へと向かうのだった。

沙耶香が目的の場所に着くと、其処には既に先客があり、黙々と何かを調べている男がいた。沙耶香の父である。

その男は灰色の長着に茶色の羽織という時代劇に出てきそうな格好をしており、周囲の風景に溶け込むような出で立ちであった。

男は沙耶香の接近には気付いてないようで、手に持った書物をめくり、ただただ没頭している。

そんな様子の父を見て、沙耶香は肩の力を抜き声をかけた。

「お父様。調べ物ですか？」

男はハツとして頭を上げ、沙耶香に振り向く。

そして、笑顔を作り返事をした。

「ン？ 沙耶香か。もう帰ってたのか」

「ついさつき帰ったばかりです。でも、お父様。私が近づくのには気付いておられなかったところを見ると、相当、熱心に調べ物をなさってたのですね」

「ハハハ。まあ仕方なかるう。だが、そのお陰でここ最近、色々と分かってきた事があるのだよ。この先祖が記してきた古い文献を調べて行く内にな」

男はそう言うのと右手に持った紫色の古い書物に視線を向かわせる。

沙耶香はその書物が気になり問いかけた。

「お父様。その紫色の書物は一体なんですか？」

「ああ、これか。これにはその昔、我が道摩家が請負った妖怪退治の数々の記録が記されておるのだよ。年代としては800年程前のものだが」

「妖怪退治の記録ですか？ へえ、そんな書もあったのですね」

沙耶香は感心した仕草をすると、男の手にある書物に目を向けた。

そして問い掛ける。

「それで、どんな事が分かったのですか？」

「ウム。そうだな。まず、この間のF県の山中で見た妖怪は土蜘蛛という名前なのは沙耶香も知っていよう。鎮守の森からの説明をお前達にもしたからな。その土蜘蛛退治のある程度詳細な記録がこれに記されておるのだよ」

「それにあの妖怪の事が細かく書かれていますのですか？」

と、沙耶香は目を大きく見開いて、その書物を見つめる。

男は書物をパラパラと捲り、土蜘蛛の姿が描かれた書面を見つけると沙耶香に見せるのだった。

「沙耶香、此処にはこう書かれています」

其の物の怪、土蜘蛛といふなり。

小さき頃は人や獣を干からびさせるほど養分を啜り、大きくなれ

ば村や町を滅ぼす巨大な物の怪へと変化するなり。

この物の怪を、滅ぼすべく道摩と賀茂が共に手を取り立ち向かわん。

賀茂から使わされた頭の術者、鬼一法眼なる者と我、無月は幾夜を重ねて策を練る。

そして長い月日を掛け、数え切れぬほどの土蜘蛛を塩水と重湯を混ぜた汁で誘き寄せて霊籠の陣で葬り去り、見事、土蜘蛛を滅ぼす事に相成りにけり

沙耶香は父の読み上げる文に耳を敬そはたてて聞いていたが、聞き終えると同時にある事を思い出し、父に問いかける。

「お父様。その中に出てくる鬼一法眼と言うのは、源義経みなもとのよじつねに兵法を授けたと義経記ぎけいきに書かれた京の陰陽師ですわよね？」

「確かにそうだが。義経記ぎけいきはかなり後の世の人間が書いた創作物だ。『史料』としての価値は低いから信憑性は薄いぞ。だが、この道摩家に伝わる書物にその名が記されているという事は実在した人物なのだろう。流石にこういった人物かまでは分からぬがな」

男は書物を見つめながらそう答えると、暫く間を空けてから続ける。

「それは置いておくとして、私が注目しているのはこの『数え切れぬほどの土蜘蛛を塩水と重湯を混ぜた汁で誘き寄せて霊籠の陣で葬り去り』の一文だ。沙耶香、お前はこれについて何か気付かぬか？」

父の問いかけに沙耶香は天井を見上げて考える。

そして山中での光景を思い返すのだった。

「お父様。その方法ってこの間の山中での光景と似てますわね……」
「嫌、似ているのでは無く、恐らく同じ方法だろう。一樹にあの後聞いたが、転がっていた桶に妙な液体が入っていた形跡があるとも言っておったからな。それと法陣を照らし合わせると、構図がこれとまったく同じだ」

「確かにそうですわね。という事は、あの地で土蜘蛛を退治した者

は、我等、道摩家が賀茂家の流れを汲む術者なのでしょいか？」

沙耶香の問いかけに男は静かに目を瞑る。

暫しの間何かを考えている様であったが、頭を横に振り、沙耶香に言った。

「それは分からぬ。だが、無関係ではないのであろうな。まあ、これについては、これからじっくりと調べて行くとして。沙耶香。先程、一樹から連絡が入ったぞ」

「お兄様から？ それで、どうだったのです。例の修被泥棒しゅはいを現行犯で見つける事が出来たのですか？」

「八八八ッそれが、全然駄目だそうだ。今日、此方に戻ると言っておったから、細かい事はその時に聞くが良い。さて、私はそろそろ書齋に戻るとしよう。沙耶香、出る時は電灯の消灯と施錠を忘れなようにな」

男は大きな声で笑うと沙耶香にそう言い残し、先程の書物を片手に蔵の階段を降りて行った。

沙耶香はそんな父の後ろ姿を見送った後、父の居た棚の付近へと足を運ぶ。

その棚に沢山置かれた木箱の中から、茶褐色のやや小さい箱を取り出すと床に置き、封をしてある紐を解いた。

木箱の中には焼け爛れた一つの赤い巻物が納められていた。

沙耶香はそれを大事に両手で取り出すと、丁寧に広げて行く。

そして、自分の上着のポケットから一枚の霊符を取り出し、巻物と交互に見比べるのだった

沙耶香はあの山中での出来事からずっとこの作業を繰り返していた。

その表情は真剣そのもので、何かの使命に駆り立てられているようにも見える。

あの日から沙耶香は、失われた術の手掛かりを探すべく、こうやって毎日の様に調べていたのであった。

道摩家の失われた嘗ての秘術を取り戻す為に

拾六ノ巻

《 拾六ノ巻 》 高等術

剣道愛好会に入会してから一週間後の早朝。

俺はいつもと同じ様に、高天智天満宮の裏山の頂いただきにて、真言術の修練をしていた。

時刻はA M 5時。今はもう10月の下旬に入りかけているので、外気は冷たく、衣服も厚着をしないと寒さで震えがくる様になってきた。吐く息も少しではあるが、煙の様に白くなり始めている。

その為、今の俺はジャージの上からフリースタイプのジャンパーを着ているのだった。しかも、断熱効果と共に見た目のモコモコした感じも加わってホットな気分にもなる。

また、二週間程前まで聞こえていたコオロギの鳴き声も、いつ頃から分からないが、もう聞こえなくなっていた。虫達の季節はもう終わりを迎えたようだ。

空を見上げれば、夏よりも鮮明になった幾千もの星達が、何処までも続く広大な闇の空間に、宝石を散りばめた様に光り輝いている。その光景は非常に美しく、見た瞬間に気温の低さなど忘れてしまうくらいである。だが、あくまでも一瞬だ。寒いものは寒い。

しかし、今の現状はそんないい事ばかりではない。

最近日は昇るのも遅い為、今の時間帯ではまだ周囲は真っ暗であり、非常に見通しが悪い。おまけに、今は霧も深く視界の悪さは輪をかけて酷い状態なのであった。

そんな中、俺は術の修練を続けていた。

今、俺の右手と左手は真言術『浄化の炎』を発動させている為、直径15cm程の二つの青白い火球が揺らめきながら燃え盛っている。

これは勿論、鬼一爺さんの指示でやっている。霊力の扱いを更に高度なものに、より霊圧を高める為に、霊力の練度と制御の修練をしているところなのだ。

この修行も剣道愛好会に入ると共に始めた修練ではあるが、かなり心身に負担が掛かる。

しかし、これで霊力を成長させていかないと、この先に待っている、高度な応用術を行使する事が出来ないそうなので、俺は何とか前向きになりながら術の修練に取り組んでいるのだった。

そうやって暫く術のコントロールをしていると、俺自身がへばつてきたので発動を中断し、一旦休憩をする事になった。

俺は術を中断すると東屋の方まで移動する。

そして、東屋にある石のベンチに腰掛けると、呼吸を整えてから鬼一爺さんに自分の現状を報告するのだった。

「フウ、鬼一爺さん。とりあえず、両手に分散させるコントロールはだいぶ出来る様になってきたけど、其処から更に霊圧を上げるのは厳しいね。まあこれから更に精進するしかない訳だけどもさ」

自分の現状をそう評すると爺さんはニコやかに言う。

（フオフオフオ。そうじゃ、精進するしかないの。さすれば、その内できるようになるじゃろ。お主のその霊力を練り上げる才ならのに因みに今の俺は呼吸法を使わずに霊圧を上げている。）

これも爺さんの指示で。だいぶ練度が上がってきたので、ここらで補助を外してみようと言う事になったからである。

お陰で霊圧を上げるのにより一層の集中が必要になったが、何とかやれているのでよしとしよう。

と考えていたところで、俺は昨晩の爺さんの話を思い出す。そして、もう一度確認の意味を込めて問いかけるのだった。

「ところで爺さん。これから覚えてゆく術は、符術や結界術、法陣術そして真言術を単体で行使するんじゃないやなくて、それらを組み合わせせて高度な術にしていって言うってたよな？」

（そうじゃ。それがどうかしたかの？）

「いや、今の俺って色んな種類の術法から摘み食いをしているような状態だけど、これでいいのかな？　ってこの間から考えるんだけど。どうなの実際？」

俺は各術法を熟知せずには別ジャンルの術を覚えている為、若干疑問に思い、鬼一爺さんに問い掛けたのだった。

爺さんはそんな俺の質問を聞くなり、笑いながら話し出した。

（フオフオフオ。涼一も術の修練をする内に、色々と考える様になったのじゃな。そういう風に疑問を持つ事も大切じゃ。では疑問に答えようかの。我がお主に教えておる術は、何もその場の思い付きで適当に教えておる訳じゃないぞ。今のお主が使える術は、幾種類かある術法の中でも基本となる物ばかりじゃ。そして、次の段階に進む為に必要な知識を我は考えてお主に授けておる。そこは心配せんでも良い）

鬼一爺さんはそう言うのと暫く間を空けてから続ける。

（じゃが、基本となる術を全て教えている訳ではない。それには理由があるのじゃよ。我が今のお主に先ず、憶えてもらおうとしておるのは『浄化の炎』を基にして発展させる術の進化の過程じゃ。これを修めれば、他の高等術の構成や理（ことわり）を理解できるからの。その為の布石として今の修練をお主に課しておるのじゃよ）

「へえ、そういう理由があったのか。あ、別に疑っていた訳じゃないよ。ただ少し気になってたからさ。まあでもこれでスッキリしたよ」

俺は今までの鬼一爺さんからの指導を思い浮かべ、今の説明と符合させて行く。

そして、『浄化の炎』の進化というものを漠然と考えるのだった。やや難しい顔をしながら俺が考え込んだせいか、爺さんは首を傾げて問い掛けてきた。

（何じゃ、涼一。まだ納得イカン事でもあるのかの？）

「ン？　ああそういう訳じゃないよ。ただ、浄化の炎の進化というのが、どんな物なのか気になったからさ。それだけだよ」

(フム、その事か。まあ教えてもよいじゃろ。じゃがその前に、涼一に聞きたい事がある。今のお主がもし何十、嫌、何百という大量の悪霊に襲い掛かられたらどう対処するかの?)

「沢山の悪霊に……襲い掛かれる?」

爺さんの問い掛けに俺は眼を閉じて考える。

そして、大きく裂けた目や口が特徴の悪霊が、四方八方から大量に俺目掛けて飛び掛ってくる様を想像した。

それは想像とはいえ身震いするほどのおぞましい光景である。

しかし、その妄想の中の俺は成すすべなく悪霊達の餌食となっていた。

それと同時に物凄い悪寒が俺の背中を走り抜けるのだった。

俺はハツと顔を上げ鬼一爺さんの顔を見る。

そして力なく呟いた。

「今の俺では対処は……無理だ。術すべがない」

爺さんは俺の弱々しい今の言葉を聞き、無言で頷いた。

そして俺を諭すようにゆっくりと話し出す。

(そうじゃ。残念じゃが、今のお主では、精々5〜10体程度の悪霊しか同時に相手できないの。嫌、気を落とすでないぞ。お主の行使できる術法を考えれば当然の話じゃ)

爺さんの話を聞き、俺はある疑問が浮かび上がった為、問い掛ける。

「でも爺さん。そんな大量の悪霊なんてそうそう出くわす事無いんじゃないのか?」

(お主、自分が『幽現なる体』じゃという事を忘れておるの。それに霊団が集まる現象は、ある条件が揃うと起き得る事なんじゃ。あまり楽観視するでない)

「ある条件?」

(まあ、それは後で教えてやる。話がそれたが、その霊団に対処できる方法というのが『浄化の炎』を進化させる事なんじゃ。つまり、広範囲に渡り敵を焼き尽くせる術という事じゃな)

「マジかよ。でも、其処まで広範囲に術を行使するとなると、膨大な霊力が必要になるんじゃないの？ それに、そんな霊力を練るのは何十年修行しても無理じゃないのか」

俺も今までずつと術の手解きを爺さんから受けている為、簡単な術の理論は分かる。そう、全ての術の効果は、霊力の扱いと絶対量に比例するというのが。

だから、今の爺さんの説明は、その基本を無視しているように思えるのだった。

しかし、爺さんは不敵な笑みを浮かべながら俺に自信満々に言う。（フオフオフオ。確かに人一人の練り上げる霊力ではそんな事は無理じゃの。じゃが、それを可能にする術すべがあるのじゃよ。涼一、もう少し柔軟に考えてみよ。霊力なんぞは外に溜めておけるじゃろうが。まあ答えを言っと、符術と真言術を組み合わせるのじゃよ）

「符術と真言術？ もしかして霊籠の符を使うのか？」

（イヤイヤ、違う違う。もっと高霊圧の霊力を溜め込む術式の符術があるのじゃ。使うのはその符術だけじゃないがの。まあ兎に角、これからの術は威力は強いが、構成やその理念をしつかりと把握していかなと使いこなせんという訳じゃ。まあこんなところかの）

「確かに、話を聞く限りだと結構面倒な手順とか踏まなければいけない術のような気がするな。まあでも、頑張つて自分の物にしていくしかないかあ」

（その意気じゃ、涼一。フオフオフオ。成せば成るじゃな）

爺さんの説明を受け、そういつた最悪な事態にも対処できる術があるとなつただけでも、今の俺には大きな収穫だ。

そして、それと同時に俄然、高等術に興味が湧いたのだった。一体どんな術なのだろうかと。

だが、今の自分はまだまだ未熟な為、とりあえず今日の修練に意識を戻し、また先程と同じ様に霊力の制御と練度の向上を図るのだった。

その日の夕方。

基礎数学の講義を終えた俺とヤマツチは、一号館のエントランスに向かい歩を進めていた。

白い壁が延々と続くやや殺風景な通路を俺達は進んで行く。

前方と後方には俺達と同じ様にエントランスホールへと進む学生達の姿ばかりだ。

また、廊下にある外に面した窓を眺めると、だいぶ日も沈んでおり、後30分程するとこの地域は闇に包まれそうな感じである。

その為、天井に埋め込まれた直管型の蛍光灯が昼の様に明るく廊下を照らしており、内と外の明暗がくつきりと分かれているのだ。た。

そんな一号館の廊下を進んで行くと、エントランス手前にあるT字路になった所で俺は立ち止まる。

ここからはヤマツチと俺の進む方向が違うからだ。

そして、ヤマツチに向かい俺は口を開いた。

「それじゃあな、ヤマツチ。此処でお別れだ。バイト頑張れよ」

そう告げるとヤマツチは微妙な笑顔を作りながら俺に言う。

「オウ、お前も頑張れよ。しかし、日比野が剣道とはねえ。正直、その選択は俺の中では考え付かなかったわ。まあ話を聞く限りだと、交通事故にあつたような感じだからな。少し同情はするけどさ」

「ハハハ、俺も考え付かなかったよ。まあ、西田君の兄さんともだいぶ気兼ねなく話せる様になったしね。何とかやってみるわ。さて、それじゃなヤマツチ」

「ああ。じゃあ、また明日な、日比野」といった後、ヤマツチはエントランスの方へと歩き始めるのだった。

俺はヤマツチと別れると、東側の渡り廊下を進んで武道場へと向かう。

その道中、上着ジャケットのポケットからルパン3世のテーマが軽快に鳴り出した。

携帯を取り出しディスプレイを確認すると瑞希ちゃんからだ。

俺は電話に出る。

「もしもし、瑞希ちゃん。どうしたの？」

「アッ、日比野さん。今って電話大丈夫ですか？」

携帯からは瑞希ちゃんの線の細い可愛らしい声が聞こえてくる。

「ン、大丈夫だよ」

「良かった。エツと、今日はもう大学の講義は終わったんですか？」

「うん、一応終わったよ。それがどうかした？」

「エヘヘ、もし良かったら一緒に買い物行きたいところがあるんですけど。どうですか？」

そこで、瑞希ちゃんには俺が剣道愛好会に入った事を伝えてなかったのを思い出す。

いい機会だと思い、俺は瑞希ちゃんに現状の説明をした。

「瑞希ちゃん。実は俺、剣道愛好会に入会してさ……。それで今から練習に行かなきゃいけないんだよ。だから、買い物は無理だなあ。ゴメンね」

俺の説明を聞き瑞希ちゃんは驚きの声を上げる。

「エエエエ、日比野さん。剣道始めるんですか？ 初耳ですよ！」

「ハハハッ。実は、この間色々あってさ。まあ今度ゆっくり教えてあげるよ。って、そういえば瑞希ちゃんも剣道やってるって言うてなかった？」

「そうですね、剣道部員ですよ。そっかあ、日比野さんが剣道始めるんだ。エヘヘッ、じゃあ今度、私と剣道談義しましょうね。それに分からない事があれば聞いてくださいよ」

瑞希ちゃんは凄く嬉しそうに言う。

同じ仲間ができた。という感じなのかもしれない。

そして瑞希ちゃんは続ける。

「じゃあ、今日はいいです。また、今度にしますから。それじゃあ、日比野さん。剣道の練習、頑張ってくださいね。あと今夜またメールしま〜す。では」

「ごめんね、瑞希ちゃん。それじゃあね」

といったやりとりをした後、携帯を切る。
そして、また武道場へと進むのだった。

俺が部室に着くと田島さんがもう先に来ていた。初めて会ったときと同じで漫画とスナック菓子里に夢中になっている。

しかし、以前と違ってもう紺色の剣道着に着替えており、いつでも練習できるように準備万端のようだ。

しかも巨体なので、剣道着のようなゆったりした服になると余計に大きく見えるのだった。

そんな田島さんは、俺が部室に入ってきたのを確認すると、三瓶のような話し方で俺に挨拶してきた。

「あ、こんにちは、日比野君。まだ誰も来てないよ」

田島さんはそう言うと、手に持った漫画に目を落とし、スナック菓子里に手を伸ばす。

今日のスナック菓子里は暴君八ネロだ。袋にはインパクトの強い、醜悪な表情の唐辛子の絵が描かれている。

また、このお菓子里。香辛料の匂いが強烈で、この部屋にその匂いが充満しているのだった。まあ嫌いな匂いではないから別に構わな
いが……。

この田島さんは漫画とお菓子里がいつもセットになっており、一昨日はきのこ山を食べていたのを憶えている。

まあだからどうした。という訳ではないが、そういう人なのである。

そんな田島さんに俺も挨拶をする。

「こんにちは、田島さん。田島さんていつも早いですね」

「そうかい？ まあ西田先輩も結構早い時あるよ」

そんな他愛ない会話をしながら俺は部屋の片隅にあるロッカーに移動する。

そこで肩に掛けた鞆を降ろしてロッカーの中に仕舞い、中から剣道着を取り出して着替えるのだった。

因みにこの剣道着は西田さんから借りている。体型が殆ど同じだった為、今だけ借りる事になったのである。色は紺だが、何回も洗濯されているようで、だいぶ色は禿げている。

で、俺の剣道着は姫会長に手配してもらっている最中で、その内来るだろうとの事だ。

剣道着に着替え終わると、部室の壁に寄りかかっている折りたたみ式のパイプ椅子を広げ、適当に座ることにした。

俺が丁度、椅子に座ったと同時に西田さんが部室の戸を引き現れた。

そして俺を見るなり笑顔で声を掛けてくる。

「オツ日比野君。早いね今日は」

「西田さん、お疲れ様です。まあ一応新人ですからね。あまりダラダラしていると姫会長の竹刀が飛んでくるかもしれませんし。ハハハッ」

「ハ、ハハ、ハハハッ。確かに、それはあるかもしれないね」

西田さんは若干乾いた笑いをしながら俺に同調すると、ロッカーの方へ行き、剣道着に着替え始めるのだった。

そうこうしている内に他の部員達もやってくる。

そして、女子部員2人を引き連れてこの愛好会のBOSS。姫野由香里会長、略して姫会長が現れたのであった。

もし、この時の登場曲を選出するなら、ダースベイダーのテーマになるのは必然であろう。

そんなアホな事を考えていると、姫会長は皆に大きな声で言った。「ヨシッ！ 全員揃ったな。それじゃ武道場に移動して整列しろッ。急げッ」

姫会長の迫力ある言葉と共に、皆は背筋を伸ばすと駆け足で移動する。まるで軍隊である。

そして、キビキビとした動作で横一列に並び、皆が声を揃えて言うのだった。

「「「宜しく願います」「」と

礼に始まり礼に終わるのが武道の真髄！ という訳で、これが練習の始まる合図なのだ。

挨拶を終えた俺は姫会長に呼ばれ、皆とはやや離れた箇所を指導を受ける。

今の俺は初心者だから当然だ。皆と同じメニューをするにはまだ早いのだ。

そんな訳で、俺は先ず、剣道する為の正しい姿勢や礼法等の基本動作から身に着けなければいけない為、一人寂しく別メニューで練習するのだった。

姫会長からこの指導を受けて分かった事だが、全ての動作は格調高く、まさしく武士の伝統といった感じだ。正しい構えから正しい心構えも生まれ、物事の変化に迅速に対応できる。といった考え方で、今までの俺の人生には無かった考え方だ。嫌、大多数の人はそうだと思う。

其の作法を体に叩き込ませる為、今日も姫会長の怒号が俺のチンを縮み上がらせるのであった。

「コリア！ オメエ、その背筋の曲がり直せって言うてるだろツ。それと右足の出し方も教えたのと違うだろがツ。次ぎやったら竹刀で尻をブツタクソツ」

「ハ、ハイイイ。すいません。次は、き、気をつけます」とビビル俺。

「分かったらあ、最初からやり直しだあアア。ダラダラしてんじやねえぞツ」

姫会長はそう怒鳴ると床を竹刀でバシバシ叩く。

「ヒツ、ヒイイイ。ゴ、ゴメンナサアアイイ」

その迫力に俺は半泣きになる。

そして今日も今日とて、見目麗しい外見から天地がひっくり返った様な言動が、武道場内に響き渡るのであった。

此処は道間邸の二階にある一室。

その部屋は10畳程の広さがあり、薄茶色の珪藻土の塗り壁と、それに反射する四角い照明器具の明かりで、温かみのあるやや黄色っぽい空間となっていた。

上を見上げると天井は竿縁天井さおがちてんじょうになっており、等間隔で入った漆塗りの黒い竿縁が格子の様に見える。

また、全面畳張りで、様相としては純日本家屋の部屋といった感じだ。

部屋の壁面には本棚と箆筒たんす、そして机が置かれており、そのどれもが美しい木目調で尚且つ手の込んだ彫刻等の意匠が施してある。それらの品々は、さぞや腕のある家具職人の手で作られた物であろう事は、容易に想像できる物ばかりなのであった。

その壁面に置かれた机に向かう人物がいた。沙耶香である。

今の沙耶香は風呂上りなのか、やや火照った顔をしている様に見える。

髪の毛もストレートに下ろしており、そのサラツとした肌理細かい黒い髪が部屋の明かりに照らされて、非常に美しく光り輝いているのだった。

服は若干ピンクがかったパジャマをきており、歳相応の可愛らしい雰囲気を出していた。

そんな沙耶香は、今、霧守高原山中から回収した霊符を机上に並べて、その術式を何とか解読しようと試みているところなのであった。

丁度その時、沙耶香の部屋に訪れる男がいた。

「私だ、沙耶香。今、良いか？」

その声を聞き、沙耶香は顔を上げると部屋の入口である襖に視線を向け、返事をする。

「はい、お父様。どうされたのですか？」

沙耶香の返事を聞き、男は襖を開けると部屋の中へと入ってきた。男はやや青がかった色の着物を着ており、その上から黒い羽織を

着るといふ出で立ちである。

物静かな動作で部屋に入ると、男は沙耶香に向かい口を開いた。

「少し話がある」

「話ですか？　とりあえず、立ち話もなんですので、どうぞお座り下さい」

沙耶香は隅に置いてある座布団を出すと、その相向かいに自分も座った。

男は出された座布団に正座で座ると、腕を組み話し始める。

「沙耶香。以前、お前が言っていた件だが。今でもその気があるのなら私は其の手筈を整えようと思う。それを確認する為に今日は来たのだ。どうだ？」

父の話を聞いた沙耶香は、当時の事を思い浮かべると鋭い表情になり、父に言う。

「それは、私がF県の高天智聖承女子学院に編入するという話の事ですか？」

「ああ、その事だ。今でも心境に変化はないか」

「はい、変わりませんわ。それに少しでも其の術者の居るであろう近くに居た方が、接触できる可能性があるかも知れませんが」

沙耶香は強い意志を秘めた目で父にそう答えた。

そんな娘の覚悟を見たこの男は、目を瞑り暫く考える。

そして、目を開くと同時にもう一回尋ねるのだった。

「沙耶香。其の者が本当に失われた秘術を行使できるかは未だ確証はない。あくまでも、その可能性があるというだけだ。徒労に終わるかも知れん。それでも構わぬのだな？」

男は沙耶香の心情を揺さぶるような事を付け加え問い掛ける。

しかし、沙耶香の意思はその程度の事では揺がない強いものであった。

それに、何故かは分からないが、自分の感が正しいと告げている様に思えたという事もあり、沙耶香はハッキリと返事をしたのだった。

「はい、それでも構いません」

「そうか、分かった。お前の覚悟を見させてもらった。では、そのように手筈を整えよう。準備が整い次第、お前には連絡する」

男はそう答えるとゆっくりと立ち上がる。

沙耶香もそれを見て立ち上がり、父に言うのだった。

「ありがとうございます。お父様。私も頑張つて術者の手掛かりを見つけて参りますわ」

「しかし、あまり無理はするなよ。それと言いつたが、我等の表の姓は道間^{みちま}だ。修祓^{しゅうはつ}を行う時の裏の姓である道摩^{どうま}の名は、その地に着いてからは無闇に口してはならぬぞ。何処にいるやも知れぬその術者を警戒させる事になるかも知れぬからな」

「はい。それも分かっております」

沙耶香は穏やかに父に返事する。

「ウム。そこまで分かつて居るのなら、もう何も言うまい。お前に任せよう。それに一樹にも様子を見るように伝えてはあるから、何かあったら連絡を取るがよい。今夜の私の話はこれだけだ」

「はい、お兄様と連絡を取りながら事を運びます。お父様のご期待に沿えるように頑張りますわ。そして道摩家の為に」

男はそんな娘を見て優しい笑顔を作り頷くと、襖を開けて一階へと降りていった。

沙耶香はこれから向かうであろう高天智市に色々と思いを馳せながら、父の出て行った方向をジッと見つめる。

そして、強く誓うのだった。

秘術の手掛かりを必ず掴んで見せると

拾七ノ巻

《 拾七ノ巻 》 宗家

10月28日の夜。今の時刻は10時丁度である。

風呂から上がって一息ついた俺は机に向かい、ノートPCを立ち上げるとWORDを起動する。

そして、幽現成る者に目覚めてから、これまでに体験してきた数々の出来事を記録してゆくのだった。

こんな記録をつけ始めたのは5日前からで、勿論、理由がある。それは、いつの日か俺と同じ様な境遇の人間がいたら、これまでの体験を参考にしてもらおうと考えたからだ。

話は変わるが。俺は当初から鬼一爺さんに、『幽現成る者』という事実を誰にも教えてはならん、と釘を刺されている。理由は分からないが、兎も角、秘密にしておかないと駄目なんだそうだ。

瑞希ちゃんと浅野さんは、俺がオカルトに関わる人間て事は知っているが『幽現成る体』という特異体質な事は知らない。つまり、今のところ鬼一爺さんと当事者である俺以外知らない事なのである。実は今から6日前、俺以外にも同じ体質の人間が居るのかどうかを爺さんに尋ねた事が、この記録をつける動機のもそもその発端であった。

その時、爺さんはこう言っていた。世の中には生まれつき俺のような境遇の人間が極僅かだがいるかもしれない。もし、そんな人間に出会う事があったら、俺がその人間を守り導いてやれ、と。

考えてみれば、確かにこの体質は珍しいが、爺さんの時代にも『幽現成る者』の伝承が既にあるという事は、俺の様な境遇の人間は居たという事だ。当然、現在でも俺以外の幽現成る者が居てもおかしくはない。

そんな事を漠然と考えたとき、俺は今の自分が非常に恵まれた環境にいる事を感謝したのだった。

何故ならば、鬼一法眼という霊術を授けてくれる師がいた為、今まで悪霊等から身を守る事が出来たからだ。

俺がこの体質になったのは鬼一爺さんの所為ではあるが、同時に身を守れているのも鬼一爺さんのお陰なのである。

だが、俺以外のもしかすると居るかもしれない『幽現成る者』は、同じ様な境遇ではない可能性の方が高い。誰にも頼れず霊障等で苦しむ者も居るかもしれない。そして、もしかすると、その為に命を落とす者もいるかもしれない……。

もし、そんな境遇の人に出会うことがあった時、俺の体験を記した記録があれば役に立つに違いない。そういった思いから、記録をつけようと俺は決心したのだった。

鬼一爺さんも俺のこの行動に賛同している。

そして『幽現成る者』という同じ境遇の者にだけは、爺さんも秘密の共有を認めてくれるのだった。

それ以来、寝る前にこうやって以前の事を思い返ししながら、俺はキーボードを打ってゆくのである。

さて、その爺さんかというと、俺の隣で興味深そうにこの作業をじっと見ている。

今まではあまり気にしてなかったようだが、ここ最近、PCの作業を見だしてからこれにも興味を持ち始めたようだ。

俺が軽快にキーボードをタイプしてゆくと、爺さんが首を傾げながら話し掛けてくる。

（涼一、この『ばそこん』というのは一体どうなっておるのじゃ？
我にはまったく理解できぬわ。これといい、けいたいでんわ、とか言う物といい。なんちゅう世の中じゃ）

「どうなっていると云われてもなあ。まあこれもテレビと同じで文明の利器といったところだよ」

俺は爺さんのストレートな質問にやや苦笑いを浮かべながら答え

る。

だが、考えてみれば鬼一爺さんのいた時代から、凡そ800年経過している為、こんな反応になるのは仕方ないかもしれない。

俺が爺さんの立場だったら、同じ反応をしていた筈だ。嫌、もっとカルチャーショックを受けているかも……。

そんなIFを想像していると、爺さんはまた質問してきた。

（そう言えば涼一。この『ぱそこん』ちゅう奴を使えば、過去を調べ事も出来る、とか前に言っておったの？）

「ああ、そういえばそんな話も以前したような気がするなあ。で、何か知りたい事でもあるのか？」

俺の問いに、爺さんは難しい表情をしながら考え込む。

そして、暫しの沈黙の後に意を決した表情すると言った。

（涼一、少し調べてもらいたい事がある。今から800年程前の人物なんじゃが、かもあきのり賀茂在憲と言う者の事を調べてくれぬか？）

「かもあきのり……一体どんな字だ？ まあいいや。ちょっと待ってってくれるか？ この一文だけ打たせてくれ」

俺はそう答えると、タイプ中の一文を打ってゆく。それが終わると記録を一旦上書き保存し、ブラウザを起動するのだった。

そしてgoogleの検索ページを開き、先程爺さんが言っていた名前を打ち込み変換する。ここで爺さんに確認をしてもらう。

「賀茂の明憲って出たけど、これ絶対違うよな？」

（賀茂は良いが、下が違う。存在の在に憲と言う字じゃ）

今の爺さんの説明で何となく分かった俺はもう一度打つ。

「ん？ てことはこれか。かもあきのり賀茂在憲って。どう、これであってる？（オオツ、そうじゃ、これじゃ。これで調べられるのかの）

「OK。じゃあ、これで検索してみるよ。えっと、今から800年程前という丁度、鎌倉時代だから、それもキーワードに追加して検索って」

俺は軽いノリでそれらをタイプするとenterを押す。

当然、キーワードに引っかけたサイトがずらっとモニターに表

示される。俺はその先頭にあるサイトをクリックした。

すると、えらい長い年表がモニターに現れる。

俺はそれを見ると、とりあえず、隣で宙に浮く爺さんに確認をしたのだった。

「こんなの出てきたけど、爺さんはこの人の一体何が知りたいんだ？」

俺がそう尋ねると、爺さんは遠い眼をして言う。

（この名は……我の真の名じゃ。鬼一法眼の名は、鬼や物の怪等を見抜く智慧の眼力が、賀茂一族の中で一番抜きん出ていた為についた号の様なものじゃ）

「へえ、そうなの？　じゃあ、鬼一法眼であだ名みたいなもんか。

ふうん、なるほどねえ。おっ、爺さんここに陰陽頭おんみょうのかみって書いてあるけど。何だこれ？」

俺は爺さんの名前が書いてある箇所箇所にそうかかれていた為、気になり問い掛けた。

爺さんは当時を振り返っているのか、穏やかな表情で話し始める。

（陰陽頭おんみょうのかみとは、その昔、国を律令法に基づき治むる八省なかの一つ、中務省つかさしやうに属した陰陽寮を取り仕切る官位の事じゃ）

「ん。てことは、爺さん結構エリートなのか？　今の話を聞く限りだと大臣とか長官のように聞こえるぞ」

爺さんの国を治むる八省くんだりという件が、俺にそういう先入観を働かせる。

しかし、爺さんは陽気に笑いながら言った。

（フオフオフオ。その昔と言ったであろう。我のいた時代では平家や源氏といった武門の棟梁が台頭しておったから、その様な力ももう失っておったわい。まあ、陰陽寮は祭事や吉凶せんぼくの卜占、星見の天文道、曆しひを作る事がある為に、以前と変わらず存在はしていたがの）
爺さんの話を聞いて行くうちに、俺の中で陰陽師というものの考え方が若干変わった。

どうやら陰陽師というのは当時の政治機関の一つだった様だ。

映画とかの影響で、呪術集団のイメージが強いがどうも違うようである。

「へえ、色々勉強になるなあ。で、爺さんは自分の事が後世に残っているかどうかを知りたかったのか？」

（それもあるが、今の世の賀茂一族はどうなっておるかと思うての。我の事が今の世でも記されているのは分かった。次は賀茂の一族のを見てくれぬか？）

「了解つと」

そして、俺はまた軽いノリで検索をする。

しかし、サイトを検索して暫くすると、あるサイトのところで予定外の内容の記述が、俺の目に飛び込んで来るのだった。

俺は爺さんにサイトの内容を説明をするかどうか迷った。

何故ならば、賀茂家の本流の家系は永禄八年（1565年）に、勘解由小路在富かでのこうじ あきとみという人を最後に断絶してしまっていたからだ。

因みに賀茂家は室町時代から勘解由小路かでのこうじと称したらしい。理由は良く分からん。それとは別だが、安倍家もこの時期に土御門つちみかどと名を変えたそうだ。ややこしやあゝである。そして、この土御門家も、その後の世で衰退していくようだ。

だが、江戸時代に入るとこの両家に救いの手が差し伸べられる。

江戸幕府が陰陽師を統括する理由で、賀茂家の分家である幸徳井家かていと土御門家つちみかどを復興させたのだ。

しかし、それでもまた歴史に翻弄される事になる。明治時代に入ると明治政府は陰陽道を迷信として廃止するのだ。要するにこの両家は衰退と繁栄を繰り返して今に至るといふ訳である。

このネット上に書かれた歴史を辿ると、凄く山あり谷ありで記録されているのだった。正直、人生がこんなのだったら俺は嫌だ。なだと思ってしまう。

で、俺はそれを説明しようかどうか悩んでいた。恐らく、爺さんもショックを受けるだろうと思うからだ。

そんな風に脳内で色々と考え中であるが、隣では鬼一爺さんが真

剣な表情でこう聞いてくるのだった。

（涼一、一体何が書かれておるのじゃ。早く教えてくれぬか？）と……。

そんな爺さんの真剣な表情を見ると、とてもじゃないが俺は嘘などつけない。今まで散々世話にもなってるし。

従って、サイトに書かれている内容をそのまま鬼一爺さんに説明する事にしたのだった。

「分かったよ爺さん。でも、ここに載ってるのはあくまでも第三者が記録した物だ。ビックリする様な事が書いてあっても悪意とかそういうのは無いから、それだけは頭に入れといてくれよな」

俺は一応念を押す意味も込めてそう言った。

（分かっておる。さあ、説明するのじゃ）

と、爺さんの確認を取ったところで、俺は一旦、深呼吸をしてから説明を始めるのだった。

「えっと、ここにはこう書かれているんだ」

それから10分後。

思ったとおり、鬼一爺さんはやや元気をなくしていた。当然だろう。

子々孫々と受け継がれていると思っていた自分の家系の本筋が途絶え、拳句の果てには、分家の方もどうなっているか分からないという現状であれば、そうなるのも仕方が無いように思える。

当時の賀茂家というのが、どういった状態であったかまでは流石に分からないが、兎も角、俺の今開いてるサイトの画面にはそう表示されているのだった。

そんな爺さんを見て、少し元気付けてやらねば、と思った俺は若干陽気な口調で爺さんに言った。

「爺さん。まだ、完全に分家の方は途絶えた訳じゃないだろう。今も何処かで陰陽の技を伝えているはずだよ。元気だしなよ」

俺の言葉を聞き、爺さんは目を閉じるとやや低いトーンで答える。

(……そうじゃな。確かに、本筋が途絶えてしまったのは残念じゃが、これも世の理ことわりと思っしかないの。しかし、今の涼一の説明を聞くと、どうやら他の陰陽道の大家も衰退を繰り返しておるようじゃな。激しい歴史の動乱に抗ってゆけるほどの力が、当時の陰陽師達には無かったという事か。まあ、これも時勢なのじゃろう。寂しい話じゃがな)

鬼一爺さんは、そう総括すると目を開き、俺に顔を向けた。

その表情は先程までとは違い、幾分か元気を取り戻したようである。

俺はその様子を見て少し安心すると、サイトの中で気になる記述があった為、それを問い掛けるのだった。

「ところで、爺さん。聞きたい事があるんだけどさ。この賀茂家というのが陰陽道の宗家と記述してあるけどそうなのかい？」

(そうじゃ。我のいた時代では安倍氏あへつじも台頭していたが、それ以前の陰陽寮を仕切る陰陽頭おんみょうのかみは賀茂氏かせつじが代々担っておったからの)

「へえ、由緒ある家柄おんみょうのかみって感じやね。おッこれを見ると、爺さんの後に安倍泰親あへのやすちかって人が陰陽頭おんみょうのかみになってるね」

俺がモニターを見ながらそう言うと、爺さんは当時の事を懐かしんでるのか、笑顔になったり悲しい表情になったりして話すのだった。

(そうじゃ。優秀な陰陽師であり、術者でもあったの。じゃが、源氏と平家の戦いが終わると、自分も役目を終えたかの様にこの世を去って仕舞いおったがの……)

「ふうん。そう言えば、さっき爺さんの話を聞いてて思ったんだけど、陰陽寮おんみょうのしやうって今で言う国立天文台のような所なんだな。当時の天文学や暦を計算してたところを見るとそんな気がするよ。今習ってる呪術関係のイメージの方が、色濃く感じるから想像つかなかったけど」

すると、爺さんは今の俺の言葉を聞くなり、いつもの様な笑い声を上げながら言うのだった。

(フオフオフオ。以前も言ったと思うが、我等の術は秘匿とされていた部類の術じゃ。当時の帝みかどですら、この事は僅かな部分しか知らぬ話じゃからな。それに陰陽道とはあくまでも大陸から来た陰陽五行説という自然思想に基づいた学問の事じゃ。陰陽道は靈術や呪術とは違ちがうのじゃよ。まあ我等が祭事や修しゅ被ぼも行いっていたから、そういつた呪術の面も色濃こく伝つえられておるのじゃる)

爺さんは少し間を空けて続ける。

(ついでじゃ、賀茂氏の祖先の話もしてやろう。遙か昔に大陸から伝わった道術や密教、そして日ノ本古来からある靈術等が元ではあるが、それらを組み合わせ完成された術の領域にまで高めたのが、賀茂氏の祖 役小角えんのおづぬと呼ばれる方じゃ。正しくは賀茂かものえのきみおづぬ役君小角という。我も若い頃は祖先の色んな説話を良く耳にしたわい。鬼を二匹従えておったとかの。まあ、そんな話は殆ど作り話ではあるが。ただ、とてつもない靈力の持主であったようじゃ。そういつた記述を我は陰陽寮の書物でよく見かけたのを憶えておる。恐らくは本当にそうだったのじゃろう。そのくらいで無いとあのような数々の高たか等な呪術は到底扱あえぬからの。まあそういう訳で、涼一に教えておる術は全て役小角えんのおづぬ様が編み出した秘術なのじゃよ。これは憶えておいて欲しい)

「役小角えんのおづぬ様か。了解、憶えておくよ。でも、途方もない話だなあ。

なんか、爺さんの話を聞いてるとJHKの『その時、歴史が動いた！』のナレーションを思い出すよ」

俺はとりあえず思おもった事を口にした。

因みにJHKとは、ジャパン放送協会の略である。

(フオフオフオ、JHKというのは良く分からぬが、まあそういう事じゃわい)

「秘匿にしていた理由は以前聞いたけど、当時は陰陽師が悪靈や物の怪を退治してたんだろ？ しかも以前の話を聞く限りじゃ、俺の習まなぶ術は極限られた人間だけしか伝つえてない様だから、術者は色々忙いそがそうだね」

（フム、確かにそうじゃが。そういつた修祓しゅうぼくを行うのは何も陰陽師だけではないぞ。当時から呪禁道じゆんまうや密教者、靈術に長けた者等が沢山いたからの。そういつた民間の者達も修祓しゅうぼくを行っておつたのじゃ。陰陽師だけでは流石に無理じゃわい）

俺は今の話を聞き考える。

そして、聞きなれない言葉が気になり、問い掛けたのだった。

「なあ、今出てきた修祓しゅうぼくって言葉は何？ 何となく前後の話から意味は想像できるけどさ」

（ああ、修祓しゅうぼくというのは、その昔、宮中で使われておつた言葉で御祓みはらいの事じゃ。まあ、あまり深く気にせんでも良いぞ）

「あ、御祓みはらいの事が。へえ、色んな言い方があるんだね。オツ、もうこんな時間だ」

俺はそう納得すると、テレビの上に置いた時計に視線を向かわせる。すると、時刻はもう10時45分を刻んでいた。

もうそろそろ寝ないと流石に明日の朝が辛い為、鬼一爺さんにその事を告げてノートPCの電源を落とす。

そして、洗面所へ移動して歯を磨いた後、部屋の明かりを消してこの日は床に就いたのだった。

11月1日 高天智聖承女子学院。

学園町の西側に位置する、この女子学院が高天智市に創設されたのは今から30年前の事で、比較的歴史の浅い学校法人である。

一階の外壁を覆うレンガ造りを思わせる様な赤い壁と、ビザンティン建築様式を思わせる丸いドーム型の屋根が特徴であり、この周囲にある現代建築の建物と比べると一際目を引く存在であった。

長崎のハウステンボスの中にあっても違和感はそれ程ないであろう。その佇まいは、明治時代の文明開化時に建てられた西洋型建造物の様であり、遠くから見るとミニチュアの美術品の様に見えるのだ。

また、敷地面積も広く、4階建ての大きな校舎が3棟、川の字の様に並んで建てられている。

校舎の前には大きなグラウンドやテニスコート等があり、そのまた校舎を挟んだ反対側には、大きな体育館と弓道場や武道場、そしてプールといった施設が綺麗に整備されて佇んでいるのであった。

しかし、この学校は他の公立学校とは違い私立学校である。しかも、ミッション系の学校である為、そういった公立校とは一線を画している部分があった。

それは体育館の付近に礼拝堂が建てられているからである。神秘的な雰囲気纏う礼拝堂の天辺には、こういつた建物に良く見られる金色の大きな鐘が設置されており、それが納まる鋭利な屋根をした鐘塔は周囲全方向から確認出来る。

外壁は目が覚めるような純白で、また、色彩鮮やかな意匠を凝らしたステンドグラスが左右の外壁に嵌め込んでいる。ステンドグラスの模様はイエス・キリストの生涯を描いた模様だ。

そして、その外見は正に穢れ無き聖堂といった雰囲気、廠かで神々しい建造物となっているのであった。

また、この高天智聖承女子学院は中・高一貫校で、校舎もそれぞれ別棟となっている。中・高等部を含めた全生徒数は1200人程といったところで、この近辺の教育機関としては、かなり大きな部類に入るのである。

制服は中等部と高等部でデザインが違っており、学校関係者じゃなくても一目でどちらの制服か分かる仕様になっていた。

そんな高天智聖承女子学院中等部の校舎での話である。

「瑞希、オツハヨー」

清掃が行き届いた2階中等部校舎の廊下を歩いていた瑞希は、聞きなれた声が後方から聞こえてきたので振り返る。

すると、思ったとおりの人物だったのか、瑞希のその表情には驚いた様子などはない。

その人物を見るなり優しい笑顔を作ると、声をかけた人物が目の前に来たところで、瑞希は口を開くのだった。

「オハヨ、由梨。どうしたの？ 今日はいつもと違ってテンション高いけど」

由梨と呼ばれたこの女子生徒は、瑞希と良く似た背丈と体型をした子である。

髪は短くカットされたショートヘアをしており、黒縁の眼鏡が特徴のややボーイッシュな雰囲気を持った女の子である。

由梨は瑞希に向かい目を大きく輝かせて言う。

「ビッグニュースがあるのよ」

「ビッグニュース？ ってどんな話」

瑞希はいつもと違うテンションの友人を見て興味が湧く。

だが、由梨はその時々によってお調子者のような感じの時もある為、瑞希はそんな大した事ではない様に思い始めていた。

しかし、知らない事は知りたくなるのが人間というものである。当然、瑞希もそうは思っていて、も気になる為に、問い掛けたのだ。つた。

「実は、私等のクラスに転校生が来るんだって。勿論、情報は先生からだから間違いないと思うよ」

「へえ、そうなの？ じゃあ、今年は私を含めて二人目の転校生ということなんだ」

と、瑞希は下唇に人差し指を当てて、斜め上を見上げる仕草をしながら言った。

それを聞き、由梨も腕を組みながら同調する。

「あ、そういうえは珍しいね。一年の内に二人、しかも同じクラスだなんて」

「だよ。あ、由梨。そろそろ朝のHR始まっちゃうよ」

瑞希は腕時計に目を向けるとそう告げる。

すると丁度、天井に埋め込まれた丸いスピーカーからチャイムが鳴り出した。

「あ、ホントだ。ダツシユだよ、瑞希」
「だね！」

二人はそのチャイムを聞くなり、教室へと走って行くのだった。

瑞希と由梨が教室に着くと他の皆はもう席についていた。

だが、まだ先生は来ておらず、間一髪間に合ったといった感じである。

瑞希はその光景を見てホッと表情を緩ませると、窓際の方にある自分の席へと向かうのだった。

その途中、朝と一緒に学校へ登校した加奈が、瑞希に声を掛けてきた。

「瑞希、危なかったね。なにしてたの？」

「実は、購買から戻る途中、由梨と世間話してたの。そしたら、チャイムが鳴り出しちゃって。で、ダツシユで教室に戻ってきたんだ」

瑞希はそう言うとペロツと舌を出す。

「世間話って。なんかオバサンみたいだよ、瑞希」

「エヘッ、いいのいいの。細かい事は気にしない、気にしない」
そんな遣り取りをした後、瑞希は自分の席に着く。

瑞希と由梨が席について暫くすると、担任の女教師が現れた。

クラスの生徒達は、入り口の真っ白なスライドドアに付いた小さな窓ガラスに視線を向けている。そこからは廊下にいる担任の顔が見えるからである。

担任教師は教室の入口の前で立ち止まると、廊下のほうで誰かと話をしている様である。クラスの生徒達も不思議に思ったのか、互いの顔を見合わせてヒソヒソと小声で話を始める。

当然、瑞希もその一人であり、自分の斜め前に座る加奈に小声で言うのだった。

「加奈、なんか知らないけど、転校生が来るって由梨が言ってたよ」

「エッ、そうなの？ 転校生来るんだ。初耳よ」

加奈は、やや驚きつつも、入口のスライドドアを眺める。瑞希も加奈と同じく入口を興味深く見つめた。

廊下の方では、ある程度話が纏まったのか、その女教師はニコやかに頷きながら教室のスライドドアを引いたのだった。ドアが開くと同時に教室内のヒソヒソ話もピタリと止む。

スライドドアが最後まで引かれると、上下灰色のスーツに身を包む若い女性教師が姿を現した。

その教師はスラツとしたスマートな体型をしており、少しウエーブのかかった長い髪の毛は、肩のやや下辺りまで伸びている。

穏やかな表情と雰囲気を持っており、やや細く長い目が特徴の女性であった。

女教師は爽やかな笑みを携えながら、教壇の前に行く。

そして、教壇の机に向かうと、このクラスの学級委員と思われる子が号令を掛けるのだった。

「起立・礼・着席」と大きな声が教室に響きわたる。

それらの動作をクラス全員が行った後、担任教師は左から右へと視線を移動させクラス全体を見渡す。そして、口を開いた。

「皆さん、おはようございます。今日はホームルームを始める前に、皆さんに紹介したい転校生がいます。それじゃ入ってきてください」担任教師がそう廊下の方に向かって言うと、入口のドアが引かれ一人の生徒が入ってきた。勿論、沙耶香である。

今日の沙耶香も前と変わらずに、長い髪をツインテールに赤い髪留めで纏めていた。

沙耶香は新調したこの女子校の制服である紺のブレザーとグレーのスカートを身に着けている。その新しい制服のせいか、いつもより背筋が真っ直ぐになって見える。また、やや緊張をしているのか、何処となく硬い動きで担任教師の隣まで歩いてくるのだった。

担任教師は隣に来たのを確認すると、やや小さい声で沙耶香に言った。

「それじゃ、自己紹介を皆さんにして下さい。落ち着いてね」

「は、はい」

そう促された沙耶香は、やや顔を赤らめながらクラス全員に自己紹介をする。

「は、初めまして。この度、愛知聖承女子学院から転校してきました道間沙耶香と申します。よ、宜しく願いします」

沙耶香の自己紹介が終わると、担任教師が付け加えをする。

「道間さんは、家族のご都合で愛知県名古屋市のF県高天智市に来る事になりました。まだ、この地の事はあまり分かりませんから、皆さんも道間さんに色々教えてくださいね」

担任教師が笑顔でそう言うと、クラス全員がやや砕けた感じで声を揃えて言うのだった。

「……よろしくね、道間さん」……と

そんな、明るい雰囲気のある教室を見て、沙耶香は若干驚くと同時にホッとす。

そしてもう一度、今度は笑顔で皆に挨拶をしたのだった。

「こちらこそ、宜しく願います」と

拾八ノ巻

《 拾八ノ巻 》 五行相関の符術

11月1日 高天智市立大学 武道場

今、俺の目の前には、面・胴・籠手・垂れ・竹刀といった武具をフル装備した田島さんが、『動かざる事山の如し』といわんばかりに、微動だにせず竹刀を中段に構えている。

その様は非常に威圧的であり、田島さんが巨体という事も相俟って、紺色の壁の様にも見えるのだった。

しかし、そんな事よりも俺にはこの対峙が始まってからずっと気になってる事があった。それは、目の前にいる田島さんを見れば見るほど、一体、何処で防具を手に入れたのだろうか？ と考えてしまふからである。

何故ならば、どう見てもこの田島さんサイズの防具というのは、既製品ではないように思えたからだ。嫌、確実に特注だろう。需要が物凄く限られてくる。明らかに田島さんの様な体型は少数派だ。

それに、俺の目はもう一つの事実を捉えていた。それは田島さんの防具だけが妙に新しい事である。見るからに新調した防具だ。

それらの事実を繋ぎ合わせていけば自ずと答えは見えてくる。

謎は全て解けました。田島さん……貴方に合う防具が無かったのですね。心中、お察しします。

なあんて事を考えながら、俺は模擬試合で田島さんと対峙しているところなのであった。

今回、この模擬試合をする事になったのは、言うまでもなく姫会長の指示だ。

大会までもう一ヶ月を切った為、今月に入ってから実戦で、剣道を覚えるカリキュラムを姫会長が作り上げたのだ。そういう訳で、

今に至るといふ事である。

だがしかし！ 今の俺は田島さん以外にいる別の敵とも戦っていたのだった。そう見えざる強敵と……。

田島さんがフル装備という事は、当然、相対する俺もフル装備にしないとイケない訳である。

俺の装備する防具は、今まで幾多の戦士に愛用されてきたであろう、所々にシミや擦り傷のある、それはそれは物凄い一品であった。シミや擦り傷程度なら俺も問題は無かったのだが、そういう訳にはいかなかったのである。というか、薄々勘付いてはいた。この武器達の優れた性能に。

そんな武器に敬意を表して、某シュミレーションゲームからの引用ではあるが、俺は名前をつけることにしたのだった。

それでは紹介しよう。

目録《 汗臭い甲冑・ヌメヌメする兜・むず痒い籠手 》

この三品が今の俺の身体に装備されている。

因みに、まだ『握りが臭い竹刀』という武器も存在するのだが、これは俺が竹刀を購入すると同時に、俺自身の手で部室の未使用口ツカアの奥に仕舞い、固く封印を施してある。幾多の戦士に愛用されたその名刀は口ツカアの中で、まだ見ぬ武芸者ひがしやが来るのを待っている事だろう。合掌。

まあ、そういうわけで、俺は今この武器に付加された力とも戦っているのだった。正直に言うと、これらの付加された力は、俺の中では呪いのカテゴリーに登録されている。

某シュミレーションゲーム タク イクス・オ ガでは、これら4品を全て装着するとそのあまりの臭さから敵が近寄らなくなり、尚且つ、攻撃対象から外れるという冗談の様な効果を秘めた武器であった。

しかし、このゲームを製作した人達は大切な事を忘れている！ 何故なら、現実世界に於いて被害を最も受けるのは周囲の敵ではなく、密着させている装備者だからだ。これだけは譲れない。体験中

の俺が言うのだから間違いない。

そして、今問題なのは、これらの武具に付加された力たるや凄まじく。これを身に着けた状態では、もし周囲がラベンダーのお花畑であっても、花の清涼感溢れる香りを楽しむ事は、最早、不可能な事なのであった。

武具を外した後は暫く鼻が利かない日々が訪れそうな気がする。フト、そんな暗い未来を想像するくらいに……。

だが、俺に襲い掛かってくるのは臭い^{にお}だけではなかった。俺が装着した面、つまり『ヌメヌメする兜』だが。これには匂い以外にも凄まじいスペシャルパワーが備わっていたのだ。まさか、こんな症状が現れるとは思いもしなかった。俺の予想の斜め上を行く性能である。

そのスペシャルパワーとは、この面を被ると目がシヨボシヨボして涙が止まらないという事だ。まるで花粉症のような症状である。

何故そうなるのか理由は分からないが、恐らく、身体が何某^{なにがし}かの拒絶反応を示しているのだろうと思う。これは身体に良くないことだ。早く外セツと。

そんな正直な反応をする体を鞭打ちながら、俺はこの厳しい状況を必死で耐えていたのだった。

何故なら、気を抜いた途端、天空の城ラ ユタのムスカ大佐の様に『目ガアアア、目ガアアア』と、俺の取り乱す姿が容易に想像できたからだ。

以上の事から、今の俺はとてでもないが、剣道をする以前の事態となっているのだった。

数日前、西田さんに武具を洗う事は無いのか？ と尋ねてみた事があった。

しかし、こんな答えが返ってきたのだ。

「防具の洗濯かい？ そうなんだよ。凄い臭^{にお}うだろ。俺も出来るならしたいんだけど。専門店じゃないとクリーニング出来ないんだよ。もしなんなら、今度、ファ リーズを持ってくるよ。これで少しは

臭いを緩和できる筈さ。ハハハッ」

と、かなり軽い感じで西田さんは言っていたが、俺にとっては由々しき事態であった。

今まで、こう見えても洗濯だけはシツカリとしていた俺は、潔癖症とまではいれないが、それなりに綺麗好きな性格をしている。

拗って、こんな幾多の戦士の汗を染み込ませた防具類は、俺の脳内で衛生上良くないと判断していたのだった。勿論、気分的にもである。

そういった事もあり、俺は何とかして洗濯しようと試みてみたが、やはり素人には無理だった。

で、俺は仕方なくファ リーズという一種の幻覚作用を装備者に与える妙薬を使用する事にしたのだった。

因みに、このファ リーズを俺は聖水と呼んでいる。但し、消臭持続時間は量に比例する為、使用するときは用法用量を正しく守らないと、試合中に聖水の効果が切れて大変な事態に陥る事になるので注意が必要だ。

なんて事を思っていたが、まさかこんなに早く効果が切れるとは思わなかったので、今の俺はそれについてもショックを受けているのだった。計画失敗ッ！

模擬戦が始まる前に沢山振り掛けた聖水の効果が切れた為、そんな風に嘆いていたその時！ 田島さんが凄いスピードで面を打ちに踏み込んできた。

俺はその刹那、ハツとして現実に戻る。田島さんは巨体に似合わず、中々に素早い動作だ。

田島さんの練習風景を見ていて気付いた事だが、太った人というのは持久力に問題があるだけで、瞬発力というのは常人を凌駕している様に俺は感じたのだった。

その為、田島さんの素早い踏み込みは、ある程度俺の中で予想が出来ていた。

俺は頭上に振り下ろされた竹刀を何とかバックステップでかわす。

そして、次の攻撃に備えて田島さんを見据えながら、竹刀を中段に俺は構えるのだった。

オカルトに携わる前の俺ならば、恐らく、今の一撃はモロに喰らっていただろう。

避けれたのは、暫く前まで連日の様に行っていた悪霊退治のお陰もある筈だ。それもあり、こういった戦闘行為に対しては、割と冷静に物事を見定められる様になっていたからである。

そして、こういった身の危険を肌で感じれば、先程悩んでいた臭いだのは気にならなくなる。

しかし、目がシヨボシヨボして涙が出るのだけはそういう訳にはいかなかった。これは確実に今の俺にハンデとして押し掛かっているのだった。

瞬きを何回も繰り返しながら、視界を確保できるように俺は努める。

そんな事をしている内に、今度は胸を狙いに田島さんは切りかかってきた。

俺はそれを不恰好ではあるがなんとか横に逃れて回避する。

その時であった！

俺は何故か分からないが、足元がグラつく。

そして、両膝を突いて四つん這いになり、うつ伏せに倒れてしまったのだ。

「止め！ 大丈夫か？ 日比野君」

審判役の西田さんは試合を一旦中断すると、倒れた俺に駆け寄ってくる。そして、妙に心配そうな表情で俺を呼びかけるのだった。

面の格子越しに見えるそんな西田さんの顔を見上げて、俺はこう呟いた。

「す、すいません。なんか知らないんですけど、平衡感覚が突然おかしくなって倒れてしまいました。なんかグラツときたというか」

その答えを聞いた西田さんは、乾いた笑いを浮かべてこう言った。「ハ、ハハ、ハハ。やっぱりか？ 日比野君で3人目だよ。その防

具を装着した人は何故かこうなるんだ。まあ原因は俺も分かるよ」

と、西田さんはサラッと、とんでもない事を言う。

それに続いて、田島さんも話し掛けてきた。

「日比野君、防具にやられたね。初めてこの防具を装備した人は皆こうなるんだよ。超臭いもんね。話は変わるけど、日比野君て結構反射神経いいね。避けるの旨いよ」

俺は面を取ると、新鮮な空気を取り込む為に大きく深呼吸をする。そして言った。

「竹刀で受けてしまうと、俺と田島さんでは体重差がありすぎて逆にヤバイですからね。今の俺じゃ、とりあえず避けるしかないです」
「見かけによらず、意外と冷静だねえ日比野君は。まあ、でも防具には敵わなかったね。ハハハハッ」と、西田さんは爽やかに言う。

「西田さん、笑い事じゃないですよ。何なんですか、この防具は……。付加された臭いがとんでもないですよ。目から汁は出てくるし」
「ハハハッそうだよねえ。今、部屋にある全防具は、かなり何人もの汗が染み込んでいるし、尚且つ、クリーニングは何年も出されていないからねえ」

西田さんは顎に右手を当てると武道場の天井を見ながら言うのだ。つた。

そんな西田さんの説明を聞きながら、俺は強く抗議した。

「西田さん。俺、この防具を着けたまま試合は無理ツス。相手に集中するのは絶対無理ツス」

と、野球部員のような言い方で、西田さんに俺の意見をハッキリと伝えたのである。

西田さんはやや黙り込むと何かを閃いたのか、拍手を一回打ち、俺に言った。

「じゃあ、姫にもクリーニングの相談してみるよ。俺の防具も流石に臭うようになってきたからね」

「どうか宜しくお願い致します。西田様」

と是が非でもそうして欲しかった俺は、物凄く遜へりくだつて丁寧に頭を

下げ嘆願したのだった。

そして、頭を上げると俺は周囲を見回す。すると、姫会長が居ない事に気がついた。

俺は不思議に思い、西田さんに問い掛ける。

「あれ？ 姫会長は何処に行かれたんですか？ 試合始める時には居たのに」

「ああ、姫かい？ 姫は12日後にある大学祭の打ち合わせで実行委員会のところに行ってるよ。剣道愛好会もイベントをする予定だからね」

「へえ、学祭になにするんですか？」

俺が尋ねると、西田さんはやや遠い目をし、どこか思わせ振りの口調で言うのだった。

「……そ、それは姫から説明があると思うよ。今日はもう顔を出さないと思うから、明日聞くといい」

そんな西田さんの仕草に、若干嫌な予感がした俺はそれ以上は聞かない事にした。

その後はとりあえず試合形式の練習はやめる事になり、防具を外して素振りの練習をする事になった。

そんな感じでこの日の練習は終えたのだった。

とある森の中に。

西の空を夕日が紅く染め上げる時刻の事である。

其処は、何かを祭った小さなお堂のある場所であった。

この場所は、森の中においてやや開けた場所であり、夕暮れ時とはいえ若干明るくなっている。

また、それほど人が足を踏み入れる場所ではないのか、お堂の周囲はあまり手の掛けられた様子は見あたらな。その為、背の低い雑草や落ち葉などで周囲の地面は覆われていた。

お堂の周りには長い年月をかけて育った太い幹の木々が、お堂を

囲うように真っ直ぐとに立ち並んでいる。その様はまるでお堂を護っているかの様な錯覚を見る者に与えるだろう。

お堂の大きさは一坪程の床面積で、神社をそのまま小さくした様な建物である。観音開きになった正面の小さな扉には黒い南京錠が設けられており、今は固く閉ざされていた。その為、中に何が祭られているのかは分からない状態である。

お堂の外壁はだいぶ色あせ、やや黒ずんだ剥き出しの柱や外梁は建てられてから長い年月が経過しているのを感じさせる。屋根には地面と同様に、周囲の木々から落ちたであろう木の葉が、所々に降り積もっている為、お堂は周囲の景色に溶け込むように違和感なく存在しているのであった。

日は暮れ始めており、幾ら開けた場所であるとはいえ、このお堂のある所も大分暗くなってきた。そういつた事情と茶色の落ち葉が辺り一面を覆う事もあるせい、非常に暗く寂しい雰囲気がある所なのであった。

今、そのお堂に向かい歩を進める一人の人物がいた。

歳は30半ば位であろうか。やや痩せぎすの鋭い目をした男で、口と顎には綺麗に手入れされた髭が蓄えられている。頬のこけた顔の輪郭をしており、その人相はやや相手を威圧するような雰囲気を持っている。

身長は190cm以上はあり、痩せてはいるが背丈が高い為、非常に大柄な人間に見える。服装は深い紺色のジャケットに黒いスリムジーンズといった出で立ちで、この暗い空間に溶け込むような姿である。

肩より下に伸びた長い黒髪はストレートに伸ばしており、時折、木々の間を縫うように吹き抜ける風が、この男の髪を靡かせて顔を半分程覆い隠す事がある。その様は、もし今この場に相対する者が居たならば、畏怖の念を与え不気味に思わせるには十分な姿であった。

また、正面を睨むかのように目を細め、スツと背筋を伸ばして歩

くその姿からは、やや殺気が感じられる。その為、恐らくこの男を見た者はその姿や雰囲気から、堅気の間人ではない様に思うであろう。

以上の事から、それ程にこの男の姿や雰囲気は異様な感じに見えるのだった。

男はそのお堂に向かい静かに歩を進めてゆく。

その姿は機械的な動きであり、均等な歩幅で歩く仕草からも不気味さが伝わってくる。

男はお堂の正面に辿り着くと、其処で一旦立ち止まり周囲を見回した。

その表情は見る者を射抜くかのような鋭い視線である。

そして、周囲に人が居ないのを確認するかのように念入りに行っているのだった。

周囲を一通り確認し終わると、男はジャケットの内ポケットから、銀色の小さな鍵を取り出す。その鍵をお堂の扉に設けられた、南京錠の鍵穴に差込んで解錠すると、観音開きの扉を左右に開くのだった。

お堂の中は、この薄暗い周囲の影響もあってか、ヒソソリとした佇まいになっている。

その中には木で作られた小さな不動明王の古い仏像が、台座の上に安置されていた。その不動明王は大きく目を見開く憤怒の表情をしており、右手には大きな剣を掲げ、真つ赤に揺らめく炎を背負う姿をしている。その為、仏像の全体の雰囲気は参拝する者に睨みを利かせ、威圧的な雰囲気を与えているのだった。

仏像の手前には古さを感じさせる、やや黒ずんだ賽銭箱が置かれていた。

男は賽銭箱を両手で持って横にずらすと、その下にある薄っすらと切れ目の入った床板を取り外す。すると其処には、小さな収納スペースがあり、その中には一通の白い封筒が納められているのであった。男はそれを取り出すと、木板を嵌めて賽銭箱を元の位置に戻

す。そして、お堂の扉を閉めてまた南京錠を掛けた。

それらの作業を終えると、早速、封筒を開封して中の便箋を取り出した。

男は便箋を広げると書かれた内容を確認する。

そこには無機質なワードのゴシック体フォントで、こう書かれていたのである。

依頼書

眩道斎 殿

以下の者の呪殺を11月4日迄にお願いしたい。

尚、呪殺金額5000万はいつでもどおりの受け渡し方法でお願いする。

《 呪殺対象者 》

光民党党首 鴉川幸雄 衆議院議員

陽 炎

男は紙面を見るなり、不敵な笑みをこぼすと封筒に便箋を仕舞う。そして、再度周囲を見渡した後、今来た道をゆっくりとした足取りで戻るのであった。

愛好会で武具の洗礼を受けた俺は、練習を終えるとそのまま家路についた。

因みに鼻が暫く利かなかったが、約30分程で色んな香りを嗅ぎ分けれる様にまで回復したのでホッとしているところだ。あのまま武具を装着したままだったらと思うと、やや背筋が寒くなってくる。

しかし、あまりネガティブに考えてばかりもアレな為、とりあえず、今は忘れるように努力していたのである。

アパートに戻った俺は食事を終えた後、ここ最近の日課である符術の修練に取り掛かった。

悪霊退治の変わりに始めた符術の修練ではあるが、俺自身は有意義に爺さんの講義を聞いている。やはり、俺も男だ。こういった魔法の様な力には、小さい頃からやってきたTVゲーム等の影響もあり、ロマンを感じるのだった。それに、以前の俺ならば完全に否定する立場であったが、今の様な境遇に落ちいつてからは、寧ろ積極的にそういった知識を学ぼうとする自分がいる為でもある。

話は変わるが。世界各地にあるこういった類の不思議な現象や説話等も、最近の俺は割りとすんなり受け入れる様になっていた。また、ネット上にあるオカルトや呪術関係のサイトを偶に覗く事があるが、それらの中に於いても考えさせられる記述も少しはあるのだ。やはり其処には、短い期間ではあるが、俺自身の数々の経験から有り得るかもしれない、という意識改革が出来てしまっているからだろう。そう、俺は結論していたのだった。

それともう一つ、真言術を教えてもらい始めて暫く経った頃から、俺の中で気になっていた事があった。それは、このある一定の霊圧にまで高めた霊力が音の波に反応するという性質の事だ。この理論を西洋の魔女伝説や、ルーン文字等の魔法や魔力にまつわる話に当て嵌めて考えると、全ての伝説があながち迷信と言い切れない気がしたからである。

以前、鬼一爺さんはこうも言っていた。『真言の術は人によって霊力変化の仕方がだい違うんじゃ。原因は分からぬが、恐らく、其の者の育った環境で違いが出るのじゃろう』と。そして、霊力とは霊体の放つ力。即ち、魂の力である。魂もまた自身の身体の成長と共に育ってゆく。

そういった事も踏まえると、今の俺にはこの仮説が浮かんで来るのだった。その人間の育った環境……つまり、育ってきた言語の環

境で魂の性質も変わるのではないかと。もしそうであるならば、人によって霊力反応の仕方が変わるのも説明がつく様な、そんな気がしたのだった。それと同時に、霊力と魔力は呼び方が違うだけで同じものなのかもしれない、とも。

但し、この理屈でいくと日本語圏で育った人間は、英語圏やその他の言語圏の『言霊の術』というのは使えないのかも知れないが……。

まあ、こればかりは実際に各国の呪術等を調べてみない事には分からないので、あくまでも仮定の域は出ない話である。しかし、ここ最近湧いてくる術法理論の好奇心が俺の心を揺さぶる為、機会があれば検証してみたい事柄として、記憶の片隅に留めて置こうと俺は考えているのだった。

また、こういった情報を得る為に最近の俺は、西洋のオカルト史や他国の古代王朝のオカルト話等も、ネットを使い調べ始めているのである。

と、まあその話は今は置いておいて符術の話に戻す。

今の俺は『障壁の符』と呼ばれる符術を物にすべく、最終段階に入っていた。

実はこの符術、一度の術行使に5枚の符を同時に使う為、その過程が結構ややこしいのである。

そんな訳で、俺は各霊符を順に素早く発動すべく、霊力のコントロールをしている最中なのであった。

因みにこの符術の目的は、外敵から身を守る為に術者の周囲に霊力障壁を張るという術で、簡易防御結界といった感じである。但し、持続時間は5分ほどだそうだ。

そして、各霊符には一応名前と役目がある。これは良く耳にする名前で『木・火・土・金・水』と便宜上名付けられている。

陰陽道に詳しい人はこれを聞けば直ぐに分かるだろう。陰陽の五行大儀と呼ばれるやつである。

この五行には、『木』熱して火を生じ・『火』燃えて土を生じ・

『土』甘して金を生じ・『金』滲れて水を生じ・『水』浸して木を生じる、という五行の循環相生あいいかすの關係と、『木』は土を剋し・『土』は水を剋し・『水』は火を剋し・『火』は金を剋し・『金』は木を剋す、という互いに対立し、侵しあう相剋そうこくという關係がある。

その五行の性質を持つ符を五枚使って行使する術な為、便宜上この名前が符に付けられているのだった。鬼一爺さんの話では、この五枚使う符術の種類を別名、五行相関の符術と呼ぶそうだ。

そして、相剋そうこくの順に符の力を解放すると術者を中心に五芒星を描く事となり、障壁が完成する。大まかな術のプロセスはそんな感じである。

因みに、安倍清明が得意としていた術らしい。言われてみれば、安倍清明の話には必ずといって良いほどこの五芒星が絡んでくる。俺はその説明を聞き、腕を組んで唸りながら納得したのだった。

しかし、言葉で説明すると簡単に聞こえるが、靈力を指先から圧縮して糸の様に放出し、各靈符を紡いで行く為、靈力制御と解放する符の手順との問題が術者に大きく押し掛かってくる。

その為、俺も今まで中々上手く制御できず、術を確実に発動するには至っていないのが現状である。それモドキは何回かあったが……。そしてようやく今、障壁の符術を俺は完成させたところなのであった。その様は、五枚の符が互いの循環相生あいいかす關係と相剋そうこくする力で宙に浮き、俺の周囲に五芒星と五角形の青白い光の結界が張り巡らされている光景である。

この青白い光の波動は、そこ等辺の悪靈では太刀打ち出来ないほどの力を秘めているのは俺には分かる。それと同時に、達成した喜びが俺に込み上げてくるのだった。

俺はやや離れた所で眺める鬼一爺さんに、術の確認をする為に声を掛ける。

「じ、爺さん。これで成功だよな」

鬼一爺さんは陽気な笑いを浮かべながら頷き、口を開いた。

（フオフオフオ。ようやく上手くいった様じゃな。しかし、苦勞し

て覚えたこの五行相関の符術は、後の『浄化の炎』を進化させる過程に於いて重要な役割をする術じゃ。『障壁の符術』は五行相関の基本的な術じゃからの。一回の成功で浮かれずに、これから毎日修練を積んで確実に己の物にするのじゃ」

「おお、そうだったのか。じゃ、浮かれてばかりもいられないな。

ヨッシャ、それじゃあもう一度最初から始めるよ」

（その意気じゃ、涼一。術の修練は、地道にやっていくのが一番の近道じゃからの。フォフォフォ）

まあ、こんな感じで暫く符術の修練を続け、剣道愛好会から始まる激動の一日を終えたのであった

拾九ノ巻

《 拾九ノ巻 》 遭遇

11月2日 土曜日

いつもの日課である真言術の朝練を終えた俺は、朝食を食べた後、床に仰向けに寝転がりながら寛いでいた。

俺の視界には、やや黄ばんだ感じのする白い天井が入ってくる。前の入居者は、喫煙者だったのだろうか？ フト、そんな事が頭を過ぎる。が、考えても仕方ない事なので、直ぐに頭から離れていった。

テレビの方に視線を向けると、鬼一爺さんが朝のテレビニュースを宙に浮きながら熱心に聞き入っている。そんな爺さんの姿をボーと眺めた後、俺はまた天井に視線を戻す。そして、黄ばんだ天井を見ながら、これからの予定を考えるのだった。

何故ならば、今日は午前中がフリーで、昼の3時半から夜6時半までが、剣道愛好会での練習といった感じになっているからである。そういった予定である為、朝食が終わってからは、暫くの間、時間を持って余す事になるのであった。

テレビの上に置かれたデジタル時計はAM7時半を表示している。剣道の練習までは8時間もあるので、俺は何をしようか？ と考える。

そんな風に俺が空き時間の有効利用を考えていると、テレビニュースを見終えた鬼一爺さんが、俺の隣にやってきて言うのだった。

（涼一。今日はこれからどうするのじゃ、何もする事はないのかの？）

「フウウ、そうなんだよなあ。今日は中途半端に時間が空くんだよ。まあそれで、どうするかを今、俺も考えているところだよ」

俺が大きく息を吐いた後、ややダルそうに答えると、鬼一爺さんは少し考える仕草をする。

そして、ボソツと言ったのだ。

（そうか。なら、我の我俣わがままを聞いてくれぬか？）

「我俣……。何だ一体？」

（お主、この間言っておつたろう。我のいた時代から今の世まで、受け継がれている物や書が沢山あると。我はそれが見たいのじゃ）

「ああ、文化財のことか。まあ別にいいけど。でも、この高天智市内の物しか時間的には無理だよ。それでもいいのじゃ？」

（構わぬ。なら早速、案内してくれぬか。どの様な物が残っておるのか、ずっと気になっておつたのじゃ）

と、鬼一爺さんはニコやかに嬉しそうな表情で答える。

俺はそんな爺さんを見ながら、苦笑いを浮かべると、何処に案内するかを暫し考える。

しかし、考えたところであまり遠くには行けない為、高天智市内にあるF県立歴史民俗資料館を案内しよう、という無難な結論に達したのだ。

「それじゃ、ちょっと待っててくれるか。今、用意するからさ」

（おお、構わぬぞ。急かしてすまぬな、涼一）

俺はクローゼットの中から適当に衣服を取り出す。

今日の格好は、白いパーカーに黒いパンツといった地味な服装をチョイスした。この組み合わせにしたのは別に大して意味はない。何となくだ。

それらに着替えた俺は、財布やケータイといった小物類をポケットに入れると、テレビの上にある時計を確認する。時刻は8時だ。準備を終えた俺は爺さんに向かい言った。

「それじゃあ、爺さん。もう準備は出来たから行くか」

（おお、すまんの。では、出発じゃあ）

それを聞きくなり、鬼一爺さんは満面の笑顔になって、テンションの高い返事をするのだった。

俺達はアパートを出ると学園町の駅へと向かい歩き出す。

早朝の修練をしていた時は霧がかなり深かったが、外に出てみると、日が昇ってきて暖かくなってきたせいか、多少、見通しが良くなってきていた。まあ、それでも薄っすらと白い湯気が漂うような光景は、辺り一面に広がってはおり、40m先は見えないという様な感じではあったが……。

しかし、視界が悪い中を進んでゆくというのは気持ち悪いもので、幾らいつも通る道とはいえ、迷ってしまいそうな気分になってくる。おまけに、空も霧で覆いつくされているので、昇ってきた太陽の光も満足に届いてない。その為、俺の前に広がる学園町の風景は水墨画の様にボヤけた感じにも見え、まだ、夢の中にいる様な錯覚も覚えるのだった。

また、人の姿も見られない為、此処には本当に人が住んでいるのだろうか？ などと馬鹿げた事も考えてしまう。それでも靈魂の姿はよく見かけるが……。恐らく、街中が静かな為に余計にそう思ってしまうのだろう。そう、俺は考えていた。

そんな訳で、良く見知った道ではあるが、やや不気味な為、俺は用心深く進んで行くのであった。

さて、今から向かうF県立歴史民俗資料館であるが、場所は俺の住む学園町から、やや離れたところにある。で、公的な移動手段が電車かバスになってしまふ為に、今の俺は駅へと向かっているのだった。

そうこうしている内に、駅に辿り着いた俺は、切符を購入する為自動券売機の方へと向かう。そこでF県立歴史民俗資料館のある坂木町までの切符を購入すると、改札の方へと向かい進んで行った。すると、そこで予想外の人物と出会うのだった。

「あれ、日比野さんじゃないですか。どうしたんですか？ こんな朝早くに」

其処に居たのは、高天智聖承女子学院のジャージに身を包む瑞希

ちゃんであった。いつもの様にサイドテールに纏めた髪が印象的である。

そして、瑞希ちゃんは今から部活動か何かなのか、右手には白い竹刀袋に入れられた竹刀を持っており、背中には丸い鞆を背負う格好をしていた。

全体の格好としては、上下紅色のジャージで、その上から白っぽいフリースの様なものを着るといった感じだ。

そんな瑞希ちゃんを見ながら俺は答える。

「ああ、今から坂木町までね。瑞希ちゃんは今から部活かい？」

「はい、そうなんです。ツて、日比野さん。今日は剣道の練習はないのですか？」

「嫌、あるよ。ただ、武道場の使用が3時まで出来ないんだよ。なんでも、柔道部が他校と練習試合をするみたいでさ。まあそんな訳で、それまでの時間つぶしをね」

俺がそう答えると、瑞希ちゃんは首を傾げて問い掛けてきた。

「時間つぶしって、坂木町で何するんですか？」

「ああ、それかい。鬼一爺さんが歴史文化財を見たいって言うもんだからさ。それで、F県立歴史民俗資料館へ行こうと思ってね」

それを聞くなり何か思い立ったのか、瑞希ちゃんは俺の隣に来ると小さな声で囁いた。

「日比野さん、今、少しだけ時間いいですか？」

「ん？ まあ10分位ならいいよ」

駅構内の壁に掛けられた、大きな時計を確認しながら答える。

「じゃ、コツチに来てくれますか」

瑞希ちゃんは俺の左手を引いて駅の片隅にある、今は人気のない長椅子が置かれた所にまで案内するのだった。

其処は、今日が日曜日という事と、まだ朝早いという事もあって無人であった。

俺達は其処にある無人の長椅子に腰掛けたところで瑞希ちゃんは口を開いた。

「日比野さん。今、お爺さんて居るんですか？」

「ああ、居るよ。此処に」

と、言いながら俺は自分の隣を指差した。

瑞希ちゃんはその指に視線を合わせると、周囲を見回して警戒しながら聞いてくる。

「日比野さん。お爺さんて姿を隠したままでも話って出来るんですか？」

「姿を隠したまま……か。まあいいや、聞いてみるか。できるの、爺さん？」

俺はそんな事を考えた事もない為、やや首を傾げて爺さんに問い掛ける。

（フム、まあ出来ん事はないが、何か聞きたい事があるのか？ 娘子よ）

と、爺さんが話しだした途端、瑞希ちゃんは身体を乗り出す。

そして、驚きと共にではあるが、口元を綻ばせて言うのだった。

「あ、聞こえる。お爺さんの声聞こえます。エヘっ。っと、それは置いておいて。この間、聞きそびれちゃったんですけど。お爺さんて、何時の時代の方なんですか？」

瑞希ちゃんは下唇に人差し指をあて、可愛らしい仕草で爺さんに尋ねる。

鬼一爺さんは天井を見上げながら答えた。

（フム、何時の世か……。我が生きておつた世は、丁度、源氏と平氏がこの国の覇権を賭けて争っていた戦乱の世じゃ。今から凡そ800年程前という事になるのかの）

「エエエ、そんなに昔の方だったんですか？ ビックリしました。

私、江戸時代くらいかと思ってたので」

瑞希ちゃんは口を両手で覆いながら驚く。

（何じゃ。当てが外れたかの？）

「いいえ、違いますよ。ただ、最近そういう日本史にも興味を持ち始めたので、お爺さんに色々聞きたいなあ、なんて思ってたんで

すよ」

といった感じで、爺さんと瑞希ちゃんの二人が話し込んでいる。だが、電車の来る時間が差し迫ってきている為、俺は二人の会話に割り込んで代案を出す事にした。

「瑞希ちゃん、話し込んでいる最中にすまないけど。今度、お互いに時間を作って話でもしようよ。今の俺達はそこまでゆつくりと出来ないからね」

俺の言葉を聞き、瑞希ちゃんも自分の腕時計を確認する。

「そうですね。私も部活がありますし。明日はどうですか？ 一応、明日は剣道部はお休みなんですよ」

「明日かあ。まあ今のところは大丈夫だと思うよ。文化の日は、会長も何か用事があるようなこと言ってたからね。ただ、うちの会長がどう判断するかまだ分かんないけどね。自分が居なくても練習はさせる可能性があるから」

俺もあまり自信が無いため、やや中途半端な受け答えになる。

そして、提案した。

「今日の練習が終わったらまた連絡するよ。それでいいかい？」

「はい、いいですよ。じゃあ待ってますね。私、日比野さんともお話ししたいですし」

瑞希ちゃんはそう答えるとニコヤカに微笑む。

「ハハハッ、そうかい。まあ、兎も角、今は瑞希ちゃんも部活があるからね。遅れないようにね」

「はい。それじゃ、日比野さんまた後で」

俺達はそう約束をすると、瑞希ちゃんは学校に向かう為に駅の外へと歩き出す。

その姿を暫く見送った後、俺は改札を抜けてホームに向かうのだった。

それから15分後。俺は歴史民俗資料館に辿り着いた。

時刻は8時45分。因みにまだ資料館の中には入っていない。何

故ならば、開館が9時だからだ。

その為、俺は資料館の隣にある小さな公園で暫く待つ事にした。砂場とベンチと鉄棒だけのヒソリとした公園である。

周囲には人の姿は見えない。掘って此処に用があるのは俺達だけの様だ。

俺が空を見上げると、鬼一爺さんはユラユラと浮かびながら資料館を眺めていた。時々、ああやって空を飛んでるのを見かけると羨ましく思う事がある。しかし、実行しようと思うと俺自身が死ななければならぬ為、勿論、却下である。

話は変わるが。この歴史民俗資料館は5年程前に竣工した新しい建造物である。

3階建ての四角い建物で、床面積もかなり広いように感じた。全面が白い外壁で、所々にある黒い窓枠が印象的である。また、何故か分からないが、シースルーデザインのモニュメントや奇妙な形の像なども置かれており、一見すると歴史民俗資料館ではなく、美術館の様になっていた。

俺はこれを見て『何考えてんだ。F県は！』と心の中で突っ込んでしまうのだった。

資料館の入り口は両開きの自動ドアになっており、そのガラスドアの向こうには、紅く綺麗なカーペットが通路に敷かれているのが見える。これは俺の主観だが、その光景はホテルのロビーのような佇まいであった。

そして、これらの状況を総括し、俺はこう考え始めていた。

これの建設に携わった県の担当者は、一体どういうセンスをしているんだ！ 全然、歴史の片鱗が垣間見えんじゃねえか、と。

だが、別に俺が損をしている訳でもないのです、暫くすると、心底、如何でもよくなっていたのであった。

そんな事を考えながら待っていると、一人の頭の薄いオッサンが現れて、自動ドアの前に置かれた『開館時間はAM9時～PM4時30分』と書かれた看板を脇に移動させる。そして、自動ドアの電

源を入れるのだった。

オッサンは、自分にドアのセンサーが反応するかどうかを確認した後、奥の方にある事務所と入ってゆく。

俺はそれを見届けると空に浮かぶ鬼一爺さん呼び、資料館の中へと入って行くのだった。

資料館に入ると、入口左手にある受付で入館料金が取られる。ご丁寧にも大学生以上は200円と書かれていた。

俺は入館料を払うと、先ず、一階の縄文時代から古墳時代にかけての文化財から、順に見て行くことにしたのだった。因みに、鬼一爺さんは中に入った途端に自由行動である。

周囲を見回すと、薄々予想はしていたが、資料館というより美術館に近い雰囲気であった。

確かに文化財が置かれているのだが、何故か違和感があるのだ。恐らく、周囲の真っ白い壁やその壁に設けられた黄色い光を放つ壁灯、そして床に敷かれた紅いカーペットの所為だ。それらがあまりにも現代的過ぎて、歴史遺産の放つ、時間を巻戻した様な雰囲気がかき消しているのである。

これらを見た俺は、『F県さんよお、なんか違うんじゃないの？』などと思いつながら進んで行く。

そして、入って左手側にある縄文式土器のコーナーから見て行くことにしたのだった。

其処にはガラスのショーウィンドウにズラッと並べられた、茶色の土器やそれらの破片が、白いライトに照らされて存在をアピールしていた。まるでショータイムである。

しかし、俺はこういった古代日本史にはあまり興味が無い為、それら全てが幼稚園児の工作した一品に見えて仕方ないのだった。物凄い曲がりくねった壺なんか見ると、製作した人は癩癩かんしゃく持ちだったんだろうか？などと現代的な考え方をしてしまう自分がいる。そして、そんな事を考える自分が、酷く場違いな気がしてきたのであった。まだ、5分しか経ってないのに……。

まあ、そうはいつでもお金を払っているので、一応最後までは見
ていこうと思ひ、進んで行く。

一階は時代的にかなり古い為、似たような物ばかりであった。そ
の為、退屈そうにそれらを見てみると、俺の前方に愉快なポーズを
した埴輪はにわが現れたのだ。格好は「シエー」といった感じた。こうい
えば、何となく分かつてもらえると思う。

で、俺は今までこの埴輪はにわという物を見たとき、古代人というのは
侮れない人達だと思っていた。何故ならば、俺的にはユーモア溢れ
る人達だという認識をしているからだ。その造形の数々を見ている
と本当に土のアーティストといった感じである。

これらの埴輪のポーズは、正直言うとハッキリ言つて意味が分か
らない。だが、そんな事を忘れさせるくらいの、記憶に残る造形と
ポーズなのである。多分、こんな事を思うのは俺だけじゃない筈だ。
そして、彼等の造形センスは現代にも通じるような、そんな気がす
るのであった。

俺はそんな風に思いながら、この埴輪たちをショーウィンドウ越
しに眺めていく。

すると、埴輪達の隣に置かれた説明書きが、俺の目に飛び込んで
きたのであった。

其処には白いプラ板の上に、こう書かれていた。

【人物埴輪や動物埴輪などは、行列や群像で並べられており、葬送
儀礼を表現したとする説があります】

俺は我が目を疑った。葬送儀礼？ この記述と「シエー」の埴輪はにわ
を交互に見比べる。

そして、出てきた結論は、『古代人は侮れないツ！』であった。

俺は古代人達の豊かな思考回路を色々想像しながら、この資料
館内を普通の人とは違った視点で、順に見学して行くのだった。

涼一がアパートを出た頃の事である。

此処は学園町の住宅団地となっており、大小様々な集合住宅が立ち並ぶ所であった。

その一画に、最近建てられたばかりである、五階建てで横長の賃貸マンションがある。

マンションの外壁は赤い色をしており、周囲にある集合住宅の色が白や灰色といった感じである為、非常に目立つ建物であった。その外壁はレンガを積み上げたかの様な赤いタイル張りになっており、上から下までが全てそれで統一されている。

マンションの入口奥には、ステンレス製の郵便受けが幾つも整列して並んでいた。どうやら、このマンションにある部屋の数だけ並んでいるようである。

玄関はオートロックになっており、色々と手の込んだ防犯システムが設備されているようである。

そして、建てられてからまだ新しい所為か、入居者はまだ疎らな状態なのであった。

そんなマンション五階の一室に道間兄弟は住んでいた。

部屋の間取りは3LDKで床面積も広く、日当たりの良いところである。

この部屋に沙耶香と一樹は昨日から過ごしており、二人は今、バルコニーの前にあるリビングで、ゆったりと朝の紅茶を楽しんでいるところなのであった。

一樹は白いカッターシャツに青いジーンズといった格好をしており、髪はかなり短くカットしたヘアースタイルをしている。そして、テーブルを囲うようにして置かれたソファに寄りかかりながら、朝のテレビニュースを見ていた。

沙耶香は青い長袖のシャツと黒いデニムスカートといった格好をしており、テーブルの前に正座で座りながら紅茶の香りを楽しんでいるところであった。

室外のバルコニーからは、外が霧がかっている為、白く優しい光がこの部屋に差し込んでいる。また、そういう影響もあってか、時

間の流れがゆつくりと感じさせる空間となっているのであった。

そんなゆつたりとした雰囲気の中、沙耶香が一樹に向かい話しかけた。

「お兄様、今日はお仕事の方はお休みなのですか？」

「ああ、今日は学校の方は休みだ。しかし、まさか俺までこの学校に関わるとは思わなかったよ。それも、女子学院高等部の教師をする事になるとはね」

と、一樹はやや項垂れながら言う。

「仕方ありません。お父様がここの理事長の知り合いですから。それにお兄様が地理歴史の教員免許を持つてたからじゃないですか」
「確かにそうだが。俺は今年大学卒業したばかりだし、尚且つ、もう家で働いてたからな。予定外だよ。まあ、これも道摩家の事だと思つて割り切るしかないか」

そう納得させるよう自分に言つと、一樹は紅茶を右手に持ち、口にティーカップを運ぶ。

そして、紅茶をゆつくりと飲み干すと、沙耶香に言った。

「ところで沙耶香。今日のお前はどついう予定なんだ？ 俺は一応教師だから、今日は今後の事について色々としなければいけない事がある。まあそれと、夜は『鎮守の森』から修祓しゅうはつの依頼を1件受けているしな」

沙耶香はその問い掛けに暫し考える。

しかし、これといって予定というのは無い為、この高天智市内を散策してみようと思つているのだった。

「私は、まだ、この地の事があまり分かりません。それで少し、この街を散策してみようと思うのです」

「まあ、それもそうだな。俺は暫く張り込みをしていたからある程度は分かるが、沙耶香は初めてだからな。それもいいだろう」

一樹は腕を組むと目を閉じてそう答える。

それを聞いた沙耶香は浅く頷くと、手に持った紅茶を飲み干す。

そして立ち上がると、一樹に向かい言った。

「そういう訳で、私は外出の準備をします。お兄様は何かあった時の為に、携帯電話の電源は入れておいて下さいね」

「ああ、それは分かってるよ。まあ、お前もゆっくり楽しんで来い。それと迷子にはなるなよ」

と一樹の返事を聞いた沙耶香は「ご心配なく」と答え、自分の部屋に移動する。

それから外出の準備に取り掛かるのであった。

そんな朝の一時ひつときから3時間後。

沙耶香はF県立図書館のある坂木町へと来ていた。

この図書館は3階建ての建造物で、F県の誇る最大面積の図書施設であり、蔵書数も県内最大である。

横長のやや灰色っぽい巨大な建物で、その佇まいは地面にどっかりと根を下ろし腰を据えている様にさえ見える。また、その手前に大きく広がるアスファルトで覆われた駐車場の存在が、この図書館をより一層大きな建造物に見せていたのであった。

今の時刻が11時頃という事もあって、利用者の数も多く、その駐車場には沢山の色とりどりの車が綺麗に並んでいた。そして、図書館の入口近くには駐輪場も設けられており、其処には沢山の自転車が横に重なる様に並んでいるのだった。

入り口は大きく飛び出た鉄筋コンクリートの下屋があり、その真下の左右には、下屋を支える円筒状の太い柱が頼もしく建っている。また、その奥で幅の広い両開きの自動ドアが待ち構えるといった感じの玄関になっていた。

そんな県立図書館に向かい、沙耶香は歩を進めてゆく。

沙耶香が図書館に訪れたのには、勿論理由がある。此処にはF県の歴史や文献、そして資料等を扱った書物がある為である。沙耶香は以前の霧守高原での経験から、此処で伝えられている嘗ての風習や伝説等の郷土資料を紐解き、失われた古の秘術の手掛かりを探そうと考えていたのだ。その為、沙耶香は此処に向かっているのだ。

った。

図書館に辿り着いた沙耶香は、入口の自動ドアを潜って直ぐの所にある、図書館内の大きな見取り図を眺める。そして、見取り図に書かれている郷土資料コーナーという箇所を見つめた後、其処に向かい歩き始めるのであった。

郷土資料コーナーは図書館一階の端の所にあり、其処には幾つもの木製の棚が、軒を連ねる様に並んでいた。その全ての棚には、目まぐるしいほどの数々の書物が丁寧に並べられている。

沙耶香は早速、嘗ての文献等について書かれた資料を探そうと棚の前へと歩みだす。

しかし、その時。一人の気になる人物が沙耶香の目に飛び込んできた。

郷土資料コーナーの奥には、先客で若い男が一人居たのだったが、問題はその男の後ろにいる存在であった。

その男の後ろには鎌倉時代の武士等が着ていた、紺色の直垂姿ひたたれすがたをした老人の霊が漂っていた為である。こんなタイプの幽霊を見たことが無かった沙耶香は、思わずビクリして「アッ」と大きな声を上げてしまうのだった。

その声を聞き、男と老人の幽霊は沙耶香に訝しげな視線いぶかを向ける。勿論、この男と幽霊は涼一と鬼一法眼である。

沙耶香は迂闊にも声を出してしまった事に気付くと、恥ずかしさのあまり頬を赤く染めて、涼一に向かい、丁寧に頭を下げ謝るのであった。

「あ、あの。突然、変な声を出してしまい、すいません」と。

涼一は、そんな沙耶香を眺めると笑顔で言った。

「ああ、別にそんな謝らなくていいよ。何も気にしてないから」

沙耶香は涼一の表情を見てホッとすると、自分も今日の目的である郷土資料の棚へと進んで行く。

そして、ある棚の所で立ち止まると正面の書物に視線を向け、そこで考えるのだった。

今見た幽霊の事を。

その時の涼一は、ある程度棚を物色した後ということもあり、暫くすると郷土資料コーナーから別の所へと移動する。

だが、それと同時に鬼一法眼も涼一と共に移動した為、この遭遇により二人の姿が不幸にも、沙耶香の脳裏に焼き付いてしまう事になるのであった。

鬼一爺さんは図書館からずっと難しい顔をして首を傾けている。

俺はそんな爺さんが、やや気になったので、周囲に人の居ない寂れた公園を見つけると、其処に移動して小声で話しかけたのだった。

「爺さん。どうしたんだ一体。また、何かヤバイ事でもあるのか？」俺の問い掛けに、爺さんは腕を組み困った表情で話し出す。

（ウーン。先程の娘じゃが、我の姿が見えておったの）

「へ？ そうなの。なら、靈感が強いからじゃないのか」しかし、爺さんは尚も難しい顔をして言う。

（涼一には話してなんだが。今の我の霊圧では余程の事が無い限り、幾ら靈感が強かろうと普通の人には見える事はない。じゃが、霊力の扱いに長けた者は話が別じゃ。特に霊視の修練を積んだ者ならば、今の我の霊圧ならば見ることが出来よう。という事は、何が言いたいのか分かるじゃろう）

「という事は、あの子は霊力を扱えて、尚且つ、霊視の修練を積んだ者の可能性が高いということか……」

俺は爺さんの話を短く簡潔に纏めて答える。

その答えに、爺さんは無言で頷き、そして言うのだった。

（どうやら、その様じゃ。あの娘子は要注意じゃな。我等が縄張り荒らしてたのが、其処から漏れるかも知れぬの）

その返答を聞き、何か寒い雰囲気になった俺は爺さんに忠告する。「なんか、凄く嫌な予感がする。爺さん、今度からもう少し霊圧下

げて行動したほうがいいんじゃないのか？」

（フム、そうじゃな。仕方がないの。そうするしかあるまい。面倒じゃがな）

と、爺さんも流石に嫌な予感がしたのか、割とすんなり受け入れてくれた。

その返事に満足した俺は、先程の女の子を目を閉じて思い浮かべる。すると、図書館での光景が鮮明に、頭の中に浮かび上がった。

やや気の強そうな感じではあったが、可愛らしい子であった。瑞希ちゃんと良く似た年頃に見える。また、左右から垂れ下がったツインテールが特徴的だったので、直ぐに記憶から蘇ってきたのである。

それらの光景を思い浮かべると、俺はとりあえず危険人物として、その子の容姿を脳内に記録する事にしたのだった

式拾ノ巻

《 式拾ノ巻 》 魂の記憶

その日の夜。

俺は剣道の練習から帰つてくると、荷物を床に置くなり、敷き布団の上にバタリツと勢い良く寝転がる。そして、大きく溜息を吐きながら、姫会長が説明していた学祭でのイヴェント内容を思い出すのであった。

正直に言つと、練習の厳しさよりもイヴェント内容の方が、今日の俺にとつては頭の痛い事である。

何故ならば、薙刀と剣道の異種格闘技戦を大学祭の特設ステージで行うらしいのだが、当然、素人同然の俺は幾らなんでも出場は無いだろう。と、高を括っていたら、モロ出場メンバーに名を連ねていたからだ。その為、練習中から今までずっと気分が優れないのであった。

また、姫会長の説明を聞いてから、まだ3時間半程しかたつてない為、その時の光景は鮮明に思い返される。俺は布団の上に突っ伏しながら、午後3時半に始まった姫会長の演説を頭の中で復唱するのだった

「今日は皆に話がある。予てから言^{かね}っていた大学祭での催し物だが、それを皆に発表しようと思う。それで、その内容だが。11月13日の昼一番に高天大中央広場に設けられた特設ステージで、剣道VS薙刀の異種格闘技戦を行う。形式としては、3対3の団体戦だ。それで面子だが、林、田島、日比野が剣道側で出場だ。薙刀側は私を含めた愛好会の女子3人が相手する。以上だ。何か質問は！」

といった練習冒頭での姫会長の話を思い返していたのである。勿論、凄い迫力だった。有無を言わせぬオーラを纏っていた。と、言

つておこう。

それとついでに。姫会長の説明を聞き、思わず「エエエ」と声を張り上げたら、物凄いメンチを姫会長に切られたのも思い出した。正に、蛇に睨まれた蛙というやつである。

兎に角、そういう内容であった為、俺は練習が始まってから今までずっとナーバスになっているのだった。

話は変わるが。今回、名前を呼ばれた林さんという人は、田島さんと同じ2年生で、中肉中背の眼鏡を掛けた大人しそうな先輩である。やや長めの頭髪で、イマ　ンを発表した時のジョン・レノンという感じのヘアースタイルだ。というか、実際にジョンというあだ名で呼ばれていたりする。しかも、結構似ているので、それを聞いた時『ナイスネーミング』と心の中で呟いたのを憶えている。

また、高天大には武道系のサークルというのが少ない。特に、得物を使用する武道が無いので姫会長達が奔走しているというのが現状のようである。今回の異種格闘技戦も部員勧誘を兼ねてのパフォーマンスなのだろう。そう、俺は推測していた。

という訳で話を戻す。

それからというもの、俺の中で培われてきた第六感が、非常に喧しい警報を発しているのだった。かなりデンジャラスな展開になりそうな予感である。

後で西田さんから聞いた話だが、何と言っても、相手は薙刀の経験者ばかりだそう。姫会長は剣道を始める前は薙刀もやっていたようである。他の二人は、高校時代にモロやってたそう。

俺はそれを聞いてからというもの、異種格闘技戦というより、公開処刑といったほうがシックリくる様な気がしてならないのであった。

何故、異種格闘技戦などという、戯けたイヴェントをする事になったのかは分からないが、これだけは言える。本ツ当に勘弁してくれッ。

しかし、そんな事を直接、姫会長に言おうものなら、五体満足で

こうしてアパートに帰ってくる事は無かったかもしれない。そんな事を今の俺は考えているのだった。

そして、練習が終わった直後に、俺は何故そんな展開になったのか、西田さんに尋ねてみた。

すると、こんな答えが返ってきたのだ。

「実は、学祭の運営に姫の友達がいてね。13日の2時過ぎから予定している『お笑い芸人のライブ』まで、時間が少し空くらしくて相談を受けたらしいんだよ。それで、こんな展開になってしまったんだ。剣道側で出場する3人には可愛そうだけど、運が悪かったと思いつめてくれ。俺にはどうする事もできない……あぐふツ、ゴメンよッ」

西田さんは目を潤ませ、口元を右手で覆いながらそう答えると、目を逸らして部屋の奥へそそくさと入って行くのであった。といった感じの映像が脳内で再生された。

今の話を分かりやすく言えば、要するに俺らはただの前座のようである。所謂、いわゆる 噛ませ犬というやつだ。

そう考えると、そのお笑い芸人に恨みはないが、殺意というものが湧いてくる。

こういった感情が悪霊を生み出すと分かっているけど、こればかりはどうする事もできない。というか無理ッ。

まあ、それは置いておくとして。公開処刑となると俺も流石にブーになる。そして隣をみると、同じ処刑名簿に名を連ねた田島さんや林さんが、緊張した面持ちで練習後も呆然とその場に立ち尽くしており、俺は事の重大さを再認識するのだった。特に林さんに至っては、今にもイマッンを歌いだしそうにさえ見える。

と、まあそんな訳で、俺は練習の始まった3時半から今までの間ずっと気分が優れないのであった。

そして、これが練習冒頭で行われた姫会長からのお達しの全容なのである。

それらを思い返しながら、俺は体中の空気を抜くかのように大き

く溜息を吐く。

そんな中、鬼一爺さんが俺に話し掛けてきた。

（涼一。瑞希とか言う娘に連絡せぬでもよいのか？）

「ん、瑞希ちゃんに連絡？ ああ、そう言えば朝にそんなやりとりがあつたな。衝撃的な時間を過ごしてたから忘れてたよ」

俺はそれを聞き、今朝、駅でバッタリ会った瑞希ちゃんとの約束を思い出した。

まあ結論から言うと、明日は休みだ。

その為、瑞希ちゃんと会う事は可能なのだが、公開処刑の事が今まで、というか今も俺に押し掛かっているので、スツカリ失念していたのである。

俺はとりあえず、公開処刑の事は頭から振り払い、携帯をポケットからだとすと、その旨を瑞希ちゃんにメールで送信した。

そして、それを終えた俺は、サツパリとした気分になつた為、久しぶりに浴槽にお湯を張って湯船につかり、一日の疲れを癒す事にしたのだった。

一方、少し前の時刻。

高天智市内の街中を少々出歩いてきた沙耶香は、今、自分の部屋にいた。

沙耶香の住むマンションは、洋室二部屋と和室が一部屋といった感じの3LDKで、廊下で隔たれた洋室二部屋は一樹と沙耶香が自分の部屋として使用している。また、和室には自分達の裏稼業である、呪術関係の道具等が重厚な木箱に入れられて、安置されているのであった。

沙耶香の部屋は4畳半といった大きさで、持ってきた荷物が少ないせい、スツキリとした雰囲気の間となつている。あるのは木製のシンプルな学習机と椅子、そしてシングルベッドと本棚が一つ

といった感じで、あまり細々とした装飾品等は置かれていない。服などは壁に据え付けられたクローゼットの中に収納している為、室内で存在しているのは先に挙げたもの以外はないという状態である。その為、あまり年頃の女の子っぽくない殺風景な部屋なのであった。

沙耶香はそんな部屋の机に向かい、昼近くに図書館で遭遇した涼一と鬼一法眼の事を考えていた。特に鬼一法眼の方を……。

何故ならば、自分が今まで行ってきた修祓しゅばう関係の記憶を辿っても、珍しいタイプの霊だからなのであった。

そして考えるのである。何故、あんな古い時代の霊が人に憑いているのだろうか？ と。

沙耶香が今まで見てきた、ああいった古い時代の霊は悪霊といったパターンしかない。だが、図書館で見た霊は悪霊ではない為、余計に気になったのである。しかし、考えても答えは出てこないのので一旦、この出来事は頭の片隅に仕舞っておこうと結論した。

そして、机に置かれたガラスの置き時計に目を向けると、椅子から立ち上がり、リビングの方へと向かうのであった。

リビングには、テーブルの前で書類整理をする一樹の姿があった。その一樹は、沢山のA4サイズの紙と睨めっこをしており、時折大きく息を吐くと肩が凝ったのか、腕を回しながら書類整理の作業をしていた。

そんな大変そうな兄の姿に、少しは妹として労ってやろうと考え、沙耶香はキッチンへと向かう。

そして、銀色のコーヒーマーカーを用意すると、兄の好きなブルームウンテンを棚から取り出して豆を挽くのだった。

暫くすると、キッチンから何ともいえない、コーヒの香りが湯気と共に立ち昇る。

喫茶店の様な香ばしい豆の匂いが漂い始めたので、書類整理中の一樹も豆の香りに釣られ、キッチンの方へと視線を向かわせた。

沙耶香はそんな兄の視線に気付き、笑顔で言った。

「お兄様、もう少し待ってて下さいね。今、コーヒーを持って行きますから」

「おお、悪いな、沙耶香。丁度、俺も一息入れようかと思ってたところだ」

と、一樹は腕を回しながら沙耶香に言う。

それから程なくして、挽き立てのコーヒーとカステラを一樹の待つテーブルへと沙耶香は運ぶのだった。

沙耶香はそれらを一樹の前へと置くと、自分も相向かいに座る。

そして、労いの言葉をかけた。

「お兄様、お疲れ様です。何やら色々と処理しないといけない物があるんですね」

一樹はコーヒーをフウと息を吹きかけながらカップを口に持ってゆく。

そして一口飲んだ後に答える。

「ああ、色々とやらなければいけない事があるんだよ。教師とはいっても、サラリーマンだからな。おまけに住民票の移動とか、引越し関係の雑務も残ってるし」

「まあ、最初だけですよ。ところでお兄様、今日の修祓しゅうはつはどんな内容なので?」

「今日の修祓しゅうはつは、寂れた通りに出没する悪霊を何体か祓うだけだ。簡単な仕事だから、道具も霊珠や霊符以外必要ないだろう」

一樹はそう言うと言をクルクルと回す。

その仕草からも大分肩が凝っている様子が窺える。

「なら、私が付いて行っても邪魔になるだけですわね」

「ま、今日のところはお前もゆっくりと休んだらどうだ? 結構、歩き疲れただろう」

沙耶香は兄の気遣いに笑みを返すと、図書館で遭遇した霊のことを思い出すのだった。

そして、一樹に言った。

「お兄様。今日、不思議な霊に遭遇したのです」

「不思議な霊？　なんだそれは」

「実は、F県立図書館での話なのですが。えらく古い時代の格好をした霊と遭遇したのです。私のこれまでの経験では、そういった古い時代の霊は、悪霊という形でしか見たこと無いのです。ですが、その霊からは悪霊の放つ負の波動が感じられませんでした。お兄様はどう思われますか？」

沙耶香の問いかけに腕を組んだ一樹は、目を閉じ暫く考えた後に口を開いた。

「古い時代の霊か。そういえば、最近、何処かでそんな霊を見た事があったような気がするなあ。ンンンツ思いだせん」

「お兄様も目にはしているのですか？」

と、沙耶香はやや驚いた口調で言う。

「見た事ある気がするんだが、分からん。何かの見間違いかも知れんからな」

「そうですか……」

「ン、なんだ。そんなに気になるのか。その霊が？」

一樹は難しい表情をする沙耶香が気になり、問い掛ける。

「はい。しかもその霊は、若い男に憑いている様に見えました。本当のところはどうか分かりませんが」

「若い男に憑いている、か。まあ、古の秘術（いじゆえ）を使う術者とはあまり関係がなさそうだから、そんなに気にする事でもないだろう。程々にしておけよ」

「はい、そうですよね……」

沙耶香はそうは言ったものの、あの時の光景が何故か頭から離れない。その為、返事も力ないものになってしまう。

そして、今日一日はその事で頭が一杯になっっているのであった。

その翌日。

俺は今、自室のテーブル付近で寝転がりながらテレビを見ている。

テレビの上にある時計はAM11時を表示しており、その下のテレビはツマラン旅番組の真ツ最中であつた。

そんなツマラン旅番組を何故見ているのかというと、鬼一爺さんと瑞希ちゃんがマニアックな歴史話に勤しんでいるからである。

俺自身は、詳細な歴史には正直あまり興味が無い。まあ呪術関連は別だが。

その為、暇をもてあました俺は、とりあえずテレビをつけて適当に眺めているのだった。旅番組は偶々、電源を入れたらやっていただけの話である。

さて、その瑞希ちゃんだが。今日はAM10時頃に俺のアパートに直接やってきた。出迎えに行こうかと言ったが、瑞希ちゃんは場所はまだ知っているから大丈夫との事でそうだったのである。

今日の瑞希ちゃんは、青いモコモコしたジャケットに黒いフリルの付いたスカートといった服装で、細い両足には黒っぽいチエック柄のニーソックスを穿いていた。全体的な雰囲気としては、シックな着こなしのわりに可愛さを滲ませる格好である。瑞希ちゃんのあどけない表情等もある為、余計にそう見えるのかもしれない。

で、そんな瑞希ちゃんであるが、玄関を潜るなり、自分の部屋かのように気兼ねなく寛いでいる。その様子は、此処に来るのが二度目とはとても思えないくらいである。

また、瑞希ちゃんは剣道をやっているという事もあり、日本の古来から続く伝統や伝説等に興味が湧くようで、先程から鬼一爺さんに色々質問をしているのだった。

そのせいか、爺さんとの歴史談話中に「ウソオ」とか「エエエ、本当にイ」といった感じで、驚きを身体全体で表現していた。

瑞希ちゃんにとって、この爺さんの存在というのは、ある意味シラカンスの様なものなのだろう。生きた化石というか。もう随分前に死んではいるが……。

そして、そんな瑞希ちゃんを見ていると、姫会長もそうなのだろうか？ と考える自分がいるのだった。しかし、あの人の場合は戦

国武将や武人等の武勇伝を特に好みそんな雰囲気ではあるが。

そんな事を考えていると、瑞希ちゃんが俺に声をかけてきた。

「日比野さん、どうしたんです。あまり面白くないですか？……」
と、やや悲しそうな声で話し掛けてくる。

俺はそんな瑞希ちゃんを見るなり罪悪感が湧いたので、明るく振舞って返事をした。

「ああ、違う違う。盛り上がってるところ悪いなと思ったから、俺は引っ込んだだけだよ。実は俺、歴史はそれほど詳しくはないからね。ハハハハ」

（涼一は、過去の事あまり興味が無いのじゃよ。昨日、文化財とかいづのを見に行った時も退屈そうな顔をひとつたわい）

何故かここで、ジジイまでが俺の非難を始めた。予想外だ。

「エエ、それじゃ一緒に盛り上げられる話をしましょうよ。日比野さんも話に混ぜてくれなきゃ駄目です」

と、頬を膨らましながらか瑞希ちゃんは言う。

そんな少し怒った顔も可愛い表情だ。などと思いながら、俺は答えた。

「ゴメンね。それじゃ、何の話をしようか？」

「ん」と、そうですね。お爺さんも混ぜての共通の話題という事で、幽霊の話聞きたいなあ」

瑞希ちゃんは屈託の無い笑顔を俺と鬼一爺さんに向ける。

そんな瑞希ちゃんに苦笑いを浮かべながら、俺は気になっていたある事を鬼一爺さんに尋ねるのだった。

「幽霊の話か……。そう言えばさ、俺、前から気になってた事があるんだよ」

（なんじゃ？ 気になってた事というのは）

「あのさ、爺さんは何で着物を着ていられるんだ？ 衣服って生物じゃないから霊体なんてないだろ。そこが前から気になってたんだよ」

「アッ本当だ。言われてみると服の幽霊なんて聞いたこともない」

と、瑞希ちゃんは右手で口を覆いながら相槌を打つ。それを聞いた爺さんは、突如、大きな声で笑いながら言うのだった。

（フオフオフオ。お主、中々、面白い視点で物事を見るの）

「それは褒めてるのか、貶けなしてるのか、どっちだ？」

俺は何故か馬鹿にされたような気がした為、やや怒気を込めてそう言った。

（勿論、褒めておるのじゃよ。涼一は今まで霊を見てきてどう思ったのじゃ？ 大小様々に光り輝く球の霊魂に、我の様な生前の姿の霊。そんな様々な形の霊を見てきて何か気付かんかの）

「様々な形の霊……」

俺は爺さんの謎掛けを頭の中で復唱する。

隣を見ると、瑞希ちゃんも頭を捻っていた。「ウーン」と唸っている。

そんな瑞希ちゃんを見た後、俺は考える。服を着た生前の姿の霊と、球体の霊魂の違いを。

俺が今まで見てきた服を着る姿の霊というのは、皆、何なにかの思いが強いように感じられた。これには勿論、悪霊も含まれる。

しかし、もう一方の光り輝く球体の霊魂からは、例外はあるが、あまりそういった強い思いというのが感じられないような気がしたのだ。

そこで俺の脳内にある仮説が浮かんできた。

そして、もしやと思い、鬼一爺さんに尋ねるのだった。

「爺さん。もしかして、生に対する思いの強さが、生前の魂の記憶からその姿を投影させてるのか？」

俺の言葉を聞き、鬼一爺さんは笑顔で頷く。

「どうやら正解のようだ。」

（フオフオフオ。そうじゃ、衣てふひの霊などではない。お主が今見ておる私の姿は、私の魂の記憶が映し出す姿なのじゃよ。そして、生への執着が強ければ強いほど、その姿は生前の姿になる傾向があるの

じゃ)

鬼一爺さんがそう解説すると、今度は瑞希ちゃんが爺さんに問い掛ける。

「エエッ！ それじゃ、お爺さんは生に対する思いが強いのですか？」と驚きながら。

(ああ、言い忘れとつたが。私の場合は、そこ等辺の霊とは少し訳が変わる。それについては講釈はできぬので勘弁して欲しい。すまぬな、娘子よ)

「ええ、そうなんだ。まあ、いつか」と、瑞希ちゃんは軽く返事をする。

俺はもう一つ気がかりな事があつた為、それも尋ねた。

「爺さん。悪霊も服を着ているけど。負の感情が強すぎてもそうなるのか？」

(悪霊の場合は、色んな負の思念で出来ておるので、生前の姿というよりもその過程でそうなるとしか言えんの。まあこればかりは我も正しくは答えられぬ。すまぬな涼一)

確かに、悪霊の場合はそれらとは訳が違つので、そうなのかも知れない。

俺がそう納得したところで、テレビから速報の時になる。「ピコピコーン」という、いけ好かないチャイムの音が聞こえてくるのだつた。

俺達はテレビに視線を向けると、画面の上に白い文字のテロップが表示される。

そこにはこう表示されていた。

【ニュース速報】光民党党首の鴉川 幸雄 衆議院議員(54)が死亡。講演を予定しておりましたS県の宿泊先で、今朝方、関係者の手により発見された模様

といった内容のテロップが表示されたのだった。

「フウン、政治家が死んだんだってさ」

「へえ〜。心臓発作とかですかね？」と、瑞希ちゃん。

「かもね。中年の人というのは、ある時ポツクリと逝ってしまう場合があるからな。まあ若い人間でも偶にあるけどね」

俺はテーブルに頬肘をつきながら言うと、爺さんが話しかけてくる。

（ところで涼一。もう昼じゃが、お主等はどこかに出かけるのではなかったのか？）

爺さんのその言葉に瑞希ちゃんが真っ先に反応する。

「ああ、もう12時20分ですよ。それに、今日は日比野さんが、お昼を奢ってくれてるって言うたので、楽しみにしてたんですから。エヘヘッ」

瑞希ちゃんは満面の笑顔で俺にそう言うと言いつつ勢い良く立ち上がった。そんな瑞希ちゃんを見上げた後、俺も重い腰を上げて立ち上がる。そして、大きく背伸びをして言った。

「ヨシッ、じゃあ行くか。と、その前に忘れ物ないか確認ッと」

その後、俺達はアパートを出て学園町中心街へと進んで行くのであった。

今日の高天智市内は晴天で文化の日という事もあり、屋内外問わず色んな公営施設で、それに因んだイベントが行われている様である。そして学園町もご多分に漏れず、各所で色んな催し物が行われているのだった。

中心街を抜ける大通り両脇の歩道には、沢山の人が行き交っており、これらの半数以上は、そういったイベント目的の様に俺の目には映る。

俺達の進む先に見える茶色の大きな施設。高天智文化会館もそういった建物の一つらしく、建物の正面にある駐車場からは車の出入りが激しくなっていた。ここでは、何のイベントをするのか知らないが、その大きな駐車場は、ほぼ満車になっている様である。

また、大通りに面したその駐車場入口では、シスの暗黒卿を思わせる赤いライトセーバーのような棒を持ったオッサンが、しきりに

それを振って車を誘導をしていた。オッサンの振っている手の動きを見ていると、本物？のライトセーバーなら、自分の足を切り落としているかもしれないな、と。そんな有り得ない事を想像してしまう自分がいる。因みに俺はこの棒の名前を知らない。恐らく、これからも知る事は無いだろう。これも世の理だ。多分……。

そんな事を考えながら、賑やかな文化会館の前を通り過ぎて行くと、途中で路地を曲がり、やや人氣が薄くなる地域に移動した。

其処はこの学園町でも珍しい、様々な形のビルや会社が軒を連ねる、ちよつとしたオフィス街といった感じの所なのであった。

その為、この辺りにはイヴェント施設がないせいか、人通りも疎らになっている。また、休日という事もあり、どの会社を見ても営業している様子は無く、ビルの入口は固く閉ざされているのだった。そんな大通りの喧騒から離れたこの地域に、俺達の向かう洋食屋がある。

因みにその店。実はこの地域に引越してきて初めて外食をした店で、俺にとっては非常に思い入れの深い店なのであった。

そして、その目的の建物が見えてきた所で、隣を歩く瑞希ちゃんが前方を指差して言った。

「日比野さん。あそこに見える灰色のお店ですか？」

「そう、あそこだよ。結構、美味しい店だから保証するよ」

と、そんな会話をしている内に俺達は店の前に辿り着く。

この店はコンクリート打ちっぱなしの外見で、清々しいほど何も飾り気が無く、全面がコンクリート剥きだしの様相をしている。その為、洋食屋としては地味な感があるのだが、玄関だけは異様に存在感を出しているのだ。

玄関の頭上には、真っ黒い大きな看板が掲げられており、其処には、此処の店名とDBの神龍シエンロンに似た白い龍の絵が目飛び込んでいる。

そして、看板には明朝体の赤い文字で、こう名前が書かれているのだ。

【レストラン 染味・平治】と

今年の春、この店に俺が初めてきた時は、親父と一緒に来た。その時、親父はこの看板を見るなり、暫く玄関前で立ち尽くしていたのである。俺はそれが気になり、横から親父の顔を覗くと、どうやら感動している様子であった。

後で聞いた話だが、どうも親父が青春時代にハマっていた、ロックグループのメンバー名と同じなんだそうだ。因みにレッド・ツェッペーンというグループ名らしい。

この時の俺は、店があまりにも地味だから、開き直ってこの名前にしたのだろうか？ と思っていたが、親父の話を聞いて『そうだったのか』と納得したのを憶えている。

まあ、それはさておき。俺と瑞希ちゃんは今早速、その店内へと入ってゆくのだった。

入口の重厚な茶色の扉を開くと、食欲をそそる香辛料の香りで店内は充滿していた。空腹時にこんな空間に入ると、腹もグウと鳴くというものだ。実際、俺の腹はグウグウ鳴いていた。

そんな美味しそうな匂いのする店内に入った俺達は、空きテーブルがないか見回す。しかし、店内は一杯で空きが無いようである。

俺が、やや諦めモードに入りかけたその時。真中辺りにあるテーブルに座っていた人が立ち上がったのだ。俺は心の中でガツポーズをすると、瑞希ちゃんにその事を伝えて、まだ食器類の残ったそのテーブルへと移動するのだった。

そこで俺は周囲を見回す。

店内は以前来た時と変わらず、やや暗めの明かりのせい、落ちていた雰囲気の様相をしている。木製の丸いテーブルが何脚も綺麗に並んでおり、店内の所々に観葉植物が育つ鉢が置かれていた。そういった植物等の影響もあり、この店内は落ち着きと安らぎと食欲を与えてくれる空間となっていたのであった。

一方、奥の壁を見ると、レッド・ツェッペーンのライブ時の大きな写真が額縁に入れられて飾られていた。物凄い汗だくになって、

長い髪を振り乱しながら変ったギターを弾く外人の写真である。衣装には表の看板に描かれているような龍の刺繍が入ったものを着ていた。

親父はこの人が弾くギターの事を、ギブソンSGのダブルネックギターとか言ってたが、俺にはサツパリである。また、この写真を見たときの親父は、天国への階段がどうのこうのと訳の分からない事を言っていたが、これも俺にはサツパリなのでスルーしていたのだった。

と、この写真を見ていたら、そんな当時の事を思い出す。そんな訳で、これも以前のままなのであった。

俺と瑞希ちゃんも空いたばかりの席に座ると、店の人がやってきて俺達に頭を下げてから、前の人達の食器類を下げてゆく。そして、テーブルの上を拭いた後、メニューを持ってやって来たのであった。俺がそのメニューを眺めていると瑞希ちゃんが聞いてくる。

「日比野さんのお勧めってなんですか？ 私、それが食べてみたいです」

「ん、お勧めかい？ そうだな。以前、ここに来た時にオムライスを食べたんだよ。しかも、あのトロツとフワツとした感じの卵が上に乗るタイプのやつをね。絶品だったよ。それにする？」

俺は当時食べた、あのオムライスのイメージを何とか伝えようと、ジェスチャーをしながら説明する。

すると、瑞希ちゃんも俺から出てくる熱意が伝わったのか、両掌を組んで笑顔で返事をしてきた。

「へえ、そうなんですか？ なんか楽しみです。じゃ、それにしますね」

その返事を聞いた俺は、店の人にオムライスを二つ注文した。

そして、オムライスが届くまで、俺と瑞希ちゃんは剣道の話やお互いの学校での話で盛り上がり、暫く間話し込むのだった。

だが、そこで付近に居た妙な客が、場の空気を一変させてしまう。「オイッ。一体、何時までまたせんだよ。フザケンナヨッ！」

歳は十代後半から二十代前半くらいだろうか。

頭が金髪ツンツンヘアの目つきの悪い男が厨房に向かい吼えていた。

両耳には秘鏡の奥地にいる未開の部族の様に、デカイ輪っかのピアスを付けていたのが印象的である。

また、寝不足なのかどうか分からないが、顔色は青白く、目の下にクマが出来ている。何か妙な薬でもやってるのかもしれない。

服装はダブダブの黒い服を上下に着ており、首筋にはタトゥーを入れているのか、奇妙な黒い筋が見えるのだった。

その男は気が短いようで、自分が座っていた椅子を蹴り倒し、厨房に向かって何やら威嚇を始めたのである。

また、この男の居たテーブルには、スキンヘッドでDBのMrサタンの様な髭を蓄えた、ガラの悪い男がもう一人おり、そいつは暴走中の男を笑いながら見ているのだった。

店内の客もシンとしながら、この成り行きを見守っていた。そして、スタッフの若い男は、その男に向かい必死に頭を下げているところである。

俺の相向かいに座る瑞希ちゃんは、やや脅えた様子で、その男達を眺めているのだった。

「フザケンジャねえぞ。何時から来てると思ってんだよ。今すぐもってこいやアア」

「そうだよお前等、早くもってこねえとコイツ何するかわからねえぞ」

といいながら、今度はスキンヘッドが凄い剣幕で若い男の店員の胸倉を掴む。

この男達からは更にエスカレートしそうな雰囲気だ漂い始めてきた。

俺はどうしたものかと爺さんに視線を向かわせる。

すると、鬼一爺さんは里見 太郎演じる、水戸の御老公様の様に満面の笑顔で頷き、口パクで言うのだった。

そんな鬼一爺さんの口の動きを見ると、確かにこう言っていたのだ。

(涼さんや、懲らしめてやりなさい)と

それを見た俺は一瞬ではあるが、水戸黄門のテーマが流れた様な気がした。

まあそれは兎も角、俺は悩んだ。幾ら狼藉者ろうじゃくものとはいえ、一般人に術を行使するのは少々躊躇ためらってしまふ。だが、このまま放っておくと面倒な展開になりそうだったので観念して使うことにしたのだ。

俺は大きく息を吐くと、一枚の符を霊符入れから取り出す。因みにこの霊符入れは、唯の財布だったりする。

それはさておき。彼等の近くにいる瑞希ちゃんに、俺は少し離れるよう注意を促した。

「瑞希ちゃん。少し横に離れていてくれるかい」

「えッ？ 日比野さん、何をするんですか？ 一体……」

瑞希ちゃんはやや脅えた口調で言う。

「ああ、大丈夫。心配しないでいいよ。少し彼等にお灸を据えるだけだから」

俺の言葉を聞き、瑞希ちゃんは何かを悟ったのか、言われたとおりに横に離れる。

それを確認すると、右手に持った霊符に俺の霊力を通す。

そして強制的に霊符の力を解放して彼等を狙い打ったのだ。

符から放たれた、やや薄紫色の霊力の迸りはじは彼等にぶち当たる。

すると、面白いほど効果が現れるのだった。

「ヒッヒイイイ」

男達は奇声を発しながら突然へたり込み、床に尻餅をつく。

その様は何かに恐れおのれている様にさえ見える。また、腰を抜かしたのか、彼らは満足に立てないようになっていたのであった。

さて、俺が今使用した符術は唯の人払いの符術だ。

だが、この符術。強制的に力を解放させて人や動物にピンポイント

トで放つと、物凄い恐怖心を植えつけるのである。

しかも、肉体にはなく魂が直接影響を受ける為、こういった状況になっているのであった。

そう、彼らは本能で恐れ慄おそいでるのである。

そして、彼らはお互いに支えあい何とか立ち上がると、何かに脅えるようにこの店からそくさと出て行ったのだった。

店内にいる全ての人間は、彼等の急激な変化についていけないのか、出て行った先を呆然とした表情で、ただただ眺めていた。

彼らが玄関から出てゆくと、暫くシーンとした物音一つしない空気が店内に漂う。

そんな中、瑞希ちゃんが俺に小声で聞いてきた。

「ひ、日比野さん。一体、何をしたのですか？」

「ンン、今のかい？ 後で教えてあげるよ」

といいながら、俺は周囲を警戒する様に見回す。

すると、瑞希ちゃんは念押ししてくるのだった。

「絶対ですよ。ちゃんと説明してもらいますからね」と。

俺はそんな瑞希ちゃんに苦笑いを浮かべると、溜息を吐きながら、まだ見ぬオムライスを待つのであった

貳拾壹ノ巻

《 貳拾壹ノ巻 》 鎮守の森

11月13日 東京都内 某所

その日は快晴で、清々しいほどの陽光が周囲に降り注ぐ都内某所での話である。

其処は、超高層ビル群と呼ぶに相応しい所であつた。それらビル群の中には窓ガラスがマジックミラーになつており、日光が反射して宝石の様な輝きを放つビルもある。個々のビルは、形や色、雰囲気はバラバラであるが、不思議と違和感なく手を取り合っている様に立ち並んでいる。そして、地上からそれらの高層ビルを見上げると、まるで天に向かい手を伸ばすかの様であり、それらの佇まいは人間社会の際限ない欲望を映しているかの様に見えるのであつた。

また、地上には迷路の様に張り巡らされた大小様々な道路があり、道路や両脇の歩道には絶え間なく自動車と人々が行き交っている。それらの道路からは自動車のエンジン音やクラクションの音等が、周囲にけたたましく鳴り響いており、この大都会が発する喧騒の一部となつているのだ。

そんな超高層ビル群のとあるビルの前に、一人の男が今、タクシ―を降りたところであつた。沙耶香と一樹の父 みちまかずまさ 道間一将である。今日の姿は上下を茶色のスーツに身を包んでおり、普段の着物姿が与える浮世離れた霧囲気とは打って変わり、現代人の様相をしていた。

また、一将の右手には黒い革張りの鞆を携えており、一見するとビジネスマンの様にも見える出で立ちなのである。

白髪交じりのやや短めである頭髮は整髪料で輝いており、凜々しい眉と鋭い眼つきも相俟つて、どこか強い意気込みを感じさせる表

情をしているのだった。

そんな風貌をした一将は、正面に聳え立つやや青がかった外壁のビル入口に向かい歩き始める。

そのビル入口の自動ドアからは、ビジネスマンといった感じである何人かのスーツ姿の人々が、忙しそうに出入りをしていた。

一将はそれらの人々と同じく入口を潜りエントランスホールを抜けると、そのまま奥の方にあるエレベーターへと向かう。迷いなく進むその足取りは、何度もこの場所に訪れている様に感じられる。

そして、大きく重厚なエレベータードアの前に来ると、上昇の矢印が表示されたボタンを押し、エレベーターがやってくるのを待った。

暫くすると、「チーン」という甲高い音と共に両開きのドアが開く。中は無人で誰も乗ってない。

一将はそれに乗ると、目的の階が表示されたボタンを押して上げるのを待つのであった。

それから程なくしてエレベーターがある階層に到着すると、正面の通路を右に曲がり進んで行く。

この階はやや物静かな雰囲気的空間で、活動する人の数も少ないように感じられるヒッソリとした所であった。

通路の壁は灰色で、床には青いカーペットが敷かれている。所々にある各部屋の扉は壁の色と同様に灰色で、取っ手が付いてなければ扉には見えない。また、その反対の外壁側には、周囲の街並みを覗ける大きな窓が覆っており、通路を見た目以上に広く感じさせていた。

そんな空間を進んで行くと、一将は大きな両開きの扉がある所に辿り着く。

扉の佇まいは来る途中に見かけた幾つもの部屋の扉とは違い、意匠を凝らした高級感溢れる扉になっていた。

その為、此処から先は雰囲気が違うというのを扉自身が訪れる者に訴えかけている。

そして、その扉の前には黒いスーツに身を包んだ精悍な雰囲気の若い男が一人立っているのだった。

歳は20代前半から半ば程であろうか。短く刈り上げられた頭髪をしており、表情は穏やかそのもので落ち着き払っている。身長は高く190cm以上はありそうに見える色白で長身の男であった。

一将はその男の前に行くと、何かの模様が描かれた一枚の黒いカードを掲げる。

その男はカードと一将の顔を見ると、笑顔で声を掛けてきた。

「現、道摩家当主の道間一将様でございますね。お待ちしております。さあ中へお入りください」

若い男はそう言うのと扉を開き一将を招き入れる。

「ウム。ありがとう。宗貴君^{むねたか}」

一将は笑顔で男にそう答えると、扉を潜り中へと入ってゆくのだった。

扉の向こうは大きな会議室の様になっており、室内の真中には大きな円を描くように木製の立派な机が設置されていた。床には高級感溢れる赤いカーペットが敷かれており、外に面した窓には黒いカーテンが覆っている。全ての内壁は幾何学な模様の意匠が施された若干濃い灰色のクロスが貼られており、この部屋を引き締まった感じにしていた。また、その上の白い天井には対照的に、豪華な意匠が施された電灯器具が埋め込まれており、室内を白い光で明るく照らして気品ある空間にしているのだった。

中央の机には既に何人かの人間が座っており、一将の姿を見るなり、皆が笑顔で挨拶をしてくる。

一将はそれらの人々に頭を下げ、丁寧に挨拶をした。

すると、その中の一人である歳経た老人が杖を片手に席を立ち、一将に近寄ってきた。

そして、ニコニコとした表情で挨拶をしてくるのだった。

「おはようございます、道間殿。半年振りでございますな」

服装は黒い着物姿で、やや腰は曲がっているものの、その眼光は

中々にしつかりしており、好々爺然とした雰囲気を持つ老人である。真つ白く長い頭髮は邪魔にならないよう後ろで結っており、口元には一将と同じく白い髭を蓄えている。また、眼を覆い隠すくらいまで伸びた、長く白い眉毛が特徴の老人であった。

「おはようございます。土門長老もお元気そうで何よりです。それはそうと、表にいた宗貴君もだいぶ板についてきた感がありますな。ハハハ」

一将は挨拶と共にその老人と握手をする。

「ほほう。道間殿にそう言われれば、あやつも喜ぶじゃろうて。ささッ此処に座りなされ」

老人は自分の隣にある黒い革張りの椅子を引き、一将に座るよう促した。

一将は一礼をした後、其処に腰掛けると荷物を床に置き、老人に話し掛けた。

「ところで土門長老。此度の『鎮守の森』代表者の緊急招集は一体何事なので？」

一将の問いかけに、老人は若干険しい表情をする。

そして、一将の耳元に小声で言うのだった。

「この間、心臓発作で死んだと報道された代議士がおったじゃろう。それ絡みの話じゃ」

「……普通の突然死ではない。そういう事ですか？」

「そうじゃ。その二日後に我等の手の者が依頼を受けて現場を見たところ、付近の地脈に乱れと室内に残留霊痕があったそうじゃ。恐らく、その代議士は呪殺されたとみて間違いなからう」

一将は目を瞑り腕を組む。

そして、暫く考えた後に口を開いた。

「近頃、噂にのぼる呪殺組織の仕業ですか？」

「さての。真相はまだ分からぬ。じゃがここ数年、やたらと呪殺される要人が増えておる。しかも、世界的にじゃ。各国の要人達が相次いで死んでおる背景には、何やら良からぬ企てをしておる輩がい

るのかも知れんの。困った話じゃわい」

土門長老はそう答えると大きく息を吐き、顎の髭を撫でる。

「しかし、各国の要人暗殺となると、話は変つてきますな。我等『鎮守の森』はあくまでも日本でのみ活動をする呪術組織です。国内の事は兎も角、海外となると中々手出し出来ないのでは？」と、一将。

「確かにの……。じゃが、とある筋からの報告じゃと、各国にはそういった呪殺専門の暗殺集団が組織されておるようじゃ。日本にもそれらに繋がりがある暗殺組織があるのじゃろう。儂にはそれらが一つの意思の元に集まっておるような気がするのじゃよ」

「と言いますと、昨今の要人暗殺と此度の代議士暗殺は無関係ではない。そう言う事ですか、土門長老？」

腕を組み、物静かな雰囲気で一将は言った。

すると、この老人は笑いながら言う。

「ヒョヒョヒョ、そこは儂の勘じゃ」

「しかし、土門長老の勘は馬鹿に出来ませぬからな。ハハハ」

一将は、素直にそう述べると笑みをこぼす。

その理由は、土門長老の長年の経験からくる、その洞察力は鋭いものがあり、関係者を度々唸らせているからである。

「兎も角、この代議士呪殺を行った術者はかなりの手練てだれの様じゃ。

地脈を利用した術など、そうそう誰にでも扱えんからの」

「地脈を使った呪殺ですか……。だとすれば、かなり厄介な術者ですな」

「まあ、そういう訳じゃ。今日はこれから皆が集まり次第、呪殺者やその集団に対しての協議が始まるじゃろう。その為の緊急招集じゃ。それと今回は非公式ながら政府要人から鎮守の森への依頼でもあるの」

土門長老の言葉に一将は、やや眉をひそ顰め怪訝な表情で言った。

「政府要人から？ 『鎮守の森』は秘密結社。何人たりとも直接依頼は出来ぬ筈では？」

「そうじゃが。まあその辺の話は、これから始まる協議の中でも説明があるじゃろ……フン」

と答えた後、土門長老は、やや憮然とした表情で周囲を見渡す。

そして一将は、土門長老の言葉と様子から、何やら良からぬ陰謀の中に『鎮守の森』が巻き込まれつつあるのを漠然とではあるが感じ始めているのだった。

今日は高天大の大学祭当日である。

天気は快晴で心配された野外ステージのイベントも滞りなく進行している。

因みにその前日。俺は雨が降る様にアパートの自室で必死に雨乞いをしたが効果は無かったようだ。残念！

まあそんな訳で、俺は今、高天大中央広場にある特設野外ステージ横の控え室にいたのだった。

控え室とは言っても12畳程の広さを持つテントで、周囲は白い布で覆われており、外から中を窺い知る事は出来ない。中は折り畳み式の会議机が2脚と、パイプ椅子が幾つか置かれただけの質素な仮設の控え室である。

俺の隣には林さんと田島さんが面以外を装備した状態で椅子に座っている。因みに今回の雑刀との試合では脛当すねあてを装備する事になっている為、俺達はいつもの武装より物々しい格好となっていた。

そんな俺達の内、田島さんは眼を閉じて物静かに瞑想をしていた。嫌、瞑想と言うよりは現実逃避と言ったほうが正しいのかも知れない。

そして、もう一人の林さんは落ち着かないのかソワソワしている。時折、ステージ司会の声がスピーカーから聞こえてくると、ビクツと体が反応していた。俺も人の事は言えないが……。

今の時刻は12時30分で、出陣までは30分程時間がある。

現在、ステージ上ではアコースティックギターを片手に弾き語り

をする女子グループの出番であった。控え室の外からは、そんな女子グループの綺麗な歌声とジャカジャカと弾くギターの伴奏が聞こえてくる。

ステージの前には観客も大勢いるようで、その女子グループへの声援も控え室の中にまで聞こえていた。外から聞こえてくる会場の賑わいは、演奏者と客席が一体となっている様に感じ、また、俺達へ捧げるレクイエムの様にも聞こえる。

そんなステージ上の賑わいを余所に、俺は次の出番を肅々と待っているのであった。

その時、俺は昨日の練習後に行われた順番を決める話し合いを思い返していた。

因みにその結果、団体戦の順番は先鋒が林さんで中堅が田島さん、そして何故か俺が大将という結果になってしまった。

何故こうなったのかというと、実はアマダクジをしたら唯単にこうなっただけの話である。

で、大将というだけならまだ良かったのだが、不幸にも俺の対戦相手は姫会長だ。嫌、大将のクジを引いた時から薄々予感はしていた。

そして、林さんと田島さんはクジが決まった瞬間、俺に同情の眼差しを向けてくるのだった。

しかし、同情してくれるなら変わりませんか？ と俺が告げると、二人は一斉に目を逸らしたのを思い出す。ガツデム！

そんな昨日のやりとりを思い出していると、突如俺の携帯が鳴り出した。どうやらメール着信音の様である。

俺は携帯を確認する。メールは瑞希ちゃんからであった。そこにはこう書かれていた。

日比野さん、大学祭は楽しんでますか？

休日なら私も行けたのに、と悔しく思っています。

ところで、今日はこの後に薙刀と剣道の異種格闘技戦と聞きました。

瑞希は少し心配ですが、怪我をしないように頑張ってくださいね。
あッそれと、今夜またメールしま〜す
といった内容の事が書かれていた。

このメールを見て俺は考える。
ついこの間、瑞希ちゃんと会った時に、かなり深刻な話としてこの事を切り出したのを……。

そんな陰りのある俺の表情を見て、瑞希ちゃんも心配してメールしたのでろう。そう、俺は考えるのだった。

そこでフト携帯から顔を上げると、林さんと目が合う。

すると、若干硬くではあるが笑顔になり、林さんは俺に声を掛け
てきた。

「もうすぐだね。俺達の出番」

と笑顔で言うものの、やはり何処か暗い感じになってしまふ。

「そうですね……。ハア、落ち着きませぬ。やっぱり」

「仕方ないよ。それに、日比野君は特にそうだと思うよ。ハ、ハハ、
ハハ」

林さんはそう言うと、若干乾いた笑いを浮かべる。

「出来るなら早々と一本取られて終わりにしたいですけど、出来そ
うにないですもんね。ハアア」

実は昨日、姫会長直々に俺達3人へお達しがあった。

内容はこうである。

「いいか、お前等！ 手を抜いて早々と一本取られて終わる
うなどと、フザケタことすんじゃねえぞ。もし、それをやった日には地獄が待っていると覚えておけ。いいなッ分かったかあ」

「……は、はいッ、分かっております。その様な考えを持った
事など、滅相もございません」「」

といった感じのやり取りである。

林さんも思い出したのか冴えない表情になる。

「しかし、なんだ。俺は先に散るから良いとして、日比野君は最後に
姫会長とだから色んな意味で大変だね」

「まあ成る様になれと半ば諦めてはいますけどね。ハ、ハハハ、ハア……」

と、俺が林さんと話し込んでいると、控え室の外から看守、もと基、今回のレフリーである西田さんが現れた。

そして、真剣な表情で俺達に言う。

「もうすぐで出番だ。暫くするとアナウンスが入るだろう。3人も準備をしておいてくれ」と。

西田さんはそれだけ告げるとまた外に出て行った。

それを聞くなり、俺は周囲の異変に気が付く。

先程まで歌っていた女子グループの時間はもう終わったようで、辺りは少々ザワついていた。

そんな周囲の異変を感じると共に、俺の鼓動も早くなり始める。

林さんや今まで目を閉じて瞑想していた田島さんも、『とうとう来たか!』といった暗い表情で面を被り始めていた。

俺も二人に習って同じく面、もと基、又メ又メする兜+大量ファーズ噴射済を装着すると、看守の案内を待つのがあった。

それから10分程経った頃、ステージ司会である女性の明るい声がスピーカーから聞こえてきた。

【はい、それでは次の催し物は、なんと! 日本の伝統武術である薙刀と剣道の滅多に見られないこの異種格闘技戦が始まります。今回は3対3の団体戦という形式を取りまして、皆さんに手に汗握る戦いの模様をお送りしたいと思います。それでは選手の入場です。皆さん拍手でお迎えくださいッ】

そうアナウンスされると同時に物凄い拍手が聞こえてきた。

そして、西田さんは控え室にいる俺達を呼ぶと、ステージ上へ案内を始めるのだった。

その時、御前試合でも始まるのかと思わせるような、ドドンツとやけに低い太鼓の音がスピーカーから聞こえてきた。恐らく、姫会長がチョイスした入場曲なのだろう。何となく、そんな気がする。

そんな賑やかな太鼓の音が聞こえる中、俺達は^{ステージ}処刑場に連れて来ら

れた。

到着するや否や、俺は面の格子越しに観客達の方を見る。

すると、かなりの人数がステージ前に集まっており、ピューピュ
ーと口笛を吹き鳴らす戯け者までいる有様であった。

正直、そんなに見に来る奴はいないだろうと俺は思っていたが、
これは予想外である。

そんな熱気がムンムンする中、俺達の反対側からは、剣道と良く
似た防具を装備し、柄の長い薙刀を持った戦士が現れたのだった。

俺はその3人を見るなりゴクリと生唾を飲み込む。

俺達3人と対峙する形で薙刀戦士3人は立つと、そこで入場曲が
止んだ。

辺りには静けさが漂う。

すると、黄色い服を着た司会の女性が、俺達の紹介とルール等の
説明を始めるのだった。

因みに3本勝負で、制限時間は10分である。要するに二本先取
した方が勝ちという事だ。それに今回は剣道にない、脛一本が付け
加えられる。

それらの説明が終わると、一旦、俺達は舞台端に移動する。

そして、其処で座って名前の呼ばれるのを待つという手筈だ。

それから程なくして先鋒の林さんの名前が呼ばれるのであった。

林さんの名前が呼ばれると共に、心の中で思わず合掌をしてしま
う自分がある。

だが、間もなく、俺も同じ運命を辿ると考えると身の毛がよだつ
思いである。

俺は戦いを見ってしまうと恐怖を覚えて萎縮してしまいそうな気が
した為、戦いは見ずに眼を閉じて心を落ち着かせることにしたのだ
った。

そして、時は動き出した。

「ウギヤア」

「ぶべらッ」

「あべしッ」

「イツテエエエ」

「ドベエエエ」

「チヨ？」

「ヒイイイ」

「オベエエエ」

「ノオオオ」

といった悲鳴が時間経過とともに俺の耳に入ってくる。

中には経絡秘孔を突かれたような声もあった為、俺は恐ろしくて目を開けない。

そして、中堅の田島さんの負けが確定すると、とうとう俺の名前がコールされるのであった。

因みに先鋒の林さんは善戦むなく早々と散った様である。

俺は瞼を開き、ゆっくりとした動作で立ち上がると、やや膝を震わしながらステージ中央へと重い足を運ぶ。

中央までたつた10m程の距離ではあるが、50m程先の様に感じられる。

そんな錯覚を覚えながらステージ中央付近に辿り着くと、其処には猛者の雰囲気纏う姫会長の姿があった。

その姿は、まるでドラマ等で見かける武蔵坊弁慶といったところで、今から合戦にでも行くかのような勇ましく、猛々しい印象を受ける。また、歪みのないその姿勢からは、一切手加減はしないという気迫が感じられるのであった。

俺はその姿を見るなり、再度、生唾を飲み込む。

そして、俺と姫会長は互いに礼すると、ステージ真中にある開始線についた。

俺と姫会長が中段構えをとると、外野からは割れんばかりの歓声が上がる。

どうやら先程の派手な処刑を見てギャラリィは興奮しているようだ。

そんな事を考えながら竹刀の切先を交えると、主審の西田さんが合図をしたのだった。

「始めッ」と。

斯くして、公開処刑の幕が上がったのである。

俺は姫会長を真っ直ぐと見据える。

視界に入る姫会長の堂々とした佇まいは、正しく幾多の修羅場を潜り抜けてきた武人といった表現がピッタリだ。

ややその雰囲気気圧されつつも俺は考えるのだった。

勿論、どうやってこの武人から一本取るか、をである。

理由は、無様な試合をした場合は、試合後に折檻される可能性があるからだ。

試合に勝とうと思わない限りそんな事は不可能なので、初心者のは俺は考えるのである。

しかし、悲しいかな。残念ながら、現段階の俺では正攻法で行ったところで返り討ちに合うのが関の山だ。

かといって、あまり奇抜な戦法や手段は、剣道に於いて反則となりうる場合がある。

それに受身になりすぎても戦意が無いと見なされる為、難しいところである。

だが、今は異種格闘技戦だ。

唯でさえ俺と姫会長の間には、武術経験の差というハンデがある上に、今は獲物のリーチ差というハンデもある。

これがもし実戦なら、尋常ならざる手段が求められるところだ。

おまけに今回は独自ルールでもある為、多少は冒険しても問題ない様である。

まあ試合と言うよりはエキシビジョンの意味合いの方が強く感じるし……。

そういう訳で俺は考える。ついでに言えば、鬼一爺さんのアドバイスもあり、少しは作戦を立ててはあった。

と、俺がそんな事を考えていると、姫会長が「メンツ」という掛

声と共に俺を打ち据えてきた。

思った通りである。相手は初心者である為、正面から面を打ちにくるだろうと俺はある程度予想はしていた。といっても爺さんのアドバイスだが。

その為、俺はすんなり体が動いたのだった。

俺はそれを竹刀で受けると、力を抜き体を半身になりながら前に踏み込む。

そして小さく弧を描く様に竹刀を上段に構え其処から面を打った。「面！」という大きな掛声と共に。

その結果、面にクリーンヒットする。

俺はその直後、すぐに間合いをとり中段に構えた。残心というやつである。

この剣道という競技の一本は、充実した氣勢・適法な姿勢・竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し・残心あるもの、というのが当てはまらないと一本として認めてくれないからだ。

そこで西田さんが驚いた表情で、やや弱々しい合図を入れた。

「め、面……い、一本……」

周囲は、俺のいきなりの一本にやや毒気を抜かれた様に静まり返っていた。

それはさておき。とりあえず、俺は自分の当初からの作戦がうまくいった事に力を抜くと、今の事を振り返るのだった。

何と言っても、得物のリーチが長いという事は、それだけ間合いを詰められた場合は不利になるという事である。

そして、協会長の最初の行動に山をはっていた俺は、そこを凌ぐと、間合いを一気に詰めて一本を取ったという訳だ。

しかし、この一撃が眠っていた修羅を呼び起こす事になるうとは、この時の俺には知る由もなかったのだった……。

姫野由香里は初太刀を受けてからの流れるような涼一の動きと、其処から間合いを詰められた一本に、思わず我が目を疑った。

そこで考えるのである。何故こつも簡単に一本を許したのだろうか？と。

それと同時に、剣道を始めたばかりの涼一に一本を取られたという事実が彼女に重く押し掛かる。

その為、心の奥底から沸々と沸きあがり始めた自分への怒りが、彼女を本気にさせるのであった。

由香里は開始線までくると、中段に構える。しかし、先程までとは違いその動作は鋭さと切れが増していた。

周囲に見ている者もその様子はなんとなく分かり、特に主審の西田は、先程までとの違いを肌で感じているのであった。それと同時に思った。日比野君、南無阿弥陀仏と。

両者が開始線について構えると西田は開始の合図を二人に告げた。「始めッ」

合図と同時に由香里は八相に構える。

先程の中段よりも横に高く掲げられた薙刀は、直ぐにでも振り下ろせる様な状態で、相手には威圧的な構えに見える。

その為、涼一はこの構えを見るなり息を飲むのであった。

そしてこつ思った。ヤバイ、本気にさせたようだ。殺される、と。

涼一はその威圧的な姿を見て、飲み込まれた様に呆然と立ち尽くす。

しかし、由香里はその様子を好機とみて一気に踏み込み、涼一の面に向かい鋭く切先を振り下ろした。

「面ッ！」という大きな声と共に。

やや袈裟斬りのような角度から涼一の面に鋭く切れ込む。

涼一は面を喰らうと同時に尻餅をつく。

「面、一本ッ」

主審の西田は由香里に一本を告げる。

すると会場は、涼一の派手な尻餅もあってか一気に沸き返るのだった。

「由香里サアアン、カッコいいイイ」

ギャラリーは女子が多いようで、由香里に向かった声援が多い。ある意味、場を盛り上げる為に男達は生贄にされたかのようである。

そんな会場の賑わいの中、涼一はややフラフラしながら立ち上がった。

そして、立ち上がると首を前後左右に振り、首のマッサージを始める。どうやら先程の一撃が効いた様である。

そんな痛々しい仕事をした後、涼一はやや重い足取りで開始線にまで向かうのだった。

イツテエ、首が縮んだかと思った。

しかし、やべえな。姫会長マジだよ。しかも、今のフルスイングで打ってきたよ。

俺、生きてこのステージを降りられるんだろうか……。かといって、簡単に終わると、姫会長に後で何言われるか分かったもんじゃないしな。

ハアア憂鬱だ。でも、次の一本で勝敗がつく。とりあえず前向きに考えよう

俺はそんな事を考えながら開始線につくと、先程と同じ様に中段に構えた。

そして、今みたいに姫会長の雰囲気にもまれてアツサリとやられない為にも、大きく深呼吸をして心を落ち着かせ、気を引き締めるのだった。

俺は姿勢を真っ直ぐにして、姫会長を見据える。

そこで西田さんの合図が入った。

「始めッ」

俺は心を落ち着かせ相手を見る。

焦りや恐れは自分の行動範囲を狭めてしまっからだ。

姫会長も、中段の構えのままである。

恐らく、油断大敵と思い、基本に立ち返ったのだろう。

そんな姫会長を見ながら俺は考える。どうやったら無事にステージを降りられるかを。

と、そんな余計な事を考えていると、姫会長は俺の脛を狙って鋭く打ってきた。

「スネエエエ」と充実した氣勢で。

「ヒイイイ」と充実した奇声を上げた俺は、バックステップでその攻撃をギリギリかわすと、そのまま勢いあまってでんぐり返しをする。

多分、周囲の人間には無様な姿に見えただろう。

しかし、そんな事を考えている暇など俺には無い為、直ぐに立ち上がると中段に構える。

だがここで西田さんが中断する。

「止めッ」

開始線に戻った俺は西田さんに着衣の乱れを指摘される。

恐らく、でんぐり返しをしたときに乱れたのだろう。

俺は一旦、竹刀を置いて着衣の乱れを直すと、開始線に戻りまた中段に構えるのだった。

「始めッ」

そして、また対峙が始まる。

俺は大分この雰囲気にも慣れてきたのか、落ち着いて相手を見れるようになっていた。

お陰で、姫会長の動きにも何とか対応できそうな気がしたのだ。

これも今までの悪霊退治や土蜘蛛退治での経験からきているのかも知れない。

やや、心にゆとりを持たせながら俺は眼前の相手を見据える。

しかし、姫会長は中々打っては来ない。

予想外にも大分、警戒しているようであった。

俺は、消極的な試合運びをして怒られるのも嫌なので、この膠着状態を打破すべく考える。

そして、ある一つの考えが浮かぶと、俺はそれを実行する為に構えを変えたのだった。

俺は竹刀を上段にゆっくりと持ってゆく。

すると胴の守りが手薄になり、ガラ空きになる。

わざと隙を作って打たせようという俺なりの誘いの構えだ。

しかし、姫会長は俺の構えを見るなり、やや後ろへ下がる。

だが、すぐさま物凄い踏み込みで俺に胴突きを放った。

俺は突きを竹刀で左に打ち、薙刀の軌道をずらして身体を半身にすると、姫会長との間合いをつめようとした。

だが、その時！

「スネエエエ」

予想外のところから俺の脛に衝撃が加わった。

俺はその衝撃で脚を取られて転んでしまう。

そして、西田さんのコールが会場に響くのだった。

「脛、一本！」と。

やや呆然としながらも、俺は今の攻撃を考える。

そして、どうやって脛に入れられたのかが分かってきたのだった。

確かに薙刀の切先は竹刀で弾いた筈だが、どうやら反対側の柄で脛を打たれたようだ。

そんなの有りかよ、とも思った。だが、兎も角、これで俺の負けが確定したわけである。

俺はフウと大きく息を吐いてゆらりと立ち上がると、開始線に戻る。

そこで、西田さんが旗を揚げ勝者のコールをした。

「勝者、姫野ッ」と。

コールと共に会場からは姫野コールが湧き起こった。

そんな会場の雰囲気ややゲンナリしつつも俺は姫会長に礼をする。

だがそこで、姫会長が俺に近寄りこう言ったのだった。

「お前、中々面白い奴だな。見所あるよ」と。

俺は、突然そういわれたので、ややビックリしたが、悪い気はし

なかった。

そして、帰ってゆく姫会長の後ろ姿を見送った後、大きく息を吐いて体の力を抜く。

何はともあれ、無事に異種格闘技戦を乗り切れたのが、一番、今の俺をホッとさせていた。

まあそんな訳で、ステージを降りた俺は控え室でサツサと着替えて、サツパリすることにしたのだった。

貳拾貳ノ巻

《 貳拾貳ノ巻 》 依り代

大学祭から4日後の早朝。

俺はいつもと同じく、高天智天満宮の裏山にて靈術の修行に勤しんでいた。

ここ最近は何なども降らない為、修練のしやすい日々がずっと続いている。有難い事だ。

また、今日の裏山は霧が深いという事は無く、非常に視界が良好である。

勿論、日の出の時刻ではない為、周囲はまだ真つ暗だ。が、霧によつて視界が妨げられる事は無いので、そこに関しては気分的にもやや楽になっているのだった。

しかし、今は11月下旬に入ろうかという時季であり、外の気温はかなり低い。F県は中部地方の北側という事もあり、この頃になると場合によつては霜が降りる事もある。

昨晚、ネットで気象庁の発表する予想気温を調べたところ、この時間帯で0℃と表示されていた。数字を見ただけで震えてしまったのを俺は思い出す。

以上の事から、今までの肌寒い感じから、霜焼けを起こしそうな凍てつく冬の寒さへと変わりつつあるのだった。

そういった気候の変化に伴い、当然、俺の服装も上下共にかなり厚着になっている。ジャージの上から白いウィンドブレーカーを着るといった格好だ。

そんな冬の寒さに近い中、俺は術の修練をしている訳なのであった。

だが、そういった自然の厳しさばかりではなく、今の俺には別の

苦しさも押し掛かっていた。

それは、この間から修行方法がレベルアップしており、より身体と霊体への負担が大きなものになっているからなのであった。

修行内容としては、障壁の符術を行いながら、真言術『浄化の炎』を同時に発動させる。といった単純な内容である。

しかし、この修行は正しく、^{まさ}「言うが易し、行は難し」の内容で、今までの修行と比べるとそれは大変なものであった。

これまでの修行で、霊力を分散させる事はやってきた。だが、二つの術を同時に行使するというのは、それとは比較にならない程の負担が俺の身体に襲い掛かってくるのだ。

何故ならば、二つの術の霊力供給と維持、そして制御を同時に行わなければいけないからである。

そしてその行為は、今まで行っていた、一つの術を行使しながら霊力を分散させる事とは訳が違うのだ。

だが、これが出来なければ術の進化など絵に描いた餅である。拗つて、この先を見据えた場合に避けられない事項である為、俺は苦しいながらも頑張っているのであった。

この修行をやり始めたのは、丁度、大学祭の翌日からである。

その前日、五行相関の術の基礎である障壁の符術の成功率が上がってきた事から、鬼一爺さんが提案してきたのが事の発端であった。その時の鬼一爺さんは修行の強制ではなく、あくまでも提案をしただけである。

また、俺自身も術の同時発動を行えば、かなり身体に負担が掛かる事は百も承知であった。

だが、俺は臆病者である。危険から身を護る術というのは選択肢が多いほうが断然良い。

そういった自己防衛の面から、爺さんの提案に自ら買って出た為に、こうなったという訳である。

さて、それでその修行であるが。

俺はつい先程、障壁の結界を周囲に張り巡らせながら、浄化の炎を発動させていた。

しかし、同時に術を行使してから30秒程経過したところで、俺はその苦しさのあまり両膝をつく。

そして、今は四つん這いになって肩で息をしているところであった。

額からは、外気にさらされた冷たい汗が筋を描いて鼻に伝い地面に滴り落ちていく。

荒い吐息は白い煙を吐くかのように俺の口から勢い良く出ていた。

また、体からは物凄い熱気を発している為、白いオーラを纏う姿の様に見えるのだ。

そんな俺に鬼一爺さんは近づき、陽気な声で話しかけてくる。

（フオフオフオ。涼一、昨日よりは長く術を発動させられたの。といつても僅かなもんじゃがの）

「ハアハアハア……そんな簡単に……出来るとは思ってないよ」

と、やや荒い呼吸をしながら俺は言う。

そして喋り終えた後、大きく深呼吸をしながら徐々に心拍を落ち着かせていくのだった。

そんな俺を見ながら鬼一爺さんは言う。

（まあ、それでも良くやつとる。お主が術を扱える様になる速さはこれ以上ないくらいじゃ。じゃが、あまり背伸びをした修練は、身体に負担が掛かりすぎて良くはない。あまり慌てても碌な事にはならんぞ。今日はもう此の位にしておいた方が良いじゃろう）

鬼一爺さんは、俺の身体を心配しているようである。

そのせいか、どこか諭す様な感じで俺に言うのだった。

爺さんに忠告をされた俺は荒い息を整えながら考える。

そして、鬼一爺さんの提案を受け入れる事にしたのである。

「そうだね。あまり無理をすると実生活に支障が出てくる感じがする。今日はもうやめとくよ」

と答えた俺は、地面にドカッと座り込み身体をリラクセスさせる。

(その方がええ。時は沢山ある。無理せぬ様に続けて行くのが大事なのじゃ)

そんな訳で、俺は爺さんの意見に従い、今日はもうこれで術の修練は終わりにする事にしたのだった。

俺は深呼吸を繰り返し返しながら空を見上げると、眼を閉じて心も落ち着かせる。

それから5分後。

心身ともに、だいぶ落ち着いてきたところで、鬼一爺さんに向かい俺は話しかけた。

「なあ、鬼一爺さん」

(何じゃ?)

「今、俺がやろうとしている『浄化の炎』の進化だけど、符術の他にも併用できる術とかつてあるの?」

(フム。勿論、符術以外にも併用できる術や依り代はあるぞ)

「よりしろ? なんだそれ?」

俺は眉根を寄せて問い掛ける。

(依り代とは、本来の意味するところは神霊かみのみたまが依り憑く物という意味じゃが、ここで我が言う依り代は己以外の霊力源だと思えば良い色々あるんじゃよ。例えば、樹齡が何千年と経た霊木や、悠久の年月を経て生まれた霊石とかの。また、大地を駆け巡る地脈も、一応、そういった類たぐいに入るかも知れんの)

「へえ」。早い話が、霊符の効果を秘めた天然物があるって事かなるほどねえ、それは良い事を聞いたよ」

俺は顎に手を当てて色々と考えを巡らせる。

しかし、鬼一爺さんはやや固い声色で、こう付け加えてきた。

(じゃが、己の霊力とは波長も違うから、そのまま使える訳ではない。依り代の力を使うのも、ある程度修練を必要とするのじゃよ)

「エ、そうなの? なんかややこしそうだね」

俺が難しそうな表情で言うと、爺さんはニコやかに答える。

(フオフオフオ。まあ、今の涼一なら、大概の霊木や霊石はもう扱

えるじやる。それらが発する波長と己の靈力の波長を合わせれば良いだけじゃからな)

「鬼一爺さんは簡単に言うけどさ、それって結構難しそうなのがするぞ」

(何を言っておる。お主には我が今までに散々その修行を課してきたぞ。靈力の扱いを)

「ウーン。でもなあ、実物を見ないと俺も自信ない。それに一度は体験しないとなあ」

俺は腕組むと唸りながら不安な声で言う。

そんな弱気な俺を見た爺さんは、溜息混じりに言うのだった。

(フウ、仕方ないの。それじゃ今度、我が依り代のある場所を探して案内してやるぞ)

「おお、マジで？ 悪いな鬼一爺さん」

と、爺さんの話を聞いた俺は、やや高めのテンションで答える。

(まあ仕方あるまい。実物を見た事ないのであれば、お主も実感が湧かぬじやる。おっと、そうじゃ。一つ言い忘れとったわい)

「言い忘れてたこと？」

(今言った霊木は大丈夫じゃからよいとして。問題は霊石のほうじゃ)

鬼一爺さんはやや難しい表情で言う。

「霊石がやばいのか？」

(霊石の中には強い思念が渦巻いておる事もあるから、安全という訳ではないのじゃよ。要するに、強い念に打ち勝てる精神力も必要という事じゃな。これも一応、覚えておくのじゃ)

「強い精神力か……。それは兎も角、今の思念で思い出したけど。さつき、地脈も同じ類に入るっていったよな？」

ここで俺は、先程、爺さんが言っていた地脈の事が気になり問い掛けた。

「地脈って、大地の靈力だろ。そんなもん人間が扱えるの？」

(一応、扱えるのじゃが、地脈の力を操るのは結構難しいんじや。

大地の靈力は所々で波や強さ等がバラバラじゃからの。まあ、今のお主でも場所によつては出来るかもしれんが)

「フウン。なんか知らんけど。面倒そうやなあ」

(それに色々と危険な面もあるしの……)

鬼一爺さんは顎に手を当てながら言つと、俺の顔を難しい表情で見える。

俺はその様子と言葉が気になり、問い掛けた。

「な、何だよ。なんかあるのか、爺さん」

俺の問い掛けに、暫く眼を閉じて考えた鬼一爺さんは、何かの結論をだした様に言つのだつた。

(今のお主になら話しても良からう。それに何れは避けて通れぬ日が来るかも知れぬしの)

「何だよ、避けて通れぬ日って……」

(まあもしかしたらという話じゃ。という訳で続けるぞい。実は、地脈を操る為には、一つ大きな問題があるのじゃよ)

「大きな問題？」

(そうじゃ。以前、お主にも話したとは思うが、地脈とは靈魂が大地に帰る為の道の事じゃ。つまり、其処には大きな靈力と共に膨大な思念が渦巻いておる。その比は靈石どころの話ではないのじゃ。

という事は、術者自身が地脈の思念に取り込まれん様に、術を施す事を先ずはせねばならんのじゃよ)

俺は爺さんの説明を聞くうちに自分の體質を思い出す。

そして、念の為、聞いてみた。

「それって、幽現成る者の特異體質で乗り切るのは無理なの？」と。しかし、鬼一爺さんは首を縦には振らずに続ける。

(嫌、幽現成る者でも思念の影響はやはり受ける。憑依とはまた違うんじゃ。思念とは生き物の様々な願望や欲望の集まりじゃからの。まあ、そういつた強い思念は殆どが人のものであるが)

「ウウウ。なんか、爺さんの話を聞く限りだと、やばそうな方法の気がするな……」

俺は顔を引きつらせてそう言うと、鬼一爺さんはそんな俺を見ながらニコやかに話し出す。

（フオフオフオ。要するに、思念に取り込まれん様な強い精神力とそれを防ぐ術が必要という事じゃわい。すまんの、驚かせるつもりは無かったんじゃ）

「いや、気にしなくていいよ。これもまた勉強になったし」

爺さんの笑顔で幾分か恐怖感は和らいだ為、俺はホツとした表情でそう答える。まったく、心臓に悪いジジイだ。

そして、鬼一爺さんは、今言ったことの総括をするのだった。

（ま、何にせよ。自分以外の霊力を使うには、色々と知っておかねば成らぬ事があるという事じゃな。それと、精神面をもう少し鍛えれば、お主にも扱える日が来るという事じゃ。嫌、そうならねばならん時が来る筈じゃ。精進する以外ないの。フオフオフオ）

「まあとりあえず、俺の歩む道は長く険しいという事が良く分かったよ」

（そういう事じゃの。涼一は割りと物分りがいいから楽で良いわい。フオフオフオ）

鬼一爺さんはそう答えると陽気に笑い出す。

「まったく、爺さんも嫌味を言うようになるとはね。フウウ」

俺はそんな爺さんに苦笑いを浮かべながら時計を確認した。

時刻は5時50分である。

「まあ、今の自分にはまだ地脈を扱うのは早い気がするから、記憶の片隅に留めて置くよ。さて、それじゃ、そろそろ戻るかな」

俺は立ち上がると身体に付いた土埃を払う。そして周囲を見回した。

東の空を見ると、薄っすらとではあるが明るくなってきていた。

どうやら、もう暫くすると夜が明けるようだ。

それを確認した俺は、周辺に散らばった五行の霊符を回収した後、アパートへと帰るのだった。

11月24日 日曜日

此処はF県立総合体育館。時刻は午前10時半である。

俺は今、体育館の一角にある控え室の様なところで正座をしている。入口の向こうからは「メエエン」とか「ドオウ」とか言った景気の良い掛け声が聞こえてくる。体育館では試合の真っ最中のようだ。何処の誰が、どのような相手と試合をしているのかまでは、此処からでは分からない。

この控え室の広さは大体6畳くらいの部屋で、周囲には薄いマット等が積み上げられていた。どうやら用具室も兼ねている部屋のようだ。

周囲の壁は白い塗装がされており、汚れはあまりなく純白といった感じの内壁である。

しかし、入口扉のすぐ横にある電灯のスイッチがある壁周りだけは、手垢で黒っぽくなっていった。だいぶ不特定多数の人間が、手探りでスイッチを探した様である。

だが、今はこの部屋の電灯は点いてない。外壁に面した部屋である為、窓から外の光が入ってくるからだ。

また、外に耳を澄ますと、ポタポタと落ちる雨音が聞こえてくる。此処に来る前までは嫌な感じの曇り空ではあったが、どうやら、体育館の中で時を過ごす内に本降りになった様である。

そんな来た時との状況の違いを感慨深く感じながら、俺は今、この用具室で背筋を伸ばして沈黙しながら正座をしているのであった。かといって、別に此処で精神統一をしているという訳ではない。何故、此処で正座をしているのかというと、唯単に、姫会長からお叱りを受けている最中だからなのであった。

勿論、俺だけではない。今回の大会に出場した男子団体戦のメンバー5人全員である。

こんな展開になっている理由はというと、早い話が初戦敗退したからだ。

試合の展開としては2勝3敗という負け方で、一応、その内の一勝は俺だったりする。

そう言つと俺が頑張つた風に聞こえるかも知れないが、実情は相手も初心者に近かつたからである。抛つて、あまり勝つたからといって自慢にはならないのである。

という訳で、団体戦に早々と散つた俺達は、その後、此処に呼び出されて姫会長からこつ酷くお叱りを受ける事になったというのが、これまでのあらましである。勝つた人間も負けた人間も同様にである。連帯責任というやつだ。

そして只今、姫会長は不甲斐無い俺達男衆に渴を入れるべく、説教をしている真つ最中なのであつた。大きな声で言うから結構頭に響く……。

「いいかお前等あ、負けちまつたもんは仕方がねえ。明日からまた出直しだ。練習もこれまで以上に厳しくやっていくからそのつもりでいろよ。良いなツ！ 返事ハアツ」

「はい、仰る事は御尤もであります。また、明日から性根を入れ替えて切磋琢磨しながら精進致します」

と声を揃えて俺達男衆は姫会長に誓いを立てる。

大関昇進した相撲取りが行つ、伝達式での口上の様に……。

まあそんな訳で、午前中の内に予定が無くなつた俺達男衆は、個人戦にエントリーしている女子3人のサポートをする為、労力の提供と応援をこの後は行つ予定である。

そして、説教部屋を出た俺達は次の戦場に移動すべく体育館内を進軍するのだった。

その途中、西田さんが俺に声をかけてきた。

「日比野君、一勝おめでとう」と。
そう言われると俺も照れる。

だが、相手が弱かつたという事実があるので、それを盛り込んで答えた。

「嫌、あれは相手も初心者みたいなもんでしたから、唯のこつっあ

ん勝利ですよ」

「ハハハッ、まあそうはいっても勝ちも勝ちだよ」

西田さんは爽やかに笑いながら言う。

しかし、もう一つの一勝は西田さんだ。

そんな訳で、俺は素直に西田さんの勝利を褒め称えた。

「でも、西田さんも凄いじゃないですか。相手の大将に勝ったんですから。流石ですよ」

「まあ、こつみえても高校時代からやってるからね。ハハハ」

と、西田さんは上機嫌で言う。一瞬、キラッと金縁眼鏡の端が光った気がする。

どうやら、まんざらでもないようだ。団体戦で負けはしたが、気分は良い様である。

こんな会話をしながら俺達は進んで行くと、体育館の中二階にある観客席から俺を呼ぶ声が聞こえてくるのだった。

「日比野さあん。お疲れ様でしたあ」と。

俺はその声の発信源を見上げる。

すると、其処には剣道着姿でテンションの高い瑞希ちゃんがいた。絵的には、中二階の端に設けられた格子状の柵から顔をヒョッコリと出すような感じである。

また、いつもと変わらず、屈託のない笑顔が印象的だ。

だが、今日の瑞希ちゃんは何時ものサイドテールではなく、ポニーテールになっていた。

これは俺の想像だが、恐らく、面を被るときに邪魔になるからに違いない。俺はこの結論に絶対の自信を持っている。

という訳で話を戻す。

実は瑞希ちゃんもこの大会に出場していたのだ。知ったのは一週間前である。

この県民大会には学生の部で、中学生と高校生に別れており、それに瑞希ちゃんの通う高天智聖承女子学院もエントリーしていたという訳だ。

因みに俺達は一般の部で出場していた。勿論、大学生の部というのが無いからである。俺らは学生扱いはしてもらえないのが悲しいところだ。

そんな元気溢れる瑞希ちゃんに、俺は笑顔を向けて返事をした。

「オツ瑞希ちゃん。試合は順調かい」

「エへへ、試合はこの後にあるんです。ちゃんと、応援してくださいね」

と瑞希ちゃんはニコニコとした表情で答える。

「頑張つてね、瑞希ちゃん。応援するよ。俺の分まで頑張つてね」

「ハイ。話は変わりますが、日比野さんの戦いぶりは、初心者に見えないくらい堂々としてましたよ」

「ハハハ、まあビギナーズラックみたいなものだよ」

「またまた、謙遜しちゃって」

といった会話をしていると、瑞希ちゃんの後ろから此方に近づく人物がいた。

そして、その人物は瑞希ちゃんの隣にやってきたのだった。

私服姿の可愛い女の子で、歳は瑞希ちゃんと同じくらいだ。

上は白いパーカータイプのジャケットで、下が青いデニムスカートといった格好をしていた。

また、特徴は何と言っても長く左右に垂らしたツインテールである。

というか俺はそのツインテールに見覚えがあった。嫌、訂正。その子に見覚えがあった。

何時ぞやのF県立図書館で見たあの子である。あの時と同じツインテールが特徴の子である。

そして、俺が霊力の扱いに長けた危険人物として記憶しているあの子なのであった。

それを思い出すなり、俺の中の何か警報を鳴らす。鬼一爺さんの霊圧が下がっているかどうかの確認をしたいところではあったが、今、確認すれば確実に不審に思われる為、俺は平静を装う方に意識

を集中するのだった。

「ん、日比野さん？ どうしたんですか」

瑞希ちゃんは首を傾げながらそう聞いてきた。

多分、この子を見た俺の顔が、中途半端な表情になった為だろう。危ない危ない。

と、そこで隣にきたツインテールの子に瑞希ちゃんは気付く。

そして、話しかけた。

「あれ、道間さん。どうしたの？」

と瑞希ちゃんが話しかけると同時に、その子は俺に挨拶をしてきた。

「あのこの間は、どうも」っと。

俺も返事を返さないのもどうかと思い、ニコヤカに挨拶した。

「ああ、こんにちは。えっと、そう言えば図書館の時の子だね？」
と、やや白々しくではあるが。

「図書館では変な声を出してすみませんでした」

あの時と同じ様に、この子は丁寧にまた頭を下げる。

「そこまでしなくていいよ。別になんとも思っていないからさ。ハハハ」

そう答えたところで、瑞希ちゃんがやや驚きつつも俺に聞いてきた。

「日比野さん。道間さんと知り合いなんですか？」

「ウーん……知り合いというか。知らないというか。詳しい事はその子に聞けば分かるよ。っと、それじゃ向こうに行かなきゃならぬいから、またね。瑞希ちゃん」

向こうにある目的地を見ると、他のメンバーはもう先に行ってしまった。

遅れると姫会長から激が飛ぶような気がした為、俺は慌ててそう返事すると、逃げる様にこの場を去るのだった。

二人は涼一が走って行く方向を見送る。

やや焦った感じの走り方ではあったが、皆のところ遅れる事無く涼一は辿り着いた様である。

そんな涼一の姿を見届けた瑞希は沙耶香に振り向く。

そして、今の涼一の態度が気になったので沙耶香に問い掛けるのだった。

「道間さん。日比野さんと何かあったんですか？」

沙耶香は瑞希に振り向くと、恥ずかしそうな仕草をしながら話し始める。

「実はこの間、F県立図書館に行った時の事なんです。その時に、あの方の前でビックリして大きな声を出してしまっただんです。それで御気を悪くされたかな、と思ってもう一度謝っただんですよ。今、思い出しても恥ずかしい話です」

「なんだ、そんな事があっただんですか。私、てっきり気まずい出来事でもあったのかと思っちゃった。テヘヘ」

瑞希は涼一が普段と違う様子に見えたので心配したが、今の話を聞き大した内容ではなかったのでホッとす。

「高島さん。あの方のお名前は日比野と仰るんですか？」

「うん、そうだよ。私も最近仲良くなっただけで、結構、面白い人なんだ。あ、勿論それだけじゃなくて、とても良い人だよ」

瑞希は涼一のいる方向を見ながら、今までの事を思い返して言う。「そうですか……」

沙耶香は言葉少なにそう答えると、瑞希と同じく涼一のいる方向を見る。そして考えるのだった。

何故ならば、先日会った時に一緒に見かけた鬼一法眼の姿が見えない為である。

しかし、幾ら意識を集中させても姿が確認できない。その為、体育館周囲も見回すのだった。

だが、沙耶香は首を傾げる。見当たらないからである。

図書館で見たときは確かに涼一に憑いているように見えたので、

沙耶香はおかしいなと思いつつ、また涼一の方へと視線を戻す。

しかし、涼一の周囲には鬼一法眼の姿が見えない為、沙耶香は悩むのであった。

沙耶香がそうやって難しい表情をしていると、瑞希が話しかけてきた。

「道間さん。此処に来たって事は剣道に興味があるの？」

「いいえ。今日、私が来たのは兄の付き添いなんです。兄が剣道をしているものですから」

と沙耶香は言うと、下のフロアに居る一樹の方へ視線を向けた。

その視線を瑞希も追う。

「アツそういえば、高等部の道間先生って、道間さんのお兄さんだもんね。私、すっかり忘れてた」

そこで瑞希はペロツと舌を出す。

そして続ける。

「でも、お兄さんが剣道部の副顧問なんだから、道間さんも剣道してみたらどう？ 結構おもしろいよ」

「……そうですね。考えてみます」

沙耶香は穏やかな笑顔を作り瑞希に言う。

二人はその後ろも暫く会話をすると、観客席を降りて下のフロアへと移動するのだった。

式拾参ノ巻

《 式拾参ノ巻 》 依頼

F 県民剣道大会から一週間後の話である。

今日は日曜日で剣道の練習は無い。どうやら、武道場が今日は使えないようだ。その為、俺は久しぶりに何も考えず、自室でゴロゴロと心地よく寝ていた。

こうやって心地よく寝ているのには理由がある。それは、我が家に電気コタツを設置したからである。勿論、コタツの台の上には、ミカンが置いてある。最近、実家から送られてきたからだ。どうやら爺ちゃんが俺に気を使って送ってくれたようだ。ありがとう、爺ちゃん。

そんな訳で俺の部屋には冬の室内オブジェの一つであるコタツがど真ん中に鎮座してるのであった。

コタツ……。これは日本が世界に誇る最強の暖房器具だと俺は自負している。

これを聞いた者の中には、『ハア、コタツが最強？ フン、笑わせやがるゼツ』などと突っ込みを入れる奴もいるだろう。

だが、そう答える奴はコタツの持つ本当の魔力を味わってないからだ。恐らく、それを体験した日には病みつきになること間違い無しだ。

オホンッ。それではこのコタツの持つ一番素晴らしいところを語ろう。

それは、寝具と共同させる事にある！ つまり、コタツ布団と掛け布団、そして敷布団を共存させるのだ。但し、コタツは弱の温かさで調節しておくのがモアベターである。

これで一晩寝た人間は、恐らく殆どの者が朝を迎えた時にこうい

うだろうと思う。

「コタツから出たくねェ」と。

気温が下がる日などは特にそうである。事実、俺は今コタツから出たくない。無理に出された場合は、水槽から揚げられた活きの良い魚の如く暴れること確定である。

因みに術の修練も今日はお休みだ。身体に負担が掛かりすぎるのも良くない、という鬼一爺さんの判断である。

そんな訳で、俺は見事に何の予定もない久しぶりの休日である為、コタツ寢床でゴロゴロとしているのだった。

とはいっても、時間は気になるのでテレビの上に置かれたデジタル時計に視線を向ける。

今の時刻は9時半だ。それを確認した俺は、もう一寝入りするかあゝと二度寝を試みる。

だが、その時！ 俺を封印から呼び覚ます者が現れたのであった。

(目覚めるのじゃ、涼一)

俺は声の聞こえた方向にゆっくりと視線を向ける。

すると、コタツの真上にユラリと浮かぶ、鬼一爺さんの姿が目に見え飛び込んできた。

しかも、何やら険しい表情をしながら佇んでいる。

爺さんを視界に収めた俺は、ダルそうに口を開いた。

「何だ、爺さん？ そんな深刻そうな顔して。フワアア」と同時に欠伸も……。

(涼一に会わせたい人物、嫌、霊がおるのじゃ)

「……もしかして、瑞希ちゃんの爺さん時と同じパターンじゃないだろうな？」

俺は鬼一爺さんの表情を見て、『孫の部屋に憑いて悪さしている霊を追い払ってくれ』と、訴えてきた瑞希ちゃんの祖父の霊を思い出した。

当時の鬼一爺さんは、丁度、今の様な険しい表情で、俺のところにその霊を連れて来たからだ。

そんな苦い体験を思い返していると、鬼一爺さんは口を開いた。

(実はの、涼一。その通りなのじゃ)

「フウウ、やつぱりか……。今度は一体、何なんだよ？」

俺は上半身を起こして溜息を吐いた後、ダルそうに問い掛ける。

鬼一爺さんは、俺がそう聞き返すと窓際に視線を向けた。

すると、其処にはオバサンの幽霊が申し訳なさそうに佇んでいるのだった。

年齢は40歳位で、髪型はショートヘアである。体型はややぼつちやりした感じだ。

また、服装は赤い服と青いジーンズといった、生前に着ていたであろう格好をしている。

それらを総合した見た目は、普通のオバサンといった言い方がピッタリの女性の幽霊だ。

そのオバサンはやや申し訳なさそうに部屋の窓をすり抜け、鬼一爺さんの横にまでくる。

爺さんはオバサンが隣に来たところで話を始めた。

(実はじゃな、涼一。このお方の悩みを聞いて欲しいのだ。もう幾許も時が無い為、お主しか頼ることは出来ぬのだ。頼む)

鬼一爺さんは悲しい表情で俺にそう告げる。

俺はそれを聞き、爺さんの隣にいるオバサンに視線を向けた。

そして、前回経験した瑞希ちゃんの祖父の事を思い出すのだった。今、爺さんが時間がないと言ったのには訳がある。

現世に強い心残りがある人間が死んで霊体になった場合、暫くの間は自我を保っている事が出来るのだが、徐々に自我も失われていき、最終的には球状の靈魂へと変貌を遂げて大地に還る。という過程を辿るからである。

その為、それを思い出すと同時に、今の爺さんが言った『時が無い』という意味も、凡その察しはついたのであった。

俺はオバサンの幽霊に顔を向け、とりあえず話を聞くことにした。「と、爺さんは言ってますが。一体、どんなご用件なんですか？」

オバサンの幽霊は頭を一度下げたから、ゆっくりと丁寧に話し出す。

（はい、実は私の家族の事で酷く悩んでいるのです。ですが、私にはあと少ししか時間が残されてないんです。それで、そうなる前に何とかしたく悩んでいた所に、このお爺さんが現れたのです。それで説明をしたところ、此処にそういつた事に慣れた人間がいると聞きましてお伺いさせてもらった次第であります）

俺は爺さんを見る。爺さんは首を縦に振り頷く。

まあ、そんなところだろうとは薄々思っていた。

「家族の悩みですか……『ピンポーン』……ン？」

俺がそう答えたところで、突如、アパートの呼び鈴がなった。

「えっと、誰か来た様なので、少し待っててもらえますか？」とオバサンに確認を取る。

（はい、どうぞお気になさらずに）

俺はオバサンの返事を聞くと、『新聞の勧誘だろうか？』などと考えながら立ち上がり玄関の方へと移動した。

そして、玄関扉の前に着くと、先ず、ドアスコップから訪問者の確認をする。

すると其処には、黒いショートタイプのコートに下は青いデニムパンツといった出で立ちの瑞希ちゃんが、小さな手提げ鞆を持って佇んでいたのだ。

俺は瑞希ちゃんを見るなり、今の状況と照らし合わせて考える。

そして、爺さんに尋ねるのだった。

「オイ、爺さん」

（何じゃ？）

「どうやら、外に居るのは瑞希ちゃんの様だけど……。不味いよな？」

しかし、俺の予想とは裏腹に、鬼一爺さんは軽く言う。

（あの娘子か。なら別に問題ないじゃろ。一緒に話を聞いたらどうじゃ？）と。

「そ、そう。まあ爺さんがそう言うのなら別にいいや。とりあえず玄関を開けるよ」

俺は何処か釈然としないながらも、玄関扉を開く。

扉を開くと、瑞希ちゃんが笑顔と共に元気な声で俺に挨拶をしてきた。

「おはようございます、日比野さん。昨日、メールで『今日は部屋でゴロゴロする予定』って書いてあったので、遊びに来ちゃいました。テヘヘ」

「ハハハッ、そうだったんだ。でも、来る前に一報入れてくれた方が良かったかな。なあんてね、ハハハ」

俺はやや引き攣った笑みを浮かべながら答える。

「えッ？ もしかして不味かったですか？」と口元に右手を当てて瑞希ちゃんと言う。

「嫌、そういう訳じゃないんだけどね。まあこんな所で立ち話もなんだし、上がってよ」

「は〜い。それじゃ、お邪魔します」

瑞希ちゃんはテンション高く玄関を潜ると靴を脱ぎ、部屋の中へと入ってきた。

そして、部屋の様相を見るなりこう呟く。

「アアッ、日比野さん。コタツじゃないですか。やっぱり冬はこれですよねえ。しかもミカンまである」

と言うと上に着ていたコートを脱いで、早速、我が家の様に寛ぎ始める。

そんな瑞希ちゃんを苦笑いで見つっ、俺も寝具と融合させた先程の位置に戻るのだった。

俺達が席に着いたところで、鬼一爺さんが霊圧を上げて瑞希ちゃんに話し掛けた。

（久しぶりじゃな、娘子よ。とはゆうても、話せぬだけで七日程前に一度見てはおるがの。フォフォフォ）

「エヘヘッ。お爺さんともこの間の大会でお話したかったけど、し

ようがないもんね。今日はそれもあつて来たんですよ」

瑞希ちゃんはニコニコと明るい笑顔で爺さんに言う。

爺さんも孫の様な感じで瑞希ちゃんを見ているのか、先程の険しい表情からはガラツと変わり、陽気な表情になっているのだった。

そんな二人を見た後、俺はオバサンに視線を向ける。

そして謝った。

「ああ、すみません。少し騒がしくしてしまい」

(いいえ、気にしないで下さい。元気なお嬢さんですわね)

オバサンは、俺達の賑やかな雰囲気や穏やかな表情で眺めながらそう答える。

「ハハハツ、そうですね」

俺がそう答えたところで、瑞希ちゃんが怪訝な表情で話しかけてきた。

「ひ、日比野さん。だ、誰と話して……。いや、というか。何、独り言を喋ってるんですか?」と。

俺はオバサンと瑞希ちゃんを交互に見る。

そして、説明するのだった。

「ああ、実は今此処に、幽霊のお客さんが来ているんだよ」

「えっ? でも、何も見えませんよ。お爺さんは見えるの?」

(ウム。我は勿論見えるぞい)

鬼一爺さんの返事を聞いた瑞希ちゃんは、やや寂しい表情で俺に尋ねる。

「日比野さん、私には見る事は出来ないのですか?」

俺はそれを聞くなり腕を組んで考える。

だが、考えたところで分からん為、爺さんに尋ねるのだった。

「鬼一爺さん。瑞希ちゃんに霊の姿を見せる方法ってあるのか?」

(霊を見せる方法か。あるぞい)

その途端、瑞希ちゃんが身を乗り出して爺さんに尋ねる。

「お爺さん、どうやれば見える様になるんですか? 私だけ見えな
いというのは嫌です」

瑞希ちゃんは俺との付き合いがあるからか、あまり幽霊とかは怖くないようだ。恐るべき女子中学生である。俺が逆の立場ならスル―してたところだ。

そんな瑞希ちゃんの問い掛けに鬼一爺さんはニコヤカに話し出した。

（そうじゃな。では、涼一にやつてもらうかの。涼一、お主にこの間、依り代の話をしたじゃろう）

「ああ、それがどうかしたのか？」

（今から娘子の霊力の波長に合わせて、お主が娘子の霊圧を操るのじゃ。それで見える様になる。以前、我がお主の霊力を刺激した時と同じ要領でできる筈じゃ。依り代を操る練習じゃと思うてやつてみい）

と爺さんの話を聞いた俺は瑞希ちゃんに視線を向けた。

瑞希ちゃんは『何が始まるんだろう？』といった好奇心一杯の表情で俺を見ている。

その目を輝かせた表情に若干引きながら俺は言う。

「み、瑞希ちゃん。それじゃあ、俺の傍に来てくれるかい」

「はい」と返事をする、瑞希ちゃんは俺の右隣に来てチョコンと座った。

俺は瑞希ちゃんに身体を寄せると、瑞希ちゃんの腰のやや上辺りに右掌を当てる。

するとビククリしたのか、身体をビクツと震わせた。

「アツゴメンね。驚かせて」と、俺はとりあえず謝る。

「い、いいえ。大丈夫です」

瑞希ちゃんはそう返事すると、頬を赤く染めて俺の顔を見上げる。その表情は若干、恥ずかしさと不安が入り混じったものの様には見ええた。

そこで、安心させる意味も込めて俺は言う。

「別に変な事はしないよ。ただ、こうしないと瑞希ちゃんの霊力を操れないからね。嫌かもしれないけど、ごめんね」

「そんな謝らないで下さい。私、何とも思ってます。それに……日比野さんになら別に……」

と、ややモジモジしながら瑞希ちゃんと言う。

俺はその反応を見て安心するとこれからの説明をするのだった。

「それじゃあ、瑞希ちゃん。大きく深呼吸をしてくれるかい？」

「エット、こつですか？」

指示に従い、瑞希ちゃんは深呼吸を始める。

その様子を見た俺はこれから起きるであろう事の注意点を説明する。

「じゃあ、これから少し身体が熱くなるけど心配しないでね。問題ないから」

「は、はい」

「それじゃあ、始めるよ」

俺は右掌に意識を集中させ、瑞希ちゃんの霊力の波長を直に感じる。

そして、俺の霊力の波長もそれに合わせ始めるのだった。

すると、波長がピタリと合ったところで、俺の霊力と瑞希ちゃんの霊力が繋がった様な不思議な感覚を覚えるのだった。まるで歯車がかまった様な感じだ。

それからはもう簡単である。いつも通りに霊圧を上げてゆくだけで良かったからだ。

瑞希ちゃんも自分の身体に異変を感じたのか俺に話し掛けてきた。

「日比野さん。何だか、お腹が熱くなってきました。本当ですね。

何かか渦巻いてるような感じです」

「そうかい。それで幽霊なんだけど。どうだい、見える？」

「それじゃあ確認します。……えっと、お、女の人の幽霊ですか？」

日比野さん

「そうだよ。見えた様だね。じゃあ成功だ」

俺がそう答えると、瑞希ちゃんは正面にいるオバサンに向かい挨拶をした。

「あ、あの。初めまして」

オバサンは瑞希ちゃんを見て笑顔で返事をする。

（どうも初めまして。可愛らしいお嬢さん）と。

瑞希ちゃんはオバサンの返事を聞き、照れたのか頭をポリポリと人差し指で掻きだした。

そこで俺はオバサンに言う。

「あの、新しく聞き手が増える事になったんですけど。いいですか？」

（はい、構いませんわ。では、もうお話をさせて貰っても良いのでしょうか？）

「はい。それじゃあ、お願いします」

まあそんな訳で少々バタバタとしたが、俺達は瑞希ちゃんという新しいメンバーを迎えて、このオバサンの話を聞く事になったのである。

オバサンは仕切り直しとばかりにオホンと咳払いをする。

そして、行儀の良い佇まいで話し始めた。

（先程もいいましたが、私の悩みと言うのは家族の事なのです。私は生前に夫と13歳の娘、そして12歳の息子の家族4人で幸せに暮らしておりました。家の中に笑い声が聞こえない日は無いと言うくらいに仲の良い家族だったのです。まあそうはいつでも、偶には喧嘩等もする事がありました……）

と言い終えるとオバサンは遠い眼をする。

嘗ての出来事を思い出してるのだろう。

少し間をおいてから続ける。

（しかし、それも突然訪れた私の死によって終わりを迎えるのです。今から半年程前に、私は突如襲い掛かってきた交通事故でこの世を去りました。そして、今までの幸せな家庭もそれと同時に脆くも崩れ去ってしまったのです。家族は私の突然の死を深く悲しみ、そして嘆きました。ですが、生きている者はいつまでも悲しんでばかり

いてはいけません。悲しくても前を向いて歩いて行かねばならないんです。ですが、私の死が引き金となり、夫や子供達は悪い方向へと歩み始めます。夫は悲しみのあまり毎夜酒に溺れ、息子や娘はそれ以来あまり笑う事はなくなりました。ですが、これだけならまだ良かったのです。時間は掛かるかも知れないけれど、何れ立ち直って歩き出すだろう……そう、私は思っております」

オバサンはそこで、一旦、話を切ると俯く。

恐らく、心の奥底から込み上げてくるものがあつたのだろう。

俺はオバサンの口から出てくる暗い話を、居た堪れない表情で聞いていた。

隣にいる瑞希ちゃんも悲しい表情で沈黙しながら聞き入っている。その表情は何ともいえない切ない感じに見える。

また、鬼一爺さんは目を閉じて腕を組む姿で宙に浮かんでいる。

今の話を色々と考えてるようだ。黄門様モードにならないか心配なところではある。

そして俺はオバサンに視線を戻す。

すると、だいぶ落ち着いてきたのか、俯いていた顔を上げると話を続けるのだった。

（スミマセン……話を続けます。それで悩みの原因ですが、実は、今お話した悲しみにくれる夫についてなのです）

「旦那さんですか？」と俺は聞き返す。

（はい。お恥ずかしい話なんです。私の死後、夫は寂しいあまりに霊能者と名乗る如何わしい者と関わる様になってしまったのです。しかも、その霊能者が夫に妙な物を売りつけたり、イタコの真似事をして私の言葉だと言って嘘を伝えたり、それはもう目を覆いたくなる様な惨劇が繰り広げられています。ウツウウウ）

オバサンはそう言うと、両手で顔を覆って泣き出した。

俺は今の話の内容を聞いて色々想像する。……確かに惨劇だ。

しかも、聞いた限りじゃ、かなり胡散臭そうで性質の悪いインチキ霊能者の様である。これは浮かばれんわ。俺はオバサンに同情し

てしまう。

だが、これは俺よりも警察や消費者センター等に連絡したほうが良さそうな案件に思えたので、そう告げる事にした。

「心中、お察し致します。ですが、霊障ではない様なので、僕に出来る事と言ってもあまり無いような気がするのです……。それに、詐欺の様なので警察や消費者センターに連絡したほうが良いと思います。何でしたら、連絡しましょうか？」

俺がそう意見をするとオバサンは言う。

（確かに仰る通りです。ですが、時間が無いのです。主人は子供達の将来や家の為に積み立てた定期預金を切り崩して、霊能者から奇妙な仏像を購入しようとしております。それを貴方様に止めて頂きたいのです。頼れる人間も貴方様しかおりません。そのインチキ霊能者は今日の昼に売買契約書を持参し家にやってくる筈です。何卒、何卒、宜しくお願い致します）

オバサンは切羽詰った表情をすると、土下座をして俺に向かいそう懇願する。

俺はそんなオバサンを見ながら不憫に思いつつも言った。

「エエ、俺が止めるんですか？」と。

すると、ここで瑞希ちゃんが話に入ってきた。

「日比野さん、私からもお願いします。このままじゃ、オバサンと家族の人達が可愛そうです。それに、その霊能者を日比野さんが懲らしめればいいんですよ。私も手伝いますッ！」

瑞希ちゃんは、その霊能者にご立腹の様である。やや語気が強い。おまけに拳を握り締めているのが確認出来る。

（そうじゃ、涼一。この娘子の言う通りじゃぞ、この薄情者めがッ。人々を救うだけではなく、霊も救わねばならんのじゃ。その為に君主に術を授けたのじゃぞ。師匠として、我は悲しいぞい）

と、そこで間髪いれずに今度はジジイが俺を非難し始めた。絶好のタイミングだ。ある意味……。

しかし、聞き捨てならない部分があった。術を教えてくれた動機

が、当初と比べると大幅に変更がされているからだ。

おのれジジイ……。都合よく変更しやがって。大体ジジイが俺に術を教えるのは、この特異体質のせいで訪れる霊障を防ぐ為だろうガアアア。と、俺は心の中で叫んだ。

とは言つものの、ジジイと瑞希ちゃんはさつきからずっと俺に強い眼差しを向けている。

そんな風に二人から迫られると、俺はたじろいでしまう。

そして、半ば諦めるかのように返事をするのだった。

「フウ、分かったよ。俺の負けだ」

（あ、ありがとうございます。ウツウウ）とオバサンは泣きながら返事をする。

「それでこそ日比野さんです。やっぱり、私の見込んだ人です」

瑞希ちゃんはそう言つと、ニコヤカに俺の右腕に抱きついてきた。すると、どうだろう。瑞希ちゃんの胸の柔らかい感触が腕を通じて伝わってくる。

イカンッ、イカンぞおお。相手は中学生だ。欲情すれば御用になつてしまう。落ち着けッ、俺ッ。

などと考えながら俺は苦笑いを浮かべるのであった。

しかし、引き受けたはいいが住所が分からないので、とりあえず尋ねる。

「ところで、オバサンの家はどの辺りなのですか？」

（私の住まいはこの学園地区の北にある月影地区になります。ですが、家までは私が案内しますのでご安心ください。どうか、家族を宜しくお願い致します）

「任せて下さい。日比野さんはこう見えて、とっても頼りになるんです」

瑞希ちゃんはやたらと俺を持ち上げる。

だが、あまり過剰な期待をされても困る為、俺は愛想笑いを浮かべてやんわりと言つた。

「ハハッ、でも今回の様なケースは俺も初めての経験だからなあ。

あまり自信は無いなあ、ハハハハ」

（心配せんでもお主なら出来るぞい。何と言っても、我の一番出来の良い弟子じゃからの。フオフオフオ）

しかし、その直後にジジイがご丁寧にもそれを台無しにしてくれた。フンガアアア！

そんな訳で、俺は溜息を吐きながらテレビの上にある時計を確認する。今の時刻は10時ジャストだ。

時刻を確認した俺は、月影までの移動時間を考える。大体だが、徒歩で30分以上、バスで5分程の距離である。

迷わずバスで移動する事に決めた俺は、外出する為に服を着替えることにした。

余談だが、着替えは瑞希ちゃんに見られると恥ずかしいので、バスルームで行った。

因みに格好は青いジーンズに黒っぽいミリタリージャケットという感じだ。

着替えを終えた俺は霊符入れと財布、携帯等の小物類を上着のポケットに入れると皆に言った。

「さて、それじゃあ準備は出来たから行くこうか」

（では、月影地区に着いたら私が家まで案内します。どうか宜しく願います）

オバサンはそう言うと、もう一度俺に向かい頭を下げる。

「日比野さん。私も出来る事があるかも知れないので一緒に行きま
すね」

瑞希ちゃんは何か強い決意を秘めた表情で俺に言う。

俺は瑞希ちゃんに若干引き攣った笑みを浮かべながら言った。

「瑞希ちゃん。あまり無理はしないでね」と。

そんなやりとりを玄関の前でした後、俺達は学園町の駅前にあるバス停へと向かい歩を進めるのだった。

今日はいい天気だ。

気温はやや肌寒いものの、真上から照らす日光は心地よい暖かさを俺達に提供していた。

そんなポカポカとした陽気の中、俺達は今、月影のバス停に丁度降りたところである。

月影地区は住宅の多い地域で、やや古い町並みの様相をしていた。新しい家もあるにはあるが、築50年以上は経つと見られる家々が狭い間隔で軒を連ねている。中には100年以上前の家屋もある様だ。また、道路も狭い所が多く、入り組んだ箇所も所々にあるのだった。

それらの古い町並みも特徴ではあるが、月影地区最大の特徴は寺社の多さだろう。少し歩けば、そういった歴史ある寺や神社等の建造物が直ぐに目に飛び込んでくるからだ。そして、俺達が歩く道から見える景色は、高天智市の歩んできた歴史絵巻の一端を見せてくれるかの様に、入れ替わり立ち代りにそういった古い建造物が視界を横切って行くのだった。

俺達はそんな歴史溢れる街並みに囲まれながら、オバサンの案内を頼りに進んで行く。

バス亭から歩き始めて10分程経った頃だろうか。オバサンは灰色の外壁をした一軒の家の前で立ち止まった。見た感じはごく普通の民家である。築20年くらいだろうか。その家屋の佇まいは比較的新しく俺には感じたのだった。

だが、この家からは異様な暗さが感じられる。丁度、悪霊の放つ負の霊波に似た感覚だ。

しかし、その感覚は俺の第六感から感じるものではなく、目の前の光景から感じられるものだった。

家の周囲には木製の柵が設けられており、その内側には当然庭がある。

問題は、その庭の荒れようだ。地面からは背比べをするかの様に色んな種類の雑草が生い茂っている。所々にバケツやゴミなどがあ

る為、訪れた者はこれらの惨状を見るなり二の足を踏むだろう。そう思わせるほど、酷く荒んだ光景だったからだ。

事実、俺自身はそう思ってしまった。だが、隣にいる瑞希ちゃんはまだあまり気にしてないようだ。ウーン、大物だ。

そんな事を考えていると、オバサンは申し訳なさそうに俺に言った。

(……此処が私の生前住んでおりました家でございます。恐らく、今の時間帯なら主人が中にいると思われれます。どうか宜しくお願ひします)と。

「そうですか。とりあえず、ご主人の説得からいってみましょう。俺も訳の分からないインチキ霊能者をイキナリ退治するというのも嫌なので」

俺はそう返事すると瑞希ちゃんに向かい言う。

「瑞希ちゃん。今は此処で待っていてくれるかい？」

「はい、今は私に出来る事はなさそうです。日比野さん頑張ってくださいね」

と言いながら俺の手を取り励ましてくる。

そんな瑞希ちゃんに笑顔を返すと、俺は家の玄関に向かい歩を進める。

そして、玄関前に辿り着いた俺は、どうやって切り出すかを考えるのだった。

だが、回りくどく言った所で伝わらないと考えた俺は、多少嘘を混ぜながらもストレートに伝えようと決心をする。

そう決意すると、玄関横の壁に取り付けられた呼び鈴のボタンを押したのである。

「ピンポン」

ボタンを押すと、家の中から呼び鈴の音が小さく聞こえてくる。音がして20秒程すると、家の中から人の近づく足音が聞こえてきた。

そして、玄関扉が開かれる。すると中からは覇気の無い表情で、

どこか虚ろな目をしたオジサンが現れたのだった。

歳はオバサンと同じくらいだろうか。背は俺より少し低い。また、寝起きなのは分からないが青いパジャマ姿であった。目の下には隈が出来ており、頬は痩せこけていた。一見すると病人にも見える風貌である。

事前にオバサンの説明を聞いていた所為か、その姿からは幾多の絶望に苛まされたという雰囲気なが、ありありと俺には感じられるのだった。

そのオジサンは俺の顔を見て口を開く。

「どちら様ですか？」と、やや覇気の無い声で。

「こんにちは。私は悪徳商法撲滅協会からやって参りました御手洗みたらいと申します」

俺は嘘も方便と思い、身元を偽証する事にした。勿論、悪徳商法撲滅協会などという組織はない。意外とあつたりするかも知れないが、当方は一切感知しない。

「悪徳……商法撲滅協会？ そのような方が、一体どのような用件で家に？」

オジサンはまったく心当たりが無いといった感じで俺に言う。

そんなオジサンを見て俺は内心「フウウ」と溜息を吐きながらも忠告をするのだった。

「はい、それで用件の方でございませう。今、此方に出入りしている霊能者についてでございます」

「霊能者？ ああ、岡田さんの事ですか。岡田さんがどうかしましたか？」

「実はですね、彼は当協会が随分前からマークしていた対象業者なのでございます。それで、貴殿に御忠告をする為に、今日、お伺いさせて頂いた次第なのであります」

今の俺には嘘を吐くのが得意な神霊が舞い降りているかのごとく、次々と捏造話が飛び出していた。我ながら恐ろしいくらいである。

しかし、オジサンは手強かった。

「ははは、ご冗談を。あの方は本物の霊能者です。私は彼の言う事なら信用に値すると思っっています」

オジサンは完全にインチキ霊能者の手玉にとられてる様だ。そう話す表情からは疑うといった気持ちがあつたく見受けられない。まるで、ダークサイドに堕ちたアキン・スカウオーカーのような表情だ。インチキ霊能者はパルティーン皇帝といったところなのだろう……。恐るべし、暗黒面の力！

俺はそんなオジサンに若干引きながらも続ける。

「ですが、彼は危険な人物です。悪い事は申しません。今後は関係を一切絶つた方がよろしいと思われます」

「あ、あの方は、私に生きる希望を下さつた。あの方に乗り移つた妻は間違いなく本当に妻の声だ。どうして赤の他人が妻しか知らない事実を知ることが出来ましよう？ 彼は間違いなく本物の霊能者だ！ 彼に乗り移つた妻の霊は私に生きる希望を与えてくれたのです」

オジサンは狂つたようにインチキ霊能者の弁護をする。

その様は俺からすると見ていて痛々しくも思える。

そして、敵を見るかのような鋭い視線を俺に投げかけて言うのだ。つた。

「今日、妻の霊を宿しておく為の依り代となる仏像についての打ち合わせがあるのです。誰にも邪魔はさせません！ さあもう帰つてくれッ。あんたの様な若造に何が分かるって言うんだアア、出ていけエエエ！」

半分奇声に近い声色で狂つた様にまくし立てたオジサンは、それを言うなりボタンと扉を勢い良く閉じる。そして、カチャリと鍵をかける音が聞こえてくるのだった。

今の目が血走つたオジサンの凄惨な表情を思い返し、俺はこう考えていた。

洗脳の完成した狂信者って怖いワッ。と……。

それと同時に、作戦が失敗したと悟つた俺は、トボトボとみんな

の待つ道路の方へと進んで行くのだった。

式拾四ノ巻

《 式拾四ノ巻 》 依頼 二

交渉を失敗した俺は、これからの事をオバサン家の近くにある空き地で考えていた。勿論、瑞希ちゃんや鬼一爺さん達も一緒である。因みに、この空き地は何処かの建設業者の資材置き場の様で、端にはコンクリートのドカン等が置かれている。パツと見は、ジャイアン・リサイクルが行われていそうな空き地だ。

俺は時計を確認する。今の時刻は11時半だ。近隣の家からは昼が近いという事もあるせいか、美味しそうな匂いが漂い始めていた。恐らく、昼食の調理をしているのだろう。

そんな周囲の変化に腹も反応しつつ、俺はオバサンに小声で話し掛けた。

「一つ聞きたいのですけど、そのインチキ霊能者が来るのは何時頃だと思えますか？ 大体で構わないです」

（恐らくですが、昼の1時から1時半の間だと思います。その霊能者は昼一で来ると言っておりましたから）

「昼一か……」

俺がそう呟いたところで瑞希ちゃんは言う。

「日比野さん。その霊能者をこの間ふたみたいにお札で退散させたらどうですか？」

「まあ、それも候補には入れてあったんだが、あまり使いたくないなあ。あのオジサンを見たら……」

俺は先程の狂ったようなオジサンの表情を思い出す。

恐らく、俺が霊能者を退散させても、あのオジサンは第二第三の霊能者に頼ることになるだろう。俺はそう考えていた。

何故ならば、今の現状を見つめる事が出来ていないからだ。それ

に洗脳と言っても差し支えないくらい霊能者に依存している。それでは根本的な解決にならないような気がしたので、俺は瑞希ちゃんの言う方法は取れずにいるのだった。

だが、俺一人だけがこんな事を考えていても先に進まない為、皆に俺の考えを言って意見を聞くことにした。

「というのが俺の考えだが、皆はどう思う？ 皆の意見も聞きたい」

俺の考えを聞いた瑞希ちゃんは、俺の右手を取ると感心したように頷き、そして言った。

「日比野さん……。そこまで考えていたんですね。軽率な事言っただけです」

「あ、謝らなくていいよ。唯単にそう思っただけだからさ。ハ、ハ、ハハ」

俺はやや苦笑いを浮かべながら言う。

だが、そこで俺はある異変に気がついた。隣に居る鬼一爺さんの様子が変だからである。

鬼一爺さんは、目を閉じながらプルプルと震えていた。まるで水戸黄門を見終えた時の様な感じだ。それと同時に非常に嫌な予感がした。

何かとんでもない事を言い出すかもしれない。そう考えながら俺は身構える。

（涼さんや、我は嬉しいぞ。漸やっくお主にも、世直しの気概ができてきたようじゃな）

しかし、意外と普通の反応だった。

思ったより普通だったので少し拍子抜けだ。

そんな事を考えながらも俺は皆に言う。

「まあ、そういう可能性が高いつて事だよ。で、そうなってくると霊能者の排除とオジサンの洗脳解除という、二つの問題に対処しなければならぬ。前者は俺が何とかするとしても、後者は俺には難しい。そこを皆に考えて貰いたいんだよ」

俺が話し終えると直ぐに瑞希ちゃんが意見する。

「それじゃ、オバサンの子供達に説得してもらうのはどうですか？」

「オバサンの子供か。オバサン、息子さん達は何処かに出かけているのですか？」

オバサンは暫く考える。

だが、良く分からないのか、やや俯きながら答える。

（スミマセン。霊能者の事ばかり考えていたものですから、すっかり失念しておりました。しかし、娘は部活動の準備をして朝方出掛けたので学校にいると思います。息子は恐らく家の中かと）

オバサンの話を聞き終えると空を見上げて俺は考える。

子供達を使って説得したところなのでオジサンは正気に戻らんやろうな。

だって、霊能者に依存しまくってるからなあ。

オバサン自身が脱線したオジサンを説得して正気に戻るのが一番確立高いんだけど……。

かといって、オバサンの姿を見せるために俺がオジサンの霊力を操ったりすれば、今度は俺に依存してきそうだし。

ああ、何かいい方法はないかな。仕掛けが分からない様にオジサンに見せる方法があればいいんだけど。

しょうがない、爺さんに聞いてみるか

そう結論した俺は隣に浮かぶ鬼一爺さんに問い掛けた。

「ところで爺さん。オバサンの姿を見せる方法って、瑞希ちゃんにした様に霊力を操るしか方法はないのか？」

（フム、それを聞くという事は、お主は他人に術を行使する所を見られたくないのだな）

「ああ。それをやったら、あのオジサンは間違いなく俺を頼ってくるよ」

（まあ、それ以外になると、ある術式の符術を使えば出来んこともないがの……）

と、鬼一爺さんは顎に手を当てて、やや渋い表情で言った。

見るからに何か問題のありそうな表情である。

だが、そうはいつでも方法が知りたいので俺は尋ねた。

「なんか難しい顔してるところを見ると、結構、面倒なのか？」

（お主にこのあいだ教えた式の符術があったじゃろ。覚えておるか？）

「……ああ。直接、俺の血で書く術式のやつね。フウウ、アレを使うのか？」

俺は今の爺さんの話を聞き、ややげんなりとする。

（フオフオフオ、そうじゃ。それを使えば、離れた所からでもあの男に見せる事は可能じゃ。じゃが、この御仁の霊体を式を通して操らねばならぬので大変じゃがの）

今、爺さんが言った式の符術というのは、障壁の符術の後に教えてもらった術だ。

内容としては、自分の霊力で分身を作り出す符術である。分身とはいつでも俺の扱える術式は基本的なものである、正直、微妙な分身だ。まあ早い話が、その分身を自由自在に操る術なのだ。とはいっても色々と制約があるが……。

まず、現段階の俺が式を飛ばせる範囲は、自分を中心に精々半径100mくらいだ。これ以上遠くだと式を操るのは今の俺では無理だ。そして、持続時間は10分程である。もつと修行を積みめばそれらの数字も上がってくるが、今の俺ではそれが限界なのであった。

で、この式の符術。術自体は簡単な構成の術式なのだが、俺の血で直接符に術式を書かなければならないのだ。はつきり言って痛い術である。おまけに、式を使ってる間は意識をそちらに持っていないといけない為に他の事はできない。しかも、結構疲れるし。

そういう理由から滅多なことが無い限り、できるだけ使いたくない術なのであった。

で、俺はゲンナリしているという訳である。

しかし、そんな俺に追い討ちをかけるかのように爺さんは言う。

（今のお主が使える術ではそれしかないの。まあ、諦めてやってみ

るんじゃないな。フオフオフオ」と。

それを聞き俺は大きく息を吐く。

すると、瑞希ちゃんが首を傾げて問い掛けてきた。

「日比野さん。お爺さんとどんな話をしたのですか？」

今の瑞希ちゃんには、爺さんの姿と声のどちらも見聞きする事はできない。勿論、爺さんが霊圧を下けているからだ。

その為、今の爺さんとの会話は、俺の独り言の様に見えただろう。

「ん？ まあ、今後の打ち合わせをね」

「それで、どうするんですか？」

瑞希ちゃんは身を乗り出して聞いてくる。

「そうだな。とりあえず、霊能者には退場してもらおうかな」と俺は言つとウインクをする。

「私も手伝います。何か出来ることないですか？」

瑞希ちゃんはそう言うなりペアッと笑顔になる。懲らしめる気満々だ。こわッ。

だが、そんな瑞希ちゃんを見るなり俺はある事を閃いた。

そして、顎に手を当て嫌らしい笑みを浮かべるのだった。

「クツクツクツクツ」と。

俺の腹黒い笑みを見るなり、瑞希ちゃんは表情を引き攣らせながらも問い掛ける。

「ひ、日比野さん……い、一体、どうしたんですか？」

「いや、いい事を思い付いたんだよ。クツクツクツ。それじゃあ、

瑞希ちゃんと鬼一爺さんにも手伝ってもらおうかな」

（なんじゃ、我もか？）

俺は瑞希ちゃんと鬼一爺さんに閃いた作戦を説明すると、霊能者が来るのを待つ為に俺達はオバサン家の付近へと移動を始めるのだった。

先程、涼一を追い返した男は暗いリビングにいた。

10畳程の広さがある茶色いフローリングの部屋で、部屋の中央には灰色のソファと木製のローテーブルが置かれている。リビング真中の壁際には大きな液晶テレビが置かれており、今は昼過ぎの二ユーラ番組が流れていた。

その反対正面の壁は外に面しており、大きなアルミサッシ窓が取り付けられている。だが、窓には分厚く青いカーテンが覆っている為、外の光が部屋に射し込む事は無い。

また、リビングは別段散らかっている様な感じはないが、カーテンを閉め切った状態で室内灯も点けてない為、この男の陰気な雰囲気も加わって非常にドンヨリとした暗い空間となっているのだ。男は逸る^{はよ}気持ちを押えきれないのか、何処か落ち着かない様子である。俯きながらソファに座りソワソワとしている。手には黒い印鑑ケースを握り締めており、時折、リビングの壁に掛けられた時計に目をやるのだった。時計の針は1時20分を刻んでいた。

男は考える。もう直ぐで妻の霊を宿しておける仏像が手に入ると。

だが、ここである事が男の脳裏を過ぎった。それは先程の涼一の事である。

男は涼一の話を考える。

悪徳商法撲滅協会という所から来たと言っていたが、まさか岡田さんがそんな人間の筈がない。

私の為に親身になって一緒に悩んでくれて、彼は霊界にいる妻にも逢わせてくれた。

しかも、私以外にも沢山依頼人がいる中で、岡田さんは私を優先にしてくれたのだ。

自分にも家族があるだろうに、休みの日には妻との会話の架け橋になってくれた。

こんなに尽くしてくれた人がそんな人間の筈がない。確かに妻と逢うにはお金がかかる。

しかし、この手の料金は何処を見ても同じ様な物だ。

別に岡田さんだけが高いと言うわけではない。

だが、そうやってお金を払い続けるのももう直ぐ終わりだ。

これからは妻の霊が常に一緒にいる事になる。

子供達も岡田さんに憑依した妻の言葉に驚いていた。

それが何よりの証拠だ。あの人は本物だ。本物の霊能者だ

男は一瞬生まれた心の迷いを抑え込むかのように、自分にそう言い聞かせていた。

それから10分程経った頃、「ピンポン」と玄関の呼び鈴が暗いリビング内に響き渡る。

男はその音を聞くなり即座に立ち上がると、目をギラつかせて玄関に移動する。

そして、鍵を解除して扉を開くのであった。

扉の向こうには、紺色のスーツに身を包んだ30代後半くらいの中肉中背の男がニコニコと佇んでいた。

赤く染めた若干短めの頭髪は整髪料を使い綺麗に整えられている。顔には丸い黒縁の眼鏡を掛けており、その奥には猫の様に細い目が確認出来る。右手には皮製の黒い手提げ鞆をもっており、営業マンといっても違和感の無い人物だ。

また、この男の最大の特徴はやや低い鼻の横にある大きな黒子ほくろだろう。この男に出会った人間は先ずそこに目が向かう。といっても過言ではないくらいに存在を主張しているのだった。

扉の向こうに居た人物が、自分の待ち侘びていた霊能者だと分かると男は笑顔になる。

そして口を開いた。

「お待ちしておりました。岡田さん」

「コンニチワ、その後もお元気そうで何よりです。ハハハハ」と岡田はテンション高く返事する。

男は岡田に向かい虚ろな笑顔を向けて言った。

「今日は依り代を購入する為の大切な日ですからね。いつもより元気にもなりますよ」

「そうですね、そうですね。なら、あまり待たせるのも悪いですね。では早速、商談に入らせて頂きましょうか『キヤアアア』」
と岡田が言ったところで道路の方から悲鳴が聞こえてきた。
玄関先にいる岡田と男は悲鳴の聞こえる方向に視線を向ける。
すると、一人の少女が岡田達にいる玄関に向かい駆け込んで来たのだ。勿論、この少女は瑞希である。

瑞希は息も絶え絶えに一心不乱に二人に向かう。
そして、脅えた様に切羽詰った感じで岡田に言うのだった。
「た、助けて下さいッ。お、追われているんです」と。

岡田はそれを聞き若干どもりながらも答える。

「ど、どうしたんだい。お嬢ちゃん」

「実は、とんでもない者に追われているんです」

「「と、とんでもない者!？」」

男と岡田は身を乗り出して驚きながらハモる。

そんな二人を見て噴出しそうになる笑いを堪えながらも瑞希は演技する。

「ハ、ハイッ。実は……キヤアアア」

瑞希はそう叫ぶと、岡田の隣を信じられない物を見るかのように身体を震わせながら指差した。

二人は指し示す位置を恐る恐る確認する。

そして、驚愕するのだった。

「『ウワアアア』」と二人同時に。

二人の視線の先には、鬼一法眼が宙に浮いて佇んでいるのである。しかも、かなり厳しい表情で。

その見た目から感じる怒りの表情は、誰が見ても驚くであろう。何故ならば、目を引ん剥かせ口を大きく開く表情だからである。

男はその姿を見るなり腰を抜かして玄関の前へたり込む。

岡田は直立不動で小刻みに震えていた。

鬼一法眼は岡田に睨みを利かせるとオドロオドロしく口を開く。

（貴様ああ、霊能力者だなアア！ 神妙に致せエエ、この下郎ガア

アア！)

その発言を聞くなり、岡田は引き攣った表情で小刻みに震えながら口を開いた。

「ぼぼぼ、ぼ僕は、れれれ、れ靈能力者なんかじゃ、ななな、無いんだなあ。ヒイツヒイイイイ」

と、山下清の様な発音で極度にどもりながら言つと、奇声を上げて一目散にこの場から走り去っていったのだった。

(待たぬかああ、下郎ガアア)

鬼一法眼は即座にその男を追いかける。

瑞希と男はその様子を片や笑顔で、片や呆然としながら見送っていた。

二人の姿が見えなくなつたところで、瑞希は男に話しかける。

「あのお、すみません。お取り込み中に、突然、駆け込んでしまつて……」

へたり込む男はその声を聞き、ゆっくりと瑞希に振り向く。

そして、暫く間を空けた後に力なく返事をした。

「……いや、もういい……」

男がそう返事したところで、二階からドタドタと階段を降りる音が聞こえてきた。

玄関から一人の少年が現れる。

青いジャージ姿の短髪の子で、やや元気のない表情をしており、家の雰囲気もあってより一層そういつた感じに見える少年であった。

その少年はやや驚いた表情で父に向かい問いかける。

「お父さん。今の騒ぎは、何？」と。

男は虚ろな表情を息子に向け答える。

「何でもない。さあ、中に入ってなさい」

男はそう息子に告げると立ち上がり、今度は瑞希に向かい言った。「さあ、君ももう帰りなさい。さっきの化け物はもう何処かへ行った筈だ……」

男は力なくそう告げると、玄関扉を閉め力チャリと鍵を掛けた。

扉を閉めた男は呆然とした表情で前を見つめながら、ユラリユラりと、たどたどしい足取りでリビングへと戻ってゆく。
また、外ではバタンと閉まった玄関扉を暫くのあいだ、瑞希は寂しそうな表情で見つめているのだった。

其の夜……。

夕食を終えた男は、リビングのソファに腰掛けながら昼の出来事を思い浮かべていた。

岡田が鬼一法眼に脅されて口走った「僕は霊能者じゃない」という言葉をである。

それを思い返していた男は、大きな溜息を吐くと顔を両手で覆い、小さく嘆きの声を上げるのだった。

「う、嘘だ、嘘だ。お、岡田さんは本物の霊能者の筈だアアア。ウツウツウウウ」

この期に及んでも男は自分にそう言い聞かせていた。

嫌、言い聞かせるのではなく、騙されていたという現実から逃げようとしているだけなのかも知れない。そうしなければ狂ってしまうようになる為、防衛本能としての行動なのだろう。

それから男は次第に嘆きの声からすすり泣く声に変わっていた。身体も亀の様に丸めて小刻みに震えている。

そして、リビング内には男のすすり泣く声だけが聞こえる為、明かりは点いているが非常に暗い雰囲気が漂っているのだった。

だが、丁度その時、リビングのサッシ窓に「コンコン」と誰かがノックをした様な音が聞こえてくる。

身体を丸めていた男は、その音が聞こえてくると顔を上げて窓の方へ視線を向ける。

すると、また聞こえてきた。

「コンコン」

男は首を傾げながらサッシ窓の所へと移動する。

そして、窓を覆うカーテンを開いた。

すると、ガラス窓の向こうにある手摺りに、雀のような大きさの白い小鳥が止まってるのが男の目に飛び込んできた。

男は驚く。何故ならば近づいても逃げないからだ。

男は首を傾げつつも『夜にこんな鳥が来るなんて珍しいな』と思いながら窓を開く。

窓が開かれると、直ぐにその鳥は室内へと翼を広げて入ってきた。

男は突然家に入ってきた訪問客に、ややビックリしながらも笑顔で迎え入れた。何故かは分からないが、この小鳥からは懐かしい雰囲気を感じた為である。

その小鳥は室内をパタパタと暫く飛び回ると、液晶テレビの上に羽を休めるかのように止まる。

そして、ジッと男を見つめるのだった。

男は優しい笑顔を浮かべながらその小鳥を見る。

そうやって暫く見つめあっていると異変が起きた。

小鳥の姿がぼやけた様に不鮮明な感じになったからである。

それを見て男は目を擦る。

だが、その時！

ぼやけた白い小鳥が見覚えのある女性の姿へと変貌を遂げたのであった。

男は我が目を疑った。

目の前に居るのは自分が死に別れた妻に他ならないからである。

その姿を見るなり男は大粒の涙を流す。

そして、恐る恐る口を開くのだった。

「ゆ、ゆ、由美子。由美子だよな」と。

（はい、貴方。……ある方の力を借りて、少しの間だけ逢わせて貰える様になりました）

「あ、ある方？ まあいい、それは兎も角。お、俺はお前の言葉を聞くのが生きる希望になっているんだ。お願いだ、もう何処にも行かないでくれッ」

男は妻の霊に悲痛な表情で訴えかける。

しかし、妻の霊は強い口調で、そんな男を突き放すように言うのだった。

（貴方がそんな事でどうするのですか！ シツカリしなさいッ。そんなだから、あんな悪徳商法に引っかかるのです。情けないッ）

「あッ悪徳商法？」

妻の口から飛び出た単語を聞くなり、ポカンとした表情で男は言う。

（まだ気付いてないのですか……。貴方が頼っていた男はインチキです。霊能者でも何でもありません。頭を冷やしなさいッ）

「で、でも、お前しか知らない事を知っていたぞ？」

男は居心地が悪そうに肩を窄めながら言った。

（あれは下調べさえ出来ていれば誰でも出来ます。貴方がこれから子供達をシツカリと育てていけないといけないのよ。分かっているのですか？ おまけにその為の定期預金まで使おうとするなんて、ハアア）

男は妻に攻め立てられ小さくなっていった。

この二人の構図は親に叱られる子供のような感じだ。

生前はカカア天下の関係だったようである。

「ゴ、ゴメンよ。寂しかったんだよ。これからはシツカリ前を向いて行くよ。だから、そんなに攻めないでくれよ」

と半ば言い訳がましい事をいいながら、男は平謝りをする。

（フウウ、兎に角。シツカリしなさいッ。話は出来ないけれど私は家族の直ぐ傍にいます。だから、私にあまり変な心配を掛けさせないで下さい。いいですね？）

「わ、分かった。そ、そうだよな、シツカリしなきゃいけないのにお前の言うとおりだ。今まで俺はどうかしてたようだ」

妻の霊は、その返事を聞き笑顔になると、壁に掛けられた時計を確認する。

そして、夫に向かい寂しい表情で別れを告げるのだった。

（貴方……。もう時間です。私はずっと家族を見守っているから、そ

れだけは忘れないでね。そして子供達を宜しくお願いします」と。
「も、もう、お別れか？ そうか……。だが、短い間だったけど、お前に会えてよかった。危うく道を踏み外すところだったよ。反省している。死んでまでお前に心配掛けさせてすまない」

男はやや切ない表情でそう返事する。

だが、その表情からは先程までの絶望に苛まされた雰囲気は消え去っていた。

（フッフ、それを聞いて安心しました。では貴方、私はいつも家族の傍に居るのだから忘れないで下さいね。そして、お身体を大切に……）

そう告げると共に、妻の霊はフツと消え、最初の白い小鳥に戻っていた。

そして、次の瞬間。その小鳥は翼を広げると開きっぱなしになっている窓から外に飛び立って行き、夜の闇の中へと消えていったのであった。

男は小鳥の飛んでゆく姿が見えなくなるまでずっと見つめ続け、一言こぼした。

「由美子、ありがとう」と

妻の霊が消えて暫くすると、先程の騒がしいやりとりが聞こえたのか、2階にいる子供達がパジャマ姿でリビングに現れた。

そして、赤いパジャマを着た娘が、リビング真中で佇む父親を不審に思い問い掛ける。

「お父さん。誰か来てたの？ 何か話し声が聞こえたけど」

男は晴れ晴れとした顔を子供達に向けると、穏やかな表情で話し出した。

「ああ、懐かしいお客さんだ。つい話し込んでしまったよ。そして、俺の目を覚ましてくれた」

娘は父の言葉を聞き、違和感を覚えた。

いつものドンヨリとした雰囲気の子供達ではないからだ。

其処には母が生きていた頃の父の姿があったからである。

「お父さん、どうしたの？ ふ、雰囲気が変わった。いや、戻ったというか……そんな感じがする」と娘。

「ああ、目が覚めた。と言っただろう。どうやら、お父さんは悪い夢にとらわれていたようだ」

「お父さん、誰が来てたの？」と、そんな父を見て息子が問い掛ける。

「ハハハハ、今日はもう遅い。明日の朝、話してあげよう。さあ、お前達ももう寝なさい。明日はまた学校だろう？」

「ええ、何か気になるう」

男が以前の穏やかな感情を取り戻すと同時に、家の中も少しずつではあるが元の明るさを取り戻し始めていた。

元通りとまではいかないかも知れないが、それに近い雰囲気になるだろう。

そう考えながら、由美子は優しい笑顔を浮かべて3人を暖かく見守っているのであった。

オバサン家の付近にある空き地から式を操る事10分。

飛ばした式は漸く、目で確認が出来るくらい自分の近くに帰ってきた。

そして、式である白い小鳥が俺の真上へ飛んできたと同時に、俺は意識を外して術を解く。

すると、小鳥は元の霊符へと変わり、俺の元へヒラヒラと舞い降りてくるのだった。

俺は舞い降りてくる式の符を手に取り、霊符入れに仕舞うと、鬼一爺さんに向かい言った。

「爺さん、依頼完了だ。まあこれであの家はもう大丈夫だろ。インチキ霊能者に引っかけかかるとは事はない筈だ」

（じゃな。しかし、お主もだいぶ式を操るのが上達したの。フオフオフオ）

「そりゃ、あれだけ毎日キツイ練習を続けてたら上達もするよ。まあ、それでもこの式の符術は結構疲れるけどね。ン？」

俺達がそんな話をしていると、オバサンの霊が俺達のところによってきた。

そして、丁寧に頭を下げ礼を言うのだった。

（あの、今日は本当にありがとうございました。こんな言葉だけでは足りないくらいです）

「いや、別にいいですよ。まああまり気にしないで下さい。それにオバサンの家を見てたら、俺も物部市にいる家族の事思い出したし。偶には帰るかなあ、なあんで思ってしまったよ。ハハハ」

俺はやんわりとした言い方でオバサンにそう返事をした。
するとオバサンは笑顔で言う。

（ありがとうございます。日比野さんにもご家族がありますものね。表面上は普段通りでも、偶に顔を見せるだけで親は安心して喜ぶと思いますわよ）

「……そうですね。まあ、12月に入った事だし、年末には家に帰省する事にしますよ」

（フッフ、その方が良いです。あ、それと、あのお嬢さんにも宜しく言っておいてください。お嬢さんにもお世話になりましたから）
オバサンは今はいない瑞希ちゃんのを思い出し、そう告げる。

瑞希ちゃんは今、此処にはいない。理由は簡単だ。夜遅いからである。

その為、任務が終了次第、メールで報告する手筈になっている。
しかも、絶対に忘れないようにと釘を刺されているのだ。

その言葉を聞き、瑞希ちゃんとのやりとりを思い返した俺は笑顔でオバサンに言った。

「勿論、言っておきますよ。忘れてりなんかしたら、後が大変そうなんで。ハハハ」

（そして、お爺さん。本当にどうもありがとうございました。これでもう安心です。もし、お爺さんに会えなかつたら、と思うとゾッ

としてしまいます)

オバサンはそう言うのと鬼一爺さんに深く頭を下げた。

爺さんはニコヤカに言う。

(フオフオフオ、あの様子をみる限りじゃと、もう大丈夫じゃな。

お主は安心して見守っておればよいじゃろ)

(はい、本当にありがとうございました)

オバサンはもう一度爺さんにお礼を言うと、今度は俺に顔を向ける。

そして、お別れの挨拶をするのだった。

(では、私は家族の下へと帰ります。日比野さんも、お元気で)

「さよなら、オバサン。オジサンはもう大丈夫だよ。オバサンも元気でね」

俺がそう告げると、オバサンは優しく微笑み返し夜空へと舞い上がった。

オバサンの去りゆく姿を暫くのあいだ見届けた俺は、爺さんに向かい言う。

「さて、それじゃあ俺達も帰るか。夜は何も食べてないから腹が減ったよ」

(じゃな。これにて一件落着じゃわい。フオフオフオ)

爺さんの陽気な返事を聞いた俺は、それを合図に空き地から道路に出る。夜空を見上げると三日月が宙に浮かんでいた。まるで空が俺達に向かい微笑みかけているような、そんな感じに見える。

そんな微笑ましい三日月を見た俺は視線を戻すと、やや軽い足取りで自分のアパートへと向かい歩を進めるのだった。

式拾伍ノ巻

《 式拾伍ノ巻 》 動き

此処は寂しいお堂のある森の中。

以前はまだ残っていた緑の雑草もすっかりと色褪せ、周囲はより一層寂しい景色となっていた。

今の時刻は午後3時頃だろうか。やや沈みかけた日の光がお堂のある部分だけを僅かに照らしている。

また、お堂のある開けた空間には、時折、旋風が地面にある落ち葉を巻き上げ、紙ふぶきの様にゆっくりと落ち葉が舞っているのがある。

それらの光と舞い降りてくる落ち葉のコントラストは、この寂しい空間を一時だけ美しく神秘的な空間へと変えていた。

だが、それも長くは続かず、その後には何事もなかった様にいつも通りの寂しい空間へと戻ってゆくのであった。

そのお堂のある寂しい空間に、今、一人の男がいた。あの不気味な男である。

以前と変わらずに殺気を纏うその男は、前回と同じ様にお堂の扉を開くと、賽銭箱の下にある板を外し、そこに納められた封筒を取り出した。目的の物を回収した男は、お堂を元通りにして南京錠の施錠をする。

それらの作業を終えると、男は封筒の中にある便箋を取り出して内容を確認するのであった。

依頼書

眩道斎 殿

以下の者の祝殺を今年度中においてほしい。
尚、祝殺金額5000万はいつもどおりの受け渡し方法でお願いする。

《 祝殺対象者 》

光民党幹事長 大沢伊知郎 衆議院議員

陽 炎

12月10日

F県もこの12月になると、いつ積雪があってもおかしくはない時季に入るが、今年はまだ降雪はない。だが、朝晩の気温は0度を下まわる日も珍しくはなく、雨が降った日の翌日が晴れの場合等は、放射冷却現象で気温がグンと下がり路面が凍結する事もある。

そんな寒い季節ではあるが、高天智市内も12月になってからは様々な業種の人々が慌しく動き回るようになっており、非常に活気溢れる街の様相となっていた。教育機関の多い学園町も例外ではなく、人々が慌しく動きまわる姿が見受けられる。その忙しい様子は、坊主が走り回るほど忙しいと書いて、師走しわすと呼ばれるこの12月を如実に物語る光景であった。

また、クリスマスが近いという事もあり、学園町にある商店街やショッピングセンター等ではクリスマス商戦の真っ只中という感じで、非常に明るく活気溢れる賑わいを見せている。

ショッピングセンター内では、店舗入口にサンタクロースの置物やキラキラと光る星やベル等の装飾品が表に飾られており、派手な演出を施した店が沢山軒を連ねていた。そして、クリスマスの定番

であるジングルベルの陽気なメロディーが其処そこかしこ彼処から聞こえ、そのメロディーに吸い寄せられるかの様に、沢山の買物客でショッピングセンター内は混雑しているのだった。

そんな賑やかなショッピングセンター内を、沙耶香は瑞希を含む4人のクラスメート達と共に談笑をしながら歩いていった。

学校帰りなのか全員制服姿で、その上からコートやマフラー等の防寒対策をするといった格好をしている。

沙耶香はクラスメートとの談笑に加わりつつも、時折、周囲の賑わいにも目を向ける。

そんな各テナントの人々の往来を沙耶香が眺めている時に、瑞希が声を掛けてきた。

「道間さんは、この近くに住んでるの？」

瑞希の問い掛けに、沙耶香は視線を戻すと笑顔で言う。

「はい、この近くです。このショッピングセンターから東に行ったところにあるマンションに住んでるんです」

「へえ、そうなんだ。近くだから学校に通うの楽でいいなあ。ちょっと羨ましいかな」

「高島さんは、どの辺りに住んでるのですか？」

「ん、私？ 私は学園町の西にある高天智ニュータウンに住んでるの。少し離れてるから電車で通ってるんだあ。嫌いな所じゃないけど、少し不便かな」

という瑞希はやや不満そうに口を尖らせる。

そこで沙耶香は瑞希も自分と同じ転校生という事を思い出した。

そして、問い掛ける。

「そういえば、高島さんはF県に来る前は何処におられたのですか？」

「私はC県に住んでただけで、お父さんの都合でこっちに来たんだ。初めての所だから最初はドキドキしてたけど、流石に慣れちゃったかな。それに、どんな所でも住めば都って言うしね」

と言いながら、瑞希は引越してきてからの事を色々と思い返す。

そうやって思い返してゆく内に、フト、涼一と初めて出会った時の事が頭を過ぎった。

瑞希は気付いてないが、その時の表情は非常に穏やかな笑顔になっっているのだった。

沙耶香は瑞希のそんな笑顔を見ながら言う。

「高島さんは、此処に来てから大分良い事があったのですね」と。

それを聞くなり瑞希は頬を赤く染め、やや恥ずかしそうに慌てた感じで言う。

「へ、な、何でそう思ったの？」

「だって、さっきの高島さん。顔にそう書いてありましたよ」

「そ、そう……」

瑞希は沙耶香にそう言われ、照れた様にこめかみの辺りをポリポリと人差し指でかく。

すると、そこで同行者である加奈が話に混ざってきた。

「あッそう言えば瑞希イ、聞いたわよ。この間の日曜日に男の人と一緒に歩いてたって。さあ白状しなさい」

他のメンバーも加奈の言葉を聞くなり驚きの声を上げる。

「「エエ、本当ッ？ 初耳よ！」「と。

「か、加奈ッ。だ、誰から聞いたの？」

「隣のクラスの子からよ。私に内緒で彼氏を作ってたなんてえ」と加奈は悪戯いたずらっぽく言った。

そんな加奈の問い掛けに苦笑いを浮かべながら瑞希は焦った様子で言う。

「ち、違うよ。か、彼氏じゃないよ」

そこで沙耶香は、この間の剣道大会の事を思い出すと瑞希に確認をした。

「高島さん。もしかして、その男の人って日比野さんですか？」

「「「知ってるの？ 道間さんッ」「」」

沙耶香は3人に凄い勢いで詰め寄られる。

そんな3人の勢いに、冷や汗を浮かべてたじろぎながら瑞希に視

線を向けた。

沙耶香と目が合うと、瑞希は観念した様子で弱々しく言うのだった。

「う、うん。日比野さんだよ……」と。

瑞希の言葉を聞くなり3人の執拗な質問攻めが始まった。

最初こそ戸惑いながらではあったが、それらの質問に瑞希は上手く誤魔化しながら答えてゆく。

沙耶香はそんな瑞希を見るなり悪い事をしたかなと思い始める。

そして、質問攻めから瑞希が開放されると、申し訳なさそうに小声で謝るのだった。

「う、ごめんなさい。思わず口に出してしまい」

「いいよ。別に謝らなくても。それに、時間の問題だったような気がするし」

「そ、そうかもしれませんが……アッ！」

そう言い終えると同時に、沙耶香は目の前にあるテナントへ視線を向けると思わず声を上げた。

他の4人もその声を聞き沙耶香の視線を追う。其処は文房具店となっているテナントであった。

その文房具店を見るなり、加奈は首を傾げ沙耶香に問い掛ける。

「道間さん。此処がどうかしたの？」

加奈がそう聞くと同時に、今度は瑞希が声を上げた。

「ひ、日比野さん……」と。

そう、其処にはなんと涼一が居たのである。

涼一は瑞希達には気付いておらず、文房具店内の書道用品コーナーにて、何やら難しそうな表情で陳列されている商品を眺めていた。

そんな涼一を複雑な表情で瑞希は眺めていると、加奈はニヤツと笑みをこぼしながら呟く。

「ハハーン。さてはあの人が瑞希の意中の人なんだあ。なるほど、なるほど。これは突撃取材を是非ともしなければ」

好奇心旺盛な加奈はそう言つと涼一の方へと歩を進める。

「ちよ、ちよつと加奈ッ。な、何を」

瑞希は顔を赤く染めながら、焦った表情で慌ててそれを追いかける。

沙耶香はそんな焦る瑞希を見ながら『余計な事してごめんなさい、高島さん』と、心の中で只管謝るのだった。

霊符作成に使う墨汁が切れた為、俺は今、学園町内のショッピングセンターに来ている。

連日の様に霊符作成で使いまくってるので流石に減るのが早い。小学校で習字の授業を受けていた時の減りようと比べると明らかに違う。年単位で見ると10倍くらいの早さである。

まあそんな訳で学校帰りに文房具店に寄り、今、その品々を見ているというわけだ。

だが、そこで墨汁の隣に陳列された硯すずりが俺の目に飛び込んできた。そこで俺は考えるのである。買おうか買うまいかを……。値段は安い物だと1000円から高いのだと10000円は超えている。勿論、俺が悩んでいるのは1000円の方だ。

今、俺が使ってる墨汁を入れる容器は100円ショップとかにありそうな安っぽい瀬戸物の丸い器である。俺はそれを使って霊符作成する自分の姿を想像する。すると、その安っぽい器の所為か、自分のやっている作業までが安っぽく見えてしまうのだ。その為、格好だけでもちゃんとした正統派の道具にするべきかな、などと考えるながら硯の陳列棚を眺めているのであった。

そうやって暫く硯と睨めっこをしていると、隣にポニーテールをした女の子がやってきた。瑞希ちゃんと同じ学校の制服を着ている子である。

その子は俺と目が合つとニコニコとした表情を浮かべ話しかけてきたのだった。

「あの、少し宜しいですか?」と。
俺は突然の呼掛けにやや戸惑いながらも言った。

「へ? な、何」

「いつも瑞希がお世話になってます」と、その子は言うのと丁寧にお辞儀をした。

「ちょ、ちよつと加奈ッ」

その子がそう言ったところで、顔を赤く染めた瑞希ちゃんが慌てて駆け寄ってきた。どうやら、瑞希ちゃんの友人のようだ。

だが、瑞希ちゃんだけかと思いきや、後ろから更に2人の女の子が現れたのだった。

2人は俺に歩み寄り、ニコニコと元気良く挨拶をしてきた。

「初めましてッ」と。

「あ、ああ。は、初めまして?」

俺は今の流れに付いていけない為、思わず疑問系の様に語尾の発音が上がってしまう。

すると、更に2人の後ろからツインテールに髪を纏めた新たな人物が現れて俺に話し掛けてきたのであった。

「お久しぶりでございます。その節はどうも」

その人物はお淑やかにそう挨拶すると、俺に笑顔を向ける。

しかし、俺はその人物を見るなり思わず引き攣った表情になるのだった。理由は勿論、危険人物だからである。

また、それと同時にこうも考えた。何故、この子が此処にイ? と……。

だが、あまり慌てて不自然な行動をするとかえって怪しまれると思ひ、俺は一旦咳払いをした後に爽やかな笑顔を作り言った。

「エツト、皆は瑞希ちゃんのお友達かい?」

「……はい、そうーですッ」

瑞希ちゃんとツインテールの子を除いた3人の女の子達は元気良くそう答える。

「ハ、ハハハ。そ、そうなんだ」

そこで、最初に話し掛けてきたポニーテールの子が元気良く口を開く。

「日比野さん。瑞希とはどういったご関係で？」と、まるで芸能リポーターのように。

「ど、どういったご関係？」

俺は質問の意味が良く分からない為、ポカンとした表情になる。すると、慌てた様子で瑞希ちゃんは言う。

「ひ、日比野さん。気にしないで下さい。もう加奈ったら突然何を言い出すのよ」

「だってえ、気になるんだもん。ウフフフッ」

二人がそんなやりとりをする中、ツインテールの子が俺に話し掛けてきた。

「あの、お名前は日比野さんと仰るのですよね。この間、高島さんから聞きしました」

「そうだよ。しかし、まさか君が瑞希ちゃんの同級生だとは思わなかったよ」

俺は図書館で遭遇したときの事を思い浮かべる。

「私もまさか高島さんのお知り合いだとは思っていませんでした。あっそれと、私の名前は道間沙耶香と言います」

「道間沙耶香ちゃんね。覚えてたよ。じゃあ、俺も名乗らないとね。俺は日比野涼一って言うんだ」

「日比野涼一さんですね」

沙耶香ちゃんは笑顔でそう答える。

「そう言えば、道間さんも知ってるんだよね？ 日比野さんの事」と、ここでさっきのポニーテールの子が話しに入ってきた。

「いや、知っていると云うほどでは……」

沙耶香ちゃんは頬を赤く染めると、下に俯きやや恥ずかしそうに言う。恐らく、図書館での行動を思い出したのだろう。

その様子を見たポニーテールの子は、瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんを交互に見比べると顎に手をあてニヤツと笑うのだった。どこか小

悪魔的な笑みである。

その子はそんな笑みを浮かべながら言った。

「瑞希に強力なライバルが出現したわよ」と。

それを聞くなり、瑞希ちゃんが慌てて詰め寄る。

「加奈ツ、何を言い出すのよ。道間さんに日比野さんもごめんなさい。突然、加奈が変な事を口走って」

「い、いや、別にいいよ。それにしても、瑞希ちゃんのお友達は元気な子ばかりだね。ははは」

「そ、そうなんです。ははは」と瑞希ちゃんは口元を引き攣らせて笑みを浮かべる。

俺と瑞希ちゃんがそんなやりとりをしていると、沙耶香ちゃんを除いた他の3人は少し離れた所で何やらヒソヒソと話を始める。

何かを話し合ってるのか、時折、俺達に視線を向けながら話をしているのがあった。

様子が変わったので、俺は瑞希ちゃんに問い掛ける。

「み、瑞希ちゃん。あの子達は何をしているの？」

「さ、さあ……」

瑞希ちゃんも良く分からないのか、やや首を傾げながらそう言った。

3人は暫くそうだった感じで話し込む。

すると意見が纏まったのか、笑顔で俺達のところに駆け寄って来るとポニーテールの子が言った。

「それじゃあ、私達はこれでもう帰ります。瑞希と道間さんの事をよろしく願いますね、日比野さん」

「「えッなんで？」」

突然の展開にポカンとしながら、瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんは綺麗にハモった。

「「じゃあ、瑞希と道間さん。また明日ね。それとお互いに頑張っ
てねッ」」

他の2人がガッツポーズをしながらそう言うと、3人は手を振り

ながら文房具店を後にしたのであった。

俺達は呆然と3人の姿を見送るとお互いに顔を見合わせる。

「ははは、なんか知らないけど、賑やかな友達だね」と俺。

「すみません。突然、こんな事になって。それに加奈ったら、何を勘違いしたのか道間さんまで……」

瑞希ちゃんは恥ずかしいのか、顔を赤く染めて答える。

沙耶香ちゃんもこの流れが良く分からないのか、首を傾げて言うのだった。

「そ、そうですね。明日、学校に行ったら加奈さん達の誤解を解かないと」

「二人のお友達は凄いな。俺は少しいていけなかつたよ。ハハハ」
「すみません、日比野さん」と瑞希ちゃんは頭を下げて謝る。

「私からもお詫びします。すみませんでした」と沙耶香ちゃんも同じく頭を下げる。

だが、二人のそんな姿を見るなり罪悪感が湧いてきたので、俺は即座に言った。

「ああ、いいよ。別に責めるつもりで言ったんじゃないからさ。あまり気にしないで」

俺はそう返事すると周囲を見回してから続ける。

「それじゃあ二人共、ちょっと待っててくれるかい。墨汁と硯を精算しに行ってくるからさ」

二人に確認を取った俺は商品を持ってレジに向かう。因みに硯は買う事にした。

そして、精算を済ませた後、二人と共にショッピングセンター内にあるフランチャイズ型の喫茶店ドールへと向かうのだった。

ドールに入った俺達は、適当に空いた席に座ると各自飲み物を注文した。

店内はそれ程混雑していない。とはいっても、ショッピングセンターに来ている人の多さと比較するとだが……。

店の様相は、薄い黄色の壁と綺麗に並んだ流線型のテーブルが印象的な明るい雰囲気のお店であった。

だが、なんととってもこの店の一番の特徴は香りである。コーヒー豆の豊かな香りが店内に充満しており、その香りが気分をリフレッシュさせてくれるのだ。実はこの喫茶店特有のコーヒード豆の香りが俺は大好きなのである。そんな訳で店内に漂う豆の香りを俺は暫く堪能する。

そして、注文してから2分程すると俺達の元に飲み物が運ばれてくる。女子二人は共にホットココアで俺はアメリカンコーヒード。それらが届いたところで俺は話し始めるのだった。

「今日は学校帰りのようだけど、何か面白い物に来たの？」

「うーん、別にこれといって用はないんですけど。とりあえず目の保養という事で。へへッ」

瑞希ちゃんは先程の焦った感じではなく、いつも通りの調子に戻っていた。

そんな瑞希ちゃんを見た後、俺は沙耶香ちゃんに目を向け話しかける。

「沙耶香ちゃんは、瑞希ちゃんと同じクラスなの？」

「はい。ですが、先月此方に引っ越してきたばかりなので、まだそれ程のお付き合いはないのです。でも、高島さんには良くして頂いております」

沙耶香ちゃんは、言葉遣いが丁寧でとても中学生とは思えない。

相当厳しい家で育ったのか、それとも日本古来の伝統文化を受け継ぐ家で育ったのかは分からない。だが、姿勢や振る舞い等を見ても非常に品のある佇まいをしているのである。

それが気になったので俺は聞いてみる事にした。

「沙耶香ちゃんの家って華道とか茶道をしているの？」

「いえ、やっておりませんが……。何故、その様な事をお聞きになられたのですか？」

沙耶香ちゃんは首を傾げて逆に問い掛けてきた。

「いや、沙耶香ちゃんの話し方や所作が、妙に品があるから気になつたんだよ。ハハハ」

「アツ、それ私も気になってたんですよ。道間さんて丁寧な話し方するから」

と瑞希ちゃんがここで身を乗り出して聞いてくる。

そんな俺達をみるなり、沙耶香ちゃんはやや恥ずかしそうに下を向く。

そして上目遣いで言うのだった。

「あ、あのお、変ですかね？ やっぱり……」

「いや、変じゃないよ。それが正しい言葉遣いだと思うからさ。ただ、その話し方を普段の会話で使うと、どうしても固そうな雰囲気が出るからね」

「そうだよ。道間さんも転校してきて日が浅いというのもあるかも知れないけど、もう少し楽にしようよ」と瑞希ちゃん。

俺と瑞希ちゃんにそう言われ、沙耶香ちゃんは暫し考えると笑顔で言った。

「そうですね。もう少し肩の力を抜いて話をするようにします」

「その方がいいよ。俺もその方が話しやすいしね」

「私もその方がいいと思う」

そんな他愛ない会話をしていると、今度は沙耶香ちゃんが俺に聞いてくる。

「日比野さんは書道をされてるのですか？」

「へ？ ああ、さっき買った硯と墨汁の事かい。ウーン、書道ではないけど、それと似たようなもんかなあ。まあそういう事にしておいてよ。ハハハ」

俺はそう答えると爽やかに笑って誤魔化した。

「ひ、日比野さん。おかしな質問をかも知れませんが、一つ聞いてもいいですか？」

と、ここで沙耶香ちゃんは先程までとは違い、やや真剣な表情で聞いてくるのだった。

「ん、何だい？」

沙耶香ちゃんは一拍間をおいてから話し出す。

「あの、日比野さんの家は鎌倉時代か室町時代辺りから続く歴史ある家系なのですか？」

俺はその質問の意味が一瞬分からなかったが、良く考えるにつれ、とんでもない質問だと思い始める。

理由は勿論、鬼一爺さんの話を思い出したからだ。

それと同時に頭の中にある警報機がグウオングウオンと鳴り響く。俺は心を落ち着かせてやや間をおいてから答えた。

「えっと……今の質問は、俺の家系がそこまで遡れるかって事かい？」

「は、はい。変な質問かも知れませんが」

俺は瑞希ちゃんを一瞬だけ見る。

瑞希ちゃんも今の質問の意味を理解したのか、妙にヨソヨソしくなっていた。

恐らく、瑞希ちゃんも鬼一爺さんの事を考えてるのだろう。後で

瑞希ちゃんには、沙耶香ちゃんの霊能力の事を話しておいた方が良さそうだな。

そんな事を考えながら俺は答える。

「結論を言うと、分からないというのが正直なところかな。ただ、付け加えるなら、俺ん家はもし遡れても明治時代くらいまでが精々だと思っけどね。そういつた文献や家系図なんてものもないし」

「そ、そうですか……」

「それがどうかしたの？」

俺の問い掛けに沙耶香ちゃんは暫く考え込むと、意を決した様子で言った。

「あ、あの。笑わないで欲しいんですけど、聞いてくれますか？」

「何の事が分からないけど、良いよ。何だい？」

「実は私、霊感があるんです。この間の図書館で大きな声を上げたのも、日比野さんの後ろに霊が見えたからなんですよ。それも、鎌

倉時代辺りの服装をした霊なんです。それでご先祖なのかな？ と思つて聞いたんです。ごめんなさい、突然こんなオカルトチックな話をしてしまつて……」

俺はそれを聞き、警戒レベルを更に引き上げた。WHO風に言うならフェーズ6というやつである。

しかし、慌ててはいけないと自分に言い聞かせて俺は答える。

「へえ、さ、沙耶香ちゃんて靈感あるんだ」と。

「ほ、本当なの？ 道間さん」

「はい。でも皆には内緒にしておいて下さいね。お願いします」

沙耶香ちゃんは頭を下げ、俺と瑞希ちゃんにそう言った。

「勿論、誰にも言わないよ。ところで今もその幽霊つて見えるの？」
今の鬼一爺さんの姿は見えていないだろう、とは思いつつも確認の為に問い掛ける。

「いえ……。それが見えません。もしかすると見間違ひだったのかな」

沙耶香ちゃんは自分に言い聞かせるような声色でそう言った。

するとその時、誰かの携帯が軽快に鳴り出したのであった。

音の主はどうかやら沙耶香ちゃんの様である。

沙耶香ちゃんは携帯をポケットから取り出すと電話にでた。

「もしもし、お兄様。どうしたのですか？……はい、それではもう暫くしたら戻ります。……はい、それではまた後で」

携帯を切つた沙耶香ちゃんは、俺と瑞希ちゃんに向かい申し訳なさそうに言つた。

「あの、すみません。ちょっと用事が出来ましたので、お先に失礼させてもらつても良いですか？」

「ああ、別に構わないよ。お金は俺が払つとくから行きなよ」

「道間さん。それじゃあ、また明日ね」

「はい、また明日。それと日比野さん、今日はどうもありがとうございました。それでは失礼します」

沙耶香ちゃんは笑顔でそう言つと、最後に丁寧にお辞儀をしてこ

の場を離れるのであった。

俺と瑞希ちゃん、沙耶香ちゃんの姿が見えなくなるまで見送ると、お互いに向き合い肩の力を抜いて話し始める。

「フウウ。なんか今日は疲れたよ」

「私もですう。ごめんなさい日比野さん。迷惑掛けて」

「ハハハ、それはもういいって。それにしても、今日の瑞希ちゃんは結構慌ててたね。あんな瑞希ちゃん初めて見たよ」

「そうなんですう。まさか、加奈があそこまで行動的だとは知らなかったんですよ」

瑞希ちゃんはそう言うと、テーブルの上に突っ伏した。

精神的にも肉体的にも疲れているようだ。

だが、そこで俺は先程の沙耶香ちゃんとのやりとりを思い返す。

そして、瑞希ちゃんに言った。

「瑞希ちゃん、さっきの霊の話だけど。多分、鬼一爺さんの事で間違いないな……」

「やっぱりそうですよね。お爺さんの事を知られると不味いんですか？」

「ああ。それで悪いんだけど、鬼一爺さんの事は沙耶香ちゃんには黙っていてくれるかい？」

「分かりました。でも、なにがそんなに不味いんですか？ 必要以上で秘密にしてる様な気がするんですけど」

瑞希ちゃんは納得がいかないのか、やや眉根を寄せて聞いてくる。そこで俺は、沙耶香ちゃんが修行を積んだ霊能力者かもしれないという疑惑と、悪霊退治を無断でしていた？という縄張り荒らしの話教えるかどうかを迷うのだった。

だが、学校で頻繁に沙耶香ちゃんと接する瑞希ちゃんには粗方の事は教えておいた方が良さそうと思い、俺は詳細な部分を説明する事にした。

「実はね……」

一方その頃。

沙耶香は涼一達と別れると、そのまま自分のマンションへと向かう。そして、マンションに着いた沙耶香は玄関扉の鍵をあけ中へと入った。

玄関には黒光りする革靴が一足、綺麗に揃えて置かれている。沙耶香はそれを確認すると奥のリビングを見つめた。

奥のリビングからはテレビが点いている様で話し声が聞こえてくる。また、エアコンがかかっているのか、室内機の低い送風音もそれと共に聞こえてくるのだった。

沙耶香は少しの間、耳を^{そばた}敬て奥を見つめると自分も靴を脱ぎリビングの方へと向かう。

すると、リビングには茶色いスーツ姿の一将が一人ソファに座って寛いでおり、沙耶香の姿を見るなりニコやかに声を掛けてきた。

「おお、お帰り沙耶香」

「お父様。お久しぶりでございます。お元気そうで何よりです」
沙耶香も笑顔でそう返すと、一将は言う。

「ははは。お前も元気そう良かった。それとどうだ学校の方は？」
「はい、クラスの皆にも良くしてもらっているので、快適な学園生活を送れています」

「そうか、それは良かった」

一将はそう言うと、安心したのかホッと一息ついた。

そんな父を見て沙耶香はクスリと笑う。

そして今回の訪ねてきた理由を聞くのだった。

「お父様、お兄様ももう暫くすると来ると思いますが、一体何があったのですか？」

娘の問い掛けにやや渋い表情で一将は言う。

「実は鎮守の森からある依頼を受けたのだよ。しかも、かなり厄介な部類のものだ……」

「や、厄介な依頼ですか……。一体、どのような内容の依頼なので

すか？」

沙耶香はいつもと違う父の表情を怪訝に思い尋ねる。
すると、一将は顎に手をあて渋い表情で言うのだった。

「沙耶香、お前も知っているだろう。大物政治家が3人立て続けに心臓発作で亡くなっているのを」

「はい、確かに先月から光民党の方が3人亡くなったと報道されておりですけど。それが何かあるのですか？ 報道では事件性は無いと言っておりますが」

「報道ではな。だが、真相は暗殺されているのが本当のところだ。しかも、地霊力を使った呪殺でな」

「ほ、本当ですか？ お父様ッ」

沙耶香は両手で口元を覆いながら驚く。

「ああ、間違いない。土御門の長老からそう聞いた後に、私自身も現場近くの地脈の乱れを確認したからな」

「それで私達、道摩家に依頼してきたという事は『その術者を捕らえよ』という事ですか？」

「まあそれについては一樹が来てから話そう」

一将は依頼話を一旦ここで切ると、先程の表情に戻って沙耶香に尋ねる。

「そういえば、沙耶香。例の術者の足取りはどうだ。何か掴めたか？」

「それが、今のところ鳴りを潜めているようです。修被しほひのほうもここ最近は大入しい様ですし、我々の警戒に気が付いてるのかも知れません」

沙耶香はここ最近の捜査報告を簡単にすると小さく溜息を吐いた。
「そうか……。まあいい、気長にいけ。それと、あまり無理はするなよ」

一将は気落ちする娘に優しく語り掛けるように言う。

「はい、分かっています」

沙耶香はそんな父の気遣いに感謝しながら穏やかにそう返事をす

る。

その後、二人は世間話や沙耶香の学校話をしながら時間を潰して一樹のやってくるのを待つのであった。

貳拾六ノ巻

《 貳拾六ノ巻 》 憑き物

高天智市の中心市街地からやや離れた地域に、ヒツソリと佇む、とある廃屋での話である。

今は夜も深まり始める時刻。廃屋の真上からは、弱々しい月明かりが降り注ぐ夜の世界を創りだしており、辺りは不気味な光景となっていた。

周囲からはこの付近にいるであろう野良犬の吼える声と、時折吹き抜ける風の音が聞こえてくるだけである。また、上空を流れる雲が、僅かばかりの光を発する月を覆い隠す事がある為、非常にオドロドロしく物悲しい雰囲気に取り込まれている所なのであった。

その廃屋は3階建ての鉄筋コンクリートで造られた建造物である。元は病院だったのか、玄関部分には診察案内の表示板等が埃まみれで乱雑に転がっていた。廃屋の白い外壁は所々が色褪せており、壁材や塗装が剥がれ落ち、幾つかの箇所は鉄筋が見えている所も確認出来る。また、廃屋の周囲には枯れた雑草やゴミ等で覆われた花壇があり、この廃墟に相応しい様相をしていた。

しかし、それらの廃屋の姿は、太陽が昇る日中なら確認出来るが今は夜である。その為、月明かりが照らし出す弱々しい光がそれらの全体像を薄気味悪く不鮮明に浮かび上がらせていたのであった。

今此処に、そんな廃屋に向かう一台の黒いステーションワゴンタイプの車があった。その車は廃屋の付近になると減速し入口手前で停車する。車のエンジン音が止まり、ライトが消えると、二人の人物が車から降りてきた。

車から降りてきたのは道間一樹と沙耶香の二人である。二人の吐く息は煙の様に白くなっており、その吐息が外の寒さを物語っている。

た。

また、二人は共に黒っぽい衣服に身を包んでおり、闇に溶け込むかのような出で立ちをしていた。何処かの組織の特殊部隊にも見える、物々しい感じの可動性に優れた服装である。

沙耶香は目の前に佇む不気味な廃屋へ視線を向ける。その様は、目を細めた鋭い眼差しとなっている為、廃屋に睨みを利かせているようである。廃屋を暫く眺めた沙耶香は周囲も見回す。すると、やや離れた所に、明かりのついた幾つかの民家が沙耶香の視界に入ってきた。それらの民家が離れた所にある所為か、廃屋のある此処だけが周囲の空間から切り離されたかの様に沙耶香の目には映るのであつた。

沙耶香がそうやって周囲の夜景を見回していると、一樹は車の後ろにまわりハッチを開ける。其処には一抱えはありそうな木箱や細長い桐箱が置かれていた。

一樹はそれらの箱を確認すると、沙耶香に話しかける。

「沙耶香。お前は今日、どの除霊具を使うんだ？」

一樹の声を聞いた沙耶香は車の後ろへと移動する。

そして、ラゲッジに置かれた木箱を眺めながら言った。

「鎮守の森からの話では、悪霊の数が30体程いるという事ですので、私は破邪の符と靈撃鞭^{れいげきへん}、そして念の為に護身結界を持って行くと思います」

「そうか、では用意しとこう」

一樹は木箱の中から幾つかのケースを取り出すと沙耶香に渡す。

沙耶香はそれらを受け取ると、一樹の手元にある桐箱に視線を向けて言った。

「お兄様は、いつもと同じく靈刀・鶴^{つる}と靈珠^{れいしゆ}だけで修祓^{しゆはつ}を行うのですか？」

沙耶香の問い掛けに一樹は軽く微笑むと、細長い桐箱の中から一振りの日本刀を取り出した。

一樹は手に持った刀を見つめながら言う。

「ああ、ずっとこのスタイルでやってきたからな。これが一番シックリくる」

「フッフ、同感です。私もこの霊撃鞭を使うスタイルが一番やり易いです」

「まあな。でも油断はするなよ、沙耶香。慢心が一番危ないからな」
一樹はそこで真剣な表情になり忠告する。

「はい、分かっております。お兄様」

と、答えると沙耶香も真剣な表情になり頷く。

一樹はそんな沙耶香の返事を聞くと柔らかい表情になって、再び準備に取り掛かるのであった。

二人は各々の必要な道具類を馴れた手付きで身体に装備してゆく。粗方準備の方も終わると一樹は車のハッチを閉めて沙耶香に言った。

「ああ、それと沙耶香、言い忘れた事がある。この廃屋は修被しほ後に取壊す事になってるが、あまり派手に暴れないでくれとのことだ。これを念頭に入れてくれ」

「はい、分かりました。でも何故その様な事を鎮守の森は言うてるのでしょうか？ こんなボロボロの廃屋なのに……」

沙耶香は眉間に皺を寄せて難しい表情をしながら聞く。

「さあな。多分、解体業者を不審がらせない為だろう。まあそれはさて置き、とりあえず人払いの結界を張るぞ」

「はい、お兄様」

二人は敷地内の周囲に、奇妙な形をした黒い小さな仏像を配置してゆくと、黒い糸を像から像へといった感じで這わせてゆく。それらを配置し終えると、一樹は右手に霊力を込めて像の一つに触れるのであった。

すると、その這わせた糸を伝い仄かに白い光が走ってゆく。その光が、全ての像に行き渡ると一瞬像が強く光り輝き、直ぐまた元の黒い像へと戻っていった。

一樹はそれを見届けると沙耶香に言う。

「よし、結界はこれで完了だ。それじゃ廃屋の中に行くぞ」

「はい、参りましょう」

二人は薄暗い月明かりの中を凜とした姿勢で廃屋の玄関へと歩を進める。

そして、玄関に辿り着いた二人は一旦立ち止まると、沙耶香が持つ懐中電灯の明かりを頼りに周囲を警戒しながら中へと進んで行くのであった。

廃屋の中は雑然とした雰囲気になっており、入ってすぐの受付があったと思われるホールにはボロボロのソファが埃にまみれて引っこ繰り返っていた。また、朽ちて落ちたと思われる天井板が床に散らばっており、天井裏に施された電気配線や設備配管、そして通気ダクトといった物が剥き出しになっているのであった。

そんなボロボロのホールに二人は足を踏み入れると、直ぐに一樹が指示をする。

「悪霊の波動はこの奥にある部屋から感じる……。沙耶香、とりあえず其処から行くぞ」

一樹はそう言うのと目の前にある両開きの扉を指差した。

沙耶香はそれに無言で頷き、腰に装備した霊撃鞭を手に取って何時でも振れるよう戦闘態勢に入る。

指示した一樹も腰に装備した霊刀を鞘から抜いた。仄かに白く光る美しい刀身が露になる。

一樹は刀を右手に持つと、左手で扉のノブに手を掛ける。そして、沙耶香に視線を送り無言で頷くと、それを合図とばかりにノブを回して扉を開くのであった。

扉の奥には、大きく口が裂け目を見開く醜悪な表情をした悪霊が4体宙に浮いており、扉が開くと同時に一樹と沙耶香に振り向く。

と、その時！ 二人の姿を確認するや否や、悪霊達は大きく口を広げ一斉に襲い掛かってきたのだ。

沙耶香と一樹はそれを確認し冷静に身構える。

悪霊の一体は、先ず、沙耶香目掛けて斜め前から飛び掛ってきた。

沙耶香は冷静にそれを見据えると、右手から己の靈力を込めて鞭を素早く振るった。

靈力を通わせた鞭は白い光を発しながら蛇の姿の様に撓り、残像が見えるほどのスピードで悪霊に撃ち付けられる。

「ウギヤアアア！」

悪霊は靈力の籠った鞭をまともに受け、断末魔の声を上げると共に消滅した。

だが、それで終わりではない。直ぐにまた別の悪霊が今度は正面から襲い掛かってくる。

沙耶香はそれを予想していたのか、落ち着いて鞭を縦に振るう。

鞭が撓って床に当たり「バチンッ！」という鋭い打撃音が聞こえると共に、襲い掛かってきた悪霊は断末魔の声を上げる間もなく消滅した。

沙耶香は目の前の悪霊が消えるのを見届けると一樹の方へ視線を向ける。すると一樹の方は、悪霊2体を靈刀で既に斬り捨てた後であり、鞘に刀を仕舞っているところであった。

視線に気付いた一樹は穏やかな表情で力強く沙耶香に言った。

「さて、それじゃあ、この調子で建物内を修祓していくぞ」

「はい、お兄様」

沙耶香はそんな兄の言葉を聞き笑顔で答える。

そして、二人は此処で気を引き締め直すと、悪霊の徘徊する更に奥の闇へと足を踏み入れるのであった

それから2時間後。

二人は廃屋内の修祓も無事終えており、車の所にまで戻ってきていた。

沙耶香はやや草臥れたのか、左右の肩を回している。一樹は車のハッチを開けて自分達が装備していた道具等を丁寧に仕舞っていた。その後、全ての道具類を仕舞い終えた一樹は、軽く屈伸運動をして体を解す。そして、沙耶香に話しかけた。

「ふう、流石に疲れたな。30体近くも被つとなると」

「フッフ、そうですね。でも、日中に行う修被しゅぼと比べると、衣服が動き易い分、夜の方がやり易いです」

「ハハハ、確かにそうだな。日中は滅多に修被しゅぼをする事がないが、神官服に着替えれないといけないからなあ」

一樹はそう言いながら今着ている自分の衣服を見回す。

「仕方ありませんわ、お兄様。それが鎮守の森のルールですから」

「そうだな。さて、それじゃあ戻ろうか、沙耶香」

「はい、もう用はありませんものね」

沙耶香はそう返事すると助手席のドアを開き車に乗り込む。

一樹も運転席に乗り込むとキーを回してエンジンをかける。

そして、暫く暖気をした後にこの薄気味悪い廃屋を後にしたのであった。

その帰りの車内……。

車のオーディオからは、落ち着いた曲調である洋楽のバラードがやや小さめの音量で流れており、疲れた二人の気分を幾分か和らげていた。

聞こえてくる音楽に耳を傾けながら、沙耶香は通り過ぎて行く夜の街並みを助手席の窓から無言で眺める。だが、そこでフト昨晚の父の話が頭を過ぎるのであった。

沙耶香はその話の中で疑問に思う部分があった為、運転する兄に向かい問い掛ける。

「お兄様、昨晚の話ですが……。お父様はああ言っておりますが、お兄様はどう思われますか？」

「ん、暗殺阻止の話か？」

ハンドルを握る一樹は前を向いたまま答える。

「はい。お父様は、次に狙われるのは恐らく大沢伊知郎議員だと言っておりますが、本当なのでしょうか？」

沙耶香は顎に右手を当てるとやや難しい表情でそう言った。

「まあ、あの仕事は予想で行動するしか方法がないからな。父上も

色々な所からの情報を精査した上での事だろう。それに今回は土御門の者も関わっている以上、かなり信憑性のある話だと思うぞ」

「それは私もそう思います。ただ気になるのが、その大沢議員がこのF県へ講演に来る日が一番呪殺される可能性が高いという話なのです。ですが、その理由をお父様は教えてくれませんでした。それが気になるのです」

沙耶香の疑問に一樹も少し唸り声を上げる。

「大沢議員が来るのは今月の24日と言ってたな。ウーン、俺も事の深い部分までは分からんから何とも言えんが。恐らく、そこは機密事項なのだろう。父上の話を聞く限りでは、鎮守の森と政府関係者との間で複雑なやりとりが絡んでいる筈だからな」

「私はそこところも疑問に思うのです。今まで鎮守の森は秘密結社の様な存在であった筈なのに、非公式とはいえ、どうして政府関係者が関わるようになったのでしょうか……」

疑問が尽きないのか、沙耶香は眉間に皺を寄せて兄に意見を求める。

「まあ俺には分からんが、色々複雑な事情があるのだろう。父上もおいそれと話が出来ないほどのな」

「……そうですね」

とやや元気なく沙耶香は返事をした。

そんな沙耶香を一樹は不思議に思い問い掛ける。

「どうしたんだ一体？ 沙耶香、お前らしくないぞ」

「何故かは分からないのですが、嫌な予感がするのです。漠然とではあります……」

沙耶香は元気なくそう答えると、大きく息を吐く。

そして、窓に視線を向けて流れ行く景色を眺めるのだった。

「確かに気にはなるが、如何せん今は判断できる材料もない。それに今言った部分は、父上も俺達には話せない事情があるようだ。どうしようもないぞ」

「はい、分かっております。兎に角、お兄様も当日は何時もの修被しゅはい

以上に気をつけた方が良いと思います。油断はしないでおきましょう」

「ああ、そうだな。それに相手は地脈を操る程の術者だ。相当に気を引き締めたほうがいいだろう」

一樹は真剣な表情でジツと前を見つめながらそう告げる。

「ええ……」

沙耶香は幾分か強い発音で返事をする、目を閉じて口を嚙くんだ。車内にはやや重苦しい感じの沈黙が漂い始める。だが、その時。

そんな重苦しい雰囲気を打ち破るかのように軽快な感じの曲がスピーカーから聞こえてきた。その所為か、若干、車内も明るさを取り戻した様である。

そして、二人を乗せた車は月明かりで浮かび上がる学園町の中へと入ってゆくのであった。

12月13日 G県 葦原市

此処は葦原警察署。今は朝の9時頃である。

今日の葦原市は今年一番の冷え込みながらも、今は陽気な日の光に包み込まれていた。また、仄かに暖かさを感じさせる優しい日光の熱が、辺りを覆いつくしていた霜を溶かしている為、所々から湯気が立っている様に見える。その為、若干霧がかかった様な光景となっているのであった。

山や田畑が殆どを占める長閑のどかなこの葦原市も12月に入ってから人々が慌しく動く様が見られる。

葦原警察署内も例外ではなく各部署の人間達が、何時もより忙しそうに書類整理や電話応対等の作業に追われていた。刑事・生活安全課に所属する浅野健次郎もその一人であり、机にて書類整理をしている最中なのであった。浅野の座る机の上は沢山の書類で埋め尽くされており、浅野はやや気だるそうな仕草をしながら整理をしている。すると、丁度一つのファイル整理が終わったところで浅野の

携帯が鳴り響くのであった。

浅野は一旦、作業を中断すると携帯のディスプレイを確認する。それから電話にでた。

「もしもし」

「兄さんかいッ？」

携帯の向こうからは、やや焦った様子の男の声が聞こえてきた。

その様子を怪訝に思った浅野は眉根を寄せ問い掛ける。

「ああ、俺だ。どうした、何かあったのか？」

「兄さん！ 昨日から息子の様子がおかしいんだよ。何かに脅えたように震えてさッ！ 時々、訳の分からない事を呟いて暴れるし、それからそれから……」

電話を掛けてきた男は気が動転しているのか、一気に捲くし立てる様に話し出す。

「ちよ、ちよつと待ってくれ。少し落ち着くんだ。いきなりそんな風に話されたところで、何も分からんぞ」

事情の分からない浅野は相手に落ち着くよう諭すのだった。

それを聞いた男は、暫く間を空けてから話を始める。

「す、すまない兄さん。俺も気が動転してた」

「いや、構わん。それで一体何があつたんだ？」

「実は、昨日の夜からなんだが、息子の様子が変なんだ」

「変？ どんな風にだ」

と、そこで浅野は自分も落ち着くために、タバコをポケットから取り出すと火をつける。

「昨日の晩は、何時もより少し怒りっぽいというだけだったんだが、今朝になってからは何かに脅えたように部屋の隅っこで震えているんだよ。おまけに家族の顔を見るなり、訳の分からない事を言いながら怒り狂ったように暴れるんだ。こんな事初めてだよ。それで兄さんに連絡したのは、息子が変な薬とかに手を出したんじゃないかと思っただけなんだ。ど、どうすればいいんだ……兄さん？」

今話を聞き終えた浅野は、室内の壁に掛けられた丸い時計を眺

める。時刻は9時半を回ったところである。

浅野は時計を確認すると言った。

「お前の息子は高校生だったよな。ここ最近、何か様子がおかしかった事はないか？ 例えば妙な連中とつるむ様になったとか、帰りがやたら遅くなる様になったとか。まあそんな事を言い出したらきりがないが……どうなんだ？」

「それが至って普通なんだよ。今までと何も変わらない。それに今の時期は、来年のセンター試験に向けての受験勉強で忙しい筈だから、息子がそんな事をしている訳がないよ」

浅野は男の話に耳を傾けながらタバコの白い煙を口から勢い良く放出すると、短くなつたタバコを灰皿に押し付けて火を消す。首を左右に振ってコキツコキツと鳴らした後、小さな溜息を吐いて言うのだった。

「フウ……分かった。とりあえず、今からお前の家に向かうよ。それまで息子をちゃんと見張っていてくれ、いいな？」

「ああ、分かった。すまない、兄さん。突然、こんな事で電話してさ」

「それは気にするな。一応、生活安全課の仕事でもありそうだからな。それじゃ今から出るから、大体20分後くらいには着くだろう。待っていてくれ」

浅野はそこで携帯を切ると席を立ち上がる。

そして、斜め前の机に座っている小島に向かい口を開いた。

「小島、ちよつと出てくるわ」

「ン、何かあつたんですか？」と、やや怪訝な表情で小島は言う。

「ああ、ちよつと親戚の坊主が面倒な事になつていらしいんでな」
浅野はやや溜息混じりに言うと、小島は同情する様な眼差しを向ける。

「そうなのですか、分かりました。気をつけてお出かけ下さい」

「すまんな、暫く留守番を頼むわ」

小島にそう告げると、浅野はやや足早に葦原警察署を後にするの

であった。

今の時刻は夜の9時。俺は今、自分の部屋で霊符作りに励んでいるところだ。

コタツの台の上には術式を描いたばかりの霊符が7枚並んでおり、今、乾かしているところである。まだかなり瑞々しい墨の色をしているので乾くには暫く時間がかかりそうな感じだ。

俺はとりあえず、次に描く符の段取りをすると斜め前に視線を移す。其処には鬼一爺さんが宙に浮かんでおり、今はテレビを観賞している真つ最中であった。

因みに今の時間帯は良く分からんバラエティー番組がやっており、爺さんはそれを見ている。時代劇やニュースにはまったかと思えば、今度はバラエティー番組だ。良く分からん爺さんである。その内、旅番組や健康番組も見るとなるとな気がする。

そんな事を考えつつも、俺は鬼一爺さんに向かい言う。

「オイ、爺さん。一応、言われた通りに描いたけど、これでいいのかどうか確認してくれ」

(ン、終わったかの。どれどれ)

鬼一爺さんは俺の言葉を聞き此方に振り向くと、描かれたばかりの符を一つ一つジックリと確認していく。

そして、それらを念入りに確認し終わると笑顔で言うのだった。

(フム。間違いは無いぞい。それと涼一、覚えておくのじゃ。この7枚の符を用いる事によって浄化の炎を大きく進化させ、不浄を焼き尽くす火界術・朱雀すずくの法となるのじゃからの)

「エッこの符がそうなの？」と、俺は目を見開く。

(……そういえば、言い忘れとったわい。すまんの。なにせ、複雑な術式の符が7枚もあるものじゃから、涼一にどうやって術式を覚えさせるかでも悩んでたのじゃ。そこまで気がまわらんかったわい。フオフオフオ)

と、鬼一爺さんは額に手を当てる仕草をしながら言った。

絵的には『あ痛ー』といった感じである。

「八八八ツ、いいよ別に。火界術・朱雀の法か……。そういえば朱雀って四神とか呼ばれるものの一つだったっけか」

俺は腕を組み天井を見上げると、記憶を思い返しながらそう呟く。
（そうなんじゃが、五行の解釈では四神というよりも天の方角を司る五霊獣の一つじゃ。五霊獣全てを方角に当て嵌めると、東の青竜・南の朱雀・西の白虎・北の玄武、そして中央の黄龍といった感じじゃな）

「へえ、なるほどね。ところで、なんで朱雀なんて名前が術についてるんだ？ 朱雀って鳥だよな」

俺がそう尋ねると鬼一爺さんはキョトンとした顔をする。

そして、大きく笑いながら言うのだった。

（フオフオフオフオフオ。お主、中々面白いことを聞くの。フオフオフオ）

「何だよ、その馬鹿にしたような笑いはッ」

俺はジジイの笑い方を見た瞬間、妙にムカついたのでそう言うてやった。

（いや、すまんの。悪気はないんじゃが、初めてそんな事を聞かれたもんじゃからの。許せ）

「で、なんで朱雀なんて名前がついてるんだ？」

と俺は慥然とした表情で爺さんにもう一度問い掛ける。

（おお、そうじゃったな。それで由来じゃが、術を放った時に燃え広がる炎の形が、鳥が羽を広げて飛ぶように見えるからそう名付けられただけじゃよ。別に深い理がある訳ではない。それに朱雀とは別名、火の鳥とも呼ばれておるからの。まあそんなところじゃわい）
「フウン、なるほどねえ」と俺は顎に手を当て言っつ。

（この術を使える様になれば、お主が悪霊達に襲われても遅れを取る事はそうそうない筈じゃ。精進するんじゃな、涼一）

「ああ、勿論、努力するよ。俺も死にたくないからね。でも疲れた

から、今はとりあえず小休止だ」

俺はそう答えると大きく伸びをして、後ろに勢いよく寝転がる。そして、大の字になった

と、その時。机の上で充電していた携帯から軽快なルパン3世のテーマが流れてきた。

俺は「誰だ一体？」と、小さく呟きながら机に移動すると携帯のディスプレイを確認する。

すると、浅野さんからであった。

なんだろう、一体？ と、やや首を傾げつつも俺は電話にでる。

「もしもし」

「オウツ涼一か？ 久しぶりだなッ。元気にしてたか」

電話にでると、以前、霧守高原で会ったときと変わらずに威勢の良い声が聞こえてくる。

俺はやや懐かしく思いながら返事をした。

「浅野さんも元気そうですね。ハハハ」

「ガハハハッ、まあな。ところで、今、電話は大丈夫か？」

「はい、大丈夫ですよ」

「そうか。それで話は変わるんだが……。明後日の日曜日、お前は何か予定があるのか？」

そこで浅野さんはやや固い声になり聞いてくる。

「日曜日ですか、ちょっと待って下さい」

何かあったのだろうか？ と若干気になったが、今週の練習予定を調べる為に、俺は西田さんから貰った予定表を机の引き出しから取り出した。

そして、予定表を広げると浅野さんに言う。

「ウーン。その日は一応、サークルの練習日になってますねえ。ところで、何かあったのですか？」

俺の問い掛けに少し間を空けてから浅野さんは話し始める。

「ああ、少し奇妙な事があったな……。俺では手に負えんだ」

「奇妙な事……ですか」

「まあ電話で長々と話すのもなんだから手短に言う。俺の弟に大学受験を控えた高校生の息子がいるんだが、その息子の様子がちょっと、嫌、だいぶおかしいんだわ。何かに取り憑かれた様に呻いていてさ。まるで別人の様だったよ。まあ、それでお前の所に電話したってわけだ」

「取り憑かれたツ？」

俺は思わず大きな声を上げる。

すると、鬼一爺さんも今の『取り憑かれた』という言葉に反応して、俺の近くに寄ってきた。

と、そこで浅野さんは言う。

「ああ、何て言うか……。昔見たエクソシストとか言う映画に似ている、と言った方が良いかも知れん。涼一が知ってるかどうかは分からんがな」

「アツその映画見た事ありますよ。悪魔祓いのやつですよ」

俺はそう答えると、以前、TUT YAでレンタルしたのを思い返す。

確か、カラス神父というのがこの映画に於いて重要な部分にいたのを覚えている。でも最後がイマイチ良く分からん映画であった。

「おお、知ってるかツ。要するにあんな感じだ。で、日曜日は無理そうか？ 出来れば涼一と爺さんに見て貰いたいんだが」

「ウーン。まあとりあえず、ちゃんとした理由さえ言えば、サークルの方は大丈夫だとは思うんですけど……」

俺はこの返事をする時に、当然、姫会長の鬼の様な形相が頭を過ぎった。それと同時に背筋に何か走る物があったのは言うまでもない。

だが、ちゃんとした理由さえ言えば大丈夫の筈だ。姫会長もそこまで極悪な夜叉ではない。筋が通ってさえいれば何も言わないだろう。しかし、そうでなかった場合……俺はムンクの『叫び』という絵画と同じポーズをとる事になるのは疑いようの無い事なのであった。

そんな最悪の状況を想定していると、浅野さんは懇願する様に俺に頼み込んでくる。

「そ、そうか。なら頼む。俺も日曜しか空気が無いんだよ。それに年末まで色々忙しいからな」

俺は目を閉じて少し考えたと浅野さんに言った。

「分かりました。とりあえず、サークルの方は何か理由をつけて休むようにします」

「悪いッ、涼一。仕事が終わったら、美味しい物を沢山食わしてやるからな。ガハハハッ」

浅野さんは俺の返事を聞いて気が楽になったのか、以前の豪快な口調に戻っていた。

「それじゃあ今から期待しておきます。ハハハ」

俺も浅野さんに釣られて笑い始める。

ついでに『何を食わしてくれるんだろう?』と少しテンションも上がった。

そして、やや陽気な声色で浅野さんは言う。

「オウツ、期待しとけッ。それじゃ、日曜にお前のアパートまで迎えに行くよ。多分、朝10時前には着く筈だ」

「はい、了解しました。その日は、直ぐ出れる様に準備しておきますよ」

「それじゃ日曜日になッ」

と、浅野さんはそこで携帯を切った。

俺は今の話を暫く頭の中で整理すると鬼一爺さんに向かい言う。

「爺さん。今の電話は浅野さんからなんだけど憶えてるか?」

（おお、土蜘蛛の時の御仁じゃな。憶えておるぞい。で、何があったのじゃ?）

爺さんは先程から話の内容が気になっていたのか、早速聞いてきた。

「実は、浅野さんの親戚の息子が何かに取り憑かれたらしいんだよ。電話だったから詳しいところまでは分からないけどね。ただ、浅野

さんの話す感じじゃ、かなり異様な事になっているようだ。少なくとも俺はそう感じたよ」

(憑き物か……面倒じゃな。涼一、憑き物を落とすには、それなりの準備をせねば成らぬ。霊力を直接使つて力押しで抜くと、憑かれた本体の魂まで弱らせてしまうからの)

鬼一爺さんは俺の話の話を聞くと眉間に皺を寄せてそう告げる。その表情を見る限りでは、かなり面倒そうな印象を受けた。

俺は爺さんの説明を聞き不安になってきたので、すぐさま問い掛ける。

「えっ憑き物って面倒なの？」と。

(まあもう。一旦、身体に悪霊が入り込んでしまつと出すのは大変なんじゃよ。兎も角、用意せねば成らぬ物を今から言う。それを書き記すのじゃ。それらを調達せねば成らぬからの)

「オ、オウツ、分かつた」

俺は返事すると、メモ用紙を机の引き出しから取り出す。

そして、鬼一爺さんの言う準備する物を一つ一つ書き記してゆくのであった。

式拾七ノ巻

《 式拾七ノ巻 》 憑き物落とし

今日は12月15日 日曜日。浅野さんと憑き物落としの約束をした日である。という訳で、俺は今、浅野さんの運転するパジェロに乗ってG県 葦原市へと向かっている最中だ。

助手席に座った俺は窓から外を眺める。空は雨雲が覆っており、^{みぞれ}霏混じりの小雨が降っている。その為、今日は非常に気温が低く寒い。その光景を見た俺は、朝6時に見たテレビの天気予報で雪だるまのマークがついていたのを思い出す。と、同時にブルツと震えるのだった。気分的に……。

まあそういった気象条件もあり、俺は黒いフード付きの分厚いコートにジーンズといった厚着の服装している。だが、車内は暖房が隅々まで行き渡っているの、そんな事を忘れさせるくらいに暖かい。その為、俺は外の寒さなどは直ぐにどうでもよくなり『フアアア』と欠伸をするのだった。

欠伸で出てきた涙を拭いながら俺は車の内装に目を向ける。以前、^{つちくも}土蜘蛛退治の折に聞いた浅野さんの話では、この車は購入してから1年経ってないそうだ。そんな理由から、運転席側にある速度パネルやナビゲーションシステム等は、鮮やかな色艶で光り輝いているのであった。

運転席には上下紺色のジャージ姿をした浅野さんがおり、ハンドルを握っている。以前と変わらずに豪快な雰囲気は健在で、時折、場を和ませるかのような冗談を言ってきたりする。

また、鬼一爺さんも気兼ねなく話せる相手という事もあり、車内は中々に愉快的な雰囲気となっているのであった。

そんな車内を見回した俺はもう一度、口を大きく開いて欠伸をす

る。

すると、後ろの席から俺に話しかける人物がいた。

「日比野さん。今すっごい欠伸してましたけど、眠いんですか？」

そう……今日の除霊アシスタント、瑞希ちゃんである。

俺は瑞希ちゃんの座る後ろの座席に視線を向ける。今日の瑞希ちゃんは茶色のトレンチコートっぽい物を着ており、首には青いマフラーを巻くという格好をしている。サイドに可愛らしく纏めた髪は今日も健在だ。

何故、此処に瑞希ちゃんがいるのかというと、話は昨日の昼過ぎに遡る事になる

昨日、俺は昼飯を食べて暫くすると、鬼一爺さんに言われた物を揃える為にショッピングセンターに足を運んだ。用意するよう言われた物の中に、もち米と小豆と塩、それと藁縄わらなわというのがあった為である。

そして、それらを購入していた時にバツタリ瑞希ちゃんと出会ったのだった。

因みに、その時の瑞希ちゃんは体操着の上からコートを着るという姿をしており、どうやら部活の帰りだったようである。

瑞希ちゃんは俺の買った物を見るなり、こう聞いてきた。

「赤飯でも作るんですか？」と。

確かにもち米と小豆で連想する物はそれしかないだろう。誰だっ
てそう思う。

だが、そこで俺は迂闊にも口を滑らせてしまうのだった。

「いや、違うんだ。実はある人から悪霊祓いを頼まれたから、それに必要な物を揃えに来たんだよ」

今まで気兼ねなくオカルトに関わる事を話していた所為か、俺は自然にそう答えていた。

そして瑞希ちゃんは驚きながら言うのであった。

「エエ、あ、悪霊祓い！ 何をするんですか？ 気になります。私にも教えて下さい」と。

俺は言った後に『しまったア』と心の中で呟いたが、時既に遅く、洗いざらい今までの経緯を説明する羽目になったのであった

まあ、そんな訳で現在に至るといふ訳だ。

浅野さんには一応、俺の事情を知る一人だと説明してはあ。が、瑞希ちゃんを見た浅野さんは俺に一瞬不審な目を向けてきたのが気になった。俺がイケナイ事をしていていると思っただのかも知れない。まあ、確かに妹じゃないなら、普通そう思うはずだ。後で瑞希ちゃんが居ない時に浅野さんの誤解を解いておこう。□ コンの変態野郎と思われるのは俺も困る。

そんな事を考えながらも、瑞希ちゃんの問い掛けに答える。

「ああ、ちよつとね。昨日、夜遅くまで爺さんから言われた物を揃えたり作ったりしてたからね。フワアアア」

と答えた後に、また俺は大きく欠伸をした。

そこで浅野さんが豪快に笑いながら話しかけてくる。

「ガハハハッ、すまん、涼一。睡眠時間まで削らせちまって。事が済んだら、とびっきりの美味いもんを食わしてやるからな」

「ハハハ、今日はそれも楽しみに来たんですよ」

「しかし、なんだな。涼一がこの子を連れてきた時はビックリしたぜ。不純異性交遊してたのかと思っただよ。ガハハハッ」

浅野さんは大きな声でそんな事を言うので、俺は慌てて抗議した。

「ちよ、ちよつと、一体何を言うんですか？俺らはそんな関係じゃないつすよ。ねえ、瑞希ちゃん」

俺は浅野さんにそう告げると、瑞希ちゃんに視線を向け同意を求めた。

すると、今の浅野さんの言葉が恥ずかしかつたのか、瑞希ちゃんは顔を真っ赤にしながら無言で俯くのだった。

それを見た俺は、すかさず浅野さんに言う。

「浅野さんがそんな事を言うから、瑞希ちゃんも困ってるじゃないですか」

「すまんすまん。お譲ちゃんもすまないな。冗談で言ったただけだよ。

ガハハハ」

「い、いえ。べ、別に何とも思つてませんよ」

瑞希ちゃんの声が上ずりながら、頬を赤く染め恥ずかしそうに答える。

そして俺達がそんなやりとりをしていた、丁度その時。鬼一爺さんが話を割ってきた。

（話し込んでるところすまんが、一つ聞きたい事があるのじゃ。浅野殿、取り憑かれた者は何時からその様な状態なのじゃ？）

「ン？ ああ、そうだった。それを言つてなかつたな。様子がおかしくなったのは三日前の木曜の晩からだそうだ。まあ、最初は怒りっぱいだけだったそうだが……他に変わったところは無かつたそうだ」

（フム、三日前か……）

鬼一爺さんはそれだけ言うつと腕を組んで考え込む仕草をする。

「爺さん。どうしたんだ？ 難しい顔をして」と俺。

（そうなった原因が分からのじゃ。まあ、兎も角、そこに行けば原因も見えてくるじゃろ）

「確かに……。多分、三日前に何かがあつたんだろつね」

何事にも原因と結果が付き纏つてくる。

俺は色々と考えてみるが、憑き物という現象自体がどういったメカニズムでなっているのか分からない。

しかし、気になる事ではあるので、俺は目的地向へ着くまで皆と談笑をしながらも頭の片隅で色々と考えてるのだった。

それから約30分後。

俺達はG県葦原市にある目的の家に到着した。

2×4工法で建てたと思われる、全体的に黄色っぽいアメリカチツクな家で、竣工してからまだそれほど経つてない様に見える。家の正面右側には、ちょっとした庭があり芝生や木々が確認出来る。犬を飼っているのか、庭の片隅には茶色い犬小屋も置かれていた。

俺は家の周辺も見回す。この辺りは新興住宅地のようで、周囲には真新しい現代建築の家が沢山建ち並んでいた。中にはまだ建設途中の家もあり、仮設足場で四方を覆われているものも目に飛び込んできく。また、道路や標識なども非常に新しいので、何処と無く、映画とかに使われる作り物のセットの様な感じがする所なのであった。

そんな風に周囲を見回していると浅野さんが俺に言う。

「涼一、それじゃあ着いて来てくれ。一応、弟にはこういった事に慣れた人間を連れてくる、と言ってはあるからな。それと、今回の事を他言しないようにとも言つてあるから安心しろ」

「そうなんですか？ それを聞いて安心しました」

俺はそれを聞き、笑顔を浮かべる。

そして鬼一爺さんを見た。宙に浮いた爺さんは睨みつけるような表情で2階の窓を眺めている。

恐らく、其処に憑かれた息子さんが居るのかも知れない。

そんな事を考えていると、瑞希ちゃんが俺に話し掛けてきた。

「日比野さん。荷物を持ちますよ。その方が助手っぽいですもんね」
瑞希ちゃんは、一応俺の助手という形で来て貰うことにしたので気を使つてくれてるようだ。

「そうだね。それじゃあ、靴をお願いするよ」

それもそうだなと思つた俺は、今回の除霊で使う術具が入った鞆を瑞希ちゃんに渡す。

そして浅野さんの後ろから俺と瑞希ちゃんはついてゆくのだつた。浅野さんは真っ白い扉が特徴の玄関に着くと、壁に取り付けられた呼び鈴のボタンを押す。

すると、浅野さんくらいの年齢と思われるオジサンがガチャリと扉を開いて現れた。恐らくこの人が浅野さんの弟なのだろう。

眼鏡をかけた人で、黒い服と青いジーンズといった格好をしていた。浅野さんの弟の様だが、あまり似てない。何故ならば、背も弟さんの方が高いし、人相も柔らかい感じであり、また、頭髪は7：

3分けに近いからだ。その見た目は『本当に兄弟か?』と疑ってしまつくらいに似てないのであつた。

そんなオジサンは浅野さんと俺達を見るなり口を開いた。

「おお、兄さん。待つてたよ。その若い子が一昨日電話で言つていた人かい?」

「そつだ。こついつた事に慣れた奴だ。それより、あれから息子の様子はどうか?」

「それが……。酷くなつてゐるんだよ。家族が部屋に入ろうとする」と威嚇をしてくるんだ。今じゃ部屋にも入れないよ」

オジサンは、俯き加減に首を左右に振ると元氣なくそう呟いた。

この様子を見るだけでも異様な状況なのだと言ひ想像できる。

そこで俺はとりあえず簡単に自己紹介をする事にした。

「こんにちは。日比野といいます」と言つた後にオジサンに向かい頭を下げる。

俺が頭を下げると瑞希ちゃんもそれに続いて頭を下げた。

そんな俺達を見たオジサンも丁寧に一礼をすると、早速中へと俺達を招き入れるのだった。

「兄がいつもお世話になつております。そして、今日は息子を何卒宜しく願ひします。さあ、それでは上がつてください」

家の中に入った俺達は玄関の近くにある階段を上ると、二階の一番奥にある茶色い扉の前に案内された。

オジサンは扉の前で立ち止まると俺達に振り返り言う。

「ここが、息子の部屋です。今も中にいます。そして、部屋に入つてくる者を威嚇しますので、入室する際はお氣をつけ下さい」

オジサンはそれだけ言うつと廊下の端に移動する。その後、『どうぞ』というジェスチャーを俺に向かつてするのであつた。

それに従い扉の前に行くと、一旦、大きく深呼吸を一回だけしてから俺はノブに手を掛ける。そして、扉をゆつくりと手前に開く。すると、やや暗い室内が俺の視界に入つてきた。

電灯は点いてない。また、窓に掛けられたカーテンが外の光を遮

っている。

そんな暗い室内をゆっくりと俺は前に進む。

と、その時！

此の世の者とは思えないほどの奇声が俺に向かい発せられるのであった。

【ヴァレヴァアアアガウエリエエ】

俺は身構えながら声の聞こえる方向を確認する。

すると、入って左の壁際にあるベッドの上に、体操座りで震える人物がいるのであった。が、暗いので良く分からない。

その為、俺は入口の壁際にある電灯のスイッチと思われるものを押した。パアツと室内が明るく照らし出され部屋模様が明らかになる。

部屋の大きさは大体6畳程の広さで小さな液晶テレビや本棚、机等が置かれており、机の上にはノートやテキストの類が広げられている。まあ至って普通の学生の部屋である。

だが、室内の様子を2秒ほど見たところで、体操座りをしていた人物は四つん這いになって俺に威嚇をしてくるのだった。

【シャアアア】

息子さんは完全に目が逝っている。口を大きく開き、猫の様な威嚇をするのである。その威嚇をする姿は黒いジャージを上下に着ている所為か、大きな黒猫の様だ。また、髪は逆立ち、顔色は青白く、目の下にはクマが出来ている。その為、とても不健康そうな感じの顔付きなのであった。

俺はその様子を見るなり、もしかして取り憑かれたのは動物霊？などと考える。

だが、今にも飛び掛ってきそうな雰囲気である為、俺は前もって用意していた魔除けの符を手に取ると、符の力を解放するのだった。

【ヒイイイ】

その瞬間、息子さんは符から出てくるやや強めの霊波に脅えて後ずさる。

そして、符の効果を確認した俺は4枚の魔除けの符を4方の壁面に貼り付けてゆくのだった。

魔除けの符から発せられる霊波の影響で、息子さんは部屋の中央付近で脅えた様に蹲り小さく奇声を上げている。

俺は4枚貼り終えたところで鬼一爺さんに向かい小声で言った。因みに鬼一爺さんは霊圧を下げているのでオジサンには見えていない。

「爺さん。とりあえず、言われた通りにしたぞ」

(よし、では持ってきた藁縄で結界を作るのじゃ)

「了解。瑞希ちゃん、鞆を此処に」

俺は部屋の外にいる瑞希ちゃんを呼ぶ。すると無言で恐る恐る俺の傍へとやって来た。

その表情は少々緊張気味のようである。

「はい、日比野さん。あのお……私に何か出来る事はありませんか？」

瑞希ちゃんは鞆を俺に渡すと、真剣な表情でそう言ってきた。助手という事で色々と気を使っているのだろう。

しかし、本当に肝の据わった子だ。この状況を見ても正気を保つてられるとは恐れ入った。俺なら即座に後ろへ下がる場所である。そんな事が一瞬頭を過ぎったが今は除霊最中である。

俺は直ぐに意識を戻すと瑞希ちゃんに向かい言った。

「じゃあ結界を張るのを手伝ってくれるかい。それと念の為にこれを持っていてね」

そう返事すると瑞希ちゃんに魔除けの符を渡した。一応、用心の為である。

俺は鞆の中から藁縄を取り出す。勿論、この藁縄には霊力を通しやすいように細工が施してある。

そして、その藁縄を使い鬼一爺さんの指示の元、息子さんを中心に円を描いてゆくのだった。

円を描いた後、今度は縄自体に俺の霊力を籠める。すると、白い

光が縄を伝い光の輪を形成した。これで結界は完成である。

【ヒヤアアアアア】

結界を張り終えたと同時に息子さんは目を引ん剥いて奇怪な声を上げた。結界が放つ霊波が悪霊を脅えさせているからだ。

「キヤッ」

瑞希ちゃんは今の息子さんの声が怖かったのか、俺の後ろに回るとギョッと服の裾を掴む。

「瑞希ちゃん。結界張ったから大丈夫だとは思うけど、もしかして事もあるから、一旦、外に出ていてくれるかい」

俺はそんな瑞希ちゃんの頭を優しく撫でると部屋の外に出るよう促した。

「い、いえ。だ、大丈夫です」

やや震えながらも瑞希ちゃんは真剣にそう答える。

怖いながらも俺の手伝いをしようとする健気なその姿に俺は思わず感動した。が、言っても聞かないような気もしたので俺は忠告だけする事にした。

「それじゃ、危ないから俺の後ろにいてね」と。

瑞希ちゃんはコクリと頷く。

だがそこで、鬼一爺さんは眉根を吊り上げる表情で言うのだった。

(涼一、どうやらこの者に憑いておるのはその辺の悪霊とは違うぞい。長い年月をかけて蓄積された禍々しい怒りの波動を感じる。この様な霊は負の地脈が通る箇所か、もしくは、依り代が無いと存在が出来ぬ筈じゃ)

「この場所には負の地脈なんて通ってないからなあ……。となると、依り代という事が」

霊波に脅えながら奇声を発する息子さんを眺めながら、俺は顎に手をあてそう呟く。

(何を依り代としておったのか分からぬが、そういう事じゃな)

「で、除霊はどうするんだ？」

(ムウ……こりゃ、参ったわい。他の依り代が無ければ出て行かぬ

ぞ、この類の霊は……。このままじゃとこの者の魂も危ないしの。弱ったのお」と鬼一爺さんは渋い表情で言う。

それを聞き「エッ、マジかよッ」と言いながら俺は頭を抱えるのだった。

だが、コイツの入っていた元の依り代がある筈だ、と思い直し鬼一爺さんに言った。

「爺さん、コイツが元いた依り代があれば問題ないのか？」

（そうじゃ。とりあえずはそれを探るのが近道かもしれんのか）

爺さんの言葉を聞いた俺は大きく息を吐くと、とりあえず、この室内を調べる事にした。

机の上や本棚、そしてベッドを順に確認してゆくが、特にこれとっておかしな物は目に入らない。

一通り確認を終えた俺は埒が明かない為、部屋の外にいるオジサンに聞いてみる事にしたのだった。

俺は部屋の入口に視線を向ける。

オジサンと浅野さんは緊張した面持ちであり、結界内で脅える息子さんを唯ジツと見守っていた。

そんな二人の所に俺は移動すると、オジサンに向かい口を開いた。

「あの、お聞きしたい事があるのですが……」

「は、はい。なんでしよう？」

と、やや慌てた様な仕草でオジサンは返事する。

「息子さんの容態がおかしくなり始めたのが三日前からだとお聞きしましたが、どんな小さな事でも結構ですので、その日の前後くらいに何か変わった事がありましたら教えて貰えませんでしょうか？結論から言いますと、息子さんに取り憑いた霊は元々何かの依り代に宿っていた霊なんです。恐らく、その依り代と息子さんは何処かで接触している筈なので、それが知りたいのです」

「よ、依り代？ ですか……」

俺の問い掛けにオジサンは暫く考える。上を向いたり目を閉じた

りしながらオジサンは考えるがイマイチ良く思い出せないようである。

そして、やや気まずい表情でオジサンは答えるのであった。

「すいません。私では良く思い出せません。家内にも聞いてみませんで、少し待っててもらえますか」

オジサンはそう答えると、小走りで1階へと降りていった。

そこで浅野さんが俺に話し掛けてくる。

「涼一、どんな感じだ？ 治せそうか」

「それが、息子さんに憑いている霊が特殊なものなので困ってるんですよ。憑いた霊が元々宿っていた依り代がある筈なんで、それが見つければ大丈夫だと思います」

「依り代ねえ……」と部屋を覗きながら言う。

「お爺さん。代わりに依り代を用意しようと思うと難しいのですか？」と瑞希ちゃん。

瑞希ちゃんの問い掛けに爺さんは霊圧を若干上げ、声だけ聞こえる状態で話し始めた。

（それがのう、悪霊と一口に言えども色々あるのじゃよ。そう簡単にはいかんのじゃ。そういった意味では、憑かれたこの者は運が悪いと言えぬ。この悪霊が好む魂の波長をしたのじゃからの）

「おおうつ、声だけバージョンもあるのか」

浅野さんは突然爺さんの声が聞こえたので驚きつつもそう答える。

「はあ、予想以上に厄介やなあ」

俺が溜息を吐きながら呟いたところで、階段を上ってくる複数の足音が聞こえてきた。俺は階段の降り口へ視線を向ける。

すると階段からはオジサンと共に一人の女性が現れて俺達の前にやってきたのだった。

ややウェーブがかった長い髪の女性で、歳の頃はオジサンとほぼ同じだろう。どうやら奥さんを連れてきたようだ。

また、台所作業をしていたのか、その人はエプロンを身に着けて

いた。ただ、息子さんがこんな状態なので、その女性からは暗いオラを纏っている様に俺には見えるのだった。

オジサンは俺の前に来たところで口を開いた。

「日比野君、さっきの話を家内にしたら思い当たる事があるそうなんだ」

「本当ですかッ。それで、どんな事なんでしょうか？」

やや身を乗り出すような仕草で俺は尋ねる。

「さあ、さっきの事を話してくれないか」

オジサンは奥さんに話を振ると、奥さんは小さく頷き、ゆっくりとした口調で話し始める。

「実は4日前の話なのですが、私の実家からある仏像を譲り受けたのです……」

「仏像……ですか？」

「はい。実は私の父がこの夏に他界をしまして、父の遺品を整理していた兄がその仏像を見つけて私の元に送り届けてくれたのです。息子が大学受験控えていると言う事を兄も知っておりまして、御利益がある様にと気を使ってくれたのだと思います。結構、古くて立派な物でしたので……」

これは怪しい。物凄く怪しい。

そんな事を考えながら俺は更に尋ねる。

「その仏像は今何処に？」

「仏像は今、リビングの片隅に木箱に入ったまま置かれています」

俺はそこで鬼一爺さんに目配せをする。

鬼一爺さんは無言で頷く。

「その仏像を見せてもらえますか？」

「はい、では付いて来て下さい」

と言った後、奥さんは俺達を1階のリビングへ案内するのだった。階段を降りて直ぐの所にある、10畳程の広さのリビングに案内された俺達は、問題の木箱の所へと向かう。

仏像の入った木箱は長さ30cm程の細長い箱であった。見た目

もかなり古く、所々に細かい傷やシミが付いている。

だが、中を開けるまでも無く、俺には何となく分かるのだった。上にいる悪霊と同じ波長を持つ残りカスの様な物がこの木箱から僅かに発せられているのを……。

俺は宙に浮かぶ鬼一爺さんと目を見合す。爺さんは大きく頷くと上を指差した。どうやらビンゴのようだ。

そこで俺は奥さんに確認をする。

「この木箱を2階に持って上がっても良いですか？」

「はい、どうぞ。構いませんわ」

奥さんの返事を聞いた俺は、木箱を丁寧に抱きかかえると、早速2階へと移動する事にした。

息子さんの部屋に着いた俺は、木箱の中から一体の仏像を丁寧に取り出すと爺さんに小声で話しかける。

「爺さん、とりあえず仏像を出したけど、次に何をすればいいんだ？」

(次に昨晚作った被いの霊水を用意するのじゃ)

今、爺さんが言った被いの霊水とは、俺がもち米と小豆を煮込んで作った重湯に、日本酒を混ぜ合わせて作った妙な液体である。

小豆の赤い色と米から出てくる白い濁りが合わさって若干ピンク色に見える液体で、これの中には酒のほかに俺の血液が数滴垂らしており、おまけに俺の霊力入りである。

だが、この霊水は俺の霊力の波動が感じられない。恐らく、混ぜ合わせた物の何かが霊波を隠す役目をしているのだろう。今度暇があったら、どの成分に霊力反応が掻き消されるのか検証してみたいところではある。

まあそれはさて置き、その液体が鬼一爺さん曰く、憑き物落としの妙薬なんだそうだ。

「瑞希ちゃん、鞆を」

「はい、日比野さん」

俺は瑞希ちゃんから鞆を受け取ると、中からこの液体の入った5

00mlのペットボトルと100円ショップで売っていた小皿を取り出した。

と、そこで鬼一爺さんが言う。

（涼一、被いの霊水と持ってきた仏像を結界の中に入れるのだ）

鬼一爺さんの指示に従い、俺は被いの霊水を小皿に入れると仏像と共に結界の中にそっと置いた。

因みに息子さんは脅えつつも、俺が近づくなり【シャアアア】と猫の様に威嚇をしてくる。

やや哀れみの眼差しを息子さんに向けた俺は、鬼一爺さんに次にする事を尋ねた。

「爺さん。次は？」

しかし、鬼一爺さんは落ち着いた口調で不敵な笑みを浮かべると、意外な返答をしてくるのであった。

（フム。これで終わりじゃ。あの霊水はの、霊が好む物でもあり嫌う物でもあるのじゃ。まあみておれ……）

爺さんの言葉に首を傾げつつも俺は結界内に居る息子さんに目を向けた。瑞希ちゃんも俺の後ろから結界内を眺める。また、部屋の外にいるオジサン夫婦や浅野さんも固唾を呑んで見守っていた。

俺が霊水と仏像を置いてから5分程経った頃だろうか、息子さんが奇妙な行動を取り出した。クンクンとまるで犬や猫が匂いを嗅ぐ様に、徐々に被いの霊水が入った皿へと近づいて行くのである。そして皿の前に辿り着くと、暫く眺めた後にズズツツと霊水を啜り始めるのであった。

皿に盛った霊水を全て飲み干した息子さんは舌なめずりをする。

だが、その時！

息子さんに異変が起き始めた。

突然、両手で胸元を引つ掻く様な仕草をしながら息子さんが苦しみ始めたのである。

【ウウウウガアアア】

「「聡史ツ！」「」

その様子を見るなり、オジサン夫婦は焦った口調で息子さんの名前を叫んだ。

俺は慌てる二人を宥めるように言った。

「大丈夫です。息子さんが今啜ったのは霊力の籠められた袂いの霊水ですから。苦しんでいるのは息子さんではなく悪霊の方です」と。

「そ、そうですか」

俺の言葉を聞いたオジサンは若干落ち着きを取り戻すと、一旦、大きく息を吐いて我が子の様子を見守る。

それから暫くの間、息子さんは蹲りながら手足をバタつかせ苦しみ続ける。

そんな中、瑞希ちゃんが俺の背中越しに小声で聞いてきた。

「ひつ日比野さん。ほ、本当に大丈夫なんですか？」と。

瑞希ちゃんは息子さんの苦しむ様子が恐ろしく見えるのか、俺の腕にしがみ付いて震えながらそう聞いてきた。

「ああ、苦しんでいるのは悪霊の方だよ。心配しないで」

俺は震える瑞希ちゃんの頭を優しく撫で、穏やかな口調でそう告げる。すると震えも若干弱まり、大分落ち着いてきたようだ。

そして、悪霊が苦しみ出してから10分程経った頃に更なる異変が起きた。なんと、息子さんの身体から仄かに赤い光が出てきたからである。

赤い光を見たオジサン達は「なッ！」という息を飲むような言葉と共に目を見開く。当然だろう。誰だってこんな光景を見ればそうなる。

それから程なくして、赤い光は息子さんの体から煙が立ち上る様に出てくると、すぐさま、仏像の中へ逃げ込む様に入っていくのであった。

またそれと同時に、蹲る息子さんは電池が切れたみたいに身動き一つする事無くその場にうつ伏せになる。

そこで鬼一爺さんは俺に言う。

（今じゃ涼一ッ！ 仏像を箱に納めてその周囲に魔除けの符を貼る

のじゃ。急げッ！)

俺は爺さんの言葉を聞き、若干、焦りながらも仏像を元の木箱へと納める。そして、箱の全ての面に魔除けの符を貼り付けてゆくのであった。

(よし、これで一応、憑き物落としは終わりじゃ。後はこの仏像をどうするかじゃな)

「ああ、後はそれだよな『ウ、ウーン……ンン？』」

と俺が爺さんに答えたところで息子さんから声が聞こえてきた。

息子さんはユラリとした動作で上半身を起き上がらせると、寝惚けたような仕草をしながら周囲を見回す。

そして、俺と瑞希ちゃん顔を見るなり不審な表情で一言こつ咳いた。

「ん？……あんた達、誰？」と。

「「聡史ッ！」「」

オジサンとオバサンは、息子が正気に戻ったのを確認すると一気に傍へと駆け寄った。

息子さんは何がなんだか分からないのか、頭を掻きながら首を傾げて言う。

「ワッ！ な、なんだよ一体？ 父さんに母さん。二人ともどうしたんだよ急に……」

オジサンとオバサンは何も言わずに涙を流しながら息子を抱擁している。

息子さんはこの展開に付いていけないようで、やや引き攣った表情をしていた。無理もない。悪霊に憑かれていた時の記憶が無いのだから。

そんな涙ぐましい家族の姿を暫く見届けた俺は、浅野さんに向かい依頼達成の報告をした。

「浅野さん。これで完了です」

「のようだな。ところでその仏像はどうするんだ？」

浅野さんは木箱を指差しながら言う。

「そんなんですよねえ。このまま此処に置いておくのも不味いですが、やっぱり奥さんの実家に返却した方が良いんじゃないですかね」俺がそう呟いたところで息子さんと抱擁をしていたオジサンが此方にやって来た。

オジサンは丁寧な頭を下げると、俺の右手を両手で握りながら礼を言う。

「日比野君。本当にありがとう。君のお陰だよ」

「ハハハ、そ、それ程でも」

中々に凄まじい勢いでお礼を言ってきたので俺はビックリしつつもそう答えた。

「ガハハハッ、当たり前めえよ。なんたって、俺が唯一認めた拜み屋の類の人間だからな。ガハハハ」

と言った後に浅野さんは踏ん返り返って豪快に笑う。

そんな浅野さんを苦笑いしながら見た俺は、オジサンに今後の事を告げる。

「とりあえず、これで除霊は終わりです。それと、あの仏像は奥さんの実家に返した方が良いでしょう。此処に置いておくと、何時また息子さんに憑依するかわかりませんから。後、息子さん以外に憑依する事は無いと思いますので、その点は心配しないで下さい」

俺の進言を聞いたオジサンは魔除けの符が貼られた木箱を眺める。

そして、息子さんを抱擁する奥さんの所へと向かった。

二人は木箱を眺めながら色々話をしている。恐らく、実家に戻すかどうかの話をしているのだろう。

粗方、話も纏まったのかオジサンは俺の所にやって来ると、頭を掻きながら申し訳なさそうに言うのだった。

「日比野君……その、相談があるのだが」

「相談ですか？」

「そのお誠に申し訳ないのだが、日比野君の方で仏像を引き取って貰いたいんだよ」

「エエエッ！ お、俺がですか？」

思わず俺は大きな声を上げてしまう。

「流石に事情を知ってしまつと気味が悪いからね。お願いだ、引き取ってくれないだろうか？ 妻の父の遺品でもあるので無下にも出来ないからね」

俺は鬼一爺さんに視線を向ける。

すると爺さんは俺に言うのだった。

（フム。仕方が無いの、涼一。以前、お主に教えた送還の符術を使い保管しておくのじゃ）

鬼一爺さんの言葉を聞き『そう言えばそんな術があつたなあ』と考えた俺は、観念してオジサンをお願いを引き受ける事にした。

「分かりました。それでは僕が引き取りましょう。必要になつた時はまたご連絡下さい」

「ほ、本当かい。あ、ありがとう。日比野君には返す言葉も無いよ」と言つとオジサンはパアツと明るい笑顔になり俺に満面の笑顔で微笑むのであつた。

その後。

除霊を恙無く終わる事ができた俺達は浅野さんの車へと向かう。

その帰り際にオジサン夫婦から俺は一通の封筒を受け取つた。何か尋ねたら、今回のお礼だそうだ。

そんな物を貰おうなどと思つてなかつた俺はオジサンに一旦は封筒を返した。が、どうしても言うオジサン達の熱意と浅野さんの「貰つておけ」という進言もあつて、渋々受け取る事にしたのであつた。

後で中を覗いたら、ビックリするほどの金額が入つていた。俺にとっては大だが……。因みに、瑞希ちゃんにも後でこの中からバイト代を払わなければと思つたのは言うまでもない。

そして、俺達は浅野さんの案内でご馳走を頂く為に次の場所へと移動をするのであつた。

その車内での事である。

「しかし、流石だなあ涼一は。以前よりも大分腕を上げたんじゃないのか？」と浅野さん。

「はは、まだまだですよ。今回だって爺さんが居なければ解決はほぼ無理でした」

（フオフオフオ、そうじゃな。涼一にはまだまだ知らぬ事が沢山あるからの。毎日が精進じゃわい）

「ガハハハツ。師匠がそう言うんじゃ、しょうがねえか」

浅野さんが大きな声でそう答えたところで、俺は瑞希ちゃんを見る。

実は瑞希ちゃん、除霊が終わった辺りから口数が少なく、やや元気が無いのであった。

除霊現場が怖かったからなのかどうかは分からないが、心配だったので俺は瑞希ちゃんに声を掛けた。

「瑞希ちゃん。元気ない様だけど、大丈夫かい？」

俺の問い掛けに瑞希ちゃんはゆっくりと顔を向けると、目を潤ませて言う。

「日比野さん……。私も荷物を持つだけじゃなくて、日比野さんの力になれる様になりたいです」

「（エッ！？）」

瑞希ちゃんの言葉に爺さんを含めた俺達3人は思わずそう口にした。

俺は思わず我が耳を疑ってしまいそうであったが、とりあえず、確認の為に問いかける。

「ち、力になれる様になって、もしかして霊術を使える様になりたいって事？」

「はい」と、はっきりした声で瑞希ちゃんは返事した。

潤んだ瞳が俺をジッと見つめてくる。

どうしたもんかと俺は鬼一爺さんに視線を向けると、爺さんは笑いながら言うのだった。

(フオフオフオ、涼一が教えたらどうじゃ。靈力の扱いなら教えても構わぬぞい)

「エッ、俺がか？」

(そうじゃ。教える事から学ぶ事もあるのじゃ。やってみよ。フオフオフオ)

爺さんは簡単にそう答える。

恐らく、靈力の扱いくらいは教えても構わないという事なのだろうが……。俺自身がまだ術を習い始めてまだ4ヶ月経ってないのに、そりゃ無いだろう。

そんな事を考えながらチラツと瑞希ちゃんを見る。

すると瑞希ちゃんは俺の腕を掴み言った。

「お願いします。私、日比野さんの力になりたい」

「ガハハハッ、モテる男は辛いねえ」

俺と瑞希ちゃんのやりとりを見ていた浅野さんは、そこで豪快に笑いながら言った。

「ちょ、一体何を言うんですか、浅野さん。ねえ、瑞希ちゃ……」

浅野さんにそう言った後に瑞希ちゃんを見た俺は、その真剣な表情に思わず言葉を飲み込む。

そしてフウと軽く息を吐いた後に、渋々、返事をするのであった。「わ、分かったよ。それじゃあ、一応、瑞希ちゃんは俺の弟子一号という事で」

俺の言葉を聞き、瑞希ちゃんは目を輝かせ明るい表情になるとガツツポーズをしながら言う。

「ほ、本当ですか。私、頑張ります」と。

(フオフオフオ。まあこれも修行じゃ、涼一)

「ガハハハッ。それじゃあ、涼一とお嬢ちゃんの新しい門出を祝って、今日は俺が旨い物を沢山食わしてやるよ」

「なんか微妙な気分です……」

と、まあそんな訳で、俺に新しく弟子が誕生する事になったのであった。

貳拾八ノ巻

《 貳拾八ノ巻 》 思惑

12月24日

今日の高天智市内は気温がグッと下がっており、かなり冷え込む朝となっていた。しかし、雪が降り積もるような寒波は、まだこの地方にはやって来てない。その為、市内はいつもと変わらない様相をしている。

だが、積もらないとはいえ雪は時折降る事はある。今現在も、やや灰色がかつた上空からは、無数の白い雪がユラユラと静かに高天智市内に降り注いでいた。その雪の降る様は、白く小さな羽毛がフワリと舞い降りてくる様にも見える。また、そんな空模様の所為か、市内では人々が慌しい動きをしているにも拘らず、今日は非常にゆつくりとした時の流れを感じさせる日となっていた。

だが、こんな降り方では積雪するまでには至らず、地面に辿り着くなりスウと融けてゆく。そして、それらの消えゆく白い雪は、非常にもの悲しく儂い印象を見る者に与えているのであった。

そんな天候の中、朝から非常に忙しそうに人が出入りする大きな建物があった。高天智市の中心市街地に位置するF県立県民交流センターという名前の建物である。真っ白い外壁の四角い立派な鉄筋コンクリートの建造物で、玄関部分は駅前のようなロータリー構造となっている。また、建物の外には幾種類かの木々が植られて小さな林を形成しており、無機質な建物ばかりが見えるこの中心市街地に於いて、小さな自然が砂漠のオアシスの様に展開されているのであった。

今日の午後からこの県民交流センターでは、地元から選出された光民党代議士と、その応援に駆けつけた野党第一党の現光民党幹事

長である大沢伊知郎の講演が行われる予定となっている。来年は衆議院議員総選挙の年でもある為、各政党の間では既に来年を見据えた動きを精力的にしているのである。そういつた事もあり、多数の後援会関係者や光民党関係者達が慌しく出入りしているのであった。講演会場となる大ホールでは、今正にその準備に追われていた。学校の体育館を思わせる広さの大ホールでは、壇上の飾り付けや大量の机や椅子の運び込み、そして音響設備等の準備で沢山の人が忙しそうに動き回っている。

また、会場の外でも案内板の設置等に追われる人々の姿が見受けられ、中と外で慌しくなっているのであった。

そんな交流センター内のある一室に、今、十数名の男女がいた。12畳程の広さで、置いてある物も会議机とホワイトボードだけという質素な部屋である。

其処には道間親子の3人と土門長老と呼ばれる老人、その他十数名の人間があり、室内にいる人間は全員がスーツ姿であった。

また、壁面に置かれたホワイトボードには、この建物周辺の地図が貼り付けられており、地図には幾つかの赤い線が引かれ、所々の箇所に黒い印が描かれていた。

そして今、茶色い背広を着た土門長老はそのホワイトボードの横に立ち、皆に何かの説明をしている最中であり、此処に居る者たちは皆が真剣な表情で土門長老の話に耳を傾けているところなのであった。

「 という訳で、道間殿にはこのエリアの見張りをお願いしたいのじゃが、どうじゃろう。何か分からぬところがあれば言うてくれぬか?」

と、ややゆっくりとした口調で説明を終えた土門長老は一将に意見を求める。

「 いや、特にありませんな。土門長老の言う様に致しましょう。それに、地脈の通る真上にこの建物がありますので、それが一番良い配置でしょうな」

腕を組み背筋を伸ばした姿勢で椅子に座る一将は、ボード上の地図を見ながら土門長老にそう返事をする。

そして、隣に座る沙耶香と一樹に視線を移すと一将は二人に意見を求めた。

「お前達はどうだ？ 何か不満な点があれば今の内だぞ」

「あの……」

沙耶香はそこでやや控えめに言葉を発した。

皆の視線が沙耶香に向く。

一将は言う。

「ん？ どうした沙耶香。遠慮なく言ってみよ」

父の言葉を聞いた沙耶香はやや間を空けてから話し始める。

「はい、それでは。土門長老、その配置ですと地脈を使った呪殺には対応できませんが、それ以外の方法を敵がとってきた場合は難しいように思われます。その点はどうされるのでしょうか？」

沙耶香の問い掛けに土門長老は笑顔を浮かべると白い顎鬚を撫でながら答える。

「フム。確かに、この配置は地脈を使った呪殺に重きを置いた布陣となっておる。が、勿論、他の方法をとってくる可能性も考慮しておるし、その為の術者も少しは余剰人員としておる。まあ割合としては7：3くらいの人員配置じゃがの。じゃが、今までに亡くなつた3人の呪殺の手口は、全て地脈を使ったものじゃ。こうなると地脈が使われることを前提に作戦を組まねばならぬ。それに、今日、鎮守の森が用意できる人員は此処に居る者達だけじゃからの。それらを踏まえるとしても、この配置になつてしまふのじゃよ。まあこんなところかのう。どうじゃ、納得してくれたかの？」

沙耶香は今の説明を聞くと小さく頷き、そして言った。

「はい、分かりました。丁寧にご説明して頂きありがとうございます、どうぞいませ、土門長老」

「よいよい、ヒョヒョヒョ。道間殿の娘さんはまだ若いのに、中々よい観察眼をもってますな」

と土門長老は一将に笑顔で言う。

「ハハハ、ありがとうございます。だが、まだまだ未熟なところはございますので、これからも精進が必要ではありませんがな。さて、他には無いか？」

一将は土門長老に笑顔でそう返答すると、また二人に視線を向け尋ねる。

二人はお互いに顔を見合すと頷き「いえ、他は特にありません」と一樹が答えた。

その言葉を聞いた土門長老は深く頷くと皆を見渡してから厳かに言う。

「では、打ち合わせはこれにて終わりじゃ。大沢議員は午後1時半にこの交流センターに入る予定じゃと聞いておる。各々が役割を果たせば祝殺は必ずや防げる筈じゃ。それでは健闘を祈るッ」

土門長老の言葉を聞き、皆は立ち上がると各自が自分の持ち場へと移動する。

道間親子3人はホワイトボードに書かれた位置を最後にもう一度確認すると、見張りをするエリアへと移動をするのであった。

その道中、沙耶香は予てから気になつていた事を一将に尋ねる。

「お父様、この間お聞きした話は、やはり今でも教えては貰えないのでしょうか？」

「……大沢議員が何故今日狙われるのか？ という話か」

一将は沙耶香に視線を移さずに前を見つめたまま答える。

「はい」

「すまぬな、沙耶香。教える事は出来ぬのだ。お前も薄々気付いているかもしれないが、今回のこの事件は複雑な政治情勢が絡んでいる。拗つて、例え家族と言えども迂闊に話す事は出来んのだよ」

「やはり、そうなのですか……」

と沙耶香がやや弱々しく言ったところで、今度は一樹が父に言う。「父上。しかし、何も分からずに要人の周辺を警護すると言うのは、あまり気分の良いものではありません。私達にも少しくらいは教え

られる事はないのですか？」

一将は暫し考える。

そして大きく深呼吸をした後、二人に言うのだった。

「それでは一つだけ教えておこう。だが、その前にこれだけは守ってもらおう。今から言う事は他言はしてはならぬぞ」

一将の言葉に二人は視線を合わせ頷くと一樹が返事をする。

「分かりました。他言はしません」

「ウム、では話すでしょう。私もこの間の代表者が集まる幹部会議で知ったのだが、今の政府関係者の中に『鎮守の森』幹部の人間が数名居るのだよ。そして、此度の依頼はその方々からのものだ」

「そ、それは本当ですか？ 父上」

一樹はやや目を大きくさせながら父に言う。

「ああ、本当だ……。しかも、その政府関係者とは土御門の流れを汲む者達なのだ。だが、土御門宗家の土門長老は『鎮守の森』が時の権勢に近づくのを良しとは思っておらぬ。従って、土御門宗家の総意ではなく、その者達が独断でそう動いているという事だ」

「お父様、私もそう思います。鎮守の森は各々が伝えてきた霊術を持って、巷に蔓延る物の怪や悪霊が元である災いを鎮め、そして日ノ本を守る森となるのが本来の理念です。幾ら幹部の人間とはいえ、無闇に権力に近づくのは危険な発想の様に思います」

沙耶香は父の話を聞くなり興奮したのか、勢い良くハッキリとした口調でそう述べた。

娘の口から飛び出す言葉に、やや苦笑いを浮かべながらも一将は言う。

「確かにな。沙耶香の言うとおりだ。私もそう危惧している。その者達が一体何を考えているのかは分からんが、時の権勢に近付き過ぎれば……鎮守の森は何れ、難しい選択を迫られる事になるかも知れぬ。嘗ての陰陽師達の様に……」

と言うと一将は腕を組み空を見上げた。その表情は何かを憂いている様にも見える。

そんな父の表情を一樹と沙耶香は無言で眺めながら歩を進めるのだった。

そして目的の場所に着いたところで一将は言う。

「とりあえず今は目の前の任務に集中するのだ。良いな、二人共」

「はい、父上」

「はい、お父様」

二人は気を引き締めた表情でそう返事をする、各々が各自の持ち場へと移動し警戒に当たるのであった。

朝食を終えた俺は、今、コタツの上にて霊符の作成をしているところである。そして、筆を走らせながら俺は考えるのだった。雪が降り積もる様になった場合、真言術の練習場所をどうしようかと……。

今朝も早くから修行をしてきたが、流石に降雪が何十cmにもなつてくると今までの様にはいなくなってくる。鬼一爺さんにもその事は一応言ってはあるが、今のところ良い案は無い状態だ。何処かに雨や雪を凌げる良い場所があればいいのだが……。

そこでテレビからジングルベルの軽快なメロディーが聞こえてきた。それと同時に思い出す。今日はクリスマス・イブでイエス・キリストの誕生日前夜であるという事を。

このクリスマスと呼ばれる宗教行事は、キリスト教圏の国々では正しくまさ聖夜という意味合いの特別な日であるが、こと日本に於いては性夜の意味合いを持つ、恋人達の特別な日としてほぼ全ての日本人の間に浸透している。

いつからこのような解釈で使われる様になったのかは定かではないが、俺にとってこの文化改変は日本人で凄いなあと思わせる事柄の一つでもあるのだった。そして、仏教徒が多いこの日本に於いて、イエス・キリストの生誕を祝うキリスト教の行事が仏教徒の間でも定着をしているのは、ある意味、キリストの奇跡の様にも見えるの

だ。まあ俺にとつてはだが……。

理由は簡単だ。こんな国無いからである。今の日本にこれだけ沢山の宗教が存在しているにも拘らず、クリスマスは宗教に関係なく各家庭や恋人達の間浸透しており、しかも、誰もキリストの生誕を祝っていない。ある意味凄い行事だ。最早、クリスマスと言う名の別の行事へと進化？している。

だが、このイヴェントのお陰で、潤う企業や各種団体が沢山あるので、今の日本経済とは切っても切り離せない大切な国民行事となっているのだ。もう此処までくると、元の意味合いなど如何でもよくなってくる。

だが、俺は別にそれを非難している訳ではない。日本人は柔軟だなあと言っているのである。

これは俺の持論だが、恐らく、日本の太古から伝わる八百万の神々という多神教的な考え方が、どんな宗教でも受け入れてしまう土壌になっているのかも知れない。そう俺は考えているのである。

そんな事を考えながらテレビの上にあるデジタル時計を確認する。今は午前10時30分を表示していた。

手前に視線を移すとテレビの前に陣取りクリスマス特番を見ている鬼一爺さんの姿が目に入る。最近は見慣れた光景になっているので、別に深く考える事はなくなった。もう何でも勝手に見てくれ。

そして、俺はコタツの上にて墨を乾かしている符に視線を向ける。どうやら符はまだ、乾ききってないようだ。

それらを確認した俺は、後ろにゴロンと寝転がるとこの後の事について考えるのであった。

高天大は21日の土曜日からも冬休みに入っている。その為、平日のこんな時間から俺は部屋でゴロゴロとしている訳である。

因みに、この冬休みの間は剣道愛好会の活動も大人しくなる。色々各自が私事で多忙になるうえ、来年1月の終わりからは試験やレポートの提出等で中々時間がとれなくなるからだ。こればかりはしょうがないだろう、なんとたって学生だから。

とは言いつつも、一応、何回かは愛好会関連で集まる事になっている。年末には愛好会の忘年会もあるそうで、会員は全員強制参加となっている。断るうものなら姫会長の折檻を受ける羽目になるだろう。コワッ。

まあそれはさて置き。今日、この後の予定は実はもう既に決まっている。瑞希ちゃんが俺の家に来る事になっているからだ。昼前にはコッチにくる様な事を言っていた。なんでも、今日は終業式だけらしい。他に用事はないそうだ。

それで、俺の部屋に来て何をするのかというと、別にクリスマスパーティーをする訳じゃない。先々週の除霊で弟子入りを認められた為、俺が瑞希ちゃんに霊力の手解きをしないといけないからである。

そういった事情もあり、瑞希ちゃんが来るまでの時間を有効利用する為に俺は朝っぱらから霊符作成をしているのだった。

だが、今作成している霊符は、鬼一爺さんから教えてもらった符術ではない。俺が考えたオリジナルの霊符である。とは言っても爺さんから習った術式を色々と組み合わせで作った符だが……。

なんでこんな物を作っているかと言うと、唯単に考えていた事を形にしてみたかったからである。今まで習った符術の術式というものを大体把握できていた俺は、電気回路を書くような要領でノートに閃いた案を今まで書き溜めていた。で、その内の一つをとりあえず作ってみた訳なのである。そして、墨が乾き次第、鬼一爺さんに見せて反応を見てみようと思っっているところだ。

寝転がってから10分程経過したので、俺は上半身を起こすと符が乾いているかどうか確認をする。かなり良い感じで乾いている。それを見るなり、ニヤツと笑みを浮かべた俺はテレビに夢中になっている爺さんに声をかけるのだった。

「鬼一爺さん。テレビ見るところ悪いんだけど、今ちょっといいかい？」

（ンン？ なんじゃ。何か分からぬ事でもあるのか）

「いや、違うよ。俺が術式を組み上げて作った符の出来栄を見て

ほしいんだ」

俺は額に手を当てキザツたらしい仕草をしながら爺さんに言う。
すると爺さんはやや驚いた様子で答えた。

（ほう、なんと。お主が自分で考えた符術と言う事か。で、どんな符術なのじゃ？）

「聞いて驚くなよ。その名も、れいこうとう霊光灯の符術だ！」

俺は自信満々に鬼一爺さんに言った。

だが、爺さんは微妙な表情である。そして言う。

（名前は兎も角……一体どんな術なのじゃ？）

「い、いいだろう。それじゃ、実演するから見ててくれよ」

と言うと俺は乾いたばかりの符を手に取り、鬼一爺さんの前で符の実演をするのだった。

俺が符の力を解放すると同時に霊符は明るく光り輝く。まるで蛍光灯の様に。

そして、符術が成功したのを見届けた俺はニヤツと笑みを浮かべ、鬼一爺さんを見るのであった。

だが、鬼一爺さんはポカーンとした表情でその符術を眺めている。その表情は喜怒哀楽のどれでもなく、ただただ無感動といった感じだ。

俺はそんな爺さんを見てこう思った。『やだッ、スッゴイ白けてるッ！』と……。

鬼一爺さんはやる気の無い声色で言う。

（で、それは光を放つだけで終わりか？）

そんな爺さんを見るなり俺はムキになって言った。

「じ、爺さん、ただ光ってるだけだと思うなよ。この符術はなあ、発光持続時間が俺の計算だと1時間はある筈なんだ。中々に便利な符術だろ。これがあれば懐中電灯が無い時に重宝するぜ」

俺は胸を張って腕を組み、『どうだ！』と言わんばかりの仕草をする。

だが、鬼一爺さんは耳穴を小指で穿りながらダルそうに言った。

霊体の爺さんに耳クソがあるのかどうかは分からないが……。

(フウ、光を発するだけなら、ワザワザ符術なんぞで面倒な術式を組まんでも、霊石を使えば直ぐに出来るわい)

「エツそうなの?」

(そうじゃ。霊石があれば、己の霊力を籠めるだけで光るからの。

まあお主の組み上げた術は、溜めた霊力を少しづつ放出して長いあいだ光が得られる、という点では悪い訳ではないが、面倒なんじゃよ。その符を見た感じでは五つの術式で組んでおるじゃる? 光を得るだけにそんなに術式を使うのは労力の無駄じゃわい)

俺は鬼一爺さんのダメだしの言葉を聞き、ガクンツと頭を垂らす。

そして溜息混じりに言うのであった。

「はあく良い術だと思っただけだなあ。霊石かあ……それは盲点だったよ。もう少し、依り代関係の知識も勉強しないといけない」
ゲンナリとしている俺を見た鬼一爺さんは、そこで陽気に笑いなから言う。

(フオフオフオ、まあ我は別にお主を責めておる訳ではない。それに、涼もこんな事をやり始めたと言う事は、符術という物を理解出来ているという事じゃからの。そこは我も認めておるぞい)

「ハハツ、ありがとさん。ハア……ピンポーン?」

そんなやりとりを爺さんしていると、そこで呼び鈴が鳴った。

俺はコタツから出て玄関へと向かうと覗き穴から訪問者の確認をする。

するとお客さんは瑞希ちゃんであった。学校からそのまま来たように制服姿をしている。また、持って帰る荷物が多かったのか、背中と右手は鞆で埋まっていた。

俺は扉を開けると笑顔で迎えた。

「おっ早かったね、瑞希ちゃん。もう学校終わったんだ?」

「はい、今日で2学期終了です。ついでにそのまま来ちゃいました。エヘッ」

瑞希ちゃんは満面の笑顔を俺に向ける。

「ハハハ、元気だね瑞希ちゃん。さて、それじゃあ上がってよ」
「はい、お邪魔しまーす」

と元気良く返事をした瑞希ちゃんは、早速、部屋の中へと入って
くる。

そして、コタツの上に置かれた靈光灯の符や書道具類を見るなり
言った。

「アツ日比野さん、お仕事だったんですね」

「ああ、ちよっとね。まあ別に大した事をしてた訳じゃないけど」
俺は鬼一爺さんにダメだしされたのを思い出し、やや低いトーン
で答える。

すると瑞希ちゃんは、今の微妙な返答が気になったのか、首を傾
げて聞いてきた。

「日比野さん、どうしたんですか？ 妙に力なく聞こえましたけど」
瑞希ちゃんがそう言うや否や、鬼一爺さんが靈圧を上げて話しに
割って入ってくる。

（フオフオフオ。実はの、涼一は今、気分が沈んでおるのじゃよ。
我に駄目を出されたもんじゃからの。フオフオフオ）

「エツ 駄目を出されたって、一体何をですか？」
瑞希ちゃんは興味津々といった感じの表情で俺に聞いてくる。
俺は話すかどうかをやや悩んだものの、観念して先程までのやり
とりを説明するのだった

「……………という事なんだよ。それで気落ちしてたんだ」

説明を聞いた瑞希ちゃんは此処で意外な返事をする。

「エエ、でも聞いた限りじゃ、結構便利な術の様に聞こえるんです
けど。駄目なんですか？」

「それが爺さんの話だと、靈石さえあればワザワザそんな事しなく
ても光を得られるそうなんだ。盲点だったよ、トホホ」

（フオフオフオ。これで一つ勉強になったじゃろ）

そこで瑞希ちゃんは言う。

「日比野さん、その術見せてもらってもいいですか？」

「ン、靈光灯かい。まあいいけど」

俺は先程の符を手にとると、もう一度、力を解放させた。

眩い白い光が符から発せられる。

その符を見た瑞希ちゃんは「わっ、すごい」と両掌を組み、目を輝かせていた。

そして言う。

「日比野さん。これって、瑞希も靈力を扱える様になると使えるんですか？」

「靈力を扱えれば使えるよ。唯単に符の力を解放させるだけだから「へえー」と言いながら瑞希ちゃんは好奇心一杯の目で、光を眺めている。

だが、こんな事をしていてもしょうがないので、俺は一旦符の力を止めた。

すると途端に光は消えうせる。

それを確認した俺は瑞希ちゃんに向かい言った。

「まあとりあえず、この術の事は置いておいて。どうする？ もう修行を始めるかい」

「アツちよつと待つてもらえますか？」

瑞希ちゃんはそう言うつと、背中に担いだ鞆を降ろす。

そしてモジモジしながら言った。

「日比野さん。服を着替えたいんですけど、そこのお風呂場を借りてもいいですか？」

「ああ、いいよ」

「それじゃ、ちよつと着替えてきます。待ってて下さい。アツそれと、幾ら瑞希が可愛いからって覗かないでくださいね」

瑞希ちゃんは人差し指を俺の前に立ててそう言った。

「フウ、心配しなくても覗かないよ。それに、鬼一爺さんが居るからそんな事出来ないよ。やった瞬間に長い説教になっちまう」

それを聞き、瑞希ちゃんは笑顔で爺さんに言った。

「お爺さん。念の為、日比野さんを見張って下さいね」

(フオフオフオ、見張つとるから安心して着替えればよいぞ)

「俺って信用無いのかなあ……心外だ」

爺さんと瑞希ちゃんのやりとりを見た俺は、やや凹みながらもそう呟くのだった。

それから10分後、瑞希ちゃんはチェック柄つばい青いスカートに白いモコモコしたセーターといった姿で現れた。やや首周りが開いた格好だったので寒そうに見える。が、中々に可愛らしい格好であった。

そして、瑞希ちゃんはモジモジしながら俺の前に来て白い紙袋を手渡してきた。

「ひ、日比野さん。これ受け取ってください」と言った表情はやや赤い。

「ん、何この袋？」

俺はその紙袋を手にとると、とりあえずそう聞いた。

「あのお。今日は、そのおクリスマス・イブなので、ひ、日比野さんへのプレゼントです」

瑞希ちゃんはたどたどしく答えると、恥ずかしいのか両手の人差し指を合わせてモジモジする。

「エッ、ク、クリスマス・プレゼント？」

俺は『し、しまったあ！何も用意してない。どうしよう……』と頭の中で考える。

そんな事を考えていると瑞希ちゃんは言う。

「と、とりあえず開けてみて下さい。気にかかるかどうか分かりませんけど……」

「そ、そう。それじゃあ」

俺は袋の中を確認する。

すると、中からは青いマフラーが出てきたのであった。しかも、どうやら手編みの様である。

俺はそのマフラーを袋から出して確認すると、瑞希ちゃんに向かい言った。

「こ、これ瑞希ちゃんが作ったの？」と。

「は、はい。一応、本を見ながら作ったので上手く出来てないかも知れませんが……」

「いやいや、そんな事無いよ。綺麗に出来てるじゃない。凄いね瑞希ちゃん」

俺はマフラーを眺めながら返事すると、早速、首に巻いてみた。

そして瑞希ちゃんに向かい言う。

「どつ、似合っ？」

すると、瑞希ちゃんは目を輝かせて答える。

「はい、とても似合ってます。だって、作ってたときのイメージどおりなんですもん。エヘヘッ」

「そ、そうかい、ナハハッ」

そこで『何かお返しをしなければ』といった考えが頭を過ぎった。俺は天井を見上げながら目を閉じて考える。

そして、つい最近手に入れた琥珀のペンダントの事を思い出すのだった。

実はこの間、輸入雑貨を扱う店に入ったときに、鬼一爺さんが其処に置かれていた琥珀こはくアクセサリーを見るなり俺に買う様に進言してきたからである。何でも、琥珀は靈力を通しやすい天然石の一つなのだそうだ。その為、俺にとってはやや高い値段ではあったが、憑き物落として得たお金で余裕もあつたので買う事にしたのである。その事を思い出すと、俺は机に移動して引き出しを開ける。中に仕舞って置いた、まだ開封されていない小さな黒い箱を取り出すと、瑞希ちゃんに手渡すのであった。

「瑞希ちゃん、これを受け取ってくれるかい。俺からのクリスマスプレゼントという事で。何も包装されてないプレゼントで悪いんだけど」と、俺はやや照れながらも瑞希ちゃんに言った。

「いいですよ。気にしないで下さい。それはそうと、これは何です

か？」

瑞希ちゃんは箱を受け取ると高めのテンションで俺に聞いてくる。「気に入るかどうか分かんないけど、開けてみてよ。変な物じゃないからさ」

俺の言葉を聞き、瑞希ちゃんは早速箱を開ける。すると中からは黄褐色に透き通る美しいペンダントが出てきた。その琥珀は丸みを帯びた加工がされているのでどの角度からでも美しく見える。

だが、瑞希ちゃんはそれを見るなり、驚くとともに遠慮がちに言うのだった。

「ひ、日比野さん。良いんですか？ こんな高そうな物を貰っても」

「いいよ。心配しなくても、そこまで高い物じゃないからさ」

「あのお、着けてみてもいいですか？」

「うん。着けてみて」

瑞希ちゃんは俺の返事を聞き、箱からペンダントを取り出すと首にかけた。胸元の中心で琥珀がキラリと輝きを放つ。

そこでやや恥ずかしそうに瑞希ちゃんと言う。

「ど、どうですか？」

「少し大人っぽい雰囲気になるかも知れないけど、似合ってるよ。それと言い忘れたけど、この琥珀は靈力を通しやすい石だから、これからの瑞希ちゃんの事を考えるとピッタリな物かもね」

俺が顎に手を当てそう呟くと、「へえ、そうなんですか」と言いながら、瑞希ちゃんは胸元に輝く琥珀を手に取りマジマジと見つめるのであった。

（ほう、中々に似合っておるぞい。フオフオフオ）

「エへへ、ありがとう、お爺さん」

琥珀を暫く眺めた瑞希ちゃんは、俺に向かい満面の笑顔でお礼を言う。

「日比野さん。ありがとうございます。私、これ大事にしますからね」

「ハハハ、此方こそ。あつたかいマフラーありがとうね。大事にす

るよ」

そんなほのぼのとした会話をしたところで、瑞希ちゃんは何かを思い出したのか、ハツとした表情になる。

そして首をかしげて俺に聞いてきたのだった。

「日比野さん。道間さんを憶えてますよね？」

「うん、憶えてるよ。沙耶香ちゃんがどうかしたの？」

俺はそう答えると、沙耶香ちゃんのツインテールの髪型を思い浮かべる。

「それが、今日の終業式に道間さんお休みだったんですよ」

「風邪でもひいたんじゃないの？」と軽い口調で俺は言う。

「違いますよ。だって、お兄さんの道間先生もお休みだったんですから。で、以前、日比野さん言ってたじゃないですか。道間さんは恐らく霊能力者だって」

「ああ、言ったね」

すると瑞希ちゃんは唇に人差し指を当てながら、何かを推察するような思案顔で話すのだった。

「その話を思い出して、道間さんは今日それ関係で何かあったのかな？ って思ったんですよ。どう思います、日比野さん」

「ハハハッ、それは考えすぎだよ。もしかしたら、家の方で何かがあったのかも知れないし、それに兄弟揃って風邪を引いたかもしれないしさ」

「確かに、それもあるんですけど。何か引つかかるんですよ。私の第六感に……なんちゃって。テヘヘッ」

と言うと瑞希ちゃんはペロツと舌を出す。中々、お茶目な仕草である。

そこで俺は時計に目をやり話を変える。

「さて、それじゃあどうする？ もう直ぐで昼だけど」

「アッホントだ。じゃあ、お昼にしましょうよ」

「それじゃあ外に食べに行こうか？ 折角のクリスマスだし、何か奢るよ」

「エへへ、楽しみです」

瑞希ちゃんはニコニコと微笑む。

そんな訳で、俺達は昼食をたべる為に外出をする事になったのであった。

その2時間前……。

高天智市中心街に佇む高さ80m近くはあるつかという高層ホテルの一室から、双眼鏡を片手に県民交流センターを眺める一人の男が居た。寂しいお堂にいたあの不気味な男である。

今日の男は黒いロングコートに身を包む出で立ちをしており、コートの裾からは黒い皮製のブーツを履いているのが確認出来る。その為、肩の下まで伸びた漆黒の様な長く黒い髪が、コートと一体化している様に見え、全身が隅々まで黒一色で覆い尽くされた格好となっていた。

また、それらの服装に男の体から噴出す微量の殺気が混ざる事もあり、やや近寄りたがい雰囲気な男は醸し出しているのであった。

今、男はビルの間部分に位置する部屋にいる。部屋はそれなりに豪華な佇まいで、セミダブルのベッドとソファ、大きな液晶テレビ等が設置されており、ベージュ色の壁や凝った意匠をした照明器具がこの部屋を豪華な雰囲気なさせていた。

この部屋にはその男の他にもう一人の人物がおり、今、室内のソファに腰掛けて男に視線を向けている。

そして、その人物はソファに寄りかかりながら、外を眺める男に向かい声をかけるのだった。

「眩道斎殿。陽炎からのご忠告はお聞きになっておりますかな？」

と言ったこの人物は、紺色のスーツに身を包む40歳位の男で、サラッとした若干長い黒髪が特徴の人物である。太い眉をしており、その下にある目は細く鋭い。そして、右目の下には3cm程の切り傷がある為、やや人相が悪く見える男であった。

「ああ、聞いている。鎮守の森が大沢の護衛に付いたという話である。だが、そんな事より、俺と接触をしても大丈夫なのか？ 当初の計画では、陽炎を通じて以外は連絡をしないと聞いたが」

眩道齋は双眼鏡を眺めながら、底に響くような低く重い声色でそう答えた。

それを聞き、男は口の端を吊り上げる様な笑みを浮かべて言う。

「ええ、ご心配無く。今日は今までと状況が違う為、その確認に参った次第であります。それに、これも今日の予定の一部ですのでね」「そうか。ならいい」

「さて、それでは、今回も眩道齋殿に全てお任せしますので、宜しくお願い致します」

と言うと男はソファから立ち上がる。

眩道齋はそこで、双眼鏡から男に視線を変えりと言った。

「依頼は滞りなく達成する。心配は無用だ」

「頼もしいお言葉ですな。だが、油断は禁物です。鎮守の森は土御門宗家直属の者が動いておりますのでね」

すると、眩道齋は噛み殺した様な笑い声を発しながら男に言う。

「ククククツ、何を言うのかと思えば……。お主も同じ穴ムシナの貉である。」「

「確かにそうですが、私は宗家の者達とは些ちかか考え方が違いますのでね」

「クククツまあいい。兎も角、心配は無用だ。そう主に伝えておいてくれ」

と言うと眩道齋はまた窓から外へ視線を戻す。

男はそんな眩道齋の後ろ姿に向かい、笑みをこぼしながら言った。「ええ、勿論伝えておきますとも。大沢など我等の歩む道に転がる唯の小石ですが、これも創世の計画の一つです。我等の理想に僅かですが、また一歩近付くのですからね」

その男は眩道齋にそう告げると、音も立てずにこの部屋を後にしたのだった。

式拾九ノ巻

《 式拾九ノ巻 》 祝殺

今の時刻は午後4時。朝方、羽毛の様に舞い落ちていた雪はもう止んでおり、薄暗い曇り空が高天智市内を覆っていた。中心市街地では、時折、ビルの谷間を縫うように冷たい風が吹き抜ける。その為、道を行交う人々は身体を小さく窄める様な仕草をしており、また、そういった人々の様子が現在の気温の低さを物語っているのだった。

しかし、そんな薄暗く寒い気象条件ではあるが、今日はクリスマス・イブである。

市街地の大通り沿いに店を構える各店舗では、軒先に設けられたイルミネーションが鮮やかに光り輝いており、そんな寒空を嘲笑うかのように非常に明るく暖かい雰囲気となっていた。ホビーや家電を扱う店の付近ではクリスマス定番の明るい音楽が聞こえてくる所為か、其処を通る人々は心なしか笑顔になっっている様に見える。

大通り沿いはそんな雰囲気である為、見た感じからはそれ程に寒い印象を受けない様相となっているのであった。

そんな賑やかな大通り沿いからやや離れた所にある、此処、F県立県民交流センターでは、朝の様に内外で忙しく準備に追われる人々の姿はもう見受けられない。敷地内にある20台程度の収容能力しかない小さな駐車場は全て埋まっており、入りきらない車は近くの立体パーキングを利用してしている様である。また、建物の周囲には偶に横切る通行人や車以外はない為、外の様子は非常に静かで寂しい雰囲気となっているのであった。

しかし、そんな外の静けさとは打って変わり、県民交流センター大ホールでは沢山の人々の拍手が鳴り響いていた。今日予定されて

いるプログラムの最後、地元代議士による講演が始まるうとして
いるからである。ホール奥にある床から1m程高い壇の上には地元代
議士の他に来賓達の姿があった。だが、其処には大沢伊知郎の姿は
ない。実はもう既に大沢は講演を終えており、この後に入っている
予定がある為、控え室に戻っているからなのである。

大沢は今、控え室に用意されている椅子に腰掛けながら一息入れ
ており、次の場所へ移動する為の足を待っているところであった。
この控え室には大沢以外にも関係者であろう数名の者達があり、そ
の者達は丁度今、大沢に挨拶をしているところである。その大沢の
後ろには、黒縁の眼鏡をかけた秘書の若い男が付いており、手帳を
眺めながらこの後の予定を確認している最中のものであった。

大沢伊知郎はやや小太りの体型をしており、上背はそれ程無く中
の下といった感じの初老の男である。細い目と丸い輪郭の顔立ちが
特徴で、頭髪にはべったりとした整髪料が塗られていた。その為、
部屋の明かりが反射してニスを塗ったかのように頭が光り輝いてい
る。また、やや明るい灰色の背広を着ている事もあり、今日は一見
すると派手な印象を受ける姿となっているのであった。

大沢は一通り関係者に握手や挨拶を済ませると、後ろにいる眼鏡
をかけた若い秘書にニコヤカに声をかけた。

「古坂君、次のG県での会食は何時からだったかね？」

「会食の予定時刻は7時からとなっております。此処からですと凡
そ1時間半程で到着できる予定です」

細身で背の高い古坂と呼ばれた男は、低くハッキリとした口調で
大沢に答える。

「そうかね。ではまだ少し余裕があるようだ」

大沢は笑顔でそう答えると、秘書に近寄り小声で言った。

「それより古坂君。例の件はどうなっている？」

「……ご心配なく。もう手は打ってあります」

秘書の言葉を聞いた大沢は野心溢れる笑みを浮かべる。

「そうかね。政権奪取に向けた大事な時期に入る今、妙な犬にウロ

チヨロされると私も敵わんからな」

古坂は眉間の眼鏡フレームを右手の中指で押し上げて位置を直す
と、鋭い目付きになり大沢に言った。

「大沢先生の不安は近々完全なる形で取り除かれますので、どうか
ご安心下さい。私が保証致します」

「どうやら、君を第一公設秘書として雇い入れたのは正解だったよ
うだ。ハハハ」

大沢は小さく笑いながらそう答えると、室内の壁に掛けられた時
計を見る。

そして、古坂に言った。

「ところで古坂君、足の方はまだかね？」

「申し訳ありません。もうそろそろ来る頃だとは思いますが、今直
ぐ確認を致しますので少々お待ち下さい」

と丁寧に答えた古坂は、大沢に一礼するとそのまま控え室を後に
したのだった。

廊下に出た古坂は左右を見回し、人が居ないのを確認すると控え
室から若干離れた奥の部屋へと向かう。

古坂は音を立てずやや足早に廊下を移動すると、その部屋の扉を
ゆつくりと開いた。

其処は6畳程の小さな四角い部屋で、角の方には折畳み式の会議
机や椅子等が積み上げられていた。どうやら物置の様である。

また、明かりが点いていない為、非常に暗い。

だが、その部屋の真ん中には一人の男が椅子に座り悠然と佇んで
いるのだった。

男は古坂が入口の扉を閉めたのを見届けると、低く小さな声で言
った。

「……大沢は控え室か？」

「はい。一応、大沢の他にも私を含めて数名の人間が居りますので、
此度の証人となりましょう。それと部屋の周囲には、ご要望通りに
霊波遮断の結界を張っておきましたので、余程の事が無い限り、鎮

守の森の連中に術の行使は気付かれないでしょう。後は眩道齋殿にお任せします」

古坂はそう告げると、眩道齋に一礼をしてからこの部屋を後にした。

そして暗い部屋に一人佇む眩道齋は、口元を僅かに吊り上げて笑みを浮かべると、左膝を床につけてしゃがみ何かの準備に取り掛かり始めたのであった

部屋を出た古坂は静かに笑みを浮かべると、上着のポケットから携帯を取り出して電話を掛けた。

「私だ。そろそろ此方の方に車を回してくれないか？ …… ああ、そうだ。 …… それではよろしく頼む」

二言三言話した古坂は携帯を切ると大沢の待っている控え室へと戻って行く。

古坂が控え室に戻ると、室内には数名の笑い声が響き渡っていた。5人の光民党関係者が大沢と談笑をしている最中だからである。

音を立てず静かに扉を閉めた古坂はそれらに視線を向けると大沢に小走りで近寄る。

そして、やや申し訳なさそうに小声で報告するのであった。

「大沢先生、お話中のところ申し訳ありません。あともう少しで此方に来るそうです。暫くそのままお待ちいただけますか？」

「おお、そうかね。では、もう暫くのあいだ寛ぐとしよう」

と答えた大沢は、他の5人との談笑を再開しだした。

古坂はそんな大沢達に一瞬冷ややかな視線を向けると、やや離れたところに移動して事の成り行きを見守るのであった。

大沢が5人と談笑を再開し始めて暫く経った頃、異変が起き始めた。

なんと、大沢の足元から深紫色の薄っすらとした光が現れたのである。

だが、此処に居る者達には見えていない。一人を除いては……。

その光はゆつくりと煙が立ち上る様に大沢の足元から這い出てくと、深紫色をした人型で薄気味悪い亡霊へと変貌を遂げたのだ。

大沢と他の5人には亡霊の姿は見えていない。

何故ならば霊感の無い者には見えないからである。

その人型の亡霊はギザギザに尖った五本の指が生える掌を大沢に向ける。

そして心臓のある辺りに勢い良く突き刺して大沢の霊体を鷲掴みにしたのだった。

と、その時！

「ハハハ、それでだね、……ウツ……アアア……カツ」

大沢は談笑の途中に、突然、胸を押えて苦しそうに呻きながら蹲すくる。

それから程なくして、震える手で宙を掴もうとする仕草をしながらバタリと床に倒れ込んだ。

「……お、大沢先生ツ。だツ大丈夫ですか!？」

大沢と共に談笑をしていた5人はハモリながら慌てて大沢に詰め寄る。

古坂もそれを見届けるなり、すぐさま大沢の元へと駆け寄ると、横たわる身体を揺さぶりながら必死の形相で呼びかけるのであった。
「先生シツカリして下さいッ。先生ツ先生ツ」

しかし、大沢はピクリとも動かない。

その様は糸の切れたマリオネットのように力なくダラリとなっていた。

そして古坂は、周囲にいる慌てた様子の光民党関係者5人に向かい叫ぶ様な声色で言うのであった。

「きゅ、救急車だぁあッ。は、早く連絡をッ！」

「は、はい。たツ只今ッ」

大沢が倒れる15分前……。

沙耶香は交流センター敷地内北側を兄と共に警戒に当たっていた。

北側は若い木々が何本も植樹されたところで、目立つ物も設置されていない殺風景な場所である。だが、それは日が射す昼の話で、今のこの時間帯になると周囲はかなり暗くなっている。その為、二人は懐中電灯の光を頼りに周囲の見回りをしているところなのであった。

今日の沙耶香は灰色のスーツ姿の上から薄茶色のトレンチコートを着ており、顔には若干の化粧を施して丸い眼鏡を掛けるといった格好をしていた。髪はいつものツインテールではなくストレートに降ろしており、その出で立ちは14歳という年齢ながらも一見するとOLの様に見える姿なのであった。

こんな格好を沙耶香がしているのには、勿論理由がある。それは、こんな場所に一人だけ中学生がいるという不自然さを無くす為なのである。今の沙耶香を見ても学校のクラスメートは恐らく気付かないであろう。そう言っても大袈裟ではないくらいに上手く変装しているのであった。

兄と共に警戒に当たっていた沙耶香は朝のミーティングを思い返す。

そこで兄に向かい言った。

「お兄様。今朝聞いた予定では、もうそろそろ大沢議員は次の目的地に移動する時刻ですよね？」

「ああ、そろそろ大沢議員は此処を発つ時間の筈だ。もう暫くの辛抱だな。気を抜かずこのまま警戒を続けるぞ」

一樹は笑顔で答えると、直ぐに真剣な表情へ戻り周囲を走る地脈に気を配る。

沙耶香も兄の言葉を聞き大きく頷くと相槌を打つ。

「ええ、大沢議員が発つまでは終わりじゃありませんものね」と。

そして二人は、今一度、気を引き締めなおして周囲の警戒に当たるのだった。

丁度その頃、大ホールでは地元代議士が壇上に上がったところであり、その地元代議士を迎える聴衆の大きな拍手が、外に居る二人

の耳に小さくではあるが聞こえてきた。

タイミングよく聞こえてくるその拍手に、沙耶香は自分達の今の行動を褒め称えるかの様な錯覚を一瞬だが覚える。そんな事が一瞬過ぎたが為に沙耶香は思わずクスリと微笑むのだった。

と、その時。

沙耶香は僅かに乱れた地脈の気配を交流センターの方から感じ取った。

地脈の僅かな乱れは熟練の霊能者でも、直ぐには分からないくらいのものであったが、霊視や靈感に秀でた才を持つ沙耶香には感じ取る事が出来たのである。

沙耶香はそこで一旦立ち止まると交流センターの方へ視線を向け、隣に居る兄に言うのだった。

「お兄様！ 今、交流センターの方から僅かではありますが、地脈の乱れを感じました」

「何ッ、だが俺には何も感じなかったぞ？ まあお前の方が感知能力に優れているからかも知れんが」

一樹はそう答えながらも、沙耶香の眺める方向に視線を向かわせる。

すると、沙耶香はやや険しい表情になりながら一樹に言った。

「私も今は何も感じませんが、ついさっき確かに感じたのです。本当に極僅かな乱れですが……」

「本当か？……だが、俺達の持ち場は此処だからな。とりあえず、父上に連絡……って、オイッ、沙耶香。何処に行くッ」

一樹が携帯を取り出して父に連絡しようとした時、沙耶香は自分の中で沸き起こる嫌な予感が気になり、足早に交流センターへと歩を進め始めた。

そんな沙耶香を見た一樹は「チッ」と舌を打ちつつも、携帯を懐にしまい急いで後を追う。

そして二人が交流センターに近付いたところで叫ぶような大声が聞こえてきたのであった。

【大沢先生が倒れたぞおお！ きゅ救急車だアア。早くッ】

その声が聞こえるなり、沙耶香は足を速め、後ろにいる兄に向かい言った。

「大沢議員に何かあったようです」

「どうやら、その様だ」

交流センターから聞こえてくる大きな声で一樹も異変に気付き足早になる。

「お兄様、向こうに入り口があります。行きましょう」

「あ、ああ」

建物に辿り着いた二人は、交流センター北側にある勝手口の所まで急いで移動すると、一樹は早速ドアノブに手を伸ばして扉を開くのであった。

だが、そこで西方向へ走り抜けて行く人影が沙耶香の目に飛び込んでくる。

すると沙耶香はその人物が目に入るや否や、慌てて一樹に言った。「お兄様ッ、今、向こうに怪しい人影が走って行きました。私は後を追いかけますので、此処をお願いします」

それを告げるなり沙耶香は直ぐにその人物の後を追いかける。

一樹はそんな沙耶香を見て、やや慌てながらも大きな声で呼び止めるのだった。

「ちょ、ちょっと待ってッ、待つんだ沙耶香！ 勝手な行動をするなア」

だが沙耶香は一樹の注意も聞かずに、懐中電灯を前に向けながら暗がりの中を走って行く。

「クッ。沙耶香の奴、勝手な行動をしやがって。とりあえず、父上に連絡をせねば」

そして一樹は、上着から携帯を取り出すと急いで一将に連絡をするのだった

今の時刻は午後4時半。この時間帯になると上空は夜といっ

ても差支えが無い程に暗くなっていた。そして高天智市内の各所を通る主要な国道や県道では、このPM4時からPM7時までの間が交通量の多くなる時間帯という事もあり、絶え間なく続く車の渋滞で非常に混雑し始めているのだった。

そんな混雑する道路の一つ、中心市街地の真ん中を走る大通りでは街灯やネオン、そして街路樹に施された色とりどりのイルミネーションが美しく光り輝いており、幻想的な光景となっていた。また、大通り両脇の歩道は恋人達や買い物客、ビジネスマン等の沢山の人が埋め尽くされており、活気溢れる賑わいも見せていたのであった。

大沢伊知郎の呪殺を終えた眩道斎は、そんな大通りの喧騒の中を背筋を伸ばし真っ直ぐに進んで行く。そして暫く進んだところで大きな十字路を右折した。すると前方に、周囲を林に囲まれた大きな神社が眩道斎の視界に入ってくる。眩道斎はその神社の方向を見詰めた。真つ直ぐと歩を進めるのだった。

その神社は大きな敷地面積を持っており、正面に見える赤い大きな鳥居とその付近に聳える巨木が一際目立つ存在感を放っていた。また、神社の右隣にも結構な広さを持つ公園がある為、ビルが多いこの中心市街地に於いてやや開けた感じの場所となっていたのだ。

公園内に設置されている水銀灯は非常に明るく光り輝いており、その明かりがベンチや葉の散った広葉樹、そして石畳の遊歩道といった園内の景色を絵画の様に美しく浮かび上がらせていた。

だが、対照的に神社の方には明かりがない為、非常に薄暗くなっている。その所為か、鳥居から神社まで続く参道は不鮮明に浮かび上がって見え、非常に不気味な雰囲気となっているのであった。

眩道斎はそんな薄暗い神社付近にある路地へと入って行くと、その先にある3階建ての立体駐車場へと向かった。駐車場の建物内に入った眩道斎は、左右を打ちっ放しのコンクリート壁で仕切られた通路先にあるエレベーターへと歩を進める。そして、上昇ボタンを

押そうとしたところで、後ろから不意に声を掛ける人物が現れたのであった。

「少しいいですか？ 貴方が交流センターから出てゆく時、不自然な感じで去って行ったので、後を付けさせてもらいました。一体、貴方はアソコで何をしていたのでしょうか？」

声を掛けたのは沙耶香であった。

沙耶香は眩道斎から20m程離れたところにおり、後ろ姿を睨みつけていた。

その声を聞いた眩道斎は僅かに首を動かし後方を見る。

沙耶香の顔を確認した眩道斎は、笑みを浮かべながら振り向いた。

「何をとは？ 私は大沢先生の講演を拝聴してただけだが……」

「へえ」。では何故あの騒ぎの中、逃げる様に去って行ったのですか？」

と言いながら沙耶香は、矢を射る様な眼差しを緩めずに眩道斎を睨みつけている。

だが、そんな威圧的に振舞う沙耶香を前にしながらも、眩道斎は落ち着き払った余裕の表情で薄っすらと笑みを浮かべていた。

そして、懐からタバコを取りだして火をつけると不敵に笑いながら言うのだった。

「クククツ、そんな理由だけで私を追ってきたのか？ だとしたらとんだ時間の無駄だな。私は今言ったとおり大沢先生の講演を聞きに行っただけだ。それ以上でもそれ以下でもない」

「……理由はそれだけじゃありません。貴方からは僅かですが、あの地を通る地脈と同じ波長の残留霊痕が感じられます。言っておきますが、隠しても無駄ですよ。私は普通の術者に比べて霊視や靈感に秀でておりますのでね」

沙耶香は今までよりも更に鋭く睨みつけながらそう言い放った。

すると眩道斎の顔からは笑みが消える。

そして二人の間に緊迫した空気が漂い始めるのだった。

やや長い沈黙の後、眩道斎は不気味な笑みを浮かべて口を開いた。

「ククククツ、なるほど。鎮守の森にも中々に優秀な奴がいたもんだ。だが、一人で来たのは不味かったな。クククツ、女を殺すのは性に合わんが仕方ない。恨むのなら自分の浅はかさを恨むがいい」
眩道齋はダラリと両手を降ろすと、殺気を振り撒きながらゆっくと沙耶香に近付いてゆく。

それを見た沙耶香は即座に身構えると、コートに忍ばせた直径2cm程の球体である霊珠を手に取り、自分との差が10mを切ったところで霊珠の力を解放して、近づく眩道齋に目掛けて投げ付けるのだった。

沙耶香の霊力によって力を解放した霊珠は赤い炎を纏っており、火球となって眩道齋に向かって行く。

しかし、眩道齋は余裕の表情で火球を見据えると、不敵に笑いながら右掌を正面に突き出した。

そして霊珠が眩道齋の右掌に掴まれた次の瞬間！

霊珠は眩道齋の掌に受け止められると同時に強烈な光を一瞬放つのであった。

だが、それだけである。

笑みを浮かべた眩道齋の右手には透明の球体が握られている。

どうやら霊珠の力を眩道齋が押さえつけたようであった。

「こんな下らん玩具おもちゃでは俺は倒せんぞ。クククツ。そして、正体を知られたからには生かしておく訳にはいかん」

眩道齋の言葉を聞いた沙耶香は笑み浮かべる。

「こんな物で貴方を倒そうなんて思っていないせんわ」

微笑みを浮かべながらそう告げた沙耶香は、拳銃に似た物を懐から取り出して両手で構え、眩道齋の心臓辺りに狙いをつけるのであった。

そして言った。

「動かないで下さい。この銃で撃たれば、幾ら高い霊圧を練れる高位術者でも、ただではすみませんよ」

銃を見た眩道齋の顔から笑みが消える。

そして、恐ろしく鋭い殺気を沙耶香に放ちながら言うのであった。「ほう、『閃光の矢』か。中々高価な物を持つてるじゃないか。さっきの霊珠は油断させる為の物という事か……。クククツまあいい、撃つのなら撃つてみるがいい」

だが、眩道斎は怯む事無くそう言い放つと、コートのポケットに左手を入れる。

「う、動かないで！ 撃ちますよ。脅しじゃありません」

沙耶香は閃光の矢を見ても動じない眩道斎を見て、やや焦りながらも威嚇する。

だが眩道斎は別段気にした様子も無く笑いながら言った。

「クククツ、殺す前に一つ良い事を教えてやるう。戦いの場に於いて非情に成れん奴は早死にする。クククツ、そして、こんな通路で接触を試みたという事は俺の退路を断つ為であるうが……。お前の様な未熟者が俺を倒す事などできぬわッ！ 死ぬがいいッ」

そう言い放つた眩道斎は左手に一枚の霊符を振りかざす。

すると其処からドス黒い霧が噴出し始めるのだった。

沙耶香は目の前から噴出す黒い霧に視界を妨げられ、たじろぐ。

そして、眩道斎を見失った次の瞬間！

ゾクリツと鳥肌が立つような冷たい感覚を沙耶香は覚えた。

それと同時に沙耶香の中にある何かが命の危険を知らせるのであった。

沙耶香は無意識の内に踵を返し、慌てて後方へと全力で駆ける。

黒い霧が漂う通路では眩道斎の不気味な笑い声が響いていた。

「ククククツ、中々良い勘をしているじゃないか、あの小娘。だが、この俺から逃げられると思うなよ」

立体駐車場の外に出た沙耶香は脇目も振らずに直ぐ近くにあり薄暗い神社へと向かった。

神社境内に逃げ込んだ沙耶香は、沢山ある大きな木々の一つに身を隠すとそれに背中を預けて寄りかかる。そして、息を潜めながら

先程の優柔不断な自分の行動を呪うのであった。何故、あそこで直ぐに撃たなかったのか、と……。

そう沙耶香が悔やんでいると、冷たい風が周囲の木々の間から吹き抜ける。その風に身を震わせながらも、この後の事を沙耶香は考えるのであった。どうやって切り抜けるかをである。沙耶香とて相手が靈術を駆使する殺し屋であるが故に、そう易々と逃げられるとは思っていないからだ。

だがそこで、「バサツバサツ」と鳥が羽ばたく音が沙耶香の耳に聞こえてくるのであった。

その羽ばたく音は徐々に沙耶香へと近付いてくる。不思議に思った沙耶香は音の聞こえる方向へ僅かに視線を向けた。すると、数羽の黒い奇妙なカラスが沙耶香の近くを飛んでいたのだ。奇妙といったのは目が赤く光っていたからである。また、カラスからあの男と同じ靈波を感じ取った沙耶香は、ブルツと身を竦すくませるのだった。

『このままでは見つかる』そう考えた沙耶香は、自分のいる場所から右斜め前方に佇む神殿へ隠れる事にした。そして、カラスに気付かれない様に細心の注意を払いながら、沙耶香はソツと移動を開始し始めるのであった

境内に入った眩道齋はカラスの式を数羽操りながら沙耶香の居場所を探していた。

周囲の薄暗い状況と眩道齋の着ている衣服が黒一色で統一されている所為か、その様子は遠目から見ると闇が蠢蠢いているように見える。

そんな風に闇に溶け込みながら沙耶香を追う眩道齋は、ある場所で立ち止まった。そして、何処にいても分からない沙耶香に向かって、『境内隅々に響き渡れ』といわんばかりの大声で言うのであった。

【クククツ、オイ、女！ お前がこの境内の何処かに居るのは分か

っているぞツ。俺の式の目から逃げられると思うなよ。それと良い事を教えてやるう。もう、この神社境内には強力な人払いの结界を施してある。要するに誰もお前を助けには来ないという事だ。残念だったな、クククツ。ジワジワと追い詰めて始末してくれるわツ」

大きな声でそう言い放った眩道斎は、目を見開き口元を大きく吊り上げた不気味な笑顔を浮かべる。その表情はもし此処に第3者が居るならば、寒気を覚えたであろう。そんな恐ろしく歪んだ笑みである。そして今の眩道斎からは、まるで狩を楽しむかの様な雰囲気さえ感じられるのであった。

眩道斎は結界内をゆつくりと練り歩き、周囲を丹念に見回しながら沙耶香を探す。

だがそこで、注連繩しめなわを巻かれた丸く大きな灰色の石が眩道斎の目に飛び込んできた。

それを見た眩道斎は何かを閃くと同時にニヤリと笑う。

眩道斎はその丸い石に近付き、巻かれた注連繩を切断して地面に両手をつく。

そして目を閉じ瞑想を始めたのであった。

一方その頃。

「日比野さん。今日はありがとうございました」

玄関で靴を履いた瑞希ちゃんは、丁寧に頭を下げて俺に礼をする。「ハハハ、いいよ、気にしないで。それに一応、これでも瑞希ちゃんの師匠だからね。頼りないかも知れないけどさ……ハ、ハハ」

と言った俺は、後頭部を掻きながら返事をした。最後の方は若干声が小さくなっていたが……。

そんな俺を見た瑞希ちゃんはクスリと笑いながら言う。

「もう日比野さんたら。今日はその言葉を5回も聞きましたよ。いつも通りでお願いします。瑞希は何も気にしてないですよもん」

「ゴメンね。俺も人に物を教えるなんて初めてだからさ。なんか緊

張するんだよ」

するとそこで、鬼一爺さんが陽気な口調で瑞希ちゃんに言う。

（フオフオフオ。色々と双方にとって勉強になったじやる。それと娘子よ、習った事は他言してはならぬぞい）

「もう、お爺さんまで。クスクス。それも今日、4回は聞きましたよ」

（フオフオフオ、そうじゃったかの）と鬼一爺さんは惚けた表情とほで答える。

「そうですよ。エへへ」

瑞希ちゃんは鬼一爺さんにそう言つと、腕時計を確認した。

そして、俺と爺さんに満面の笑顔を向けて元気よく言うのだった。

「それじゃあ私、そろそろ帰ります。また明日宜しくお願いしまーす」

「ハハハ、それじゃあ、また明日ね。瑞希ちゃ……ん……」

と、俺が答えたその時だった！

非情にドス黒く強い負の波動を俺は一瞬感じ取ったのだ。

それを感じると共に俺は鬼一爺さんに視線を向ける。

すると、鬼一爺さんもその波動を感じたのか、物凄く険しい表情で西の方向を見詰めているのだった。

そんな俺達の不自然な態度が気になったのか、瑞希ちゃんは首を傾げて問い掛けてくる。

「……あのぉ、どうかしたんですか？ 今、日比野さんとお爺さん、すっごい深刻そうな顔をしてましたけど」

「ん？ い、いや、何でもないよ。アハハ。それじゃあ、また明日ね。瑞希ちゃん」

「はい……。それでは、また明日お願いしまーす。ではッ」

やや釈然としない言い方ではあったが、瑞希ちゃんは笑顔でそう答ると、玄関扉を開いて駅へと向かったのであった。

瑞希ちゃんが居なくなつた玄関の前で俺は鬼一爺さんに問い掛ける。

「オイツ鬼一爺さん。今なんか結構邪悪な感じの波動を感じたけど、何だよアレ？」

すると爺さんは何時もの雰囲気とかなり違い、焦った様子で口を開いた。

（涼一、どうやら今の波動は、封じられた負の地脈を何者かが解放した所為じゃ。西の方で何か起きておる）

そんな焦った様子の爺さんを見た俺は、不安になりつつも尋ねる。「負の地脈を開放しただってッ！　なんでそんな事分かるんだよ？」（今は然程に感じぬのが何よりの証拠じゃ。恐らく結界を張っておるのじゃろう。そんな事するのは霊術を使える人間しかおらぬ）

そこで爺さんは俺に鋭い視線を投げかけて言った。

（涼一、術具の用意を今直ぐにするのじゃ。急げッ）

「へッ、今から行くのか？　こんなに寒いのに……」

俺はあまり気乗りがしなかったので思わずそう呟く。

それを聞くや否や、爺さんは憤怒の表情を俺に向けて言うのだった。

（馬鹿も〜ん。サツサとせんか！　早くせんと不味い事になるかも知れんのじゃ）

「わ、分かったよ。とりあえず落ち着いてくれ。何もそんなに怒る事ないだろ」

俺はそう爺さんを宥めると、気が進まないながらも渋々準備に取り掛かるのであった。

そして、準備も終わりに近付いたところで、鬼一爺さんは奇妙な事を言ってきた。

（涼一、『七曜の符』は勿論じゃが、念の為に布都御魂剣を封じた送還の符』も持ってゆくのじゃ）

今、爺さんが言った七曜の符とは、火界術・朱雀の法を使う為の霊符の事だ。

しかし、それよりも俺は最後に言った爺さんの言葉に驚愕した。

何故ならば、布都御魂剣はその特性上、あまりにも危険な為、誰

も触れる事が無い様に封じたというのが俺の今までの解釈だったからである。

その為、こう考えるのだった。何でそんな物が必要なんだ？と。俺は直ぐに爺さんに問い掛ける。

「き、鬼一爺さん。今、言ったのは一体どういう意味なんだ？」

(……今は時間がない。後で教える。兎も角、準備をして直ぐに向かうぞ。場所はお主も何となく分かるじやろ)

「ああ、場所は何となくね。フウウ……それじゃ後でちゃんと教えて貰うからな、爺さん」

俺は何処か釈然としないので納得はできなかったが、鬼一爺さんの焦った様子が気になった為、とりあえずそう返事をした。

そして、言われた物を準備した俺はアパートを出ると、鬼一爺さんと共に負の波動を感じた中心街の方へ足早に移動を始めるのであった。

沙耶香は右手に持った破邪の符を正面から襲い掛かってくる悪霊に向けて力を解放する。

「ギヤアアアア」

すると破邪の符から白い光が放たれ、襲い掛かってきた悪霊は消滅した。

それを確認した沙耶香は直ぐに周囲を見回して警戒をする。

何故ならば、先程から何処からとも無く悪霊が現れて襲い掛かってくるからである。沙耶香は20分程前から次々に襲いかかってくる悪霊達に手を焼いており、そんな行動をずっと強いられているのであった。

だが、霊術を駆使し続けると言う事は、肉体にも当然影響がでてくる。沙耶香の息は荒くなっており、その表情からは今の状況の辛さが滲み出ていた。大量の冷たい汗が沙耶香の額から顎に向かって流れ落ちてゆく。そんな苦しい中、沙耶香は考えるのである。何故

これ程の悪霊が襲い掛かってくるのかを……。

もう沙耶香の元には閃光の矢という名の銃と、破邪の符が数枚しか残っていない。それらが尽きた暁には直接悪霊に肉弾戦を仕掛けるしか戦う方法は無いのである。そうなると万策が尽きたという形になる為、沙耶香は焦っていた。早く此処から逃げ出さなければ、と。

しかし、それは途方も無く難しい事であった。何体もの悪霊と眩道齋が放った数体の式を掻い潜って行かねばならないからである。沙耶香の脳裏に『もう駄目かも知れない』という諦めにも似た感情が生まれてくる。だが、そんな弱気な気持ちを振り払うかの様に首を左右に振ると、涙ぐみながらも前を向くのであった。

そんな心中穏やかでない沙耶香の目の前に、一羽のカラスがその時舞い降りてきた。

カラスを見るなり沙耶香は、目を大きく見開きハツと息を飲み込む。

次の瞬間！

カラスは沙耶香目掛けて低空飛行で突進して来たのであった。

沙耶香は飛んでかわそうとするが、カラスの鋭い嘴は、飛んで宙に浮く沙耶香の右足首を切裂いた。傷口からは少量の血が飛び散る。そして地面に着地した途端に、沙耶香はカラスから受けた傷の激痛でバランスを崩し、地面に倒れるのであった。沙耶香は苦悶の表情で右足首を押える。

しかし、沙耶香がそうやって蹲すくまっている間に事態は最悪な状況へ変わりつつあった。

沙耶香はやや開けた境内にて倒れている為、周囲をその他のカラスや悪霊達が囲っているからである。

それを見た沙耶香は死を覚悟すると共に父と兄の顔を思い返し、心の中でこう呟いたのだった。

お父様、お兄様……勝手な行動をしてゴメンナサイ、と。

だがその時！

沙耶香が死を覚悟したところで異変が起きる。

「ワアアアアギヤアアア」

沙耶香の横から青白い大きな火球が二つ現れ、数体の悪霊と式であるカラスを焼き払ったのである。

そして、更に何体かの悪霊が青白い光を放つ霊符で焼き払われると、其処から一人の人物が現れて沙耶香の元に駆け寄ってきたのであった。

沙耶香は息を飲んでその人物を見詰めた。

何故ならば沙耶香の良く知る人物だからである。

その人物が自分の傍に来るなり、沙耶香はその人物の名前を思わず口にしていたのだった。

「ひっ日比野さん！ どうして此処にッ」

そう、沙耶香を助けに来たのは勿論涼一である。

だが今の沙耶香は変装をしている為、涼一は当然、沙耶香とは分からない。

また、周囲の薄暗さもある所為で余計にそういった状況となっているのであった。

「へッ、何で俺の名前を知ってるの？ って、今はそれどころじゃないッ」

涼一は思わずそう呟く。

周囲には沢山の悪霊が集まって来ており、今直ぐにでも襲い掛かろうとしていたからだ。

その為、一刻も早く障壁を張らないといけないのである。

周囲の状況を冷静に見据えた涼一は、直ぐに五行の符を取り出して障壁の符術を行使した。

その瞬間、涼一を中心に青白い霊力の光線で紡がれた五芒星の結界が描かれる。

「ギヤアアアアア」

と、そこで何体かの悪霊が涼一達に飛び掛って来ていたらしく、結界の霊力に当てられてそれらの悪霊は消滅をするのだった。

沙耶香は涼一の行使する見た事もない強力な結界術に目を奪われていた。

その光景は足の痛みも一瞬忘れてしまうほどに沙耶香にとって衝撃的だったからである。

そしてゴクリと生唾を飲み込むと、沙耶香は驚愕の表情で涼一に向かい言うのであった。

「日比野さん……貴方、一体何者……」と

参拾ノ巻

《 参拾ノ巻 》 地霊封陣

今はもう午後5時を過ぎている。一応、この間の除霊の時に着ていたフード付きの黒いコートを上に着ているが、流石に外の気温が低いので少しは寒い。が、予想していた範疇はんちゆうなので俺は気にせず市街地を進んで行くのだった。

だが、中心市街地はクリスマス・イブという事もあって流石に人や車が多く、移動するにも中々自分のペースでという訳にはいかない。その為、焦りや苛立ちに似たような気持ち俺の中に湧いてくるのだった。

何故ならば、近づくにつれて徐々にハッキリと感じられる負の波動と共に、俺の中の何か警報を鳴らしているからだ。漠然とではあるが、確実に良くない事が起きているのは俺にも分かる。そして負の波動を辿りながら俺は考えるのである。こんな人通りの多い繁華街で一体、何が起きているんだ？と。

そんな事を考えながら只管ひたすら進んで行くこと20分。隣が公園で周囲が林となった神社から、波動が発せられているのを俺は突き止めたのだった。その神社の手前辺りからは、ピリピリとした禍々しく強い負の波動が伝わってくる。

俺は神社正面の赤い鳥居を潜ると、早速、負の波動の発信源に向かうべく足を其方側に向けた。だがその時、負の波動を発している逆の方向から、やや高い霊圧を放つ存在が俺の霊感に引っかかったのである。

俺はその方向に視線を向ける。が、先は暗闇で何も見えない。

しかし、何故か嫌な予感がした為、俺は鬼一爺さんに問い掛けたのだった。

「爺さん、向こうから高めの霊圧と、それに群がる負の波動の両方を感じる。もしかすると、誰かが霊術を使って戦ってるんじゃないのか？」

（ウム……どうやら、悪霊どもと誰かが戦っておる様じゃ。不味いわい、この程度の霊圧しか練れぬ術者ではその内やられてしまうぞい。ええい、仕方がないツ。涼一、助けに行くのじゃ）

鬼一爺さんは負の波動の発信源と、その反対方向を交互に見ながら険しい表情でそう言った。

爺さんの表情を見る限りでは苦渋の決断といった感じである。恐らく、本当は発信源に一刻でも早く向かいたいのだろう。

「わ、分かった」

俺はすぐさま其方側へと足を向けて走り出す。

その途中、勿論、直ぐに術を行使できる様に、霊符の準備と霊圧を上げる事は忘れない。

そうやって臨戦態勢に入りながら参道を外れて林の中を進んで行くくと、木々の生えていないやや開けた場所に出たのだった。そして其処に出るなり、先程感じた高めの霊力と負の波動の正体が俺の目に飛び込んできたのである。

なんと其処には、眼鏡を掛けた一人の女性が悪霊に囲まれており、非常にヤバイ状況となっていたのだ。周囲を囲む醜悪な表情を浮かべた半透明の悪霊どもは、今にも飛び掛かろうとしているからである。

（涼一ツ、不味いぞい。形振り構^{なりふ}ってる余裕はない、早く助けるのじゃ）

鬼一爺さんはそれを見るなり慌ててそう指示してきた。

「分かってるよ！」

《 ノウモ・キリーク・カンマン・ア・ヴァータ 》

俺は女性を救出する為、直ぐに真言術・浄化の炎を両手に発動させる。

そして、即座に悪霊ども目掛けて火球を放った。

「ワアアアアギヤアアア」

悪霊数体が浄化の炎で焼き尽くされる。更に俺は霊籠の符を手に取り付近の悪霊に投げつけた。

今の攻撃で出来たスペースを通って、すぐさま、俺は地面に伏せる女性の元に駆け寄る。

何故ならば、一刻も早く女性の周りに障壁結界を張らないと悪霊どもの餌食になってしまうからである。

右足首を押えながら倒れているその女性は、駆け寄った俺の顔をまじまじと見詰めている。

服装を見た感じではどうやらOLのようだ。若干、小柄な体型ではあるが……。

と、そんな事が一瞬頭に過ぎったところで、女性は俺に向かい声を掛けてきた。

「ひツ日比野さん！ どうして此処にッ」と。

「ヘッ、何で俺の名前を知ってるの？ って、今はそれどころじゃないッ」

思いがけない言葉がその女性の口から出てきたので、俺はそう聞き返した。

だが、周囲には沢山の悪霊おり、今にも襲い掛かるうとしている為、直ぐに意識をそっちに移す。

そして、用意しておいた障壁の符をポケットから取り出すと、直ぐに術を行使するのだった。

俺の霊力で紡がれた青白い五芒星の障壁結界が俺と女性を中心に描かれる。

「ギヤアアアアア」

とその時、俺達に飛び掛ってきた悪霊が結界の霊力に当てられて消滅をした。

『フウウ、どうやら間一髪だったようだ』そう思いながら俺は心の中で一息つくのであった。

するとそこで、俺の後ろにいる女性は言う。

「日比野さん……貴方、一体何者……」と。

女性はまたも俺の名前を口にした。

俺は訝しげに思い、術に意識を集中しつつも、後ろで倒れている女性に振り向いて問い掛ける。

「俺、貴方と何処かで会った事ありましたっけ？」

すると女性は、ポカーンとした表情を浮かべながら言った。

「な、何を言ってるんですか。私ですよ。道間です。高島さんと同級生の……。何回か会っているじゃないですか」

「ヘッ？ も、もしかして沙耶香ちゃん……」

と言いながら俺は女性を隈なく見る。

確かに良く見れば沙耶香ちゃんだ。声も聞き覚えのあるものだ。

だが、髪はストレートに降ろし、尚且つ、眼鏡を掛けているのでパツと見は別人である。

その為、俺は言う。

「この間の格好と全然違うから分からなかったよ」

俺の言葉を聞いた沙耶香ちゃんは「アッ」と言いながら今の自分の服装を見回す。

そしてやや力なく言った。

「た、確かにこの格好では分かりませんよね……」

そんなやりとりしながらも、俺は周囲の状況に目を向ける。

すると、結界の周囲にはかなりの数の悪霊が集まって来ており、また、その悪霊達は俺の出方を窺うかの様に此方をジッと見ていた。良く見ると、悪霊に混じって目が赤いカラスの姿もある。だがこのカラスからは負の波動が感じられるので、どうやら普通のカラスではないようだ。

それらを確認した俺は考える。勿論、どうやってこの状況を打開するかである。また、それと同時に後悔もした。もつと策を練つてから飛び込めば良かった、と……。

何故ならば、この障壁の符術は強力な結界ではあるが5分程しか張っていられない。その為、次の手を一刻も早く考えなければなら

ないのである。

しかしながら、今のこの状況で俺が取れる方法は一つしかない。火界術・朱雀の法を使う以外には無いのである。御おあじ談え向きにもこの状況にピッタリの術だ。

だが、この術には一つ大きな問題がある。まだ一度も使った事がないからだ。使い方は知っているが使うのは初めての術なのである。しかし、何時までもこうやって悩んではいられない。時間は刻一刻と過ぎてゆく。

短い時間の中で散々悩んだ末、火界術・朱雀の法を行使する事に決めた俺は、後ろに居る沙耶香ちゃんに言った。

「沙耶香ちゃん、少し頭を下げて伏せていてくれ」

「い、一体何をするつもりなんですか？」

と沙耶香ちゃんは右足首を押えながら言う。

「加減の分からない術を使うから伏せていて欲しいんだ。いいね？」

「……分かりました」

何かを言いたそうな表情ではあるが、今の状況を理解したのだから。

俺も色々と聞きたい事はある。まあ、これを切り抜けた後の展開を考えると少しブルーにもなるが……。

それは兎も角、沙耶香ちゃんはそう返事すると頭を下げて地面に伏せるのであった。

俺はポケットから七曜の符を取り出して浄化の炎を発動させる為の靈力を練る。

だが、ここで一つ片付けなければならない課題がある。

火界術と障壁の符術という二つの術を同時に行使する事は出来ないからだ。

その為、俺は靈力を練りながら、行使している最中である障壁の符術を中断するタイミングを見計るのであった

沙耶香は頭を伏せながらも、涼一が何をしようとしているの
かを見届けようと、視線を涼一に向けていた。そして涼一を見なが
ら考えるのである。自分が今まで探してきた古の秘術いにしえの使い手は涼
一なのではないかと……。

涼一に視線を向かわせながらも沙耶香は今現在行使中である、靈
符と術者の靈力だけで創られた強力な障壁結界にも目を向ける。そ
れを見て出した沙耶香の結論は「後で日比野さんに問い質さねば」
であった。

それから程なくして障壁結界が中断され、二人を覆っていた結界
は消え去る。

当然、それを見た沢山の悪霊とカラスは、これ幸いと二人に襲い
掛かってきた。

そして次の瞬間！

涼一を中心に先程の結界と同じ様な五芒星が出現したのである。

だが、形が同じと言うだけで色はまったく違っていた。

結界の五芒星は、青白く光り輝く色から燃えるような赤い色へと
変わっているからである。

襲い掛かってきた悪霊とカラスは、その赤い結界が出現するなり、
二の足を踏むかのように結界の手前で止まった。

沙耶香は赤い五芒星の結界が展開されるなり驚愕する。

何故ならば、一人の人間が放っているとは到底思えないほどの高
度に練られた靈力が結界内に充満しているからだ。

それらを見た沙耶香は、脅えにも似た感覚を覚えながら、こう考
えるのだった。一体、何が始まるの……と。

靈感の強い沙耶香だから余計にそう感じたのかも知れない。

また沙耶香は、これから行使する術を見逃さないでこうと考え
て、涼一をジッと見守るのであった。

赤い五芒星が周囲に展開されたのを確認した涼一は、結界内に充
満させた高練度の靈力と同じ波長に自分の靈力を合わせる。

そして浄化の炎の真言を唱えた。

《 ノウモ・キリーク・カンマン・ア・ヴァータ 》

その瞬間！

物凄い紅蓮ぐれんの炎が、涼一を中心に弾けた様に凄いで燃え広がり、炎を纏った巨鳥が其処に出現したのであった。

それと共に上昇気流が起き、周囲の枯葉や枝を宙に舞い上げる。

周囲に居た悪霊やカラス達は断末魔の悲鳴を上げる暇も無く、火の鳥が発する紅蓮の炎に飲み込まれて消滅してゆく。

沢山の悪霊を容赦なく焼き払って行くその様は、正ましく不浄を焼き尽くす炎といった感じである。

また、大きな火の鳥が羽ばたき舞っているかのように見える事もあり、非常に美しい光景となっているのであった。

沙耶香はそんな信じられない光景を目の当たりにし、一言こう呟いた。

「こ、こんな術があるなんて……す、すごい」と。

一方、片や涼一は初めて使う術の威力に驚いていた。

予想していた範疇ではあったが実際に体験するとなると、当然、訳が違うからである。

だが、今の涼一は驚いてばかりも居られない。何故ならば、初めて使った術であるが故の負担が、涼一自身に重く押し掛かっているからである。

険しい表情をした涼一の額や首筋からは、絶え間なく大粒の汗が落ちており、それらが押し掛かってくる負担の辛さを物語っていた。しかし、それももう終わりを迎える。

周囲に居た悪霊や式であるカラスを全て焼き払ったからである。

涼一はそれらの状況を確認すると霊力の供給を止めて術を終了させた。

すると、紅蓮の炎は役目を終えたかのように鎮火してゆき、その後には何事もなかったかの様に元の薄暗い景色へと戻っていったのである。

術を終えた涼一は疲労で片膝を地面につきしやがみ込む。そして大きく深呼吸をしながら乱れた呼吸を整えるのであった

俺は今の火界術・朱雀の法で、通常の行動に必要な霊力まで若干消費した所為か、立っているのも辛くなる。その為、一旦、地面に膝をついて大きく深呼吸をする事にし、それから身体に必要な霊力を徐々に練り始めるのであった。
するとそこで、後ろにいる沙耶香ちゃんが心配そうに声を掛けてきた。

「ひ、日比野さん。だ、大丈夫ですか」

俺は大きく深呼吸を繰り返しながら沙耶香ちゃんに振り向く。

そして言った。

「ああ、大丈夫だよ。ちょっと疲れただけだからさ、フウウ」

「そ、そうですか……」と答えた沙耶香ちゃんは何処かソワソワした仕草をする。

恐らく、この短い間に色んな事が起きた為、整理がつかないのだろう。無理もない。

俺達の間を暫く無言の時間が続く。

俺はある程度霊力が回復したところで、地に伏せる沙耶香ちゃんに向かい口を開いた。

「沙耶香ちゃん、一体こんな所で何をしていたんだ？ さっきは間

一髪間に合ったからいいけど。幾らなんでも一人では危ないよ」

「えっと……そのお……あのお」

俺の問い掛けに、沙耶香ちゃんはシドロモドロな感じになる。どうやら複雑な事情があるようだ。

と、そこで鬼一爺さんが話を割ってきた。

（オイッ、涼一。此処はもう終わりじゃ。霊力が回復したのなら直ぐに負の地脈の所にまでゆくぞ）

「あ、あの時の幽霊！」

沙耶香ちゃんは突然現れた鬼一爺さんを見るなり、指を差しながらそう言った。

俺はその反応を見るなり、危険人物として沙耶香ちゃんをマークしていたのを思い出す。

だが、最早そんな事を言っている場合ではない為、俺は沙耶香ちゃんに言うのだった。

「沙耶香ちゃん、今は時間がない。詳しい話は後ですから待っててくれるかい？」

「ま、待って下さい。何処に行くんですか？」と沙耶香ちゃんは慌てて言う。

「ゴメン、今は詳しく話してる時間がないんだよ」

俺がそう告げるや否や、沙耶香ちゃんは突然泣き出すのだった。

「わ、私を、ひ、一人にしないで下さい。ヒイエエン……ヒグッ」

そんな沙耶香ちゃんを見た俺と鬼一爺さんは、お互いに顔を見合す。

爺さんは困った表情をしている。勿論、俺もだ。

多分、今までの張り詰めた緊張の糸が切れたからだろう。余程怖かったに違いない。

しかし、このままでは事態が進展しない為、観念して俺は言った。

「フウ、分かったよ。一人にしないから泣かないで」

俺は泣いている沙耶香ちゃんの顔を胸に抱き寄せて頭を撫でる。

丁度、子供をあやすような感じだ。

すると、落ち着いてきたのか徐々に泣き止んできた。

そこで俺は言う。

「ゴメンね、沙耶香ちゃん。どう、落ち着いた？」

「グスツ……は、はい」

と鼻を吸りながら返事をした沙耶香ちゃんは、目を潤ませて恥ずかしそうに俺を見上げる。

「そっか。それじゃあ立てる？」

「そ、それが、足を怪我してしまいました……」

沙耶香ちゃんは右足首に手を当てながら申し訳なさそうに言った。「ちよつと見せてくれるかい？」

「は、はい」

沙耶香ちゃんの右足首には、やや深めの切り傷が出来ており、まだ出血していた。

傷を確認した俺は両掌に靈力を集中させる。すると、両手が青白く光を帯び始めてくる。

そして、ある程度の靈力が集まったところで、俺は沙耶香ちゃんの右足首患部を両手で優しく包み込むのであった。

実はこれ、鬼一爺さんからつい最近習った靈力を使う治療法の一つである。とは言っても傷の治りを早める事くらいしかできないが……。

まあそんな訳で、それを沙耶香ちゃんに行っているのである。早い話が応急処置だ。

20秒程そうやったところで、俺は患部から手を離す。

すると、出血はもう治まっており、傷口は瘡蓋かさぶたが覆っていた。

それを確認した俺は沙耶香ちゃんに言う。

「よし、とりあえず、これで出血は止まったから大丈夫かな。まだ痛いかもしれないけどね」

「ひ、日野さんはヒーリングも出来るんですか？」

と、沙耶香ちゃんは今の応急処置を見るなり驚いた表情で言った。

「ヒーリング……何それ？」

「エッ？」

俺がそう答えるなり、沙耶香ちゃんはガクツとなる。どうやら今の返答が予想外だった様だ。

それはさておき、自分達の反対側からは負の波動が変わらずに感じられる。

その為、俺は沙耶香ちゃんに魔除けの符を渡すと共に言うのだった。

「今から悪霊が寄ってくる元を封じに行くから、これを持ってて」

「こ、この霊符はッ！」

「ああ、それ魔除けの符とって、それを持っていれば弱い悪霊なら寄ってこない筈だよ」

「……」

だが沙耶香ちゃんは、魔除けの符を見るなり大きく眼を見開き、口をパクパクと震わせていた。

良く分からないが、魔除けの符が衝撃的だったみたいである。俺の説明もどうやら耳に入っていないようだ。

そんなに珍しかったのだろうか？ などと考えながらも俺は沙耶香ちゃんに言う。

「さ、それじゃあ行こうか」

俺はそう言うと、沙耶香ちゃんが立てる様に手を差し伸べた。

「は、はい」

沙耶香ちゃんは魔除けの符をとりあえずポケットに仕舞うと、俺の手を取り立ち上がる。

だが、右足首に痛みが走ったのか、一瞬顔を顰めるしかのだった。その表情を見た俺は直ぐに問う。

「まだ、かなり痛む？」

沙耶香ちゃんは申し訳なさそうにコクリと無言で頷く。

と、そこで鬼一爺さんが焦った表情で俺に言う。

（涼一、今はまだそれ程に封印は解けてない様じゃが、早くせねば不味い事になるぞい）

「わ、分かってるよ。あまり急かさなくてくれよ、鬼一爺さん」

どうするかを考えたところではあるが、色々と考える時間が勿体無いので、俺は奥の手を使うことにした。

沙耶香ちゃんの真横に俺は移動すると、背中と膝の裏に手を回して抱きかかえたのである。

まあ俗に言う、お姫様抱っこというやつだ。

「エッ、ひ、日比野さん。何を……」

沙耶香ちゃんは突然こんな体勢で抱きかかえられたので、声を上

ずらせて恥ずかしそうに答える。

しかし、説明している時間が勿体無いので、俺は移動しながら沙耶香ちゃんに言うのだった。

「ゴメンね、沙耶香ちゃん。今は時間が惜しいんだ。批判は後で聞くよ」と

眩道斎は大きな丸い石に施されていた封印を高練度の霊力で緩めると、其処から負の霊力を引き出して周囲の悪霊を呼び寄せた。引き出した負の霊力で式を行使して悪霊を誘導させ、その悪霊によつて炙りだされる沙耶香を式の目を通じて見付けようとしていたのである。

20分程そうやって負の霊力を引き出しながら式を操っているとようやく効果が表れてきた。放った式の一体が沙耶香を捉えたのである。式の目を通してその現場を見ていた眩道斎は、口元を吊り上げて不気味な笑いを浮かべると、そこで始末するべく巧みに式を操るのであった。

そして止めを刺そうとした時、予定外の人物が林の中から現れたのである。勿論、その人物とは涼一の事である。林から突如現れた涼一は周囲に50体は居たであろう悪霊と、自分の放った式全てを焼き払ってしまったのだ。

また、式を通して見えていた景色もそれと共に、当然、途切れる事となったのであった。

「クツ、何イイツ。悪霊どもと俺の式を一瞬で全て焼き払っただど！ クソツ、一体何者だあ」

眩道斎は先程の光景を思い出すと醜く顔を歪ませ、そう叫んだ。だが、直ぐに冷静さを取り戻して次の行動を考え始める。

眩道斎が出した結論は、一旦、この場を離れる事にして何処かで隠れながら様子を見るといった隠密行動である。そう結論した眩道斎は封印をこのままの状態にしておき、早速この場を後にするので

あつた。

黒いコートに身を包んだ眩道齋は、周囲の暗闇と同化しながら人払いの結界の外へ出ると参道へ向かう。そして神社の正面入口である赤い鳥居の方へと進み始めるのであつた。

眩道齋は70m程先に見える鳥居に向かい、参道を真っ直ぐに進んで行く。

だがその途中、鳥居近くに聳え立つ巨木の所で、あるものが眩道齋の目に入ってきたのである。

それを視界に納めた眩道齋はニヤリと不気味な笑みを浮かべ、忍び足でそれに近寄るのであつた

俺は沙耶香ちゃんを抱きかかえながら、負の波動の発信源へと向かい歩を進めていた。

境内は隣にある公園の明かりが少しばかり届いてはいるので多少は明るい。が、しかし、流石にそれだけの明かりで歩を進めるのは困難なので、俺は先程まで悩んでいたのである。だがその時、俺は今日作つたばかりの霊符、その名も霊光灯の符があつたのを思い出す。俺は思い出すや否や、早速、それを取り出して明かりを灯すのであつた。

そして、沙耶香ちゃんに霊光灯を渡して前方を照らしてもらいながら進む事にしたのである。

因みに沙耶香ちゃんは「何ですか、この霊符は？」と聞いてきたが適当に笑って誤魔化しておいた。その為、説明はしていない。理由は勿論、爺さんと同じ反応をされたら嫌だからである。

また、俺達の周囲には数体の悪霊が漂っている。だが、魔除けの符の効果もあり、ある程度までしか近寄ってこない。その為、割とスムーズに移動できているのであつた。恐らく、火界術・朱雀の法で俺が此処に集まっていた大部分の悪霊を焼き払ったという事もあるのだろう。

そんな事を考えながら暫く進んで行くと、前方に大きな丸い石が鎮座する場所に辿り着いた。

灰色の大きな石で、どうやら負の波動は此処から生まれている様である。地面には周囲に巻かれていたであろう注連縄？（しめなわ）が、鋭利な刃物で切裂かれて落ちていた。明らかに人為的な痕跡である。

俺はその丸い石から若干離れた所で沙耶香ちゃんを降ろすと言った。

「沙耶香ちゃん、暫く此処に居てくれるかい？」と。

「日比野さん。あ、あの神籬ひもろぎの所へ行くんですか？」

沙耶香ちゃんもアソコから出てくる負の波動を感じるのか、やや脅えた様子で言う。

「ああ、あれが周囲の悪霊が寄ってくる原因だからね。それと、さつき渡した霊符は無くさないでね。アレを持っていれば、そこ等辺に居る悪霊程度なら寄って来ないと思うから」

俺は笑顔でそう告げると、沙耶香ちゃんの頭を撫でる。

すると、恥ずかしかつたのか顔を赤くして下に俯くのだった。どうやら、だいぶ緊張は解れているようだ。

そんな沙耶香ちゃんの様子を見て安心した俺は石の所へ移動する。そして、俺は隣に浮く鬼一爺さんに向かい問い掛けるのであった。「爺さん、アソコから負の波動が流れ出ているようだけど、どうするんだ？」

鬼一爺さんは顎に手を当てやや渋い表情で言う。

（ムウ……どうやら何者かが負の龍穴の封印を緩めた様じゃな。中途半端に龍穴が開いておる）

「負の龍穴？ それってつまり地脈を流れる霊力が、自然に湧き出る箇所の事だよな」

（フム、そうじゃ。兎に角、今は一刻も早くこの負の波動を封じねばならん。涼一、布都御魂剣ふつのみたまのつゑぎを送還の符から出すのじゃ）

「あ、アレを出すのか……」

俺は少々ではあるが、霊符入れからそれを封じた送還の符を取り出すと地面に置く。

そしてもう一度、鬼一爺さんの顔を見てから言った。

「じ、爺さん。それじゃあ、本当に符の結界を解くぞ？」

鬼一爺さんは無言で頷く。

それを見た俺は、深呼吸を一回した後に畳んである符を広げるのだった。

符の中心にある結界には以前と変わらず、深紫色に光る空間が小さく展開されていた。

そこで俺はゴクリと生唾を一回飲み込む。だが、悩んでいてもしようがない為、俺は思い切って符の結界を解いたのであった。

その瞬間！ 符から飛び出るように布都御魂剣ふつのみたまのつるぎが出現した。

青白く妖しい光りを放つ刀身は相変わらず健在だ。だが、刀の周囲からは以前にも増してピリピリとした、布都御魂ふつのみたまのヤバイ雰囲気
が俺の霊感に伝わってきたのである。恐らく、霊術修行によって培われた霊感に磨きが掛かった所為だろう。

そんな事を考えつつも、俺は飛び出た刀に恐る恐る手を伸ばして柄を握るのであった。

そして身体に異変が無いのを確認したところで、俺は爺さんに向かい言った。

「じ、爺さん。とりあえず、刀は取り出したぞ。これをどうするんだ？」

（よし、成らば、その刀を石の根元の地面に突き立てるのじゃ）

「お、おう分かった」

俺は早速言われたとおりに刀を突き立てた。

すると、湧き出ていた負の霊力が布都御魂剣ふつのみたまのつるぎに吸い上げられてゆくのである。

それを感じ取った俺は若干ビビリながら鬼一爺さんの顔を見る。

爺さんは俺と目が合うなり次の指示をしてきた。

（涼一、刀が負の霊力を吸い上げているのが分かるな？）

「ああ、一応ね……」
（よし、では布都御魂剣はとりあえずこのままにしておいて、今から我が言つとおり地面に法陣を描くのじゃ。持ってきた墨壺と糸を用意せよ）

「オ、オウ。わ、分かった」

ややどもりながら俺は返事をする、持ってきた術具入れの中から墨壺と糸を取り出す。

そして、鬼一爺さんの細かい指導の下、丸い石を中心に見た事もない術式を描いてゆくのであった

それから20分後。

俺はその都度、爺さんの説明を聞きながら術式を描くという作業を繰り返していた。

時折、沙耶香ちゃんの方へと視線を向ける。沙耶香ちゃんはまだ足が痛むのか、右足首を押えていた。まあ、応急処置だけだから仕方ない。

と、そこで、作業中の俺に向かい鬼一爺さんは龍穴の話を始めるのであった。

（涼一、こういった負の龍穴を封じた場所というのは各地に存在するのじゃよ。じゃが、一度緩めた封印はもう使い物にならないのじゃ。その為、直ぐに再封印を施さねばならんのじゃよ。しかし、一つ大きな問題があつての。龍穴の封印は規模にも依るが、最低でも10人以上の術者の霊力が必要なんじゃ）

「ちよ、ちよつと待てよツ。10人以上の術者なんて何処にもいないじゃないか？」

聞き捨てならないことを鬼一爺さんが言った為、俺は即座に問い掛けた。

（確かに10人の術者はおらぬ。だが、お主にはそれを補って余りある手段があるのじゃよ。涼一、もう大体分かったであろうか？）

俺は爺さんの言葉を聞きながら、石の根元に突き刺した布都御魂

剣に視線を向ける。

そして言った。

「布都御魂剣ふつのみたまのつるぎが取り込んだ霊力を使うつて事か……」

（そうじゃ。だからあの時、刀を持って来いとお主に言ったのじゃよ。これはお主でなければ対応できぬ事じゃからの）

「……なるほどね。さて、一応、言われたとおりに描いたけど、この後はどうするんだ？」

俺がそう問い掛けると、鬼一爺さんはニコリと微笑みながら言った。

（では涼一、もうやる事は一つじゃ。布都御魂剣ふつのみたまのつるぎが取り込んだ霊力ちれいふうしんを用いて地霊封陣ちれいふうじんを発動させるのじゃ。あ、言い忘れたが、布都御魂剣ふつのみたまのつるぎの使い方は依り代の使い方と同じじゃからの。では頑張れッ）
そう俺に告げた鬼一爺さんは、自分のやる事は全て終わったとばかりに、そそくさと法陣の外へ出て行くのだった。

何となく鬼一爺さんの行動にムカついたが、今は負の龍穴を封じるのが先決な為、俺は地霊封陣を行使する事に意識を向かわせた。

布都御魂剣ふつのみたまのつるぎの所にまで移動した俺は刀の柄を握ると、剣から発せられる波長と自分の靈魂の波長を合わせ始める。

そして波長が同期した、その時！ 膨大な霊力が自分の靈魂と繋がったのを俺は感じ取ったのであった。それは恐ろしいほどの霊力で、身体中から青白いオーラを放つくらいである。

俺はその余りにも強力な力に思わずたじろぐ。

（涼一、何をやっつとるッ、早く法陣を行使するのじゃ！）

と、そこで爺さんが俺に叫ぶ。

恐らく、布都御魂剣ふつのみたまのつるぎの力にビビった俺に渴を入れたのだろう。

「わ、分かった」

俺は爺さんの一声で冷静さを取り戻すと、一旦、刀を石の根元から抜いた。

そして鬼一爺さんから説明された所定の位置に向かった俺は、其処に布都御魂剣ふつのみたまのつるぎを突き立てて、地霊封陣の術を発動させたのであつ

た。

その瞬間！ 丸い石を中心に描いた法陣が眩しく光り輝く。それはまるで、青白く光輝いた柱が建ったかのように見え、その何ともいえない美しい光景に俺は言葉を失った。だが、その輝きも徐々に終息していき、最後には先程と変わらない薄暗い景色へと戻る所以であった。

光が消えたところで、いつもの雰囲気に戻った鬼一爺さんが俺の傍に来て言う。

（よし、良くやったわい涼一。これで、封印はお仕舞いじゃ。すまんの、お主には苦労かけるわい。フオフオフオフオ）

「フウウ、なんか知らんけどスツゲー疲れたよ」

術を終えた俺は、突如襲ってきた疲労感の為、ドサツと地べたにへたり込む。

そんな俺を見るなり鬼一爺さんは笑いながら言うのだった。

（フオフオフオ、すまんの涼一。それを言うのを忘れてたわい）

「何だよそれ……」

爺さんは懸念事項が取り除かれたので、かなりテンションが高い。さっきまでの焦った様子からすると雲泥の差である。

と、その時、沙耶香ちゃんが怪我した右足を庇いながら、ゆっくりと此方にやってきた。

沙耶香ちゃんは大きく目を見開いた驚きの表情で俺と鬼一爺さんの顔を交互に見る。

そして、一呼吸於いてから真剣な表情で俺に言うのであった。

「ひ、日比野さん、今の術は一体……。いや、それよりも、そのご老人の幽霊は一体誰なのですか？ 私は今までこんなタイプの幽霊を見た事がありません。どういう事なのか差し支えなければ教えてくださいませんか？」

「じ、爺さんかい？」と言った俺は鬼一爺さんを見る。

鬼一爺さんは、なんか微妙な表情をしていた。

「はい、差し支えなければ」

そこで沙耶香ちゃんはもう一度聞いてきた。
俺は腕を組み目を瞑る。

そして、どうしようか悩んだその時だった。

「クククククッ」

と、奇妙な笑い声が前方の暗闇から聞こえてきたのである。

感じ的には、以前見た「犬神家の一族」に出てきたスケキヨのような笑い方だ。多分……。

そして、その笑い声を聞いた沙耶香ちゃんは、肩を震わせて脅えながら俺の傍にやってきたのだった。

俺はとりあえず立ち上がり、声の聞こえる方向に視線を向ける。

すると其処から、黒いロングコートに身を包んだ不気味な感じの男が現れたのであった。

その出で立ちにはマト ックスの終盤に出てきたネオといった感じだ。顔は全然違うが……。

だがそこで、俺は大きく目を見開く。

何故ならば、その男と共に首筋にナイフを突きつけられながらも
う一人の人物が現れたのである。

俺の良く知る人物が……。

「ひ、日比野さん」

「瑞希ちゃん、如何して此処に！」「た、高島さん！」

参拾壹ノ巻

《 参拾壹ノ巻 》 修羅場

目の前に突如現れた不気味な男が瑞希ちゃんの喉下にナイフを向かわせている。

「ひ、日比野さん……」

顔を引き攣らせ今にも泣き出しそうな表情の瑞希ちゃんは、俺の名前を弱々しく呼ぶ。口には出していないが、瑞希ちゃんの表情からは助けて欲しい、という悲痛の訴えがありありと感じられるのであった。

隣に居る沙耶香ちゃんは、信じられない物を見るかのように肩を震わせながら、両手で口元を覆い、目は大きく見開いていた。勿論俺も信じられない様な気持ちだ。出来れば夢であって欲しい。だが、目の前で確かに起きている事なのである。

俺は男に視線を移す。顔はかなり人相が悪く、頭髮は肩の下まで伸びた漆黒のロン毛である。着ているのが黒一色である所為か、パツと見は人相の悪い顔だけが宙に浮かんでいる様に見える。また、男は先程からずっと俺達を睨みつけており、口元は薄気味悪い笑みを浮かべているのだった。

俺はこれらの特徴を見て、先ず間違いなく『堅気の人間ではない』と考えていた。男が放つ殺気もそれに拍車をかけている。

だが、そこで俺は考えるのである。何故この男は、瑞希ちゃんを人質に取る様な真似をしているのだろうか？と……。恐らくだが、この龍穴の封印を緩めたのはこの男で間違いないだろう。目の前の男からは高い霊力の他に、龍穴から出ていた地霊力の残りカスの様なものを感じるからだ。何の為に封印を解いたのか分からないが、この男の雰囲気や瑞希ちゃんにナイフを突きつける態度を見る限り、

碌な事では無い筈だ。

しかし、幾ら考えてもこの状況が飲み込めない俺は、とりあえず、男を睨みつけながら問い掛けるのだった。

「オイ、アンタ。一体、何のつもりだッ。女の子の首にナイフなんか当てやがって」

すると男は不気味な笑い声を上げながら言った。

「ククククッ、何のつもりだ、か……。お前がイケナイんだよ。その女の止めを刺そうとしたところに、お前が邪魔しに現れたからこうなっているんだ。ククク」

俺は隣で震える沙耶香ちゃんに視線を向ける。沙耶香ちゃんは無言で頷く。

どうやら男の言っている事は本当のようだ。

この男と沙耶香ちゃんの事情は良く分からないが、今のこの状況は何となく見えてきた。

そこで俺は目付きを鋭くしながら言った。

「今の話じゃ、その子は関係ないだろ。解放しろよッ、オッサン」
「クククッ、なんで俺がこの娘を人質にしているのか、分かってないようだな。いいだろう、教えてやろう。それは、お前が見ず知らずの他人を救出に向かうお人好しだからだよ。俺はなあ、お前の様な正義ぶった馬鹿を見ていると虫唾が走るんだ。クククッ、まあいい。それは兎も角、持っている術具や武器を全部出せッ！ この娘の命が惜しいならな」

男は歪んだ笑みを浮かべながら俺達にそう言い放った。

「クッ、テメエ汚ねえぞ」

「クハハハッ。さて、早く出してもらおうか？ その女あ、お前もだ！」

男は沙耶香ちゃんに物凄いメンチを切る。

その射るような視線に、沙耶香ちゃんは小さく「ヒッ」と声を出しながら、身体を竦すくませるのであった。

俺は打開策をそこで考える。だが、余計な事をしてこの男の神経

を逆撫でると瑞希ちゃんの命が危ない。何故ならば、恐らく、この男は真つ当な道を歩む人間では無いからだ。それ以外にも、先程から俺達に向け、異様な殺気を放っており、殺すのを躊躇ためらいそうな生易しい雰囲気というのが、この男からは感じられないのである。

以上の事から、俺はとりあえず男の要求に答える事にし、渋々持つている霊符入れや術具を地面に放るのだった。続いて、沙耶香ちゃんもポケットから幾つかの術具を地面に放る。

だが、その中に拳銃の様な物が紛れていたので、俺は思わず「エッ？」と言ってしまった。それと同時に「沙耶香ちゃんは一体何者？」と思つたのは言うまでもない。

まあそれは兎も角、非常に良くない状況である。

目の前の男は、恐らく、瑞希ちゃんも含めこの場に居る者を全員始末するつもりに違いない。

そう考える俺は男を注視しつつ色々と策を巡らせる。だが、中々良い案が浮かばない。

また、焦っている今の心境が顔に出たのか、男は俺の顔を見てニヤリと笑みを浮かべると言うのだった。

「クククッ、赤の他人なぞ、ほつとけばいいものを正義ぶってしゃりり出て来るからこうなるんだ。ククク、幾らお前が優れた術者であろうと、立て続けに行使した大きな術で今はかなり疲労が蓄積している筈だ。その上で、この娘という手駒を俺は手に入れた。ククク、俺の勝ちだ。さて、どうやって始末をしてやるうか」

悔しいが、奴の言ったとおり俺は大きな術を連続で使い続けた為、実は立っているのも辛い状況だ。

非常に不味い……。完全に奴のペースだ。何とかして今の状況を打破しなければ……。

と、俺が考えていた丁度その時。

鬼一爺さんが男に向かい、普段と変わらない物腰で口を開いたのだった。

（お主、人を殺めるのが生業なりわいの術者だの。まあそれは今はどうでも

よいわ……。一つ聞きたい。お主、何の為に龍穴の封印を解くつもりだったのじゃ？」

「そう言えば、妙なジジイの霊体が居たのを忘れていたよ。まあいい。何の為だ？ といったな。決まっているだろう。境内に隠れていたその女を炙り出す為だ。コイツが邪魔しにさえ来なければ、予定通り始末できていたんだよ」

と言った男は俺を睨む。

（ほう。で、その後はどうするつもりだったのじゃ？ 一度緩めた封印はもう元には戻らん。あのまま放っておけば何時かは封印が完全に解けてしまい、この周囲が大量の悪霊で埋め尽くされる事になるのだぞ。封印の緩め方を知っているという事は、お主にもそれが分かっている筈じゃ）

鬼一爺さんは鋭い眼差しを男に向けると、言葉にやや怒気を込めてそう言った。

だが男は、そんな爺さんを嘲笑いながら言う。

「クハハハッ、知った事か。俺は目的を達せさえすればそれでいいのだからな」

（……フム、どうやらお主に術を授けた者は、相当な愚か者だった様じゃ。いや、まさか此処まで愚かな男として育つと思わなんだか、どっちかじゃな……）

鬼一爺さんは蔑んだ眼差しを男に向けると、顎に手をあてて嫌味たらしく言った。

すると、男は目付きが変わる。

体中からドス黒い殺気を振りまき、憎憎しい血走った瞳を爺さんに向けて男は言う。

「ジジイ、俺の師を愚弄する気が……いいだろう。まずは貴様から始末してくれる」

男は瑞希ちゃんにナイフを向かわせながら、俺達の放った術具の所へと歩を進める。

そして、沙耶香ちゃんが放った拳銃の様な物体を拾ったのであつ

た。

俺の隣で脅える沙耶香ちゃんは、男がその物体を拾うのを見ると険しい表情を浮かべる。その表情を見る限りでは、結構強力な術具なのかもしれない。

男はその拳銃の様な物に霊力を籠める。すると、その拳銃から次第に霊圧が上がってゆくのを俺は感じ始めるのだった。どうやら、籠めた霊力を一点に集束させているようである。

霊圧がかなり高くなったところで、男は爺さんに照準を合わせて銃口を向けた。

「ククク、消えるツジジイ」

その瞬間！

銃口から白い閃光と共に、一筋の光の矢が爺さんに襲い掛かるのを俺は見たのだった。

その光景はまるで、いつか見たSF映画のレーザー銃の様である。

（ノワアアアアア！）

「き、鬼一爺さんッ」

俺は慌てて爺さんの無事を確認する。

するとなんと、鬼一爺さんはエビゾリの様な体勢で、今の光の矢を何とかかわしていたのである。マト ックスのある有名なシーンの様に……。

なんて器用な幽霊なんだと思ったが、とりあえず、無事であったので俺はホッと胸を撫で下ろすのであった。

（と、突然、何すんじゃアア！ この阿呆たれがアア）

だが鬼一爺さんは今の攻撃が相当頭に来たのか、物凄い形相で男に向かい絶叫した。

そして今度は俺に物凄い形相で絶叫する。

（涼一ッ、あ奴を懲らしめるんじゃアアア。あんな悪人をのさばらせてはならんのじゃアアア。我慢ならんのじゃアア）

「こ、懲らしめるって言ったって……。瑞希ちゃんが人質になってるから下手な事はできないよ。それに、俺も大きな術を使ったか

らガス欠だ」

(ぐぬぬぬッ、おのれエエ。成らば、あの剣を使い奴を倒すのじゃアア。早うせいッ、涼ーイ)

鬼一爺さんは頭に血が上っているのか、男と布都御魂剣を交互に指差し、我を忘れてそう叫ぶのであった。

だが、そこで男は不気味な笑い声を上げる。

「クハハハッ、ジジイさっきまでの威勢はどうした？ みっともないぞ、取り乱して」

男はそう言った後、地霊封陣を発動させる為に結界内に突き刺したままになっている布都御魂剣に視線を向かわせた。

それを確認した男は薄気味悪い笑顔を浮かべて言う。

「ほう、かなり強力な霊刀のようだな。此処にいてもピリピリと強い波動が伝わってくる。クククッ決めたぞ。あの刀の霊力を使ってお前達を始末してやるっ」

「へッ？」

その言葉を聞き、俺は思わず気の抜けた声を出した。

男は瑞希ちゃんの手を強引に引きながら布都御魂剣へと近付いてゆく。

それを見た俺が「あのお……」と言葉を発したところで鬼一爺さんが目の前に現れる。

爺さんは真剣な表情で俺を見ながら首を左右に振った。何も言うなどという事なのだろう。どうやら、さっき取り乱したのは演技のようだ。

それを察した俺は男に視線を向ける。

すると、男はもう剣の前に到着したところであった。

「コッチへ来いッ、小娘ッ」「キヤッ」

眩道斎は脅える瑞希の手を無理矢理引きながら布都御魂剣の所へとやってきた。

二人の眼前にある地面に突き刺さった布都御魂剣は、見る者を引き寄せるかのように絶えず美しく儂い光を発している。

瑞希はポツンと青白い光を放つその刀に目を奪われていた。その様は暗闇の中に咲く一輪の花の様にも見え、幻想的な光景となっているからである。それは眩道斎にしても同様で、その美しい姿に暫しの間立ち尽くして見惚れていたのであった。

眩道斎はその刀を見るなり考えるのである。「こんなに美しく強い波動を発する霊格の高い刀は、今まで見た事が無い。これは恐らく、とてつもない霊刀に違いない」と……。

だが、美しさと共に非常に危険な感じのする雰囲気も眩道斎は感じとっていた。それは美しい薔薇の花が持つ棘の様な感じである。その為、眩道斎は刀に手を伸ばすのを若干、躊躇ためらっているのであった。

暫しの間、刀を眺めながら眩道斎は思案する。

眩道斎はこう考えていた。「もし、負の思念が渦巻く霊刀であっても、自分の強い精神力と高い霊力で押さえつけてやればいい。俺にはそれだけの力もある。そしてこの刀を俺の物にしよう」と。

そう結論した眩道斎は一步踏み出して刀の前に近寄る。

そして、霊力を集中させた右手を刀へと持ってゆき柄を握ったのだった。

と、その瞬間！

「ウオオオオオオオオ」

眩道斎は雄叫びの様な声を上げた。

だが、それだけではない。其処では誰の目から見ても異様と思えるような光景が繰り広げられていたのである。

何故ならば、眩道斎が柄を握った瞬間、身体全体から仄かな白い光が発せられると共に刀がそれらの光を吸い込んでいるからなのだ。眩道斎は目を大きくさせて苦悶の表情を浮かべると、苦しみの余り瑞希を掴んでいた左手を離れた。

その左手で柄を握る右手首を掴んで、無理矢理、刀から引き剥が

す。

柄から手を話した瞬間、眩道齋の身体から発せられていた白い光も消え失せて行く。

そして、燃え尽きたかのように眩道齋は地面に両膝をゆっくりと付き蹲るのであった。

眩道齋が刀から手を離れたのと同じくして、外見にも異変が現れる。

なんと、眩道齋の長い髪全てが白髪へと変貌を遂げていたからである。また、肌も青白く病人の様にゲツソリとした感じになっている為、先程とは打って変わり、衰弱したような印象を見る者に与えているのだった。

「ヒッ、し、白髪になってる!」

瑞希は眩道齋の異変を見るなり脅えながら後ずさる。

「瑞希ちゃんッ、早くコツチへ来るんだッ」とそこで涼一が間髪いれずに瑞希を呼ぶ。

「は、はい」

瑞希も今の言葉を聞き、すぐさま、涼一の元へと駆け寄るのであった。

ふっのみたまのつゑ

布都御魂剣に生気を抜かれた男の体勢が崩れてゆく。

それを見た俺は、直ぐに、瑞希ちゃんを此方へ来る様に促した。

「瑞希ちゃんッ、早くコツチへ来るんだッ」

「は、はい」

瑞希ちゃんは慌てて俺の元へ駆け寄ってくる。

そして、俺の胸に飛び込むと同時に泣き出したのだった。

「ひ、日比野さぁんッ。こ、怖かったよぉお。ヒイエエェン」

「た、多分、もう大丈夫だよ」

俺はとりあえずそう言いながら、胸元に顔を埋める瑞希ちゃんの頭を優しく撫でる。

撫でた手に瑞希ちゃんの震えが伝わってきた。余程、怖い思いをしたのだろう。

そうやって瑞希ちゃんの頭を撫でていると、鬼一爺さんが目の前に来て男を指差し言った。

（涼一、まだ終わりではない。あの男は布都御魂剣ふつのみたまのつるぎに生気を大分抜かれはしたが、まだ生きておる。気を抜くでないッ）

「お、おう……って爺さん。あの刀に触れた者は、生気を抜かれて死ぬんじゃないのか？」

御迦土岳で鬼一爺さんが言っていた話を思い出しながら問い掛ける。

（それはの、あ奴の霊力が高いからじゃよ。高い霊力を練れる者ならば、一瞬で生気を抜かれて死ぬという事は無いのじゃ。とは言っても、あのまま柄を握り続けていたらそうなっておったかの）

「そ、そうなの……へ、へえ」
俺はそう返事をする。と男に視線を向かわせる。

男は両膝を地面につき息が荒くなっている。どうやら、鬼一爺さんの話は本当のようだ。

そこで隣にいる沙耶香ちゃんが妙に畏かしこまった仕草をしながら俺に言う。

「日比野さん。今は詳しく言えませんが、私はあの男を追っていたんです。それで、あの男の捕縛に協力して下さい。お願いします」

「ヘッ、ほ、捕縛？ ッて言っても取り押さえる物が無いよ」
と俺が告げると、沙耶香ちゃんはポケットから青い紐を取り出した。

「こ、これがあります。これは本来、護身結界に用いる霊系ですが、縛るのに使える強度がありますから」

「護身結界？ まあいいや。とりあえず、それで縛って身動き出来ないようにすればいいんだな」

「はい、宜しく願います。さあ行きましょう」

「ああ、分かった。それじゃ瑞希ちゃん、少し此処で待っていてく

れるかい？」

瑞希ちゃんは空気を察したのか、無言でゴクリと頷く。

そんな瑞希ちゃんの頭をもう一度俺は撫でると、先程放った霊符入れを拾い、沙耶香ちゃんと共に男の所へと向かうのだった。

沙耶香ちゃんは足を怪我している為、俺の肩を貸しながら進んで行く。

其処に着いた俺は、蹲る男ひざまに視線を向ける。先程まで、暗闇と同化している様にさえ見えた漆黒の長い髪は、長い年月を重ねたかのような真つ白い髪へと変貌を遂げていた。また、それと共に身体全体が小刻みに震えている。

そんな男をやや哀れに思いながらも、俺は男をこんなにした布都ふつのみ御魂剣たまのつるぎに視線を向け、ゴクリと生唾を飲み込むのだった。

そこで沙耶香ちゃんは、さっきの紐をポケットから取り出す。

と、その時！

「女アア、死ねエエエ」

男は突如長い白髪を振り乱し、狂った様な表情を浮かべながらそう叫んだのだった。

それと同時に、先程の拳銃の様な物を男は沙耶香ちゃんに向けて放ったのである。

その瞬間、白い強烈な閃光の矢が沙耶香ちゃんを襲う。

だが俺は無意識の内に沙耶香ちゃんを押し倒していた。

「危ないッ」

「キヤツ」と沙耶香ちゃんは突然の事に悲鳴を上げる。

「グアア」と俺は苦悶の声を上げた。

何故なら、拳銃から放たれた光の矢は沙耶香ちゃんを押し倒した俺の肩を貫いたからである。

俺は肩からくる激痛で顔を顰しかめながらも、男に視線を向かわせた。すると、男は今の一撃で力を使い果たしたのか、グッタリと地面に横たわっていた。

男からは微弱的な霊波しか感じない。どうやら本当に力を使い果た

した様である。

俺は撃たれた肩に手を当てながら上半身を起こす。

「ひ、日比野さんッ、大丈夫ですか!？」

俺の肩から流れる血を見るなり、沙耶香ちゃんは青い表情で言った。

「だ、大丈夫ではないね……グツ。それよりも、今の内に早く男を縛らないと。多分、今で男は力を使い果たして気を失っている筈だから。それとあの刀には触らないでね」

「は、はい」

沙耶香ちゃんは恐る恐るながらも男に近付いてゆき、男の様子を間近で見る。

完全に意識を失っているのを確認すると、紐で男の手足を縛り始めるのであった。

俺は立ち上がると霊符入れの中から霊籠の符を取り出して、肩の傷口に何枚か貼り付けると力を解放した。一応、応急処置である。そして出血が止まったのを確認した俺は、布都御魂剣ふつのみたまのつるぎを封じる為、霊符入れから送還の符を取り出すのであった。

俺が送還の符に剣を封じたのと同じくらいに沙耶香ちゃんも男の手足を縛り終えたようである。

拘束を終えた沙耶香ちゃんは俺の傍に来て心配そうな眼差しを向ける。

「日比野さん。肩は大丈夫ですか？」

「ン？ とりあえず、応急処置しただけだからね。まだ痛むよ。ハハハ」

俺は無理して爽やかに言った。

だが、そんな俺を見るなり沙耶香ちゃんは涙を流しながら謝る。

「ご、ごめんなさい……私の所為でこんな目に遭わせてしまって」

「いいよ、もう。兎も角、これでやっと気が楽になったよ……フウ」

俺は蓄積された疲労と肩の傷の事もあってか、その時、突然眩暈が襲ってきた。

その為、足元が覚束おぼつかなくなりバタリとへたり込むと、大の字になつて地べたに寝転がるのだった。

「ひ、日比野さん！」

沙耶香ちゃんと瑞希ちゃんが綺麗にハモリながら俺の名前を叫ぶのが聞こえてきた。

そして、やや離れた所で爺さんと共にいた瑞希ちゃんは、慌てて俺の元へと駆け寄り泣きながら身体を揺さぶるのだった。

「ひ、日比野さん、大丈夫ですか。日比野さんッ日比野さん。死んじゃ嫌だよ。ヒイエエェン」

「瑞希ちゃん、い、痛い痛い。肩を怪我してるから、あまり揺さぶらないで」

「アッ……ご、ごめんなさい。グスッ」

瑞希ちゃんは涙を流しながら両手で口元を覆い、気まずそうに言った。

そんな瑞希ちゃんに笑顔を向けながら俺は言う。

「ちょ、ちよつと疲れただけだから、だ、大丈夫だよ。肩の傷も一応出血は治まったしね。ハハハ」

「ほ、本当ですか？ 嘘ついたら駄目ですからね」

「ハハハ、本当だよ」

と、そこで沙耶香ちゃんは携帯を片手に持ちながら俺に言う。

「日比野さん、救急車を呼ばなくても大丈夫ですか？」

俺は傷口に視線を向かわせる。

貫いた光の感じでは恐らく、小さい穴だろう。貫通してはいるが、この程度の傷なら霊力を使えば治りが早い筈だ。

そう考えた俺は沙耶香ちゃんに言う。

「いや、救急車は呼ばなくていいよ。貫通してるけど、それ程大きな傷じゃないから霊力で対処できそうだしね。それに、もう血は止まってるし、暫く休めば自分の家まで歩いて帰れると思う」

「そ、そんな無理しちゃ駄目です。今、父に連絡して迎えに来てもらいますので、しばらく待ってて下さい」

そう俺に言うや否や沙耶香ちゃんは、ボタンをプッシュして何処かに携帯をかけるのだった。

「アツ、お父様。今、宜しいですか？ エツ、は、はい……はい、以後気を付けます。す、すみません……今、着信があるのに気が付きました。は、はい、男の方は捕まえました。今は手足を縛って拘束中です。私のいる場所ですが、県庁の付近にある大きな神社にあります。公園と隣り合った所です。はい、それで来る時はお父様とお兄様だけで来て欲しいのです。……いえ、違います。例の術者が分かったのです。……はい、此処にあります」

といった具合の言葉が俺の耳に入ってきた。
沙耶香ちゃんは難しい顔になったり、申し訳なさそうな顔になったりと、色んな表情を作りながら話していた。

それが可笑しかったので、俺は思わずクスリと笑う。時折、俺の顔を見ながら話しているのが気になったが……。

そんな沙耶香ちゃんを見た瑞希ちゃんは、怪訝な表情をしながら小声で俺に聞いてきた。

「日比野さん、あの女の人は誰なんですか？ 声は何処かで聞いたことがあるんですけど……」

「本人に聞いてみたら？ 多分、瑞希ちゃんも驚くと思うよ。オツ、電話終わったようだよ。ほら、聞いてごらん」

すると、瑞希ちゃんは、やや畏まりながら沙耶香ちゃんに向かい口を開いた。

「あのお、初めまして。私、日比野さんの知り合いで高島といます。もし宜しければお名前を教えて頂けないでしょうか？」

沙耶香ちゃんはポカンとした表情で瑞希ちゃんを見る。
そして、「プツ」と噴出して笑い出すのであった。

「高島さん、ごめんなさい。私ですよ、道間です」
「エエエツ、み、道間さん？ だって、全然別人に見えるよ」と言

った瑞希ちゃんは、驚きながら上から下まで視線を這わした。
「クスクス。だって私、今、変装中なんです。それに外も暗いから

分からなくて当然ですよ」

「ハハハ、驚いただろ、瑞希ちゃん。まあ、俺もさつき知ったばかりなんだけどね」

俺達がそんな会話をしていると、鬼一爺さんが顎に手を当てながら俺の傍にやってきた。

(涼一、先程撃たれた肩の傷はどんなもんじゃの?)

「一応、靈籠の符を利用して応急処置はしたから血は止まったけど、まだ痛むよ」

俺は肩に貼り付けた何枚かの符を見ながら答える。

鬼一爺さんは、ホツとしたのか柔らかい表情になり俺に言う。

(フム……。まあ兎に角、その程度で済んで良かったわい。それにしても、今の世は変わった術具があるのじゃのう。我もあれにはタマゲタわい)

「そうだよ、一体何なんだ。あのスター オーズのブラスターみたいな銃は……」

俺は男の付近に転がる拳銃に視線を向けた。

すると、沙耶香ちゃんが丁度そこで銃を拾い上げ、俺達に銃を見せながら説明をし始めるのだった。

「日比野さん、この銃は靈力を高度に集束させて撃ち出す『閃光の矢』と呼ばれる術具です。実はこの銃、今年の春に限定発売された新商品なんですよ。今の私の切り札です。でも連射出来ないのが欠点なんですけどね」

「へえ、なんか良く分からんけど、すごい銃だね。実際に被害にもあっているから余計にそう思うよ」

沙耶香ちゃんは銃を仕舞うと、今度は俺と瑞希ちゃんと鬼一爺さんを順に視線を向かわしてゆく。

そして真剣な表情になり、一呼吸おいてから口を開くのだった。

「日比野さん、この男が現れる前にした質問なんですけど、憶えていますか?」

「それって爺さんが何者か?って話の事だね……」

「はい」

「それなら、爺さんから直接聞いた方が早いよ」

俺は鬼一爺さんに視線を向けると言った。

「爺さんが何者か？ 沙耶香ちゃんが知りたいってさ」

鬼一爺さんは眉間に皺を寄せて難しい表情になりながら、沙耶香ちゃんをジッと見ていた。

恐らく、縄張り荒らして小言を言われるのを気にしているのだろ
う。

だが、観念したのか、一息吐くような仕草をしながら話し始めた。
(フウウ。最早、言い逃れできるような場合じゃなさそうじゃな。

仕方あるまい。我は今から800年前の世で陰陽師をしていた鬼一
法眼と申す者なり。まあ真の名は賀茂在憲かものあきのりと申すのじゃがの)

「き、鬼一法眼……賀茂在憲……」

沙耶香ちゃんは今の言葉を聞いた瞬間、幻でも見ているかのよう
な表情で、爺さんの名前を呟きながら呆然と立ち尽くしていた。

なんか良く分からないが、沙耶香ちゃんにとってかなりシヨッキ
ングな名前の様である。

(どうしたのじゃ娘子よ。呆けたような顔をして)

すると沙耶香ちゃんは、「アツいえ、申し訳ありません。今まで
のご無礼をお許し下さい。鬼一法眼様」と言いながら丁寧に頭を下
げ、突然、目上の者に対するかのような仕草を始めたのである。

俺と爺さんはそんな沙耶香ちゃんの態度を見るなり、互いに首を
傾げながら顔を見合す。

まあそれは兎も角。俺も前から気になっていた事があったので、
ついでとばかりに沙耶香ちゃんに問い掛けた。

「沙耶香ちゃん、俺からも聞きたい事があるんだけど、いいかい？」

「は、はい、どうぞ」

「沙耶香ちゃんてさ、依頼を受けて除霊を専門にしていたりするの
かい？」

俺の問いに一瞬、眉の角度が変わった。が、諦めたような表情を

すると沙耶香ちゃんは話し始めた。

「……はい、その通りです。私の家は代々修祓じゆほうを専門に行う家系なのでございます。今回の件はそれ絡みではないのですが……」

俺は鬼一爺さんに視線を向かわせる。爺さんは無言で頷く。

そこで俺は念の為に聞いてみた。

「と、ところで沙耶香ちゃんさあ。最近、高天智市内で依頼のあった除霊が、知らない内に解決されているなんて話、聞いた事あるかい？」

俺の問い掛けに沙耶香ちゃんはキョトンとした顔になる。

そして俺の顔を見ながら逆に聞いてきたのだった。

「あのお、それってやっぱり、日比野さんなのですか？」

「じ、実は……ゴメン、俺だ。鬼一爺さんから術の修行だって事で、毎晩、除霊をさせられていたんだ。本ツ当にゴメン」

寝転がったままではあるが、俺は沙耶香ちゃんに必死で謝った。

「クスクス、いいですよ。気にしないで下さい。これで謎が解けましたから」

沙耶香ちゃんは控えめに笑いながら俺にそう答えた。

「そ、そうかい、よかったあ。俺さ、被じゅうむった損害をどうにかしろ、と言われるかと思ったよ。ああいった類のお金って、半端なく高そうな気がするからね。俺、貧乏学生だし、そんな金ないからさ。アハ、ハハハ」といいながら俺は頭を掻いた。

「そんな事言いませんよ。クスクス」

「良かったですね、日比野さん。心配事がこれで無くなったじゃないですか」

と、そこでニコニコと微笑む瑞希ちゃんが俺に言う。

「ハハハ、本当だよ」

まあこんな感じで軽い談笑と拘束した男の監視をしながら、俺達は暫くの間、沙耶香ちゃんの呼んだお父さんが来るのを待つのであった。

それから20分後。

俺は心身共に大分楽になってきたので、近くの座りやすそうな石に腰掛けて、肩の治療をする為の霊力を練り始めていた。

そこで沙耶香ちゃんが言う。

「日比野さんは何時から霊術関係を習い始めたのですか？」

「ん、術を習い始めたのかい？ 俺が習い始めたのは今年の夏からだけど。それがどうかした？」

「こ、今年の夏！ まだ半年も経ってないじゃないですかッ」

沙耶香ちゃんは驚愕の表情を浮かべながら俺に言った。

「そ、そんなに変かい？……」

「はい、変です。だって、一人前になるには最低でも5年は掛かると言われてるんですよ」

するとここで鬼一爺さんが沙耶香ちゃんに言うのだった。

（フオフオフオ。涼一はの、優れた才の持主なんじゃよ。何と言っても、我が教えた者の中でもずば抜けた天稟てんびんを持つておるからの）
「き、鬼一法眼様がそう仰るといふ事は、相当なのですな」

鬼一爺さんの言葉を聞いた沙耶香ちゃんは、目をパチクリとしながら俺を見詰める。

俺はその視線が恥ずかしくなり照れたように頭を掻くのだった。

「エへへ、やつぱ日比野さんて凄いんだあ。瑞希もそんな気がしましたよ」

「瑞希ちゃん、おだてても何も出ないよ」

「いいですよ。もう貰いましたから」

と言うと瑞希ちゃんは、首にかけた琥珀のペンダントを俺に見せる。

沙耶香ちゃんはそれを見て、やや気まずそうな感じで、控えめに聞いてくるのだった。

「日比野さんと高島さんは恋人同士なんですか？」

「ヘッ？ やだなあ、そんな風に見えるかい。ハハハ、違うよ。師匠と弟子の関係かな。ね？ 瑞希ちゃん」

すると瑞希ちゃんはやや微妙な顔をしていた。というか少し怒ってそうに見える。なにか気に障ることを言ったのだろうか……。などと考えていると、沙耶香ちゃんがパアツと明るい表情になつて言うのだった。

「そ、そうだったのですか。『師弟』の関係なんですね」

沙耶香ちゃんは師弟という部分をやたらと強調しながら言った。

「まあ一応そうなるのかな。ハハハ」

「ムウウ、日比野さん」

瑞希ちゃんは頬を膨らまして怒っていた。それと共に怒りの靈波動を感じる。

わ、分かん。な、何を怒っているんだらう……。

正反対の態度をとる二人に挟まれた俺は何となく居心地が悪くなる。

と、その時。俺達の前方に二人の男が現れたのである。

一人は白髪混じりの中年の人で、もう一人は俺とそんなに年が変わらなそうな青年である。

二人の出で立ちはずいぶんスリムな姿であるが、パツと見は何処かの営業マンの様に見える。が、この人達からは強い靈力を俺は感じたので、直感的にこの二人が沙耶香ちゃんのお父さんとお兄さんなのだろうと俺は考えるのだった。

二人は俺達を見るなり足早に駆け寄ってきた。

因みに鬼一爺さんは、その人達を見るなり靈圧を下げると、俺の背後にまわって姿を隠すのだった。

その二人の男は俺達3人の前にやって来ると、最初に若い方の男が口を開いた。

「沙耶香、お前には色々と言いたい事があるが、今はそれは置いておこう。で、男は何処だ？」

「あ、アソコでございます」

沙耶香ちゃんは後ろの地面を指差して若い男に言う。

「その白髪の老人がそうなのか？」

「いえ、その……老人ではありません。話すとかなり長くなるのですが……」という沙耶香ちゃんは俺の顔を見る。

するとそこで、中年の男が一步前に出て沙耶香ちゃんに言うのだ。
「た。」

「沙耶香、この人が電話で言っていた人か？」

「はい。そして、もう一人、凄いお方がおられます」

「凄いお方？」と言いながら中年の男は眉根を寄せる。

沙耶香ちゃんは無言で男に頷くと、俺の背後を見た。

そして言う。

「日比野さん、姿を見せるように言ってもらえますか？」

「ん？ ああ。爺さん姿を見せろってさ」

(フウウウ、やれやれ)

すると鬼一爺さんはダルそうに返事した。多分、色々と説明する事になるのが嫌なのだろう。

爺さんは面倒くさそうにヒョッコリと俺の後ろから出てくると、
霊圧を上げて姿を現したのであった。

二人の男は鬼一爺さんを見るなり息を飲むと共に身構える。

恐らく、突然高い霊圧を感じたからだろう。鬼一爺さんも性格が悪い。もう少し緩やかに霊圧をあげればいいのに……。

と、ここで若い男の人が沙耶香ちゃんに言う。

「沙耶香、この老人の霊が一体どうしたと言うのだ」

「お、お兄様。なんと失礼な。此処におられるお方は800年前の陰陽師、賀茂在憲様でございます。かの有名な鬼一法眼の異名をもつお方です」

沙耶香ちゃんの言葉を聞くなり、目の前にいる二人は「エッ？」という感じで身体を強張らせていた。それと共に、ゆっくりと首を動かして鬼一爺さんに視線を移す。

そして目を大きく見開き、中年の男の人が爺さんに問い掛けるのだった。

「い、今、家の娘が言った事は本当なのでしょうか？」と。

すると爺さんはダルそうに答えた。

(フウ、そっじゃ。その娘の言つとおり、我は鬼一法眼と申す者じゃ)

参拾式ノ巻

《 参拾式ノ巻 》 七者会談

俺は今、学園町にある沙耶香ちゃんに住むマンションに来ている。そして、そのマンション内の広いリビングにて、閃光の矢で貫かれた肩の手当てを沙耶香ちゃんと瑞希ちゃんの二人にしてもらっている最中なのであった。

沙耶香ちゃんの住むこのマンションはかなり新しく、壁紙やフロアリング等の建材が蛍光灯の反射で眩しく光り輝いていた。大きなキッチンやトイレ等も同様に真新しく光り輝いている。他の部屋には行っていないが、恐らく、何処の部屋に行っても真新しい品の良さを感じさせる雰囲気であろう事は容易に想像できる。その為、工事が終わってからそれほど期間が経っていない様に見えるマンションであり、俺のワンルームと比べると非常に広く快適な感じの空間となっているのであった。

だが、建物の真新しさとは裏腹に、リビングの様相は真ん中のコタツと周囲の壁際に設置されたソファとテレビだけの割と殺風景な感じの部屋である。11月に高天智市へ引っ越して来たと沙耶香ちゃんが言っていたから、殺風景なのはそういった理由もあるのだろう。そんな事を考えながら俺は室内を見回す。

因みに、鬼一爺さんはクリスマス特番の良く分からんテレビ番組を見ているところだ。場所が変わっても鬼一爺さんの行動はマイペースである。

沙耶香ちゃんのお父さんとお兄さんは、土門長老という人の所へ男を引き渡しに行っている為、此処にはいない。だが、それが終わり次第、その土門長老という人と共に此処へ戻ってくると言っていたので、その内来る筈だ。また、「戻ってくるまで此処にいてくれ」

と念押しもされている為、俺は手当てをしてもらいながら二人の帰りを待っているところなのであった。

そして今、話に出てきた土門長老と呼ばれる人だが、この人を連れて来る事になったのには理由がある。実はあの後、神社にて今日の経緯を簡単に俺が説明したところ、二人を悩ませる大問題が出てきたからなのである。

二人は当初、拘束した男をそのまま連れてゆくつもりだったらしい。だが、拘束した男があんな状態になった過程と俺の存在（というか、多分、鬼一爺さんの存在だろう）が、非常に不味いようなのであった。それで色々と思案した結果、その土門長老という人に事情を説明して、後腐れないようにこの事態を収拾してもらおう、という結論に至ったのである。

また、沙耶香ちゃんを含めたその時の3人の表情は、非常に険しく、苦渋の決断といった感じだったので、相当に判断の難しい状況だったのだろう。

まあそういう訳で、此処に来るまでに多少バタバタとした感はあるが、とりあえず、神社からは撤収する事になり、今に至るといふ話である。

そして、そんな風に今までの展開を思い返していた、丁度その時、「ツクシヨン！」

俺は大きくクシャミをすると共にブルツと震えがきたのだった。理由は勿論、上半身が裸の状態を手当てをして貰っているからである。が、幾ら暖房がかかっている室内とはいえ、20分前にスイツチを入れたばかりで、まだそれ程に部屋自体が暖まっていない。その為、鳥肌の立つ身体を小刻みに震わせながら、俺は手当てを受けているのであった。

そんな震える俺を見た瑞希ちゃんは、包帯を手に持ちながら元気良く微笑むと言う。

「日比野さん、もうすぐで終わりますからね。あとちょっとだけ我慢してくださいね」

「ハハ、ありがとう、瑞希ちゃん」

やや震えながら笑顔でそう答えた俺は、隣にいる沙耶香ちゃんに視線を向ける。

沙耶香ちゃんは、使い終わった塗り薬を救急箱に仕舞っている最中であつた。

そこで丁度、俺と目が合う。

すると沙耶香ちゃんは、柔らかい笑みを浮かべて俺に話しかけるのであつた。

「日比野さんが自分で行った霊的な応急処置が早かつたので、傷もそれ程酷くありませんでした。多分、直ぐに良くなりますよ」

「そう？ そりゃ良かった。俺もそれを聞いて一安心したよ」

俺がそう答えると、瑞希ちゃんが包帯を巻きながら言う。

「私も一安心しました。日比野さんがあの光に撃たれた時、私、思わず目を覆つちやいましたよ。でも、傷を見たら、思ったほど酷くなかつたのでホツとしたんです。これからは、あまり危ない事はないで下さいね。……っと、はい、終わりましたよ日比野さん」

「ハハハ、ゴメンね瑞希ちゃん。心配かけさせて」

瑞希ちゃんに注意をされた俺は、面目ないといった感じで頭を掻きながら返事をする。

そして、肩を回し、包帯の巻具合を確認してから上着を着始めるのだった。

だが、服を着ている最中、フトある疑問が湧いてきたので俺は瑞希ちゃんに問い掛ける。

「ところで瑞希ちゃんさあ、なんで神社に居たの？ 俺、てっきり、帰つたばかり思ってたんだけど……」

「そ、そうですよ。私もそれが気になつてたんです。どうして高島さんがアソコにいたのかと」

そこで沙耶香ちゃんも身を乗り出す。

すると瑞希ちゃんは、やや俯き加減になりながらシヨンボリと小さく答えるのだった。

「だって……帰り際の日比野さんとお爺さんの表情が、あまりにも深刻そうに見えたから気になったんだもん……。それで日比野さんの後をつけたら、あの神社に入っただけだから……後は……ゴメンなさい、日比野さん」

「やっぱりか。多分、そうじゃないかなって俺も思っただけだよ。帰り際の様子が少し変だったからさ。まあそれは兎も角、今度からは一言言っただけ。俺も今回の様な事があると困るからさ」

「はい、反省してますよ」と返事すると瑞希ちゃんは肩を窄める。「瑞希ちゃんもあまり無理しちゃ駄目だよ」

と、言いながら瑞希ちゃんの頭を撫でた俺は、テレビ台の上に置かれていた時計に目をやる。時刻はもう7時を回っていた。

時刻を確認した俺は瑞希ちゃんに言う。

「瑞希ちゃん、お家に連絡しないと不味いんじゃない？ お家の人遅いから心配してると思うよ」

「家の方にはさつき連絡を入れました。一応、友達の家にいると言ってるんで大丈夫です。それに、道間さんのお兄さんが家まで送ってくれるそうなんです」

確認の為、俺は沙耶香ちゃんに視線を向ける。

沙耶香ちゃんはコクリと頷く。

「はい、一応そういう手筈になっております。高島さんも私達の世界に関わってしまったので、これからの話に加わってもらわないといけないんです。少しお時間を頂く事になりますが、私共が責任を持って家まで送らせて頂きますので、それに関しては心配しないで下さい」

「ま、そういう事なら仕方ないか。しかし、とんだクリスマス・イブになったなあ。ハアア」

俺はそう言つとコタツの上に突っ伏した。

「クスクス、本当ですね。……でも、日比野さんと会えたので、その……それについては良かったです」

沙耶香ちゃんは、頬を若干紅く染めながらそう言った。

そんな沙耶香ちゃんを見た瑞希ちゃんは、俺の隣に来るなり腕に手を回して言うのだった。

「瑞希も、今日は何時よりも日比野さんと長く一緒にいれるので嬉しいです」っと。

すると沙耶香ちゃんも俺の隣に来る。

その途端、何故かは分からないが、非常に緊迫した空気を二人から急に感じ始めるのであった。

俺はそんな空気にややたじろぎながらも二人に視線を向かわせる。すると二人は笑顔ではあるが、何処かいつもと違う固い笑みとなっていた。

そんな二人に対して『何なんだ、一体？……』と考えていた丁度その時。

テレビから「ピコピコ〜ン」と、いけ好かないニュース速報の音が聞こえてくるのだった。

俺はテレビの方へ視線を向ける。

すると其処には、白い点滅文字で画面上部にこう表示されていた。

> 大沢伊知郎議員、F県での講演会場にて死亡。

> F県の高天智市にて講演を行っていた光民党幹事長の沢伊知郎議員が、会場施設にて突然倒れ、県内の病院へ直ぐに搬送されましたが、先程、搬送先の病院にて死亡が確認されました。

「この人って今日、高天智市に来てた人やんか。なんで死んだんだろう？ やっぱ病気かなあ……。でもここ最近、光民党の議員って立て続けに亡くなってるよなあ。しかも、この人で4人目じゃんか」「そういえば、日比野さんの言うとおり、この人で4人目ですよね。珍しい事もあるもんですね」

瑞希ちゃんも首を傾げながら相槌を打つ。

「そつだよね。もしかして、誰かがデスクートを持ったのかも。なあんてね」

「またまたあ。もう、日比野さんたら。そんな事あるわけ無いじゃないですか。ただの偶然に決まっていますよ」

と、そこで俺は、さっきから様子のおかしい沙耶香ちゃんに視線を向ける。

何故ならば、沙耶香ちゃんはニュース速報を見るや否や、突然、それを見て黙り込んだからである。

テレビを見詰めるその表情は、何処か陰りのある寂しい感じになっていた。

そんな沙耶香ちゃん表情が気になったので俺は問い掛ける。

「どうしたの？ 沙耶香ちゃん。ニュース速報見てから様子が変わるよ」

すると沙耶香ちゃんは、身体をビクツと一回震わせて俺に振り向いた。

そして真剣な表情になり、一呼吸間を置いてからゆっくりと話し始めるのだった。

「……日比野さん、実はあの男なんですけど、この大沢議員の件と関係があるのです」

「エッ、どういう事？」

思いもよらない言葉が沙耶香ちゃんの口から出てきたので、俺は即座に聞き返した。

「その件については、後で父からも話があると思いますので、その時に聞いてください。私もそんなに詳しくは知らないのです……」

そう話す沙耶香ちゃんの表情は何処と無く寂しい表情の様に見える。

色々複雑な事情があるのだろう。

俺はこれ以上この話はしないようにし、別の話題に変える事にした。

「フウン、じゃあ後でお父さんに聞くよ。アッそうだ。話は変わるけどさ、沙耶香ちゃんが持ってた霊符って見せてもらっていいかい？」

「えっ、は、はい。ちょっと待っててもらえますか」
と言うと沙耶香ちゃんは、リビングの隣にある部屋へ入って行った。

それから程なくして戻ってくると、俺が見やすいよう、コタツの台上に数種類の霊符を向きを揃えながら並べていくのだった。

「一応、これ以外にもあるのですが、私が良く使う霊符はこういったタイプの物です」

「へえ、これが、沙耶香ちゃん達が使う霊符かあ……」
俺は眼前にある霊符をじっくりと眺める。

隣に居る瑞希ちゃんも「へえ」と興味深そうにそれらを眺めていた。

そして符を見ている内に、俺はある事に気が付くのだった。

沙耶香ちゃんが持ってきた霊符には、全て印刷されたかのような統制のとれた模様が描かれているからである。

符の大きさも俺が自分で作った物とは違い、綺麗に切り揃えられて千円札の様にすべて同じ大きさとなっていた。

その為、神社とかに良くある大量生産品のお札といった感じがするのである。

しかし、それ以上に気になる事があった。それは符に描かれている術式である。

これらの霊符に描かれている術式は、俺が鬼一爺さんから習った物を簡素化した様な感じが何処と無くするのである。早い話が劣化してるような印象を受けたのであった。

だが、いきなりそんな事を言うと沙耶香ちゃんも気分を悪くすると思い、とりあえず、それは置いておく事にした。

一通り霊符を見た俺は、沙耶香ちゃんに向かい言った。

「これって何処かで作られている物なのかい？ 沙耶香ちゃんが作った物じゃないよね。なんか、印刷された物のような感じがするからな」

「はい。実は霊符に限らず、私達の使う術具は天目堂てんもくどうと呼ばれる呪

術具を専門に開発・販売する会社で作られているのです」

「へえ〜天目堂つてところで作られてるんだ。ン…………天目堂…………。それって全国的に有名な『仏壇仏具の天目堂』と同じ…………なわけないか」

俺は、時々、テレビや雑誌なんかで耳にする事がある、天目堂と呼ばれる仏壇屋の事を思い浮かべていた。

それを聞いた沙耶香ちゃんは笑顔で言う。

「良く分かりましたね、日比野さん。そうですね、あの天目堂です。表向きは仏壇仏具を取り扱い、裏では呪術具を取り扱っているのです。でも、これは関係者しか知らない事なので、他言はしないでくださいね」

「ハハハ、分かってるよ。それは心配しないで」

「私も口が堅いから安心してね」と瑞希ちゃんが言ったところで、鬼一爺さんも俺達のやりとりに興味を持ったのかコツチにやって来た。

そして（ホホウ、これは今の世で使われておる霊符か、どれどれ…………）と言いながらマジマジと符を見詰めるのであった。

鬼一爺さんは符を見るなり一瞬眉間に皺を寄せる。恐らく、俺と同じことを思ったのだろう。

だが、直ぐ元の飄々とした雰囲気へと戻ると、沙耶香ちゃんに向かい言った。

（フム…………。娘子よ、これらの霊符を今の世の術者達は普段使用しておるのかの？）

「は、はい…………そうでございます」

沙耶香ちゃんは何処と無く気まずい表情で答える。

鬼一爺さんにまだ緊張してるのだろうか？

俺がそんな風に考えていると鬼一爺さんは言う。

（これらの符に描かれておる術式は、我の生きていた頃にもあったぞい。民間術者達の間で使われていたものじゃな…………全部、見た事あるわい）

「フウン、鬼一爺さんの時代にもあつた術式なのか。なるほどねえ……」

「へえ、そうなんだあ。昔からずっと続いている霊符なんですね」
瑞希ちゃんはその中の一枚を大事そうに手にとると、文化財でも見るかのように軽く驚きながらそう呟く。まあ、今の瑞希ちゃんにとってはすべてが物珍しく見える事だろう。

だがそこで気になる事があつた。

沙耶香ちゃんが俺と鬼一爺さんの顔をジッと見ているからである。その視線は俺や爺さんの反応を見ているといった感じだ。

何故、そんな風に見ているのかは分からないが、その視線が気になったので、俺は沙耶香ちゃんに問い掛けるのだった。

「ん、沙耶香ちゃん、どうかしたの？　なんか難しそうな顔をしてたけど……」

だが、沙耶香ちゃんは俺をジッと見詰めながら聞いてきた。

「……日比野さん。その霊符を見て何か感じませんでしたか？」と
「それってどういう事？」

俺は質問の意味が良く分からなかったので逆に聞き返す。

すると沙耶香ちゃんは、背筋を伸ばして真剣な表情になり、俺と鬼一爺さんに向かい言うのだった。

「日比野さんに鬼一法眼様、まだ話してなかった事があるのです」
「話してなかった事？」

俺は『一体、何だろう？』と考えながら返事をする。

「はい。私の苗字は道間ですが、私の家には代々続くもう一つの名前があるのです」

「もう一つの名前？」

「はい。私達が代々受け継いできたもう一つの名前を『道摩』といいます」

沙耶香ちゃんの言葉を聞いた鬼一爺さんはピクツと一瞬眉根を動かした。

そして言う。

(……ほほう。お主、道摩の縁ゆかりの者であったか)

「はい。ですが、道摩家の本流は既に絶えており、私達はその分家の血筋にあたります」

鬼一爺さんは、沙耶香ちゃんの言った道摩という名前を知っている様である。

話を聞く限りでは相当に古くから続く家で、どうやら、鬼一爺さんの同業者といったところなのだろう。

(なるほどの……。そして、道摩家も本流が途絶えてしまっていたか……)

「道摩家も……という事は、鬼一法眼様は賀茂家の事も既にご存知なのですか？」と、鬼一爺さんの言葉に沙耶香ちゃんはやや驚きながら聞き返す。

(ウム。以前、涼一に『ばそこん』ちゅうやつで調べてもろうたから。大体の事は聞いておる。歴史の動乱で幾多の陰陽師達が翻弄された様じゃの)

「は、はい、そうなのです。それで実は……『ピンポーン』……」

沙耶香ちゃんが鬼一爺さんに向かい何かを言いかけた、丁度その時。

リビングにチャイムの音が鳴り響いたのだった。

「お父様達かしら？ ちょっと待っていて下さい」と言うと沙耶香ちゃんは玄関へ向かう。

そして暫くすると「お帰りなさいませ」という沙耶香ちゃんの声が玄関の方から聞こえてきたのだった。

それと共に、はっきりとは聞こえないが、数人の話し声らしきものが聞こえてくる。その声の感じからすると、どうやら、お父さん達が戻ってきたようである。

俺と瑞希ちゃんは互いに顔を見合すと、背筋を伸ばしてやや緊張気味にやってくるであろう人達を待つ。因みに鬼一爺さんは、また霊圧を下げて姿を隠そうとしていた。多分、何回も同じことを言わせられるのが嫌なのだろう。

それから程なくして、沙耶香ちゃんと共にスーツ姿の3人の男達がこのリビングに入ってきたのだった。

現れたのは沙耶香ちゃんのお兄さんとお父さん、そして白く長い髪と髭が特徴の老人である。恐らく、この老人が土門長老という人物なのだろう。何しろ、見た目がモロ長老といった感じなので間違いないはずだ。

沙耶香ちゃんは俺の対面になるコタツの前に、その老人を丁寧に案内すると言った。

「土門長老、此方へお座りになって下さい。今、お茶をお持ち致しますので」

「おお、すまんの。それでは座らせてもらおうかの。よっこらせと」

土門長老と呼ばれたその老人は陽気な口調でそう答えると、どっしりと腰を下ろして俺の会い向かいに座った。

続いて、沙耶香ちゃんのお父さんやお兄さんも空いたところに座る。

俺と瑞希ちゃんは3人に無言ながらも頭を下げて会釈をする。

それを見た3人も俺に軽く会釈を返してきた。

全員がコタツの席に座ったところで、沙耶香ちゃんが皆の前にお茶の入った湯呑みを丁寧に置いてゆく。

置かれた湯呑みからは品の良いお茶の香りが湯気と共に立ち上っており、その香りが緊張気味の俺を少しリラックスさせてくれるのだった。

湯呑みを全て配り終えた沙耶香ちゃんは、俺の隣に来てチヨコンと座る。

瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんが俺の両隣にいる所為か、若干の窮屈感と緊迫感があったが、そこは気にせず俺は3人の男達を左から順に見てゆく。

と、そこで沙耶香ちゃんのお父さんが俺に話しかけるのであった。「日比野君、神社でも言ったと思うが、此方のお方が土門長老だ」

「は、初めまして、日比野といいます」

俺はぎこちなく頭を下げ、やや緊張しながら簡単に自己紹介をした。

すると、土門長老は柔らかい笑みを浮かべて俺に言う。

「いやいや此方こそ。今、道間殿よりご紹介があつたが、儂わの名は土門と申しますじゃ。そして、貴殿には大変お世話になつたので、先ずはお礼を述べさせて貰いたい。あの男を捕らえて頂き誠にありがとうございました」

土門長老は丁寧な頭を下げ、俺にそう謝辞を述べた。

そして土門長老の礼が終わると、今度は沙耶香ちゃんのお父さんが俺に礼を言うのだった。

「日比野君、私からも先ず、お礼を言わせて貰いたい。此度は娘を助けて頂いたのと、我等の追っていた人間を捕らえる事に協力して頂き誠にありがとうございました」

沙耶香ちゃんのお父さんは深く頭を下げてきた。その様は、床に頭が付きそうなくらいである。

突然、深く頭を下げ、お礼を言われたので、若干驚くと共に罪悪感も俺の中に湧いてきた。

その為、俺は慌ててお父さんに言った。

「あ、頭を上げて下さい。成り行き上そうなつただけですから、そんなに気にしないで下さい」

だが、お父さんは頭を下げたまま続ける。

「いや、君があの場合に居なければ、恐らく、沙耶香はあの男に殺されていただろう。それに君は、我が身を呈し、傷を負ってまで娘を守ってくれたそうじゃないか。幾ら感謝しても足りないくらいだ」

俺にそう告げた沙耶香ちゃんのお父さんはゆっくり面を上げると、隣にいる瑞希ちゃんに視線を移し、頭を下げ、謝罪をするのだった。「君にも怖い思いをさせたね。あの男を取り逃がした我等の責任でもある。本当にすまない」

「わ、私ももう大丈夫ですので、き、気にしないで下さい」

まさか、自分にも頭を下げるとは思わなかったのか、瑞希ちゃんはアタフタしながら裏返った声色でそう答える。

「だが、今回の出来事で君は、私達、呪術を扱う者の存在を知ってしまう事になった。つまり、裏の世界に巻き込んでしまったのだ。誠に申し訳なく思っている」

「で、でも私、日比野さんの弟子みたいなものですから、その事についてでも気にしないで下さい」

瑞希ちゃんという言葉を聞いたお父さんは、俺の顔を見る。

お父さんの表情は『本当なのかい？』と俺に無言で問い掛けていた。

その為、俺は言う。

「はい、一応、僕の弟子という事になってます」

「そ、そうだったのか」

やや驚きながらお父さんはそう言つと、今度は誰かを探すかのように部屋の周囲を見回す。

恐らく、鬼一爺さんを探してるのだろう。

だが、見当たらないので早速俺に聞いてくるのであった。

「日比野君、鬼一法眼殿は何処に居られるのだろうか？」

それを聞いた俺は、横になりながらテレビの前にいる鬼一爺さんに視線を向ける。

爺さんは、自分は関係ないとばかりにモロにテレビを見ていた。

この期に及んでも、何食わぬ顔でいつも通りにテレビを見続けるその根性に敬意を払いながら、俺は鬼一爺さんと呼んだ。

「ああ、ちよつと待って下さい。鬼一爺さん、呼んでるよ」

爺さんはダルそうな感じで俺に振り向く。その顔は「またかあ」といった感じである。

仕方ないとばかりに鬼一爺さんはその場で霊圧を上げるのだった。その直後、3人の男の視線が爺さんへ向かう。

鬼一爺さんを見た3人の表情は、尊敬や驚きの混じった複雑な表情をしていた。

そして、沙耶香ちゃんのお父さんはやや畏まりながら、鬼一爺さんに言うのだった。

「おお、其処に居られたのですか、鬼一法眼様ッ」

（フム。で、どうしたのじゃ。まだ、何かあるのかの？ 新しい顔が一人増えておる様じゃが……）

鬼一爺さんはそう言つと、土門長老に視線を向かわす。

すると土門長老は、「お初お目にかかります。鬼一法眼様」と言いながら背筋を伸ばして礼儀正しく鬼一爺さんに一礼をしたのであった。

何処となくだが、土門長老の物腰からは若干の緊張といったものが俺には感じられる。

また、沙耶香ちゃんのお兄さんやお父さんも同様に襟を正して深く一礼をしている為、それら3人の行動は、まるで教祖を崇める信者のような宗教チックな光景となって俺の目に入ってくるのであった。

それを見た俺は、『鬼一法眼という名前はそれ程に有名な名前なんだろうか？ それとも、陰陽道宗家である賀茂家の人間に対して緊張しているのだろうか？』などと色々考えていた。

だが、俺にとっては別にどうでもいい事なので、若干、引きながらその光景を眺めていたのであった。

とまあこんな感じで、七者の会談が始まったのである

それから1時間くらいの間、俺達はお互いの事情を大雑把にはあるが説明をしていた。

最初は鬼一爺さんに対して控え気味に話していた土門長老や沙耶香ちゃんのお父さんも、時間が経つにつれて大分慣れてきたのか、次第に楽な口調で話をする様になっていた。鬼一爺さん自体が割と人懐っこい性格なので、それもあつたのかも知れない。

で、話の内容だが、俺の方からは今日の経緯と瑞希ちゃんや鬼一爺さんとの事など（勿論、幽現成る者という事は伏せてである）を

簡単に説明し、3人の男達からはあの男の事や、それぞれの事情を簡単にだが説明してもらったのであった。

それで分かったのは、沙耶香ちゃん達や土門長老は『鎮守の森』という呪術結社に属しており、あの男は鎮守の森が追っていた暗殺者らしいという事である。

事実を知った俺は、今更ながら、とんでもない事に関わってしまったと心の中で嘆くと共に、『神様お願いです。鬼一爺さんと出会ってからずっと続いている、濃い日常生活からいい加減解放してください』と、いる筈の無い神様に思わずお願いをしていたのであった。

まあそれは兎も角、土門長老やお父さんからは『鎮守の森』についても簡単にだが説明を受ける事になった。

二人が言うには、この『鎮守の森』という組織は、『日本に蔓延る^{びこ}霊異なる災いを鎮め、そして守る森となれ』といった理念で動いており、古くから続く霊術や呪術を扱う家の殆どが、現在は『鎮守の森』に所属しているそうだ。そして、昔は個々の家々で行っていた修祓^{しゅぼつ}も、今は『鎮守の森』として引き受けているそうなのである。

また、土門長老はこうも言っていた。こういう組織体制をとる様になったのは、『歴史の流れに翻弄される事ない様に同業者同士で力を合わせる』という意味合いもある、と。

だが、鎮守の森に属さず、未だに細々と続けている霊術家も少数ながらいる事はいるらしい。そして、それらの霊術家とは別に対立をしている訳ではないとも土門長老や沙耶香ちゃんのお父さんは言っていた。一応、鎮守の森に加盟するかどうかは、その者の任意に委ね^{ゆた}られているそうである。

まあそんな感じの話沙耶香ちゃんのお父さんや土門長老の口から聞いていたのである。

それで話は変わるが、俺と鬼一爺さんは今ある決断を迫られている最中なのであった。

実は、俺と爺さんの力を是非とも『鎮守の森』に貸して欲しいと、土門長老と沙耶香ちゃんのお父さんに頼み込まれたからである。

そんな訳で、俺と爺さんは頭を悩ませているのだった。

暫くそうやって悩んでいると、土門長老は陽気な口調で俺に話し掛けてきた。

「今、鎮守の森に手を貸して欲しいと言ったが、表立ってと言う訳ではないんじゃないよ。今言った話は儂等わしらの中だけの話としてもらいたいんじゃないよ」

「エッ、それってどういう事ですか？」

「実は、日比野君と鬼一法眼様の事情があまりにも特殊な事例なので、儂と道間殿だけの中に仕舞っておきたいんじゃないよ。あまり目立つと他の術者達を刺激する事になるかも知れんからの。そこで相談なのじゃが、暫くの間、道間殿に協力するという形で、鎮守の森に力を貸してくれんじやろうか？ 先程の話聞いた感じじゃと、日比野君も鬼一法眼様も今の呪術業界の事はあまり詳しくない様に見受けられる。余計なトラブルを回避する為にも、ここは一つ儂の提案に乗って頂けるとありがたいのじゃよ」

土門長老の説明を聞いた俺と鬼一爺さんは顔を見合わせる。

確かに、土門長老の言うとおり、この業界の事はまだ殆ど分かってないのが今の現状だ。

土門長老の提案も一理ある。それに何と言っても、俺自身、余計なトラブルはこれ以上起こって欲しくない。ここは土門長老の提案に乗るのが吉か……。

俺がそう考えていると鬼一爺さんは気楽な感じで言った。

（涼一、お主の好きな様にすれば良いぞ。我はお主の考えを尊重しよう。それに、我はお主に憑いておる様なもんじゃからの。お主の行く所に憑いて行くだけじゃわい。フオフオフオ）

「そ、そうかい。なら、御厄介になろうかな。俺も訳の分からんトラブルは嫌だからね」

すると土門長老は明るい表情になり言った。

「おお、僕の提案に乗ってくれるかね。ありがたい」

沙耶香ちゃんのお父さんも同じく明るい表情を俺に向ける。

そして、俺の決断にホツとしたのか、大きく一息吐いてから言うのだった。

「すまないね、日比野君。力を貸してもらえばかりじゃなく、私も君の力になるよ。分からない事があれば色々聞いてくれたまえ」

そう言い終えると、お父さんは俺に手を差し伸べてきた。

俺はその手を取り握手をする。

それを見た沙耶香ちゃんは満面の笑顔で俺に言うのだった。

「日比野さん、これからよろしく頼みますね」

「日比野君、これからよろしく頼むよ」と、続いてお兄さんとも握手をする。

そして、今まで静かに隣にいた瑞希ちゃんは俺にエールを送るのだった。

「エへへ、頑張ってくださいね、日比野さん。それと、瑞希の師匠でもあるんですから、そっちの方も忘れないくださいよ」

屈託のない笑顔を俺に向ける瑞希ちゃんは、そう言った後に俺の腕に手を回してくる。

そんな瑞希ちゃんに苦笑いを浮かべながら俺は答えた。

「ハハハ、分かってるよ。さてと……」

そこで俺は時刻を確認する。今は8時30分を回ったところである。

瑞希ちゃんはさつき、家に連絡してあるとは言ってたが、流石にあまり遅くなると親御さんが心配する筈だ。

だが、俺が帰ろうと言わない限り、瑞希ちゃんの口からその言葉は出て来そうな気配がない。

その為、俺自身もソロソロ失礼させてもらおうかと思ひ、土門長老や沙耶香ちゃんのお父さんに向かいその旨を伝えるのだった。

「あの、すいません。ソロソロ失礼させてもらってもよろしいですか？ それと、瑞希ちゃんもあまり遅くなると親御さんが心配する

と思うんですよ」

「おお、そうじゃったの。日比野君は兎も角、其方の娘さんは流石に遅くなると不味いの」

俺の言葉を聞いた土門長老はニコツと笑いながら言うと、沙耶香ちゃんのお父さんに視線を向ける。

お父さんは土門長老に頷くと、一樹さんに向かい言った。

「それでは一樹、車をマンションの前に回ってきてくれるか？」

「はい、それでは」と返事をした一樹さんは足早に玄関の方へと向かう。

お父さんは沙耶香ちゃんにも言った。

「沙耶香も一樹と一緒に、高島さんを家まで送ってあげなさい。高島さんを巻き込んだのはお前の責任でもあるのだからな」

「はい。ちゃんと家までお見送りしてまいります」

沙耶香ちゃんは頭を下げて丁寧に返事をする、瑞希ちゃんに向かい言った。

「では高島さん、5分程で表に車が来るとお思いますので暫く待っていてください」

「ゴメンね、道間さん。わざわざ家まで……」

瑞希ちゃんは申し訳なさそうに言う。

「いえ、気にしないで下さい。私の責任でもありませんので」

と、二人がそんなやりとりをしている中、お父さんは小声で俺に話し掛けてきた。

「日比野君、すまないが、私と土門長老と日比野君、そして鬼一法眼様だけで、もう少し話したい事があるんだ。いいだろうか？」

俺は少し考えるが、まあ別にこれといって用事がある訳でもない、ので、気軽に答えた。

「はい、少しくらいならいいですよ」と。

「おお、すまないね。帰りは一樹にちゃんと家まで送らせるから心配しないでくれ」

俺の返答を聞いたお父さんは、早速、土門長老に耳打ちをする。

すると、土門長老はニコリと俺に微笑みかけてきた。俺も釣られて微笑む。

何の話かは良く分からないが、あまり他言の出来ない複雑な事情があるのだろう。

さつき土門長老も、俺と鬼一爺さんの事情がかなり特殊な事例だと言っていた。あまり表沙汰にいたくないようにも見えたし……。

だが、今はこの業界の事を一刻も早く知る必要がある。とりあえず、今一番情報を得られそうな人は目の前に居る土門長老や沙耶香ちゃんのお父さんだ。それに、こうなってしまった以上、従うべきところは従わないと、後々余計なトラブルを招きかねない。

この時の俺はそう考えると共に、自分にそう言い聞かせてもいたのであった

参拾参ノ巻

《 参拾参ノ巻 》 女難序曲

朝食を終えた俺は、カーテンを開いて外の様子を窓ガラス越しにぼんやりと眺めていた。

ガラス戸の向こう側に見える学園町の様子は、今日の未明から降りだした雪の為、辺り一面真っ白な世界となっていた。

今は雪も止んでいる事もあり、窓から見える近くの道路には、傘を差さずに出歩いている人々の姿がチラホラと確認出来る。

だが、上空は靄^{もや}がかかったように灰色の曇り空で覆われているので、その内、また雪が降ってくるかもしれない。さつき見た天気予報でもそんな事を言っていたし……。

まあそれは兎も角、俺は今、そんな雪化粧が施された学園町を眺めながら昨夜の事を考えていた。

勿論、俺と鬼一爺さん、そして土門長老と沙耶香ちゃんのお父さんの4人で交わされた話をである

昨晚

土門長老達二人は沙耶香ちゃんと瑞希ちゃんがマンションを出たのを確認すると、俺と鬼一爺さんに先程までとは打って変わった真剣な表情を向けてきた。また、それと共に、緊迫感のある雰囲気。二人は発し始め、今までの緩い流れを塞ぎ止めるかのように、俺達との間に見えない壁を作り出すのであった。

そんな中、土門長老が硬い声色で俺達に話しかけてきた。

「さて、それでは、話易くなりましたところで、早速、本題に移らせて頂きましょうかの……」

そう言った土門長老からは老練な人間が放つ強^{したた}かな気迫を感じる。俺は二人の雰囲気が一変した為、驚くと共に、無意識の内に何時の間にか身構えていた。

そんな俺を見た鬼一爺さんは、いつもと同じく飄々とした調子で言う。

(涼一、そんなに身構えんでもええわい。この者達は我等について聞きたい事があるだけのようじゃ。のう、そうじゃろ？ 土門長老とやら)

「はい、そうですじゃ。日比野君と鬼一法眼様には、どうしても聞かせて貰わねばならん事がありましたの」

土門長老は、俺と鬼一爺さんに鋭い視線を投げかける。

俺は妙な迫力を土門長老から感じてはいたが、それよりも『俺と鬼一爺さんの一体何を知りたいのだろう？』という事のほうが気になった。

何故ならば、爺さんから口止めされている事柄もあるからだ。

しかし、今回の事で色々都合の悪い物を見られてしまったので、誤魔化すような事は出来ないであろう。と俺は考えていた。

その為、俺は内心ビクビクしながら、二人に問い掛けるのであった。

「今、『どうしても』と言われましたが、御二人は俺達の何を知らたいのですか？」

土門長老は俺と爺さんを交互に見たあと、ゆっくりと話し出した。「聞きたい事は幾つかあるんじゃが。先ずは、あの男をあんな状態にした刀についてお伺いさせて頂きましようかの。道間殿からその報告を受けた時、どうしても聞かねばならぬと思っていた事じゃ。儂も長いあいだ、この呪術業界に生きてきたが、人の生気を吸い上げるような刀の事など聞いた事も無いんじゃ。さあ、話してくれんかの」

やはりその事が……と思った俺は鬼一爺さんを見る。

すると鬼一爺さんは俺に一回頷くと、二人に向かい、ゆっくりと

口を開いたのだった。

(フム……仕方あるまい。それについては我が言おう。だが、今から話す事は絶対に他言をしては成らぬ。絶対にだ。それが守れぬなら、お主等の問いには答えぬッ！)

鬼一爺さんはそう言つと共に、鋭い視線と高い霊圧を振り撒き、二人を威圧した。

今の爺さんの霊体からは、普段からは考えられないくらいの強い霊波が出ている。今ならば、靈感の無い人間でも爺さんを視界に納める事が出来る筈だ。

爺さんがそんな風に二人を威圧するのは、恐らく、警告する意味合いもあるのだろう。『もし約束を破つたなら、ただでは置かぬ！』という……。

土門長老と沙耶香ちゃんのお父さんは、そんな鬼一爺さんを見るなり即座に身構える。

二人と鬼一爺さんの間にやや緊迫した空気が漂い始める。

だが、1分程そうやって対峙したところで、土門長老は一息吐くと共に肩の力を抜いた。

そして、沙耶香ちゃんのお父さんに軽く頷くと、土門長老は鬼一爺さんに向かい言つのだった。

「フウ、分かりました。儂等は誰にも言わぬと誓います。ですから気を静めてください、鬼一法眼様」

土門長老の言葉を聞いた鬼一爺さんは霊圧を徐々に下げてゆき、元の霊圧に戻つたところで二人に話し始めた。

(よかるう、では話そうかの。……だが、その前に一つ聞きたい。今の世には、幽現成る者の伝承と鬼降ろし呪法というのは伝えられておるのかの?)

鬼一爺さんの言葉を聞くや否や、土門長老と沙耶香ちゃんのお父さんは、狐につままれたような表情でお互いの顔を見合した。

沙耶香ちゃんのお父さんは言う。

「鬼一法眼様、鬼降ろしの呪法は禁呪として伝わってはおりますが、

どのような呪法なのかまでは良く分かってないのが現状です。まあ我々が知らないというだけで、何処かで密かに伝承されているかも知れませんが……。それと、今、仰られた幽現成る者ですが。現世うつしよと幽世かくりよを行き来する事が出来るという、陰陽の中心に立つ者の事ですかな？」

（行き来するという表現は好ましくないが、まあそれに似た様なものかの）

土門長老は言う。

「でしたら、一応、どちらも私共の家に伝わってはおりますの。ですが、実態の分からない話ですので御伽噺おとぎばなしのようなものと私共は捉えておりますじゃ。まあそれに関連した事として、我が土御門家の祖である安倍清明様が、その幽現成る者であったのではないか、と言い伝えられてはおりますがの。……で、それがどうかしたのでしようか？」

（フム……一応、伝わってはおるか。なら話は早い）
と言うと鬼一爺さんは俺に視線を向かわせる。

そして顎に手を当てながら二人に言った。

（先ず、幽現成る者じゃが……此処にいる涼一がそうじゃ）
「「なッ!!」「」

土門長老と沙耶香ちゃんのお父さんは、目と口を大きく開きながら驚く。

だが、鬼一爺さんは驚く二人を無視して続けた。

（それと、生気を吸い取る刀じゃが……。あれは鬼降ろしの呪法で作られた建御雷神たけみかづちのかみの分霊、布津御魂ふつのみたまが宿った刀じゃ。つまり、俗に言う布津御魂剣ふつのみたまのつるぎという物じゃの）

「た、建御雷神に、布津御魂剣ですとッ！ 一体、どういう事なのですかッ」

土門長老は一步前に踏み出し、鬼一爺さんに言った。

その隣に居る沙耶香ちゃんのお父さんは、話に付いていけないのか、口をポカンと開けていた。

どうやら、鬼一爺さんの話がショッキングな内容だったみたいである。

鬼一爺さんは言う。

（まあ待て、それについては後で言おう。で、今言った布津御魂剣ふつのみたまのつるぎは問題があつてのう。本体の鬼神である建御雷神たけみかづちのかみの威霊いれいを降臨させた身体か、若しくは、幽現成る者以外には触れる事が出来ぬのじやよ）

「……………」

それを聞いた途端、二人は俺を見ながら無言で固まっていた。

ジ ジヨ風に言えば、ザ・ワールドの時を止めるスタンド攻撃を受けたかのようである。

俺はそんな二人を見た所為か、約10秒程ではあるが、室内の間も止まったかのような錯覚を覚えるのだった。

そして、時は動き始める…………。

「き、鬼一法眼様ツ、その話は誠にございますか!?!」

土門長老と沙耶香ちゃんのお父さんは、大きな声でハモリながら鬼一爺さんに詰め寄った。

（誠じゃ。じゃから、お主等に他言せぬように釘を刺したのじやよ。もし、何処ぞに居る良からぬ連中にこの事が知れようものなら、涼一の力を悪用される恐れがあるからの…………）

「オ、オイッ、爺さん。今、俺の力を悪用されるって言ったけど、どういふ事なんだよッ」

俺は今の鬼一爺さんの言葉が引つかかった為、即座に問い掛ける。
（涼一、お主も地霊封陣を行使した時に気付いたであろう…………。今まで黙っていたが、幽現成る者はその気になれば、鬼神の武器に触れられるだけでなく、武器の力を己の意思で扱えるのじやよ。まあ今はお主自身が未熟な為、まともには使えぬがの…………）

俺は鬼一爺さんの言葉を聞くと共に、自分の両手を見つめる。

そして地霊封陣を行使した時の事を思い返すのだった。

だが、そこで俺は考えるのである。布津御魂剣ふつのみたまのつるぎからあの時感じた

膨大な霊力を俺の意思で制御を出来るのだろうかと……。

確かに、地霊封陣の時はその力を使ったが、あれは俺の意思ではなく、刀の霊力を法陣の起点で解き放つただけである。おまけに、たったあれだけの事で、立ってるのも辛くなるくらい疲れたし……。とてもではないが、あの膨大な霊力を俺の意思で扱える様になる自信が無い。

そう考えた俺は鬼一爺さんに向かい言う。

「鬼一爺さん、幾らなんでもあの刀の力を俺の意思で扱うなんて無理だよ……。とてもじゃないがそんな自信ない」

（フム……。まあ確かに、今のお主ならそう思うのも無理は無いの。じゃが、頭の片隅には置いておけ。そして涼一、お主自身もこの事は誰にも、決してツ、話しては成らぬぞ。決してじゃ！ 災いの元じゃからな）

鬼一爺さんは大きく強い口調で俺に忠告してきた。

「……それは俺も分かってるよ」

（肝に銘じておくのだ。今の世にも幽現成る者の伝承と鬼降ろし呪法が伝わっておるといふ事は、我が言った事も伝わっておると考えねばならぬからの。深く用心せねばならぬ）

と、そこで土門長老が話を割ってきた。

「鬼一法眼様ツ。こ、この事を知っているのは当事者である日比野君と鬼一法眼様の二人だけなのですか？」

俺と爺さんはその問い掛けに無言で頷く。

それを見た土門長老と沙耶香ちゃんのお父さんは、難しい顔をしながら顔を見合わせる。

そして沙耶香ちゃんのお父さんが、一瞬、俺の顔を見てから鬼一爺さんに問い掛けたのだった。

「鬼一法眼様、日比野君は現代の霊術は知っていますのですか？」

（いや知らぬ。涼一が扱えるのは我が授けた術だけじゃ。それがどうかしたのかの？）

鬼一爺さんの返答を聞いた二人は、二言三言、小さな声で言葉を

交わす。

その後、土門長老が俺達に向かい気まずそうに口を開いた。

「あのお実はですな……非常に申し上げにくいのですが」と、土門長老は低い物腰で言葉を選びながら、鬼一爺さんと俺に、今の自分達の現状を事細かに説明するのだった。

10分後。

土門長老とお父さんの話を聞いた俺は、驚くと共に、鬼一爺さんと出会ってから今まで辿ってきた道のりを検証すべく、必死になつて思い返していたのだった。

何故ならば、俺が爺さんから習っている霊術の類は、二人の話を聞く限りだと、もうその殆どが現在では失伝してしまっているそうなのだ。当然、目の前にいる二人の家も失伝しているそうである。

理由はやはり、数々の歴史の動乱に陰陽道の大家が巻き込まれていったのが、そうなつた原因だそうである。土門長老の話では、京の都を焼け野原にした応仁の乱が特に酷かつたそうだ。

鬼一爺さんはそれを聞くと共に、やや残念そうな寂しい顔をしていた。以前、爺さんに賀茂家断絶の話をした時と同じ様な表情である。

だが、今、問題なのは失伝した事ではない。失われた術を俺が今まで使ってきた事が問題なのである。そこから俺達の異質さに気付く者が現れるかもしれないからだ。

現に沙耶香ちゃんのお父さんは、土蜘蛛退治の時に霧守高原で俺が使用した霊符を見て、失伝した術の使い手がいる事を知つたらしい。そして、調査する為に沙耶香ちゃんとお兄さんを高天智市に送り込んだと言っていた。また、此処に送り込んだ理由は、高天智市内で何者かが勝手に除霊をしているのが怪しかったからだそうである。間違はなく、俺の仕業だ……。

まあそんな訳で、俺は今まであった事を二人に説明し、意見を求める事にしたのであった。

「　　つと言つような事が今までであったのですよ。一応、今言つた浅野さんというG県の葦原警察署の刑事さんには、他言しないように念押しはしてあります。それと、霊符類も一応使い終わつたら回収できる物はしてます。でも今回、あの神社で何枚も霊符を使用したので確認したほうがいいですね。……このくらいですかね、痕跡がハッキリと残つていそうなのは」

俺が話し終わると沙耶香ちゃんのお父さんは言う。

「あの神社については、この後、私と一樹で後始末をしておくから心配しないでくれ。それに、あの男が仕掛けた人払いの結果もまだ生きてる筈だから、そうそう一般人は寄り付かないだろうしね。土門長老は今の話で気になるところはありましたか？」

土門長老は暫く考えると言った。

「まあ日比野君の話の聞く限りじゃと、今のところはそれ程に不味い事態でもなさそうじゃな。とりあえずは一安心というところかの」その言葉を聞き俺は少しホツとした。

と、そこで土門長老は、沙耶香ちゃんのお父さんに何やら耳打ちをする。

そして沙耶香ちゃんのお父さんは、鬼一爺さんに向かい真剣な表情になつて言つたのだつた。

「鬼一法眼様、折り入つてお願いしたい事があるのですが……」

(……何じゃ、一体?)

「実は先程も申しましたとおり、我等は歴史に翻弄されたが故に、古の秘術を失伝してしまいました。そこでお願いがあるのです。厚かましい事とは思いますが、どうか私達……いえ、私共の子供達にもその秘術を授けてやってもらえないでしょうか？　このとおりです」
そう言い終えた沙耶香ちゃんのお父さんは、深々と頭を下げ鬼一爺さんに土下座をした。

「私からもお願い致します、鬼一法眼様」と言いながら土門長老も同様に頭を下げる。

突然、そんな風に土下座をするので俺はやや驚いた。が、そうし

たくなる気持ちも分からなくなはなかつた。

俺は鬼一爺さんに視線を向ける。

すると、そんな二人を見た鬼一爺さんは、顎に手を当てて暫し無言で考えるのであつた。

2分ばかり考えたところで、鬼一爺さんは口を開いた。

（フム、まあよかろう。……但し、条件がある）

「じよ、条件とは？」と土門長老。

（我が師から受け継いだ時にもされた事じゃ。その者が術を授けるに値するかどうかを我自身が判断する。ただそれだけの事じゃ）

それを聞いた沙耶香ちゃんのお父さんは、暫し目を閉じて考えると言つた。

「鬼一法眼様、それは資質を見るといふ事ですか？」

（ウム、勿論それもある。じゃが、それだけではない。その者の全てを見させてもらうといふ事じゃ。それと、この事はその者達に言つてはならぬぞい。我は真の姿を見させてもらうのじゃからの。これが条件じゃ）

鬼一爺さんの言葉を聞いた二人は、顔を見合わせると互いに頷く。そして土門長老は頭を下げて言つたのだつた。

「鬼一法眼様。では年が明けましたら、孫を三人連れてきますので宜しく願ひしますじゃ。勿論、その事は伏せて孫に説明しておきます故」

「私の所の沙耶香と一樹も宜しく願ひ致します、鬼一法眼様」

沙耶香ちゃんのお父さんも頭を下げて言つた。

そんな二人を見た鬼一爺さんは、真剣な表情になると腕を組み、二人に言つたのだつた。

（ウム、ではその者達を暫く見させてもらおうかの）

といった昨晚の話の内容を俺は思い返していたのであつた。

その他にも色々と話した事柄があつたが、とりあえず、一番頭に残つた話はそれである。

だが、もう一つ重要な話があった。

それは、俺に現代霊術を覚えてもらおうという事である。

理由は勿論、鬼一爺さんから習った術をなるべく使わないようにする為だ。こればかりは従わざるを得ない。俺も厄介事は御免被^{しめんこうむ}りたいし……。

まあそんな訳で、今日から早速、その現代霊術を教えてくれる講師が、俺のアパートに来る予定になっているのだった。

「ピンポン」

と、そこで呼び鈴が鳴った。

俺は時計を確認する。今は9時半を回ったところだ。

だが、沙耶香ちゃんのお父さんが寄越すと言っていた講師が来るのは、10時過ぎだった筈だ。

予定を変更したのかな？などと思いつながら俺は玄関へ向かう。そして、覗き穴から外に居る人物の確認をするのだった。

すると其処には講師ではなく、瑞希ちゃんが佇んでいるではないか。

今日の瑞希ちゃんはコートとマフラーの他に手袋と白いニット帽を装着していた。冬のフル装備である。見ているだけで外の寒さが伝わる格好である。

俺はそんな瑞希ちゃんを見ると共に、昨日の霊術修行の約束を思い出した。

そしてダブルブッキングしてしまった事に、今、気付いたのであった。昨日のゴタゴタで、瑞希ちゃんとの約束をすっかり失念していたのだろう。

しかし、こうなってしまった以上、悩んでいても仕方が無い。それに、瑞希ちゃんもこの先覚えるなら現代霊術のほうか、何かと都合が良いだろうし。

そう考えた俺は、とりあえず扉を開けて爽やかに朝の挨拶をしたのだった。

「おはよう、瑞希ちゃん」

「おはようございます、日比野さん。エへへ、今日もよろしくお願ひしますね」

瑞希ちゃんは昨日の事など無かったかのように、いつもどおりに元気良く挨拶をしてきた。

「ハハハ、元気だね、瑞希ちゃん。ところで、昨夜は良く眠れたかい？」

「はい、おかげさまで良く寝れましたよ」

そう言った瑞希ちゃんはニコリと微笑む。

「それを聞いて安心したよ。さて、それじゃあ上がってよ。此処寒いからさ」

「はい、おじゃまします」

俺は瑞希ちゃんを部屋に招きいれると、座布団を二つコタツの周囲に置いた。

一つは瑞希ちゃん用の座布団で、もう一つはやってくる講師のである。

「瑞希ちゃん、それじゃあ座ってて。今、ココアでも入れて持つてくるよ」

すると瑞希ちゃんは、キッチンの方へ向かおうとしたところで、俺に聞いてくる。

「日比野さん。今、コタツに座布団を二つ置きましたけど、私以外にも誰か来るんですか？」

中々に鋭い子である。冷静に状況を分析している。

俺の座る場所には既に座布団があるので、今、コタツの周りには合計3つ置かれている事になる。だから瑞希ちゃんも不思議がったのだろう。

因みに、合体させてあった寝具類は畳んで部屋の隅に置いてある。理由は、良く知らない人にそんな状態を見せるのは、流石に気が引けたからだ。

まあそれはさて置き、俺は瑞希ちゃんに事情を話す事にした。

「実はさ、昨日、沙耶香ちゃんのお父さんから『現代の霊術を教え

る講師を俺の所に派遣する』って言われたんだよ。多分、あと30分程すると来ると思うんだけどね。まあそれが二つ置いた理由かな」と言いながら俺はテレビの上にあるデジタル時計に目をやる。

「へえ、昨日、私が帰った後、そんな話をしていたんですか」

「ハハハ、まあそんなところかな」

すると瑞希ちゃんは、やや申し訳なさそうに俺に聞いてくるのだった。

「日比野さん……。その講師の話、瑞希も一緒に聞いてもいいですか?」と。

「いいよ。それに、この先の事を考えると、瑞希ちゃんも知っていた方が良さそうだからね」

「ほ、本当ですか。良かったあ、『駄目だ』って言われたらどうしようかと思いましたよ」

瑞希ちゃんはそう答えると、肩の力を抜いていつもどおりに振舞う。

そして、上に着たコートを脱ぎながら室内を見回すと言った。

「あれ、日比野さん。お爺さんは何処にいるんですか?」

「ああ、鬼一爺さんなら、久しぶりの雪景色を見てくるって、さっき外に出て行ったよ。その内来ると思うよ」

「そうなんですかあ。ところで日比野さん。この後来る講師って誰なんですか?」

「さあ、俺も良く分からないんだ。講師を寄越すとしか聞いてないからね。っと、はい、どうぞ召し上がってください」

俺はそう答えながら、入れたての湯気の立ったココアを瑞希ちゃんの前に置いた。

「ありがとうございます。今日は寒いんで暖まります」

と言った瑞希ちゃんは、暖をとるようにココアの入ったマグカップを両手で包み込む。

そんな仕草をするという事は、相当、寒かったのだろう。

瑞希ちゃんにココアを配り終わると、俺もインスタントのブラッ

クコーヒーを入れて自分の席へと座る。

そこで瑞希ちゃんが言った。

「あ、そうだ、日比野さん。実家には年内に帰るんですか？」

「そうだなあ、ウーン……まだ決めてないや。それがどうかしたの？」

すると瑞希ちゃんはモジモジしながら言った。

「私、元旦に日比野さんと初詣に行きたいなあ……なんて思ってるんですけど……難しいですか？」

「まあ出来ん事もないけどね。2日に帰ればいいだけだから」

俺の言葉を聞いた途端、瑞希ちゃんはパアツと明るい表情になり言った。

「ほ、本当ですか？ でしたら、そうしてくれると瑞希は嬉しいですよ」と。

そんな瑞希ちゃんを見た俺は、まあ別にいいか、と思い返事をする。

「じゃあ、実家には2日に帰る事にするかな。神社の御神籤おみくじを引いて、今年の運勢でも見てから帰る事にするよ」

「エへへ、ありがとうございます、日比野さん」

瑞希ちゃんは俺の返答が嬉しかったようで、満面の笑顔でそう言った。

そして講師がやってくるまでの間、俺と瑞希ちゃんはホットな飲み物を片手に、他愛ない世間話をして時間を潰すのであった。

それから約30分後、ピンポンと室内に呼び鈴が響き渡る。

俺は玄関へと移動し覗き穴を確認した。

すると外にいたのは沙耶香ちゃんであった。沙耶香ちゃんも瑞希ちゃんと同じで、冬のフル装備姿である。勿論、今日は変装などしていないので、一目で沙耶香ちゃんだと分かった。左右に長く垂らしたツインテールは今日も健在である。

だが、この時間帯にやってきたという事は、恐らく、沙耶香ちゃ

んが講師なのだろう。というか、薄々、俺もそんな気はしていたが……。

まあそれは兎も角、確認を終えた俺は、早速、玄関扉を開いた。

「おはようございます、日比野さん」

俺の顔を見るや否や、沙耶香ちゃんは丁寧にお辞儀をして挨拶をした。

そんな沙耶香ちゃんを見た俺は、感心すると共に、確認の意味も込めて、考えていた事を口にしたのだった。

「おはよう、沙耶香ちゃん。あのさ、お父さんが言っていた派遣する講師というのは、もしかして……」

「はい、私でございます。これから色々ご迷惑をかけるかも知れませんが、宜しくお願いします」

沙耶香ちゃんは丁寧な口調でそう言うと、俺にニコリと微笑む。

と、そこで俺の後ろから瑞希ちゃんがやってきた。多分、今の会話が聞こえたからだろう。

瑞希ちゃんは俺の隣に來ると、沙耶香ちゃんに向かい笑顔で挨拶をした。

「おはようございます、道間さん……」

「おはようございます、高島さん……」

だが沙耶香ちゃんと瑞希ちゃんは、笑顔で挨拶しているにも拘らず、妙な緊迫感を漂わせていた。

俺は『そう言えば昨日もこんな感じだったなあ』と暢気に思いながら、沙耶香ちゃんを部屋へ招き入れて案内する。そして沙耶香ちゃんにもココアを出してから、自分の席へと座るのであった。

沙耶香ちゃんは、俺が座ったところで話し掛けてきた。

「日比野さん、鬼一法眼様は何処かへお出かけしているのですか？」

「ああ、爺さんかい？ 今、外に散歩しに行ってるよ。雪化粧を見るのが久しぶりだって言ってたからさ。その内、帰ってくると思うよ……ん？」

だが丁度その時、タイミングよく鬼一爺さんが窓をスルリと抜け

て部屋に入ってきたのである。

そして霊圧を上げて二人に姿を現したのであった。

(ほう、何時の間にかやら客人が来ておったか。フオフオフオ)

「お、おはようございます。鬼一法眼様」

沙耶香ちゃんは正座をして深く頭を下げると、丁寧に挨拶をした。その仕草を見た感じでは、まだ、鬼一爺さんに対して結構緊張をしているようである。

「おはようございます。お爺さん」

瑞希ちゃんはいつもとどおり、気楽な雰囲気です。

俺は対照的な二人の態度を見て可笑しくなつたが、笑つたら二人に失礼だと思い、笑いを堪えていた。

まあそれは兎も角、俺も爺さんに話しかける。

「お帰り、鬼一爺さん。で、どうだった雪景色は？ 自然現象だから、鬼一爺さんのいた頃と然程さほど変わらないだろ」

(フオフオフオ、それがのう涼一。街の大きさが我のいた頃と比べ物にならないほど大きい所為か、中々に爽快な眺めじゃったぞい。フオフオフオ)

鬼一爺さんは満面の笑みを浮かべてそう答えた。

その表情を見た感じでは、かなり気分のいい散歩だったのだろう。

(ところで涼一、今から何をするんじゃ?)

と鬼一爺さんは、沙耶香ちゃんの顔を一瞬チラ見してから言った。「やだなあ、爺さん。昨日、沙耶香ちゃんのお父さんが言つてたじやないか。今から現代の霊術や鎮守の森の事を教えてもらうんだよ。で、講師が沙耶香ちゃんという訳だ」

(ほう、我も聞かせてもらおうかの。昨日の土門長老とやらの話では、術具類が目覚ましい進化を遂げておると言つておったからの。気になるわい)

鬼一爺さんは顎に手を当てて、俺の隣にやつてきた。

この爺さんは、結構、好奇心旺盛なところがあり、おまけに珍しい物好きでもある。

恐らく、生前からこんな感じだったのだろう。

沙耶香ちゃんは言う。

「あの、日比野さん。実は、兄も後で来る事になってるんですけど、いいですか？ 一応、父からは、私達二人で日比野さんに色々教えるようにと言われてますので」

「へえ、一樹さんも来るんだ。いいよ別に。ただ、この部屋狭いから、それだけは勘弁してね」と俺は後頭部をポリポリと掻きながら言った。

「ありがとうございます、日比野さん。さて、それじゃあ始め『ピンプーン』……」

沙耶香ちゃんがそう言い掛けた、丁度その時。またも呼び鈴がなったのだった。

俺は一樹さんかな？ と思い立ちあがると玄関へ向かった。

そして、覗き穴を確認したのである。

だが、その先にいる人物を見るなり、俺は思わず我が目を疑うのだった。

何故ならば、扉の前にいるのは土門長老だったからである。

俺はそれを確認するや否や、直ぐに扉を開けて丁寧に挨拶をした。

「おはようございます、土門長老」

土門長老はそんな俺を見るなり笑顔で挨拶してきた。

「おお、おはよう日比野君。どうかね？ 体の方は」

「はい、お陰さまでかなり良くなりました。この分だと、直ぐ良くなると思います」

俺は閃光の矢に撃たれた肩を回しながらそう答える。

「それを聞いて安心したわい。まあそれは兎も角じゃ。少しばかり話をしたい事もあるんで、中に入らせてもろうてもええじゃるか？」

俺は後ろの部屋に視線を向かわせた後、土門長老に言った。

「あのお、実は今、瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんが来ているのですよ。それでもよろしければ……」

「おお、構わん構わん。別に隠すような話でもないからの。ヒョヒ

「ヨロヨロ」

土門長老は陽気な口調でそう返事する。

「では、狭いところですが、お上がり下さい」

「すまぬの」

俺は土門長老を空いたコタツの席に案内すると、自分が使っていた座布団を土門長老に差し出した。

実は座布団が3枚しかないからである。実に寂しい話である。

土門長老の姿を見た沙耶香ちゃんと瑞希ちゃんは、二人揃って丁寧に頭を下げ、挨拶をする。

「「おはようございます、土門長老」」

「よいよい、そんなに堅ッ苦しい挨拶は抜きじゃ。普通で構わんよ」と土門長老は右手を振りながら二人に言った。

と、そこで鬼一爺さんが土門長老の前にやってきた。

そして言っ。

(おはよう、土門長老)

「おお、鬼一法眼様、おはようございますじゃ」

(昨日の今日でどうしたのじゃ一体？ 何かいい忘れたことでもあったのかの)

「まあそのようなものですかの」と言いながら土門長老は俺が案内した席に座る。

俺は土門長老が座ったところで、早速、話しかけた。

「あの、土門長老。それで、話というのは何でしょうか？」

「おお、そうじゃったそうじゃった。で、話というのは、少し聞きたい事があったからなんじゃよ」

「聞きたい事？」

俺は昨夜の事を思い浮かべながら、『まだ何かあっただろうか？』と考える。

だが、土門長老の口から飛び出てきた言葉は、俺の想像の斜め上に行くものであった。

「そうじゃ。で、その聞きたい事じゃが。日比野君は許婚いいなまけとか結婚

を約束した女子とかおるのかの？」

「はあ？」

俺は予想外の質問だった為、思わず、そう口から出ていた。だがその直後、俺は室内の僅かな異変を感じ取ったのであった。何故ならば、土門長老がその質問を俺にした途端、怒りに似た負の波動が室内に漂い始めたからである。

しかも、その発信源は瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんの二人からだ。だが、二人の表情はいつもと変わらず笑顔である。やや硬い感じがするが……。

また、逆に笑顔である為、何故こんな波動が二人から出ているのか、俺には理解できないのであった。

とりあえず、俺は質問に答える。

「いえ、おりませんが……。それがどうかしたのでしょうか？」
すると土門長老は陽気に笑いながら言った。

「ヒョヒョヒョ、そうじゃったかそうじゃったか。なら話しやすいわい。実はの、家に来年21歳になる孫娘がおるのじゃよ。で、是非一度、日比野君に会わせてみてくたの。年が明けたら、また細かい事は連絡するから考えておいて欲しいんじゃ」

どうも話しの感じからすると、この爺さんは俺にお見合いをさせたいようだ。

だが、俺はまだ学生だ。流石にそれは早いだろうと思ひ返事をした。

「土門長老、俺はまだ学生ですので、そういった話は時期尚早の様に思えるのですが……」

「ヒョヒョヒョ、そう緊張せんでもええ。おっと、そういえば写真があるんじゃった」

土門長老はそう言うつと懐から手帳のようなものを取り出した。

そして、それに挟んであった一枚の写真をコタツの台の上に置いたのであった。

俺達4人は、早速、身を乗り出してその写真を眺めた。特に瑞希

ちゃんと沙耶香ちゃんは凄い勢いであった。

写真には3人の男女が横に並んで写っていた。一番左に男性がおり、真ん中と右側に女性二人という構図である。また、家の前で撮った写真なのか、背景には大きくて立派な玄関が写りこんでいた。男性はスーツ姿で、女性二人は赤いブレザーの制服を着ており高校生っぽい感じだ。因みに、写真の中の男女は美男美女で、真ん中にいる女性だけが眼鏡をかけていた。

俺達はその写真をマジマジと見つめる中、土門長老は言う。

「で、今言った来年21歳になる孫娘じゃが、真ん中の娘がそんなんじゃない。その写真は3年前に撮った物じゃから学生服を着ておるがの。今はもつと美人になっておるぞい、ヒョヒョヒョ」

確かに写っている女性は美人である。

だが、あまり気乗りしない俺は、とりあえず、この場しのぎの返事をする事にしたのだった。

「ハハハ、そうですね。とりあえず、考えておきます」と。

「おお、そうかね。では、また年が明けてから日比野君に連絡するから、楽しみにしとってくれ。ヒョヒョヒョ」

と、そこで土門長老は腕時計を確認する。

そして言った。

「さて、それではソロソロ帰らせてもらおうかの。さて、それでは皆さん、良いお年を迎えてくだされ。そしてまた来年も宜しくお願ひしますじゃ。では」

土門長老は満面の笑顔でそう締め括ると、このアパートを後にしたのであった。

俺は土門長老が帰ったのを見届けたところで「フウウウ」と大きく息を吐いた。

そんな俺を見た鬼一爺さんは、一言、こう言った。

（お主、来年は女難に見舞われるの）と。

「はあ？ 何を言って……『ゾクッ』……」

だが、俺がそう呟いた瞬間、瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんから、先程よりも強いメラメラとした負の波動を感じ始めたのだった。

それと同時に背筋に冷たいものが走る。

俺は二人にゆっくりと視線を向けた。

しかし、二人は笑顔であった。但し、目が笑っていなかった。非常に怖い微笑みである。

そんな二人に少しビビリながら俺は言った。

「ね、ねえ……二人共、どうしたの急に？　なんか怖いなあ、その表情……」

すると、瑞希ちゃんは笑顔で沙耶香ちゃんに言った。

「いいえ。何でもありませんよ。ねえ道間さん」

「ええ、何でもありませんわ。高島さん」

二人は笑顔のまま、いつもより低い声色でそう答えると、「ウフフフフフフ」と不気味にハモリながら笑ったのである。

俺はそんな二人を前にして生唾をゴクリと飲み込む。

そして、その後に行われた沙耶香ちゃんの講義は、妙な緊迫感に包まれた中で行われる事になり、非常にスリリングな気分を味わう事になった。

また、それと同時に鬼一爺さんの言った『お主、来年は女難に見舞われるの』という意味深な言葉が、俺の頭の中を駆け巡る事になり、この日はとても勉強という気分になれなかったのであった。

参拾四ノ巻

《 参拾四ノ巻 》 初詣

其処は6畳程の小さな部屋であった。

天井には直管型の40W蛍光灯器具が二箇所に取り付けられており、それらが放つ白い光が周囲を『これでもか』というくらいに明るく照らし出していた。

その為、部屋全体の作りがハッキリと見て取れる。

先ず、この部屋には窓が無い。室内で光を得るには、今現在点灯中の蛍光灯以外には無いようだ。

周囲の壁とやや高い天井は、剥き出しになったコンクリート壁ですべて覆われており、入口には非常に物々しい分厚い鉄の扉が取り付けられていた。

壁や天井、そして鉄の扉といった物だけを見れば、無機質で冷たい印象を見る者に与える。が、床だけは違っていた。

床は茶褐色の光沢鮮やかなフローリングが張られているので、其処だけは住宅の一室の様に暖かい雰囲気となっているのだ。

そして、その床が周囲のコンクリートの放つ冷たさを幾分か和らげているので、全体のバランスとしては不思議と調和の取れた空間となつていたのであった。

そんな室内の真ん中には、やや長い背もたれが特徴である木製の椅子が一脚、ポツンと寂しげに置かれていた。

あるのはそれだけである。他には何も無い。

その一脚の椅子だけが、腰掛ける者を待っているかのようにポツンと佇んでいるのであった。

と、その時、「ギィィ」という軋む様な音と共に鉄の扉が開いたのである。

すると扉の向こうには4人の男がおり、扉が開くとともにこの室内に入ってきたのであった。

その中の1人は土門長老である。茶色い着物姿の土門長老はゆっくりとした動きで椅子の近くに歩み寄る。

そして、もう1人は布津御魂剣に生気を抜かれ、白髪と化した眩道齋である。その眩道齋は上下灰色の衣服を着ており、一見すると囚人の様に見える出で立ちをしていた。

また、眩道齋の顔色は剣に触れた直後と比べると多少良くなった感はあるが、それでも以前のような雰囲気とは程遠い顔色となっていた。

類はこけ、目元は群青色のクマで縁取られており、そして顔色もまだ若干青白い為、一見すると麻薬を常習している人間の様にも見えるのであった。

他の2人は中肉中背の40〜50歳台くらいと思われる紺色のスーツを着た男達であった。

眩道齋は両手を拘束されており、体の自由を奪われる状態となっている為、この2人の男達に誘導されながら部屋の中へと入ってきたのである。

男達は眩道齋を中央の椅子に座らせると、動けないように白く太いロープで四肢を固定する。

土門長老は拘束し終えるのを確認すると、目を細めて眩道齋に向かい口を開くのだった。

「さて、いい加減、そろそろ話してくれんじやろうかの？ 誰に依頼されて暗殺を請け負ったのかを……」

「……………」
眩道齋は焦点の定まらない目で、部屋のコンクリート壁を無言で見詰めている。

そんな眩道齋を見ながら土門長老は続ける。

「……………」
「……と言って聞く様なタマじゃなさそうじゃの。まあいいわ。お主が話してくれんのなら僕も不本意じゃが、ここから先は少々、手

荒な真似をせにゃイカンようになる」

土門長老はそう言った後、眩道斎の両脇に居る男達に目配せをする。

すると、男二人はゆっくりと一度頷き、上着のポケットから細長い小さな黒い箱を取り出したのである。

男は箱を開ける。すると、中には黒とも紺色とも言えない奇妙な色をした液体が入った、小さな瓶が収められていたのであった。

それを取り出すと、男は土門長老に視線を向ける。

土門長老はそれらを確認すると眩道斎に言う。

「今からお主に強力な自白霊薬を使わせてもらう。じゃが、霊体への副作用が強い薬じゃ。どうする？ 今、自白してくれるなら楽な状態でお主を解放してやれるぞい。如何にお主が悪人であれ、儂もこんな霊薬を使ってまでやりとらないからの」

「……………」

眩道斎はその言葉を聞いても、壁を見詰めたまま無言を貫く。その表情は、心此処に在らず、といった感じである。

土門長老はそんな眩道斎を暫し眺めると、大きく息を吐き、言うのだった。

「フウウ……仕方ない。お主が言わぬのなら、言うようにするしかないの」

土門長老は男二人に視線を向けると小さく頷く。

男達は土門長老に頷き返す。

そして、懐から更に幾つかの道具を取り出し、何かの作業に取り掛かるのであった

今日は1月1日 元旦。

言うまでも無く、新年が始まる最初の日である。

一年の計は元旦にあり！ と毎年1月1日になるとそこかしこで良く聞くが、生まれてこの方、一度も一年の計画など練った事はな

い。

何故なら俺の座右の銘は、一応、臨機応変だからだ。が、臨機応変にくい事を昨年は体験し、また、今現在も体験中であるので、この考え方に自信が無くなる今日この頃である。

まあとりあえず、それは置いておいてと……。

日本では新年を迎えたら、先ず、やらなければいけない？ 定番の行事がある。

それは、一年の無事と平安を神や仏、そしてご先祖様に祈る初詣である。

一体全体、何処の誰がやり始めたのかは分からないが、兎も角、古来からの暗黙の約束事なのだ。

しかし、最近に行かない人も多い様なことを何処かで聞いたような気がする。

だが、小さい頃からそういう習慣がこつてりと身につけている為、俺は今まで一度も欠かした事がない。

因みに、俺自身は神社や仏さんにお参りしたところで、何か『御利益がある筈』などと思った事なんか一度も無い。あくまでも、ただの習慣である。

別に行かなくても良いのかも知れないが、初詣をしておかないと何となく落ち着かないので、俺は毎年の様に神社にお参りする事にしているのである。

まあそんなわけで俺は今、その初詣に一緒に行く人達との待ち合わせ場所になっている、学園町駅前のターミナルに来ているのである。

今の時刻は丁度、午前10時。

今日は、ここ最近にはないほどの快晴であり、冬場にしては珍しいポカポカとした心地良い陽気な空模様である。

三日程前からずっと雨続きだったので、特にそう感じてしまう。

おまけに、今日は新年の第一日目である為、この陽気な天候は非常に縁起の良い雰囲気があるのである。

その所為か、『最高にハイってやつだ』と某漫画の吸血鬼のような事を口走ってしまいそうな程、俺の中では非常に気持ちの良い空模様を感じられるのであった。

そんな陽気な空の下、俺は周囲に視線を向ける。

時間が経つにつれ、学園町内も其処そこかしこ彼処に人の動きが確認出来る様になってきた。多分、新年の定番行事にこの人々も向かうのだろう。

そんな事を考えながら周囲を見回していると、待っていた人物の一人が俺の前に現れ、元気良くニコニコと新年の挨拶をしてきたのだった。

「日比野さん、明けましておめでとございます。本年も宜しく
お願いしま〜す」

「明けましておめでと〜、瑞希ちゃん。今年もよろしくね」

今日の瑞希ちゃんはモコモコとした白いコートに身を包んでおり、見た目からしてかなり暖かそうな格好をしている。

また、陽気な日差しが白いコート照らす為、瑞希ちゃんが非常に眩しく見えるのだった。

俺がコートの眩しさに目を細めていると、瑞希ちゃんはキョロキョロと周囲を見回しながら聞いてきた。

「……………ところで日比野さん。道間さん達はまだ来ていないんですか？」

話は変わるが、当初、初詣には瑞希ちゃんと二人で行く予定だったのだが、一昨日、沙耶香ちゃんに年末年始の予定を聞かれたときに初詣の話をしたら、「是非、私もご一緒させてください」と強い希望があった為、こうなったのである。

勿論、その場には瑞希ちゃんもいたのだが、瑞希ちゃんはやや面白くなさそうな表情をしていたので、気になるところではある。

という訳で話を戻す。

「うん、まだ来てないよ。そろそろ来る頃だとは思うけど……………ン？」
丁度その時だった。

俺達のやや右斜め前方から一台の黒いレガシー・ツーリングワゴンが、駅前のターミナルにやってきたのである。

その車は俺達の前で横付けに止まる。そしてドアが開き、中から沙耶香ちゃんと一樹さんが現れたのであった。

今日の沙耶香ちゃんは赤を基調とした花模様の色彩鮮やかな着物姿である。その為、車から降り立った瞬間、其処に花が咲いたような錯覚を俺は覚えるのだった。恐らく、模様が花柄の所為もあるのだろう。

また、髪もいつものツインテールとは違い、綺麗に後ろでクルツと纏めて上品な感じになっていた。

それらを総合した俺の感想は、『なんて気合の入った格好なんだ』といった感じである。

因みに、一樹さんは俺と同じくジーンズにトレンチコートといった無難な服装であつたので、初詣に対する意気込みのギャップがこの二人から凄く感じられるのだった。

二人は俺達の前に来ると、先ず沙耶香ちゃんが丁寧な仕草で挨拶を述べる。

「日比野さん、そして高島さん。明けましておめでとうございます。昨年は大変お世話になりました。そして今年も宜しくお願い致します」

「明けましておめでとう、沙耶香ちゃん。此方こそ、宜しくね」と俺も頭を下げる。

瑞希ちゃんも俺の後に続ける。

「明けましておめでとうございます、道間さん。今年も宜しく願いします」

その後、一樹さんも俺達に挨拶する。

「日比野君に高島さん、明けましておめでとう。今年もよろしく頼むよ」

「明けましておめでとうございます。此方こそ、宜しく願います」と俺。

「明けましておめでとございます、道間先生」と瑞希ちゃん。
一通り新年の挨拶をすませた後、俺達は一樹さんの車に乗り込み、目的地である高天智天満宮へと向かったのであった

その車内での話である。

後部座席に座った俺は、黒い色調の内装を見回しながら一樹さんに言う。

「一樹さん、このレガシーは新車ですか？」

「そうだよ。去年の4月に納車されたばかりさ」

「やっぱりですか、思ったとおりです。まだ、新車特有の匂いが少ししますからね」と言いながら、俺は鼻をクンクンとさせる。

「ハハハ、そうかい。けど、実家からこのF県に何回も往復する事があったから、走行距離はすごい事になってるけどね。ハハハ」

と、そこで助手席に座る沙耶香ちゃんが俺に話し掛けてきた。

「日比野さん、鬼一法眼様は今日も来ておられるのですか？」

「ん？ 爺さんなら此処に居るよ」

俺がそう言うや否や、後ろのラゲッジスペースにいる鬼一爺さんは、霊圧を上げて皆に姿を現した。

そして言う。

(何じゃ、何か用かの?)

「あ、挨拶が遅れまして申し訳ありません。明けましておめでとございます、鬼一法眼様。本年もよろしくお願い致します」

沙耶香ちゃんは鬼一爺さんを見るなり、緊張した面持ちで丁寧に挨拶をした。

続けて一樹さんと瑞希ちゃんも爺さんに挨拶する。

「明けましておめでとございます、鬼一法眼様。すみません、挨拶が遅れてしまい……」

「明けましておめでとございます、お爺さん」

そして瑞希ちゃんも。

そんな3人を見た鬼一爺さんは陽気な口調で言った。

(フオフオフオ、なんじゃ新年の挨拶か。そう気にせぬでよいぞ。それにしても、お主等二人はもう少し肩の力を抜いたらどうじゃ？ 涼一やこの瑞希という娘子の様に気楽に接してくれたほうが、我としても楽じゃわい)

すると、沙耶香ちゃんは困った顔をしながら言う。

「そ、そうなのですか。……わかりました。もう少し柔らかい物腰で話すように心がけます」

二人のそんなやりとりを見ていた俺は、そこでフトある事が頭を過ぎった。

その為、沙耶香ちゃんに俺は問い掛ける。

「ねえ、沙耶香ちゃん、話は変わるんだけどさ。この間の男は、あの後どうなったの？ 大沢議員を呪殺したとは聞いたけど、今の日本の法律じゃ罪として裁けないよね。それが今、フト疑問に思ったんだよ」

「アッ、言われてみればそうですね。私も気になるう」と瑞希ちゃん。

沙耶香ちゃんは俺の質問に、やや難しい表情をするが、一樹さんに向かい軽く頷くと、俺達にゆっくりと話し始めるのであった。

「……あの男は、鎮守の森が所有する、ある施設に移送された筈です」

「へッ、ある施設？」

「はい、日比野さんにもこの間説明をしたと思いますが、鎮守の森には破ってはならない禁忌の掟が幾つかあります。そして、それを破った者は罰として、未来永劫、己の霊力と記憶を封じられてしまうのです。勿論、人として生きるのに支障がない程度にですが……。それと、あの男は鎮守の森に属した人間ではありませんが、組織として目を瞑れない事情があります。尋問で色々聞き出した後は、恐らく、そういった決断が幹部によってなされると思っています」

今話を聞いた俺は、なんか良く分からんが、妙に恐ろしく感じてしまった。

から答えた。

「わ、私も気をつけます」と。

そんな俺達を見た沙耶香ちゃんは、ニコニコと微笑みながら言う。「クスクス、二人共、そんなに怖がらなくて結構ですよ。其処まで酷い罰を受けるのは、相当な悪人だけですから。心配しないで下さい」

「ハ、ハハ、ハハハ……そ、そうかい。ナハハ、そ、そうだよね」俺は乾いた笑いを浮かべながらそう返事した。

幾ら大丈夫とはいえ、洒落にならない罰則である。

また、常に最悪を想定するのが俺の考え方なので、余計に今の説明が恐ろしく感じる。

もし、自分がそうになったら……と思うと、ムンクの叫びの様に『キヤアアアア』と叫びたい衝動に駆られるのであった。

俺がそんな事を考えていると、瑞希ちゃんが沙耶香ちゃんに問い掛ける。

「ところで、道間さん。初詣の後に行く予定の天目堂って、都道府県にある全支店が呪術具を扱ってるの？」

瑞希ちゃんは中々に良い質問をする。

俺も聞きたかった事である。

「はい、そうですよ。鎮守の森に所属している者は日本全国に居ますからね。ただ、品揃えについては、やはり大都市のほうが豊富に揃ってはいますけど……」

「やつぱりそうなんだあ。へえ」

瑞希ちゃんはそう返事すると、今度は俺に向かい笑顔で言った。

「日比野さん。天目堂ってどんな所なんでしょうね？ 瑞希は行ったことがないから、今から楽しみです」

「そうだね、俺も昨晚からずっと気になってたんだよ。でも、結構、値の張る品物ばかりの様な気がするけどね」

俺はそう言うと、沙耶香ちゃんに視線を向ける。

沙耶香ちゃんは笑顔で言った。

「確かに、値段の張る物が多いですね。でも、心配しないで下さい。日比野さんと高島さんに必要な術具は、道摩家がバックアップしますので。ただ、父からもご説明があったとは思いますが、これからは日比野さんにも修祓しゅぼつ依頼をお願いする事になりますので、その事に関しては何了承下さい。勿論、依頼を達成されましたら報酬もお支払いたしますので」

俺は今の話を聞き、一昨日あった沙耶香ちゃんのお父さんとの会談を思い出す。

その時聞いた話では、報酬は一律の金額ではなく、内容によって変わると言っていた。要するに、厄介な内容の依頼ほど金額が跳ね上がるという事なのだろう。

まあ俺自身、お金よりも安全を重要視する人間なので、あまり厄介な依頼等は受けたくはないが……。

そんな事を考えていると一樹さんが俺に話し掛けてきた。

「ところで日比野君。沙耶香から聞いたが、剣道をやってるんだって?」

「いや、まあそのお……やっているとというか、2ヶ月程前にやる羽目になったというか……。まあそんな訳で、剣道の腕に関してはハッキリいつて超未熟者です」

俺は面目無いといった感じで後頭部を掻きながら答える。

「ハハハ、いや、そういう意味で聞いた訳じゃないよ。ただ、これから現代霊術を覚えるに当たり、修祓しゅぼつのスタイルは結構重要になってくるからね」

「修祓しゅぼつのスタイル? それはどういう事ですか?」

なんか良く分からない為、俺は首を傾げて問い掛ける。

「ああ、そう言えば、それを聞いてなかったな。日比野君は悪霊退治するとき、どういう方法をとるんだい?」

以前、悪霊退治をしていた頃の記憶を俺は掘り起こす。

そこで出てくる過去の俺は、すべて霊符か、浄化の真言で悪霊を消滅させていた。

というわけで、それを一樹さんに伝える事にした。

「うーん、思い返してみると、自分が今まで退治してきた悪霊は、殆ど霊符か、真言術で処理してきましたね」

俺の返答を聞いた一樹さんは、何かを考えているのか、暫く間をあけてから口を開いた。

「霊符と真言術か……。父からも聞いているとは思いますが、霊符に限らず、日比野君の使う霊術は特殊なので、これから先の事を考えると色々都合が悪い。だから軸になる現代の修祓方法しゅぼつを考えないといけないんだ」

「軸になる……。ですか。というと、沙耶香ちゃんが持っていた、あの『閃光の矢』の様な武器を中心に扱いながら悪霊を祓うという事ですか？」

「まあそついう事かな。で、さっきの話に戻るけど。日比野君は、一応、剣道をやっているみたいだし、霊刀を主軸しゅじくに修祓しゅぼつをする方法が良いと思うんだよ。それに、俺自身がそついうスタイルだから、日比野君にも教えやすいしね。一度考えてみてくれないか？」

俺は腕を組んで目を瞑り、暫く考える。

確かに一樹さんの言うとおりだ。これから先、今までの様に鬼一爺さんから習った霊術を使う事は出来ない。

迂闊にも使ってしまったえば、余計な厄介事を招き寄せる事になりかねないからだ。

話は変わるが、これから先も鬼一爺さんから霊術は教えてもらう事になっている。

鬼一爺さんが言うには、俺を一人前の術者にするまで気が楽にならないそうなのだ。多分、俺の特異体質の事を気に病んでいるのだろう。

間違つても、俺を助さんや角さん、はたまた風車の弥七やウツカリ八兵衛の様にしようとは思っていない筈だ……。嫌、そつであつて欲しい。

そして、爺さんがそつ言うてくれた時、俺は思わずホツとしたの

だった。

実のところ、俺自身がかなり鬼一爺さんに依存している部分があるからだ。

今までの事を思い返してみると、ここぞツという時には必ず鬼一爺さんが俺を助けてくれている。

最初の頃は胡散臭いジジイだなあと思っていたが、今では爺さんの深い経験や知識に幾度と無く助けられているので、俺の中では非常に頼もしい師匠といった位置付けになっているのだった。

時折、黄門様モードになるのは頂けないが……。

という訳で話を戻す。

一樹さんはそう言うが、俺には武器の心得など無い。剣道を始めたのだから、つい最近だから初心者とそれ程変わらない。

俺が唯一使える得物といえばフライロッドだが、ロッドの扱いなんて、悪霊との戦闘には何の役にも立たない。逆に悪霊を刺激させるだけのような気もするし……。

まあそれは兎も角、今の俺にはそういった方面の明るい材料が無いので、ここは一樹さんの誘いに乗っておいた方が吉かも知れない、と考えていたのだった。

一応、そういう結論に達した俺は、一樹さんに言った。

「そうですね。今の現状を考えると、一樹さんに教えてもらうのが最良みたいです。お願いできますか？」

「ハハハ、任してくれ。霊刀を主軸に置いた戦い方なら、俺も自信を持って教えられるからね」

とまあ、こんな感じの会話をしながら俺達は高天智天満宮に向かうのであった。

それから道路の混雑もあったため多少時間がかかったが、15分後に高天智天満宮についた俺達はとりあえず、周囲に目を向ける。

周囲は何処を見渡しても人、人、人の人だらけで、気が滅入るくらいの人混みである。

まあ、ここ近年に無いくらいの初詣日和となっているので、これは仕方がないだろう。

そういつた周囲の雑踏を眺めていると、沙耶香ちゃんと同じ様な艶やかな着物姿の女性も時折だが確認出来る。考えてみれば新年つて感じの服装である。いや、どっちかというところと正装といったほうが正しいか。

また、参道両脇には沢山ののぼりが旗めいており、賑やかな雰囲気よりも一層引き出している。その所為か、パツと見はお祭りのような印象を見る者に与えているのであった。

そんな周囲の雑踏を視界に入れながら俺達も参道へと入ってゆく。だが、先程からずっと非常に歩きにくい為、俺は瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんに言うのだった。

「あ、あのさ、二人共……。もう少し離れてくれると歩きやすいかなあ。なんて、ハハハハ」

実は、俺の両腕に瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんの二人が、密着して手を絡ませてくるもんだから、非常に歩きにくいのである。

「なにか、言いましたか？ 日比野さん」
すると二人は妙に緊迫した空気を漂わせながら、ハモツてそう答えるのだった。

因みに二人は笑顔である。しかし、瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんは俺を見てそう答えたのではない。二人は笑顔のまま、互いに顔を見合わせて、そう答えたのである。

そんな二人を見た俺は、なんか良く分からんが……。隙がない……。と考えてしまうのであった。

そして、二人の緊迫した空気に気圧された俺は「いえ、なにも……。」「としか言葉を出せなかったのである。

実はここ最近、頻繁にこういう事があるので少し困っているのだ。難しい年頃である。

と、そこで一樹さんが俺の肩を叩きながら言うのだった。

「ハハハ、まあアレだ。沙耶香の事をよろしく頼むよ」

「へ？」

俺は今の言葉の意味がイマイチよく分からん為、気の抜けた声を出した後、首を傾げる。

まあそんな感じで参道を進んで行くと、菅原道真が祭られた大きな賽銭箱が置かれている、本殿の建物へと俺達は辿り着いた。

実はこの建物の裏には山があり、そして、いつも真言術の修行をしていた山頂へと通じる山道があるのだ。

その為、いつも見慣れた光景の筈のだが、人の多さと露天商やのぼり旗が周囲にあるので、流石に同じ場所とは思えない雰囲気である。

そうやって前回に見た時とのギャップを感じていると、横から俺の名前を呼ぶ声が聞こえるのだった。

「オイ、お前、日比野じゃないか」

声の主は女性である。

そのやや語気の荒い物言いは、俺をハツと声の方向へと振り向かせた。恐らく、条件反射だろう。

そして声の主は挨拶をしたのである。

「ひ、姫会長。明けましておめでとうございます」

丁寧に頭を下げ、新年の挨拶をした俺は、恐る恐る顔を上げると、姫会長を視界に入れる。

そして、若干引き攣りながらも満面の笑顔を作るのであった。

茶色のコートに身を包んだ姫会長の隣には、ヤンチャそうな感じの茶髪の兄ちゃんがいた。背丈は俺くらいである。彼氏だろうか？

そんな事を考えていると、姫会長も挨拶をしてきた。

「オウ、明けまして……」

姫会長はそう言い掛けて、俺の両隣にいる瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんに視線を向かわせた。

そこで一拍間を置いてから問い掛けてきた。

「日比野、この子等はお前の兄弟か、親戚の子か？」

「いえ、違いますよ」

俺の返事を聞いた姫会長は、なんか微妙な表情をする。

そして口元を押えて言うのだった。

「日比野……お前……まさか……ロリ……」

姫会長の脳内妄想をすぐ理解した俺は、即座に言う。

「あ、あの姫会長、何か誤解をしておられる様ですが、この子達とはその様な関係では」

俺がそう答えたところで、瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんは前に出る。そして二人揃って丁寧な挨拶をしたのである。

「初めまして、いつも日比野さんがお世話になっています」と。

「オ、オウ、初めまして……」

姫会長は二人の行動に若干驚きつつもそう答える。

すると、間髪いれず沙耶香ちゃんが姫会長に言った。

「日比野さんとは家族ぐるみの付き合いをさせて頂いております、それもあって一緒にさせて頂いております。因みに、此方が兄の一樹です」

俺の隣に来た一樹さんは、爽やかな笑みを浮かべながら挨拶する。

「初めまして、道間一樹といます。もしかして、日比野君が大学で所属する、剣道愛好会の会長さんですか？」

「……はい、そうですか」

「やはりそうでしたか。話は変わりますが、私は高天智聖承女子学院の教員でして、剣道部の副顧問をしているのです。もし、また機会がありましたら、その時は宜しくお願い致します」

姫会長は一樹さんの剣道部副顧問という部分にピクツと反応した様に見えた。

そして、若干驚きながら、丁寧に受け答えをするのだった。

「なんと！ 高天智聖承女子学院 剣道部の副顧問でありますか。それはそれは。こちらこそ、宜しくお願い致します」

と、その時。

姫会長の後ろにいたヤンチャそうな兄ちゃんが強引に話を割ってきた。

「オイ、姉貴ッ。いつまで話してんだよ、早く行こうぜ」
「どうやら弟のようである。」

姫会長は弟のぶしつけな言葉を聞くや否や、額に青筋を浮かべ、笑顔のままゆっくりと弟に振り向く。

すると【ゴフッ！】という音と共に弟が地面に蹲るのだった。

いや、実を言うと俺の位置からは見えていた。姫会長が弟の肝臓辺りに思いつきりボディブローを入れたのを……。

姫会長は兄弟にも容赦しないな……。そんな事を考えながら、脇腹を押えて苦しそうに蹲る弟に、俺は同情の視線を投げかけるのであった。

弟にささやかな折檻を終えた姫会長は、俺に振り向くと明るい表情で言う。

「勘違いしてすまないな、日比野」

姫会長もどうやら納得してくれたようだ。

俺もホッと一息吐いてから言う。

「まあ、そういう訳なんですよ。ハハハ、勘違いしたままだったら、どうしようかと思いました」

「勘違いしたままだったらか？ 竹刀でお前の性根を叩き直してたところだ。アハハハ」

「アハ、ハ、ハハハ（本ツ当に良かった……納得してもらえて）」

姫会長は恐ろしい事をサラリと言うから困る。

「それじゃあ、日比野。また、愛好会でな」

姫会長はそう言うで一樹さんに一礼をしてから、蹲る弟を無理矢理立たせて向こうへと行ったのだった。

そんな去り行く姫会長達を見ながら瑞希ちゃんは、一言こつ言っ
た。

「日比野さん、姫会長って……凄い方ですね」

沙耶香ちゃんと一樹さんも無言で頷く。

「だろ……凄過ぎて付いていけない時もあるけどね」

とまあそんなこんなで色々あったが、神社でお参りを終えた俺達は次の目的地である天目堂 高天智支店へと向かうのだった。

因みに、御神籤おみくじは中吉で、女難にこと気をつけるべしの一文が、暫くの間、頭にこびり付いて離れないのであった。

高天智天満宮から車で移動する事15分。

高天智市中心街大通りの一画に、天目堂の大きな看板が掛かる、4階建ての四角いビルが俺の目に飛び込んできた。

壁はやや色褪せた黄色で、所々に風雨に晒された痕跡が確認出来る。また、壁のとある部分にはヒビワレも幾つか走っていた。

総合的にやや年季が入ってそうに見える佇まいのビルである。俺が見た感じではあるが、築20年以上は間違いないだろう。

また、このビルの地下は駐車場になつてる様で、その入口部分には道路を走る車から見えるように、矢印看板が設けられているのだった。

一樹さんは左にウインカーを上げて、その矢印看板に従い、ビルの地下駐車場へと入ってゆく。

地下駐車場内は車が10台程置けるようになってるが、今はガラガラである。

その為、適当に車を駐車する。

そして車から降りた俺達は、駐車場内の片隅にあるエレベーターへと向かい歩いて行くのであった。

話は変わるが、鬼一爺さんも勿論、俺達と共にいる。だが、姿を隠さないといけないので、暫くの間は霊圧を下げた行動となるのである。

エレベーターの前に来た所で一樹さんが俺に話し掛けてきた。

「日比野君、先ず最初に、一階で鎮守の森の者かどうかの認証があ

るから、覚えておいてね」

「認証？ 証明書みたいな物を見せるんですか？」

「ああ、そういう言えば言っただけだね。これを見せるんだ」

一樹さんはそう言うのと、ポケットから一枚のカードを取り出した。大きさは銀行のキャッシュカードくらいで、日本列島の周りを森が囲むといった絵が書かれていた。どうやら、鎮守の森のシンボルマークの様である。

一樹さんはカード見せると続ける。

「実は日比野君と高島さんのカードは、まだ出来ていないんだ。登録には多少時間がかかるからね。それで、今回は見学と店主の挨拶も兼ねて来たんだよ」

「まあ、ご厄介になりだしたのはつい最近ですからね。色々と都合があると思いますんで、そういった事はそちらにお任せ致します」

「ハハハ、じゃあ付いて来てくれるかい」

「はい」

エレベーターのチンという音と共に一階に着いた俺達は、一樹さんを先頭に奥のカウンターへと進んで行く。

因みに、この建物は結構広い床面積で、この一階は仏壇仏具のシヨールームになっているみたいである。

俺は周囲にある仏壇や仏像に目を向ける。時折、仏壇の値段が目飛び込んでくる。10万くらいのやつから100万を超えるやつまでピンからキリである。

床には高級そうな紫色の絨毯が敷かれており、埋め込み型の天井照明や仏壇仏具とのコントラストで、この一階は儼かな雰囲気を作り出しているのだった。

そんな儼かな店内を見ているうちに、無人のカウンターへと辿り着く。

一樹さんは、カウンターに置かれた呼び鈴を鳴らす。

すると、奥の扉が開き、落ち着いた感じの初老の男性が現れたのだった。

背は160半ばくらいで、短い白髪交じりの髪は整髪料で後ろに流している。

また、この店のユニホームなのか知らないが、スーツの上から天目堂と書かれた紺色の法被を羽織る、という格好をしているのだった。

その男性は一樹さんを見るや、丁寧挨拶をする。

「いらつしやいませ。新年、明けましておめでとございます。本年もこの天目堂を宜しくお願い致します」

一樹さんも新年の挨拶をすると、先程見せてくれたカードを男に見せる。

男はそれを見るや、「これは失礼致しました」というと、カードリーダーをカウンターに出したのである。

一樹さんはそれにカードを通す。

そして暫くすると、右奥にある意匠を凝らした扉の方からピピピツという電子音が鳴るのである。

男はその扉へと俺達を案内する。

そして男は扉を開き、「では、ごゆるりと」と言った後、一礼をして俺達を見送るのであった。

扉を潜ると、その先は細長い通路となっていた。

俺達はその通路を突き進む。すると下へと降りる階段に突き当たった。

その階段を更に進んで行くと、一階と同じくらいの床面積がありそうなフロアへと出るのだった。

このフロアは一階と比べるとやや暗い感じがする。まあ地下に降りたからという先入観からかも知れないが。

周囲の壁には刀や剣などの武器や、何に使うのか分からない大きな術具が立て掛けられており、また、フロアを仕切る様に並んだ幾つもある棚には、様々な術具が丁寧に陳列されていた。

だがしかし、そういった術具類よりも、階段を降りて直ぐ、視界

に飛び込んできた大きな銅像に俺はビックリしたのだった。

3m近くありそうな一つ目の妖怪の像である。

俺と瑞希ちゃんは暫くの間、その銅像の前で立ち尽くしてしまっただった。俺の主観だが、像の感じは、ドラクエに出てきたサイクロプスを思わせる像である。

すると、沙耶香ちゃんが俺の隣に来て説明をする。

「日比野さん。この像は天目一箇神あめのまひとつのかみと言って、製鉄・鍛冶の神と言われております。武器や呪術具を扱っている為、天目堂では守り神として全ての店に置かれているそうです。また、天目堂という名前も、この神様がその由来だそうですよ」

「なるほど。守り神か……」

「でも、なんか凄い迫力のある守り神ですね」と瑞希ちゃんは胸に手を当てながら言う。どうやら像の放つ威圧感に圧倒されているようである。

俺達がそうやって像の前に佇んでいると、奥の方から俺達に話しかける人物がいた。

「へえ〜若いのに中々物知りじゃないか、お嬢ちゃん」

俺は周囲を見回すが、客は俺達だけのようだ。

「カカカカ、コッチじゃ」

俺達は声のした方向へ視線を向ける。

すると其処には、白い髭と長い白髪が特徴の爺さんが、カウンターで頬肘を付きながら俺達を見ているのだった。

パツと見は仙人の様な風貌をした爺さんである。

一樹さんはその爺さんがいるカウンターへと行くと、丁寧に一礼をしてから挨拶をする。

「明けましておめでとございます。今年からこの地域でご厄介になる事が多くなるので、今日は此方へ挨拶がてら参りました。名を道摩一樹なまかすきと言います。宜しくお願い致します」

爺さんは一樹さんの名前を聞くとピクツと眉を上げる。

「ほう、お主、道摩家の者か。呪術名家のエリートがこんなF県の

片田舎に来るとは珍しいの。ま、細かい事はどうでもええ。余計な詮索はせんよ。商売は信用第一じゃからの」

「ハハハ、ありがとうございます。ところでご老人、貴方がこの店の店主なのですか？」

爺さんは顎鬚を触りながら答える。

「まあ表向きは、上にいる男が店主じゃ。が、裏の店主は儂じゃな」というとニヤリと笑う。

一樹さんはそこで俺達を呼ぶ。

そして、この老人に紹介をするのだった。

「実はこの3名も、道摩に所属する者達ですので、以後お見知りおき頂きたいのです」

一樹さんは俺に目配せをする。

恐らく、挨拶をしておけという事だろう。

俺はカウンターに移動すると、爺さんに向かい丁寧に挨拶をした。

「初めまして、日比野涼一といいます。これからご厄介になる事が多くなりそうなので、宜しく願います」

爺さんは目を細めて俺をジッと見る。

そして20秒ばかり、俺を鑑定するかの様に直視すると言った。

「お主……女難の相が出ておるの。カカカッ、せいぜい気をつけるんじゃな。まあそれは兎も角、儂はこの呪術屋天目堂を預かる柳源次郎ちゆうモンじゃ。他の者達からは源さんと呼ばれとる。宜しくな、若いの」

「ハ、ハハハ、ヨロシクオネガイシマス……」

俺は引き攣った笑みを浮かべながらそう返事した。

何故なら、この爺さんの最初の一言に、俺はグサツと胸を抉られるような錯覚を覚えたからである。

それと同時に、この爺さんからは鬼一爺さんと良く似た雰囲気を感じるため、非常に嫌な予感が俺の脳裏を過ぎったのだった。

そしてこれも思った……最近、ジジイが絡むと嫌な展開が多いな

と。

もしかすると、爺難の相というのもあるのかも知れない。このとき俺はそんな事を思い始めていたのであった。

参拾伍ノ巻

《参拾伍ノ巻》 帰省

1月2日。

瑞希ちゃんや沙耶香ちゃん達と初詣に行った翌日の早朝、俺は電車に揺られながら実家のある物部市へと向かった。

今日も昨日と変わらず良い天気だけれども、時期が時期なので、まあ当然の事ながら外気はやはり冷たい。

だが、お日様が出ている内は、ポカポカとした心地いい光を下界に届けてくれるので、冬の寒さを幾分か和らげてくれるのだ。

また、その日光のお陰か、気分的にも幾らか楽になり、道中の足取りも若干軽くなったような錯覚を俺は覚えるのだった。

とまあそんな話は置いておいて……。

昨年はお盆に一度、実家に帰ってからそれっきりだったが、あの当時は御迦土岳みかつかだけでエライ目に遭ったので、帰省したという実感がイマイチ湧かない。

帰るには帰ったが、どちらかというところ、すぐに高天智市のアパートへ逃げ帰ったという表現の方がピッタリである。

まあ、あの時は布津御魂剣という洒落にならない超危険アイテムを持っていたから、こればかりは仕方がない。

そういつた前回の反省も踏まえ、今回の帰省はゆっくりと過ごすかなと考えながら、俺は実家へと向かっているのだった

半……。
という訳で、電車に揺られ更にタクシーに揺られる事2時間

俺は物部市にある我が家へと約五ヶ月ぶりに帰って来たのである。

今の時刻は、午前10時半。

実家の前でタクシーを降りた俺は、久しぶりの故郷の空気を満喫すべく、とりあえず、大きく背伸びをすると深呼吸をした。

それと共に周囲を見渡す。

いつもならば雪が降り積もって、この辺り一帯は白銀の世界といった感じになってるのだが、今年は降雪はあるが、まだ積もるまでには至っていない。その為、大地はそのままの姿を保っていた。

俺が育ったこの物部市の地区は、田舎である物部市でも更に田舎になる地区で、村落という表現がしっくりくる様な場所である。

遠くに見えるやや黒っぽい山々は紅葉も終わり、葉の散った木々が見せる独特の寂しい殺風景な感じと、暗い雰囲気を見る者に感じさせる。

また、この集落を囲うようにある沢山の水田も、去年一年の役目を終え、作物の植え付けが始まる春を待つかのように、耕された黒い土がむき出しの状態になっているのだった。

そんな冬の故郷を眺めた俺は、目の前に佇む日比野家に視線を向ける。

俺の実家は周囲にある家々と見比べても特別変わった所も無い。強いて言えば、茶色い壁が特徴の一般的な2階建ての和風家屋である。

家の周りには、爺ちゃんが農作業に使う2階建ての納屋と、親父とオカンの車が入った平屋の車庫があり、前回帰って来たときと比べると変わらぬ同様の建物が其処に佇んでいる。

だが、五ヶ月ぶりに見る日比野家は冬の訪れに伴い、至る所に雪囲いが施されており、その為、前回帰省したときとは一風変わった違う佇まいになっているのだった。

特に玄関周りや縁側は半透明のポリカ波板で嚴重に覆われており、雪が積もっても簡単には入りにくくなっている。

その様は、まるで『よつしゃあ、いつでも降ってこいやあ!』と言わんばかりの堂々とした佇まいに俺には見えるのだった。

そんな我が家の変化した部分感慨深く眺めながらも、俺は玄関

に向かい歩を進める。

玄関のすぐ前にまでやって来ると、ポリカ波板で遮断されて確認できなかった雪囲いの中も、よく見えるようになる。

囲いの中の見覚えのある玄関には、正月飾りの注連縄や門松、そして日の丸の旗も確認でき、それらが家にやって来た者をメデタイ気分させてくれる。

またその他にも、築30年という我が家の白い玄関壁には、俺が小さなガキの頃に悪戯書きした意味不明な模様が小さく描かれており、俺を懐かしくさせてくれるのである。

これを書いた時は、オカんに凄い剣幕で怒られたのを覚えている。因みに模様は解読不能だ。まあ小さい頃の落書きなので、大して意味は無いだろう。

そんな変わらない部分に目を向けつつ、俺は久しぶりに実家の玄関戸を右に引いたのだった。

「ただいまあ」

俺は大きな声でそう言うのと玄関を潜る。

すると、奥にある居間の戸が開き、妹の美涼みずすずが黄色いパジャマ姿で現れたのだった。

起きてそのままの格好といった感じである。

まあそれでも、ボーイッシュなショートカットスタイルの髪は寝癖などなく整っているのので、起きた後に一応、手入れはしたのだろう。

そして久しぶりに見て気付いたが、瑞希ちゃんや沙耶香ちゃんと年が近い所為か、よく見るとこの年代特有のあどけない雰囲気が美涼から感じられるのだった。

背丈も瑞希ちゃんと同じくらいなので、それもあるかもしれない。そんな妹は俺の前にやって来るとニンマリと笑顔になって口を開いた。

「兄貴、お帰り。それとアケオメ」

「フウウ、あのな、美涼……。最低でも、明けましておめでとう、

くらいは言ってくれよ。家族なんだからさ」

妹の適当な挨拶に、ややゲンナリしつつも靴を脱ぎ家にかかる。

美涼には沙耶香ちゃんの爪の垢でも煎じて飲ましてやりたい、などと考えつつも、俺は居間へと歩を進める。

広さ8畳の居間には、オカンがコタツに入って焼餅を食べながら正月特番のテレビ番組を見ていた。

セミロングの髪型は、お盆の時と変わっていない。というか、俺が小さい頃からずっとこの髪型のような気がする。因みに髪の毛は茶色に染めている。

また室内には、コタツの上に置かれた焼餅の焦げた香ばしいかおりで充満しており、妙に俺の食欲をそそらせるのだった。そういえば、道中何も食べなかった事を思い出す。

まアそれは兎も角……。

俺はオカンに新年の挨拶をする。

「今帰ったよ。それと、明けましておめでとう」

「あら、涼一お帰り。それと、アケオメ」

俺はオカンのその言葉にクラツと目眩を覚える。

その為、額に手を当てながら俺は言うのだった。

「オカンもかよ……。新年の挨拶くらいはちゃんとしようぜ」

「暫く見ないうちに、硬い男になったねえ、涼一。そんな事じゃ、今時の女の子にはモテないよ」

「私もそう思う。兄貴は硬すぎなんだよ」と美涼もオカンに同調する。

「フウウ、もういいや……」

俺が正論を言ってる筈なのだが、オカンと美涼にこう切り返されると、もうどうでも良くなってきた。

溜息を吐いた後に俺は続ける。

「ところで、親父と爺ちゃんは？」

「お父さんは、多分、自分の部屋にいるんじゃないかい。お爺ちゃんは、コウさんの所に年始の囲碁を打ちに行ってるよ。多分、一泊

してくるんじゃないかい」とオカン。

「ふうん、そうか。爺ちゃんは居ないんだ」

コウさんというのは、爺ちゃんの兄の事である。つまり親戚の家に行ってるらしい。

と、そこでオカンは何かを思い出したのか、俺に言う。

「あっそうだ涼一。涼一からも言っちゃってちょうだい」

「へッ、何を？」

オカンは懺然とした表情で言う。

「お父さん、また新しいギターを買ったんだよ。それも結構な値段のを。あまり散財するような事はしないようにって、言っちゃってちょうだい。もう本当にあのお父さんは……若い頃から何も変わってないわ」

「またか、変わってないな親父は……。分かった、言っとくよ」

実は俺の親父、いい歳してロックバンドなんぞを組んでいるのだ。因みにバンド名は『ナイス・ミドル!』という。

親父達が意識すると自称『素敵な中年オヤジ!』という意味になるそうだ。なにが、というか、何処がナイスなのか良く分からないが、兎も角、オッサンバンドマンなのである。

因みに担当している楽器はリードギターで、前回、親父の部屋に入ったときには、エレキギターやらアコースティックギターやらが合計20本近く置かれていたのを覚えている。

オカンの悩みの種である。

まあそんな訳で、居間を後にした俺は、とりあえず、持ってきた荷物を2階にある自分の部屋に置くと石油ファンヒーターのスイッチを入れて部屋を暖める。

それから1階の奥にある親父の部屋へと移動するのだった。

親父の部屋の前についた俺は、目の前の扉をノックする。

コンコン

「……………」

応答無しである。

再度ノックする。

コンコン

「……………」

応答無しである。

まあ、こんな風に突っ立っていても仕方がないので、俺は思い切
って扉を開いた。

すると扉の先からは、黒色のジャージ姿で眼鏡をかけた親父が、
ヘッドホンをかけて一心不乱にエレキギターを弾く、という姿が目
に飛び込んで来たのである。

因みに、俺の親父は地元企業で働く普通のサラリーマンで、何処
にでもいる普通のオッサンだ。背は俺より少し低い、良く似た体
型である。

ロッカーだからといって長髪とか、毛を染めたりはしていない。

まあライブの時は、結構ロッカーっぽい格好をするが…………。

話を戻す。

俺はそんな親父を久しぶりに見ると同時に、少し引いた。

だが、ノリノリの奇妙な動きでアッチの世界にいる親父に、一刻
も早く俺の存在を知ってもらう為、俺は親父に近付いて肩をポンと
叩いたのだった。

すると親父はビックリしたのか、飛び跳ねながら振り返る。目玉
が飛び出そうなほど、大きな目をして…………。

俺の存在に気付いた親父は、ヘッドホンを頭から外して、ホッと
しながら話し出した。

「なんだ、涼一かぁ。おどかすなよ……………」

「だって、ノックしても返事ないからさ。まあとりあえず、明けま
しておめでとう」

「おう、明けましておめでとう。それはそうと、これを見てくれ」

親父はそう言うと、肩にかけたままになっているエレキギターを
俺に見せる。

そして、ウンチクを始めるのだった。

「涼一、このギターはな、お父さんの大好きなギタリストの一人、エリック・ジヨ ソンのモデルなんだよ。リアPUにもトーン配線をしてあるから、音作りの幅が広いんだ。まあ値は張るが、すばらしいギターだ」

細かい事はよく分からんが、たしかに、素人目に見ても綺麗な塗装を施しており、ネックやボディの木目も浮き出たように見える、美しい仕上がりのギターである。

結構な高級木材を使っているのは容易に見て取れる。

シルバーの金属パーツ類も、まだ、買ってからそれ程に日が経っていない所為か、室内の明かりが反射して真新しく光り輝いていた。形はストラトキャスターと呼ばれるもので、ヘッド部分にはメイカ名であるF e d e rの筆記体ロゴが描かれており、一際目を引いた。

とりあえず、親父の新エレキギターを鑑賞した俺は、オカンの忠告を思い出したのでそれも言った。

「親父、ギターの事は分かったけど、オカンが嘆いていたぞ。お金の使い過ぎだつて。幾らしたんだよ、それ？」

「値段は30万ちょいといったところだな。まあたしかに、母さんの言う事も一理あるし、これからは自粛するよ。とりあえず、そう言っといてくれ」

「へいへい。でも、親父からも言っといた方がいいよ」

「ハハハ、そうだな」

俺は、親父の部屋を久しぶりに眺める。

部屋には10本程のアコースティックギターとエレキギターが、スタンドに並べて綺麗に置かれていた。

また、壁際にはV O Xと書いてある、パツと見は鞆に見えるアンブも確認出来る。恐らく、V O Xというのはメーカー名だろう。

しかし、前回部屋に入ったときと比べると、ギターの本数が少ないように思えたので、それについて尋ねてみた。

「アレツ、親父って、もつとギターを持ってなかったっけ？」

「ああ、他のギターは人に譲ったり売ったりしたから、今、手元にあるのはこれだけだ。あまり沢山持っていて使わないからな。ハハハ」

「ふう〜ん、まあいいや。それじゃな、親父。もう行くから、ギター続けてくれていいよ」

と俺が帰りかけたところで、親父は俺を呼び止める。

「そうだ涼一。今度、リズムギターをウチのバンドで弾いてみないか？」

実を言うと、俺はローポジションでの簡単なコード伴奏程度ならギターを弾けたりする。

中学から高校時代の一時期は、俺も弾き語りとかに憧れた所為でもある。

まあ、この頃は誰もが通りそうな定番の趣味である。因みに、俺がギターを教わったのは勿論、親父だ。

だが、ここ最近は興味が失せてしまったので全然弾いてないのだ。当然、高天智市のアパートにも無い。

まあそついう訳で、俺は断る事にした。

「最近ギターなんて弾いてないから、指先の皮が普通の人と同じだよ。やめとく」

「むう〜そつか。ま、気が変わったら言ってくれ。それじゃあ、また後でな」

とまあそんな感じで親父の部屋を後にした俺は、1階の仏壇にてご先祖様にお参りをする。

その後、自分の部屋に戻り、旅の疲れを癒すかのようにゴロンと寝転がるのだった。

因みに、俺の部屋には高校時代に読んでいた雑誌や本が壁際の棚にあるだけで、ほかは何も無い。大きさは4畳程度で、割と日当たりのいい部屋である。

ただ、お盆に帰省した時と比べると、妙に片付いてる。恐らく、オカンを掃除をしてくれたのだろう。後で礼を言っておこう。

まあそんな風に室内の変化に目を向けていると、そこで鬼一爺さんが下げていた霊圧を上げたのだった。

俺の部屋には他に人の気配もないので、鬼一爺さんがこれ幸いと思っただろう。

(フウウ、ようやく、楽になったか。あまり霊圧を下げ続けるのは楽じゃないのう) といいながら首を回す。

霊体の鬼一爺さんに肩こりなんぞある訳無いのに、不思議な行動である。

「おお、そう言えば鬼一爺さんの事を忘れていたよ」

(むツ、なんじゃい。冷たいのう、涼一は……) と言うと鬼一爺さんは拗ねた態度をとる。

「まあ、そうむくれるなよ。仕方ないじゃないか、アパートを出てから3時間近くも経ってるし……」

爺さんとそんな遣り取りをしている時、フト、これからの修行の事が俺の脳裏に過ぎった。

その為、問い掛ける。

「ところで、鬼一爺さんさあ、これからはいつも以上に細心の注意を払って、霊術の修行をしなきゃいけない訳だけど……どうしよう？」

(フム、そうじゃのう、人払いの術は、霊術に長けた者には通じんからのお。どうするかのう)

俺の問い掛けに鬼一爺さんは暫し目を閉じて考え込む。

そして、何かを閃いたのか、ポンと手を打つのだった。

(涼一、そうじゃ。良い術があるぞい。今のお主ならもう扱えるはずじゃし、あの狭い部屋でも出来るしの。それに何より、お主の霊力を扱う技量も向上するしの。次の段階にもってこいの術じゃ)

「へえ〜どんな術だい？」

(うむ、印術というのじゃが、その名の通り、己の手で印を組み霊

力を変化させる術じゃ）

鬼一爺さんはそう言うのと両手でカンチョーのポーズをとる。

沙耶香ちゃんとかならば、もっと違う見方を出来るのかも知れないが、俺が歩んできた人生の中では、それが一番シツクリくる表現なのであった。

そういった先入観からか、見た目がイマイチな為、俺は若干テンションが下がる。

そして口に出してしまうのである。

「うわあ〜なんか知らんけど……カッコ悪そうな霊術だね」と。

すると、鬼一爺さんはムキになって言うのである。

（馬鹿も〜ん。姿なんぞ、どうでもよいわ。それよりも涼一、我の組む印を見て何か思い出さぬか？）

鬼一爺さんは色々な種類の印を次々と連続して組んでゆく。

だが、俺には色々な種類のカンチョーフォームにしか見えないので首を傾げる。

「思い出さんか、といわれてもなあ……」

（コリヤア、涼一。もう少し真剣に見んかッ。我はお主に教えた筈じゃぞ）

俺の返事を聞いた鬼一爺さんは怒りながらも更に組み続ける。

しかし、今度は次第にスピードを落としてゆっくりとである。

すると、それらを見て行くうちに、何処かで見たような錯覚を抱く様になったのである。

いや、錯覚ではない。これは……。

「鬼一爺さん……もしかして、今組み続けている印は、俺が今まで習って霊符に書いてきた、術式を構成する為の模様か？」

（そうじゃ、ようやく分かったか。まったく涼一は……）

爺さんは、しょうがない奴じゃと言わんばかりに、俺へジト目を向ける。

色々と鬼一爺さんも言いたそうではあるが、とりあえず、俺は今の内容を総括する事にした。

「という事は、つまりだ。印術というのは霊符等の術具といった外部の物を使わずに、その場で印を組むという方法で術式を構成し、霊力を変化させる術ということか」

俺が整理してそう言つと、鬼一爺さんは腕を組み頷く。

（涼さんや、まあそういう事じゃ。とはいつても、霊符の様に色々な術式を自由には使えぬから、発動できる術も限られてくるがの）
「なるほど……これは使える。ストックしておけるとはいつても、霊符には限りがあるからね。真言術もそうだけど、身一つで完成できる術は心強い」

と俺は顎に手をやり言つた。

話は変わるが、霊力というものは基本的に自分の意思で、切つたり、張つたり、飛ばしたりする事は出来ない。

確かに高練度の霊力は悪霊を消滅させるが、霊力はあくまでも加工素材であり、加工する為には霊符等の術具といった術式が施された他の媒体に霊力を移すか、さては真言術のように音で加工するかしか無いそうである。

でもまあその前に、まずは加工が可能なところまで霊圧を練り上げるのが大前提だが……。

で、今、鬼一爺さんが言つた印術というのは、霊術理論の上で考えるとその前者の範疇ではあるが、その場で手を使い術式を構成させるという点を考えると、それら二つの中間に位置する霊術の様に俺には思えたのだった。

そんな事を考えていると爺さんは言う。

（まあそれとは別に、幾つかの真言術もそろそろ学んでゆかんと。浄化真言以外も覚えて行かぬと、これから先、印術と組み合わせる事が出来ぬしの。フォフォフォ）

「印術に新しい真言術か……どんな術かわからんけど、また頑張るかあ」

今話を聞き、これから学ぶであろう印術や新しい真言術に俄然俺の中で興味が湧き始める。

そして、俺の好奇心が刺激され高まってきた、丁度その時。

鬼一爺さんが陽気に笑いながら言うのだった。

(フオフオフオフオ、という訳で、早速始めるかの。涼さんや)
そう言うなり、鬼一爺さんは黄門様の如く、満面の笑顔を俺に向ける。

「エエツ、今からか？ ちよつと勘弁してよ。まだ正月だぜ！」

幾らなんでも、新年早々、そんなオカルチックな事はやりたくないの、俺はとりあえず抗議してみた。

だが、俺の抗議を聞くや否や、仏の笑顔を浮かべた鬼へと、鬼一爺さんは変化したのである。

そして、低くオドロオドロしい声で俺に言い放った。

【涼さんや、世直しの道は長く険しい……。余の顔をよく見るのじや。仏の顔でいる内に、サツサと始めい！】

鬼一爺さんは年末にあつた暴れ 坊將軍や水 黄門の再放送をずっと見ていたので、恐らく、それらの影響をだいぶ受けているように思われる。

だって毎日かぶり付きで見てんだもんよ。少年時代のような穢れの無いキラキラした目をして……。

その時点から凄く嫌な予感はしていたが、まさか、こんな時期のこんな所で発動するとは……。

まあそれは兎も角、俺は物凄い威圧感を放つ爺さんに促されるまま、旅の疲れを癒す事もなく、霊術の修練を始めるハメとなったのだった。

「ゴクリ……は、はひッ」

トホホ

涼一が術の修練をやり始めてしばらく経った頃。

1階の居間にて美涼は、コタツに入りながら母と他愛ない談笑をしていた。

その時、美涼はフト何気なしに、壁にかかった時計に目を向ける。今の時刻は11時45分。時計を見た美涼は母に言う。

「お母さん、もうすぐお昼だよ。昼食の準備しないといけないんじゃない？」

「あら、本当だわ。さてと、それじゃあ、美涼はテーブルを拭いて、その後に食器類を出しといて頂戴。それが終わったら涼一に、後少ししたら居間へ降りてくるように、って言うといってくれるかい」

「はい」
と陽気なテンションで美涼は返事をする、早速、言われたとおりに始めるのだった。

テーブルを拭いた美涼は、台所の食器棚から茶碗や皿等を次々とテーブルの上に置いてゆく。

そしてそれらを終えた後、涼一の部屋へと向かう為階段のある方向へと歩を進めるのだった。すると、階段を上るにつれて涼一の話し声が美涼の耳に聞こえてくる。

美涼は階段を上りながら（携帯で電話中なのかな？）と考えつつ、涼一の部屋の前へとやってきた。

そして、そつと扉を開いて、狭い隙間から中の様子を確認したのである。

だが、美涼の目に飛び込んできたのは、想像を絶する光景であった。

その光景とは……。

涼一が奇妙な姿勢で両掌を組み、尚且つ、その後ろで着物姿の老人の幽霊が怒りつつ、何かの指示を出している光景だったからである。

20秒程ではあるが、美涼は息を飲み、目を見開きながらそれらを凝視する。

室内の感じとしては、涼一が間違える度に鬼一法眼が怒り飛ばし、

涼一はげんなりしながらそれに従うといった、やっている二人にとってはいつもの修行風景である。

だが、そう言った事に免疫の無い美涼は、それらを見るなり、当然、恐ろしい物を見た時のような戦慄が身体に走るのであった。

美涼は、ゴクリと生唾を飲み込みながら、震える手で物音を立てないように扉をそつと閉める。

そして、忍び足で涼一の隣にある自分の部屋へと向かうのだった。

部屋に戻った美涼は、青褪めた表情で閉めた扉によりかかり、もう一度、ゴクリと生唾を飲み込む。

そして、動揺のおさまらない気持ちを一旦整理する為、胸に手を当てて大きく深呼吸を繰り返すのだった。

そんな動作を何回も繰り返した後、美涼はボソツと口を開いた。

「な、なによ、今の……。も、も、もしかして、幽霊？……。ゴクリッ」

美涼はもう一度、目を閉じて先程の光景を思い浮かべる。

暫くそうやって衝撃的な光景を思い返すと、美涼はある結論をだした。

【兄貴は、悪霊にとり憑かれています！】という結論を……。あの場面だけを見た普通の人間の思考回路ならば、至極一般的な解釈である。

また、そう結論付けた美涼の脳内では、次第に、父や母へ言うべきかどうかの押し問答が始まるのであった。

だが、幾ら考えても結論が出ない。

そして、こうも思った。多分、話したところで絶対に信じない親をからかっているだけだ。そう言われるのがオチだ、と。

しかし、こうしていても埒が明かれないと思った美涼は、意を決して、ある事を確認する為にもう一度、涼一の部屋へと向かう事にしたのだった。

自分の部屋を静かに出た美涼は、忍び足で物音を立てないように

涼一の部屋の前へやってくる。

それから先程と同じ様にまた扉をそつと開け、再度隙間から覗き込んだ。

美涼の目にはさつきと同様の衝撃的な光景が飛び込んでくる。

そこで美涼は覚悟を決めて、ある行動に出る。

コンコン

一旦、扉を閉めると、美涼はノックをしたのである。

すると、ノックの音が聞こえると共に、室内の鬼一法眼は霊圧を下げて姿を隠す。

それを確認した涼一は、扉の方に視線を向けると言うのだった。

「ン、何？ オカンか？」

美涼は意を決して扉を開ける。

扉が開ききり、美涼の全身が見えたところで涼一は言う。

「なんだ、美涼か。どうしたんだ？」

室内をぐるっと見回してから美涼は言った。

「お母さんが、後少ししたら、ご飯だから降りて来るようになって言っただよ……」

「お、もうそんな時間か。分かったよ」

「……それじゃね、兄貴」

そんな遣り取りを終えた後、美涼はまた自分の部屋へと戻るのだった。

美涼の部屋は隣にある涼一の部屋と同じくらいの大きさで、室内には本棚と勉強机、そしてベッドといった構成になっている。ベッドの上にはクマのぬいぐるみ等も見受けられ、この年代の女の子の部屋模様としてはごくごく普通の部屋である。

そんな自分の部屋へ戻った美涼は、室内にぐるりと目を向かわせると、とりあえず、目を閉じて大きく溜息を吐いた。

フラフラと勉強机に移動すると椅子を引いて腰掛ける。

すると、頭を抱えながらまたもや大きく溜息を吐くのだった。

そして、目の前の白い壁を見詰めながら一人呟いた。

「あ、あの幽霊、私が部屋に入ったなら居なかった……。多分、私に気付いて隠れたんだわ。これじゃあ仮に、お父さんやお母さんを呼んで来ても信じてもらえない。どうしよう……。このまま放っておいたら兄貴がヤバイよ……」

美涼は頭を抱えながら、この事態をどうするか必死に考える。

そして散々悩んだ末、美涼はある一つの結論を出したのだった。

それは……。

「こうなったら、私があんとかするしかない。大人は多分信じてくれないし、何より、あの幽霊はまた隠れてしまいそうだし」

そう決意した美涼は、勉強机の脇にある、中学の入学祝に親から買ってもらったノートPCに視線を向かわせる。

真剣な目を浮かべた美涼は決意を胸に一度頷くと、そのノートPCを机の真ん中に移動させて電源を入れるのだった。

PCが立ち上がると、美涼は早速、ブラウザのアイコンをクリックして起動する。

そして、ポータルサイトの検索バーを使って、悪霊退治の方法を探し始めるのだった

その日の夜。

俺は久しぶりに、夕食を親子四人水入らずで食べていた。

今日は正月である為、その食事内容も豪華なものになっている。

仕出し屋に頼んで作ってもらった刺身の盛り合わせや寿司の盛り合わせ等が、テーブルの大部分を占領しているのだ。見るだけで腹がグウグウなるというものである。

だが、そんな料理を前にして、今の俺には一つ難点があった。

それは……鬼一爺さんから印を組む練習を何回も何回もやらされたので、両掌の関節が笑っている状態なのである。しかし、当たり前の話だが、俺自身は全然笑えない状態である。

予期せぬ荒行をするハメになった為にこうなったのだが、これのお陰で俺は箸を持つと手に震えがくるのだ。自分自身が見ていてもあきらかにおかしい震えである。

オカンは心配そうに俺の手を見てたが、「夜になると寒いからね」といって誤魔化しておいた。

とりあえず、そんな感じで夕食を食べ始めたのである。

そして食事中、予想してた事だが、オカンや親父から大学の事や一人暮らしの事等の質問攻めに遭う。

まあそれらの質問には適当に答えておいたが……。

ただ、先ほどから気がかりな事が一つあった。

美涼の様子が少しおかしいのだ。

時折、チラチラと俺のほうにやたらと視線を向けるのである。

俺は首を傾げつつ美涼に問う。

「美涼、どうしたんだ？ なにか聞きたい事でもあるのか？」
すると、美涼は慌てて言う。

「う、ううん。ち、ちがうよ。ただ、一人暮らしってどんなのかなあ、って気になったただだよ」

俺の主観だが、美涼は何か隠してるような気がするのだ。

長い間、一つ屋根の下で暮らしてきた勘が、俺の中でそう告げている気がするのである。

そんな風に考えていると、親父は美涼に言う。

「美涼、お前にはまだ早い。はやから、そんな事に興味を持つんじゃない」

「まあまあ、お父さん。美涼も多感なお年頃だから、仕方が無いわよ」とオカン。

といった感じで、この話はこれで終わり、また他愛ない談笑が始まる。

そして終始こんな感じの雰囲気、夕食時の家族団欒は進んで行ったのである。

まあその後も時折、美涼は俺に妙な視線を向けていたが、向こう

での生活が気になっただけなのかもしれない、そう思う事にし別段深く考えない様にしたのだった。

だがしかし！

この後、予想だにしない災難が降りかかる事になるのを、この時の俺は全く気付いていないのであった

夕食を終えた俺は、しばらく居間で寛いでから2階の自室へと戻った。

部屋に入るなり俺は「クシヨン！」とクシヤミをする。それと共にブルツと震えがきた。

恐らく、夜になって外が冷えると共に、その影響で室内の気温も寒くなってきた所為だろう。

そう考えた俺は部屋の温度を上げる為、ファンヒーターの設定温度を1 だけ上げる。

それから、まだ早いが、寝る為の布団を敷き、その上にゴロンと寝転がるのだった。

するとそこで、さっきと同じ様に鬼一爺さんは霊圧を上げる。

そして俺に言った。

(涼一、もう一度おさらいをするぞい。教えた印を組んでみるのじや)

「エエー、寝る前にもやるのかよ……」
(……………)

俺がそうぼやくと、鬼一爺さんは笑顔のまま無言で俺を見詰める。静かに霊圧を高めながら……。

何か嫌な予感がした俺は、観念して投げやりに行った。

「ハイハイ、分かりました、分かりましたよ。ええ、やりますとも、やらせていただきますとも」

(分かればよい。さ、始めよ……)

寝転がった俺は、「よっこらせ」と立ち上がると一度深呼吸をする。

そして、鬼一爺さんから日中にならった『飯綱の太刀』と呼ばれる印術の術式を組み始めるのだった。

この術は文字通り、霊力の刃を作るのが目的なのだが、なれない術の所為か、結構難しいのだ。

因みに鬼一爺さん曰く、飯綱というのは鎌鼬の別名でもあるそうである。

というわけで話を戻す。

この『飯綱の太刀』という印術は、10種類の術式模様を両手で組み上げていくのだが、しっかりと正確に組んでいかないと霊力が変化しないのだ。

しかも、途中で失敗すると、一からやり直しなので非常に面倒なのである。

その為、何度も繰り返し練習して、身体に叩き込むしかないわけであった。

そうだった理由から、おさらいを何回か続けていると、コンコンとノックする音が聞こえてきたのである。

俺はとりあえず、練習を中断し、そちらに意識を向かわせた。

「ん？ 誰？」

すると、少し間を空けてから返事が返ってきた。

「……兄貴、私だけど。今、ちょっといいかな？」

どうやら扉の向こうにいるのは美涼みいだ。

俺は鬼一爺さんに霊圧を下げるように目配せをする。

それから返事をした。

「いいぞ、入れよ」

俺の返事を聞いた美涼は、今から運動でもするかのような赤いジヤージ姿で部屋の中へと入ってきた。

そして、そんな気合の入った風に見える美涼は、黒い紙袋を大事そうに抱えながら俺の前へとやってくるのだった。

紙袋の中に何が入ってるんだろう？ と考えつつも、俺は美涼に用件を聞く事にした。

「美涼、なんか聞きたい事でもあるのか？ 晩飯の時もなんか聞きたそうにしてたけど」

すると美涼は真剣な表情になり、一呼吸置いてから、俺に言うのだった。

「兄貴……私見たんだ」

「ン、何を？」

俺は軽く問い掛ける。

だがこの後、美涼の口からはとんでもない事が語られるのだった。「お昼に兄貴を呼びに来たとき、扉の隙間から私見たんだ。ア、兄貴が悪霊に苦しめられてるのを……」

「……………」

美涼から予想外の話を聞き、俺は少しの間、頭の中が真っ白になった。と同時に時間が止まったような錯覚も覚えた。

俺と美涼の間に無言の時間が暫し流れる。

そして、重苦しい空気の中、俺は口を震わせながらもなんとか言った。

「み、見たのか……ア、アレを……」

美涼は無言で頷くと、抱えていた袋を床に置いて言うのだった。

「兄貴……私、なんとか悪霊を退散させる為に頑張るから！」

「ヘッ？ 退散させるっておまッ」

なんか知らんが、予想外の展開になってきた。

「心配しないで兄貴。色々調べて、これでも少しは揃えてきたんだ。悪霊が嫌いそうなものを」

美涼はそう言うのと紙袋の中に入ってる物を次々と出してきた。

袋の中には、塩や唐辛子、瓶に入った得体の知れない液体、聖書や数珠、そしてロザリオのネックレス、学業成就のお守りや家内安全のお守り等、無国籍で統一性の無い品物がわんさか入ってたのだ。

そして美涼は、おもむろにその中の一つ『塩』をまず手にとると、俺の顔面に向かい豪快に振りまくのだった。

「チョツ！ おまつ、やめ……【悪霊退サアアン！】」
当然、美涼の振りまいた塩が俺の目に入る。
「グワツ、目がああああ、目がああああ」

塩の刺激が俺の目頭を熱くする。
それと同時に、一瞬だが、天空の ラピユタにでてきたムスカ大佐の気持ち少しわかった気がした。

だが美涼は、そんな苦しむ俺を無視して更に続ける。

【まだよ。兄貴に纏わり付く悪霊よ立ち去れエエエ】
今度は俺の顔に何か冷たい水のような物が掛けられた。
恐らく、瓶に入った妙な液体に違いない。

このままでは流石にヤバイと思つた俺は、美涼に慌てて言う。

「ちょ、ちょつと待てツ！ 落ち着け、というか落ち着いてくれツ」
「兄貴、だめだよ。こういう事は一気にやってしまわないと。それにもうすぐで悪霊が出てくるはずだから、もう少し我慢して！」

駄目だ……今の美涼には、ある程度本当の事を言わないと信じてくれそうに無い。

美涼は完全に自論を信じきっており、尚且つ、鬼一爺さんを悪霊だと勘違いしてしまっている。

そう考えた俺は、塩でやられた目を閉じつつ、鬼一爺さんに呼びかけるのだった。

「オイツ鬼一爺さん、姿を現して美涼を説得してくれツ」
すると、俺の前方から鬼一爺さんの声が聞こえてきた。

「どうやら俺と美涼の間に現われたようだ。」

（娘子よ。やめるのだ。我は悪霊などでは無いぞい）
だが、美涼は爺さんの姿を見るなり、更にエスカレートするのだった。

【現われたな、この悪霊め！ ……イエスは御霊によって荒野に導かれた。悪魔に試みられるためである。そして、四十日四十夜、断食をし、そしてえ〜と……そののち空腹になられ……え〜と……え〜いもう、長いから、これでもくらええ、だりやせいいー！】

塩で目を一時的にやられてるので、詳細はわからないが、途中までは聖書の一文を読んでいたようだ。

だが、読むのが面倒くさくなったのか、美涼は何かを爺さんに向かい投げつけたみたいである。

しかし……。

「ぐわあああ！」

突然、硬い何かがバサツと俺の顔面にぶち当たったのだ。

恐らく、今読んでいた聖書だろう。なんて罰当たりな事を……。聖書の角が顔面に直撃した為、俺は顔を押えて悶絶する。

しかもよく考えたら、鬼一爺さんは俺の前に現われたみたいなので、爺さんに投げつけられた物は、すり抜けて俺に当たる構図になっているのだ。

まったくもって予想外である。

だが、尚も美涼の暴走は続く。

「な、なんで効かないの。おのれ、こうなったら……えい、えい、えい、えいッ！」

「痛ッ、アイタア。ちょッ、美涼！ や、やめれッ」

今度は手当たり次第に、持ってきた物を爺さんに投げつける。そして俺がことごとく被害を受けるわけである。

というか、何故ことごとく投げるといふ行為になるのか、それが理解しかねる。

まさか、狙ってやってるんじゃないだろうな。そんな事が一瞬過ぎった。

(やめるのじゃ、娘子よ。落ち着くのじゃ)

鬼一爺さんもなんとか諫め様とはしてるが、あまり効果はないようだ。

まあ悪霊だつて思ってるんだから仕方ない。聞く耳もたん状況だ。慌てて鬼一爺さんを頼ってしまった、完全に俺の状況判断ミスである。

「……なんで効かないのよおお。ヒエエエエ」

ついに投げる物が無くなったのか、途方にくれた美涼は泣き始める。

『やっと打ち止めか……』 そう思った俺はとりあえずホツとしつつ、辛いながらもなんとか目を開けて、泣いている美涼の傍へとゆく。

そして、美涼の両肩にポンと優しく手を置いてから言うのだった。
「美涼、泣くんじゃない。少し、落ち着け。それと、この爺さんは悪霊なんかじゃないから」

俺の言葉を聞いた美涼は少しは落ち着いてきたのか、幾分か緊張のほぐれた声色で問い掛けてきた。

「グス…… あ、悪霊じゃないなら、なんなのよ？」

「フウウ、実はな……」

それから20分くらいかけて、鬼一爺さんの事を若干ボカしながらも、俺は美涼に説明する。

因みに、美涼には『俺は幽霊が憑きやすい体質だから被害に遭わないように、その昔、陰陽師だった鬼一爺さんが監視してくれている』と誤魔化しておいた。

まあ、何処で知りあったのか、とかは色々と聞かれたが……。話を戻す。

そして美涼も、最初こそ、脅えたように聞いていたが、鬼一爺さんが人懐っこい性格だと分かると、美涼も次第にいつも通りの気楽な雰囲気に戻り始めた。

話し始めて15分くらいすると、逆に鬼一爺さんに質問をしたりもしてたので、美涼も爺さんの存在を受け入れ始めたみたいである。とりあえずそんな感じで、美涼には納得してもらったのだが、この事は親も含めて誰にも他言しないように釘を刺しておいた。

色々と面倒な事になるので、そこところは特に強く言っておかないといけないからだ。

美涼も、それについては一応同意してくれた。まあ大丈夫だろう、多分……。実の妹を信じてみよう。

また、説明を終えた後は美涼も積極的に、色々と昔の事を鬼一爺さんに聞いたりするようになり、すっかり受け入れたようだったので一安心といったところである。

まあそんな感じで、予期せぬ事態をなんとか乗り切った俺は、安心感からか全身の力を抜いて布団の上に寝転がるのであった。

だがその時、御神籤おみくじに書いてあった『女難にこと気をつけるべし』の一文が再度、俺の脳裏を過ぎる。

それと共に、これも女難の一種かと思うと全身に悪寒が走ったのであった。

俺がそんな風に身震いしていると、美涼はしれっとした態度で言った。

「兄貴もちゃんと鬼一爺さんの事を言ってくればよかったのに、そしたらこんな事にもならなかったんだから」

「言う暇がどこにあった。ったく、フウウ、誰かさんに変な物を一杯投げつけられたから、もう一回風呂に入らないといけないよ……あゝあゝ」

俺はそう言うとジト目で美涼をみる。

すると美涼は、顔の前で必死に両手を合わせ、拝むように言った。

「ゴ、ゴメンネ、兄貴。ちゃんと反省はしてるから……ね？」

まあ反省してるみたいだしいいか……。

そう考えながら、俺はクシャミをしつつ二度目の風呂へと向かうのだった。

そして風呂に向かう途中、俺は固く誓うのである。

今回みたいな事がもう無いように、親しい間柄だといっても気を抜かず、もう少し警戒心を持つように心がけようと。

次はこんな目では済まないのかも知れないのだから……。

というわけで、年が明けてからまだ二日しか経って無いのにも関わらず、予想外の大変な目に俺は遭ったのであった。

参拾六ノ巻

《参拾六ノ巻》 暗躍

1月中旬 某県某所

今はもう夕刻前。

とある地方の高い山々に囲まれた、とある場所での話である。

其処から見える周囲の山々や大地には、真つ白な白粉おしろいが塗られたかのように雪化粧が施されており、モノクロの風景画を思わせる黒と白の世界があたり一面に広がっていた。

先ほどまで、眩しい銀世界を創るのに一役買っていた日の光も暮れはじめており、外の様子は暗闇の世界をつくる為の準備段階へと入っていた。

光が届かなくなるにしたがい、周囲の気温も下がり始める。そして日が完全に沈む頃には、凍てつく暗闇が辺りを覆い尽くすのである。

今此処に、その闇の移り変わりを見届けるかのように、山の頂から日の光が消えていくのを見守る老人がいた。

その老人の名を土門どもん 宗元そうげんという。

良く知る親しい者達からは、一族の長という敬意込めて土門長老と呼ばれている老人である。

紺色の着物姿で窓辺に立つ土門長老は、自身の住む屋敷内の一室から何かを憂うかのように外を眺めていた。

土門長老が佇む12畳の広さを持つその部屋は、座敷と呼ぶに相応しい造りになっている。

光沢鮮やかな漆塗りの床の間には、掛け軸や綺麗な花を生けた美しい模様の花瓶があり、静かに品の良い彩りが其処に添えられてい

た。

座敷中央には檜材（にれざい）で作られた褐色の美しい木目の座卓が置かれており、この空間をより格調高く演出している。

また、ふつくらとした座布団がその座卓を挟むように置かれており、片方の座布団の横にはA4サイズの封筒が置かれていた。

そんな様相をした座敷内で土門長老は無言で外を眺めながら、何かを待ち続けるのであった。

暫くすると、静寂が支配するこの座敷に向かい、廊下を歩く複数の足音が聞こえてくる。

すると足音の主はこの座敷の襖（ふすま）の前で立ち止まり、中にいる土門長老に向かい呼びかけたのである。

「宗元翁（そうげんおん）、宗貴（むねたか）にございます。ただいま、安土家（あづち）の当主、安土英章（あづち えいしょう）様のご到着しましたので、先程申されましたとおり、此方へとお連れして参りました」

外を眺めていた土門長老はその声に振り向くと、横にA4サイズの封筒が置かれた座布団のところへ移動する。

そしてその上に正座をすると、襖に向かい口を開いた。

「うむ、通してくれ」

土門長老の言葉が合図となり、スウーとした静かな摩擦音と共に襖は開かれる。

すると其処には、かなり短くカットされたショートヘアスタイルが特徴の若い長身の男が一人と、太い眉と右目元にある小さな切り傷が特徴の40代くらいの男が居るのだった。

若い男は上下紺色のダブルスーツ姿で精悍な顔つきの男である。

その男は開かれた襖の近くに両膝を降ろし、目を閉じて若干頭を下げるといった居住まいで、もう一人の男に座敷内への入室を促していた。

また、右目元に傷がある男も上下ダブルスーツ姿であるが、こちららは茶褐色の物で、背丈は若い男に比べるとやや低く、中肉中背といった体型の男である。

目元の傷の所為か、若干人相が悪く見えるが、悪人面というわけではなく凜々しい顔つきをしている。やや長めの黒髪は整髪料で後ろに流していた。

その目元に傷のある男は土門長老に一度、頭をたれると、ゆっくりとした動作で座敷内に入ってくる。

そして土門長老の前に置かれた座布団に静かに正座をした。

若い男はそれを見届けると一礼をしてから襖をソツと閉めるのであった。

襖が閉まり、静かになったところで土門長老は口を開く。

「すまぬな、英章殿。新年を迎えて忙しいところ、わざわざお呼び立てして」

「いえ、土門長老。それほど忙しい訳ではございませんので、大して問題はございません。それに、細かい事は下の者達に任せております故……」

10秒程度ではあるが暫し二人の間に沈黙が流れる。

すると英章と呼ばれた男の方から口を開いた。

「……して、土門長老。私を呼んだ、急ぎの用件とはなんでございましょうか？」

英章の問い掛けに土門長老は目を閉じる。

そして、座布団の横に置いてある封筒を手に取ると、英章に手渡した。

「その封筒内に例の男を取り調べた、ここ2週間のあいだの記録が入っております」

英章はその言葉を聞き太い眉を動かすと、手に持った封筒に視線を向ける。

視線を土門長老に戻し聞き返す。

「といたしますと、光民党議員の連続呪殺を行った男の調書でござい
ますか？」

「さようじゃ。そしてお主を呼んだのも、あの男についての事じゃ」
土門長老は少し間を空けてから続ける。

「あの男……『吐露の秘薬』を用いても、なかなか口を割らぬのじや。もう既に、並みの術者ならば耐えられず廃人になるに近い量を用いておる。それでも口を割らぬ、厄介な相手じゃ。弱っているにも関わらず、恐ろしく強い精神力と霊体を持つておるわ」

「なんと『吐露の秘薬』を用いたのでありますか……。そして、それでも口を割らぬと」

英章は驚きを交えながら相槌を打つ。

「そうじゃ。それで話は変わるのじゃが、ここから先はお主等にある男から暗殺の首謀者を聞き出してもらいたいのじゃ。安土家にはこういつた難事や禁忌を破った者の懲罰を成し遂げてきた実績も多くなる故にな。これが英章殿を此方へお呼び立てした理由であるのじゃよ。儂の所における者達の中にも、ここから先は安土の手に委ねた方がよい、と言う者もある故にな。どうじゃ引き受けてくれぬかの？」

土門長老の話聞いた英章は、暫し目を閉じて腕を組むと思案する。

すると柔らかい表情になり言った。

「……分かりました、土門長老。その役目、お引き受けいたしましたよ」

「おお、やってくれるか。すまぬの。相手は、恐ろしくしぶとい。

なんとか、あの男から素性や暗殺首謀者を聞きだして欲しい」

土門長老はそう言うのと丁寧な頭を下げる。

そんな長老を見た英章は言う。

「土御門宗家たつての願いとあつては、我等分家の者は断る事などできません。お顔をお上げください。そして、安土の培ってきた技をもって、必ずや聞き出して御覧に入れましょうぞ」

「宜しくお頼み申す、英章殿」

土門長老は再度丁寧な頭を下げる。

そして話を終えた英章は封筒を手に抱え立ち上がると、土門長老に深く一礼をしてこの座敷を退室したのであった。

その時、ほんの一瞬ではあるがニヤリと黒い笑みを浮かべて……

一方その頃……。

日にちの経つのは早いもので、気が付けば、もう1月の中頃である。

年が明けてすぐは天候にも恵まれて暖かい気温が4日ほど続いたが、此処はやはり雪国。

徐々に天候が悪くなって寒冷前線の訪れと共に、この高天智市にもようやく40cmクラスの積雪が伴う日々がやってきたのである。お陰で寒い寒い。朝からガンガンエアコンで部屋を暖め、そしてコタツに入りびたりの毎日である。

そんな本格的な冬の訪れと共に、高天大は今月末から後期定期試験になっており、色々と俺も忙しい日々を過ごしている。

まあ俺の通う工学部は他の文系学科と比べると、普段から宿題やレポート提出頻度が多いので余計にそう感じる。おまけに俺の場合、霊術修行もプラスされるし……。

それは兎も角、試験成績が不合格になり単位が貰えず留年というのは流石に嫌なので、俺もやる事はやっているのだ。

再試という救済手段もあるにはあるが、俺は何回も試験するというのが嫌だし、お金かかるし、まず第一に長い春休みを迎えたいので、全科目一度でカタをつけるつもりだ。

根拠は無いが、多分、イケルと思う。前もって計画的に、空いた時間を復習にあててきたし。

そういったわけで学業に専念する時期なのである。

だが、そうは問屋が卸してはくれず、鬼一爺さんとの呪術修行も平行して、一応、俺はやっているのであった。

一方、現代霊術の修行はというと、コッチの師匠である一樹さん

は5日前に『後期試験が終わるまでの間は、鎮守の森からの修祓依頼は気にしなくてよい』と言っていたので、その心遣いに感謝しているところだ。

まったく、鬼一爺さんにも見習って欲しいところである。口に出してはいえないが……。

さて、話は変わる。

実は年が明けてから、俺は一樹さんに同行して二人だけで修祓依頼を3件こなしている。

まあその内容は一緒に修祓を行うというよりは、実践の中での現代霊術というものを肌で見て・感じて・理解するといった見学に近いものである。

しかし、完全に見学という訳ではなく、その都度、現代版の靈籠じゆんりゆうの符とでも呼べる破邪の符を使い、一樹さんのサポートをしながらである。

また、破邪の符以外にも、燃え盛る炎の玉となる火靈珠と呼ばれるものや、悪霊から身を隠すための隠行結界おんぎょうけっかいなどといった術具を実習訓練のような形で俺は学んでいたのだった。

だが、これらの術具の扱いは、それ程難しいものではないので俺はすぐに使えるようになった。

鬼一爺さん曰く、霊力を扱う俺の技量は既に一人前に近いと言っていたので、それも大いに関係してるのだろう。

ついでにそのあと、「まだまだヒヨッコには変わりないがの」と付け加えられたが……。褒めて落とすことを忘れない爺さんである。

それは兎も角……。

以前、鬼一爺さんから聞いた事だが、幽現成る者は霊体と肉体の波長が完全にシンクロしてしまっている為、霊力の扱いが他の者と比べると数段しやすい身体なのだそうだ。

それらを踏まえた俺は、霊力の急成長は身体の防衛機能の一種なのかもしれない、と考えているのであった。何と言っても幽現成る者は霊的被害が加算される体質だからだ。

まあ要するに、カメレオンや雨蛙が厳しい自然界を生きてゆくために擬態という能力を手に入れたのと同じ様な感じに思った訳である。ちよつと飛躍しすぎかもしれないが……。

とりあえずそんな訳で、現代霊術の方の修練もやり始めながら俺は今に至るといふことである。

因みに、この修被には瑞希ちゃんや沙耶香ちゃんは同行していない。

理由は夜遅くに行くものばかりなのと、一樹さんの判断からくるものである。

で、その現代の修被法であるが。

総括すると、多種多様な呪術具を操る霊力制御の技量と、軸になる戦闘方法の中で、それらをどう組み合わせる修被していくか、に焦点が置かれたものとなっているようだ。

実際、一樹さんは鶴めえと自ら呼ぶ、強力な霊刀を扱う剣術を戦闘の中心に据えており、また、剣術に潜むデメリットを幾つかの術具で補佐しながら戦うというのを実践していた。

そして、それらを見た俺は「ほおおお」と感心すると共に、一樹さんの刀捌きにも感心していたのであった。

流石、剣道の有段者である。ハッキリ言って強い。内心、カッケエエとも思った。

一樹さんの振るう霊刀によって悪霊共が遠慮なくバツバツサと切り捨てられていく様は、鬼一爺さんが大好きな捕物帳時代劇のクライマックスのワンシーンに出てても違和感が無いくらいである。

その鬼一爺さん曰く、切り倒してゆく一樹さんの様子は「上様」
みただらうだ。余りに分かり易い比喻表現である。

因みに鬼一爺さんがそう呟いたとき、周囲に悪霊がいるにも拘らず、俺の脳内では月代さかやきをした丁髷姿ちよんまげすがたの一樹さんが再生されていたのである。

お陰で、込み上げる笑いを必死に押え込み、尚且つ、妄想を振り払うのに凄く苦労したのを思い出す。

こんな時に余計な事言うなよ、爺ジジイ！ と、その時は心の中で呟いたものである。

まあそういつた実戦を目の当たりにした訳ではあるが、それらの戦闘以外に俺が注目した事が一つあった。

それは……鎮守の森による修被しゆひには、ユニホームとも呼べる専用の着衣が存在するということである。

更に、一樹さんの話では昼と夜とでは着衣が違つとも言っていたので興味深いところである。

俺が見た修被は夜なので、その時に一樹さんが着ていた着衣は、当然、今でも鮮明に覚えている。

全体の感じとしては日本古来の狩衣かりぎぬと呼ばれる装束をもう少し現代的なアレンジを加えて、更に機敏な動きも出来るように余計な部分は削ぎ落とした黒い衣であつた。

俺の主観だが、忍者みたいな黒装束と狩衣を足して2で割つた様な着衣である。結構カツコイイ着衣で、俺的には気に入つたデザインだ。

それと色が黒色なのは、恐らく、人目につかないように闇に紛れる為だろう。

一樹さんが修被の前に人払いの結界を張つていたところを見ると、一般人に見られるのは極力避けている様だからだ。

まあ鎮守の森自体が秘密結社だそうなので、こればかりは仕方ないのかもしれない。

だが、一樹さんは「場所によつては私服の場合もありうる」と言つてたので、必ずしも着なければいけないという訳ではなく、例外もあるみたいである。

そういつた感じの着衣だが、正式には修被靈装衣しゆひりやうそういと呼ばれているそうだ。

で、この修被靈装衣しゆひりやうそうい、今言つた外見的な特徴だけでは勿論無い。

この着衣の最大の特徴は、なんといつても、衣自体に靈力を通す事が出来るという点にある。

更には術者の弱点である霊体中心部分を守るために守護の術式が着衣に編み込まれているのである。

その為、弱い悪霊程度なら仮に襲い掛かってきても、衣に触れた瞬間、消滅するという事らしい。

修祓を行う者達にとつては、とても頼もしい衣なのである。

そしてこの修祓^{しゅぼつ}霊装衣^{りやうそうえ}も、勿論、鎮守の森と天目堂が共同開発した物だそう、なんでも、霊力を通しやすい特殊な合成繊維を天目堂が開発し、それをふんだんに使っているそうなのだ。

因みに、この修祓^{しゅぼつ}霊装衣^{りやうそうえ}の値段は、それ一着で結構良い車が一台買えるほどの恐ろしい値段である。

値段を聞いたとき、【高ッ！】と思わず心の中で叫んだのを覚えている。

まあそんな素晴らしい衣であるが、実は今日、俺の修祓^{しゅぼつ}霊装衣^{りやうそうえ}を作る為に一樹さんと沙耶香ちゃんが服の採寸をしたいというので、この後、沙耶香ちゃんのマンションに行く事になっているのだ。

二人はお金の事など気にしないでいいと言ってたが、あの値段を聞いたら流石にそれは無理というもので、なんか後ろめたさを感じる今日この頃である。

また、俺と同じく瑞希ちゃんも沙耶香ちゃんのマンションに向かうそう。

まだ修行を始めて間もないが、この先、現場に出る可能性を考慮して瑞希ちゃんの採寸もとらないといけないそうなのである。

それを聞いた俺は、瑞希ちゃんを巻き込んでしまった罪悪感で苛まされた。

だが、俺の苦悶の表情を見ると瑞希ちゃんは笑顔で言うのである。「気にしないで下さい。それに、こういう世界を知る事が出来たので、寧ろ日比野さんに感謝してるくらいです」と。

その言葉に若干救われた気がしたが、この子の身に危険が及ばないよう俺がしっかりしないとイケないとも、同時に思ったのであった。

俺はテレビの上にあるデジタル時計に目を向ける。

時刻は午前9時。正午までに着くように沙耶香ちゃんのマンションに向かえばいいので、まだ少し余裕がある。

因みに、なんで昼飯時の正午に向かうのかというと、沙耶香ちゃんが俺と瑞希ちゃんに手料理をご馳走したいからだそうである。

かなり張り切っていたので、今から楽しみではある。という訳で話を戻す。

出かけるまでに2時間ほど空き時間があるので、俺は時間を有効利用するために試験勉強をそこに割り当てる計画を立てていた。

そして優先的にすべき事を把握する為、もう一度、試験日程と共通及び専攻科目の不安箇所の確認をする事にしたのだった。

鞆に入っている後期試験の日程をメモった手帳を開くと、俺は早速確認を始める。

するとその時……何気ない生活を送っていた以前の自分の姿が、フト、頭を過ぎったのだった。

それと共に、『変わったな……俺……』と心の中で呟いた。

何故ならば、以前の自分は時間を有効に使うなどといった事からは、無縁の生活を送っていたからだ。

普段の生活において、時間というものをそれ程意識していなかったのである。

御迦士岳^{みかじぶたけ}で鬼一爺さんと出会い、不憫な体質となってしまった俺は、生きる為に必死になつて霊術を覚えはじめた。

だが、現世の理^{いまのり}と幽世の理^{よみのり}という、普通の人間ならばありえない業を背負う事になった俺は、同時に二つの生活も余儀なくされたのだった。

現実社会での生活と霊異社会^{レイイソカイ}（とでも言っておく）での生活をである。

この相反する性質を持った二つの社会を生き抜いていくのは、言うほど生易しいものではない。

しかし、鬼一爺さんの存在があつたとはいえ、できなければ俺には先が無いような状態であつた。

そういつた事から、現実社会での学業と靈異社会での靈術修行を苦しいながらも両立させる為に俺は奔走する様になる。

そしていつしか俺は、限りある一日を無駄なく有効に使う為に、日々の時間割システムを普段の生活に取り入れる様になつたのであつた。

……そんな今までの涙ぐましい苦勞を映画のワンシーンの様に俺は思い返していた。

思い返せば思い返すほど四苦八苦していた当時の自分の姿が脳裏に映し出される。

それらの姿に苦笑いを浮かべながらも、気持ちを切り替えて、俺は今すべき事に意識を向かわせるのであつた

1月下旬 某県 某施設

今は午後3時。

雪が深々と降り続ける、とある日の話である。

そこは外洋に面した臨海工業地帯。

この地域には巨大な煙突や鉄塔といった背の高い建造物や、とてつもなく広い床面積の工場施設等や倉庫がいたるところにあり、どの施設も忙しく稼働している最中であつた。

外洋に面した場所は港湾や波消しの堤防になっており、また、港湾になつている場所には外国籍のタンカーや幾つかの船舶が停泊していた。

停泊中の船舶の中には、クレーンに吊り上げられて四角い貨物輸送用のコンテナボックスが積み込まれている最中の船も確認出来る。

また、その港湾地域近くには石油化学工業や鉄鋼業等のプラント施設があるせいか、大きな煙突が立ち並んでおり、その口からは絶

え間なく白い煙を吐き出しているのであった。

そして工業地帯全域に碁盤の目の様に張り巡らされた道路には、大型のトラックやトレーラーが絶え間なく行き交っており、それらのマフラーが吐き出すディーゼル排気ガス臭が周囲に飛散して漂っていた。

その為、目に見えない大気の淀みがこの地域一帯を覆っているのであった。

だが、そんな淀みを埋めてしまうかのように、空からは沢山の雪が深々と降り続けている。

その雪の影響か、排気ガスにまみれたこの工業地帯に僅かばかりの清涼感を今日はもたらしているのだった。

しかし地面に降り積もった雪には、それらの煙突や車からの排気ガスと共に吐き出された排塵が混ざって、やや黒っぽい雪へと変化した部分もある。

それらの黒っぽい雪はこの地域一帯で働く者達全てに警告するかのよう、日々の汚れをまざまざと見せつけていたのであった。

そんな工業地帯の内陸に面した一画にヒツソリと佇む建物があった。

白い3階建ての四角い建物で、周囲にある工場や倉庫群に紛れるように佇んでいるのである。

施設の規模としては1ha程の土地面積を持っており、この臨海工業地帯の中では中規模クラスに分類される施設であった。

建物の周囲にはやや高い白い塀があり、その入口部分には鉄製の格子門が設けられている。

門の脇には守衛所があり、其処には黒い警備服に身を包む中年の男が一人、椅子に腰掛けて待機していた。

また、格子門には白い看板が縦に掛けられており、そこにはこう書かれているのである。

【かみこ神代総合商事株式会社】と。

今、其処へ一台の黒いセダンタイプの高級車であるSクラス・ベ
ンツが向かっていた。

車には三人の人物が乗っており、運転席と助手席には若い男女が
座り、後部座席に一人といった組み合わせである。

その車は建物の近くに來ると減速して、格子門の前で止まる。

守衛所にいる男は車が止まったのを確認すると、雪の降りしきる
外へと出る。

そして傘を差して車へと向かったのだった。

外は相当に寒いのか守衛の男が息を吐くたびに、白い煙が舞い上
がる。

守衛が車に近付くと後部座席のウインドウが開いた。

ウインドウが開いた先には男が一人乗っており、守衛はその男に
向かい、丁寧^{ていねい}に頭を下げて挨拶をしたのだった。

「これはこれは、英章様^{えいしょう}。お勤めご苦労様です」

後部座席に座っていたのは安土^{あんち} 英章^{えいしょう}であった。

英章は守衛に向かい笑顔を向けると言った。

「うむ、ご苦労。ところで、鎮守の森から話は聞いてますかな？」

「はい、承っております。只今、門を開けますので暫しお待ちを」

守衛の男はそう言った後、手に持ったりリモコンを扉の上に取り付
けられた黒い電子ロック装置に向ける。

するとゴゴゴゴという音と共に格子門は右にスライドしてゆく
であった。

運転手の男は車が通れる幅まで門がスライドしたところでアクセ
ルを踏む。

すると、遠くで聞こえるかのような静かに唸りを上げるV12気
筒エンジンの音が僅かに発せられ、黒いベンはゆっくりと敷地内
へ入っていったのだった。

神代総合商事と看板が掲げられたこの施設は分厚い鉄筋コンクリ

ートで建築されており、外を走る大型トラック等のエンジン音や周囲にある工場から聞こえてくる機械音といった物音はあまり中には入ってこない。

窓や勝手口といった外との接点を持つものが周囲の建物と比較すると少ない為、外界から切り離されたような雰囲気施設内の至る所で感じられる構造となっているのである。

その他にも内壁や天井はすべて白色で統一されているので非常に清潔感の漂う感じとなっており、それらがより一層、外の薄汚れた世界と切り離す演出をしているのであった。

そして外との接点を持つ数少ない場所のひとつである、建物裏側の資材搬入路と思われるところには天目堂と書かれた貨物トラックが数台止まっており、嚴重に梱包された積荷を荷台から慎重に降ろす者達の姿があった。其処では搬入した大小様々な物を台車に載せて所定の位置に移動する者も当然おり、それら幾人もの者達が非常に忙しく動き回っているのだった。

また、施設各所に設けられている通路には、スーツを着た者や白衣を着た者等が頻繁に行き来しており、初めて見る者によっては学校や病院といった公共施設のような印象を受けるかも知れない。

現在の神代総合商事かみしろそごうしょうじの建物内はそんな様相をした施設となっているのであった。

そんな施設内を車から降りた英章達3人は、先頭に立つスーツ姿をした2人の案内人と共に、ある場所へと向かい移動していた。

英章の両脇には車を運転していた男と助手席にいた女がおり、2人は英章をガードするSPの様な感じで共に歩を進めていた。

男は20代後半から30代くらいで、黒く長い髪を後ろで纏めており、やや鋭く細い目付きながらも美しい顔立ちをした長身の男である。

女の方も男と同様の年齢といったところで、こちらは赤くウェーブのかかった長い髪が特徴であり、そのスツとした鼻の輪郭とやや気の強そうな目付きながらも美しい顔立ちをした長身の女性である。

また、肩には黒いバッグを下げていた。

案内人2人は地下フロアに降りてゆく為の階段へ英章達を案内する。

そして5人は地下へと下って行った。

地下へ降りた英章達は、やや入り組んだ廊下を抜けると、様々なセキュリティが施された灰色の壁が特徴の区画へと進んで行く。

すると【厳重管理区域 許可無き者の立ち入りを禁ずる】と書かれた、分厚く物々しい紫色をした鉄扉の前へと案内されたのであった。

案内人の一人がカードキーを使い、壁に取り付けられたカードリーダーへと通す。

カードを通した途端、ピピツという電子音と共に扉が横にスライドした。

扉が開いたのを確認すると案内人の2人は英章達をその奥へと誘うのだった。

物々しい鉄扉の奥は物音が極端に少ない空間になっており、人の気配が殆ど感じられない非常に静かで重々しい雰囲気のある区域となっていた。

その為、5人が歩を進めるたびにカツカツとした革靴と床の衝突音が通路の隅々まで響き渡る。

そんなヒツソリとした区域を暫く歩いて行くと、案内人の2人はある扉の前で立ち止まったのである。

其処には【罪穢の間】というプレートの掲げられた黒い鉄製の扉があり、そこで案内人の一人が口を開いたのだった。

「英章様、此方でございます。あの者は鎮守の森に所属する者ではございませんが、土門長老の指示により、この罪穢の間の一番奥の部屋にて拘束しております。今、この間にはあの男だけしか拘束しておりませんので、場所は直ぐにお分かりになるでしょう」

英章は無言で扉の前に立つと案内人の男は続ける。

「これがあの男のいる部屋の鍵でございます。私共は外におりますので、何かございましたらご連絡下さい。」

案内人の男は番号の書かれた鍵を同行者の男に手渡すと言った。

「それでは、後は宜しくお願い致します」

「うむ。では参ろうか、二人共」

英章は案内人二人に軽く会釈をした後、同行している男女二人に視線を向けそう言った。

「はい」と返事をした後に男女は頷く。

そこでもう一人の案内人の男は前に出て、壁に取り付けられた認証装置に暗証番号を幾つか打ち込む。

打ち込みが終わるとカチャリという音と共に鉄扉は解錠される。

それを確認した案内人の男は、鉄扉の取っ手を掴むとゆっくりと開くのだった。

扉が開いてゆくに従い、蝶番の辺りからギィィと金属同士の擦れる音が通路に響き渡る。

そして扉が開ききると英章達3人は其処を潜り、つみけがれ罪穢の間へと足を踏み入れたのであった。

英章達が入ったところで入口の扉は閉められる。

罪穢の間へ入った英章達3人は先ず最初に室内を見回した。

この罪穢の間は床や壁、そして天井に至るまで全面茶色の塗装が施された奇妙な空間であった。

更にそれらの床や壁には何らかの霊術が施されているのか、奇妙な術式模様が描かれており、またそれらの影響か、室内全体が圧迫感の漂う異様な雰囲気醸し出しているのである。

またこの罪穢の間は一本の通路を境に幾つかの小部屋があり、その一つ一つが牢獄の様に厳重な鉄扉が設けられており、物々しい様相となっている。

その為、刑務所の様な雰囲気も同時に感じられる所であった。

そんな空間を英章は無表情で見回していると、同行している若い

男が英章に向かい口を開いた。

「英章様。先程聞いた話では、恐らく、あの一番奥の部屋で拘束されていると思われませう」

男はそう言うと言通の先を指差した。

「そうか……行くぞ」

男が示す指の先にある扉を見詰めた英章は、そう答えると鋭い目付きになり通路の奥へと歩み始めた。二人もそれに続く。

通路奥の部屋の前に辿り着いた3人は監視窓から室内を覗く。

すると其処には、奇妙な法陣の描かれた床の上に両手足を鎖で固定された白髪の男が一人いたのであった。

そう、あの男である。其処には眩道齋が拘束されているのだ。

中の様子を見た英章は、眩道齋の変貌に驚きながらも男に言う。

「……鍵を」

「はい」

男は先程渡された鍵を手に持ち鍵穴に差し込み解錠する。

そして中へと入るのだった。

眩道齋が拘束されているこの部屋は広さ12畳程の正四角形スペースで、壁から出ている鎖に眩道齋は繋がれていた。

室内の様相は、監視カメラが入口付近に取り付けられているのと、天井に設けられた照明と通気ダクトだけの他には何も無い部屋である。

そんな室内に入った英章達3人は、10秒ほど無言で眩道齋を見詰める。

同行してきた男と女は扉の付近で待機した。

そして英章はゆっくりと眩道齋に歩み寄るのであった。

眩道齋に1mくらい近付くと、英章は微笑を浮かべてやや小さい声で話し出した。

「今から私は独り言を話します。後ろに監視カメラがごいますので、眩道齋殿が口を動かすと読唇術で読まれてしまいますからね」

「……………」

眩道齋は無言で英章に視線を向ける。

それを肯定と受け取った英章は続ける。

「先ずはお久しぶりです。といつても、お会いしてから1ヶ月程しか経っていませんが……。手短に言います。今日、私が来たのは、あなたをお迎えする為の準備に来たのですよ。【エールの御国】は貴方をまだ必要としておりますからね」

英章はそう言った後、後ろにいる女へ視線を向かわせる。

そして言った。

「摩耶、例の物を此処へ」

摩耶と呼ばれた女性は、肩に掛けたバッグから丁寧に折畳んだ紫色の布を取り出すと英章に手渡した。

それを受け取ると英章は眩道齋に言う。

「それでは安土家古来からの罪穢れを被う形式に則り、貴方の頭上に被いの衣を掛けさせて頂きます」

英章はそう言った後に紫色の被いの衣をフワツと広げて、やや蹲った格好をした眩道齋の頭部を覆いつくす様にかける。

そして顔全てを覆い隠し、監視カメラから見えない様にすると言った。

「さあ、これでカメラからはもう口元は確認できませんので、貴方に話をして頂いても問題はありませぬ。どうぞ御発言なさって下さい」

二人の間に暫しの沈黙が流れる。

すると眩道齋は弱々しく小さな声ながらも言葉を発した。

「……そ……組織は……何と言っている？」

「貴方には暫くのあいだ日本を離れてもらい、聖樹様の元へ向かっていただく手筈となっております」

「……聖樹様の元？」

「はい。今、聖樹様は日本を離れており、遥か中東の地において【エールの御国】の者達と【契約の書】の解読に勤しんでおられます。そこへ向かっていただきます。しかし、理由までは私も聞かされて

おりませんので、ご容赦の程を」

英章の言葉を聞いた眩道齋は身動き一つせずに無言でいた。

それを肯定と受け取り、英章は続ける。

「ところで眩道齋殿、一体何が起きたのでございますか？ 貴方のこの変わり様は、只事ではありませんぞ」

今の言葉を聞くなり、眩道齋は暫しの間、噴出する怒りを抑えるかのように、霊圧を上げながら身体を震わせた。

暫くの間そうやって小刻みに身体を震わせていたが、10秒ほどすると治まり始める。

そして震えが完全に治まったところで口を開いた。

「……気をつける……見た事もない術と呪術具を使う奴がいる」

「見た事もない術と呪術具を使う奴ですと………どういう事ですか？」

「どうもこうも、言ったとおりの言葉だ。………そしてその後、土御門宗家の奴等はそいつと接触した可能性が高い。………精々、気をつけるんだな………計画の不安要素になるかもしれんぞ」

英章は今の言葉を聞き目を細める。

そして更に眩道齋に近寄ると鋭い表情で尋ねるのだった。

「今の話………もう少し詳しく聞かせて頂けますか」と

3時間後。

英章達3人はもうすでに神代総合商事を離れ、やって来た時のベントンに乗って日の落ちた暗い道路を走っていた。

このベントンが走る大通りは除雪車が走った後のようで、道路に積もった雪の大部分が壁の様に路肩に寄せられていた。その為、3人がやって来たときと比べるとかなり道の開けた状態となっている。

だが外は雪が依然と降り続けており、明るかった日中と比べると今は暗い為、フロントガラス前方の視界をより悪くしていたのだった。

そんな様相の道路を走っている車内での事である。

後部座席に一人座る英章は前にいる二人に話しかける。

「……秀真、眩道齋殿をあそこから出す為に、先程言った手順で準備に取り掛かってくれ」

運転席でハンドルを握る秀真はバックミラー越しに英章を捉えろと、目配せした後に返事をした。

「はい、お任せ下さい。しかし、眩道齋殿の事は宗家にどう説明されるのですか？」

英章は秀真の質問に軽く笑みを浮かべると言った。

「フツ、秀真。今回の事は、そのまま宗家には報告するつもりだ。

それにこのような場合、下手に捏ね繰り回すと碌な事がないからな。まあそれだけが理由ではないが……（クククツ、長老自身が無視できない事実もあるしな）……」

「ですが、眩道齋殿の素性がばれると不味いのでは？」

「クククツ、いや、かえって好都合かもしれん。【封印の儀】が済めば、あの男は私の管理下に名目上置かれる事となるからな。わざわざ陽炎の存在を使うような、回りくどい遣り方も必要無くなるのだ。そして私の管理下になりさえすれば、後の事はどうとでもなる。フツ、まあ強いて難を上げるならば、大神化工建設のODA事業に関わっている光民党の族議員がまだ一人残っているのが問題だが、それについてはもう手は打った。したがって問題はこの件の処理だけだ」

「そういう事ですか、なるほど。では【封印の儀】の根回しと他の調整を早急に取り掛かります」

「うむ。頼むぞ」

秀真の返事を聞いた英章は、助手席にいる摩耶に続けて言った。

「そして、摩耶。お前には眩道齋殿が言っていた例の男と妙な老人の霊の調査をお願いしたい。くれぐれも土御門宗家の者には気付かれんようにな」

摩耶は後ろに振り向くと鋭い目付きになり返事する。

「はい、畏まりました。眩道齋殿の話によりますと、その男はF県

に在住の可能性が高いので、この後にも移動を開始してすぐに調査にあたります」

摩耶の意気込みを見た英章は頼もしくも思ったが、正体不明の術者な為、忠告もした。

「ハハハ、そう慌てるな。明日で構わん。だが、あの眩道斎をあんな風にした得体の知れない奴だ。慎重に調査してくれ」

「はい」

英章は二人を交互に見詰めると、最後にもう一度言うのだった。

「二人共、すまんが宜しく頼むぞ」

「はい、仰せのままに」

二人の息の揃った返事を聞いた英章は、口の端を吊り上げ黒い笑みを浮かべる。

そして後部シートの背もたれに寄りかかりながら、窓の向こうに見える暗闇に覆われた世界へ視線を向けるのであった。

参拾七ノ卷

《参拾七ノ卷》 告知

2月上旬。

今は真夜中。

夜空は雲一つ無く、これ以上無いほどに大気は澄んでいる。其処に輝く、星々の輪郭さえもハッキリと俺の目に映るくらいに。

南の夜空に目を向ければ、冬の定番星座である、真ん中に三つ星のベルトをかけたオリオン座の姿が、多くの星の中にあっても燦然と輝いていた。

また更に視野を広げると、夜空を射す様な輝きを放つシリウス・ペテルギウス・プロキオンが作り出す、冬の大三角形が俺の目に飛び込んでくるのであった。

広大に何処までも続く、この鮮明な冬の夜空を眺めていると、今まで見てきた夏の夜空はフィルターを通して見た様にさえ思えるのだ。

そしてこんな夜空を見ていると、俺は以前、ある人が言っていた事を思い出すのである。

その人はこんな事を言っていた。

冬の夜空は眺めているだけで、周囲の寒さを忘れさせてくれるくらいに美しいと……。

だが、俺はこう考えていた。

冬の夜空は眺めているだけで、周囲の寒さを忘れさせてくれる……のも数分が限度である、と。

……というかなんなんだ、この寒さは……。

体と下唇の震えが止まらない。グヴヴゝ寒ッ！

まあ早い話が、俺は今、深夜にも拘らず、気温マイナス3度というこのクソ寒い外に居るわけである。

理由は勿論、アッチ関係である。

因みに、今、俺のいる所は高天智市ではなく、其処からかなり離れた海に面した地域である。でも一応、F県内だ。

そんな場所なので、時折、潮の香りと波の音が風に乗って運ばれてくる。だが、周囲が真っ暗で波の音が聞こえてくるのは、なんとも不気味なものである。

また、海拔が無いに等しいのと塩気がある所為か、周囲には雪があるにはあるが、それ程は積もってはいない。暫くすると、すぐ消えてしまいそうなシャーベット状の雪である。積雪40cmオーバ―の高天智市とはえらい違いだ。

そしてこの場所だが、入ってくるときに臨海公園駐車場と入口の看板に書かれていたので、此処は臨海公園駐車場なのだろう。まあ当たり前の話である。

見渡した感じでは、結構だだっ広いスペースの場所だが、暗いのと仕切りの白線が雪に隠れて見えないので、あまり駐車場ぼくなくい様に俺には見えるのだった。

おまけに暗くて景色もよく分からん。よく目を凝らしてみると、向こうに薄っすらと遊歩道みたいなのは見えるが……。まあ用はないから遊歩道なんぞは別にどうでもいいけど。

で、此処で何をしているのかというと、勿論、悪霊討伐だ。

大学の後定期試験も無事 つつがな 恙無く終える事ができたので、現代霊術の修行再開というわけである。

話は変わるが、俺は今、修祓霊装衣に身を包んでいる。

昨日、仕上がってきたばかりの修祓霊装衣であるが、この着衣の意外な弱点を俺はいきなり体験する事になったのだった。

それは……この服、絶対に冬場には向かないという事だ。はつきり言おう。寒い！ 超寒い！ もう少し防寒対策してくればよかった。ああ、無念だ……。

まあそんな事を思っても口に出す事は出来ない。何故ならば、一樹さんも同じ境遇だからだ。俺も文句を言う訳にはいかない。辛抱するしかないのである。

ああ早く終わらせて帰りたい……。

だが、こんな事を口にした言おうものなら鬼一爺さんの長い説教が待つのみである。

因みに、鬼一爺さんは居るには居るが、いつもより霊圧を下げて向こうの世界の住人となっている。

そんな訳で、俺以外には見えない状態だ。人目につくと不味いの念入りにそうしてるのである。

というわけで話を戻す。

で、その修被内容だが、ここ最近、悪霊に襲われて霊体に被害を受け、意識不明の重態になった人がこの場所で何人かいるという事で依頼が入ったわけだ。

それで来て見ると、十数体の悪霊たちがこの辺りを徘徊してるのであった。

普通、こんなに狭い区域に悪霊が集まるのは幽霊屋敷のようなわく付きの建物ぐらいである。理由は簡単である。建物自体が霊力というものを蓄積しやすいからだ。

まあそんな訳で、要するに異様な事態なのであるが……実はもう原因が判明していたりするのである。

悪霊達が寄ってきたその原因だが、この辺りに生息する暴走族の若者達が、飲酒運転しながらこの駐車場内に入ってきて、此処にあった道祖神石碑（どうぞじんいし）を車ごと破壊したのが原因である。非常に迷惑千々な奴等である。

道祖神とは路傍（ろぼう）の神様であるが、巷に溢れる道祖神石碑や石像の中には、負の地脈を封じる術式が施された重要な役目を帯びた物もあるそうなのだ。此処が正しくそんな訳である。

原因は分かっているので、後はとりあえず、徘徊している悪霊共を殲滅するだけなのだ。

その悪霊だが、一樹さんが7割がた始末したので、もう残ってるのは4体だけとなっていた。

後は一樹さんに任せよう……。

そんな事を考えている、丁度その時であった。

俺に注意を促す声が聞こえてきたのである。

「日比野君、悪霊が2体そっちに行ったから、よろしく頼むッ！」
「はい、了解ツと。ヴヴ……寒ッ」
俺は声の出所である一樹さんのいる方向へと視線を向ける。

すると其処には、負の波動を発し続ける半透明で赤い色をした人型の存在が2体、俺に目掛けて大きく口を開きながら迫ってきていたのであった。

悪霊を視界に捉えた俺は寒さで震えつつも、破邪の符を人差し指と中指で挟み、その悪霊目掛けて秘めた力を解放するのである。

【ギギヤアア】

白い霊波を浴びた悪霊は、断末魔の悲鳴を上げながら消え去る。

だが、その後ろからもう一体が迫ってきていた。

まあ予想していた事なので俺は慌てない。

悪霊を注視しながら、俺は背中に背負う刀の柄に手を掛けて手前に引き寄せる。

そして、鯉口部分を手に持ち、鞘から刃を引き抜いたのだった。

刃渡り80cmはあるうかという抜き身の美しい刀身が露あつらになる。

そしてすかさず、霊圧を上げて刀の柄に霊力を籠めるのであった。

俺が刀に霊力を籠めると共に、刀身は静かに淡く白い輝きを放ち始める。

その光は刃の刃紋を浮かびあがらせるかのような淡く美しい光を放っていた。

それを確認した俺は、迫りくる悪霊目掛けて袈裟に斬り下ろしたのだった。

【シャアアア】

その悪霊は斜めに両断されて悲鳴とともに消滅する。

しかし、俺は気を抜かない。

中段に構えると更に周囲を警戒したのだった。

まだ剣道をやり始めて3ヶ月程ではあるが、剣道で習った残心と
いうのが身体に染み付いているようだ。 姫会長によるシゴキの賜物
である。

そんな事を冷静に考えながらも警戒していると、先程の方角から
一樹さんが刀を鞘に納めつつ俺に言うのであった。

「おお、すまないね。仕留め損なつたのがいたもんだから。ハハハ」
「いいですよ。まあいい練習になりましたし。ハハハ」

俺はそう答えると肩の力を抜いて構えを解いた。

そして右手に持つ、一樹さんから貰った霊刀に視線を向けるので
ある。

刃渡り80cmはあるので非常に長い刀である。

かの長刀使いの剣豪 佐々木小次郎の持つ物干し竿が刃渡り90
cm以上だった事を考えると、まだ普通の刀の範疇に入るのかもし
れないが……。

それにしても長い刀だ。一樹さんの鵜ぬえが刃渡り70cmくらいの
物なので余計にそう思うのである。

この刀は元々一樹さんの所有物なのだが、この長さでは一樹さん
自身がイマイチ使いづらかったらしく、ずっと仕舞いっぱなしの刀
だったそうである。

だが、そこに俺という人間が現われた為、物は試しという事でひ
っぱり出してくれたようだ。

因みに気に入ったのならあげる、とまで言われたので、俺は慣れ
るべく帯刀しているという訳だ。

一樹さんが所有していたというだけあって、刀の拵えは流石に良
い物で、丸い鑢つばや紺色の柄巻もシックながら品の良い感じがするの
である。

誰が作った物か知らないが、一樹さん曰く、年代物の古刀ではな

く現代技術で作られた刀だそう。まあ早い話が天目堂製というわけである。重さも本物の刀よりは軽いそう。

言われてみるとだが、同じくらいの刃渡りがある布津御魂剣を持ったときはもう少し重かったような気がした。

まあそうは言っても、中々精巧に作られているので本物との違いなどまったく分からない。この刀も結構ズツシリとした感じの重さは手に伝わってくるし。

それに日本刀の特徴である波打つ刃紋も、芸術品とよべるくらいに美しく浮き出ている。俺的には十分すぎる一振りだ。

そんな刀を暫し眺めた俺は、背中にある鞆に刀を仕舞い込むと一樹さんに言った。

「とりあえず、修祓はこれで終わりですけど、コレどうしますか？」俺は道祖神の石碑が建っていたであろう跡を指差した。

今はもう瓦礫が撤去されているので、其処には元何かがあったという痕跡しか残っていない。

だが、俺にはハッキリと見えるのである。

石碑跡から負の霊波を伴う紫色の煙が湧いて出てくるのが……。

すると、一樹さんは腰の部分にある術具袋から何かを取り出す。

そして言った。

「ああ、其処はとりあえず結界を張っておく。このシートを使ってね」

手には何重にも折畳まれた茶色のシートが持たれていた。

だがその時、一樹さんの持つシートから以前、地霊封陣を行使した時と少し似た波動を俺は感じたのである。

その為、俺は一樹さんに尋ねる。

「それって……もしかして、それ自体に霊力遮断の術式が編み込まれてるんですか？」

「お、よくわかったね。そうだよ。こんな小規模の負の龍穴なら、コレを被せておけば2週間くらいは持つからね。後は神代かみしろから工事依頼を受けた業者が、遮断の術式を施した石碑なり何なりを此処に

建てるだろうから、それまでの応急処置さ」

俺は聞きなれない言葉が出てきたので問い掛ける事にした。

「神代^{かみしろ}? 一樹さん、神代^{かみしろ}ってなんですか?」

「神代かい? ああ、そういえばそれも言っただけじゃなかったね。実は鎮守の森には幹部達が役員となって運営する会社があつてね、それを神代総合商事というんだ。ちゃんとした手続きを踏んである株式会社だから世間一般にも認知されてるよ」

「ええ、そうなんですか? 秘密結社だとばかり思ってたんですけど、表社会とも接点があるんですね」

意外な実態を知ったので、やや驚きながらも言った。

すると一樹さんは笑いながら言う。

「八八八八、まあ木の葉を隠すなら森の中に入って訳じゃないけど、完全な秘密結社を運営してくるのは、この世の中、色々支障があるからね。そういった理由から、表に出せる部分の鎮守の森という形で、この会社を設立したんだよ。会社という形態ならば誰にも怪しまれないしね。まあその代わり、社員の素性とかセキュリティ等は凄く厳重に管理してるよ。あと話は変わるけど、古神道において『神代』と言う言葉と『鎮守の森』は、ほぼ同義語だからね。ま、そこから付いた名前さ」

「ホオオ新事実がまた一つ……なるほど。言われてみると、秘密結社って色々面倒臭そうでもんねえ。勉強になります」

俺は顎に手をやり、感心しながら話を聞いていた。

言われてみると納得する事が多い話である。

だが、会社という以上は、そこに業務内容というものが伴うので、それも聞いてみることにした。

「ところで一樹さん。その会社はどんな業務をしてるんですか?」
「神代は総合商事というくらいだから色々手広くやってるよ。まあ俺達に直接関わる裏業務だけ言うと、この会社は修被は行わないけど、修被者への依頼斡旋やサポート、そして厄介な依頼等の事後処理をしてくれるんだよ。この部署を第四事業部というんだ。この

第四事業部は、天目堂と一緒に術具の共同研究なんかもしてるしね。まあ他にも色々沢山の業務内容や多目的施設があるけど。後はまたその時になったら追々説明するよ」

「へえ〜なるほど。でも、これは重要事項なんでしっかりと記憶しときますよ」

鎮守の森の新たな一面を知った俺は、知らないところで色んな各種団体があるんやなあ……などと思いながら、一樹さんが今言った内容をしっかりとインプットするのだった。

とまあそんな話をした後、道祖神跡にさっきのシートを被せて今日の修祓は終了したのである

その翌日の夜。

夕食を済ませた俺は、前もって立てておいた予定通りに、自分の部屋にて霊術の訓練をしていた。

鬼一爺さんも、今日は霊圧を上げていつも通りに振舞っている。

ついでに言うと、今はテレビを見ている最中だ。今日は暫く後に水黄門が放送されるので、鑑賞後がやや心配である。

それはさて置き。

ここ最近瑞希ちゃんや沙耶香ちゃんとは会っていない。

俺の試験はもう終わったが、今度は瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんが三学期期末試験に10日後あたりから突入するらしく、色々慌しくなってきたようである。

ま、今の時期は中・高どの教育機関もこんな感じだろう。俺も通ってきた道なので懐かしく思う、今日この頃だ。

とりあえず、二人にはソツチに専念して貰うとして、俺は俺で術の訓練を始めるのである。

実は最近、鬼一爺さんから新しく真言術を教えてもらったのだ。

その術の名前を夜叉真言やしゃまごんというのだが、鬼一爺さん曰く、夜叉という鬼の様な力を得られるところから、そう呼ばれるらしい。

で、爺さんの説明を聞いた俺の解釈によるこの術の効能だが、真言を唱える事で体全体の霊力が肉体機能を補佐するようになり、身体能力の飛躍的な引き上げを行うという術のようだ。といっても2倍くらいの底上げだそうだが……。

まあドラゴンボールで例えると、早い話が、真言術版の界王拳と似たところである。

だが、かなり肉体的にシンドイ術のようで、鬼一爺さんの話を聞く限りでは、術に免疫の無い俺が仮に術を成功したとしても、行使していられるのは3分くらいが限度のようである。

勿論その時、ウルトラマンかよ！ と突っ込んだのは言うまでもない。

ただ……気になることが一つあった。

鬼一爺さんがこの術の話をしていたとき、最初のうちは身体に反動がくるというような事を言っていたのだ。何か知らんけど、凄く嫌な予感がする……。

しかし、これはかなり汎用性に優れているらしいので、物にしないといけないようである。

まあそんな訳で、先ずは真言内容を覚えるべく、俺は小さく口ずさみながら夜叉真言を頭に叩き込んでいる最中なのであった。

と、その時。

俺の携帯にルパン三世のテーマが軽快に鳴り出したのである。

訓練を一時中断すると、俺は携帯のディスプレイを確認する。

するとなんと、土門長老からの着信であった。

確認した俺はすぐに電話に出る。

「もしもし、お久しぶりです土門長老」

「おお、久しぶりじゃの日比野君。どうかね、調子の方は？」

「はい、お陰さまで肩の傷の方も完治致しました。そして、道間さん達兄弟にも良くして頂いているので、非常に助かっております」

「おお、それは良かった。元気そうで何よりじゃよ」

「ハハハ、お気遣いありがとうございます。それで土門長老、今日

はどのようなご用件で？」

俺の問い掛けに、土門長老はすこし間を空けてから話し出した。

「それなんじゃが。この前、道間殿とも話してての。以前、日比野君も一緒にいたから知っておると思うが、鬼一法眼様に儂の孫や道間殿の息子達を見てもらう為の観察期間についての事なんじゃよ。それで、どのくらいの期間を観察するのかを知りたいので、その確認の為に連絡させてもらうたんじゃ。それで申し訳ないんじゃが、今の内容を日比野君から鬼一法眼様に確認してもらえんじやろうかの？」

「はい、わかりました。では、聞いてみます」

土門長老の話聞いた俺は、以前、沙耶香ちゃんのマンションで話し合ったときの事を思い出す。

そして『ああ……アレの事か』と思った俺は、テレビを見る鬼一爺さんに確認する事にした。

「鬼一爺さん、ちよつといいかい？」

（ン、なんじゃ涼一？）

「この間、土門長老と沙耶香ちゃんのお父さん達と話してただろ。爺さんが、土門長老達の息子さんやお孫さんに呪術を教えるって話覚えてる？」

それを聞くなり、一瞬、『はて？』といった感じで斜め上を向いた。

だが、すぐに思い出したのか、鬼一爺さんはポンと手を打つと言った。

（おお、覚えとるぞい。それがどうしたんじゃ？）

「今、土門長老から電話がかかってきてるんだけど。どのくらいの期間を観察するのか知りたいらしいんだよ。で、どのくらい見るの？」

俺の問い掛けに、鬼一爺さんは暫し目を閉じて考え込む。

そして20秒ほど経った頃、言うのだった。

（そっじゃなあ、三十日ほどばかり見させてもらおうかの。まあそ

う言っといてくれぬか)

とりあえず俺はそのまま土門長老に伝える。

「土門長老、鬼一爺さんが言うには、三十日ほど見させて欲しいそうですね。」

「おお、そうかね。ならば、また道間殿と細かい打ち合わせをしてから日程の方を伝えるので、鬼一法眼様にもそう伝えておいて貰えんじやろうか?」

「はい、分かりました。そう伝えておきます」

「すまんの、日比野君。それでは今日はこれで失礼させてもらおうよ。では、また……プツッ」

といった内容の話があった訳だ。

俺は電話を切った後に鬼一爺さんに視線を向ける。

するとその時、テレビから水 黄門のテーマがタイミング良く流れ始めたのであった。

鬼一爺さんは勿論、アリーナ席でかぶりつきモードに突入している。凄い前のめりの姿勢で……。

まあそれはさて置き。

さっきの事を今のうちに言っとくかと思った俺は、鬼一爺さんに会話の内容を伝える事にした。

「鬼一爺さんさあ、さっきの電話で【後にせい！ 今、我は忙しい！】……………」

だが、俺が喋りだすや否や、鬼一爺さんはテレビを凝視したまま、大きな声でそう言い放った。

駄目だコリヤと思った俺は、水 黄門が終わってからにしようと思ひ、自分もまた霊術修行を再開させたのであった。

2月中旬 某県 土門邸。

1月末から、この地方上空に押し寄せて大雪を降らせていた寒気

団もようやく去り、今日は久しぶりに雲一つ無い晴天に恵まれていた。

土門長老宅の周囲にある庭も、雪の無い状態ならば素晴らしく手入れの行き届いた日本庭園が見られる。

だが、今は残念ながら雪が覆いかぶさっている為、見る影もない。その庭園に幾つかある背の低い木々や石灯笼といったものには、雪がこんもりと覆いかぶさっているので、庭全体が凸凹としてひどく歪んで見える。

またその他にも、背の高い木々には藁縄で雪吊りが施されており、そのピンと張った細い縄に雪が器用にのって、それらは何ともいえない奇妙な造形のモニュメントとなっているのであった。

しかし、今はそれらが日光でライトアップされている所為か、そんな歪んだ庭も見えてくれが悪い訳ではない。

それらは一種の芸術作品の様に、歪いびつな中にも美しさを感じさせており、庭全体が奇妙な存在感を放っているのであった。

そんな雪景色をした、とある日の午後の話である。

今、この土門邸には安土 英章が訪れていた。

この間と変わらぬスーツ姿であり、土門長老と以前会った座敷にて、依頼をされた眩道齋への尋問成果を報告するところであった。

「土門長老。つい昨日ですが、男が自白しましたので、急ぎご報告に参りました」

英章の言葉を聞いた土門長老は、ホツとした表情で言う。

「おお、流石は安土家じゃ。思っていたよりも早い訪問じゃったので、びつくりしたぞい。では早速じゃが、あ奴の供述内容を聞かせてくれぬか？」

「はい。ですがその前に、この半月余りの間の調書を急ぎ纏めましたので、お渡しさせて頂きます。どうぞお受け取り下さい」

そう告げた英章は、座卓の上に置いたファイルを土門長老に差し出した。

土門長老がファイルを受け取ったところで英章は続ける。

「細かい事は、その調書に書いてありますので、要点だけ報告させて頂きましょう」

「うむ、続けてくれ」

土門長老の言葉を聞くと共に、英章は手元にある資料を開いた。

そして相手が聞き漏らさぬように、ゆっくりとした言葉遣いで話し始めるのだった。

「はい、では。まずあの男の本名ですが、大森龍司おおもり りゅうじと言うそうのでA県の者のようです。年齢は33歳。職業は表向きは何でも屋ですが、裏で呪殺を請け負っていたそうです。現在、独り者の様で、親や子供といった家族の存在は見当たりませんでした。どうやら天涯孤独の身というところでしょう。これが大まかなあの男の素性でございます」

目を閉じて耳を澄ましながら報告を聞いていた土門長老は、そこで口を開いた。

「フム、素性は分かった。じゃが一つ聞きたい。あの男に術を授けた者は誰か、それについては口を割らなんだか？」

土門長老の問い掛けに英章は一息ついてから答える。

「それが実は……あの男に術を授けたのは、あの不動ふどう 眩斎げんさいなのだそうです。……宗家も良くご存知の筈」

「ふ、不動 眩斎じゃと！」

土門長老は英章の言葉を聞き、表情がクワツと一変する。

目を見開き、眉間に皺をよせ、それと共に座卓の上に置かれた手が震えだしたのである。

すると何かを思い出すかのように目を閉じ、悔しさをにじませながら唇を噛んだのであった。

そんな土門長老を英章は無表情で見詰める。

暫く感傷に浸った後、土門長老はやや声を震わせながら口を開いた。

「いや、そうではないかと、薄々だが感じてはおった……。あの呪

殺の手口……。確信は持てんかったが、あの男からは眩斎げんさいの持つ黒い雰囲気に似た物を感じたからの……」

そう呟いた土門長老は、ここで一度大きく息を吐き、呼吸を整える。

そして言った。

「それである男、眩斎げんさいの事を他には何か言っておらんんだか？」

「それが、あの男自身も15年前に不動ふどう 眩斎げんさいの元を離れてからはそれっきりだそうで、行方も連絡方法も分からないそうです。本人も知らないのであれば、どうにもなりません」

「……そうか。フウウ……よもや、このような形で 眩斎げんさいの名を聞く事になるとはの……」

と返事した土門長老は、目を閉じて天を仰ぐかのように顔を天井に向けた。

少しの間、そうやって己の頭の中を整理する。

それから20秒ほどすると、土門長老はいつもの表情に戻って英章に問い掛けるのであった。

「……まあよい。眩斎げんさいのことは後にしよう。それで、ここから本題じゃが、あの男に呪殺を依頼した者は一体誰なのじゃ？」

「それが、実はあの男も依頼者とは顔を合わせた事がないそうです。ただ、なんでも陽炎かげろうと呼ばれる者から、文面での連絡方法で通達されていたと言っておりました」

「文面？……。郵送されて来たという事かの？」

土門長老は長い顎鬚を手で撫でながら聞き返す。

「いいえ。あの男の話によれば、最初のコンタクトは電話だそうです。が、その後はA県の不玄動ふげんどうと呼ばれる山間地域に建つ、森の中のお堂にて、呪殺請け負いの遣り取りをしていたそうです」

「フム。えらく面倒な遣り取りをしていたんじゃないの」

「ええ。しかも、呪殺依頼書は念入りにも、そのお堂の中にある賽銭箱の床下に納められていたそうです。只今、ウチの手の者が確認に向かっておりますので、真偽の程はすぐに上がってくるでしょう。」

また、依頼達成時のお金の受け渡しも、アタツシユケースごとそのお堂の中に入れられていたそうです」

そう英章は言い終えると手に持った資料を伏せる。

そして土門長老に向かい言った。

「以上が、あの男が供述したおおまかな内容であります。他ににかお聞きしたい事があればどうぞ……」

そこでもう一度、土門長老は目を閉じる。

10秒程ではあるが、座敷内に沈黙が流れる。

その後、大きく息を吐くと土門長老は口を開いた。

「いや、今の所は見当たらず。それに、呪殺依頼をする者がそう簡単に素性を明かすとも思えぬし。あの男自身も呪殺を生業としている以上は、其処までは踏み込まぬじやろう。これ以上の情報は無理かもしれぬ。致し方あるまい。後は、この調書を良く読んで気になることがあつたら、また英章殿に連絡しようとするかの……」

「そうですか。ありがとうございます。ところで話は変わるのですが、あの男の【封印の儀】は、供述内容の真偽が分かりしだい、私共の方で通常通り進めさせていただいても問題はありませんか？」

「ウム。お主達に後の事は任そう。それと、【封印の儀】を終えた後の男の処置も宜しく頼むぞ」

「はい、承知しております。では、そのように進めさせて頂きます故……」

英章はそう返事すると共に低く頭を下げる。

だが、俯いた瞬間。

英章の口元には不敵な小さい笑みがこぼれていたのだった

その日の夜。

英章から報告を受けたのと同じ座敷に、土門長老は目を閉じて腕を組みながら静かに座していた。

その佇まいは座敷と一体化してるかのごとく微動だにせず、ただ

ただ目を瞑り、沈黙しているという感じである。

土門長老から座卓を挟んだ向こう側には座布団が3枚置かれており、この室内の静かさと相俟って、それらはまるで座る者を待っているかのようにさえ見える。

また、座敷には明かりこそ灯ってはいるが、何一つ動くものが無い為に無人の室内を思わせる雰囲気となっていたのであった。

物音も、聞こえてくるのは、外で時折吹きつける風がたてる音くらいである。

そんな静かな座敷内ではあったが、それも終わりを迎えようとしていた。

廊下からドタドタと複数名の足音が聞こえてきたからである。

その足音は土門長老が座した座敷のところで止まる。

そして止まると同時に、襖の外から呼びかける声が聞こえてきたのだった。

「宗貴です。言われたとおり、詩織しおと明日香あすかも連れてきました」

静かに座していた土門長老は、目を閉じたまま言った。

「うむ、入りなさい」

「では失礼します」

宗貴はそう言うのと襖をスウーと開いた。

すると其処には宗貴の他に女性が2人立っていたのである。

3人とも私服であり、ゆったりとした暖かい服装をしていた。

女性2人は共に若く、歳は10代後半から20代前半といったところの様である。

1人はやや丸みがかった眼鏡をしており、癖のないサラツとした茶色く長い髪が特徴の細身の女性である。背はもう1人の女性と比べるとやや高いが、目に見えて分かる程の差は無い。

また、綺麗な顔立ちではあるが非常におっとりとした表情をしており、その為、緊張感のない雰囲気を身に纏っている様に見える女性である。

もう1人の女性は、何か気に入らない事があったのか少しムスッ

とした表情で立っており、眼鏡の女性とは対照的にややキツイ印象を受ける。が、怒っている中にも可愛らしい部分が見え隠れする顔立ちをしていた。

髪型はベリーショートとも言える短さで、それもあってか、非常に活発そうな印象を与える女性であった。

土門長老はその3人の姿を視界に入れると、自分の相向かいに置かれた座布団に座るよう、右手を振るジェスチャーを交えながら促す。

3人はそれに従い、土門長老に促されるまま座布団へと腰掛けていく。

そして3人が全員腰を下ろしたところで土門長老は口を開いたのであった。

「宗貴、詩織、そして明日香。色々忙しいところ、すまんな3人共」

そう土門長老が言うや否や、先ほどからムスツとしていた女性、明日香が身を乗り出して文句を言う。

「ちょっとお爺ちゃん、どういうことよ。お兄ちゃんから聞いたわよ。2月の終わりから一ヶ月ほど学校休んでF県に行けだなんて！ 私にも都合つてもものがあるんだからッ」

土門長老は明日香のすごい剣幕に若干驚きつつも言う。

「ま、まずは、僕の話聞くのじゃ。それから意見を聞こう」
それを見た宗貴は明日香の肩に手を置いて諫める。

「そうだ明日香。少し落ち着け。まずは爺さんの話を聞こう」
「だってえ……ンもう分かったわよ……」

明日香は渋々ではあるが怒りを仕舞い込む。

するとそこで、場の空気を読まずにもう一人の女性、詩織がポンと手を打つ。

そして、のほほんとした陽気な口調で土門長老に言うのだった。

「あ、そうだね。長くなりそうなので、お茶を淹れてきますね。お爺さん」

「ん、ああ……そうしてくれるかの……ふうう」
たったこれだけの遣り取りではあったが、土門長老は疲れたようにそう返事する。

そして詩織はニコニコと笑顔を携えながら立ち上がると、お茶を淹れる為に向こうへと行ったのだった。

それから10分後。

詩織は湯呑みから湯気の立つ熱いお茶を皆に配ってゆく。

そして配り終わると自分も、先ほど座っていたところに戻るのであつた。

詩織が席に座つたところで、とりあえず、4人は出されたお茶に手を持つていき、一度口を付ける。

4人は揃つてフウウと大きく息を吐き、一息入れる。

そして再度、仕切り直しとばかりに土門長老は言うのであつた。

「さて、それでは落ち着いたようじゃし話そうかの。……忙しいところ3人に集まってもらつたのは、理由があるのじゃ。詩織と明日香も宗貴から少しは聞いておるじゃろうが、とりあえず最後まで話させて欲しい」

土門長老は、そこで3人の顔を順番に見てゆく。

3人は一応、無言で首を縦に振つた。

それを確認した土門長老は、「ウオツホンツ」と咳を入れてから続ける。

「先ず、最初に言つておくとじゃが。この話が纏まつたのはつい先日なんじゃ。道摩の名を継ぐ道間殿と、この間からずっと話してた事なんじゃよ。お主等も知つておると思うが、この間あつたF県での一件は、両家にとって非常に反省すべき点が多い事件じゃつた。あれだけの監視の中でも僅かな穴があつたという事じゃからの。それであれ以来、道間殿と僕は呪術大家同士の連携というものをもつと深かめて行かなければならない、と考えるようになったのじゃよ。

そしてつい先日、道間殿とその事について話をしていたら【このままではイカン！】という話になったのじゃ。そういう訳で、今後、イザという時にあのような事がないよう、一度、各家々が集まって親睦を深めていかねば成らん、ちゅう話になつての。まあそれがF県に向かつて貰う理由じゃ。ちゅう訳で以上じゃ。質問を受け付けるぞい」

そこで宗貴が手を上げて質問した。

「爺さん、とりあえず目的は分かった。けど、なんでF県で親睦を深めるんだ？ 他にも場所がありそうなもんだけど……」

言い終えた宗貴は首を傾げる。

土門長老は腕を組みニコニコと答える。

「ああ、それは事件のあった所でやった方が緊張感があるじゃろ。まあそれが理由じゃ。はい他は？」

するとここで、一番最初に文句を言っていた明日香が手を上げた。そして、ムスツとしながらも尋ねる。

「なんでこの時期にやるのよ。確かに今年の授業は来月でもう終わりだけど、私だって色々と高校で忙しいのよ。今年からクラブの部長とかもやってるから」

「時期については目を瞑ってもらうしかないわい。ここしか良い時期がなかったんじゃないよ。まあ学校を休む事は、儂があそこの校長に言っておいてやろう。多少は融通が利くからの。じゃが、クラブの方は明日香の方でなんとかしてくれ」

土門長老の返事を聞いた明日香は、いつもの経験から（もうこれ以上言っても無駄だ）と内思い始める。

そして納得は出来ないながらも、渋々、返事をするのであった。但し、条件をつけて。

「……分かったわよ。でも、期末試験終わった後にして。それと、卒業式だけはいかせてよ。お世話になつた先輩を見送るんだから」

「そのぐらいじゃったら構わんよ。詩織は何か無いかの？」

「ンン……そうねえ。私の場合は大学も春休みに入るから时期的

には問題ないけど……」

詩織は下唇に人差し指を当てて暫し考える。

すると、何かを思い出したのか、土門長老に視線を向けると言った。

「そういえばお爺さん。私に会わせたい人がいるとか言ってますでした？ 確か、その人もF県の人とか言っていましたよね」

その言葉を聞いた土門長老は含み笑いをしながら言う。

「おお、そうじゃった。日比野君というんじやが、彼もこの集いにくるから、その時に紹介するぞい」

「お姉ちゃんに会わせたい人？ 何……もしかしてお見合い？」

ここで明日香が興味津々といった感じで話に入ってきた。

土門長老は笑いながら、煙に巻くように明日香に言った。

「ヒョヒョヒョ、まあその時になれば分かるわい」と。

だがそこで、話を切るように宗貴が土門長老に問い掛けた。

「爺さん、ちょっといいか？ 集まるのは分かったけど。俺の仕事はどうするんだ？ 一応、こう見えても俺は神代総合商事で名目上取締役部長をやってるんだぞ」

「まあ神代は鎮守の森も同然じゃから、そう心配するな。お前の部下である西島君に一ヶ月程代行してもらえ。彼は部長補佐じゃったろう。なんなら僕からも言っておいてやるうか？」

「いいよ、自分で言うから。フウ、それに爺さんの我俣に付き合うのは、今に始まった事じゃないしね」

宗貴はそういつと両手をヒラヒラさせてお手上げといった仕草をする。

そしてそのまま続けた。

「その代わり、鎮守の森の行事とは関係なさそうだから、俺も堅苦しい言葉遣いは抜きでいくからな。いいな、爺さん？」

「それは構わぬよ。土御門宗家のしきたりなんぞ、其処では関係ないからの。好きにせえ」

土門長老はそう返事した後、もう一度3人の顔を順に見ていくと

言う。

「他に聞きたい事はないかの？」

3人は首を横に振って沈黙する。

「じゃあ、そう言う事じゃから。3人共、よろしく頼むぞい。ヒョ
ヒョヒョ」

土門長老は3人の表情をニコヤカに眺めながら、最後にそう締め
くくったのであった

参拾八ノ巻

《参拾八ノ巻》 階位

2月下旬。

《 ウォム・ヴァジュラ・ヤースカ・ウーン 》……

今日は土曜日である。

春休みに入ってから、曜日の感覚というのが段々と薄れてゆく。大学の時間割確認といった作業から解放されているのがその要因だろう。

まあこればかりは仕方がない。それが長期休暇というものだからだ。

そんな事を考えながら、俺は時刻を確認する為にテレビの上に置かれたデジタル時計に目を向ける。

今の時刻は午前9時55分を示していた。時間を確認した俺は窓辺に視線を向ける。

カーテンの隙間からは、久しぶりであるお日様の暖かい光が射しこんでいた。

その眩しくも優しい日光は、この寒くて暗い雰囲気が漂う季節の中にあつて、一筋の希望を持たせる光のように、俺の目には映るのだった。

まあここ最近では雪や雨続きの毎日だったので、特にありがたく俺はそう感じているのである。

そうやって日の光に俺が思いを馳せている、丁度その時。

ピンポンという呼び鈴の音が俺の部屋に響き渡るのであった。

どうやら誰かが来た様である。

昨日、この時間帯に来ると言っていた人物がいるので、恐らく、その人物であろう。

それを思い出した俺は、顔だけ動かすと玄関の方に向かい、大きな声で言うのだった。

「あ、開いてるからどうぞお〜」と。

すると、ガチャっという扉のノブを回す音が聞こえてきたのである。

どうやら俺の声が聞こえたようだ。

その人物は扉を開いて中へと入ってきた。

そして扉を閉めると、玄関前で元気良く挨拶をするのである。

「日比野さあん、おはようございま〜す」と。

俺は玄関に向かい再度口を開いた。

「お、おはよう瑞希ちゃん。……あ、上がってくれていいよ」

「は〜い。それじゃ、おじやましま〜ス」

といった瑞希ちゃんの可愛らしい声が聞こえてくる。

そして瑞希ちゃんは靴を脱いで、俺が居るコタツのある所にまでやって来たのであった。

今日の瑞希ちゃんは、初詣の時に見た白いコートを着ていた。

こんな天気の良い日にはよく似合う服である。

その雰囲気は穢れの無い、白い天使といった感じだ。念の為に言うが、俺は天使なんぞ見た事は無いから、あくまでも想像内での話だ。

という訳で話は変わるが、瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんはつい2日前に期末試験が終わったそうである。

2人共、試験が終わったその日に俺のアパートに来て、報告をしてくれたのを思い出す。

その時の2人の様子は、試験の束縛から解放されたかのような感じだったので、結構試験中は気を張っていたのかも知れない。

フトそんな事を考えていると、瑞希ちゃんは俺を見るなり、口元を押えて驚くと共に言うのであった。

「ひ、日比野さん。ど、どうしたんですか？ そんな格好で……」
驚くのも無理はない。

だって今の俺は、紺色のジャージに身を包みながら、死んだ蛙のような格好で床に突っ伏しているからである。

ハッキリ言ってみつともない格好である。

というか、そんな事は重々承知している。

だが、どうにもならんのだ。

何故ならば、今現在の俺は体中が筋肉痛で痛いからである。最悪である。

(おお、娘子よ。おはようさん)

そこで鬼一爺さんが瑞希ちゃんに姿を現すとニコヤカに挨拶した。「あ、オハヨー、お爺さん。ところで、日比野さんどうしちゃったんですか？」

瑞希ちゃんは俺と爺さんを交互に見ながらそう尋ねる。

それを聞いた鬼一爺さんは、俺に流し目を向けると事の顛末を説明し始めるのであった。

(実はのう。涼一に新しい術の修行をさせたら、体が付いて行かん様になって、この有様なんじゃよ。まったく、我が思っていた以上に軟^{やわ}じゃのう。こんなんでは先が思いやられるわい。もう少し、しっかりせえ涼一！)

ぐぬぬぬ、おのれえ爺！

軟^{やわ}なのは認めるが、こんなに身体へ反動が来るなんて聞いてねえぞ！

と……そう言いたいのは山々だが、今は瑞希ちゃんも来ているので、とりあえず、俺は矛を収める事にしたのだった。

で、こうなった原因だが、鬼一爺さんから習った夜叉真言を完全に覚えたので、それを唱えてどんな感じになるのか検証してたからである。

結論から言うと術は成功はした……。だが、2分と持たずこの状態である。ガッデム！

そして自身の身体での検証結果であるが、とりあえず、霊力が肉体を補強するのは確認できた。

だが問題は、練った霊圧から導き出される身体補強度に、肉体が耐え切れず悲鳴を上げた、という検証結果に終わった事である。

早い話が、夜叉真言術に俺の身体が負けたという事だ。

練った霊圧が高いほど術の性能は上がるので、それも関係しているのだろう。

だが今回、俺が練った霊圧は、それ程高いわけでもない。

鬼一爺さんから前もって術の反動を説明されていたので、寧ろ弱めたくらいだ。

でも、この有様である。

要するに今回の検証結果で浮き彫りになったのは、術者自身の身の肉体強化という課題なのである。

まったくもって予想外の上に溜息がでる展開だ。トホホ。

術の反動で生じた筋肉痛を和らげる為、俺は体全体に霊力を回しながら練りあげる。

すると、幾分か痛みも引いてきた。この分だと、もう暫く霊力を循環させれば大分良くなりそうだ。

そうやって、霊的治療を施しながら夜叉真言の課題を考えていると、鬼一爺さんは言うのだった。

（涼一、あの程度の霊力でそれなら、この先はもっと大変じゃぞ。

充実した霊力と身体の良い調和が、この術を大いに強くするのじゃ。

拗って、これからは身体も鍛錬せぬといかぬぞい。もっと精進せい）

「さつき身をもって体験したから、もうわかってるよ、そんな事…

…。イテテテッ」

俺は節々が痛いながらも、体を起こして鬼一爺さんにそう返事をした。

すると、そんな俺を見た瑞希ちゃんが心配そうに言うのである。

「日比野さん、大丈夫ですか………凄く辛そうですね」

俺は心配かけまいと、爽やかな笑顔で答える。

「だ、大丈夫だよ。ハハハ。初めてだから、少し負担がかかっただけさ、ハハハ」

だが、瑞希ちゃんはまだ心配そうに俺の顔を覗きこむ。

とりあえず、一呼吸置くと、俺は瑞希ちゃんを安心させる為に言った。

「今、霊力を使って回復してるところだから大丈夫だよ。暫くすると元に戻るからさ。だから心配しないで、瑞希ちゃん」

続いて鬼一爺さんが瑞希ちゃんに言う。

（大丈夫じゃ、この程度の事なら今まで何回もあつたからの。すぐ良くなるわい。フオフオフオ）

俺と鬼一爺さんの言葉を聞いた瑞希ちゃんは、ホツとした表情になる。

そして笑顔で言うのだった。

「本当ですか、良かったあ。日比野さん、あんまり無理しちゃ駄目ですよ」

「心配してくれてありがとうね、瑞希ちゃん」

俺はそう言うのと瑞希ちゃんの頭を撫でる。

撫でられた瑞希ちゃんは恥ずかしかったのか、頬を染めて顔を俯かせるのだった。

こういった仕草は歳相応の可愛らしさがにじみ出ているな

などと思っていると、瑞希ちゃんは何かを思い出したのか、ハッと面を上げる。

そして俺に言った。

「日比野さん。そういえば今日、道間さん達のマンションに、土門長老が来るみたいな事を道間さんが言っていましたよ」

「ああ、そういえば昨日、俺にも連絡があつたな。そんな事を言っていたよ。まあ俺には声が掛かってないから、行かなくてもいいとは思うけど」

「ふうん、そうなんですか。何かあるんですかねえ。少し気になり

ます……」

と言った瑞希ちゃんは、人差し指を下唇に当てて、何やら思案顔をするのであった。

そんな瑞希ちゃんを見た俺は少し考える。

そして、『鬼一爺さんによる人間観察と言う部分を伏せれば、まあ別に秘密にするような事でもないだろう』と考え、俺は瑞希ちゃんに説明をする事にしたのだった。

「多分だけど。土門長老が来てるのは、土御門家と道摩家の合同修被訓練の事だと思うよ」

「合同修被訓練？　なんですかそれ？」

瑞希ちゃんはポカンとした表情でそう言った。

俺は続ける。

「去年のクリスマスに、厳重警戒中にも関わらず、大沢議員が呪殺されたのを瑞希ちゃんも聞いてたから知っているよね。それらの反省も含めて、一ヶ月程、両家の親睦を深める為の訓練をするみたいだよ」

だが、俺の話を聞いた瑞希ちゃんは、眉根を寄せて更に難しい表情になる。

すると、恐る恐る俺に尋ねるのであった。

「ひ、日比野さんも……その訓練に行くんですか？」

「うん。一応、俺も呼ばれてるんだ。で、2月末からそれに参加する事になってるんだよ。面倒だけど、仕方ないかな。俺もこの世界に深く入り込んだりじゃったからね。ハハハ」

だが瑞希ちゃんはそれを聞き、今度は何処か不安そうな表情になる。

俺はそれが気になったので問い掛けた。

「どうしたの瑞希ちゃん。なにか気になる事でもあるの？」

すると瑞希ちゃんは弱々しい声で言うのだった。

「日比野さん、瑞希はそれに行ったら駄目なんですか……」

俺は鬼一爺さんに視線を向ける。

爺さんは言う。

(ふむ……別にエエじゃる。問題ないと我は思うがの。それに例の件とは関係がないからの)

鬼一爺さんの意見を聞いた俺は、少し思案する。

まあ確かに、瑞希ちゃんも道間家の関係者だから行っても問題は無い。

だが他の面子と違い、瑞希ちゃんは学校というものがあるので、全面参加は難しいだろう。

その代わり、休みの日や学校の終わった後なら問題ないと思い、そう告げる事にしたのだった。

「沙耶香ちゃん達はお父さんの指示で学校を休むようだけど、瑞希ちゃんの場合、全面参加は難しいよね。でも、学校の終わった後とか休みの日なんかは大丈夫だと思うよ。もし来るのなら、俺から土門長老に言うておいてあげようか？」

すると瑞希ちゃんは、パアツと明るい表情になって言うのだった。

「ほ、本当ですか？ ぜひお願いします」

「分かった。それじゃあ、そう言うておくよ」

そして瑞希ちゃんは色々考える事があるのか、やや俯き加減で言うのである。

「……本当は瑞希も全部参加したいけれど、お父さんとお母さんにこんな事、言えないですもんね……」

「……まあね。俺もそうだけど、幾ら両親でもこの事は言えないからなあ。瑞希ちゃんの気持ち、よく分かるよ」

俺の言葉を聞いた瑞希ちゃんは、ニコリと微笑み言った。

「エへへ。でもそう考えると、日比野さんと瑞希って、よく似た境遇なんですよね」

「ハハハ、言われてみればそうだね」

と、そこで俺は瑞希ちゃんが此処に来た理由を思い出す。

そして言った。

「ところで瑞希ちゃん。霊術修行の方だけど。もう少しすると俺の

調子が戻るから、そしたら靈力を練る練習を始めよっか」

「はい、日野野先生。今日も指導をよろしくお願いしますね」
瑞希ちゃんはそう言つとペコリとお辞儀をするのであった。

実は俺、この靈術修行の時だけは先生などと呼ばれているのだ。
最初、この呼ばれ方をしたときは背中がこそばゆくなつたものだが、今ではもう慣れたものである。

という訳で、俺の指導による瑞希ちゃんの靈術修行が始まるのであった。

一方、その頃。

土門長老は道間兄妹の住むマンションへ訪れていた。

その土門長老は沙耶香と一将の2人と共に、リビングにて何かの打ち合わせの最中のものである。

3人が打ち合わせをするリビングの窓辺からは、カーテンが開ききつている事もあり、暖かく優しい日の光が降り注いでいた。

その日光がリビング内の隅々まで行き届いている為、室内の照明は点いていない。

拠つて明かりはその日光のみである。

その所為か、このリビング全体が爽やかで心地よい雰囲気の漂う空間となつていたのであった。

だが、打ち合わせをしているコタツの置かれた室内中央は、やや違つた様相を見せていた。

その原因は3人の服装であつた。

土門長老と一将は共にスーツ姿で、沙耶香は学生服姿である。

3人の衣服の所為か、其処だけ室内の陽気さが若干薄れ、やや堅苦しい雰囲気の様相となつていたのであった。

そんな3人は、コタツの上に置かれてある何かの予定が書かれたA3サイズの紙と、卓上カレンダーを見比べながら何かの打ち合わ

せをしており、お互いの反応を確認しあっていた。

時には難しい表情を。時には笑顔を。

色んな表情を浮かべながら3人は話し合いを続ける。

そんな一幕ひとまぐの話である。

「それで道間殿、両家の親睦を深める為の合同修被訓練じゃが。先ずは、日替わり方式の2人一組になってもらい、修被を行う方法で行こうと思うんじゃが、どうじゃろ？」

一将は卓上カレンダーに一度目を向ける。
すると顎に手をやり、思案顔で答える。

「土門長老。日比野君も入れてなので、この際、全員が彼と一度は一緒にやってもらった方がいいですな。日比野君にとっても色んな術者との修被は、貴重な経験になりますし。とりあえず、最初の一週間はそれでいきましょう」

一将の意見を聞いた土門長老は、二カツと笑みを作ると言った。

「おお、そうじゃとも。儂もそれを考えておったのじゃよ。ヒヨヒヨヒヨ」

2人がそんなやり取りをしている中、沙耶香はカレンダーを眺める。

だがそこで気になることがあった為、沙耶香は2人に問い掛けた。
「お父様に土門長老。この訓練は一週間後に予定されておりますが、私やお兄様は学校がまだありますので、全面参加は難しくないですか？」

一将は口元に軽く笑みを浮かべながら答える。

「ああ、それについては、私の方から理事長に家の事情と云っておこう。心配するな、あそこの理事長は私の良く知る鎮守の森の関係者だ。そのかわり、卒業式や終業式は出てくれ。一樹の立場上、流石にそういった式典には出席してもらわんな。ハハハハ」

「そ、そうなのですか……」

沙耶香は、いつもの沈着冷静な父と違って、やや強引な感じがし

た為、若干驚きつつもそう答えた。

そして今度は、土門長老の手元にある仮の日程表に目を向けるのである。

すると、初日の訓練予定のところに【修験靈導の儀】と書かれているのが、沙耶香の目に留まる。

沙耶香は確認の為、土門長老に問い掛けた。

「土門長老、此処に【修験靈導の儀】と書かれていますのですが、これは修被者の技量を見極めて階位を決める、あの【修験靈導の儀】の事でしょうか？」

「うむ、そうじゃが。それがどうかしたかね？」

土門長老の返事を聞くなり、沙耶香はやや驚いた表情になって尋ねる。

「えッ！ ですが、この儀式は最低でも、鎮守の森が定める修被者階位の最高階位 第一位【浄衆元帥】の称号を持つ者1名と、その次階位である第二位の【浄将】の者達4名の立会いの元によって行われるのが決まりなのでは？」

沙耶香の言葉を聞いた途端、土門長老と一将は互いに顔を見合わせるにニヤリと笑う。

そして土門長老は言うのだった。

「ヒヨヒヨヒヨ、そうじゃとも。それが正規の決まりじゃ。じゃがの、そんなもんは如何とでもなるんじゃよ。のう道間殿？」

思わせぶりな言い方で土門長老に話を振られた一将は、やや硬い笑いを浮かべながらも頷く。

一将は沙耶香に視線を向けると言った。

「沙耶香、お前も社会に出ると分かんと思うが、世の中には表の道があれば裏の道というものも当然あるのだよ。ハハハ、まあそういう事だ。あまり余計な詮索はせん方がいい」

「そ、そうなのですか。で、では気にしない事にします。ハ、ハハ……」

口元を引き攣らせながら、沙耶香はそう返事する。

また、沙耶香はそれと同時に、2人の妙な態度を見て『この人は、何らかの、不正をやらかす気だ』と判断するのだった。

そして、父と土門長老の遣り取りから危険な匂いを感じた為、肩を窄める仕草すぼをしながら、この事についてはもう触れないでおうと考えるのである。

すると土門長老は、そんな風に萎縮する沙耶香へ向かい、付け加える様に言った。

「ヒョヒョヒョ、まあそう心配しなさんな。それに無理をしてもコレをするのは理由があるのじゃよ。沙耶香ちゃんも分かるじゃろ？」

土門長老の問い掛けに沙耶香は冷静になって考える。

そこである男の存在が沙耶香の脳裏に浮かび上がった。

沙耶香は真剣な表情になって言う。

「日比野さんと鬼一法眼様の事ですね……」

「ヒョヒョヒョ、その通りじゃ。今はまだ、彼の事をあまり露出する訳にはイカンのじゃよ。それに、この【修験しゅげん靈導れいどうの儀】で決まる日比野君の修祓者階位は、儂等が責任を持って穩便に且つ、確実に登録を済ませるつもりじゃ。じゃから、お嬢ちゃんはそんなに心配しなさんな。儂とお父上に全て任せなさい」

土門長老に優しく諭すように言われた所為か、沙耶香はホツとしたような表情になる。

そして、笑顔を浮かべて言うのだった。

「勿論、信用しております。御二人は共に【浄衆元帥じやうしゆじゆげんすい】と【浄将じやうじやう】の称号を持った方ですので、私なんかよりもそういった緒事情に精通しておられる筈ですから」

そんな沙耶香の言葉を聞いた一将は、娘の頭を優しく撫でながら言った。

「まあそういう事だ。心配は無用だ。私達に任しておきなさい。ハハハ」

撫でられた沙耶香は恥ずかしそうにするが、同時に、そんな父の

気遣いに安心するのであった。

それから5日後。

今は午前10時。

俺はトレンチコートにジーンズ、頭には茶色柄のニット帽といった出で立ちで、丁度今、アパートの外に出たところである。

外は流石に寒いが、空を見上げれば眩しくて暖かいお日様が、この学園町を優しく抱擁するかのように包み込んでいた。

朝のそんな空模様気分を良くした俺は、心地よい日光を全身に浴びながら、大きく背伸びをする。

また、それと共に大きく深呼吸もするのだった。

すると、刺すように冷たいながらも、清涼感が感じられる澄んだ空気が俺の体内に入り込んでくる。

そんな風を感じる所為か、吸入した空気が全身を清めてくれるような錯覚を俺は覚えるのだった。

とりあえず、そうやって外の空気を満喫した俺は、筋肉痛で痛い肩口を回しながら、歩き出した。

実は俺、4日前から筋トレを始めたのである。

理由は勿論、夜叉真言対策だ。

だが、鍛えるといってもマツチヨになる必要は無い。が、それなりに筋力を上げておかないと術に負けてしまうのだ。

コレばかりは仕方が無い。

そんな訳であれ以来、筋肉痛が続く毎日なのである。

だが、筋トレばかりが原因というわけではなく、剣道愛好会での練習も多少は加算された結果だろう。

おまけに、今日も昼から2時間ほど剣道練習の予定がはいつていたりするのである。

まあそうは言っても、ここ最近は何の皆も色々事情がある所為

か、そう頻繁に剣道の練習もないので助かっているところである。勿論、姫会長にこんな事は言えないが……。

とまあそんな事はさて置き。

俺は今、一樹さんからお使いを頼まれたので、目的地である天目堂 高天智支店へと歩を進めているのであった。

一樹さんも学校の教師と部活動の副顧問をやっているので、色々大変な様である。

中々、自由な時間が作れない。というような事をこの間の修祓に行してたとき聞いたし。

女子校なので、違う意味でも大変そうだが……。結構、一樹さん男前だしね。

まあそういった事情もあって、春休み中の俺に白羽の矢が立ったというわけだ。

因みに、鎮守の森所属の修祓者である事を証明する俺のカードも、2週間程前に一樹さんから手渡されているので、俺一人で行っても大丈夫という事だ。

だが、カードは貰ったものの、元旦以来、俺はまだ天目堂には行っていない。勿論、用が無いからだ。

まあそんなわけで、一人で行くのは今回が初めてな為、実は結構緊張していたりするのである。

正しく、『初めてのお使い』といったところである。

しかし、同時に術具類への好奇心もあるので、『天目堂に行ったら、じっくりと見てくるか』とも考えているのであった。

話は変わるが、年が明けてから修祓を数件、俺も同行しながらとはいえ達成している。

それもあり、今年の1月に開設したばかりの俺の預金口座に、つい先日、報酬が振り込まれていたのである。

因みに開設した口座は、鎮守の森が指定する都市銀行である。

日本かむなび銀行「通称・かむ銀」というのだが、どうやらこの都

市銀も鎮守の森の関係する所のようにだ。

都市銀クラスの金融機関をも掌握しているとは……恐るべし、鎮守の森ッ！

とまあそれは兎も角。

で、その金額を確認して驚いたのだが、時給換算すると1時間2500円くらいの報酬が振り込まれていたのだ。

思わず『エッ？』と口に出して通帳を見入ってしまったほどである。

そして金額を見た俺は、思わず一樹さんに確認をしたのであった。それは勿論、見習い修祓者のような俺がこんなに貰っていいのか、と思ったからである。

だが一樹さんは、「見習いとはいえ、命の危険もあるからだよ。それにその金額は一応、見習い術者への報酬相場だから別に気にしないでもいい」と言ったのである。

その説明を聞いた俺は、『この業界の最低賃金と最高賃金は一体幾らなんだ！？』とカルチャーショックを受けたのだった。

知らぬが仏なのかも知れない。

まあそんな訳で、呪術業界賃金事情にも色々と思いを馳せつつ、俺は天目堂へ向かって歩を進めるのだった。

歩きながら周囲の景色に目を向けると、つい最近までは雪に埋もれていたとは思えないほどである。

ここ五日ほどずっと晴れが続いており、気温も上がっているからだろう。

お陰で、数週間前までは辺り一面が雪で真っ白だったこの高天智市も、本来の姿を取り戻しつつある状況なのであった。

日陰になるような所にはまだ多少は残ってはいるが、道路や歩道はもう完全に雪が無くなっているの、ほぼいつも通りの姿に戻っているのだ。

まあそのかわり、雪に隠れて見えなかった犬の糞が、時々、転が

っている時があるので注意が必要だが……。

その他にも、夜などはまだまだ冷え込む日が続くので、朝は路面の凍結に注意が必要である。

というわけで今の俺は、犬の糞と路面凍結に注意しながら天目堂へと向かい歩を進めるのであった。

そしてアパートを出てから歩く事30分。

俺は大通り沿いにある天目堂へと、ようやく辿り着いたのだった。バスや電車を使えばもっと早く来れたのだが、身体を鍛える意味合いも込めて歩いて来たのである。これについては、自分でも、要領が良いのか悪いのか悩むところだ。

まあそれは兎も角。

俺は早速、天目堂の入口へと向かった。

自動ドアを潜り、真っ直ぐと突き進む。

そしてその先にあるカウンターへと行き、その上に置かれた呼び鈴を鳴らすのだった。

チリーンという甲高い音が鳴り響く。

すると、カウンターの奥にある扉が開き、以前見た初老の男性が、その時と同じ服装で現われたのであった。

その人は俺の顔を見ると、頭を下げてニコヤカに言った。

「おお、これはこれは、いらっしやいませ。元日に来られた方ですね。覚えておりますよ。今日はどのようなご用件でしょうか？」

「どうも、お久しぶりでございます。え〜と……コッチの方です」

俺はやや緊張しつつ、そう返事すると、財布からカードを取り出して見せるのであった。

「では、こちらの方にそれを」

男の人は俺のカードを見ると、前回と同じ様にカードリーダーをカウンターの下から出してきた。

俺は若干ドキドキしつつ、そこにカードを通す。

すると以前と同じ様に、右奥の扉からピピッと電子音が聞こえてくる。

そして男の人は俺をその扉の前へ案内すると、この間と同じ様に
対応するのであった。

扉を開き「それでは、ごゆるりと」と言いながら、丁寧に頭を下
げて……。

俺は扉を潜ると、その先にある地下階段を降りてゆく。

すると其処には、以前と変わらぬ一つ目妖怪の姿をした天目一箇あめのまひとつ
神像かみのお出迎えがあるのだった。

この一つ目妖怪の像を見るのは今日で2回目だが、相も変わらず
妙な威圧感を放っている。

ややもすれば、目から怪光線が飛び出してきそうな雰囲気である。
あの時、沙耶香ちゃんの説明が無かったら、俺はただの妖怪の銅
像だと今でも思っていた事だろう。

それ程に神様っぽくないのである。

俺はそんな守護神像との再会をまずしてから、呪術具の置かれた
陳列棚の間を通過して、奥にあるカウンターへと向かうのだった。

カウンターには、仙人のような風貌をした白い着物姿の、通称
源さんが「フワアア」と大きな欠伸をしながら佇んでいた。

なんか知らんが緊張感のない爺さんである。

俺はとりあえず、源さんの前に行くのと気楽な感じで挨拶をした。

「おはようございます、源さん」

まだ会って2回目だが、この爺さん自身がそう呼べと言っていたの
で、俺はフレンドリーに言ったのである。

すると源さんは、欠伸で出た涙を拭いながら挨拶してきた。

「おお、この間の若いのか。おはようさん。で、今日はどうしたん
じゃ？」

「今日は、道摩家の注文した術具を受け取りに来たんですよ。なん
でも、昨日、此方に届いたと連絡があったらしいので」

「おお！ そういえば、なんか届いておったわ。ちよっと待っとれ」
と言うと源さんは、カウンター横にある物置と書かれた扉へと移

動する。

そして20秒ほどすると、かなり頑丈そうな金属製のアタッシュケースを持って、其処から現われたのだった。

源さんは、カウンターにそのアタッシュケースを置く。

それから伝票などの確認を始めるのだった。

間近で見ると結構大きいケースである。ついでに少し重そうな感じもした。

俺がマジマジとゴツイそのケースを眺めていると、源さんは言う。

「これじゃ、これが昨日届いた道摩家の荷物じゃ。さて、それじゃ受け取りのサインと認証をさせてもらおうかの」

そう告げた源さんは、B5サイズの納品・受領書と他に、一階で見た物と同じタイプのカードリーダーを出してきたのだった。

俺は納品・受領書にサインをすると、俺のカードをそのリーダーへと通すのである。

それらの確認をすると源さんは言う。

「ほい、ありがとさん。もう、持って行って貰ってもええわい」

「そうですか、ありがとございます……」

返事をした俺は、とりあえず店内を見回した。

そして源さんに言うのである。

「あのお、少し店内の術具を見させて貰ってもいいですか？」と。

「そりゃ構わんよ。何か気になる物でもあったかいの？」

「ハハハ、いや、そういう訳じゃないんですけど。俺、実は見習い術者なんですよ。それで、どんな呪術具があるのかなあとと思って」

今の言葉を聞いた源さんは、眉根をピクツと動かす。

そして意外な物を見るような感じで言うのだった。

「なんじゃ、お前さん。見習いか？ 今のお前さんから感じる靈波がそれなりに強いもんじゃから、もう既に【浄土】の階位を授かっておるものじゃとばかり思うとつたわい」

今、源さんの口から聞きなれない言葉が出てきた。

俺はやや首を傾げつつも、聞いてみる事にした。

「あのお……【じょうしのかいい？】ってなんですか？」
すると源さんは、さっきと同じ様な表情になって言うのである。
「はあ？ お前さんそれも知らんのか？ 見習いというより、入門したての若造と言ったところじゃのう。プツ、カカカカツ」
そして源さんは、珍獣でも見るような目で俺を見ると、噴出すように笑い出したのであった。

なんか知らんけど少し馬鹿にされてる気がする。
だが、そんな風に思う俺を無視して源さんは続ける。

「まあええわい。で、階位のことじゃが。鎮守の森には確か、五つの階位があつての。上から順に【浄衆元帥】・【浄将】・【浄佐】・【浄尉】・【浄士】という階位毎の称号があるんじゃよ」

源さんはそう言いながら、カウンターに置かれたメモ帳にそれらの名前を書いてゆく。

そして書き終わると、俺が読めるようにメモ帳を見せるのであった。

俺はそのメモ帳に書かれた階位をじっくり見ると言った。

「なんか、軍隊の階級みたいですね……」

「まあ修祓者は軍人ではないが、こういった戦闘集団の場合は基本的に『階級無くして軍隊は成立し得ず！』の精神がないと纏まらないの。じゃから、鎮守の森を立ち上げた者達は、軍隊のような階位名称にしたんじゃろ。まあこれは俺の想像じゃがの」

「へえ……なるほど」

源さんは続ける。

「それは兎も角。さっき言った【浄士】じゃが、これは鎮守の森に一人前の術者と認められた者に授けられる称号じゃ。とりあえず、この称号を持ってさえおれば、鎮守の森が依頼する修祓を一人で行えるという事じゃわい。まあこの階位自体にも更に幾つかの階級があるみたいじゃが、そこは俺に聞かんと、お前さんが厄介になつてる道摩家の者にも聞いた方がええじゃろ。ま、こんなところかの」
「そうなんですか。うゝむ……」

俺は源さんの説明を聞き、低く唸りながら腕を組む。

そして、新たに知った事実を頭の中で整理するのであった。すると源さんはカウンターで頬肘を付き、そんな俺をジッと眺めるのである。

なんかその視線が気になったので俺は尋ねてみた。

「どうかしましたか？」

「そう言えばお前さん。以前も言ったと思うが、女難の相がでとるぞ。大丈夫かいの？」

グサツと、その言葉が俺の胸に突き刺さる。

また、それと共に嫌な汗が背中から出てくるのだった。

俺は若干どもりながらも聞き返す。

「ま、ま、前もそんな事を言っていました。ど、どう言う意味ですか？」

「どうもこうも、言った通りの意味じゃよ。儂はこう見えても、人相占いが得意なんじゃ。で、何も起きてないかの？」

俺は口元をひくつかせ、不自然な笑顔を作りながら言った。

「え、ええ。全然、何もありませんよ。多分、気のせいじゃないですか？」

源さんは顎に手をやり、俺の顔をもう一度ジッと眺める。

だが興味をなくしたのか、暫くすると緊張感の無い欠伸をしながら言うのであった。

「フワアア……まあええわい。そういえば店の商品を見るんじゃないな？ 好きにすればええぞ」

「そ、そうですね。ありがとうございます」

俺はとりあえずそう返事をする。

そして、このジジイの無責任な言葉で動揺した心を落ち着かせる為に、俺は頭の中で自分に言い聞かせるのだった。

「まったく、心臓に悪いジジイだぜ……人の気も知らないで……。さっき、人相占いが得意とか言っていたが、所詮占いさ。」

其処には確かな根拠なんてものは何も無い。
あるのは無意味な理屈と統計と推論だけさ。

大丈夫、そんな事にはならない。
もしあったとしても、偶然さ。

其処にはなんの因果関係もない。

それに鬼一爺さんとこのジジイ、そして御神籤おみくしで、同じ様な事を
言われたり書かれたりしてたのも、ただの偶然さ。

そういう事もあるさ。

いや、そうに決まってる。ハ、ハハハハ

俺はそう自分自身を納得させると、大きく息を吐いて身体をリラ
ックスさせる。

それから店内の術具を見る為、俺は勢いよく後ろに振り向き、一
歩前に進んだのだった。

だが、その時！

丁度、俺の後ろに人がやってきていたのである。

考え事をしていた為、まったく人の接近に気付いていなかったの
だ。

そして勢いよく振り向いて前に出た所為か、俺はその人物と衝突
してバランスを崩すのだった。

向こうもそれと同時に小さく悲鳴を上げた。

「キヤッ」

ぶつかった相手は、可愛らしい顔立ちをした、うら若き女性であ
る。

髪の毛の短いボーイッシュな感じの……。

服装は赤っぽいコートにジーンズといった着こなして、コートの
前ボタンは掛かっていない。

その為、コートは半開きの状態で、下に着ているボーター柄のシ
ヤツが見え隠れしていた。

それらの影響か、パツと見は活発な感じに見える女性であった。

しかし、そんな事を考えていられたのも、つかの間。バランスを崩した俺は、その人物を押し倒すような感じで倒れ込むのであった。

転倒中、衝突による怪我をさせない為に、俺は左手で女性の身体を抱き寄せる。

そして床へと倒れこんだ。

右手から着地した為、ドスンッという感じが右腕に伝わってくる。だが腕の痛みよりも女性の無事が優先だ。

なので、それを確認する為に俺は言うのだった。

「イテテテ。あ、あのすいません……だ、大丈夫ですか？……ん？」
その時であった。

俺の右掌には柔らかくプニプニとした物体が納まっていたのである。

なんだ、この柔らかくて気持ちのいい物体は、と思いながら其処へ視線を向ける。

するとなんと！

それはこの女性の胸であった。

俺の手は、コートの向こう側にあるポードーシャツの膨らみにピタリと吸い付く様に張り付いているのである。

偶然の出来事とはいえ、ラッ……じゃなかった、恐ろしい事である。

俺は謝罪する為に女性の顔へと視線を向ける。

だが其処には、怒りでワナワナと震える女性の顔があったのだった。

これは不味い、と思った俺は急ぎ弁解をする。

「こ、これは不可抗力です。わざとではない。だ、大事な事なのでもう一度言いますよ。断じて、わざとではないです」

だが、必死に言い訳するも、女性は聞く耳持たずといった雰囲気である。

おまけに幽現成る体が有する高精度霊波探知機能が、次第に大き

くなる怒りの霊波動を捉えており、俺自身に警告するのである。

……早く逃げるッ！と。

だがもう既に時遅し。

女性は俺の顔を見るや否や、震える右手で握り拳をつくる。

そして俺の顔面目掛けて思いつきりパンチを放ったのだった。

「このおお！ 変態工口男オオオ！」

女性が放つ渾身の右ストレートが俺の顔面に襲い掛かる。

「ノオオオ」

モロにパンチを貰った俺は、そう叫ぶと共に、痛みと衝撃で後ろの方へ転がった。

そして顔面を両手で押えて悶絶するのである。

女性は俺にパンチを見舞った後、直ぐに立ち上がる。

するとカウンターのいる源さんに向かい、叫ぶように言った。

「出直してきますッ！」と一言。

女性はそれだけ言うと、プンスカと怒りの波動を噴出しながら、物凄く力強い足取りで帰って行くのであった。女性が歩く度に床が揺れているような錯覚を俺は覚える。

そして俺は、床に這い蹲りながら、無言でその女性の後ろ姿を見送るのだった。

女性が去って行ったあとには、シーン……とした静寂が、暫くのあいだ店内を支配する。

そんな中、源さんが重々しく口を開いた。

「……おい、お前さん。生きとるか？」

俺は顔を押しながら弱々しく答える。

「た、多少は……」

すると源さんは、二カツと笑顔になって言うのである。

「どうじゃ、儂の人相占いは？ 占った儂自身が言うのもなんじゃが、中々のもんじゃ。ついでに言うと、儂の人相占いは、当たる確率が高くて有名なんじゃよ。カカカカッ」

占いが目の前での的中したのが嬉しかったのか、源さんは豪快に笑うのである。

そんな源さんを見た俺は、動揺を隠す為に無理して平常を装いながら言っただけだ。

「た、ただの偶然ですよ。良くあることです、こんな事。アハハハ、ハハ」

だがこの時、俺の脳内では……。

【何の根拠も無い、人相占いが当たったくらいで調子に乗りやがって、このクソジジイがああ！】と、怒りと悔しさを込めた怒号を叫んでいたのがあった。

参拾九ノ巻

《参拾九ノ巻》 修験靈導の儀

涼一が天目堂で女難にあっていた、丁度その頃……。

道間兄妹の住むマンションと同じ五階にある住戸のリビングに、土門長老と宗貴、そして詩織がいた。

同じ五階とはいっても、道間兄妹の住戸とはやや離れた場所で、間取りは同じく、3LDKとなっている。

だが、日当たりがあまり良くない所為か、道間兄弟の住戸と比べると、暗い印象の受けるところであった。

しかし、それだけが原因ではなく、昨日、入居したばかりという事も大いに関係しているのである。

何故ならば、3人のいるリビング以外の室内には何も家財道具が無く、ほぼ空っぽの状態だからである。

そして唯一、家財道具があるリビングといっても、中央にコタツと壁際に液晶テレビが一台設置されているだけであり、非常に殺風景な感じとなっているのだった。

またそれ以外を言えば、リビングの片隅には各自が持ってきたであろう、鞆等の荷物がまとめて置かれているだけなのである。

そういった事情もあって、この住戸全体に暗く寂しい雰囲気、若干ではあるが漂っているのであった。

そんな様相をしたリビングにて、今、3人はコタツに入り、その上に置かれたお茶を飲みながら一息いれている最中であった。

だが、3人の着る衣服の違いもあってか、休憩というよりは商談をしているかのように第3者の目には映るだろう。

何故ならば、土門長老と宗貴はスーツ姿で、一方の詩織は白いセ

ーターにデニムジーンズと言った対照的な服装だからである。

そして詩織もそれが気になったのか、2人の服装に目を留めると言うのであった。

「お爺さんにお兄さん。もう道間一将様との挨拶は済んだのですから、着替えてゆっくりしたらどうですか？」

その言葉を聞いた2人は、自分の着るスーツを見回す。すると宗貴が口を開いた。

「そうだな。いつまでもこんな格好してたら堅苦しくてしょうがない。着替えてくるか」

宗貴はそう言って立ち上がる。

そして、片隅に置かれたボストンバッグの一つを手に取り、別室へと移動するのであった。

だが土門長老は『まだええわい』といった感じで、別段、気にする訳でもなく、悠々とコタツの上に置かれたお茶をズズツと啜るのである。

詩織は、そんな土門長老を微笑ましく眺める。

だがその時、詩織の脳裏にある事が過ぎったのだった。

その為、問い掛けるのである。

「そういえば、お爺さん。明後日から合同訓練を始めるそうですけど、予定とかはもう決まっていますのですか？」

「おお、そう言えば、まだ言っていなかったの。ンンと、其処の鞆に日程表が入っておるから、鞆ごと持って来てくれぬか」

土門長老はそう言うのと、詩織の後方に纏めてある鞆の一つを指差した。

「この鞆ですか？」

詩織は土門長老の指先を辿り、自分の一番近くにある黒い革製の鞆を指差す。

「おお、それじゃ。コツチに持って来てくれ」

詩織は、その革製の鞆を手に取り、土門長老に手渡す。

鞆を受け取った土門長老は、その中にゴソゴソと手をいれ、一枚

のA4用紙を取り出したのである。

土門長老は、その紙をコタツの上に置き、詩織に差し出した。「これが日程表じゃ。一応、訓練内容も大まかにではあるが書いてある。それを参考にしてくれるかの」

詩織は眼鏡のフレームを押し上げ、日程表に視線を向ける。

そして訓練日程を順に目で追ってゆくのであった。

すると、一通り確認したところで、詩織は土門長老に言った。

「お爺さん。この日程表を見ると、昼は『座学と実技』で、夜は『合同修被』といった感じに分かれていますけど。夜は分かりますが、昼はどういった学習内容なんですか？」

「ああ、それか。まあ大まかな内容は、鎮守の森における近年の修被傾向と、その対策や改善事項の話。そして現代霊能の講義と実習といったところじゃわい」

「ふうん……」

と、日程表を見ながら詩織はゆるい返事をする。

だが今度は訓練初日の内容に首を傾げる。

そして問い掛けるのであった。

「あれ〜？ お爺さん、此処に小さく【しゅげんれいどう修験霊導の儀】って書いてあるけど……。儀式の立会人として、じよじょう浄将以上の方が、どなた何方かお見えになるのですか？」

「ああ、それか。まあ本来ならそうするのじゃが、今回は儂と道間殿だけで行う。儀式の結果は儂等で処理するつもりじゃ」

土門長老の言葉を聞くなり、詩織は驚きつつも言った。

「エエッ？ でも、規定を破る事になるんじゃないの」

「まあ。じゃが、こういった機会じゃ。折角じゃし、今年度のお前達の儀もまとめてやろうと思つての。それに、詩織達もその方が気楽じゃる。本来ならば、『東京で毎年定期的に行われる儀によって、なるべく、階位称号を受けよ』と鎮守の森は促してあるからの。トヨトヨトヨ」

土門長老はそう言うと豪快に笑った。

「確かにそうですね……」
そう答えつつも、詩織はやや心の中で引つ掛かった感があった。
だが、考えたところでよく分からない。
すると次第にどうでも良くなり、いつもの表情に戻って言うのだ
った。

「でもそこは、お爺さんにお任せしますわ。ウフフ」

その時であった。

「ただいまあ」という声が玄関の方から聞こえてきたのである。

土門長老と詩織は声のする玄関の方角へと視線を向けた。
するとそこからは、朱色のダツフルコートにジーンズといった出
で立ちの明日香が姿を現したのであった。

詩織と土門長老は、そんな明日香の姿を視界に入れると言った。

「あら、お帰り〜明日香。早かったのねえ」

「お、帰ったか。それでどうじゃった？ この間手配したお主の術
具は、此処の天目堂に届いておったかの」

だが明日香は気に入らない事があったのか、ムスツとした表情で
コタツに入る。

そして口を開くのであった。

「もう最悪ッ！」

そんな明日香が気になり、詩織は尋ねる。

「どうしたの、そんなに怒って。何かあったの？」

「何があつたんじゃ？」

続いて土門長老も怪訝な表情になり尋ねる。
すると明日香は口を尖らせて2人に言った。

「さつき、天目堂に行ったら酷い目にあつたのよ」

「……酷い目？」と詩織。

「実はさあ、天目堂のカウンターに若い男が一人、先客で居たんだ
けど。そいつが私にぶつかってきたお陰で、私がそいつと一緒に転

倒しちゃったのよ。で、それだけならイザ知らず、そいつドサクサに紛れて私の胸をモロに触ったのよ！ もう最悪よッ、あのエロ男！」

明日香はそう言つと肩と拳を震わせる。

だが、冷静に話を聞いていた詩織は、のほほんとしたゆるい口調で言うのである。

「でも、その男の人は意図的に触った訳じゃないんじゃないの。多分だけど、その人も転倒した不可抗力で、触れてしまったんじゃないかしら」

詩織の意見を聞いた明日香は、尚も言う。

「それでもよッ。もう思い出しただけでも腹が立つわ。帰り際、あいつにパンチを一発お見舞いしてきたけど、まだ足りないわ……」
そんな憤る明日香の様子を見た土門長老は、豪快に笑いながら言うのだった。

「ヒョヒョヒョヒョ。しかし、明日香とぶつかったその男の人も災難じゃったな。まあ、ぶつかった相手が悪かったっちゆう事じゃのヒョヒョヒョ」

「ちよつとお爺ちゃん。笑い事じゃないよ。たくも……」

明日香は腕を組みながら抗議する。

と、そこで詩織は、明日香を宥めながらも尋ねるのだった。

「まあまあ。ところで明日香、荷物の方は届いてたの？」

「それがさあ。いきなり、そいつとの接触だったもんだから、頭に来て帰ってきちゃった。だからまだ確認してないのよ。お昼を食べたら、もう一度行って来るわ」

と言つた明日香は、後ろに勢い良くゴロンと寝転がる。

そんな明日香を見た土門長老は、気楽な口調で言うのであった。

「まあ、それでええわい。今日明日中に用意が出来ればエエんじやからの」

するとそこで、ゆつたりとした私服に着替えた宗貴がコタツに入ってきたのである。

そして明日香に言うのだった。

「昼からなら、俺が天目堂まで送って行ってやるよ。もう用事も済んだしな」

明日香は宗貴の言葉を聞くと、ムクツと起き上がり、笑顔になつて言うのであった。

「ホントオ？ 助かるわ。じゃお願いね、お兄ちゃん」と。

そして2日後 合同訓練初日

今日は土曜日。そして合同修被訓練の初日でもある。

朝食を終えた俺は、モッズコートにジーンズといった格好に着替えると、合同訓練に向かう為、沙耶香ちゃんのマンションへと歩を進めるのであった。

だが向かっているのは俺一人ではない。瑞希ちゃんも一緒に、である。

丁度、訓練初日が土曜日という事もあって、学校が休みである瑞希ちゃんも安心して参加できるという訳である。

今日の瑞希ちゃんは紺色のコートとジーンズ、そして白いニット帽といったシックな格好をしており、肩には若干ゆとりのあるショルダーバッグをかけていた。

瑞希ちゃん曰く、そのショルダーバッグの中には、ジャージのよくな動きやすい服も入っているようだ。

訓練と聞いて、念のために用意してきたそうである。段取りの良い子だ。

まあそういう俺も修被霊装衣を持つては来ているのだが……。

因みにだが、送還の符術を使って霊刀と共に修被霊装衣は保管してあるので、俺は鞆等の手荷物を持ってきていない。その為、非常に身軽な格好をしているのである。

そして実を言うと、使わなくなった日用品なんかも少し、この術

を使って保管していたりするのである。

ドラえもんの四次元ポケットほどではないが、非常に 便利で重宝する術なのだ。

今後も要らなくなった物を片付けるのに、大活躍する予定なのである。

とまあ、そんな事を考えながら、俺は空に視線を向ける。

天気予報では曇りになっていたが、霧もやのかかった様な空模様なので、パツと見は雨でも降って来そうな感じだ。

だが、降りそうで降らないのが、曇りというものだ。多分、降る事はないだろう。

そう結論すると、俺は視線を元に戻して歩を進める。

と、その時だった。

前もって、瑞希ちゃんに言っておかなければならない事を俺は思い出したのである。

その為、瑞希ちゃんにそれを告げるのだった。

「そう言えば、瑞希ちゃん。一つ言い忘れてた事があるんだ」

「……言い忘れてた事？ なんですか？」

瑞希ちゃんは俺に振り向くと、首を傾げながら聞いてきた。

俺は続ける。

「実はさ、合同訓練をしている間は、鬼一爺さんの事は口に出さな
いで欲しいんだよ」

「えっ、それってどういう事ですか？」

「まあ簡単に言うと、土門長老のお孫さん達は、まだ鬼一爺さんの存在を知らないから、あまり驚かしたくないんだ。それに、鬼一爺さん自身も面倒なのは嫌だって事で、今日は何処かに雲隠れしていないんだよ。そんな訳で、爺さんの事は口に出さないで欲しいんだ。いいかい？」

本来の理由ではないが、この訓練期間中は鬼一爺さんの事を隠しておかないといけないので、嘘八百を俺は並べるのである。

因みに、鬼一爺さんは霊圧をかなり下げた状態で、俺の隣にしっ

かりと居るのだ。何処にも行っではない。

という訳で、俺の説明を聞いた瑞希ちゃんは、ニコリと微笑むと言った。

「分かりました。それじゃ、訓練期間中はお爺さんの事は言わないように、気をつけますね」

「ハハハ、ごめんね。変なお願いでして」

「いいですよ。お爺さんも色々考えることあるでしょうし。エヘ」

瑞希ちゃんはそう言うと、屈託のない笑みを浮かべるのである。

とりあえず、言い忘れてた事を告げた俺は、ホッと一息吐く。

そして前方に視線を向けるのだった。

だがそこで、瑞希ちゃんはやや硬い声色になり、俺に聞いてくるのである。

「日比野さんは、土門長老のお孫さんに会った事あるんですか？」

「いや、ないよ。それが、どうかした？」

なんかさっきと様子が違うなあ。などと思いつつも、俺はそう返事する。

すると瑞希ちゃんは、やや気まずそうな感じで尋ねてくるのであった。

「あ、あの……去年の事なんですけど。土門長老が日比野さんにお孫さんを会わせたいって言ってたじゃないですか……それを思い出して……」

瑞希ちゃんの言葉を聞き、『そういえばそんな事があったなあ』と思いつつ。

そして言った。

「よく覚えてたね、瑞希ちゃん。あの時はさあ、その場凌ぎでああ言ったんだけどね。お見合いつてなんか面倒な感じがするから、実は、あまり乗り気じゃないんだよ。ハハハ」

それを聞いた瑞希ちゃんは、さっきの気まずそうな雰囲気から一

転。

明るい雰囲気になって言うのである。

「エッ日比野さんは、あまり乗り気じゃないんですか？」

「まあね。ただ、乗り気じゃないんだけど、いきなり断るのも悪い気がしたから、無難な受け答えをしたただけだよ。それがどうかしたの？」

俺の問い掛けに、瑞希ちゃんはニコリと微笑む。

すると、声のトーンも幾分か上げて言うのだった。

「エへへ、なんでもないですよ。ただ、思い出したから聞いたただけです」

そんな明るい瑞希ちゃんを見た俺は不思議と和む。

またそんな瑞希ちゃんのお陰か、空は曇っているけれども、気分的には晴れた日の様な気分には俺はなるのであった。

それから5分後。

俺と瑞希ちゃんは、沙耶香ちゃんの住むマンション入口の自動ドア前に辿り着いた。

だが、このマンションはセキュリティシステムがしっかりしているの、このまま突っ立っていても入口の自動ドアは開かない。

訪問者は、訪問先に連絡してロックを解除してもらわないといけないのである。

その為、俺は其処にあるセキュリティシステム機器に、沙耶香ちゃんの住む住戸番号を打ち込むのであった。

入力が終わると、機器のスピーカー部分から、沙耶香ちゃんの声が聞こえてきた。

「はい、道間ですけど。どちら様でしょうか？」

「おはようございます。日比野です」

「アッ、おはようございます、日比野さん。ただ今、ロックを解除しますので、少しお待ち下さい」

と言った後に、自動ドアがウィーンという音と共に開くのである。

俺と瑞希ちゃんは其処を潜るとエレベーターで五階に上がり、沙耶香ちゃんの住む住戸へと向かうのだった。

そして住戸前に来た俺達は、壁にある呼び鈴ボタンを押す。押して暫くするとガチャリと扉が開く。

すると其処からは、暖かそうな白いセーターとデニムのロングスカートの姿の沙耶香ちゃんが現われるのである。

勿論、トレードマークのツインテールは今日も健在だ。

そんな沙耶香ちゃんは、俺達を見ると改めて挨拶をするのだった。「日比野さんに高島さん、おはようございます。外は寒いので、どうぞ、中へお上がり下さい」

「それじゃ、お邪魔します」

「お邪魔しまーす」

そして奥にあるリビングへと案内されるのだった。

リビング中央のコタツには、沙耶香ちゃんのお父さんである一将さんと、他に一樹さんの姿があった。

2人は対照的な格好をしており、一将さんは茶色いスーツ姿で、一樹さんはスリムタイプの黒いカーゴパンツに黒ジャケットというラフな感じの服装だ。

また、二人のいるコタツの上にはコーヒーの入ったカップが3つ置かれており、それと共にコーヒー豆の芳醇な香りがリビング内一杯に漂っているのだった。

俺と瑞希ちゃんは2人に近寄ると、頭を下げた互いに朝の挨拶をする。

そして挨拶を終えると、一将さんが、コタツの空いたところへ座るよう、俺達に手振りを交えて促すのであった。

それに従い、俺達2人は空いたところに並んで座る。

俺達が座ったところで沙耶香ちゃんは、飲み物の確認をするとキッチンの方へと移動した。

そこで一将さんは、俺達に向かい口を開くのだった。

「やあ日比野君に高島さん、久しぶりだね。元気にしてたかい？
2人の様子は沙耶香と一樹からの報告で、大体の事は聞いてはいる
のだが……。どうかね、この業界の感想は？」

「この業界の感想ですか……。そうですね……。まあ知らない事があ
まりに多いので、今は覚えるのに苦労してるところですかね」

と俺が言った後に、瑞希ちゃんも感想を述べる。

「私も日比野さんと同じで、知らない事だらけです。でも、覚える
ように努力してます」

俺達2人の感想を聞いた一将さんは、若干、微笑みながら言う。

「ハハハ、そうだろうね。鎮守の森には色々と複雑な規定や約束事
も多い。まあ今は焦らずに一つ一つ覚えて行きたまえ。それが一番
の近道だよ」

「確かに、そうかも知れませんが」

そんな他愛ない話をした後、俺は今後の予定を確認する為に一将
さんに尋ねるのだった。

「ところで話は変わりますが、今日からの訓練内容とかはもう決
まってるのですか？」

すると一将さんではなく、俺の右斜め前にいる一樹さんが答えた。
「ああ、そう言えば、まだ日程表を渡してなかったね。ちよつと待
つてくれるかい」

と言つて一樹さんは立ち上がる。

そしてリビング壁際の棚から2枚の紙を取りだし、俺と瑞希ちゃ
んに手渡すのであった。

「これが、一応、訓練の日程表かな。其処に書かれている内容は、
かなり大雑把だからアレだけどね」

「ありがとうございます、一樹さん」

「ありがとうございます、道間先生」

お礼を言った俺達は、早速、それに目を向ける。

だが……。見たものの、訳の分からん意味不明な単語が、結構書か
れているのである。

その為、俺は眉間に皺を寄せる。

隣に目を向けると、瑞希ちゃんも難しそうな表情をしていた。まあ当然だろう。

と、その時。

トレイに2つのコーヒークップが載せた沙耶香ちゃんが、丁度、俺達のところにやってきたのである。

それらを俺と瑞希ちゃんの前に差し出すと、沙耶香ちゃんは俺の隣に来て言うのだった。

「日比野さん。難しい表情をしますけど、なにか気がかりな所でもありましたか？」

「ああ、沙耶香ちゃん。知らない単語が、結構書かれているから、少々面食らったんだよ。例えば、この初日に予定されている修験霊導の儀とかね……。初めて聞く言葉だよ」

そう書かれている箇所を俺が指差すと、沙耶香ちゃんは言う。

「それですか。確かに、日比野さんはまだ知らないかも知れませんがね。簡単に言うと、これは修祓者の階位を決める儀式の事です」

修祓者の階位という言葉に俺は反応する。

何故ならば、2日前、天目堂で源さんに教えてもらったばかりだからだ。

またそれと共に、称号の名前も思い出すのである。

そして俺は沙耶香ちゃんに言った。

「その階位って、浄土とか浄佐とかいう称号の事だよな？」

すると、沙耶香ちゃんは少し驚いた表情で言う。

「えっ、日比野さん知ってるんですか？」

「ハハハ、実は2日前に知ったんだ。天目堂へ、この間の荷物を受け取りに行ったとき、源さんに教えてもらったんだよ」

「そうだったのですか。すいません、本来なら私達が教えないといけないのに……」

沙耶香ちゃんは、少し申し訳なさそうに答える。

「謝らなくていいよ、沙耶香ちゃん。まあそれはさて置き、さっき

の話に戻るけど。修験霊導の儀はそういった称号を得る為の儀式って事だね？」

「はい、そうなんです。で、今日は最初にその儀を行うんですよ。場所は、土門長老の知人である神主さんが管理をしている、無人の神社で行うそうです。勿論、人払いの結界を施してですが」

「へえ、神社でやるんだ」

「どうやら、此处で儀式はやらない様である。」

まあ確かに、こんな所でそんな妖しげな儀式をされると、色々支障がでるから仕方ないのかも知れない。

と、そんな事を考えていた丁度その時。

カンコーンといった重厚な鐘のチャイムが、リビングに鳴り響くのであった。

「土門長老達かしら？」

沙耶香ちゃんはそう言つて立ち上がると玄関へと向かった。

沙耶香ちゃんが玄関へ行つて暫くすると、土門長老と思わしき人物の声が小さいながらも聞こえてくる。

そして二言三言、言葉のやり取りをした後に、その人物はこのリビングへと姿を現したのであった。

勿論、その人物とは紛れもなく土門長老である。

今日の土門長老は紺色のスーツ姿で、その上から黒色のロングコートを着るといった出で立ちをしていた。

これは俺の主観だが、そのロングコートのデザインが映画のゴッドファーザーとかに出てきそうなやつだったので、今日の土門長老は『シブい雰囲気漂う、チョイ悪爺さん』といった感じに俺には見えたのである。

そんな土門長老は先ず最初に、一番近い一将さんと一樹さんに頭を下げて挨拶をする。

続いて俺と瑞希ちゃんに朝の挨拶をするのである。

「おお、おはよう日比野君に高島さん。久しぶりじゃの。元気そう

で何よりじゃ」

「おはようございます、土門長老」

俺と瑞希ちゃんハハモリながら、挨拶をした。

息の揃った挨拶に、土門長老はニコツと笑顔になる。

そして言うのだった。

「さて、日比野君。もう聞いておるかもしれんが、今日は参加者の実力を調べる意味も込めて、先ず最初に、修験靈導の儀という儀式を予定をしておる。まあそういう事じゃから、宜しく頼むぞい」

「はい、先程、日程表で知りました。此方こそ宜しく願います。ところで、今日は、土門長老のお孫さん達も来ておられるんですか？」

俺はそう言うのと玄関の方に視線を向ける。

すると土門長老は笑いながら言うのだった。

「ヒョヒョヒョ。儂の孫等は、一足先に神社へ行かせて、人払いの结界を施させておるんじゃ。じゃから、今は儂一人だけじゃよ」

それを聞いた一樹さんは、やや驚きつつも土門長老に問い掛ける。

「えっ、结界を張るのを自分達は手伝わなくてもいいんですか？」

土門長老は、右手を顔前で左右に振ると言う。

「ああ、それは結構じゃ。儂が勝手に決めた場所じゃからの。そして、神社本殿の掃除も昨日の内にしてしもつたから、直ぐに始められるよう段取りしてある。後はもう皆様方に来て頂くだけじゃ」

すると今度は一将さんが、丁寧に頭を下げて礼を述べるのである。

「土門長老、すみませぬな。色々と気を使っていただし」

「いやいや、気にしないで貰いたい」

と言った土門長老は腕時計に視線を向ける。

それから俺達に言った。

「さて、それでは、後30分程しましたら向こうに行きますかな。

恐らく、その頃には孫達も结界を張り終えておる筈じゃからの」

そして俺達は、暫くの談笑の後に、目的地である神社へと移動を始めるのであった

俺達がマンションを出てから、車で30分程の所に、その目的の神社はあった。

其処は高天智市内とはいえ、かなり市街地から離れており、周囲には田園や大きな河川といった自然の営みが確認出来るところである。

だが、それらの中にぼつんと佇んでいるという訳ではなく、神社自体は小さな町の片隅にあり、其処のやや高めの丘に建立されているのであった。

勿論、神社の周囲には、俺達の所属する組織と同名の鎮守の森で囲まれており、神聖な場所である事をやや離れた位置からでも分かる様になっていた。

俺達を乗せた2台の車は、その神社の駐車場へと入って行く。因みに車は、一樹さんと一将さんがそれぞれを運転している。

20台程入りそうな駐車場には、白いランドクルーザーが一台、既に止まっていた。

お孫さん達は一足先に行っていると土門長老が言っていたので、恐らく、この車の持主はお孫さん達のだろう。

そのランドクルーザーの横に一樹さんと一将さんは駐車する。

そして俺達は、持ってきた荷物を車から降ろし、参道の方へと向かって歩を進めるのであった。

参道の入り口には御霊神社ごりょうじんしゃと彫りこまれた石碑があり、この神社の性格を訪れる者に知らせていた。

俺はその先の境内に視線を向ける。

茶色く汚れた雪がまだ少し残っている所為か、やや雑然とした雰囲気はあるものの、参道部分だけは誰かが掃除をしたのか、綺麗になっっていた。

たったそれだけの事ではあるが、人の手が加わっている雰囲気が感じられる神社なのである。

その為、田園風景の中によくぽつんと佇んでいる田舎の神社と違い、忘れ去られたかのような寂しい雰囲気というのはあまり感じないのである。

そんな入口の佇まいを眺めつつ、俺達は参道へと入って行くのだった。

話は変わるが、この神社を管理している神主さんも鎮守の森に所属している者の様である。

土門長老の古くからの友人だそうで、今日は貸切という事だそうだ。

また土門長老の話によると、この神主さんに限った話ではなく、鎮守の森にはこういった神職を持つ人も多いそうである。

その話を聞いた俺は、その人達が一番この業界にマッチする職業に就いてるように思えるのであった。

まあこれは仕方ない。表と裏でやってる事がほぼ同じなのだから。という訳で話を戻す。

参道を真っ直ぐに進んで行くと、石灯笼や鳥居といった神社の定番モニュメントが視界に入ってくる。

モニュメントには所々にシミや苔等が付着しており、それらは、この神社が建てられてからかなりの年月が経過しているのを物語っているのだった。

また、こういった汚れというのは不思議なもので、汚いという感じではなく、厳かな感じとして人々に訴えかけてくるのである。

何故だろう……まあ考えてもわからないので、俺は無視して先に進む。

すると今度は、100段以上ありそうな長い石階段が俺達を待ち受けているのであった。

俺はそれを見ると同時に『うわぁシンドそうな階段……』と心の中で呟いた。

まあ丘に建立されている事を分かった時に、ある程度予想はしていた事だが……。

そんな事を考えつつ、俺はその階段を上り本殿へと向かって進んで行く。

頂に近付いてくると、階段の終わりを示す、左右に配置された狛犬の石像が見えてくる様になる。

狛犬を視界に入れた俺は『ようやく終わりが見えたか……』とホツとすると共に、更に足へ力を込めて階段を上るのであった。

俺はやや息が荒くなりつつも、足早に石階段を上りきる。

そして上り終えたそのすぐ先には、築2、300年は経過しているであろう、御霊神社本殿の姿が目に見え込んだのである。

本殿は、思っていたよりも大きく、やや横長な感じの建物であった。

正面に見える柱や扉、そして木製の階段には、長い間、雨や風、そして日の光に晒されてきたであろう色褪せた痕跡が、遠目からでもハッキリと見てとれる。

またそれと共に、日本古来の神社建築様式の放つ本殿の神聖さと鎮守の森の静けさもあって、この場所一帯は非常に厳かで神々しい空間となっているのであった。

俺はそんな本殿の放つ不思議な光景を暫しの間、立ち止まって眺める。

暫くすると、階段を上り終えた瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんも俺の隣にやってくる。

そして瑞希ちゃんが難しい表情を言うのであった。

「なんか、かなり古そうな神社ですね。夜になると幽霊とか出そうですね」

「ハハハ、確かにそんな感じもするね。ン？ 他の人も着いたようだ」

後ろを確認すると、一樹さんや土門長老も丁度、階段を上り終え

たところだった。

と、その時。

正面にある本殿の扉が、左右に開いたのであった。扉が開くと共に、3人の男女が現われる。

少し離れているので顔までは分らないが、体型や姿勢を見た限りでは若い男女である。

すると若い男の人が此方へとやって来るのだった。

その人は丁寧に頭を下げて俺達に挨拶をする。

「おはようございます、道摩家の皆様方。お待ちしてました」と。

一将さんはニコリと微笑み、その男の人に口を開いた。

「おお、宗貴君。おはよう。朝早くから結界を張ってくれていたそうだね。どうもありがとう。私が皆を代表して礼を言わせて貰うよ」
続いて土門長老が男の人に言う。

「宗貴、詩織と明日香もコツチに呼ぶんじゃ。先ずは皆に挨拶せんと」

土門長老の言葉を聞いた男の人は、後ろにいる2人の女性に、此方へ来るよう手招きをする。

それを見た2人の女性は、此方へとやってくる。

だがその時であった！

俺は我が目を疑ったのである。

何故ならば、2日前の天目堂で、俺に右ストレートを見舞った、あの女性の姿があったからである。

向こうも目を見開いて俺の顔を凝視する。

そして声高に言うのだった。

【あぁッ！ この間、私の胸を触った、変態工口男オオオ！】

この場にいる全員が俺に視線を向ける。

なんか知らんが、凄くその視線が痛い……。

俺は即座に弁解する。

「ちょ、ちょっと待ってよ。あれは……」

だが、そう言いかけた時である。

俺の両隣にいる瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんが、怒りの波動を高めながら、笑顔でゆつくりと振り向いたのであった。

そして2人は、表情に似つかわしくない、低くおどろおどろしい声色で言うのである。

「日比野さん……この方が言っておられるのは、どういう事ですか?」と綺麗にハモリながら……。

俺は言い様の無いプレッシャーを2人から感じると共に、やや怖くなってきた。

おまけに身の危険を感じるし……。

どう考えても、2人は笑顔であるが、確実に怒っている。

これは不味い!

と思った俺は、必死になってその時の状況説明をするのであった。「ちよつ、2人共。お、落ち着いて聴いてよ。こ、これには訳があるんだ」

【へえ……どんな訳ですか!】

と言った2人の霊波動は、更に迫力を増す。

今の2人からは、返答如何によっては唯では済まさない、といった薄ら寒い雰囲気を感じられる。

だが、ここは本当の事を言っただけ誤解を解かないといけない。

そう自分に言い聞かせると、良く聞きとれるように俺はゆつくりと2人に、いや、この場にいる全員に説明を始めるのであった

その詳細な状況説明をする事、約10分。

ジェスチャーを交えながら必死になって説明した甲斐もあり、俺は瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんの怒りを鎮める事に成功をしたのであった。

「なんだ、そういう事だったんですか。良かったあ。私、日比野さんが性犯罪者になったのかと思っちゃいましたよ」

瑞希ちゃんは、いつもの表情に戻るとそう答える。

続いて沙耶香ちゃんも言う。

「事故なら仕方ないですわ。でも、日比野さんも気をつけて下さいよ。考え事をしている時が一番、事故に遭いやすいんですから」

2人の誤解が解けたので俺はホッと一息吐く。

また、他の面々も納得してくれたようで、土門長老に至っては逆に「それは大変じゃったのう。孫の非礼を許して欲しい」と謝罪の言葉を掛けてくれたのであった。

だが土門長老がそうは言っても、当事者であるその女性だけは口を尖らせていた。

そして俺に言ったのである。

「私、まだアナタの事、許した訳じゃないからね」と。

まあこれはしょうがない。不可抗力とはいえ、痴漢にも等しい行為をしてしまったのだから。

後でもう一度、誠心誠意を込めて謝っておこう。いや、しないといけない。

俺はそう考えるのであった。

と、そこで土門長老は皆に言った。

「さて、これで皆が揃ったようじゃな。この後の予定は、本殿内でお互いの自己紹介をした後に、儀式の準備に入る予定じゃ。そういう事じゃから、よろしくの」

それを合図に俺達は、本殿の中へと入ってゆくのであった。

修験霊導の儀

俺達は互いの自己紹介をした後、持ってきた荷物を取り出して、本殿の広間に各種の術具を配置して行く。

感じとしては、番号の書かれたスピーカーの様な物を八つの方角に配置し、其処から伸びたケーブルが制御機械に繋がれるといった構図だ。

早い話がホームシアターでよく見られる7・ichサラウンドシ

ステムの様な感じの配置である。

まあ広間の面積が30畳はあるので、ホームシアターにしては少しデカイかもしれないが……。

とりあえず、そういつた見た目なので『なんかあまり術具っぽくないな』などと思いつながら作業をしていたのだった。瑞希ちゃんも俺と同意見だ。

一樹さんの話によると、そのスピーカーみたいなやつは霊波を感じしたり、逆に微弱な霊波を発したりする装置のようだ。

また、それらの制御機械と思われる物にはノートPCも接続されており、これで得られた計測結果を数値化しているようである。

その為、パツと見は術具というより、最新鋭の科学実験機器といった感じなのである。

因みにその術具の中には、2日前に俺が天目堂へ取りに行ったアタッシュケースもあつたのだった。

どんな役目の物かは分からないが、この修験霊導の儀で用いる術具の様である。

そして色々と戸惑いながらではあつたが、準備も20分程で完了し、今はもう儀式を始める段階に突入しているのであつた。

土門長老に一将さん、そして瑞希ちゃんを除いた俺達6人は、全員が修被霊装衣に着替えると広間に集まつた。

そして儀を始めるにあたって、先ず最初に、一将さんから儀式の概要と順番の説明があつたのだつた。

順番は土門長老のお孫さんである宗貴さんから始まり、最後は俺といった感じである。

説明を聞いた俺は、とりあえず、広間をぐるりと見渡し、見やすい位置を探す。

するとその時、土門長老がやってきて言うのだった。

「日比野君、儂等の近くで見なさい。其処が一番よう分かるからの」

「そうなのですか。では、其処で見させてもらいます」

そう返事した俺は、早速、立会人のいる付近に移動し、其処の床に座り込んだ。

すると、瑞希ちゃんや沙耶香ちゃんも俺の両隣にやってくる。そして沙耶香ちゃんが言うのである。

「日比野さん。修験靈導の儀は十二の靈導儀式があるんですが、その半分である六つをこの室内でやります。その六つの儀式で、靈的技能と靈的感覚といった基礎靈能力を鎮守の森が定める基準を元に立会人が格付けをしていくんです。それを今からやりますから、どういう内容なのかを良く見ておいた方がいいですよ。日比野さんもこれから毎年、受ける事になりますので」

「えっ、これって毎年やるの？」

「はい。鎮守の森に所属する修被者は、必ず受けるよう、義務付けられていますから」

「へえ、なるほどね」

まあある意味、資格に似たようなものだし、それも当たり前か。技量も年月を重ねると上がってくるもんだし。

などと思っていると、最初に始める宗貴さんが広間の中央へと移動したのである。

すると瑞希ちゃんは言う。

「いよいよ、始まるんですね」

「みたいだね」

瑞希ちゃんは興味津々と言った感じだ。

そして俺も、そんな瑞希ちゃんに負けじと、視線を広間中央に向けていたのであった

それから2時間後。

儀式は最後から2番目の沙耶香ちゃんの番となっていた。

沙耶香ちゃんが終われば、次は俺である。

だが、今やっている儀式内容は、凡そ、把握はしたので、最初の方と比べると俺も大分落ち着いている。

その為、余裕を持って沙耶香ちゃんの儀式を見ているのだった。今やっている儀式自体は、それ程難しいものではなく、単純な内容だ。

広間中央に立つて自分の最大霊圧を練ると、周囲に配置された術具から発せられる微弱な霊波を探知する靈感、及び霊視の試験といったところである。

まあそれが全てではないが、大体そんな感じなので、俺は気楽に眺めているのだった。

で、話は変わるが、儀式を見ていて気付いた事が幾つかあった。

それは、宗貴さんや一樹さんの最大霊圧は俺よりも高く、詩織さんや明日香ちゃんも俺と同じか、少し高いという事である。

まあ昔からこの業界に身を置いている人達なので、流石に霊圧は高い。

おまけに呪術大家と呼ばれる名家の方達だから、才能の他にもかなり修練を積んだのだろう。

そう考えると、たった半年で今の霊圧を練れるようになった俺はある意味異常なのである。

その他にも、霊的感覚においては全員が得手不得手ある様であった。

儀式を見て分かった事だが、一樹さんや宗貴さんは、極弱い霊波を探るのが苦手な様である。

まあそんな訳で、色々とその人の基礎能力というものが見れたのだった。

と、その時。

沙耶香ちゃんが、丁度、儀式を終えたのであった。

因みに沙耶香ちゃんの結果だが、最大霊圧は俺よりも低い。

だが、霊的な感知能力はこの中で一番高いようである。

勿論、俺を除いてだが……。

まあ俺の場合は、両方の世界を直に感じているので、こんな計測はほぼ無意味だ。

この機械の発する一番微弱な霊波でも、俺は余裕で感知できる自信があるからである。

ハッキリ言つて霊的感知能力においては、幽現成る者は最強だと思つ。

だつて、実生活における日常的な五感と同じなんだもんよ。

俺にとつては非常に迷惑な話だが……。

フトそんな事を考えていると、儀式を終えた沙耶香ちゃんはもう俺の前に来ていた。

そして沙耶香ちゃんは、笑顔で言つのである。

「日比野さん、それではどうぞ。頑張つてきてください。私はここから見守つてます」

すると瑞希ちゃんも、頑張れツといったジェスチャーを交えながら言つのであつた。

「頑張つてくださいね、日比野さん。瑞希も応援しますからね」

俺は2人の励ましにニコリと微笑み返すと言つた。

「ありがとう、2人共。それじゃあ、行つてくるよ」と。

広間中央に移動した俺は、周囲に視線を向ける。

周囲八方向には、儀式の前に均等な間隔で俺が設置したスピーカの様な術具が配置されている。

また、床に視線を向けると、広間の大部分には霊波遮断の術式が描かれているのだつた。

恐らく、大地に流れる地脈からの微弱な霊波を遮断すると、術者と術具以外の霊力干渉を極力無くす為であろう。

そんな事を考えつつ、俺は試験官の役割をした立会人の一将さんと土門長老に視線を向ける。

そして深く丁寧に一礼をするのである。

2人は俺に礼を返す。

一礼をしたのは、とりあえず、先にやった人達の真似である。多分、儀礼の一つなんだろう。

礼を終えると、一将さんが俺に良く聞こえるよう、ハツキリとした口調で説明を始めるのである。

「それでは、君の基礎靈力を知りたいので、これから六つの靈導儀式を行う。まずは、最大靈導と意念靈導の順で始めてもらえるだろうか」

今、一将さんが言ったのは、分かりやすく言い方を変えると最大靈力と靈力操作である。

まあ車に例えれば、エンジンの最大馬力と車の運転技術といったところだ。

で、最大靈導はさて置き、もう一つの意念靈導であるが。

己の意思で練った靈力をどれだけ自由に操れるか、という靈力操縦技術を確認する為の儀式である。

前の人達はこの儀式の時に、身体の中心部で練り上げた靈力を身体中に移動させていたので、俺も同じ事をやればいい筈だ。

という訳で俺は、「はい」と返事すると、集中する為に目を閉じるのである。

そして、静かに靈力を練り始めるのであった。

靈体の中心部に語り掛ける様に、いつもよりも、ゆっくりと俺は靈圧を上げてゆく。

するといつもと同じく、身体の中心部分から渦巻く靈力の流れが感じられる様になってくる。

其処からは一気に、今の俺に練れる最大の靈力を練り上げるのであった。

靈体中心部で激しい靈力が渦を巻く。

そんな最大靈圧状態が20秒程経過したところで、一将さんは言う。

「……では、次に意念靈導へ」

「はい……」

俺はその言葉通りに高靈圧の靈力を身体の隅々に移動させてゆく。足のつま先から、指の先、そして頭の天辺に至るまで、隅々に。

だがその時、俺の脳裏に前の人達が行った意念靈導の光景が過ぎ
ったのであった。

良く考えてみたら、俺の前にやった人達はこんなに隅々まで靈力
移動をさせてなかったのだ。

その為、俺はこう思ったのだった。

『もしかすると、別に、ここまでする必要ないのかも……』と。

その時であった。

周囲で見えていた人達から小さくではあるが、ざわめきが聞こえて
きたのである。

そして、その中の誰かが、こんな事を口走ったのであった。

【う、嘘ッ！ な、なんなのよアイツ！】と

四拾ノ巻

《四拾ノ巻》 修験靈導の儀 二

練り上げた靈力を体内の隅々まで自在に涼一は移動させる。手足の先から頭頂部に至るまで……。

そんな涼一の意念靈導を凝視する一將と土門長老の2人は、腕を組み、やや険しい表情になりながら「ムウ……」と低く唸った。

すると2人は互いに顔を見合わせ、目で何かを訴えるかのような仕草をする。

それからまた涼一に視線を戻すのであった。

また、それと同じくして周囲にいる者達はざわつき始めたのである。

そして、その中の一人である明日香は、大きな声で思わずこう言ったのだった。

「う、嘘ッ！ な、なんなのよアイツ！」

明日香は我が目を疑った。

何故ならば、涼一の靈力を操る技能が、鎮守の森に所属する修祓者の中においても、そうはいないほどの練達さだからである。

涼一の意念靈導を見た明日香は、隣にいる詩織に言った。

「お姉ちゃん。……アイツ、最大靈力は私達とそんな変わらないけど、靈力を操る腕はピカーだわ……。あそこまで高めた靈力をあれだけスムーズに、そして身体の隅々まで自在に移動させる術者なんて、私の知ってる限りではホンの一握りなのに……。一体、何者なのよ、あのエロ男」

明日香とは対照的に、穏やかな表情の詩織は、ゆるい口調で答える。

「うふふ、そうみたいね。でも明日香、それより気になる事がある。

るの」

「気になる事……。何が？」

明日香は首を傾げながら尋ねる。

詩織は緊張感のない笑みを浮かべながら、明日香に言った。

「これは私の勘なんだけど。日比野さんに対するお爺さんの接し方が、少し変だと思うの。何かあるような気がするのよ」

それを聞くなり明日香は、顎に手を当てて、涼一と土門長老を交互に見る。

だが、特に何も感じない。

その為、詩織に言った。

「そうかなあ……。考え過ぎなんじゃないの」

「ん、考え過ぎかしら」

明日香は、のほほんとした詩織から意外な話を聞いたので、少し可笑しくなる。

そして、笑いつつも言うのである。

「アハハ。お姉ちゃんて、何も考えてないように見えて、色々と考えてるのね」

「明日香、酷いわ。私だって、こう見えても色々と考えてるのよ。ゆったりした口調の所為か、抗議をしてもまるで迫力がない。

その為、明日香はクスクスと小さく笑うのであった。

姉をからかった明日香は、涼一に視線を向ける。

すると丁度、涼一は意念霊導を終えようとしており、またそれと共に、練り上げた霊力を治めている最中なのであった。

俺は練った霊力を静かに下げてゆくと、一度大きく息を吐いた。

そして次の指示を待つのである。

すると一将さんは、「オホンッ」と一回咳を入れてから指示を出すのだった。

「では、次に霊波探導の儀へと移行する」

俺は一将さんに視線を向けると頷く。

それを見た一将さんは、軽く微笑むと言った。

「これから周囲に配置された八つの機器に、微弱な霊波が発せられる筈だ。そして君には、霊波の発している機器の番号を答えてもらう。霊波レベルはある程度の幅で、増減するので頭に入れておいて欲しい。それでは始めよう」

説明を聞いた俺は周囲の機器に意識を向ける。

そして一度、大きく深呼吸をしてから霊波が発せられるのを待つのであった。

暫くすると、俺の右横にある機器からやや弱めの霊波が感じられる様になってきた。

俺はその機器の番号を立会人に告げる。

「五」

すると、五番からは霊波が消え、今度は正面の機器から霊波が発せられる。

俺は番号を言う。

「七」

その後も同じ様に色んな機器から、入れ替わり立ち代わり、霊波が発せられるのだった。

但し、最初は一つの機器からだけであったが、次第に数が増え、色んなパターンの組み合わせで霊波が発せられる様になるのである。

そして俺はその都度、霊波の発する機器の番号を答えてゆくのだ。

こんな風に聴覚テストの様な感じの儀式だが、それらを20回程答えたところで、一将さんはこの儀式の終わりを告げるのである。

「うむ、では次に正邪波探導の儀へと移るが、その前に一つ言っておこう。正邪波探導の儀も基本的には霊波探導の儀と同じである。

だが、今度はかなり微弱な霊波の上、更に正邪混在の霊波が発せられる。君にはその中から正の霊波のみを答えてもらう」

俺は無言でコクリと頷く。

すると一将さんは、言った。

「では、始めよう」

それから暫くすると、またさっきと同じ様に霊波が発せられるのである。

但し、今度はかなり弱い霊波と共に負の霊波が混ざってだが……。だが俺にとっては特に問題ないので、さっきと同じ様に答えてゆくのだった。

「三」

「八」

「二と五」

といった具合に。

まあこんな感じで、この儀も20回程答えると終わりを迎えるのであった。

他の人は10回前後だったのを考えると、何故か知らんが、俺だけやたら答えた回数が多かったような気がするが……。まあいいや。多分、詳細なデータが欲しいんだろう。

そんな風に思いながらも、もう一つの霊体探導の儀へと進んで行くのである。

で、次の霊体探導の儀は読んで字の如く、霊体を探るテストだ。要するに霊視である。

この儀式は、今やった霊波探導の儀と、非常に良く似ており、霊波ではなく擬似霊体が現われる機器の番号を答えるというものである。

因みにこの儀式では、霊波は完全遮断されているので、それを頼りに判断する事は出来ない様になっている。

そしてこれも、霊波探導の儀の後に正邪波探導の儀をやったのと同じく、様式を変えて2回の儀式が行われるという訳である。

そんな面倒な儀式ではあるが、俺的には非常に簡単で、他の人と比べると悩む時間がないので凄く早く終わった。

だがそれらの儀式の最中、一将さんと土門長老が引き攣った笑い

を浮かべ、俺に何か微妙な視線を向けていたので、少し気になるところである……。

気にはなるが、俺はとりあえず、言われたとおりには答えただけだ。そんな訳で俺自身はそんなに深く考えてはおらず、それよりも、これで前半の儀式が終わったという達成感の方が、脳内では勝っていたのであった。

話は変わるが。

先程、前の人達の様子を見ていた時に、「この2つの儀を一度にやってもいいような気がするんだけど」と沙耶香ちゃんに俺は言った。

すると沙耶香ちゃんは、「この2つは似ているようで違う霊能なので、分けて行っているのです」と言っていた。

確かに良く考えてみると、視ると感じるでは日常生活においても全然意味合いが違う。

その為、そりゃそうか、と俺は納得したのであった。

また、それと共に、こும்思ったのである。

この靈的感觉において、俺は皆と少しズレているのかもしれないと。

まあ俺の場合は、そういった事があまりに日常的になり過ぎていたので、そういった区別が曖昧になっていたようだ。

もう少し、一般的な靈的感觉というのを意識しないといけないのかも。などと考える今日この頃なのであった。

という訳で話を戻す。

とりあえず、そんな感じで俺の儀式も一通り終わる。

そしてこれをもって、修験靈導の儀の前半は終了となるのであった。

この後は昼食と昼休みを挟んで、午後から後半の儀式が予定されている。

まあそんな訳で、儀式を終えた俺はフウと一息吐いて肩の力を抜くと、瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんの元へ歩を進めるのであった。

だがその時。

ファイルを片手に持った一将さんが、手招きしながら俺を呼ぶのである。

「日比野君。すまないが、ちょっとコツチに来てもらえるだろうか？」

「あ、はい」

俺は、何だろう？　と思いつつ、一将さんと土門長老の所へと向かった。

2人の前に行くと、一将さんは真剣な表情になり、小声で俺に言うのである。

「3人で話をしたい。別の部屋に行くから、付いて来てくれるかい？」

雰囲気がガラリと変わった一将さんを見た俺は、『今の儀式で何かやらかしたのだろうか……』とやや不安になる。

だが気になるので、俺は首を縦に振り、返事をした。

「別の場所ですか……。はい、分かりました」

「よし、では付いてきてくれ」

と言った一将さんは広間出口へと向かう。

俺もそれに続く。

そして2人と共に広間を出ると、俺は別の部屋へと案内されるのであった。

広間を出た俺達3人は、幅の広い板張りの縁側廊下を進んで行く。暖房器具の置かれた暖かい広間と違い、この廊下は刺すような冷たさが床板と空気から感じられる。

そんな寒い中を暫く進んで行くと、2人は広間からやや離れた部屋に俺を連れて来たのだ。

部屋の入口にはモロ和風な障子戸が取り付けられており、中の様

相が和室である事をその障子戸が物語っていた。

一将さんは、その障子戸に手を掛け、右にスライドする。

そして、壁に取り付けられた電灯のスイッチを入れて明かりを付けるのである。

スイッチが入ると、天井中央に取り付けられた丸い蛍光灯器具が、室内を隅々まで明るく照らしだす。

それと共に部屋の全様が明かになった。

其処は4畳程の小さな部屋で、棚や机といった生活用品等が何一つ置かれていない殺風景な所であった。

また、ストーブやヒーターといった暖房器具もないので、非常に寒い部屋である。

広間から結構離れたところにあるので、もしかすると、神主さんが着替えをする為に使う部屋なのかもしれない。

フトそんな事を考えていると、一将さんは俺が先に入るよう促すのであった。

俺はそれに従い、部屋へ入る。

すると2人は、周囲に人がいないかを念入りに確認してから部屋へ入り、引き戸をそっと閉めるのである。

どうやら、かなり、人に聞かれると不味い話のようだ。

2人は俺の正面に立つと、先ず、一将さんが口を開いた。

「前半の儀式が終わったばかりなのに、すまないね、日比野君」

「いえ、いいですよ。別にそれほど疲れている訳ではないので」

俺がそう返事すると、一将さんは土門長老に一度頷き、手に持ったファイルを開く。

そして、それをパラパラと何ページか捲ったところで、一将さんは重々しい口調で言うのであった。

「日比野君、君の儀式結果なんだが……。非常に不味い事になっているのだよ」

俺はそれを聞くなり『やべえ、何かやらかしてしまったのか!』と心の中で呟く。

だが、何が不味いのかを知りたいので、俺は恐る恐る尋ねるのであった。

「あ、あのお……俺、儀式で失敗でもしたんでしょうか？」と。すると土門長老は、首を左右に振り、言った。

「いんや、何も失敗はしとらぬ。寧ろ、素晴らしい成績じゃ。じやが、問題はそこなのじゃ。儀式結果が良すぎるんじやよ。それが不味いんじや」

「エツ？ それって、どういう……」

俺がそう言い掛けたところで、一将さんがファイルを見ながら言う。

「日比野君。君の儀式結果だが、これは異常だ……。とりあえず、君の最大霊力は、鎮守の森に所属する修祓者の平均値だから、この結果で問題はない。だが、残りの儀式結果が不味いんだよ」

「の、残りの儀式結果……ですか？」と、俺。

一将さんはファイルに目を向けると続ける。

「ああ。分かりやすく説明しよう。先ず、君の意念霊導の結果だが、鎮守の森に所属する修祓者の中でも、恐らく、五本の指に入るくらいの成績だ。そして、霊波探導の儀と霊体探導の儀という四つ儀式結果に限っては、もう既に、鎮守の森にいる修祓者の中でも、君に敵う者はいない状態なのだよ」

土門長老の言ったとおり、成績は凄く良いみたいだ。

だが俺は、いまいち不味さが分からないので、尋ねるのである。

「あのう、それって、結構不味いんですか？」

一将さんは非常に真剣な表情で言った。

「ああ、非常に不味い。この結果をそのまま鎮守の森に報告すれば、恐らく、いや確実に、他の修祓者達も君へ疑念を抱くだろう。それに君の儀式結果は異常なんだ。先ず、君の年齢で、ここまでの霊的技能と霊的感覚が洗練された術者はいないからね。要するに前代未聞ということなんだよ……」

一将さんの説明を聞いた俺は、徐々に事態を理解し始める。

そして、何も考えずに行動をした、浅はかな自分を呪うのであった。

「お、俺、そんな事、考えても見なかつたです……」
俺は動揺しながら、俯き加減にそう呟く。

すると土門長老が、ポンと俺の肩に手を置き、優しく言うのである。

「まあ、そう深刻にならんでもええ。儂は寧ろ、良かったと思ってるんじゃないよ。何故なら、この儀式を儂等だけでやった為に分かった事なんじゃからの。これがもし、通常どおり行われる修験靈導の儀であつたならば、皆が大騒ぎになつてたじゃろうからの。まあ後は、そうならん為の対策を練ればよいだけじゃ。ヒヨヒヨヒヨ」

「そ、そうですか。……ン？」
と、その時であつた。

鬼一爺さんが霊圧を少しあげて、2人の前に姿を現したのである。俺達の顔を順に鬼一爺さんは見ていくと、腕を組みながら言うのだった。

（ふむ。大分、面倒な事になっておるのかの？）

「おお、鬼一法眼様。お久しゅうございます」

「お久しぶりにございます、鬼一法眼様」

2人はそう言うと、丁寧に頭を下げる。

そして土門長老が口を開いた。

「それが鬼一法眼様。実は日比野君の儀式成績があまりに良すぎるので、少し困つていたのですじゃ。この成績をそのまま修被者登録すると、確実に他の者達が疑念を抱きますからの」

鬼一爺さんは俺に目を向ける。

何かを考えているのか、顎に手をやってしばらく俺を見ると、爺さんは言うのである。

（なるほどのう。まあ我も、霊力の扱いに重きを置いて、涼一には教えてきたからの。幽現成る者の天稟もあり、霊力の扱いだけならもう既に十分なもんじゃわい。おまけに、幽世にも同じく存在して

おるもんじゃから、霊を見て感じる力は最早、これ以上ないものを既にもつておるからのう)

それを聞いた土門長老は、腕を組み、深く頷きながら言った。

「まったくですじゃ。今日は、鬼一法眼様が以前仰つておりました、幽現成る者の才をまざまざと見さしてもらいましたわい。まさか、これ程とは……」

すると一将さんも深く頷き、言った。

「私も同感です。まさかこれ程とは……。今の状態でこれなら、この先の成長が予測できませぬな。それ程に凄い霊的素質です」

(フオフオフオ、そんなに驚かんでもええ。幾ら幽現成る者とはいえ、人である以上、自ずと限界は見えてくる。確かに優れた才じゃが、涼一はその分、過酷な目にも遭つておるからの。まあ兎も角じや。涼一に関しては、他の術者の霊能力に少し毛が生えた程度のもんじやとお主等も考えておけばよい。……で、どうするんじや？このままじゃと不味ののじやろう?)

今の鬼一爺さんの言葉を聞いた2人は、互いに顔を見合わせる。

そして笑みを浮かべると、土門長老が言った。

「まあそれについては、捏造結果を登録するつもりですじゃ。そうすれば後は、日比野君にその能力を隠してもらうだけでよいですからの。ヒョヒョヒョ」

俺は申し訳ない気持ちで一杯になり、2人に頭を下げた。

「すいません、土門長老に一将さん。いきなり迷惑をかけてしまつて……」

「いや、気にせんでくれ。さつきも言ったが、寧ろ、良かったと思つてるんじやからの」

と、そこで、一将さんがファイルを見ながら言った。

「ところで日比野君。話は変わるが、この後は一応、実践形式の儀式になる。だが、日比野君と沙耶香以外は五つの儀が免除されるのだよ。つまりその面子は、最後である見極めの儀だけでいい事になつているんだ」

「へっ、それってどういう事ですか？」

今度は、土門長老が言う。

「実は、日比野君。修祓者には位階制度というものがあるんじや。一応、正一位しょういちいから従八位じゆはちいまで十六の位階がある」

なんか知らんが、また訳の分からん単語が出てきた。

その為、俺は眉間に皺を寄せる。

すると、そんな俺を見た土門長老は、スーツの胸ポケットから手帳とボールペン取り出す。

そして取り出した手帳に、今言った位階と階位称号を書き、ゆっくりとした口調で分かりやすく説明してくれるのだった。

「ヒヨヒヨヒヨ、少し困らせてしまった様じゃの。では、簡単に説明しよう。今言った位階じゃが、鎮守の森の規定では正五位から従八位までの八つの位階が浄土の位として割り当てられておるんじやよ。それでの、この位階従六位から上は、六つの実戦儀式の内、五つが免除されるんじや。因みに、家の詩織と明日香は位階従六位と正六位の浄土なんじや。それに、宗貴に至ってはもう位階従三位で、浄佐の階位じゃから、その五つは免除されるんじやよ」

それに続いて一将さんも言う。

「家の一樹も、位階従四位で、浄尉の階位を既に授かっているから免除されるのだよ。沙耶香は年齢も若く、まだまだ未熟な部分もある。そういう訳で、位階はまだ正八位なのだ。だから免除はされんのだよ。ハハハ」

2人の説明で分かった事だが、位階とは第一位から第八位まであり、更にその一つの位を正と従という二つのランクで分けているようだ。

というわけでそれらを全部総合すると十六の位階があるのだ。

因みに、一位は浄衆元帥で二位は浄将、そして三位が浄佐で四位は浄尉。で、五位から八位までが浄土の位階ということだそうだ。

考えてみれば、結構、厳格な階級社会である。

俺は新しく知る事になった事実に、やや驚きつつも言った。

「そ、そうだったのですか、勉強になりました」と。
続けて後半の儀式についても尋ねる。

「……後、因みに、実戦の儀式ってどんな事をやるんですか？」
土門長老は言う。

「実戦の儀式は、修祓の基本となる術具・体術・武具・結界・言霊といった五つの修祓法を実際に行使してもらうんじゃないよ。但し、疑似悪霊に向かつての。要するに実戦の中での腕を見るということじや。そして最後に見極めの霊導儀式という試練を乗り越えて、修験霊導の儀は終了となるのじやよ」

今言った中で、気になる言葉があつた。

その為、俺は問い掛ける。

「土門長老。今、言霊と言われましたが、それは真言術の事ですか？」

「まあそうなのじやが、この言霊の霊導儀式では、皆に同じ言霊を唱えてもらうのじや。ヒフミ神歌という言霊をの」

「ヒフミ神歌？」

俺が首を傾げながらそう言うと、鬼一爺さんが訳のわからん言葉を発し始めるのである。

(ひふみよ いむなや こともちろらねしきる ゆみつわぬ

そをたはくめか うおゑにさりへて のます あせえほれけ)

とりあえず、意味が分からんので聞いてみた。

「……何それ？ 最初の方は、数の数え方に聞こえたけど……」

と。
(これが、ヒフミ神歌じやよ。これは我の時代でも、よく術者達が言霊の修練で唱えておったわい。まあ一応、基本的な言霊の一つじや。急ぎ覚える術でもないから、涼一には教えてないがの)

「へっ、何で？」

(以前、涼一にも音と霊力の話をしたと思うが。このヒフミ神歌はの、言霊の基本となる四十七の音で出来ており、どの音程に霊力が反応するのかを調べてゆく為のものでもあるのじや。涼一の場合は、

私の教えたやり方で、反応する音程が分かったから必要なかったのじゃよ。それと、長い呪文を必要とするわりに、使いどころが難しい術じゃから教えなかったのじゃ。涼一の場合は、幽現成る体の事もあり、確実な手段が必要だったしの。フオフオフオ)

教えなかった理由は分かった。

だが、どうやらこの後、俺はこの術を使わないといけなみたいだ。

その為、どうしても術の内容を知っておかないといけなないのである。

そこで俺は尋ねる。

「鬼一爺さん、教えなかった理由は分かったけど。因みに、ヒフミ神歌ってどんな術なんだ？俺は今からそれを行使しないといけなみたいだし」

すると土門長老が答える。

「日比野君。この術はの、己の高めた霊力を周囲に解き放つ術なんじゃ。つまり、術が成功すれば、術者の直ぐ近くにいる悪霊は一掃できるのじゃよ。まあ術の威力は、言霊の力によって己の霊力をどれだけ奮わせられるかじゃから、術者の腕次第といったところじゃの。それと鬼一法眼様も仰られたが、鎮守の森では、このヒフミ神歌が言霊術の基本となっておる。じゃから、これを唱える事によって、基本的な言霊術の能力を推し量る事にしておるんじゃよ」

「そうなんですか……。でも、自分はこの術を知らないんです。今からじゃ、もう……」

俺は肩を落として土門長老と一将さんを見る。

だがそこで、鬼一爺さんは意外な事を言うのである。

(涼一、お主はもう己の音の程を見つけて出しておる。後はその音で言霊を唱えればよいだけじゃ。その儀式の時は、我がヒフミ神歌を隣で唱えるから、その通りにお主も唱えればよい。のう土門長老、良いじゃろそれで?)

カンニングじゃないか、それ……。

などと俺が思っていると、土門長老は陽気に笑いながら答えるのだ。

「ヒヨヒヨヒヨ、構いませぬぞい。のう道間殿？」

「ハハハ、まあ今回ばかりは、私も目を瞑らせてもらいますよ」

一将さんの反応を見た土門長老は続ける。

「でも日比野君。今年は良いが、来年までには覚えておいてくれの。それにこのヒフミ神歌は、天照大神アマテラスオオミカミが天の岩戸に隠れたとき、天鈿女命メノミコトが岩戸の前で神舞を舞う、その場で謡うたわれたといわれておる歌じゃ。また、ヒフミ祝詞のしととしても一般に知られておる。この業界で、これからやっていくのじゃから、これは知っておかんと。ヒヨヒヨヒヨ」

「は、はい。次は必ず、自分のものにしておきます」

そんな2人のやり取りを見た俺は、少しホツとしつつ、そう返事をした。

また話はこれで終わりという訳ではなく、この後も2人から儀式の内容について細かく教えてもらう事となる。

そして儀式の説明を一通り聞き終えてから、俺は昼食となったのであった。

一方……。

涼一が一将と土門長老らと共に広間から去っていく姿を、瑞希と沙耶香は首を傾げつつも眺めていた。

3人が広間を去った後、沙耶香は父の様子がいつもと違う為、次第にやや不安になり始める。

また、瑞希も一将と土門長老の様子が変だったので、涼一の事がやや気がかりになっているのだった。

と、そんな中。

一樹が瑞希と沙耶香の元へと歩み寄る。

そして、やや離れた所にいる土御門家の3人に、一瞬、目を向けた後、口を開くのであった。

「沙耶香、昨晚の話は高島さんに言ったのか？」

一樹の言葉を聞いた沙耶香は、やや罰の悪そうな顔をする。

そして首を左右に振り、沙耶香は申し訳なさそうに答えた。

「す、すいません、お兄様。まだ言っておりません」

瑞希は2人のやり取りが気になる。

その為、首を傾げつつ、沙耶香に問い掛けた。

「道間さん、昨晚の話って何？」

沙耶香に変わり、一樹が答える。

「高島さん、実は日比野君についての事なんだ。昨晚、父上と土門長老から話があったね。日比野君の素性は一応、父上の古い知人のお弟子さんという事になっている。もし、土御門家の3人に聞かれたらそう答えておいてくれるかい？」

今の説明を聞いた瑞希は、マンションに向かう途中にあった涼一の話の思い出す。

そして『ああ、そういう事か』と深読みして納得すると、笑顔になつて返事をした。

「はい、分かりました。そう答えるようにします」

一樹と沙耶香はそれを聞き、ホツとした表情になる。

と、その時。

後ろから今の話にあった、その土御門家の3人がやって来たのである。

宗貴は一樹に歩み寄ると、口を開いた。

「やあ一樹君、ちょっといいかい？」

早速、お出ましになったか。

そう思いながらも、一樹と沙耶香、そして瑞希は振り向いた。

3人に笑顔を向けると、一樹は爽やかに言う。

「おお、これは皆様方、お疲れ様でした。それにしても、流石は土御門家の方々です。皆様全員が、非常に高い基礎霊能力を持ってお

りますね。八八八」

「いやいや、一樹君と沙耶香さんも非常に優秀な方ですよ。八八八」
宗貴は後頭部を掻きながら、そう言うのと爽やかに笑い返す。

そんな宗貴に、沙耶香も笑顔で言った。

「宗貴さん、ありがとうございます。ですが、私はまだまだ未熟者なので、皆様方を参考にこれからも努力しなくては、と今日は思っただ次第です」

すると、宗貴の後ろにいる明日香が、ニコヤカに言う。

「でも沙耶香ちゃんも靈的才能があるから、すぐに私達の位階までくると思っよ」

「ありがとうございます、明日香さん。その言葉を励みに、頑張ります」

と答えた沙耶香は、明日香に向かい、丁寧に頭を下げる。

そんな感じのやり取りもあつてか、6人の集まるこの空間は、次第に暖かい雰囲気となるのであつた。

話しやすい空気になったところで、宗貴は一樹に問い掛ける。

「ところで、一樹君。日比野君の事なただけどさ、彼は一体何者なんだい？ 靈的感覚についてはどういう結果なのか分からないが、彼の意念靈導は、確実に、鎮守の森でもトップクラスだよ」

一樹は動揺した様子もなく、普通に答える。

「それが実は、私も詳しい事は分からないのです。父の話では、古い知人のお弟子さんらしいのですが……。それに日比野君は、つい最近、道摩家の元で研鑽する様になったので、私も深いところまでは知らないですよ」

「一将さんの古い知人のお弟子さんですか……。なるほど。まあそれは兎も角、彼は凄い靈的才能を持つてるのかもしれないね」

宗貴は顎に手をやり、少し考え込む仕草をする。

そんな宗貴を見た一樹は、話題を変える為に口を開いた。

「ところで、これから昼食になります、今日は私共の方で御弁当をご用意させて頂きました。皆さんも一緒にどうですか？」

宗貴は、詩織と明日香に視線を向ける。

2人は笑顔で頷く。

それを見た宗貴は笑顔になって答えた。

「そうですね、是非、ご一緒させて下さい。色々と親睦を深めるのが本来の目的ですからね。ハハハ」

午後 修験霊導の儀

今の時刻は午後3時半。

空に目を向けると、朝と同じくやや薄暗い曇り空が、この地域一体を覆い尽くしていた。まあ今日はずっとこんな感じだろう。

そして視線を地上に戻すと、自身の立っている石畳に目を向けるのだった。

俺は今、本殿正面の開けた場所にいる。丁度、上ってきた石階段と本殿の間にあるスペースの所である。

ここは本殿と石階段を繋げるように石畳がびっしりと敷かれており、その石畳を構成している一つ一つの石は、大きさも区々（まちまち）である。

その為、石と石の隙間がヒビワレの様に見え、不規則な模様を形成しているのであった。

また、周囲に目を向けると、藁縄を使った霊波遮断の結界が施されており、内外への霊的影響が最小限になるようになっていているのである。

今この場に関係のない第三者が居たならば、その結界を見るなりこう思うだろう。神主さんが建築工事の前などに良く行つ、地鎮祭の様だ、と。

何故ならば、藁縄で四角い結界を張っているので、見た目が祭場のような感じになっているのである。

まあ違いをあげるならば、供え物をする祭壇が無いのと、結界規

模がかなり広いという事くらいである。

そういつた見た目である為、この神社という空間に非常にマッチした違和感の無い光景となっているのであった。

俺はそんな結界の様相を少し眺めると大きく息を吐いた。

今、俺は六つの儀式の内、四つを終えたところだ。

その四つとは、術具・体術・武具・結界を使った儀式の事である。とりあえず、ぎこちないところは若干あったが、それらの儀式はなんとかこなしてきた。

だが、この中で一番不安だったのは、なんといっても体術の儀式である。

内容としては、拳や足に靈力を籠めて擬似悪霊を倒すのであるが、俺は空手の様な徒手空拳としやくうけんの武道なんぞやった事がない。

その為、型もへったくれもない、フラフラと腰の引けた、酷く格好の悪い戦闘になってしまったのである。

まあでも、一応、擬似悪霊は全て殲滅させたのでOKさ、と俺は割り切ってるのであった。

だがこの儀式を終えた時、ギャラリーの一人である明日香ちゃんが、指差して俺を大笑いしていたのが、今でも凄く印象に残っている。

恐らく、そうとう変な戦闘だったのだろう。まあそれ以外にも、個人的な私怨が若干含まれてる気がするが……。

だがしかし！

指差して笑っていたのは明日香ちゃんだけではない。

他の誰が見て無くても、俺はしっかりと見ていたぞ。

鬼一爺さんがこの儀式の最中に（タコじゃ、タコが陸におるわい。カッカッカッカ）と指差しながら、豪快に笑っていたのを……。

おまけに儀式を終えた後、（中々、楽しいタコ踊りじゃったぞい。カッカッカッカ）とワザワザ言いに来やがって！

覚えておけよジジイ！ いつかこの借りは返させてもらうからな。モ口に笑っていたのはこの二人だが、瑞希ちゃんや沙耶香ちゃん

も必死に笑いを堪えている感じだったので、俺は何気にちよつとシヨックなのである。

そして、そんなギャラリーの様子を見た俺は『仕方ねえだろ！ やった事がねえんだから！』と、叫びたい気分になったのであった。まあそんな訳で、俺にとって体術の霊導儀式は、ほろ苦い儀式となった訳である。

フンツ……まあいいさ、終わりよければ全てヨシだ。

話は変わるが、明日香ちゃんには昼食を食べた後、一応、謝っておいた。

俺の平身低頭な謝罪もあって、とりあえず、明日香ちゃんは許してくれたのである。

でも、許してくれたのは、土門長老が俺と明日香ちゃんの間に入ってくれたからだ。

俺一人なら、まだ和解できていないだろう。とりあえず、これについては、ホツとしているところである。ありがとう、土門長老。

そして謝罪を終えると、宗貴さんや詩織さんもその中に加わり、色々俺の素性を聞かれる事になるのであった。

まあそれについては裏設定があるので、俺はそうように受け答えしておいた。

で、その裏設定であるが、一将さんの古い知人である法眼さんという人の弟子という設定になってるのである。

裏設定というよりは、言葉が足りない設定といった感じだが、俺はこの訓練期間中はそういう事になっているのである。

因みにこれは、さつき別室に呼ばれた時に知った。

土門長老は、まさかこんなに早く俺の異質さが露呈するとは思っていなかったようで、儀式を終えた後すぐ別室に移動したのは、それを知らせる意味もあったようだ。

という訳で話を戻す。

午後1時過ぎから始まった修験霊導の儀は、前半と同じ順番で、儀式を全て終えた他の面子は余裕綽々の表情で、俺の儀式に目を向けていた。

お陰で、俺は大注目されているのである。まあ俺がオオトリになつてしまったので、この状況は仕方がない。

そんなギャラリーの様子にも目を向けた後、俺はこれから始まる言霊の霊導儀式に意識を向けるのである。

儀式自体は、言霊を唱えて俺の周囲にいる悪霊を殲滅させるのであるが、俺の場合は言霊を覚えてないので鬼一爺さん頼みである。

その為、少しドキドキしているのであった。

因みに、これらの儀式に現われる擬似悪霊は、天目堂が開発した装置によつて作り出されている。その為、実際の悪霊と違い、少し変わった負の霊波を発しているのである。

そしてこの機械、実は俺が天目堂へ受け取りにいった、あのアタツシユケースの中身だったのだ。

午前中の儀式においても、霊波を送つたり、擬似霊体を発生させたりしていたのは、この機械だそうである。

その説明を一将さんから聞いた時『悪霊を作り出すとは、ある意味、恐ろしい機械だ』と心の中で俺は呟いた。

またそれと共に、現代科学と現代霊術の行く末も、すこし怖くなつてきたのであった。

でも俺がそんなこと気にしても仕方ないので、とりあえず、今は儀式に集中だ。

俺は心を落ち着かせると、正面にいる立会人へ視線を向ける。

すると立会人の2人は一度頷き、一将さんが悪霊を発生させる機器に手を伸ばすのであった。

午後からは土門長老と一将さんも修被霊装衣に身を包んでいた。

しかも、昼の修被霊装衣である。

因みに、昼の修被霊装衣は、ほぼ、神主さんが良く着ている神官服と同じだ。要するに狩衣である。

二人の着る修祓霊装衣は、白と紺の狩衣なので妙に明暗のくつきりとした服装であった。

マジで映画の陰陽師に出てきそうな格好である。

そんな陰陽師風の一将さんは機器を少しいじった後、俺に向かい口を開く。

「では、これより言霊の霊導儀式を行う。開始の合図と共に、結界の四隅に置かれた機器から擬似悪霊が生成されて現われ、それらは君に襲い掛かる。それを君の言霊術で退けて貰いたい」

説明を聞いた俺は、首を縦に振る。

一将さんも頷き返す。

そして言った。

「では始める」と。

一将さんの言葉を皮切りに、機器から負の霊波が感じられる様になっってくる。

どうやら、擬似悪霊が生成され始めたようだ。

俺は霊力を練り始めると共に、隣にいる鬼一爺さんに視線を向けた。

すると爺さんは俺にだけ聞こえる声で言うのである。

（さて、涼一。悪霊があれから出てくる前に、ある程度、ヒフミ神歌を唱えておかねば。では、いくぞ）

鬼一爺さんはそう言うのと、ヒフミ神歌をゆっくりと唱え始めるのだった。

そして俺は、鬼一爺さんの後を追うように、唱えてゆくのである。

（ひふみよ）「ひふみよ」

（いむなや）「いむなや」

（こともちろらね）「こともちろらね」

（しきる）「しきる」

（ゆめつわぬ）「ゆめつわぬ」

（そをたはくめか）「そをたはくめか」

（うおゑにさりへて）「うおゑにさりへて」

(のます)「のます」

鬼一爺さんはここで言霊を止める。

何故ならば、悪霊が俺の周囲を囲んだところで、最後の部分を唱え、このヒフミ神歌を完成させる為である。

そんな訳で俺は、擬似悪霊が出てくる四隅の機器を注視するのであった。

悪霊が出現するのを待ちながら、俺はこのヒフミ神歌について考えていた。

これを唱えてみて分かったことだが。唱えてゆくにしたがい、高めた霊力が内側から膨張してゆくような感覚を俺は感じるのである。例えるならば、空気を送り込む風船といった感じである。

恐らくこの術は、ヒフミ神歌という空気を送り込む事で、俺の練り上げた霊力という名の風船を破裂させ、体外に放出するのが目的なのである。

そして、この後に唱える言霊が最後の一押し役目をするのだらう。

俺はそう考えていたのであった。

と、その時。

四隅の機器から勢い良く複数の擬似悪霊が現われた。

悪霊達は俺を囲むように一斉に飛び掛ってくる。

鬼一爺さんは悪霊と俺との間合いを見る。

そして俺と悪霊の距離が5m近くなったところで、最後の言霊を唱えるのだった。

その後に、俺も続く。

(あせえほれけ)「あせえほれけ」

ヒフミ神歌が完成すると共に、俺の中で『ドン!』と何か弾けた様な感覚が現われる。

それと共に、俺を中心として高めた霊力が白い光を放ち、衝撃波の様に飛び出したのだった。

霊力の衝撃波は、周囲の擬似悪霊を飲み込みながら消滅させてゆ

く。

そしてあつという間に、襲い掛かってきた擬似悪霊を一掃したのである。

沙耶香ちゃんより、霊力が勢い良く飛び出したので、俺も少しビツクリしたが……。

因みに、前にやった沙耶香ちゃんは悪霊を完全に消滅させるのに、この言霊を2回唱えていたので、俺のは上手くいった方なのかもしれない。

まあそれは兎も角だ。

こう言つと凄い術の様に聞こえるかもしれないが、同時にこの術の弱点も俺は何となく分かったのである。

その弱点であるが、このヒフミ神歌は、折角高めた霊力を一気に散らしてしまうので、強い負の力を持つ悪霊には、あまり効果がなないように俺は感じたのである。

鬼一爺さんがこれを俺に教えなかったのは、恐らく、こういった非効率な部分があるからだろう。

術を組み立てるプロセスに見合う対価が少ないので、鬼一爺さんは教えなかったのだ。あくまでも、多分だが……。

そんな事を考えつつ、俺はとりあえず、大きく息を吐くと立会人に目を向ける。

「ン？」

だが、土門長老と一将さんは、目を大きく見開いた驚きの表情で俺を見ているのであった。

その為、何を驚いているんだろう？ と少し気になった。

ついでに周囲のギャラーにも目を向ける。すると、皆が同様に驚いた表情をしているのである。

それを見た俺は、こう思ったのだった。『また、何かやらかしたのだろうか……』と。

だが、考えても分からない。今の術にしても、沙耶香ちゃんより、勢い良く弾けたくらいである。

また不味い事になったのだろうか……。皆の表情を見ると、正直、不安は拭えない。

しかし、擬似悪霊を全て消滅させても、今はまだ言霊の霊導儀式の最中だ。

その為、俺は意識を儀式に戻すと、正面の立会人席にいる2人に向かい、丁寧に終わりの一礼をするのである。

そして面を上げる。

すると俺の視界には、やや引き攣った笑いを浮かべた土門長老と一将さんの姿が入ってきたのであった。

四拾壹ノ巻

《四拾壹ノ巻》 修験靈導の儀 三

言霊で擬似悪霊の殲滅を終えた俺は、立会人席の2人に向かい丁寧に頭を下げる。

そして顔を上げ、2人に再度視線を向けるのであった。

すると土門長老と一将さんの2人は、口元を引き攣らせて不自然な作り笑いを浮かべていた。

俺は、そんな2人の表情を見た瞬間、午前中にあつた前半儀式の内容を思い返す。

またそれと同時に、『今の儀式で何か問題があつたのかもしれない。やばい事にならなければ良いが……』などと考えるのである。

まあという訳で、俺自身も2人にすられ不自然な愛想笑いを浮かべてしまつたのであつた。

そんな中、一将さんが口を開いた。

「う、うむ。それでは、これにて言霊靈導の儀を終える。日比野君は引き続き、見極めの儀に移るので、必要な術具や武具を用意して、そのまま待機していてくれたまえ」

「はい、分かりました」

返事をした俺は、結界の外に置いてある霊刀や、小物術具を収納した術具袋を取りに向かう。

それらを装備した俺は、また結界中央へと行き、儀式が始まるのを静かに待つのであつた。

俺がそうやって暫く待っていると、一将さんが黒い巾着タイプの術具袋を手に持って、この結界の中へと入ってきた。

結界内に入った一将さんは、そのまま俺の正面にくると儀式前の一礼をする。

俺も礼を返す。

そして一将さんは言うのである。

「ではこれより、最後の儀である見極めの儀へと入る。だがその前に、今一度、最終確認をしよう。日比野君の準備はもう万全かな？」
念の為、再度、腰の術具入れと霊刀を確認すると俺は言った。

「はい、宜しくお願い致します」

それから俺は丁寧に頭を下げるのである。

「そうか。ならば始めよう」

一将さんはそう言うと、結界の後ろの方へ下がる。

そして結界の端辺りまで下がると、術具袋から三個の霊石と、奇妙な形をした像や丸い玉の様な小さな術具を十個ほど取り出したのである。

話は変わるが、沙耶香ちゃんの時是一个の霊石だった。

また、その他を言うと、明日香ちゃんと詩織さんは三個。そして一樹さんが五个で、宗孝さんが六個の霊石だった。

霊石の数を見る限りだと、俺は詩織さんや明日香ちゃんと同じ数の様である。

恐らく、この霊石の数は、今までの儀式内容を見て算出した数なのだろう。

フトそんな事を考えていると、一将さんは十個の術具を自分の周囲の地面に配置していた。その後、三個の霊石を足元に並べるのである。

術の準備を終えた一将さんは、目を閉じて静かに霊力を練り始める。

これは勿論、今から行われる見極めの儀の為だ。

そして、この最後の儀式である見極めの儀だけは、浄将以上の称号を持った修祓者が行使する【布瑠ふるの言こと】と呼ばれる言霊の術と対峙しなければならぬのである。

他の皆のも見てきたので、俺はもう何が起こるのかは分かっている。

俺は一将さんの術に対抗する為、背中に背負う霊刀を鞘から抜いた。

だが、まだ構えはとらない。

霊圧を上げる一将さんを注視しながら、俺は霊刀を右手に持つと、空いた左手には火霊珠を忍ばせる。

と、その時。

一将さんはゆっくりと言霊を唱え始めたのである。

《 ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆら、ゆら、と、ふるべ 》

途中まではヒフミ神歌と同じ術式の言霊が、一将さんの口から紡がれる。

そしてリズムを変えた後半の言霊を唱え終えた、その時！

一将さんの両掌から、青白い霊力の迸りはたしが走ったのである。

その霊力は周囲に配置された術具へと放たれる。

霊力を受けた術具は宙に浮き上がり、一将さんの周囲を円を描きながら回り始めた。

すると、その一つ一つの術具からは、霊力の糸と思われるものが発生し、地面に置かれた三つの霊石に向かい伸びてゆくのである。

霊力の糸が霊石に絡みつき白く発光する。それと共に、霊石からは青白い煙が立ちのぼるのであった。

やがて煙は、人や動物の形へと変貌してゆく。

今見た限りでは、どうやら人と犬と鳥の霊体のようだ。

それらが完全に霊体として形成されると、一将さんの前に整列するような形で俺に対峙するのであった。

そう……。この【布瑠ふるの言こと】という術は、操霊術なのである。

俺はこれから、この三体の霊を消滅させないといけないのだ。

そしてこれが、立会人による最後の見極めなのである。

この見極めの儀で俺が使える術は、勿論、現代霊術のみ。
鬼一爺さんから教わった、使い慣れた古の霊術はこの場では使えない。

一樹さんや宗貴さんの儀式を見て思った事だが、障壁の符術や朱雀の法が使えないのは痛いところである。

おまけに、一将さんの意思によって操られる霊体なので、今までの擬似悪霊の様に簡単にはいかない。

一番の難点は、悪霊ではないので、破邪の符の様な霊力そのものをぶつける攻撃は効きが悪いというところである。

その為、俺は色々と考えた結果、一樹さんのやり方を参考にする事にした。

俺と同じく、霊刀を使うスタイルの一樹さんは、火霊珠といった術具を使って霊体を燃焼させ、一時的に霊体の動きを弱めていた。

それから、一将さんの術具から伸びる霊力の糸を断ち切って、霊体を消滅させていたのである。

今のところ、俺が取れる方法はこれしか無い。が、この方法は刀の扱いに長けている者のやり方であって、俺のように未熟な剣術では、何処まで通用するかは未知数である。

そういった事もあり、俺はこの見極めの儀式に対して、かなり頭を悩ませているのであった。

だが、明日香ちゃんや詩織さんも同じ数の霊体を相手しているの
で、俺も弱音を吐くわけにはいかない。

そう自分に言い聞かせて、俺は今、テンションを上げているのである。

因みに、こんな事を言うと言いつつ訳がましいが、明日香ちゃんと詩織さんの2人は、俺と違って近接武器ではないので、間合いを遠く
取れる分、やりやすかったかもしれない。

……まあそれは兎も角。

俺は気を引き締めると、対峙する霊体を見据えながら、己の霊力を高めるのであった。

戦闘準備が万全になったところで、一将さんは一言だけ言った。「参る！」と。

その言葉を合図に、宙を舞う三体の霊が俺に目掛けて襲い掛かってきた。

俺は迫り来る霊体を注視しながら、霊力を刀に籠める。

と、その時。

先ず、犬の霊体が右斜め前方から素早く、俺に飛び掛ってきたのだ。

その霊体に視線を向けながら、左手に持つ火霊珠に霊力を籠め、俺は力を解放する。

火霊珠が、俺の手の中で火の玉に変化する。

そして俺は犬の霊体に向かい、火霊珠を投げつけたのだった。

霊体は炎に包まれる。

霊体に供給される霊力に干渉して燃える為、一時的に霊体の動きが鈍くなる。

だがこの霊体は、一将さんの周囲を回っている術具から力を送られ操られている。

その為、霊体そのものを攻撃しても一時的な効果しかない。

霊体を消し去るには、十個の術具から伸びる霊力の糸を断ち切らねばならないのだ。

俺は刀を中段に構えると、燃え盛る霊体に向かい刀を横に凧いだ。その瞬間。

霊体の裂け目から、霊力が供給される糸が俺の視界に入る。

俺は更に踏み込むと刃を下に返し、霊力の糸目掛けて袈裟に斬り下ろしたのである。

すると霊体は跡形も無く消え去るのだった。

だが安心する訳にはいかない。まだ二体いる。

しかも、俺のすぐ傍に二体目の人型の霊体は迫ってきていた。

その為、俺は慌てて中段に構える。

だがその時だった！

今度は鷹のような猛禽類の霊体が、左の上空から凄いい勢いで急降下してきたのである。

予想外の所からの攻撃だったので、俺は地面を横に転がりながら、それを避ける。

だがしかし！

立ち上がるうと片膝を付いたところで、今度は人型の霊体が俺のすぐ傍まで来ていた。

そして俺の右側から飛び掛るように襲い掛かってきたのだ。

駄目だッ、この間合いじゃ刀も振れないし、避ける事もできないッ。

そう判断した俺は、刀の柄から両手を離すと、空いた両掌に急いで霊力を籠める。

俺は両掌が青白い霊光に包まれると、迫り来る人型の霊体を吹き飛ばすかのごとく、両掌を突き出したのであった。

触れた瞬間、ドンッ！ という衝撃が手に伝わってきた。

人型の霊体は、俺の霊力が籠もった掌に押されて3mほど後ろへ吹っ飛ぶ。

その隙に俺は足元に転がる刀を拾うと、八相に構え、吹っ飛んだ霊体へ向かい大きく踏み込むのである。

そして、この霊刀の間合いになったところで、そのまま袈裟に斬り下ろすのであった。

刀の軌道どおりに、人型の霊体は肩口から斜めに裂ける。

俺はそこで更に踏み込むと、霊体の背中から伸びる霊力の糸を断ち切るのである。

その瞬間、人型の霊体は消滅する。

残りは後一体……。

そう心の中で呟くと、俺は中段に構えて上空を舞う、鷹の霊体に視線を向けるのである。

鷹の霊体は上空を大きく旋回をすると、急降下して俺の右側から襲い掛かってきた。

この方向から来たのは、恐らく、俺が右利きだからだろう。
こう来られると、刀は振りにくい。

おまけにスピードが速いので、今の俺の剣術では刀を振るったところ
で、斬れるかどうか分からない。

俺はとりあえず、あの動きを迎撃できる自信がないので、構えを
解き、かわす事に専念した。

鷹の霊体は失速する事無く、俺を目掛けて突っ込んでくる。

その鷹の突進を横に大きく飛んで避けると、俺は霊体を注視しな
がら対応策を練るのである。

参ったな……。

俺の剣の腕では、あの動きを捉えるのは厳しいな。何かいい方法
無いだろうか……。

ンンツ？ ……でも、ちょっと待てよ。

良く考えたら、速いのは突進してくる動きだけで、霊体から伸び
ている霊力の系は何も変わらんじゃないか。

という事は……なんだ簡単じゃないか。よおし！

上空に目を向けると、鷹は先程と同じく旋回するところであつた。
すると、また同じ様な軌道を描き、俺の右側から急降下してきた
のである。

俺は半身になると、刃を斜め上に向けて下段に構える。

そして鷹の突進を待つのだ。

俺は迫り来る鷹の霊体をジッと見据えながら、避けるタイミング
を慎重に見計る。

何故ならば、今度はさっきの様に大きく横に飛んで避けるのでは
なく、刀の間合いを考慮して避けなければいけないからだ。

だが、霊体の突進スピードが速い為、近づくにつれて恐怖心に似
たようなものが湧いてくる。

それを必死に意志の力で抑え込み、俺は静かにジッと待つのであ

る。

そして霊体が4m近くになった、丁度その時！

俺は構えをそのままに、後方に一步、素早く下がった。

また、それと共に左膝を地に着ける姿勢になる。

そして俺の真正面を鷹が横に通り返ぎた、その一瞬。

鷹の尾に伸びる霊力の糸に向かい、刀を右手だけで素早く斬り上げたのである。

糸が断たれると共に鷹の霊体も消滅する。

俺は、それを確認すると共にフウと一息吐くのであった。

するとそこで、布溜ふるの言ことを行使していた一将さんが、大きな声で言った。

「それまでツ！」と。

その言葉を聞いた俺は、ゆっくりと左膝を伸ばして立ち上がり、背中の鞘に刀を仕舞う。

それから結界中央へと向かった。

一将さんも同じく結界中央へと来る。

俺達2人は其処で互いに向かい合うと、儀式終了の一礼をする。

そしてこの瞬間、俺の修験霊導の儀は全て終了した事になるのであった。

礼を終えたところで、土門長老は周囲にいる者達に向かって言った。

「さて、それではこれにて、修験霊導の儀は全て終わりとなる。各々は、結界の撤去と機器の片付けを行ってくれ。それが終わり次第、本殿の広間に集合じゃ」

【はい、分かりました】

土門長老の言葉に皆が頷き、返事をする、周囲にいた者達は早速、結界や術具機械の撤去作業に取り掛かる。

俺もその仲間に加わらねば……。

と思つて足が向いたところで、一将さんは俺に言うのである。

「日比野君、ちょっと待ってくれ。少し話がある」と。
俺は『何だろっ？』と思いつつも、返事をした。

「えっ、あ、はい……」

「またで悪いのだが、土門長老と3人で話をしたいんだ。付いて来てほしい」

それだけ言うと、一将さんは本殿へと向かって歩き出した。

言われた通り、俺もそれに続く。

その途中、土門長老も一将さんと合流し、俺達3人だけが先に本殿へと入って行くのであった。

本殿に入った俺は、前を歩く2人の後を付いて行く。

すると昼食前に案内された部屋へと辿り着いた。

一将さんと土門長老は昼食前と同じ様に、俺を先に部屋へ入れると、周囲を念入りに確認してから部屋へ入ってきた。

そして障子戸を完全に閉めたところで、先ず、一将さんが口を開くのである。

「日比野君、先ずはお疲れ様」

「あ、どうも、ありがとうございます。御2人も、お疲れ様でした」とりあえずそう答えた俺は、そこで言霊の儀式を終えた時の2人の表情を思い出す。

それと共に、連れて来られた理由はそれか？ と考えるのである。今度は土門長老が口を開いた。

「日比野君、鬼一法眼様はおられるかね？」

「はい、俺の隣に居ま……ん？」
と、そこで、鬼一爺さんが少し霊圧を上げて2人に姿を現したのである。

鬼一爺さんは、早速、土門長老に口を開いた。

（なんじゃ土門長老。なにか聞きたい事でもあるのかの？）

「おお、鬼一法眼様。突然、お呼びして申し訳ありません」

と言うと、2人は丁寧に頭を下げた。

頭を上げると土門長老は続ける。

「実は、日比野君の言霊術についてなんですじゃ。……あれは一体どうやったのですか？」

(……どう、とな？ 訳が分からぬのじゃが？)

鬼一爺さんは、首を傾げながら逆に聞き返した。

土門長老は、一呼吸、間を置いてから話し始める。

「……日比野君は、ヒフミ神歌を覚えてない。そして昼の言動を見た感じじゃと、恐らく、初めて使う術の筈。にも拘らず、あれだけの術へと完成させました。因みに、あのヒフミ神歌……普通の者ならば、道間殿の娘さんくらいのもんですじゃ。日比野君ほどの威を秘めたヒフミ神歌を唱えられるのは、鎮守の森でも十数名ほど……。ですので、その理由が知りたいのです」

新しく知った事実には、俺と鬼一爺さんは互いに顔を見合す。

だが鬼一爺さんは、少し困った表情をするのである。

何かあるのだろうか……。

俺がそう考えていると、鬼一爺さんは渋々ながらも話し始めるのであった。

(土門長老。先程、この部屋に来たときも言ったが、涼一には我の教えた方法で己の音を探してもらった。それが関係しておるのう。

言霊や真言の術というものは、勿論、高い霊圧を練れる事も必要じゃが、その他にも己に合った音程で唱えねば、真の力を発揮する事は出来ぬからの)

「や、やはりそうでしたか」

鬼一爺さんの話を聞いた土門長老は、そう答えると納得した表情で大きく頷く。

そして一将さんに視線を向けるのである。

すると今度は一将さんが口を開いた。

「それならば、あの威力も納得できます。実は、我等が所蔵する古いにしえの書物の中に、失われた秘術を使えた祖先は、広く世に知られるどんな術であれ、他の術者達よりも抜きん出ているという記述があり

ました。要するに、一般的な術そのものの完成度も高かったという事なのでしよう。今の鬼一法眼様の話とそれを照らし合わせれば、日比野君のヒフミ神歌があそこまでの威を放ったのにも頷けますからな」

一将さんの言葉を聞いた俺は、鬼一爺さんに目を向ける。

鬼一爺さんは目を閉じて腕を組み、静かに頷いていた。

どうやら、今言った一将さんの内容が正解のようだ。

しかし、これでまた新たに、気をつけねばならない事が増えたようだ。それと共に俺は溜息が出る。

とりあえず、俺は今の内容を整理すると、2人に尋ねるのである。「という事は、これから言霊系の霊術を使うときは、威力を調節して使わなければいけない……という事ですよな？」

だが、一将さんと土門長老は、互いに顔を見合わせ微妙な表情をする。

2人の表情を見た感じでは、色々と悩んでいる様子だ。俺の言ったような単純な事でもないのだろうか……。

暫くそんな感じで2人は考え込むと土門長老が先に口を開いた。

「日比野君の儀式は孫達も見えておった。じゃから、今からそんな事をする、孫達も不審に思っじやろう。とりあえず、訓練期間中は気にせんでもよい。問題はその後じゃな……。まあよい、とりあえず、これは後で考えようかの」

今の言葉を聞き、俺の中に、ある不安が残った。

その為、土門長老に俺は問い掛けるのである。

「あ、あの、土門長老。……皆に、この事を聞かれたら、どう答えしておくといいですか？」

すると土門長老は天井を見上げて暫く考える。

10秒ほどそうやって考えたところで、俺に視線を戻すと言った。「そうじゃのう。とりあえず、この事について聞かれたら、『霊力や言霊を操る才能がある、と立会人の2人が言っていた』とでも答えておきなさい。多少の疑念は残るかもしれんが、そう言っけば、

「一応、納得はするじやろう。のう道間殿？」

話をふられた一将さんは土門長老に軽く頷く。

そして俺に言った。

「日比野君。とりあえず、訓練中はそう答えておきなさい。私達がそう言っていたと言え、一応、大丈夫だろう。それに、日比野君一人だけで下手な嘘をつく、余計に怪しまれるからね」

「は、はい、分かりました。そう答えるようにします」

俺は今の話を聞き、気が少し楽になった。

またそれと共に、2人に迷惑かけてばかりだな、という罪悪感も湧いてくるのである。

その為、俺は2人に深く頭を下げる事にしたのだった。

「すみません、一将さんに土門長老。色々にご迷惑をかけてしまい

……」

「なあに、そう気にせんでもええ。元はといえば、儂等が君を巻き込んでしまったのが原因じゃからの。ヒョヒョヒョ」

土門長老は俺に気を使ってか、優しい口調でそう言うと陽気に笑うのである。

そんな土門長老を見た俺は、不思議と自然に笑顔になる。

するとそれに続き、一将さんも明るい口調で言うのだった。

「ハハハ、日比野君。君の事に関しては、我々に任せておきなさい。秘密を知った以上、我々も君を守っていかないといけないからね」

2人には頭が下がrippばなしである。

今の俺には、鬼一爺さんの次に頼もしい人達なので、こればかりは仕方がない。

そんな訳で、俺は再度、深く頭を下げるのである。

と、そこで一将さんがファイルを開き、俺に言う。

「ところで、日比野君。君の儀式結果だが、一応、位階 従六位の浄土として鎮守の森には登録しておくつもりだ」

「えっ！ い、いきなり、そんな高めの位階からですか？」

自分が思っていたのよりも儀式結果が良かったので、俺は驚くと

共に思わず聞き返した。

因みに俺は、最下位の従八位だと思っていたのである。理由は、ぼつと出の若造だからだ。

そんな俺を見た土門長老は言う。

「まあ通常なら修被実績といったものも必要なんじゃが、そこは儂と道間殿でなんとかするつもりじゃ」

「そ、そうなのですか。また、御2人に御迷惑をかけてしまうのですね……」

俺はまた申し訳ない気持ちになる。

「ヒヨヒヨヒヨ、謝らんでもよい。これには訳があるんじゃよ」

「訳……ですか？」

俺は首を傾げつつ尋ねた。

すると土門長老は、笑みを浮かべながら答える。

「ウム。実を言うと、この修験霊導の儀というのが、一番、他の修被者達の目に留まるのじゃ。そして昼も言ったが、位階 従六位からは五つの儀式が免除される。という事は、日比野君の秘密がばれるリスクを軽減させる事になるのじゃよ。そういう訳じゃから、気にせぬでも良い。ヒヨヒヨヒヨ」

「そ、そういう事だったのですか。それに関しては、御2人に従うほかありませんので、よろしくおねがいします」

土門長老が陽気な雰囲気であんな説明してくれた事もあり、俺も気楽な感じで儀式結果を受け止めた。

そしてまた丁寧に頭を下げ、お願いしたのである。もう今日は、2人に頭を下げっぱなしだ。

と、その時。

一将さんが、腕時計に目をやる。

「さて、それではソロソロ向こうの片付けも終わっている頃だ。我々も広間へと行こう」

という訳で、俺達はこの部屋を後にするのだった。

俺達が広間に行くと、もう全員が集まっていた。

広間入口の壁際に目を向けると、儀式で使った術具類がケースや鞆等に収納され、綺麗に整理されていた。

勿論、床に描かれていた霊波遮断の術式も撤去済みである。

そして、儀式の痕跡もなく綺麗になった広間中央では、皆が和気藹々とした雰囲気で購入やかに話をしている最中であつた。

俺もその中に混ざるべく、皆のいる中央へと向かう。

するとそこで瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんが俺に気付く。

それと共に、俺の方へと歩み寄ってきたのであつた。

瑞希ちゃんは笑顔を浮かべると労いの言葉を俺にかける。

「日比野さん。お疲れ様でした。儀式の時はカッコよかったですよ。

……少し、可笑しいときもありましたけど」

続いて沙耶香ちゃんも。

「お疲れ様でございました、日比野さん。それにしても流石ですね、言霊の術には私もビックリしました」

「ハハハ、そうかい？ さつき立会人の2人からも、霊力の扱いと言霊の才能が俺にはあるって言われたよ。いまいち実感が湧かないけどね」

沙耶香ちゃんの質問に内心ドキツとしながらも、俺は早速、土門長老から言われた言い訳を発動した。

俺の返答を聞いた沙耶香ちゃんは、ニコリと微笑むと言った。

「私もそう思いますよ、日比野さん」

2人とそんなやり取りをしていると、他のメンバーも俺に気付く。

その中の一人、一樹さんも俺に声を掛けてきた。

「お疲れ、日比野君。ところで、父上達とは何を話してたんだい？」

「立会人の2人からは、とりあえず、儀式結果についてと、その後の事を色々教えてもらってました。自分には知らない事が多すぎますからね。ハハハ」

「ああ、そういった話か……。まあ色々大変だとは思うけど、頑張ってくれ。俺も力になるからさ」

と言うと、一樹さんは俺の肩にポンツと手を置いた。

「ありがとうございます、一樹さん」

俺が一樹さんに礼を言ったところで、宗貴さんと明日香ちゃん、そして詩織さんも俺の前にやってきた。

そして宗貴さんが爽やかに言うのである。

「お疲れ、日比野君。しかし、君……特定の分野は凄いな。今も皆と君の儀式について話してたところなんだよ。ハハハ」

「ハハハ、そうだったのですか。実は土門長老にも同じ事を言われました」

俺は後頭部を掻きながら、照れたようにそう答える。

すると今度は明日香ちゃんが、顎に手を当てた難しい表情で俺に言うのである。

「アンタって、霊力操作と言霊の術だけは突出してるわね。他の霊能は並か並以下なのに……変な奴」

話の後半部分を聞いたときは内心『ほっとけ!』と思ったが、俺は愛想笑いを浮かべて返事する。

「アハハ、そうかい」と。

続いて詩織さんも俺に労いの言葉をかけてきた。

「お疲れ様でした、日比野君。慣れない事をしたんで疲れたですよっ?」

詩織さんは、非常におっとりした雰囲気的女性で、話し方も常にゆるくマイペースである。

その為、詩織さんの周りだけ時間の流れが緩やかに感じるのだ。

見た目も中身も100%癒し系の女性である。

まあそれはさて置き、俺は返事をする。

「はい、ちよつと疲れました。でも、これから一つ一つ覚えていくしかないですね。ハハハ」

とその時であった。

一将さんの大きな声が広間に響き渡るのである。

「おーい、それでは全員集まってくれッ」

その言葉を聞いた俺達は、一将さんと土門長老の前に行くと、横に整列する。

一将さんは、全員集まったところで口を開いた。

「今日の予定はこれで終わりとなるが、明日からは本格的な訓練が始まる。そういつた訳なので、皆が気を引き締めてこれからの訓練に当たるよう、よろしく頼む」

【はい】

俺達は声を揃えて返事をする。

とそこで、一将さんは隣にいる土門長老に視線を向ける。

そして言った。

「それでは最後に、土門長老からお話がある」

土門長老は一步前が出る。

すると、俺達の顔を左から順に見た後、口を開くのだった。

「オホンッ。え、今日の修験霊導の儀により、皆も参加者の基礎能力等が少しは分かった事と思う。日常生活における人間の能力というものは、人それぞれで千差万別じゃ。無論、それらは霊能力に關しても同じである。皆には、この儀によって得た事を明日からの合同訓練に是非生かして貰いたい。まあそういう訳で、儂からは以上じゃ」

土門長老は話終わると後ろに下がる。

そこで一将さんが皆に言った。

「この後だが、今日は第一日目という事もあるので、参加者全員をもっと良く知ってもらう為に、簡素ではあるが我等のマンションにて親睦会を開きたいと思う。それでは一旦、解散だ。後、忘れ物がないように注意してくれ。以上である」

一将さんの言葉が号令となり、俺達は早速、私服に着替える。

それから持ってきた荷物を最終チェックすると、この神社を後にしたのであった。

それから五日後

今の時刻は午後10時頃。

時折、やや強めの南風が吹き付ける所為か、3月になったばかりとはいえ、いつもと比べると今夜は暖かい気温となっていた。

そんな生暖かい南風を浴びながら、俺は空を見上げる。

空は満月が浮かんでおり、その月明かりが周囲の景色を薄気味悪く浮かび上がらせていた。

ぐるっと周囲を見回すと、建設中の大きな建物や何かの倉庫、そして十数軒の民家が月明かりに照らされ、視界に入ってくる。

フェンスで周囲を囲まれた工事現場には、中津総合病院 新築工事という大きな看板が掛けられていた。

どうやら、あそこに見える大きな建物は病院になるようだ。勿論、今は無人で工事機械も動いていない。

だが、吹き付ける風の影響で、ガチンツとかキンツとかいう金属同士の衝突音が、時折、聞こえてくる。

その為、無人の筈の工事現場自体が、得体の知れない不気味な建物に見えてくるのである。

また、やや離れた所に見える民家の窓からは、幾つかの明かりが漏れているのが確認出来る。

それらの明かりは、この薄気味悪い雰囲気を少しだけ和らげる役目をしており、俺はそれが視界に入ると少しホツとした気分になるのだった。

とまあそんな訳で、俺は今、高天智市の隣にある中津市のとある廃工場に來ている。

此処は、中津市の中心市街地からやや外れた所にある地区で、建物がそれ程密集していないところだ。

因みにこの工場は、操業停止してからかなりの年月が経っているような縦長の建物である。しかも結構な長さだ。

入口部分に視線を向けると、機械の部品みたいな物や割れたガラ

ス等が散乱しており、非常に雑然とした光景が目に見え込んでくる。建物の壁には安全第一と書かれた看板が掛けられており、またその隣には、何とか鉄工所と書かれた、名前部分が錆びて読めない看板が掛けられていた。

「どうやら作業時は鉄工所だった様である。と、その時。」

そんな風に周囲の様相を眺めている俺に、もう一人の同行者が声をかけてきたのだった。

「日比野ツチ、人払いの結界も施した事だし、早く工場の中へ行くわよ」

今日の修被同行者、明日香ちゃんである。

合同訓練が始まってからは、毎日日替わりで、夜の修被パートナ―が変わるのだ。

明日香ちゃんは俺と同じ修被霊装衣を着ており、手には懐中電灯を持っている。

腰には明日香ちゃんの修被武具である、紫色の縄の両端に灵石や槍状の刃物を取り付けられた武器が装備されていた。

聞いたところによると、けんじやく 繻索と呼ばれる武具らしい。かなり広い間合いを取れる武具だ。

しかし、他の術具類が見当たらないので、俺は返事をすると共に問い掛ける。

「それはいいけど。ところで明日香ちゃん、修被準備はもういいの？ 随分、身軽そうだけど……」

すると明日香ちゃんは、無然とした表情で答える。

「当たり前じゃない。私はアンタよりも、この業界に長くいるんだから、抜かりはないわよ。アンタこそ、ちゃんと準備はしたの？」

「まあ、それに関しては大丈夫だよ。霊刀以外の必要な物は、この術具袋に入れてきてあるからね」

俺はそう言うと、腰に装備したウエストポーチ状の術具入れを指差した。

それを見た明日香ちゃんはそっけなく言う。

「あつそ。じゃあ行くわよ」と。

それだけ言うと、明日香ちゃんは廃工場の中へと入って行くのであった。

やっぱり、まだトゲトゲとした感じがあるなあ……。

などと思った俺は、フウとやや溜息を吐きながらも懐中電灯を手取る。

そして懐中電灯のスイッチを入れると、明日香ちゃんに続くのだった。

廃工場の中に入った俺達は、真っ直ぐに工場内を進んで行く。

工場内は明かりが無い為、懐中電灯を頼りに進んで行くしかない。俺は足元や天井等を重点的にライトアップしながら歩を進める。

中は思ったとおりの惨状で、作業時の金属残骸が其処彼処に転がっていた。それらは全てが赤く錆びているので、パツと見は土の塊と見間違っくらいである。

また、周囲の壁に目を向けると所々に穴が開いているので、月明かりと風がその穴からお裾分けするかのように入ってくる。そして、それと共に工場内の埃が舞い上がるのだ。

そんな訳で俺は、口と鼻を左腕で覆いながら、前に進むのである。因みに、修被依頼の内容は、工場内に住み着いた悪霊を全て祓うことだが、何体いるのかまでは分からないとの事であった。

まあ人的被害もそれほど酷い状況では無いみたいなので、とりあえず、俺達だけでこなせるであろうと、土門長老や一樹さんが判断したわけである。

恐らく2人は、俺の霊的感知能力をこの間の儀式で知ったので、その辺は大丈夫と思ったのだろう。いや、そうとしか考えられん。

実は、この廃工場の外には一将さんと土門長老が待機している。

一将さんが車を運転をして俺達をこの現場に連れて来たのであるが、ここに向かう前に土門長老が「日比野君。明日香はまだ一人で

修被をした事がない。じゃから頼んだぞい」と俺に小声で耳打ちしてきたのである。

確実に、何かあったときはよろしく頼む、といった感じだったので、先ず間違いないだろう。

という事なのであるが、勿論、俺はもう既に何体の悪霊がいるのかを把握している。

工場奥に3体とその手前上方に4体の計7体の悪霊が、俺に内蔵された高感度悪霊探知レーダーで捉えているのである。

その為、前を歩く明日香ちゃんに、俺は悪霊の数を告げるのである。

「明日香ちゃん。この奥に3体と、その手前上方から4体の負の霊波が感じられるから、気をつけてね」

すると明日香ちゃんは立ち止まり、やや怒った口調で答える。

「そんな事、言われなくても分かってるわよッ。私の事を心配するより、日比野ツチの方が気をつけた方がいいじゃない？ この間の儀を見た感じじゃ、実戦儀式は言霊以外は大した事ないみたいだし」

「ハハハ、そんなに怒らないですよ。とりあえず、お互いに気をつけてようつて事さ」

俺はそんな明日香ちゃんを宥めるように、愛想笑いを浮かべて爽やかにそう答える。

「フンッ、行くわよ」

だが明日香ちゃんは、そんな俺を無視して前へ歩き始めたのである。

なんか知らんが、明日香ちゃんとは上手くいかなあ……。

やっぱ、天目堂での一件が、まだ尾を引いてるのかも。

まあいいや。とりあえず、あまり刺激しない様にしよう。

そんな事を考えながら、俺も歩を進めるのである。

それから暫く進むと、上方から俺達に迫る赤い半透明の悪霊が現

われたのだ。

悪霊の接近を確認した俺は、即座に明日香ちゃんに言う。

「上だ！ 明日香ちゃん」

そう告げると共に、俺は背中中の刀を抜くと中段に構える。

「イチイチ言わなくても分かってるわよッ」

明日香ちゃんはそう言うと、武器には手を掛けず、利き腕をやや前に出して猫足立ちの構えをとるのであった。見た感じは空手の構えのようだ。

見極めの儀式の時は、腰の武器ばかりを使っただので分からなかったが、結構、堂に入った構えに見えるので、普段は体術がメインの修祓法なのかも知れない。

俺はフトそんな事を考える。

まあそれは兎も角、今は悪霊である。

俺は斜め上の前方から襲い掛かってくる2体の悪霊を見据えると、刀に霊力を籠めた。

霊力が流れた刀は、白く発光する。

そして刀の間合いに入ってきた1体を一刀の元に斬り伏せるのである。

それから一旦、後ろへさがり、もう一体への迎撃体制を整える。

今度は俺の左真横から悪霊は襲い掛かってきた。

俺はすぐさま左側に90度向きを変えると、迫り来る悪霊に向かい袈裟に斬り下したのだった。

【ギヤアアア】

という断末魔の悲鳴と共に、悪霊は消滅した。

悪霊が消滅したのを見届けた俺は、明日香ちゃんの方へ視線をむける。

すると明日香ちゃんの方も、悪霊を倒し終えたところのようだ。

俺は明日香ちゃんに声を掛ける。

「流石だね、明日香ちゃん。腰の武器を使わずに体術のみで祓うなんて」

「あ、当たり前じゃない。アンタの変な踊りと一緒にされても困るわ。つ、次、行くわよ」

明日香ちゃんは、やや照れた様な仕草をしつつもそう答えた。そして工場の奥へと足早に進み始めるのである。

俺は今の明日香ちゃんを見て、とりあえず、こう思った。

「どうやら、あまり素直な性格ではないようだ、と。」

そんな事を考えながら背中中の鞘に刀を納めると、俺も奥に向かうべく歩を進めるのであった。

更に奥へ進んで行くと、左右の壁際に大きな物体が視界に入ってきた。

俺はそれらに向かって懐中電灯の光を当てる。

すると大きな物体は、どうやら加工用のプレス機械の様である。

それらは錆びや油にまみれており、使い物にならないのは容易に見て取れる状態であった。

そしてその周辺に、悪霊が2体漂っているのである。

因みに悪霊は、まだ俺達の存在に気付いていない。

明日香ちゃんは、機械の周囲に漂う2体の悪霊に目を向けると、俺に言った。

「日比野ツチは手を出さなくていいわ。2体だけのようだし、私一人で十分よッ」

それを言うや否や、悪霊に向かって走って行くのである。

俺は慌てて明日香ちゃんに言う。

「ちよっ、まだ外にも1体……って聞いてねえな。フウ、仕方ない」

俺はとりあえず、外にいる1体の悪霊に意識を向け、術具入れから破邪の符を一枚取り出した。

それから少し明日香ちゃんに近寄り、戦況を見守るのである。

明日香ちゃんは凄腕で勢いで悪霊に飛び掛り、霊力の籠もった蹴りと掌底打ちで、あっという間に悪霊2体を殲滅する。

悪霊2体をあっさり祓った明日香ちゃんは、霊圧を下げると俺に

向かって言うのである。

「さあ、帰るわよ。日比ツ!?!?……」
と、その時。

明日香ちゃんの頭上から、1体の悪霊が襲い掛かってきたのである。

予想外の所から現われたので、明日香ちゃんはやや焦った表情をする。何故ならば、今からじゃ霊圧を上げても間に合わないからだ。だが、さっきから3体目の動きに注意していた俺は、急ぎ明日香ちゃんに近付く。

そして用意しておいた破邪の符を取り出し、悪霊へ向けて秘めた力を解放したのだった。

【シヤアアア】

符の霊力をモロに浴びた悪霊は、悲鳴と共に消え去る。

それを確認した俺は、明日香ちゃんに言った。

「大丈夫? 明日香ちゃん」と。

だが明日香ちゃんは、そんな俺を見るなり、怒った口調で言うのである。

「し、知ってたわよ。ま、真上にもいるって事くらい。べ、別に日比野ツチに来てもらわなくても、私一人で被えたんだからッ!」

「そ、そんな怒らなくても。お、落ち着いてよ」

何で逆ギレされるのか分からないが、俺はとりあえず、宥めるように言った。

だが、そんな俺を無視するかのように、明日香ちゃんはクルッと回れ右をして、出口の方へと歩き始める。

そして俺に顔も向けず、言うのである。

「これで終わりなんだから、帰るわよ」と。

「フウ………」

俺はやや溜息を吐きつつ、明日香ちゃんの後を追う。

その途中、俺は考えるのだ。『今時の女子高生って難しいなあ』
と……。

四拾貳ノ巻

《四拾貳ノ巻》

魑魅

3月中旬

土御門家と道摩家の合同修被訓練が始まってから、今日ではや2週間。

俺は昼と夜の現代霊術学習で、何となくおぼろげにだが、今の呪術業界事情というものが少しずつ分かり始めてきたところである。

まあ色々とつつきにくい部分は多少あるが、その都度、他のメンバーからも教えてもらったりしているので、今のところは順調だ。皆に感謝である。

そして、初めはヨソヨソしい感じで接していた土門長老のお孫さん達とも、今では気軽な感じで話を出来るようになったので、和気藹々とした雰囲気の中、俺は学ぶ事が出来ているのである。

だが、気軽には話せるようにはなつたが、明日香ちゃんだけは上手いかない事も多い……。

天目堂での一件が、まだ明日香ちゃんの中で許せてない部分があるのかもしれない。もしかすると、他の理由もあるのかもしれないが……。

とりあえず、それがここ最近の一番の懸念事項なのである。

実は昨日も、明日香ちゃんが俺に突っかかってくるものだから、少し困ったことが起きたのだ。

それは午後から始まった、各状況下における修被のあり方についての意見交換を皆と行っている時だった。

俺がそれについての意見を言った後、明日香ちゃんが猛烈に駄目を出すという感じだったのだが、正直、『何も其処まで否定しなく

ても……』とってしまったほどである。

なんせ、ムキになって俺の意見を否定してくる感じなので、俺もタジタジになってしまっ。

一応、その場は宗貴さんが俺達の間に入ってくれたので、それ以上の事は起きなかったが、最近そういう事が多くなってきたのである。

その為、俺に対する明日香ちゃんの状態が日増しに厳しくなっているような気もするのであった。今の俺には頭の痛い事なのだ。

という訳で、そんな微妙に難しい人間関係もあつたりする為、全てが順調というわけでもないのである。

まあそれはさて置き、話は変わる。

瑞希ちゃんもここ最近、学校の帰りに沙耶香ちゃんのマンションに寄る日々が続いている。

剣道部の練習があるので、瑞希ちゃんもそれほど頻繁には来れないが、色々と都合をつけて此方に来ているようだ。

その他にも、休みになる土日はなるべくコッチを優先するようにしているとも言っていた。

まあ好奇心旺盛な子なので、これは仕方ないだろう。瑞希ちゃんも意外とオカルト好きなのかもしれない。

そんな瑞希ちゃんであるが、訓練に来たときは、勿論、俺の部屋に来るときと同じ様に元気よく現われるので、この訓練の場が更に明るい雰囲気となる。

その為、場を明るくするのにも貢献しているのだ。
だがその代わり……。

瑞希ちゃんが来た時には、俺の両隣が沙耶香ちゃんと瑞希ちゃんになる事が多く、時折、非常に緊迫感の漂う空気になるのは前と変わらなずだが……。

そしてその度に『一体何なんだ？』と俺が思うのも相変わらずの事なのであった。未だに原因の分からない事柄の一つである。

因みに明日香ちゃんも、瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんには俺と違って普通に接しているの、俺以外とは今のところ何もトラブルはない。

そういった事を踏まえると『明日香ちゃんが俺にいい顔しないのは、やっぱり、天目堂での一件しかないな……』という風に考えてしまう、今日この頃なのである。

とまあ合同訓練はこんな感じで進んでいるのであった。だがしかし……。

この集まりの本来の目的は訓練にあらず。

鬼一爺さんによる、人間観察劇場が本来の目的なのである。が、これについてはノータッチなので、俺はサツパリ分らん。

観察をする鬼一爺さんのみぞ知る、というところである。

俺も時々、鬼一爺さんの表情を見たりするが、ジツと皆を見詰める表情から、その真意を計るのは流石に難しい。

その表情を見る限りでは、色々と考えてはいるようだ、というのくらいは俺でも分かるが……。

まあ兎も角、そのくらいの事しか分からないので、俺はこれについては何も考えない事になっているのであった。

だが、このジジイ……。時々、弥七の役がどうか、角さんは誰にしようかとか、妙な事を呟いてる時があるのだ。

それを聞いた瞬間、俺は『まさか、このジジイ……このメンバーで、リアル水 黄門をやるつもりなんじゃ……』と心の中で呟いたのは言うまでも無い。

またそれと同時に、『思い過ごしであってくれ！』とも強く願うのであった。

そんな最近の出来事等を思い返しながら、俺は腕時計に目を向ける。

今の時刻は午前10時20分。空を見上げると、俺の頭上からは眩しい日の光が、この高天智市内を照らしつけていた。

お陰で、外気もポカポカと暖かく、春うららといった感じだ。明日香ちゃんとの気まずい事なんかも、どうでもよくさせてくれる。そしてこう思うのだ。こんなに気持ちがいいと、頭のネジが飛んだ輩が春先によく現われるのも、ある意味仕方が無いな、と。とまあそんな訳で、俺は今、外にいる。場所は高天智市の中心街である。

ここ最近は何も降らない日々がずっと続いており、晴れや曇りの日々が殆どである。

まあとはいっても、流石にまだ寒いので、ジーンズにミリジャケといった、厚めの服装を俺はしているが……。

話を戻す。

10日ほど前までは、まだ日陰部分に雪も多少残っていたが、今ではもう完全に消えており、冬の面影はかなり薄くなっている。

俺の歩いている道路脇に植樹された街路樹に目を向ければ、所々の枝に芽の様な膨らみが出てきているので、もう数週間もするとこれら木々の芽も開くような感じだ。

おまけに今朝見たテレビニュースでも、今年は暖冬だったので、桜の開花が早いなんて事を言っていた。その為、余計にそう感じるのかも知れない。

そんな事を感じながら、俺は周囲に目を向ける。

今日は天気も良いので、道路には沢山の車や人が行き来しており、賑やかな様相になっていた。

雪のあった頃と比べると、人々の表情も幾分笑顔に見える。なんとなくだが、冬の暗さから解放されたかのような表情だ。

そんな人々の表情を見た俺は、『もう春だな』と心の中で呟くのである。

また、俺の周囲を歩く人々も、春っぽい格好をしている人が多いので、余計に春を思わせる日となっているのだった。

その為、この高天智市の街並みは、冬の装いから春の装いへと移り変わり始めている様に俺の目には映るのである。

そんな周囲の変化に目を向けつつ、俺は目的地に向かって高天智市の中心街を歩く。

因みに今日は合同修被訓練もお休みで、俺はソツチ方面からは解放されてノーマルな日常を送る予定であった。のだが……土門長老から昨日、俺に話があったのだ。

その内容はというと、「明日の午前10時半までに、和風カフェ『悠』ちゆう店に行ってくれ。土門の名前で予約を入れてあるから、そう言えば向こうも分かる」といった感じの話だ。

俺はわけが分からなかったので、とりあえず、その店に行く理由を聞いた。

だが土門長老は、「ヒヨヒヨヒヨ、行けばわかるわい」と満面の笑顔で答えるだけだったのである。

まあそんな訳で俺は『何かシツクリこないな』と思いつながらも、目的の和風カフェ『悠』へと向かって歩を進めているのだった。

話は変わるが、昨日、この話を瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんにしたところ、2人は一瞬、負の波動を少しだけ放ったのである。

だが、すぐに普段通りの表情に戻ったので、それについては別段気にしなかったのであるが、2人はその店の名前と場所を念入りに確認してきたので、寧ろ、それが気になるところではある。

そして、それを聞き終えた瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんは、お互いに向かい合って難しい表情をしていたので、『何かあるのだろうか……』と、俺はやや不安にもなったのだった。

色々和昨日の出来事を考えている内に、とりあえず、俺は目的地である和風カフェ『悠』へと辿り着いた。

俺はその店の前に、一旦立ち止まり、正面を眺める。

この店は和風な喫茶店といった佇まいをしており、ぱっと見は田舎のお屋敷といった感じである。

そして、昔ながらの白塗りの壁や、黒い塗装を施した太い木の柱が特徴のシックで落ち着いた感じの建物なのであった。

また、この店の周囲には洋風な建物やコンクリートの建物が軒を連ねている所為か、色んな意味で非常に目立っていた。

その為、俺はこの店が遠目に見えていた段階から、此処に違いないと当たりをつけていたのである。事実そうだった訳だが……。

まあそれは兎も角、俺は店の外観を暫く観賞したあと、正面の玄関へと進んで行く。

すると、正面玄関にはモロ和風な格子状の引き戸が設けられていた。勿論、その上には紺色の暖簾がかかっている。もうこれだけで和風といった感じだ。

玄関を見ていてもしょうがないので、その引き戸に近付くと俺は戸を引く為に手を伸ばす。

だがその時。

触れるまでもなく、自動で引き戸がスライドしたのだった。

何も知らずに、引き戸に思わず手を掛けようとした自分が、少し恥ずかしくなってくる。

またそれと同時に、なんか知らんが騙されたような気分にもなってくるのだ。

そしてこう思うのである。『紛らわしいんだよ！ 自動ドアって書いておけよ』と……。

俺はそんな文句を心の中で叫びつつ、玄関を潜るのであった。

店内は外見から想像していたとおり、モロ和風な雰囲気で、若干、薄暗い感じの静かな様相をしていた。

天井に取り付けられたスピーカーからは、川のせせらぐ音や小鳥の囀りが聞こえてくる。その為、気分的にもゆったりとした感じになるのである。何かこう、森林浴をしている様な錯覚と共に、日々の疲れが癒されるような感じだ。

俺はそんな演出に癒されながら、店内を見渡す。

すると、先ず最初に、縦に整列した四角い木製のテーブルが幾つも見え、も目に飛び込んでくる。勿論、それらのテーブルにはお茶やコーヒ

ーを楽しむ人達が何組もいた。

また、天井に目を向けると、和紙のカバーで覆われた、これまたモロ和風な照明器具があり、それらが程よい灯りを店内に提供しているのだった。

道路に面した壁際には大きな窓があり、そこにはカーテンの代わりに障子の衝立ついたてが置かれていた。

その衝立からも外の明かりが店内に入ってくるので、店内は薄暗い感じがするにも拘らず、非常に見通しのよい空間となっているのだ。

反対側にある壁際には、やや歪な形をした陶器の置物や日本庭園の写真、そして風景画等がおかれており、この店内の雰囲気より和風な雰囲気へと傾けさせている。というか、この店は何処を見渡しても、和風な物ばかりなのである。

だがしかし。

見た目は確かに和風で品の良さそうな感じがするが、俺にはこの店に入ってから唯一つだけ、違和感が付き纏っているのだった。

それは、こんな和風な店内にコーヒーの香りが漂っている事である。

これは物凄いギャップを感じさせる。その為、俺的にはシツクリと来ない空間となっているのだった。『違うだろ、オイッ』と突っ込みを入れたい衝動に俺は駆られる。勿論、突っ込むつもりはないが……。

まあそれは兎も角。

店内の様相を少しだけ見渡した俺は、これまた和風な着物を着た2人の若い女性がいる、正面の受付へと向かい歩を進めるのである。俺が受付に行くと、丁寧な仕草で2人の女性は挨拶してきた。

「いらっしやいませ。何名様でございますか？」

そこで俺は土門長老の言葉を思い出し、それを女性に告げる。

「あのお、すいません。今日、土門の名前で予約が入っていると思うのですが……」

「はい、少々、お待ちいただけますか」

八キ八キとした明るい口調で女性はそう言うと、手元にある帳面を確認する。

そして確認を終えると俺に言った。

「はい、確かに。では、御席にご案内致しますので、此方へどうぞ」予約を確認した女性は、俺を店内の奥へと案内する。

だがその途中、誰かに見られているような錯覚を覚えるのである。その為、俺は周囲を見回した。だが、周囲のテーブルには普通にお茶やコーヒーを楽しむ人達ばかりで、俺に視線を向ける人の姿は皆無であった。

まあそんな訳で、俺はやや首を傾げつつも、案内する女性の後をついて行くのである。

「お客様。こちらになります」

その女性は、黒い木の衝立に仕切られた席へと俺を案内した。

女性に促されるまま、俺はその席へと向かう。

するとなんと、其処には詩織さんが居たのである。

その為、俺はやや驚きつつも挨拶をするのだった。

「こ、こんにちは。詩織さん」

今日の詩織さんは、ベージュのコートに白っぽいスカートといった服装で、何となく春っぽい質感の着こなしであった。

また詩織さんは、いつもと同じく眼鏡をかけているが、フレームの色が服装と良く似た淡い色合いの眼鏡を今日はかけているので、いつもよりも柔らかい印象を受けたのだ。

そして、そんな詩織さんは俺に笑顔を向け、返事するのである。

「あら、やっぱり日比野君だったのね。実は私も、今来たところなの」

「そうだったのですか」

と言いながら、俺はとりあえず、詩織さんの向かいにある席に座った。

因みに、俺達がいるこの席は4人用のようだ。椅子も4脚ある。

まあそれは兎も角、俺が座ったところで、案内してくれた女性はオーダーを取りはじめた。

テーブルの上に置かれたお品書きを暫し眺めた俺と詩織さんは、此処のお勧めメニューである抹茶オレとケーキの類を頼む。

そして、オーダーを取った女性が去ったところで俺は口を開くのである。

「今、詩織さん、『やっぱり』と言いましたけど、土門長老から何か聞いてたんですか？」

「ウフフ。実はね、今年のお正月に、お爺さんが私に合わせたい人がいるって言ったのよ。それでこの間、訓練の説明を家でお爺さんがされた時に、日比野君の名前が出たものだから、今日は『もしかして』と思ったの」

詩織さんはニコニコとゆるい口調で話すので、場の雰囲気はゆっくりと感じられる。

またそれと同時に、声を聞いてるだけで、今日はいつも以上に癒し効果が発揮しているようにも感じられるのだ。

恐らく、この静かな和風空間の雰囲気、それに拍車をかけているのだろう。

それは兎も角、ある意味凄い人である。

とまあそれはさて置き、俺は言う。

「ハハハ、そうだったのですか。そういえば、去年の暮れ辺りに、土門長老からそんな話があったのを今、思い出しましたよ……ン？」

だがその時！

俺達の付近から、2人の人間が放つ、負の波動を感じたのである。しかも、俺達の席に向けて発せられた様な気がしたのだ。

方向としては、恐らく、俺の後ろにあるこの衝立のすぐ向こうからである。

俺は衝立の隙間から見える後ろの席に視線を向けた。

だが、この狭い隙間からでは、人がいるという事以外は確認出来ない。また、今は負の波動も少し控えめな状態だ。

その為、やや怪訝に思いながらも俺は詩織さんに視線を戻すのである。

すると詩織さんは、首を傾げながら言うのだった。

「後ろがどうかしたの？ 日比野君。なんか難しい顔してるけど…

…」

「あ、いや、なんでもないですよ。アハハ」

俺は変に気を使わせるのもアレだと思い、普通を装って軽く返事をする。

「ウフフ、変なの。……ところで日比野君、話は変わるんだけど…

…」

詩織さんは、やや難しい表情をしながら言葉が止まった。

何か言いにくそうな感じがしたので、俺はとりあえず、詩織さんが話しやすいよう、爽やかに尋ねてみた。

「はい、なんでしょうか？」

やや間を空けてから詩織さんは話し始める。

「……実は、明日香の事なんだけど」

「明日香ちゃんの事……ですか？」

詩織さんはコクリと頷くと、続ける。

「ここ最近、明日香が突っかかって来るので、日比野君も嫌な思いをしたでしょう……。ごめんなさいね、日比野君。私から謝らせてもらおうわ」

そう言うのと、詩織さんは丁寧に俺へ頭を下げる。

俺は予想外の展開だった為、やや驚きつつも言った。

「いえ、そんな、謝らないで下さい。それに、俺が天目堂であんな事を明日香ちゃんにしたのが原因だと思うんで……」

だが詩織さんは首を左右に振って言うのである。

「違うわ……。明日香はその事で日比野君に強く当たっているんじゃないと思うの。多分だけど、お爺さんにあの事を聞かされたからだと思うのよ」

「あの事……ってなんですか？」

俺が逆に問い掛けると、詩織さんは周囲に注意しながら小声で言った。

「実は、訓練の2日目に明日香がお爺さんに聞いたのよ。日比野君の位階の事を……」

そんな詩織さんにつられて、俺も小声で言う。

「位階の事で不味い事があつたんですか？」

「ううん、違うの。日比野君と明日香の位階が同じなので、あの子多分、それが気に入らないのよ。だから、日比野君に強く当たるとかと思うの。あの子、結構、負けず嫌いなところがあるから……」

詩織さんの話を聞き、そう言えば、明日香ちゃんと同じ位階だったのを思い出した。

それと共に、今までの俺に対する明日香ちゃんの姿が思い返される。

そして今話を聞いた俺は、ここ最近、何か引つかかっていた物がようやく取れた気がしたのだった。

俺は目を閉じて、今までの事を暫し考える。

確かに明日香ちゃんは、恨みというよりは俺に張り合うといった感じで、突っかかってくるのであったのである。そうだったシーン全てがそうなのだ。

俺はそうやって今までの事を思い返すと、詩織さんに言った。

「思い返してみると、納得のいく部分が多々あります。……そうだったのですか。でも、位階を決めたのは俺じゃないしなあ……はあ……」

そうなのだ。こればかりは、俺が決めた訳じゃないので、どうする事も出来ないのである。

俺がそんな風に溜息を吐いていると、詩織さんは優しい口調で言うのだ。

「日比野君は何も悪くないから、それは気にしないでね。それと日比野君……こんな事を言うのもアレだけど、あの子の事を嫌わないで欲しいの。明日香もその内、納得する日が来ると思うから。ゴメンね、日比野君」

と言うと、詩織さんはまた丁寧に頭を下げるのである。

なんか知らんが、そこまで下手に出られると悪い気がしたので、俺は爽やかな笑みを浮かべて言った。

「ハハハ、そんなに気にしないで下さい。俺もそんなに気にしてませんし、明日香ちゃんの事を嫌ったりなんかしないですから。それに、今の話を知ることが出来たので良かったと思ってます。だから、お顔を上げてください」

詩織さんは俺の言葉を聞き、ホッとした表情になる。

そして先程と同じ様に笑顔になり、言うのである。

「ありがとう、日比野君。よかった……私の思ったとおりの人で」「えっ、思ったとおりの人？」

「ウフフ、実は初めて会った時に、日比野君て心の優しそうな人だなと思ったのよ。だから、今の話もしたの。ウフフ」

そう言いながら詩織さんはニコニコと微笑む。

「ナハハハ、そうですね」

俺もそれにつられて笑顔になる。

とまあこんな感じで、俺達の談笑が始めるのだった。

それから20分後。

俺達は注文した抹茶オレを飲みながら、他愛のない世間話や身の上話を続けていた。

だが、その身の上話の時に、「日比野君の師匠である、法眼さんでどんな人？」とか聞かれたときはドキッとしたが……。

この質問については、一応、「毎週放送されている水 黄門が大好きな、良く分からん霊能爺さんです」と答えておいた。

すると詩織さんは、「本当に」。実はうちのお爺さんも、大好きなの」とか言っていたので、少々意外だった。だがそれと共に、凄く嫌な予感もしたのは言うまでも無い。

まあとりあえず、そんな柔らかい雰囲気の中で俺達は談笑をしているのであった。

話は変わるが、この抹茶オレ。この店のお勧めらしいのだが、俺の口には合わない。なので、普通にコーヒーを頼んでおけばよかったと、少し後悔しているのである。

という訳で話を戻す。

柔らかい雰囲気の中、詩織さんと色々な話をしていると、衝立の向こう側から俺達に向けて、時々、負の波動が発せられることがあった。まあ今は治まっている様だが……。

その為、『この衝立の向こうにいるのは、一体何者なんだ……』などと考えながら、俺は詩織さんと談笑をしているのである。

正直、なんか居心地が悪いのだ。話をしても、背後が気になるのである。

どんな人間がこの向こうにいるのか、一度、確かめておいた方がいいな……。

などと考えた、丁度その時。

詩織さんは、何かもったいぶった様に尋ねてきたのであった。

「ところで、話は変わるのだけれど……。日比野君は、今、お付き合っている方とかはいるの？」

「ヘッ？ ああ、付き合ってる子ですか……。え〜と、実はいませんです。ナハハ」

俺は唐突な質問だったので、気の抜けたような声を出してしまっただが、とりあえず、そう答えた。

すると詩織さんは、両掌を喉元で組み、ニコニコと答える。

「ウフフ、日比野君は今、フリーなんだあ。実は、私もフリーなの〜。ウフフ」

「そ、そうなんですかあ」

だが、その時であった！

俺の背後からガタツという物音と共に、物凄い負の波動が発せられたのである。

一瞬、身の危険を感じてしまうくらいの負の波動を……。

その為、ゾクリッと悪寒が走った俺は、反射的に思わず背後を振

り返り、衝立を凝視してしまうのだった。

そんな俺を見た詩織さんは、ニコニコとした表情で言う。

「……日比野君、ちょっと待っててくれるかしら〜」と。

詩織さんはゆっくりとした動作で席を立ち、この空間を出る。

そして俺の背後にある衝立の方へと向かうのだった。

俺は衝立の方へ耳を敬てる。

すると

「あら〜、やっぱり、あなた達だったのね〜。ウフフ、こっちに来て皆でお話をしましょうよ。その方が楽しいから〜」

「「エツ、アツ、は、はい」」

といった感じのやり取りが聞こえてきたのである。

なんか慌てた感じの様子だったが、向こうの人数は2人のようだ。

そんな訳で俺は『詩織さんの知り合いかな?』などと考えながら、詩織さんが呼んだ人達がこの席に来るのを待つのがだった。

そして10秒ほどすると、詩織さんと共に俺の後ろにいた人物が姿を現わしたのである。

だが俺はその人物を見た瞬間、驚きと共に言ったのである。

「み、瑞希ちゃんに沙耶香ちゃん……。どうして此処に?」

2人は俺の言葉を聞くなり、苦笑いを浮かべ、頭をポリポリと人差し指で掻く。

何処か気まずそうな表情を2人はしていた。

そんな中、まず瑞希ちゃんがモジモジしながら口を開くのがだった。

「じ、実は昨日、日比野さんからこの話を聞いた時に凄く気になったので……。それで……。テヘッ」

続いて沙耶香ちゃんも申し訳なさそうに言う。

「ごめんなさい、日比野さん。わ、私もちょっと気になったものから、高島さんと一緒に……」

2人の様子を見た感じでは、俺の心配?をしてくれたみたいだ。

なんで負の波動を発していたのかまでは分からないが……。

まあとりあえず、俺も別に責めるつもりはないので、軽く言うの

である。

「そ、そうなんだ。びっくりしたよ、ハハハ」

と、そこで詩織さんは2人に言った。

「はい、それじゃあ2人共々、空いてる席に座ってちょうだい」

「は、はい」

瑞希ちゃんと沙耶香ちゃんは、やや恥ずかしそうに返事をする、俺と詩織さんの隣にある空いた席へと座る。

とまあそんな訳で、予想外の面子をここで向かえる事になり、また、今日はこのメンバーで休日を過ごす事になるのだった。

3月下旬

此処はG県の端に位置する山間地域。

日の光が大地を眩しく照らし始めた、とある日の朝の話である。

その山間地域の奥深くに小さな村があった。名前を荒守村あらいがみむらという。

50軒ほどの家々が集まった集落で、周囲は山林に囲まれている事もあり、外界と切り離されたかの様な雰囲気ふんいきが漂う所である。

集落内の家々は全て日本の伝統的な木造家屋で、築40〜50年は経過しているであろうという建物ばかりであった。その為、あまり派手な印象はない様相の村である。

また、標高がやや高い地域という事もあり、平野部では消えている雪も、この地域ではまだ雪が沢山残っていた。

山々はおろか、家々の屋根やその周囲にも、まだどっさりと降り積もった雪が残っているのだ。

その為、日の光が射す日中でも、この辺りはまだまだ冷たい空気に覆われているのである。

だがそれでも、1月の寒い時期と比べると雪も大分消えているので、除雪という作業から解放されているという事だけでも、此処に住む者達にとってはありがたい事であり、村の人々は気温の事など

はあまり気にせず、気楽に生活をしているのであった。

村の中を走る舗装された幾つかの道路には、車や人々の往来も急がず焦らずといった感じではあるが確認出来、そういった人々の動きがこの村の長閑さとして伝わってくるのである。

こんな長閑な村ではあるが、此処に住む人間はやはり年配の者が多く、若者はやや少ない。その為、限界集落と半ば化している村でもあるのだった。

そんな村内の片隅で、やや慌しい雰囲気となっている所があった。其処は神社と隣り合わせになった民家の前である。

その民家の前には2人の初老の男がおり、一人は眼鏡が特徴の男で、もう一人は口元を覆うかのように伸びた黒い髭が特徴の男であった。

2人共、背格好は似ており、中肉中背といったところである。

そして今、髭を蓄えた男の方が、眼鏡をかけた男に向かい、焦った様子で何かの説明をしている最中なのであった。

「や、八神さん。た、大変だ。荒守の洞窟から、何かが這って行った様な痕跡が、麓に向かって伸びている。まさか、封印が解けてしまったんじゃない……」

焦る男を落ち着かせようと、八神と呼ばれた男は宥めながら言う。「まあまあ、ちょっと落ち着け、山中さん。それは兎も角、その跡は熊かなんかじゃないのか？ この頃、暖かい日も続く様になってきたし」

だが山中と呼ばれた男は、尚も、慌てた口調と手振りで言った。

「く、熊はあんな溝を掘ったような深い跡はつかねえ。あ、あれは、ぜつ、絶対に熊じゃない」

「フム……。ところで山中さん、洞窟の中は確認したのか？」

焦る男とは対照的に、落ち着き払った口調で八神という男は尋ねる。

「いや、それが……。あまりにも異様な跡だったから、怖くなって帰って来たんだ。だから、中は見えていない」

山中という男は肩を落としてそう返事をした。

すると、八神という男は、顎に手をやり、暫し考えるのである。

そして20秒ほど目を閉じて考え込むと、山中という男に言った。「とりあえず、事情は分かった。だが、結論を出すのは荒守の洞窟へ行つて確認をしてからだ。私も今から準備をする。山中さんも、念のため、破魔弾と銃の用意をしてきてくれ。それから洞窟へ向かおう」

「あ、ああ、分かった。じゃあ、用意したらまた八神さんのところへ来る」

そう告げた山中という男は駆け足で走り去るのだった。

それから30分後。

八神と山中の2人は、防寒着に身を包み込み、ライフルを片手に村のやや下方に位置する、荒守の洞窟の付近へとやって来ていた。

近くに川が流れているのか、2人のいる周囲からは何処からとも無く、水流の音が聞こえる。そのほかに、木々の上からは時折、鳥の鳴き声も聞こえてくる。

そんな物音がする山の中を2人は進むのだが、周囲にはまだ雪もかなり残っている為、非常に歩きにくい状況となっていた。

しかし、2人はこの地に住む者である。そういった事は前もって重々承知している。その為、2人は昔ながらの木で作られた『かんじき』を両足に装着し、急な斜面を徐々に下へと降りてゆくのである。

また、雪のほかに、周囲には沢山の木々が密集している事もあり、日の光が満足に届かない。

そんな理由から、村の中と比べると気温が低くなっており、2人の吐く息は当然、真っ白いものとなっているのであった。

2人は、そんな寒く急な斜面をゆっくり降りてゆく。

すると木々の隙間から、雪の上に走る、黒い筋状の跡が2人の目に飛び込んできたのである。

八神と山中は、顔を見合わせると、一旦、足を止める。

そしてその黒い筋を目で追うのだった。

2人は、ある地点からそれが始まっているのを確認すると、移動を再開する。

そして、始まりの地点である大きな洞窟が視界に入ったところで、2人は思わず足を止めるのであった。

何故ならば……。

其処は誰が見ても異様と思えるような惨状になっていたからである。

洞窟入口には太い注連縄と格子状の扉が施されていたのであるが、今はもう見る影も無く、無残にも引き裂かれると共に砕け散っており、それらの破片が洞窟近辺に散らばっているのだ。

また、溝を掘ったかの如く異様な黒い跡が、洞窟から麓に向かって伸びており、その溝には所々にドロリとした緑色の液体が付着しているのである。

そうだった状況の為、この洞窟入口周辺は、ある種のおぞましい雰囲気漂う空間となっているのだった。

八神と山中の2人は、洞窟から伸びる異様な痕跡を見るなり息を飲む。

嫌な汗が2人の背中を流れる。

そして2人は暫くの間、無言で立ち尽くすのである。

そんな中、八神は震えながらも口を開いた。

「と、とりあえず、洞窟の中に行つて確かめよう。それと山中さん、破魔弾を装填して銃は何時でも使えるようにしておいてくれ」

八神の言葉に、山中は震えつつも無言で頷くと、肩に掛けたライフルに光り輝く銀色の弾丸を装填する。

それらの作業を終えると、山中は八神に言った。

「コ、コッチは準備OKだ。だが、何がいるか分からない。八神さんも十分注意して進んでくれ」

「ああ、それは分かっている。一応、この防寒着の下に霊装衣も着

てきたし、術具類も幾つか持ってきたから、少々の悪霊程度なら問題は無い。で、では行くこう……」

八神の言葉を合図に、2人は周囲に注意を向けつつ、恐る恐る、洞窟へと進んで行くのだった。

八神と山中は、洞窟内に入ると懐中電灯を灯して先へと進む。

外にいたときは聞こえていた、川の音や鳥の声も、この洞窟内ではまったく聞こえない。閉ざされた空間の様に、何一つ物音が聞こえないのである。

聞こえるのは2人が歩く度に出る足音だけ。そういった状況の変化から、2人の脳裏に言いようの無い不安が襲い掛かるのだった。

だが、意志の力でそれらを抑え込み、2人は洞窟の奥へと歩み続けるのである。

洞窟内は外の寒さと比べると、若干、温かい気温になっている為、2人の口から吐き出る白い息も、やや薄くなっていた。

また、その他にも湿度が高いのか、周囲の壁全体が湿った土の様に色が濃くなっており、懐中電灯が照らし出す部分には、霧状の靄もやが2人の視界に入ってくるのである。

その為、懐中電灯の明かりはあっても、非常に見通しの悪い様相となっているのであった。

だが、やや背の高い天井を持つ洞窟という事もあり、少々の障害物はそれ程気にしなくてもよいのが、今の2人にとっては唯一の救いとなっていた。

そうはいっても、洞窟内部の見通しが悪いので、途中、石に足が引っかかって転倒しそうになる時もあったが……。

そんな様相をした洞窟内を、2人は恐る恐る慎重に進んで行く。だが、進んで行くにしたがい、2人は吐き気みたいなものが込み上げてくるようになる。

何故ならば、カビくさい土の臭いに混じって、生き物の腐ったような腐臭が漂ってきたからである。

腐臭が鼻を刺激するようになると共に、2人は手で鼻を覆い隠す。そして目を細め、まだ見えぬ洞窟の先を凝視するのであった。

そうやって暫く進む内に、2人はやや開けた空間が広がる、行き止まりとなった洞窟最深部へと辿り着いた。

だが、其処へ辿り着くや否や、あまりの惨状に2人は驚愕するのだった。

2人の目の前には、粉々に砕け散った石像の破片が散らばっており、その石像が立っていたであろう下には、直径4mはあるうかという大きな穴が穿たれていたからである。

その穴の周囲にはドロリとした緑色の奇妙な液体が付着しており、それらがある一つの事実を物語っていたのだ。

八神は惨状を目の当たりにすると、その結論を即座に導き出す。

そして、カラカラに乾いた口内から搾り出すように、こつ呟いたのであった。

【な、なんて事だ！ す、魑魅すたまのふ、封印が解けている……。た、た、大変だ】

四拾参ノ巻

《四拾参ノ巻》 魑魅 二

一方、その前日……。

日が昇りつつある東の空を暫し眺めると、俺は大きく息を吐いた。息と共に、口から若干白い煙が勢い良く出てくる。

またその煙が、今朝の気温を物語っているのである。恐らく、今の気温は1 か2 くらいだろう。

後数日で4月とはいえ、やはり、朝と夜はまだまだ冷え込む日が続く。その為、俺は今、ダウンジャケットの様な保温に優れた衣服を身に着けているのだった。

そんな寒い外気を凌ぎながら、俺は周囲に視線を向ける。

やや薄暗い様相ではあるが、夜明けの光が地上に届き始めると共に、周囲の景色もぼんやりと浮かび上がってきた。

その様子は炙り出し絵の様に、徐々に浮かび上がるといった感じである。

そんな不思議な瞬間を暫し見詰めた俺は、此処に来た目的を思い出すと意識をそちらへと向けるのだった。

今、俺は高天智天満宮の裏山に來ている。

この裏山の頂も、去年最後に訪れた時と比べると、やや雑然とした様相となっていた。

目の前にある開けた広場には、落ち葉が何重にも重なって散らばっており、まるで焦げ茶色の絨毯を敷いたかのようになり、辺り一面に広がっていた。

また、奥にある小さな祠や東屋に視線を移せば、そこも広場と同じく、落ち葉や折れた枝等が所々に散らばっており、薄汚れた様相

をしているのだ。過酷な冬の跡といった感じである。

俺はそんな風に様変わりした頂の様相を一通り眺めると、とりあえず、やや大きめの黒っぽい岩が転がる広場の端へと移動するのであつた。

で、ここで何をしているのかというと……。

雪が消えた事と呪術業界の事が段々分かってきたという事もあり、一応、周囲を注意しながらではあるが、鬼一爺さんの教える古の霊術は今日から屋外トレーニングに移行する事になったのである。そういう訳で今日は、今年の屋外霊術修行の初日なのだ。

勿論、この事を知ってるのは俺と鬼一爺さんだけであり、他の訓練メンバーはおるか、土門長老や一将さんも知らない。というわけで、秘密の訓練なのである。

そして山道入口には、去年と同じ様に人払いの符も貼り付けてあるので、山に人が入らない様にも当然してある。

因みに去年よりも、かなり念入りに符を貼つてあるので、多分、大丈夫の筈だ。そう信じよう。……やや不安はあるが。

とまあそれはさて置き。

俺は岩の1mほど手前まで来ると、一旦、立ち止まった。

そして目の前の岩を暫しの間、ジツと眺めるのである。

岩の大きさは直径70〜80cmといったところで、一抱えでは手が届きそうにないほどの大きさだ。

重さは見た感じだと、100kg以上はありそうである。

そんなゴツイ岩を前にした俺は、大きく深呼吸をしながら目を閉じると、静かに霊力を練り始める。

また、必要な霊圧にまで高めたところで、俺はその霊力を両掌へと移動させるのであつた。

それから精神を研ぎ澄まし、一つ一つ、ややゆっくりとではあるが、両手で印を順に組み上げてゆく。

すると印を組むにつれて、掌に集めた霊力が圧縮されるかのよう
に、指先で集束してゆくのを俺は感じ始めるのだった。

そして最後の印を組み上げた、その瞬間。

印を組んだ指先から放出されるかの様に、青白く光り輝いた、細く鋭い霊力の刃が生まれたのである。

刃渡りは1mほどで、勿論、いつも使う霊刀とは違って重さはまったく感じられない。

またこの霊力の刃は、印を組むと言う方法で霊力を圧縮する術式を構成しており、そこから更に、練り上げた霊力を指先から放出するといった原理で出現している。

その為、理論上は俺の練り上げた霊圧が弱まれば、この刃も収縮して消え去るのである。勿論、組んでいる印を解いても消滅するが……。

まあ現代社会にある物で例えるならば、ウオーターカッターのよくな感じだろうか。兎も角、そんな感じなのだ。

そしてこの霊力の刃が出現したという事は、即ち、印術・飯綱の太刀が発動した事を意味するのである。

で、この飯綱の太刀であるが……。

今のこの光景を見た者は恐らく、こう思う……いや、言うかも知れない。

『すげー！ スーウォーズに出てくる、ジェダイのライトセーバーみてえだっ』と。

それ程に、色といい長さといい、似ているのである。

違いはと言えば、グリップ部分が無いのと「ヴォン」というあの独特な機械音が無いだけなのだ。

その為、俺はこの術を前回発動した時、映画の中でライトセーバーちゃんばらを練り広げるオビ・ンヤア キンの姿が脳裏を過ぎったのだった。

とまあ、そんなどうでもいい事はさて置き。

この飯綱の太刀。実は、まだ試し斬りはしてない。という訳で、今から目の前にある岩で、それをやるところなのである。

鬼一爺さん曰く、見た目は大丈夫でも斬れ具合を見てからじゃな

いと、本当に術が完成しているかどうかは、分からんそうである。因みに、岩で試せと言ったのも鬼一爺さんだ。本当にこんな岩が斬れるのかどうか分からないが……。

とりあえずそういう事なので、俺はその霊力の刃が出現したのを確認すると、目の前にある岩に向かい袈裟に振り下ろすのだった。

光の刃が何の抵抗も無く、斜めに岩をスツと通り過ぎる。するとなんとッ！

岩は鋭利な刃物で切断されたかのごとく、スパツと綺麗に両断されたのである。

そんな風に岩があつさり切断された為、俺は内心驚く。

またそれと共に、岩の綺麗な断面に目を奪われ、両手で組み続けた印を思わず解いてしまったのであった。

当然、指先から出ていた霊力の刃は、何も無かつたかのように消え去る。

俺が飯綱の太刀を解いたところで、鬼一爺さんが岩の傍に近寄ってきた。

そして（フオフオフオ、どれどれ）と言いながら、早速、爺さんは岩の切断面を確認するのである。

鬼一爺さんは、色んな角度から切れ具合を見回した後、陽気な口調で俺に言った。

（おお、エエ感じじゃ、エエ感じじゃ。もうこの術は大丈夫じゃな。フオフオフオ）

だが、陽気な鬼一爺さんとは違い、俺はこの術にちょっと恐怖してたりするのである。

理由は勿論、この異常な切れ味だ……。

この飯綱の太刀にかかれば、こんなゴツイ岩が豆腐状態なのである。

そんな凄まじい切れ味を見てゾゾツと寒気がしたので、俺は思わず言っただった。

「そ、そうかい。しっかし、恐ろしい程の切れ味を持った術だな……

…。なんか、やばいよこの術……。焼き切つて無いっただけで、切れ味はマジでライトセーバー並やんか……。コワッ」と。

誤って自分を斬ってしまったら……。なんて思うとゾクツとしてしまう術なのである。

という訳で覚えたにも拘らず、もう既に俺の中では、あまり使いたくない術の一つになってしまっているのだった。

まあ基本的に俺はビビリなのでしょうがない。

だが、そんな風に畏縮する俺を見た鬼一爺さんは、やや憮然とした表情で言うのである。

（何じゃ、涼一ィ。これしきの事で驚いておつたら、この先に待ち受ける術なんぞ使いこなせんぞい）

「フウ……。はいはい、分かったよ。まあ慣れるしかないか」

俺は鬼一爺さんの長い説教が始まりそうな気がしたので、これ以上余計な事は言わない事にした。

そんな俺を横目で見つつ、鬼一爺さんは続ける。

（では涼一、次にじゃが。このあいだ新しく教えた式符術と夜叉真言の修行じゃ。まずは式符術から始めようかの。ほれ、やってみい）

「はい、了解」

と返事をする、俺は霊符入れから一枚の符を取り出した。

因みにこの式符だが、2週間ほど前に爺さんから教えてもらった式符術だ。

今度の式符は、前回の小鳥の式符と比べると描く術式がかなり多いので、やや大きめの符となっている。

そして、これもまた前回と同じく、俺の血で直接描かれているので、痛い思いをして作った符なのである。

まあそれは兎も角。

俺は折畳みである符を広げると、符を成就させる術式部分に指先をあて、符の力を解放する。

と、その瞬間。

符は白い光の輝きに包まれ、ある形へと変貌を遂げ始めるのだっ

た。

手や足、そして頭といった物が形成され、次第に人型へと変貌を遂げ始めてゆき、また、背中からは黒い翼が現われたのである。

そして符の力を解放してから10秒ほどで、その式は完全体となつて俺の前に姿を現したのだった。

この式を見るのはこれで5回目だが、見るたびに、『これが、俺の分身なの？』と思つてしまふ。

何故ならば、この式の姿はモロに烏天狗からすてんぐの姿だからである。

顔や頭は、全体が黒い羽毛に覆われており、そこに瞳のない白い目と烏のような黒い嘴があるので、ほぼ烏の頭といつても差し支えない造形をしている。

また、その下の胴体はというと、山伏を思わせる様な白っぽい着物を身に纏う姿をしているのだ。

その他にも、足首から下は猛禽類のように鋭い爪が生えているという事もあり、人型ではあるが、明らかに人ではない存在なのであった。

背丈は140cm程なので、それほど大きくはない。人間で言えば、10歳から13歳くらいの子供の身長だろう。

だが、見た目が非常にインパクトのある式なので、初めて見た時は自分で作つといてなんだが、俺はちょっとビビつてしまったのだ。まあ仕方ない。だって怖いんだもんよ、この式の姿が……。

ゲームで出てくるとしたら、確実に敵の部類だろう。そう思わせるくらい、化け物っぽいのである。もし、ドクエなんかに出てきたらバギ系呪文を唱えてきそふな逸材である。

で、この式だが。実は出現させただけで、まだ操作は一度もしていない。

理由は勿論、俺の部屋の中だけでしか試してないからだ。

という訳で、今日はこの烏天狗の初操縦をするのである。

式の出現を確認した俺は、鬼一爺さんに視線を向ける。

すると鬼一爺さんは空を指差して言った。

(さて、それじゃ涼一。まずは、その烏天狗の式を空に飛ばして見せよ)

「おう、分かった」

中々手強そうな式ではあるが、俺は烏天狗を正面に見据えると、目を閉じて俺と式の繋がりを確認する。

それから、この式を操る為に精神を集中させたのであった

そして、その日の夜。

俺は毎日恒例になっている夜の合同修祓から帰ってくると、部屋の明かりをつけて楽な服装に着替える。

それからコタツやエアコン、そしてテレビの電源を入れ、これから訪れる人達を待つのだった。

俺は何気なく、テレビの上に置かれた時計を見る。今の時刻は1時30分。

時刻を確認した俺は携帯を充電器に繋ぐと、渴いた喉を潤す為に冷蔵庫へと向かった。

そして中から350mlの缶ビールを取り出すと、棚の上に置いてあるツマミの柿の種を持ってコタツへと入ったのである。

俺は早速、プルトップを起こしてビールを一口飲むと、柿の種に手を伸ばしてポリポリと食べながら一息ついた。

だが、そこで俺はある事を思い出し、机から一冊のノートと筆記用具を取り出すのだった。

そしてノートを開くと、今日の修祓を思い起こして、俺はそれらの内容を記述してゆくのである。

実は俺、この訓練が始まりだしてから、修祓内容を全てこのノートに記述しているのである。

理由は勿論、今後の為だ。経験というものは基本的に、忘れやすいものと忘れにくいものがあるからである。まあノートは一時的にメモしておく様な感じで、清書するのは後日パソコンでだが。

俺はそれらを書き終えると、またビールに手を伸ばして一息つく。それから、テレビの前にいる鬼一爺さんに視線を向けたのであった。

すると今日はいつもの爺さんとは違い、何かを考えるように、やや難しい表情をしていた。

多分、これからやって来る人達に話す内容を考えているのだろう。しかしまあ、俺には関係ない事だ……。

そう思いながら、俺はまた一口、ビールで喉を潤すのだった。こんな感じで暫く寛いでいると、ピンポンという呼び鈴が鳴った。

俺はコタツから出ると、ついでにテレビの音を小さくしてから玄関へと向かう。

そしてドアスコープで訪問者の確認をしてから、ドアを開いたのである。

ドアを開くや否や、訪問者は陽気な口調で挨拶をしてきた。

「おお、日比野君。すまんの、夜分遅くから」

ドアの向こうにいたスーツ姿の土門長老がそう言った後、続いて同じくスーツ姿の一将さんも俺に言うのである。

「先程、修祓を終えたばかりで疲れてるところを申し訳ない」と。

「いえいえ、気にしないで下さい。それでは土門長老に一将さん、狭いところですが、どうぞお上がり下さい」

俺は2人中へ入るよう手振りを交えて言った。

「では、お邪魔する」

「すまないね、日比野君。それじゃ、お邪魔するよ」

2人はそう言うと共に玄関を潜るのであった。

俺は2人をコタツの所にまで案内する。

そして2人が座ったところで、俺は一応、飲み物の確認をしたのだった。とはいってもビールかコーヒーかだが。

だが2人共、飲み物はいいと言って断ってきたので、俺はそこで

コタツに入る。

と、そこで土門長老は言うのである。

「日比野君。……来て早々で悪いのじゃが。鬼一法眼様を呼んでもらえるじゃろうか」と。

だが土門長老がそう言うや否や、俺が呼ぶまでもなく、鬼一爺さんは霊圧を上げて2人の前に姿を現したのだった。

鬼一爺さんの姿を視界に入れた2人は、背筋を伸ばして丁寧に頭を下げる。

そしてまず、土門長老から口を開いた。

「おお、鬼一法眼様。すいませぬ、こんな夜分遅くに……」

鬼一爺さんは2人を交互に見ると言った。

(うむ。それは構わぬ。……で、私の結論を聞きに来たのじゃったな)

「はい。して、鬼一法眼様。儂等の孫達はその御目にどう映りましたでしょうか？」

土門長老の言葉を聞いた鬼一爺さんは、少しの間、目を閉じる。

2人はやや緊張した面持ちで、鬼一爺さんをジッと見ていた。そんな2人を見た所為か、やや空気が重く感じられる。

そして20秒ほどが経過した頃、鬼一爺さんは目を見開き、2人に言うのだった。

(……では話そう。我が術を授けてもよいと思うた者は……宗貴に一樹、そして詩織と沙耶香の四名じゃ)

鬼一爺さんの言葉を聞いた2人は、暫くの間、固まったかのように無言で動かなかった。

その為、シーンと静まり返ったかのような静寂が、あたりを包み込む。

聞こえてくるのは、エアコンの送風音とテレビ番組の小さな音だけである。

そんな重苦しく、流れの塞き止まった空気の中。

まず最初に一将さんがホツとした様な表情になり、フウと大きく

息を吐いたのだった。

一樹さんと沙耶香ちゃんが合格したので、気が楽になったのだらう。

またそれと共に、塞き止めてあったかのような重い雰囲気も終わりを迎えるのである。

だが、それとは対照的に、土門長老はやや肩を落としているように見えた。

まあこれは仕方ない。

鬼一爺さんの言葉を聞く限りだと、宗貴さんと詩織さんは合格したが、明日香ちゃんは不合格という事なのだから……。

そして土門長老は大きく溜息を吐いた後、鬼一爺さんに視線を向け、ゆっくりと口を開いたのだった。

「そうですか……。やはり、明日香は駄目でございましたか」

土門長老の口ぶりでは、何となくではあるが、予想はしていた様に見える。

しかし、面と向かって言われたので、少しショックだったのだらう。

土門長老は続ける。

「鬼一法眼様……。明日香は、どの様なところが不味かったのですようか？ やはり、日比野君に対する日頃のやり取りが、不味かったのでしょうか？」

鬼一爺さんは腕を組みながら、首を左右に振ると言った。

（いいや。明日香は、我等の術を扱うのに、一つだけ足りぬものがあつたからじゃ。が、それは涼一の事とは関係ない。また、素養や天稟の事でもない……）

「では、一体？」

土門長老は尚もそう問い掛ける。

鬼一爺さんはその問い掛けに、目を閉じて暫し考え込むと言つたのだった。

（……それは兎も角、土門長老。この結果は、明日、皆に伝えるの

かの?)

「はい。一応、明日の朝、伝えようかと思っておりますじゃ。……ですが、明日香には言う訳にはいかぬでしょう。こうなってしまう以上、教えぬ方が良いと思いますからの」

土門長老はやや力なく、そう返事をした。

明日香ちゃんの事が堪えているのだろう。なんか知らんが、見ていると気の毒になってくる。

だが、土門長老の言う通り、術を教えられないのなら、知らせる訳にもいかないのは事実なのである。

辛いだろうな、土門長老……。

俺がそんな風に同情していると、鬼一爺さんは意外な事を口走ったのであった。

(いや、明日香もその場に連れて参れ。この集まりに参加する者が全員揃ったところで、我が直接、明日香に言おう……)

「エッそれはどう言う……?」

土門長老も、鬼一爺さんの言葉が意外だったのか、微妙な表情でそう問い掛けるのである。

すると鬼一爺さんは(今は何も考えず、我の言うとおりにせよ。以上じゃ)とだけ言うと、霊圧を下げて2人の前から姿を消したのだった。

そんな鬼一爺さんを見た俺と土門長老に一将さんは、互いに顔を見合わせると思を傾げた。

恐らく2人共、俺と同じで、鬼一爺さんの真意が分からないからだろう。

鬼一爺さんには何か考えがあるのかもしいないが、俺達からすると『訳が分からない』といった感じなのである。

だが、今の鬼一爺さんからは、それ以上の言葉が聞き出せそうにない。

その為、土門長老も渋々ではあるが、質問はこれで終える事にしたのである。

そしてこの後、俺達3人は明日の簡単な打ち合わせを少し行い、この場合は御開きになったのであった。

その翌日の朝。

俺は沙耶香ちゃん達の住むマンションに来ていた。また、今日は日曜日なので瑞希ちゃんも一緒である。

話は変わるが。昨夜、俺は瑞希ちゃんもこの結果発表の時、一緒にいてもいいのかわかを鬼一爺さんに確認した。

すると鬼一爺さんは少し悩んだ末、『別に構わぬ』という答えが返ってきたのである。

俺はこの時の爺さんの仕草が、いつもと少し違って見えたのと、その判断に少し違和感を覚えたのだ。

これは俺の主観だが、鬼一爺さんは瑞希ちゃんにだけは少し甘いような気がするのだ。まあ孫の様に思っているからなのかも知れない。だが、同い年の沙耶香ちゃんと比べると、やや甘い感じがするのである。

しかし、考えたところでそれ以上の事は分からないのと、あまり危険な目に遭いそうな事でもないの、次第にどうでも良くなり、俺はこの事については深く考えない事にしたのだった。

という訳で話を戻す。

俺達は沙耶香ちゃんの住戸にお邪魔すると、リビングへと案内される。

そして道間家の人々に挨拶をした後、コタツの空いている箇所には腰を下ろすのである。

するとそこで、沙耶香ちゃんは俺達に朝のコーヒーとココアを淹れる為、キッチンへと向かうのだった。若いのおもてなしの上手な子である。

そんな沙耶香ちゃんに感心しながら、俺はコタツに視線を移す。

コタツには俺達の外に一将さんや一樹さんもおり、気分良くコーヒーやお茶を楽しんでいる最中であった。また、それらのいい香りが俺の鼻を刺激する。

2人の服装に目を向けると、一将さんは紺のスーツ姿で、一樹さんは青いジーンズに黒い長袖シャツといったラフな私服姿をしていた。2人共、いつもと同じ様な格好である。

まあそういう俺達も、一樹さんとそんな変わらない格好であるが……。というか、他のメンバーも含め、いつも大体こんな感じの服装なのである。スーツを着ているのは土門長老と一将さんだけなのだ。

そして周囲に目を向ければ、いつも座学を行っているこのリビングの様相も、見慣れた変わらぬ光景なのである。

だが今日は、いつもとやや違っていている事があった。

それは一将さんの雰囲気である。

一将さんは昨日の鬼一爺さんの言葉を聞いて安心したのか、いつも以上にかなりリラックスしている様に見えるのだった。なんか知らんが、憑き物が落ちたかのように、晴れ晴れとした雰囲気である。多分だが、土門長老や一将さんはそれなりに緊張感を持って、この合同修被訓練を企画していたのだろう。

今の一将さんの表情を見る限りでは、特に俺はそう思うのだ。そしてそんな一将さんの影響もあってか、いつも以上に、このリビング空間はゆったりとした朝の一時となっているのであった。

まあそれは兎も角。俺は腕時計で時刻を確認する。

今の時刻は、午前9時15分。

因みにこの時間帯は、いつもならば座学が始まっている時間帯でもある。が、今日は座学は行われない。

何故ならば、昨夜も土門長老や一将さんと話していた通り、今日はこれから、この訓練を行っていた真相を皆に告げる事になっているからである。

だが、まだ土門長老達は此処に来ていない。

一応、昨夜の話では9時半から始めるという事だったので、土門長老達もそのうち来る筈だ。

フトそんな事を考えていると、沙耶香ちゃんがコーヒートココアを持って俺達のところにやってきた。

沙耶香ちゃんはそれらを俺と瑞希ちゃんに配り終わると、俺の隣にチヨコンと座る。

そしてニコリと微笑み、言うのだった。

「日比野さん。今日はこれから、お父様と土門長老からお話があるそうです。それで午前中の座学は無いそうですよ。」

「ああ、そうみたいだね。俺も昨日、一将さんと土門長老から聞いたんだ。」

と言った俺は、チラツと一将さんの顔を見る。

一将さんは笑顔でゆっくりと頷いていた。

すると沙耶香ちゃんは、やや驚いた表情で言うのだった。

「えっ、もう聞いているのですか?」と。

一将さんは言う。

「ああ。昨夜、私達から日比野君には伝えておいたからね」とすると今度は瑞希ちゃんが俺に尋ねてきた。

「日比野さん、今日は何の話があるんですか?」

しかし、どう答えていいものか俺は迷う。

という訳で俺は、判断を仰ぐ意味を込めて、一将さんに目で訴えかけるのだった。

それを汲み取った一将さんは機嫌よく笑顔で言うのである。

「高島さん、まあ時が来れば分かる。ハハハ」

と、その時。

リビング内に鐘の音色が鳴り響いた。

これは勿論、この住戸の呼び鈴である。

また、それが鳴り響くや否や、沙耶香ちゃんは即座に立ち上がり、玄関へと向かうのであった。

暫くすると玄関からは、数人の話し声が聞こえてくるようになる。声の感じからすると、どうやら土門長老や宗貴さんの様である。

また、それと同じくして詩織さんや明日香ちゃんの声も聞こえてきた。これはもう土門長老達で間違いないだろう。

そして、その土門長老達は暫くすると、沙耶香ちゃんに案内される形でリビングに姿を現したのであった。

リビングに来た4人は俺達に笑顔で朝の挨拶をした後、それぞれがソファーやコタツの空いた所へと移動する。

だがその時。俺は昨夜の出来事を思い出し、今来た土門長老達の表情をついつい見てしまうのだった。

宗貴さんに詩織さん、そして明日香ちゃんの3人は、いつもと変わらぬ表情をしているが、土門長老だけはやはり、少し元気が無い様に見える。

まあ俺は昨夜のやり取りを直に見ていたの、その先入観もあって、余計にそう見えるのかもしれないが……。

それは兎も角。

土門長老と一将さんの2人は、全員が腰を落としたのを確認すると、俺達に向かい合うように壁際へ移動して正座をする。

そして神妙な面持ちになって俺達の顔を見回した後、まず、土門長老が口を開いたのであった。

「……今日は、皆に重大な話がある。その為、本来ならば今は座学の時間じゃが、少し予定を変更させてもらう事にしたのじゃ。……で、その重大な話じゃが。今までお主等には黙っておったが、2月の末から今までの1ヶ月間、皆に訓練を行って貰っていたのには二つの理由があるのじゃ。一つは皆も良く知っている最初に説明した訓練目的じゃから、もう言わなくてもわかっておると思う。じゃが、この訓練にはもう一つ、皆には教えてない、隠れた目的があったのじゃ」

「「エッ、隠れた目的!?!」」

と、そこで宗貴さんや一樹さんが驚いた口調でハモリながら言った。

またそれと同時に、他の皆も互いの顔を見合わせて首を傾げ、ややざわざわとした感じになるのである。

それを見た一将さんは、皆に注意をする。

「静かに！　まずは、土門長老の話を聞きなさいッ」

土門長老は一将さんに、一度、軽く会釈をすると続ける。

「オホンッ。で、その隠れた目的なのじゃが。これについては儂等からではなく、もう一人の立会人から直に御説明を願おうと思っておる」

と言った土門長老は、俺に視線を向けると手招きをした。

俺はそれに従い、土門長老の隣へと向かう。

その途中、他のメンバーの表情をチラッと見た。すると、皆が一樣にポカンとした表情で俺を見詰めていた。

この急で突飛な事態についていけないのだろう。まあ俺が逆の立場だったら、同じ反応をしてると思うが……。

まあそれは兎も角。

俺が隣に座ったところで、土門長老は皆に言う。

「まず、皆に言っておかねばならぬ事がある。それは、もう一人の立会人というのが、この日比野君のお師匠様で在られる御方だからじゃ。その御方に皆は驚くかもしれないが、どうか落ち着いて話を聞いてもらいたい」

今の言葉を聞いた他のメンバーは、皆が口々に「日比野君の師匠？」「聞いてないわよ。というか、何処にいるのよッ、そんな人」といった言葉を発しながら首を傾げていた。

そんな風に、周囲が少しざわつく中、土門長老は俺の肩にポンと手を置くと言ったのだった。

「では日比野君。お願いする」と。

俺は頷くと、隣にいる鬼一爺さんに言った。

「鬼一爺さん……。皆に姿を現してくれ」

(ウム……)

鬼一爺さんはそう言つと共に、霊圧を上げて姿を現す。
その瞬間。

「な、何よッ！」とか「なッ！」といった驚きの声が聞こえてくるのだつた。

今、声を上げたのは土門長老のお孫さん達だ。

3人は鬼一爺さんの事を知らされてないから、驚くのも無理はない。

一方、沙耶香ちゃんや一樹さんは、今の流れで話の筋が分かってきたのか、落ち着いた表情で俺達を見詰めていた。

俺の位置から見ると、そんな土御門兄妹と道摩兄妹の対照的な相がハッキリと見て取れるのである。

またそんな雰囲気の中、鬼一爺さんは皆に視線を向け、ゆっくりと口を開くのだった。

(今、土門長老からも話があつたが、我が涼一の師である。名は賀茂在憲と申す者なり。今から800年ほど前の京の都で、陰陽師をしておつた者じゃ。まあ我を良く知る者達からは、鬼一法眼とも呼ばれておつたがの)

【き、鬼一法眼……賀茂在憲……】

息を飲み込みながらそう呟いた宗貴さんに詩織さん、そして明日香ちゃんの3人は、口が半開きになつたまま驚きの眼差しを鬼一爺さんに向けていた。

他の3人は良く知っている事情なので、先ほどから変わりなく、

鬼一爺さんを見詰めている。

鬼一爺さんは続ける。

(まあそれは兎も角じゃ。我はこの2人から、ある事を頼まれておつた。その為、姿を隠してお主等全員を暫くの間、見させてもらつたのじゃ)

宗貴さんは、目を閉じて静かに正座する土門長老をチラッと見た後、鬼一爺さんに問い掛ける。

「あ、ある事とは……一体？」

（それはの。我等が古来より伝承してきた秘術をお主等にも伝えて欲しいと頼まれたからなのじゃよ。土門長老等に聞いた話じゃと、今の世ではもう、我等の秘術は失伝してしまっているそうなのでな。……じゃが、我等の術は限られた者達の中で伝承してきた秘術じゃ。そう易々と誰にでも教える訳にはいかぬ。そこでじゃ。お主等が、術を授けるに価する者かどうか、暫くの間、見させてもらう事にしたのじゃよ）

今の言葉を聞いた皆は、顔が引き攣ると共に口を紡ぐのだった。その所為か、このリビングは先程の落ち着いた感じから一変し、一気に重苦しい雰囲気へと様変わりしたのである。

そんな息苦しい雰囲気の中、一樹さんは恐る恐る鬼一爺さんに尋ねた。

「そ、それでは……もう結論は出た。……という事なのでしょうか？」

鬼一爺さんはゆっくりと首を縦に振ると言った。

（うむ。もう十分、見させてもろうた。我の中ではもう、結論は出ている。……今からそれをお主等に告げようぞ）

それを聞くなり、皆は一樣に、やや強張った表情をする。

宗貴さん達3人兄妹は、先程からずっとそんな表情だが、一樹さんや沙耶香ちゃんも今度ばかりは流石に表情が強張っていた。

まあ抜き打ちのテストみたいなものだから当然だろう。

そして、今のこの状況で唯一、いつもと同じ雰囲気なのは瑞希ちゃんだけなのである。瑞希ちゃんの場合は多分、自分には関係のない話だ、と割り切っているからだろう。

だが、他のメンバーはそういう訳にいかない。

その為、全員が生唾をゴクリと飲み込み、鬼一爺さんの次の言葉を待つのであった。

鬼一爺さんは、そんな皆の表情を順に見てゆく。

それからもつたいぶった様に、ゆっくりと口を開いたのだった。

(では言おう……。この中で術を授けるに価するのは……宗貴・詩織・一樹・沙耶香の四名じゃ)

鬼一爺さんがそう告げた途端、室内がシーンと静まり返る。まるで時間が止まったかのような雰囲気である。

そんな奇妙な雰囲気ではあったが、時間が経過するにつれ、皆がその言葉を理解し始める。

またそれと共に、名前を呼ばれた者達はホツとした表情になり、肩の力を抜くのであった。

宗貴さんや一樹さん、そして沙耶香ちゃんは、憑き物が落ちたような表情になっていた。

だがしかし。

やや暗い影を落とす人物が2人いるのである。詩織さんと明日香ちゃんだ。

詩織さんは、不安げな表情で土門長老と明日香ちゃんを交互に見ていた。

土門長老は目を閉じ、静かに座している。

だが明日香ちゃんは納得がいかないのか、俯きながら身体をブルブルと震わせるのである。

とその時であった。

明日香ちゃんは意を決した様に勢い良く立ち上がると、俺達の方々に視線を向ける。

そして鬼一爺さんに詰め寄り、手振りを交えて捲くし立てる様に言うのだった。

「な、なんでよ。なんで私だけッ！ 日比野ツチに意地悪したから？ それとも素質が無いから？ な、何でなのよッ！」

明日香ちゃんの目は、ちよつと潤んでいた。

それを見た俺は、なんか心が痛む。自分の所為ではないのにも拘らず、ちよつとズキツときた。

だが、決めたのは鬼一爺さんだ。

で、その当人である鬼一爺さんかというと、何食わぬ顔で涙目の

明日香ちゃんを正面から見据えており、逆に問い掛けるのだった。

(私の結論が不服か？ 明日香)

「と、当然よ！ 何でなのよ……グスッ」

明日香ちゃんは涙を拭いながら、尚も問い掛ける。

鬼一爺さんは普段と変わらぬ口調で答える。

(明日香……涼一の事は関係ない。また、お主の素養や天稟に関しても、我が見た限りでは何も不味いところは無。じゃがの、明日香。お主には、他の四名と比べると足りないものが一つあるのじゃよ。その足りないものこそが、秘術を扱う者に一生付き纏うてくるものなのじゃ)

「た、足りないものって……グスッ……何よ？」

すると、鬼一爺さんは目を閉じて黙り込む。

そして10秒ほど経った頃、鬼一爺さんは目を見開き、明日香ちゃんに言うのだった。

(明日香。我等の秘術をどうしても身につけたいか？)

「と、当然よ！ 平安の世の術は、今はもう失伝して無いんだから……グスッ」

明日香ちゃんは鼻声でそう答えると、鬼一爺さんは静かに言った。

(そうか……ならばお主に今一度、猶予を与えよう。今日より七の夜を迎えるまでに、お主に足らぬものをお主自身の手で見つけ、我に伝えよ)

「そ、それが出来たら教えてくれるの……」

(うむ。それが合っていたら、我等の秘術をお主にも授けよう。但し、足らぬものを見つけるに当たり、一つだけ条件がある。今日から七夜の間の修祓は、涼一と行動を共にするのじゃ。それが私の条件である)

鬼一爺さんの話を他人事の様聞いていた俺は、意外な展開になったので、思わず「へっ？」と間の抜けた声を出してしまった。

またそれと共に、鬼一爺さんへ視線を向けるのである。

だが、鬼一爺さんの飄々とした表情からは、何も読み取れない。

その為、俺は首を傾げるのだった。

俺と一緒に修被つて、一体どういつつもりなんだ？ このジジイは……。訳が分からん。というか、明日香ちゃんに足らんものって一体なんなんだ？

なんて事を考えていると、明日香ちゃんは涙を拭いながら俺の前に来るのである。

そこで明日香ちゃんと目が合う。

すると明日香ちゃんは俺に頭を下げて言うのであった。

「日比野ツチ……そういう訳だから、今日から宜しくお願いします」と。

「え〜と、此方こそ？」

俺は唐突な展開だったので、首を傾げつつ、疑問系で返事をしてしまった。

と、その時。

何処かで携帯が、けたたましく鳴り響いたのだった。皆の視線が着信音の発信源へと向かう。

すると発信源は、どうやら一将さんの様であった。

一将さんは「失礼……」と、鬼一爺さんや土門長老に言うてから、上着ポケットの携帯を取り出して電話に出る。

そして立ち上がると別の部屋へと移動するのである。

だが、その移動した部屋から突然、一将さんの大きな声が壁越しに聞こえてきたのだ。

【な、なんだつてツ！ それは本当かッ。ま、間違いないのだな、八神さん！】と。

リビングにいる皆は、その声にビックリして一将さんのいる部屋へ視線を向ける。

だが、大きい声だったのはそれだけで、それから後は一将さんも幾分かトーンを下げて話し始めたので、会話の内容は良く分からない。が、何となく差し迫った感じである事は、先程の一将さんの声色から俺にも伝わってきた。

何か不味い事が起きたみたいである。

そして約5分後、一将さんは非常に険しい表情でリビングに現われたのであった。

一将さんは皆に目を向けると言った。

「土門長老に宗貴君。そして一樹。あと日比野君と鬼一法眼様もちよつと来てもらえるだろうか。他の者達は少しの間、待っていて欲しい」

名前を呼ばれた者は、微妙な表情で互いに顔を見合わせながらも立ち上がる。

そして、一将さんがいた部屋へと移動するのだった。

畳が敷かれた6畳の和室に案内された俺達は、適当に空いてる箇所へ腰を下ろす。

皆が座つたところで、土門長老は口を開いた。

「道間殿、一体何があったのじゃ？ 先程の様子じゃと、かなり切迫した感じじゃったが……」

額に汗を浮かべた一将さんは、眉間に皺を寄せ、険しい表情で話し始めた。

「土門長老、非常に不味い事が起きました。今、我等、道摩家縁の者から連絡があったのですが、G県の荒守村にある魑魅すだまの封印が何者かによって解かれたそうなのです」

「なんですとツ、父上。それは本当ですかッ！」

一樹さんはそれを聞くなり、目を大きく見開いた驚愕の表情でそう言った。

その表情を見る限りでは、相当ヤバイ事態の様である。

だが俺はチンプンカンプンである。スダマと言われてもサッパリだ。

因みにスダマと聞いて真っ先に思い浮かんだのが、『くす玉』なのは内緒である。言ったら確実にKYになるだろう。

隣の鬼一爺さんに目を向けると、何やら考えているようであった。

とりあえず、分からんので後で聞いてみよう。

俺だけなんか場違いな気がするが、それは兎も角。俺は水を差さないように注意し、話に耳を傾けるのである。

土門長老は顎の長い髭を撫でながら言う。

「魑魅か……。道間殿、その魑魅はどんな種類の奴じゃ？ 封印されておつたのなら、かなりの大物じゃと思うが」

その問い掛けに、一将さんは首を左右に振りながら言った。

「それが、実はどんな化け物なのかは分からないのです。しかし、あの地に封じられていた魑魅は今から400年以上前らしいのですが、その当時、封印を施した先祖が記した書物には、こう記述されておりました」

一将さんは一呼吸、間を置いてから話し始める。

「【荒守の地に眠る魑魅、『黄泉』の封印を解いてはならん。

解けば大きな災いとなり、数多の人々に襲い掛かるであろう】

と……。土門長老も黄泉という名はご存知の筈。道摩家の古文書によると、それがあの地に封印されているらしいのです」

すると土門長老は、今の話を聞くなり、血相を変えて言うのであった。

「黄泉じゃとツ！ 道間殿。それは、その昔……。幾つもの村や町の人々を飲み込み喰らい尽くしたといわれる、あの黄泉かツ！？」

一将さんは目を閉じて深く頷くと、喉元から搾り出す様に言うのであった。

「古文書の記述に間違いがないのならば、恐らく、その黄泉かと思われます」と……。

四拾四ノ巻

《四拾四ノ巻》 魑魅 三

一方……。

涼一達が移動した後のリビングでは、瑞希や沙耶香が不安そうな表情で、その移動先の和室へと視線を向けていた。

また、先程まで鬼一法眼に強く訴えていた明日香でさえも、この突然の事態に驚き、無言で和室を見詰めているのだった。

その為、リビング内は先程までの喧騒とは打って変わり、シーンとした静寂に包まれているのである。

だがその時。

やや不穏な空気に包まれたこのリビングの中でただ一人、明日香へと視線を向けていた詩織は、そっと明日香の傍へ移動する。

そして明日香の肩にポンと手を置き、優しく声を掛けたのだった。

「明日香……。大丈夫よ。明日香なら見つけられるわ。」

詩織の接近に気付いていなかった明日香は、ビクツとしながらも詩織に振り向く。

「お、お姉ちゃん……。」

そして涙で濡れた目元を手で擦り、やや無理をしながらではあるが微笑むのだった。

詩織もそんな明日香に微笑み返すと言った。

「ウフフ。それにしても、日比野君の師匠が、あの鬼一法眼様だなんてビックリしたわ。架空の人物かと思っていたのに、本当に実在してたなんて。しかも、鬼一法眼様は賀茂家の方だったのね。」

それを聞いた明日香は、先ほどのやりとりを思い出す。

すると頬を膨らまして言うのだった。

「本当よッ。お爺ちゃんも酷いわッ。こんな事を黙ってるなんて……」

「まあまあ落ち着いて、明日香」

詩織は笑顔を浮かべながら、憤る明日香を宥めた。

と、そこで、瑞希や沙耶香も2人の方へとやってくる。

すると瑞希が明日香に向かい控えめに言うのであった。

「明日香さん……お爺さんも、明日香さんなら見つけられると思って、ああ言っただと思えます。……私が言つと、あまり説得力が無いかも知れないですけど」

瑞希は声のトーンを幾分落として言い終えた後、肩を窄める。

明日香はそんな瑞希に微笑み返すと頭を撫でる。

そして明るい口調で言つた。

「ありがとね、瑞希ちゃん。頑張るわッ。だって悔しいもん」

すると、撫でられた瑞希は照れたのか、はにかんだ笑顔を浮かべるのだった。

だが詩織は、今の話にやや引つかかる部分があった為、瑞希にそれを問い掛ける。

「ところで高島さん。今の口ぶりからすると、鬼一法眼様の事を知っていたの〜？」

詩織の言葉を聞いた瑞希と沙耶香は、互いに気まずい表情で顔を見合わせる。

そして互いに一度頷いた後、沙耶香は申し訳なさそうに言うのだった。

「はい……。実は前もって土門長老やお父様から、黙っている様にと言われていたのです。3人を騙す様な形になってしまったのを深くお詫びいたします……申し訳ありませんでした」

とそこで沙耶香は詩織と明日香に向かい、深く丁寧に頭を下げた。瑞希もそれに倣い沙耶香と共に頭を下げる。

沙耶香は頭を上げると続ける。

「ですが、理由までは私達も聞かされておりませんでした。ですの

で、鬼一法眼様が隠れて私達を見定めていた、と言う事までは私も知らなかったのです」

沙耶香の言葉を聞き終えた詩織と明日香は、キョトンとした表情で互いに顔を見合わせる。

すると詩織はフウと軽く一息吐き、今までの事を思い返ししながら言うのだった。

「そうだったの。……どうりでお爺さんの様子が、いつもと違うような気がしたわけだわ」

そこで明日香が、瑞希と沙耶香に問い掛ける。

「日比野ツチと鬼一法眼様って、かなりおかしな組み合わせなんだけど。どういった経緯で師弟の関係になったの？」

瑞希は言う。

「私も何処で出会ったのかまでは、ちよつと分らないです。でも、お爺さんが言うには、日比野さんが今現在、唯一のお弟子さんだそうですよ」

沙耶香も瑞希に続いて言う。

「それと鬼一法眼様が言うには、日比野さんが教えた者達の中で、一番優れた素質を持っているとも言っております」

明日香は2人の話を聞き、暫し考える。

しかし、特別これといって驚くような事実でもない為、再度尋ねるのだった。

「そうなんだ。まあ確かに、日比野ツチは素質あるわね。……他に何か無いの？ 例えば鬼一法眼様の事とかで」

だが瑞希と沙耶香は、特に何も思い浮かばないのでウーンと唸りながら首を捻る。

するとその時。

詩織がポンと手を打ち、言うのだった。

「あつそういえば」

「何？ お姉ちゃん」

明日香は意外なところから声が上がったので、やや驚きつつも尋

ねた。

「この間なただけど。和風カフェで日比野君に師匠の事を聞いたら、水 黄門が好きな人とか言ってたわ。鬼一法眼様はそんなの見てるのかしら？」

「お、お姉ちゃん。そ、それは別にどうでもいいわ……」

明日香はマイペースな姉の言葉に、ややガツクリとなりながらそう返事した。

だが詩織は、空気を読まずにニコニコと言うのである。

「あら、そうなの？ でもそれぐらいしかないわね……」と。少し間を空けて詩織は続ける。

「でも今話を聞いたら、お爺さんが私にお見合いみたいな事をさせた理由も、なんとなく分かったわ。日比野君が鬼一法眼様に認められた人だからなのね。やけに張り切ってたから、変だなあって思ってたのよ」

「そういうお姉ちゃんだつて、満更でもないんでしょ？ でも、お姉ちゃんと日比野ツチって、なんかある意味お似合いかもね。クスクス」

明日香からすると、涼一と詩織は共にどこか抜けた様なイメージがあるので、似たもの同士に見えたのである。また、それが可笑しくなってしまうそう口にしたのだった。

だが、それに待ったを掛ける者達がいた。

瑞希と沙耶香である。

2人は声を八もらせながら、やや低い声色で明日香に言った。

「明日香さん、それは駄目です！」と。

「エッ？ 2人共……ど、どうしたの急に……」

明日香は瑞希と沙耶香の雰囲気が一変した為、ややたじろぐ。

詩織はそんな2人に向かいニコニコと微笑むと、明日香に言った。

「ウフフ。2人はねえ、私のライバルなのよ」

「へ、へえ〜そうなんだ……。なるほど」

明日香はそう返事をしつつも、こう思っていた。

あの男の一体どこが良いんだろう？ 全然、魅力を感じないんだけど……と。

だが、そんな風に考える明日香を他所に、3人の間からは笑顔でありながらも妙に緊迫した空気が漂い始めていた。

明日香はそんな3人の様子を見て苦笑いを浮かべると、漠然とではあるがさっきの事を考えるのである。

鬼一法眼の言っていた自分に足りないものとは何かを。また、どうやってそれを見つけて出すかを。

それらに意識を向け、真剣に考え始めるのであった。

それから1時間後

俺達は今、高天智市のインターチェンジから高速自動車道に入り、G県へと向かっている最中だ。

G県に向かう理由は、勿論、スダマの対処をする為である。

あれから暫く話し合った結果、とりあえず夜になる前に現地に入って、今やれる最低限の事はしておこうという話になったからだ。

因みに、何故、夜になる前に行かなければならないのかというと、それはスダマに限らず、負の霊力を身に纏う化け物や悪霊は夜になると活発になるからである。

活発になる理由は俺も詳しくは分からない。

だが夜になると地霊力というものが地表に漂いやすくなるので、恐らく、それが関係しているのだろう。

以前、鬼一爺さんもそんな事を言ってたから、間違いないはずだ。またその他にも、月の満ち欠けや季節によっても、そういった悪霊達の変化があるような事を鬼一爺さんは言っていた。

よって、地霊力というものは昼夜の変化だけではなく、地球上にある様々な自然現象とも密接にリンクしているみたいなのである。

とは言うものの、これらのメカニズムについてはいまいち良く分

からん。が、俺が思うに、自然現象と共に幽世と現世が遠くなったり近くなったりしてるのかも知れない。まあこれは俺の自論なのでアテにはならんが……。

それは兎も角、俺達はそういつた理由から、G県へと急ぎ向かっているのであった。

G県へは2台の車で向かっており、運転者は宗貴さんと一樹さんだ。車は勿論、2人が所有するランドクルーザーとレガシーである。で、俺は一樹さんのレガシー後部座席に乗っており、助手席には一将さんの姿がある。レガシーの車内は俺を含めてこの3人だけだ。また、宗貴さんの運転するランドクルーザーには、土門長老と明日香ちゃんに乗っている。向こうもコッチと同じく3人である。という訳で、俺達は計6名の人員でG県へと向かっているのである。

因みに瑞希ちゃんや沙耶香ちゃん、そして詩織さんの3人は高天智市でお留守番となっている。

理由は、今回ばかりは流石にヤバイ修被になりそうなので、慣れた修被者だけで行くと土門長老と一将さんが決めたからである。

だがそのかわり、ただのお留守番という訳ではない。

現地での成り行き如何によっては、色々と困難な事が待ち受けているかも知れないので、緊急時の調べ物と、天目堂や鎮守の森への橋渡しとしての役目を与えられているのである。

まあそんな理由から3人はお留守番なのであるが、本来ならば此処にもう一人加わるのが当初の予定であった。

そのもう一人とは、勿論、明日香ちゃんである。

しかし、それにもかかわらず、何故、明日香ちゃんが俺達と共に来ているのかというと……。

明日香ちゃん自身が、鬼一爺さんの課題に対してかなり強い意気込みを持っていたので、その熱意を受けて土門長老達も渋々ではあるが許可したからなのであった。

だが実際のところ、土門長老が許可したのは、（ならば、涼一や他の者達を良く見て、己を見詰めてみよ）という鬼一爺さんの一言があったからだろう。土門長老も最初は反対していたし。

まあそういつた事もあって、本来ならばお留守番の筈の明日香ちゃんも同行しているという訳である。

だがしかし。

明日香ちゃん以上に場違いなのは、この俺だろう……。

何故なら、30分前にマンションであったスタマの話にも、まったくついていけなかったからである。

話を聞いた感じでは、ヤバイという事は分かるのだが、肝心のスタマが何なのかが分からない。なので、全体的に『日本語でok?』に近い感じなのである。

まあ他の皆もどんな化け物なのかは分からない様ではあったが……。

それは兎も角、俺は皆以上に訳が分からん状態で同行しているので、やや気まずい心境なのであった。

土門長老や一将さんがこんな俺を同行させたのは、恐らく、鬼一爺さんの知識を頼りにしているからだろう。俺もそれに異論はないが、とはいえ、何も知らずについて行くというのは、流石に居心地の悪いものである。

勿論、俺もスタマの事を尋ねようとは思った。

だが、あの緊迫した空気の中で水を差すような事はできなかったのだ。

あの場で「スタマって何ですか？」と聞いたら、多分「後にしてくれないか!」と一将さんに真顔で言われただろう。

それ程に切羽詰った雰囲気だったのである。

という訳で俺は何も知らずに今に至るのだった。

俺は今、『どのタイミングで尋ねようか?』と思案している最中である。

だが、助手席と運転席に座る一将さんと一樹さんはさつきから言葉少なな為、妙に言い出し辛い雰囲気なのだ。

その為、俺は車に乗ってからずっと悩んでいるのである。

ああ、肝っ玉の小さい自分が恨めしい……。

ハア、なんかきつかけがあればなあ……。

などと思いつつ、高速道路の路面をぼんやりと窓ガラス越しに眺めていた、丁度その時。

隣にいる鬼一爺さんが、俺に話し掛けてきたのであった。

（涼一。ところでお主、先ほどの話に出てきた魑魅というのは、何か分かっておるのか？）

それを聞いた瞬間、俺は思わず心の中で『ナイスタイミング！』と叫んだ。

また、このチャンスを逃すまいと、早速、俺は鬼一爺さんに尋ねるのである。

「おお、それなんだけどさ。知らないんだよ。さつきは話の腰を折りそうな感じになると思ったから聞かなかったんだ。で、スタマツてなんなの？」

（フオフオフオ、相変わらず小心者じゃな涼一は）

鬼一爺さんは、いつもと同じくニコヤカに嫌味を言った。

いつもなら、少しはムカツとくる言い方ではあるが、今のこの状況では凄くありがたい言葉に思えた。

「はいはい、どうせ俺は小心者だよ。まあそれは兎も角、スタマツて何なの？」

（魑魅とは、山の瘴気が寄り集まってできた物の怪の事じゃ。漢字で書くと魑魅魍魎の魑魅の部分こそう読むんじゃよ。因みに魍魎は、川や湖といった水気の多いところで生まれる物の怪の事じゃ）
「ふ〜ん、瘴気が寄り集まってできた物の怪ねえ……。という事は、悪霊の塊みたいなもんか……」

瘴気というのは基本的に負の地霊力なので、俺はそう呟いた。だが鬼一爺さんは、俺の言葉に頷きつつも険しい表情になる。

そして目を閉じ、ゆっくりとした口調で言うのだった。

(まあ確かにそうじゃが、この魘魅という奴は長い年月をかけて生まれたものと、ある日突然、生まれてくるものがあるのじゃよ)

「ある日突然？」

といいながら俺は首を傾げる。

(ウム。それで実はの、涼一。長い年月をかけて生まれる魘魅はそうでもないんじゃが、この、ある日突然生まれてくる魘魅というのが、厄介な物の怪になるのじゃよ)

「や、厄介な物の怪？」

鬼一爺さんは腕を組んで深く頷くと続ける。

(そうじゃ涼一。で、この突然生まれるという魘魅じゃが。実は幾つもの偶然が重なって生まれてくるのじゃ。涼一ももう分かっていると思うが、大地には負の霊力だけが噴出す龍穴というものがある。その龍穴付近で一度に多くの負の霊魂が集まると、恐ろしく強大な力を持つ邪悪な魘魅が出現する場合があるのじゃよ)

「お、恐ろしく強大で邪悪……ど、どういう事？」

鬼一爺さんがいつもより低い声色なのと、内容が重いので、俺はちよつとビビりながら尋ねた。

すると鬼一爺さんは、俺の顔を見ながら同じ調子で言うのだった。(……一度に多くの負の霊魂が集まると言う事は、同じく、一度に多くの負の念も集まるといふ事じゃ。もう分かるじゃろう、涼一。そこからは強大な負の霊力を持ち、尚且つ、恐ろしく歪んだ念を持つ物の怪が生み出されるといふ訳じゃわい)

なんか知らんが、その魘魅ができる過程からヤバイ化け物という事は何となく分かる。

そして鬼一爺さんがこの話を今したという事は、恐らく、黄泉という魘魅はその可能性が高いという事なのだろう。

だが、一度に霊力が集まるといふ現象がイマイチ良く分からん。

その為、俺は生唾をゴクリと飲み込みながらも聞いてみた。

「鬼一爺さん。い、今、一度に負の霊魂が集まるといったけど、ど

ういう事なの？」

俺の問い掛けを聞いた鬼一爺さんは、一度天井を見上げる。すると何かを考えているのか、少し間を置いてから話し始めた。

（フム……まあこれは一つの例えじゃが。よくあるのは、そういった場所で多くの者達が無念な気持ちを抱いて死んだ場合とかじゃない……。戦なんかがあった時はそういう事が起きやすいからの）

俺はそこでマンションでの話を思い出す。

一将さんの話では、この魍魎が封印されたのは400年以上前らしい。

今から400年前というと、大体、西暦1600年程である。そしてこの1600年といえば、歴史に疎い俺でも良く知っている、ある出来事があった年である。そう、関が原の合戦があった年なのだ。

しかも今向かっているG県には、この戦いが行われた関が原があるのである。

これは偶然だろうか……。俺はここである仮説を勝手にたてた。

黄泉という魍魎は、この戦で散った武士達の負の霊魂によって生まれた物の怪じゃないのだろうか、という仮説である。時期を考えると無関係ではないように俺には思えるのだ。

だが、これはあくまでも俺の想像の域を出ないので、とりあえず、これについては保留という事しておく。

俺は、鬼一爺さんの言った内容を総括した。

「……じゃ、じゃあつまりだ。そういった事が負の龍穴の近くで起こった場合は、厄介な魍魎になりやすいって事か」

鬼一爺さんの話を聞く限りだと、色んな偶然が重なり合って生まれる化け物のようだ。

なんか知らんが、妙なメカニズムである。

だが悪霊は負の地霊力に引き寄せられるので、結果的にそういうことが起きて、おかしくはないのかも知れない。

確証はないが、大地から出てくる地霊力が、霊体同士を繋ぎ合わ

せる役目をしてしまうからなのかも……。

などと俺が考え込んでいると、鬼一爺さんは遠くを見るかのよう
に目を細めて言うのだった。

（まあそういう事じゃ、涼一。そして……そうやって生まれた魑魅
の事を我等は祟り神や荒神と呼んでおった。それ程に威を振るう物
の怪という事じゃ。先程あつた皆の話を聞く限りじゃと、恐らく、
その黄泉といわれる魑魅も、そういった過程で生まれた物の怪なの
かも知れぬの……）

そう言った鬼一爺さんは、何処となく悲しい表情をしていた。

まあ今の話を聞いた感じでは、それも分からんでもない。

「祟り神……か。生まれる過程を考えると、確かに祟りなのかもし
れないね……。荒んだ世が生み出す化け物なのだから」

そう呟くと共に、俺の中で言いようの無い不安が襲い掛かってく
る。

多分、相当にヤバイ化け物なのだろう。鬼一爺さん自身がそう言
うくらいだから。

だが鬼一爺さんはマンションでの話し合いの時、土門長老達の対
処法に頷きつつも、他に色々と考えているような感じであった。

でないと、流石の鬼一爺さんも明日香ちゃんを同行させなかつた
筈である。

それと今まで見てきてわかつた事だが、鬼一爺さんは結構用心深
い性格なのだ。考えなしに突っ走る性格じゃない。多分、今も色々
と考えているはずだ。

俺はそれが気になったので、とりあえず聞いてみた。

「ところで鬼一爺さん。そんな化け物相手に、一体どうやって対処
するんだ？ マンションでは色々と考えてるような感じだったけど
さ……。なにか良い方法でもあるの？」

すると助手席で静かに俺達の話を聞いていた一将さんも、ハツと
此方に振り向く。

そして鬼一爺さんに、期待のこもった眼差しを向けて言うのであ

った。

「そうなのですか、鬼一法眼様。なにか良い妙案があるのでしょうか？」

鬼一爺さんは俺と一将さんに視線を向ける。

すると腕を組み、やや難しい表情で言うのである。

（ウム。まあ封印するにしろ退治するにしろ、色々と方法はある。じゃが……どのような魑魅か見てからでないと、それは言えぬの。人や獣を喰らって力をつけてゆくにしたいがい、魑魅は変化をするからの。時機を逸すると手も変えねばならんのじゃよ）

「フウウ。という事は、魑魅の変化次第ってことか……かなり面倒な相手だね」

俺は腕を組んで溜息を吐くと、そう呟いた。

続いて一将さんが、期待を込めた口調で言うのである。

「……そうですか。では鬼一法眼様。その時は是非、お力添えの方を宜しくお願い致します」と。

（まあ兎に角じゃ。見てみん事には始まらぬわい）

鬼一爺さんはそう言うのと静かに目を閉じる。

それと共に、車内はまた暫しの間、口数の少ない重苦しい雰囲気へと戻ってゆくのだった。

そして俺達は、まだ見ぬ魑魅の不安を抱きながら、高速道路を突き進むのである。

その涼一達の後方には……。

1台の黒いスポーツカー・スカイラインGT-Rが、涼一達の後を付けるように、やや距離を取りながら移動していた。

そしてこの車の運転席と助手席には、英章の部下である秀真と摩耶の姿があるのであった。

2人は共に深い紺色のスーツ姿である為、春の日差しが降り注ぐ

外と比べると、車内はやや暗い様相となっていた。

後部座席には幾つかの荷物があるだけで、誰も乗ってはいない。車内はこの2人だけである。

また、車内にはナビゲーションシステムが取り付けられているが、今は稼動していない。

それらは今、オーディオとして使われており、車内に取り付けられたスピーカーからは品の良いクラシック音楽が程よい音量で流れている。その所為か、車内は暗い様相ながらも非常に落ち着いた空間となっているのであった。

そんな様相をした車内にて、2人は今、前方に小さく見えるランドクルーザーとレガシーに視線を向けていた。

ハンドルを握る秀真は前方を真っ直ぐと見据えながら、隣の摩耶に話しかける。

「摩耶、英章様も言っていたが、今回はかなり物騒な中での調査になる。準備はちゃんとしてきたか？」

「ええ、ご心配なく。それは大丈夫よ。身を守る術具から、彼らを撮影する機材まで、すべて抜かりないわ」

摩耶はそう答えると後部座席にある荷物を一瞥した。

「そうか。ならいい」

と返事した秀真は僅かに口の端を吊り上げる。

そんな秀真の横顔を見た摩耶は、昨日の昼頃にあった英章との話を思い浮かべるのだった。

昨日

英章に呼ばれて、秀真と摩耶は、とある建物へとやってきていた。2人は白い壁と灰色の床が特徴の通路を脇目も振らずに進んで行くくと、美しい木目が映える茶色の扉の前へ辿り着く。

そしてその扉をコンコンと2回ノックしたのである。

すると中から、男の声が聞こえてきた。

「……誰だ？」

秀真は背筋を伸ばし、はっきりとした口調で返事をする。

「英章様、秀真に摩耶でございます」

「……入れ」

「はい、失礼します」

と言った後、秀真はノブに手を掛けて扉を開く。

そして2人は室内へと入ってゆくのであった。

扉の向こうには20畳ほどの広さを持つ縦長の部屋があり、左右の壁には背丈が天井まである重厚な木製の本棚が、壁の半分を占有するかのようにならんでいた。

本棚にはショーウィンドウの様にガラス戸が設けられており、そのガラス戸の向こうには幾種類もの書物が隙間なくギッシリと詰まっていた。

また、そこ並んでいる書物の背表紙は、仕切りごとに色や柄が統一されている事もあり、本棚というよりも、ある種の工芸品を思わせるような光景となっていたのであった。

それ以外に目を移すと、床には分厚く儼かな雰囲気を持つ茶色の絨毯が敷かれており、天井には豪華な意匠をあしらった照明器具が、室内を程よい明るさで照らし出しているのである。

これらの様相を見た者は、恐らく、豪華な書齋といったイメージを持つであろう。

そして、そんな室内の奥には、この部屋の主が座る高級感が漂う書齋机があり、その後ろに今はブラインドで閉ざされた、この部屋唯一の窓があるのであった。

書齋机には茶色のスーツに身を包む英章が、黒革の長い背もたれが特徴の社長椅子に、ゆつたりと腰掛けていた。

部屋に入ってきた秀真と摩耶の2人は、その書齋机に前になると深く一礼をする。

そんな2人を見た英章は、微笑を浮かべると口を開いた。

「久しぶりだな、2人共。元気そうで何よりだ」

「「お久しぶりでございます。英章様」」

2人は神妙な面持ちになり、声を揃えてそう返事した。

英章は言う。

「では、まずこれまでの報告書の方を見せてもらおうか」

「はい、少々お待ち下さい」

摩耶は手に持った鞆からA4サイズのファイルとフラッシュメモリーを取り出す。

それを英章が見やすいように向きを変え、摩耶は手渡したのだった。

英章はそのA4ファイルを手に取り、とりあえず、パラパラと捲る。

暫くの間、ファイルを無言で流し見たところで英章は口を開いた。

「……フム。道摩家と宗家は、依然として、合同修被訓練を行っているか……。ご苦勞な事だ。まあそれは兎も角だ。この間、摩耶からメールで送られてきたあの男の写真だが、つい先日、空港を発つ前の眩道齋殿に私が直接確認をした」

摩耶はその言葉を聞き、ピクツと僅かに反応する。

そして尋ねた。

「それで、結果の方はどうでしたか？」

英章は摩耶に向けて不敵な笑みを見せると言った。

「クククツ、眩道齋殿が言うには、あの男で間違いないそうだ。写真を見せた瞬間、目の色を変えて怒りに打ち震えていたからな。先ず、間違いないだろう。恨みが晴れぬまま、日本を発つ事になった眩道齋殿には気の毒だな。クククツ」

摩耶は英章の言葉を聞き、少しだけ表情が柔らかくなる。

だが、すぐに元の表情へ戻ると言った。

「ですが、あの男……。一週間前にも英章様にメールで報告しましたが、私には眩道齋殿が言うほど、優れた術者には見えません。それとまだ未確認の事があります。眩道齋殿の話にあった老人の霊

体をこの一ヶ月の間、一度も目にしていなのです。本当に居たのでしょうか？ 当時の状況を考えると、眩道齋殿の見間違えということ事も視野に入れた方がいいのかもしれない……」

英章は摩耶の言葉を聞き、暫し目を閉じる。

そして歪んだ笑みを見せると、英章は口を開いた。

「クククツ、摩耶。得体の知れない奴を深く探るには、普通に構えているだけでは駄目だ。そういう場合は、实力を見せる舞台を用意してやればいいのだよ。霊体の方は兎も角、眩道齋殿に事の経緯を聞いた時から、私はその男がどうしても引つかかるのだ。『何かある』と、私の勘が告げているのだよ」

すると英章は秀真に目を向ける。

そして言った。

「で、秀真。舞台の準備はどんな状況だ？」

「はい。昨日、私の配下の者達に荒守の洞窟へと向かわせました。

洞窟最深部にある封印像を破壊した後、私の元に連絡が入る手筈になっておりますので、暫しお待ち下さい」

「フム、まあ良からう。さて、それでだが。あの地に封印されている魑魅は、かなり強大な力を持った化け物だ。そんな化け物の封印が解けたならば、あの地の守護を受け持つ者達是否が応にも出てくるだろう。そして、あの区域の守護を司るのは道摩家。F県にいる道摩家当主と、また共にいる土門長老は動かざるをえんだろう」

英章はそう言うと、椅子から立ち上がった。

そして背後にあるブランドへ人差し指を入れる。

その隙間から外の様子を眺めつつ、英章は言う。

「そこでだ。お前達はこれからF県へと向かい、道摩家と宗家の動きを監視するのだ。封印が解けたという連絡が、何れ必ず、道摩家当主である一将の元に行く筈。そして、奴等の後を追うのだ」

「はい、畏まりました」

秀真と摩耶は声を揃えて、丁寧に返事した。

そこで英章は2人に振り返ると言った。

「恐らく、これで何かが見えてくる筈。その男が秘めたものを持っているのならば、出さざるをえんだらう。そしてお前達には、以前渡した撮影機材でこの舞台の記録を頼みたい。……だがこの魑魅は、文献によるとかなり危険な奴だ。お前達自身も十分に注意をして作業に当たれ。以上だ。行け、2人共」

「はい、英章様」と歯切れよく返事した2人は、身体を反転させて扉へと向かう。

そして英章は、2人が出てゆくのをジッと見送った後、椅子に腰を下ろして不敵な笑みを浮かべるのであった。

一方その頃、G県では。

此処は荒守村から、ずっと下に位置する麓のとある地域。

見渡す限りの田園風景が広がるこの場所に、コンクリートブロックの塀に囲まれた施設がポツンと佇んでいた。

そのブロック塀の中には横長のプレハブ施設が3棟、川の字の様に並んで建てられており、また、それら3棟は全て同じ様式の施設であった。

これらプレハブ施設の外壁は3棟とも白色で、遠目に見た感じでは、その外壁の色と2階建てという事以外、別段、これといった特徴は見当たらない施設である。

だが、この建物の近くに来ると、此処がどんな施設であるのかは誰でもすぐに分かるだろう。

何故ならば、この施設の外壁にはエアコンの室外機が均等な間隔で幾つか取り付けられており、また、それと同じ数の窓やベランダが設けられているからである。

そう……このプレハブ施設は集合住宅なのである。が、普通の集合住宅ではない。

この施設の入口にはこう書かれていた。

【仙石電子工業株式会社 社宅】と。

どうやら此処は、この会社の社員専用住宅の様である。

入居できる軒数としては1棟につき8軒程度のようだ。

またこれら3棟の社宅は最近建てられた物のようで、風雨による水垢等の汚れが少ない。

その為、ブロック塀の外から眺めると、外壁の色とも相俟って、非常に清潔感の漂う施設となっているのだった。

だがしかし……。それはいつもならばと付け加えるべきである。

そして外からの眺めとは異なり、敷地内は今、シンとした静けさと共に異様な様相をしていたのであった……。

今、この社宅へと向かう1台の車があった。

白い4ドアセダンの車で、中には運転席に座っている作業服姿の若い茶髪の男が1人だけである。

その男はくわえタバコをしながらダルそうにハンドルを操作する。そして社宅の姿が、前方に小さくではあるが見えてきたところで、男は吸っていたタバコを灰皿に押し付けて火を消すのだった。

すると男は、溜息を吐きながら誰にともなく呟いた。

「フウウ……。つたく、何で俺が確認に行かなきゃいけないんだよ。

メンドクセエ。様子を見てくるくらいなら、外回りの営業に行かせればいいのに……」

男はそう言うときカップホルダーにある缶コーヒーに手を伸ばして口に運ぶ。

そして一口飲んだ後、また独り言を呟いた。

「それにしても、社宅に住んでる連中は一体どうなってんだ。全員顔も見せずに、拳句の果てに連絡までつかないって……。社宅の連中は結託してストライキでもするつもりかよ、つたく……。でも、それにしちゃ妙だな。社宅の連中自体がそんなに仲の良い奴ばかりでもないし……。なんかあったんだろうか」

男は困った表情を浮かべつつ、近付いてくる社宅の姿に目を向け

る。

「まあ行けばわかるだろ」

と呟いた後、男は気を取り直してアクセルを踏むのだった。

男は敷地内に入ると、入ってすぐにある駐車場に車を止める。

そして、助手席側の窓に視線を向けるのだった。

すると其処には、この社宅に住む人が所有しているであろう乗用車が、幾つも並んでいたのである。

男はそれらの車を見るなり、首を傾げると呟いた。

「なんだ、皆いるじゃねえか。つてことは、やっぱりストライキか？ 勘弁してくれよ……」

ややゲンナリした表情をしながらドアを開けると、男はダルそうに車から降りた。

そして運転席のドアを閉めると、男は溜息を吐きながらも3棟の社宅へと視線を向けるのである。

暫し社宅を眺めた男は『仕方ない』と観念しつつ、自身から一番近い、入ってきた道路側の社宅へと歩き始めるのだった。

男は欠伸をしながら、緊張感なく進んで行く。

だが社宅の正面に回りこんだところで、男は息を飲むのである。何故ならば……。

社宅正面にある各住戸の玄関や壁の所々に、ドロリとした半透明の緑色の液体が付着している為、悪質な悪戯をしたかのような光景となっていたからである。

また、その緑色の液体が付着した付近からは、生物が腐ったような臭いが漂っており、それが男の鼻を刺激するのだった。

そんな嫌な臭いを嗅いだ男は、顔をしかめると共に服の袖で鼻を覆う。

そして周囲に目を向けるのである。

だがそこで、異様な光景が男の目に飛び込んできた。

その異様な光景は、棟と棟の間にある砂利を敷いたスペースにあ

った。

其処には、地面を鋭い爪で掘ったかのような溝が幾つかあり、それらが輪をかけてこの場を凄惨な光景にしていたのである。

男はそれらを視界に入れた途端、おぞましいものを見たかのように、目を見開き、身体を震わせた。

そして生唾をゴクリと飲み込むと、とりあえず忍び足で、社宅1階の一番手前にある住戸の玄関へと向かうのであった。

物音を立てずにそつと玄関前に辿り着いた男は、作業服の上着ポケットからハンカチを取り出すと、ドアノブに付着した緑色の液体を拭き取る。

ノブが綺麗になったところで、男は早速ノブに手を掛けて右に回したのである。鍵がかかっていないのか、玄関ドアはすんなりと開いた。

ドアが開くと共に中の光景が男の目に飛び込んでくる。

男はドアの先を見た瞬間、驚愕した。

視線の先には、床や壁、そして天井に至る全てが、緑色の液体で覆われていたからである。

男はこの異常な光景に言葉を失うと共に、暫くの間、身体を震わせながら立ち尽くした。

だが、時間が経過するにしたがい、男は少しづつ現状を認識し始める。

そして、幾分か落ち着いたところで、男はとりあえずそつと耳を澄ますのであった。

だが、この部屋に限らず、敷地内一帯は不気味なくらいに静かであった。

幾ら耳を澄ましても物音一つ聞こえないのである。その為、人の気配が全く感じられないのだ。が、こうしていても埒が明かないと思つた男は、意を決して呼びかけるのであった。

「あのお〜、仙石電子工業の者ですけど。ど、何方か居りませんか

あ？」

だが幾ら待っても、男の呼びかけに答える声は返ってこない。そこで男は考える。これからどうするかを。

暫く考えた後、『まずはこの社宅に住む者達に会うのが先だが、とりあえず、この異常な部屋の中を確認してからにしよう』という結論を男は出したのである。

そして男はそれを探るべく、液体の覆う室内へと、恐る恐る入ってゆくのであった。

一歩。また一歩。

男が足を動かす度に、床に付着した液体から二チャツという嫌な音が聞こえてくる。

だが目の前の光景が異常な為、男はそんな些細な事は気にせず、前へ進んで行く。

僅か5m程度の距離ではあるが、そうやって慎重に進んで行くと、男はこの住戸の居間へと足を踏み入れた。

そこで一旦、周囲を見回す。

居間の中心に置かれたローテーブルには、湯飲みやマグカップらしき物が転がっており、その上から緑色の液体が覆いかぶさっていた。

壁際に置かれた液晶テレビや暖房器具も緑色の液体に塗れており、一瞥しただけでは何なのか分からない様相となっている。

そんな感じで、居間の隅々が緑色の液体で覆われているもの、それ以外は特に目立った形跡はない。

だがその時。

男の目に、テーブルの横に転がる衣服が目にとまったのだ。服自体は液体が付着している以外、特におかしな点はない。が、しかし、服の配置が奇妙だったのである。

トレーナーにズボンといった衣服が、まるで人が着ている時と同様に上下に並べて置かれていたからである。

それも1人分だけではない。

子供用の物と思われる上下のパジャマが2人分と、大人の物と思われる上下の衣服が2人分。

まるで袖を通す人間だけが消えたかのように、テーブルの周囲に綺麗に並べられていたのだった。

そんな風に配置された奇妙な衣服を男は暫し呆然と眺める。

だがそこである物が男の目に飛び込んできた。

それは大人の衣服の所に腕時計と眼鏡が転がっていたからである。しかもそれらはあるべく箇所に転がっていた。そう、顔と手首の部分にである。

男はそれを見た瞬間、ある恐ろしい事を想像する。

それは衣服やアクセサリといった物を除き、生身の肉体だけが消えているという、普通ならばありえない想像である。

だが人間というもの、一度そういった事を考えると次々に悪い方向へと考えてしまう生き物である。

この男にとつてもそれは例外ではなく、そう考えると共に、言いようのない不安が込み上げてくるのであった。

そして、それが次第に恐怖心へと変わり、男を次の行動へと突き動かすのだ。

【ウ、ウワァァァ！】

男は半狂乱になり身体を震わせながらそう叫ぶと、慌てて社宅の外に出る。

その途中、何度か足がもつれて転びそうになりながらも、急いで自分の車へと駆け込む。

車に駆け込んだ男は、焦った仕草でポケットを探り、車の鍵を取り出す。

そして震える手で鍵をなんとか鍵穴に入れると、慌ててエンジンをかけるのだった。

ブウォンと勢い良くエンジンがかかるや否や、男はアクセルを目一杯踏み込んで車を急発進させ、この場所から一目散に逃げ出した

のである。

そして男の去った後には物音一つしない社宅だけが、その場に取り残されたかのように、寂しく佇んでいるのであった。

四拾伍ノ巻

《四拾伍ノ巻》 魑魅 四

高天智市を出てから約1時間30分後。

俺達は今、G県のインターチェンジを降りて一般道を走っているところである。

目的地である荒守村が所在する高御上市たかおかみしには高速道路が無いので、暫くは一般道を走らないといけないのだ。

因みに、先程見た道路脇の大きな案内看板には、『高御上市まであと30Km』と書かれていた。

まあそんな訳で、後暫くは、やや長い道のりを進む事になるのである。

俺はダツシユボードに内臓されたデジタル時計に目をやる。

すると、時刻はもう午前11時30分を指し示していた。

もうすぐで昼時だが、あまりお腹が空いた感じがしない。理由は、魑魅の事とこの車内の雰囲気である。

実はあれからも一将さんや一樹さんの口数が少ないので、車内の重い雰囲気は継続中だ。

その為、なんか居心地が悪い。

爽やかに、もっと元氣出していこうぜ！つと言えないのが辛いところである。ハア……。

外を眺めながらそんな事を考えていたが、俺も流石に外の景色を見てばかりいるのも飽きてきたので、隣にいる鬼一爺さんに視線を向けた。

鬼一爺さんは目を閉じて腕を組み、何かを考え中のようにある。

恐らく、魑魅の事を考えてるのだろう。決して寝ている訳じゃない筈だ……多分……。

だが、そんな鬼一爺さんを見てみると、俺はマンションであった明日香ちゃんの事が頭を過ぎったのである。

それと共に疑問も浮かんで来た。

まあ今はあまり関係ない事ではあるが、気分転換も兼ねて、俺は鬼一爺さんにそれを尋ねるのだった。

「鬼一爺さん。考え中のところ悪いけど、いいかい？」

鬼一爺さんは目を開き、俺に振り向く。

そしてやや静かな声で言った。

（なんじゃ？ 何か聞きたいことでもあるのか？）

「ああ。まあ魑魅の事とは関係ないんだけどさ……」

（フム……言うてみい）

「明日香ちゃんの事なだけでさ。鬼一爺さんは明日香ちゃんに足りない物があると言ってたけど、一体何が足りないんだ？」

鬼一爺さんは俺の質問を聞くなり、キョトンとした表情をする。

そしてニコヤカに微笑みながら言うのだった。

（フオフオフオ、なんじゃ。涼一も分からんのか？ 仕方ないのう。

まあ折角じゃし、涼一も考えてみい）

「なんだよ、教えてくれないのか……フウウ」

俺は溜息を吐いて、ややガツカリした仕草をした。

すると鬼一爺さんは、しょうがないとばかりに言う。

（それじゃ、一つ助言をしてやろう。今のお主の様に教えを請う身じゃなく、お主自身が秘術を教える立場として考えるんじゃ。さすれば何かが見えてこよう）

「ふーん、秘術を教える立場か……」

俺は顎に手をやり考える。

するとその時。

運転中の一樹さんが、俺達に向かい口を開いた。

「鬼一法眼様、私達に術を教えて頂けるそうで、誠にありがとうございます。色々とありましたので礼を言うのが遅くなりました。申し訳ありません。それで……術の修練の方なのですが、いつから始

めましようか？」

鬼一爺さんは「フム……」と言うと、目を閉じて暫し考える。そして10秒ほどすると口を開いた。

（まあいつでも良いのじゃが、今は魑魅が先じゃ。術の修練については、これが片付いてから考えようぞ）

「確かに、まずは魑魅ですね。では、その時には宜しくお願い致します」

一樹さんは、バックミラー越しに鬼一爺さんを見ると、そう返事をした。

するとそれに続き、一将さんも鬼一爺さんに向かい、丁寧に頭を下げて言うのである。

「私からも宜しくお願い致します、鬼一法眼様
（ウム）」

と、その時だった。

突如、一将さんの携帯電話が鳴り出したのである。

一将さんは上着ポケットから携帯を取り出すと電話に出た。

「もしもし八神さん。何かあったのか？ ……な、何だって、麓で被害がッ！ ……クッ。 ……ああそうだ、私達はまだ高御上市に入っていない。其処に到着するまでにはまだ少しかかる。 ……ああ、分かった。高御上警察署にいる鎮守の森の者には、私から連絡をしておこう。ああ ……では ……」

今の内容を聞く限りでは、事態は深刻さを増した様である。

一将さんは電話を切ると、一度溜息を吐く。

それから携帯のボタンをプッシュして、何処かに電話をかけるのだった。

電話が繋がったのか、一将さんは話し出す。

「ああ、沙耶香か。すまないが、至急、調べてもらいたい事がある。 ……では言うぞ。G県高御上警察署の刑事課に所属する、鎮守の森の関係者を調べて欲しいのだ。 ……ああ、そうだ。電話番号も名簿に載っている筈だ。分かり次第、折り返し電話してくれ。 ……では

頼んだぞ」

どうやら沙耶香ちゃんに連絡していたようである。

しかも、今の話を聞く限りでは、警察の関係者にも鎮守の森に関わる人がいるようなのだ。

俺はこの事実にはやや驚く。

だが考えてみれば、一番そういつた事態に遭遇するのは刑事なのかもしれない。

なんととっても警察は、異常事態に遭遇した人々の通報で、真っ先に動く機関だからである。

そして今の一将さんの口ぶりだと、どうやら日本全国の警察署には、そういつた人々が常駐しているのかもしれないのだ。

後で一将さんか一樹さんに、それらを確認しておこう。

フトそんな事を考えていると、一樹さんが恐る恐る一将さんに尋ねるのである。

「父上……先程、被害が出たと言いましたが、本当なのですか？」と。

一将さんは頷くと重々しい口調で言った。

「ああ、そうだ。……麓にある集合住宅で、其処に住まう住民が全て消えるという事件があったそうだ」

「な、なんですとツ!？」と、一樹さんは前方を見ながら、やや声高に言う。

「今、電話をかけてきてくれた八神さんの話では、もう既に、高御上警察署の者が何人か来ていると言っていた。恐らく、誰かが通報したのでらう。しかも、八神さんの話では、その被害にあった集合住宅は異様な有様らしい……」

一将さんは幾分、感情を抑えた口調でそう俺達に言った。

だが心中は焦りと苛立ちで、穏やかじゃない筈だ。

その証拠に、話をしている一将さんの右肩は小刻みに震えていた。これは仕方がないだらう。恐れていた事が、もう既に起きていたのだから……。

そんな一将さんを暫し見た俺は、話の内容をもう一度、頭の中で復唱する。

だが、思い返すうちに引つかかる言い方の部分があった。

さつき一将さんは、『麓にある集合住宅で、其処の住民が全て消えるという事件があったそうだ』と言っていた。居なくなっただけではなく、消えると言ったのだ。

これは言い間違いなのかどうか、気になるところである。

その為、俺は尋ねるのであった。

「あの、一将さん。今、住民が消えると言いましたが、何処かへ行ったという訳ではないんですよね？」

一将さんは俺に振り向くと、真剣な表情で言った。

「ああ、そうだ。八神さんの話によると、肉体だけが消失しているような言い方だった。そして、その集合住宅内の所々に、得体の知れない緑色の液体が付着して、酷い有様らしい……」

俺は今の話を聞くなり、背筋にゾゾッと悪寒が走る。

またそれと共に、一体どんな化け物なんだ！ と心の中で俺は咳くのである。

そして、まだ見ぬ、黄泉といわれる得体の知れない化け物への恐怖心だけが、俺の中で大きく膨れ上がり始めるのであった

それから車に揺られる事、約30分。

俺達は高御上市の中心市街地からやや外れた位置にある、ビジネスホテルに到着した。

其処は、ここ2、3年の間に建てられた感じの新しいホテルで、四角い4階建ての結構立派な建物であった。

茶褐色の外壁はタイル貼りになっており、碁盤の目の様に目地が走っている。その色の所為もあって、レンガ造りのようにも見えるホテルなのであった。

また、ホテルの周囲には、ツツジの様な小さな緑葉をつけた背の低い庭木の植え込みが縁取っており、それが建物を際立たせる良い

アクセントとなっているのである。

それらの外見もあつてか、ビジネスホテルとはなっているものの、中々に品の良い雰囲気を持ったホテルなのだ。

で、何故このホテルに来たのかというと、当初の予定では荒守村まで行く予定だったのだが、麓に被害が出ているという事もあつて、急遽、予定変更となったのだ。

そしてこのホテル。一将さんの話によると、八神さんという方が俺達の宿泊施設として、このホテルに予約を入れてくれたようである。

周囲にはこのホテルよりも背が低い建物ばかりなので、良く目立っており、見つけるのが楽であつた。

八神さんという人は、恐らく、そういった事を踏まえてこのホテルにしたのかもしれない。

でも一番の理由は、被害にあつた現場に近いという事だろう。一将さんも道中の電話でそんな事を言つてたし。

まあ兎も角、そういった理由から俺達は此処に来たのである。

俺達は敷地内の駐車場に車を止めると、早速、ホテルへと向かい歩いて行く。

そして自動ドアを潜り、やや広々とした受付のあるロビーへと進むのである。

まず最初に、そこでチェクインをすませると、俺達はロビーに置かれているソファーや椅子に腰掛け、やってくる人を待つのだ。

そのやってくる人だが、ここを予約してくれた八神さんという人と、鎮守の森関係者である高御上警察署の刑事さんなのである。その2人は途中で合流して、一緒にこのホテルへ来るらしい。

道中にあつた一将さんとの電話のやり取りで、そういう段取りになつたのだ。

という訳で、その人達が来るまでの暫しの間は休憩となるのである。

俺はロビーに置かれた無人のソファに腰掛けると、「フウウ」と大きく息を吐いた。

そして首や肩を回し、凝った筋肉を解すのである。

3時間近くも車の中にいれば、流石に肩が凝ってしまふ。

勿論、あの雰囲気の中だったので、気分的にもかなり疲れたが…

…。

とりあえず、長旅の疲れを癒すために暫くそうやってマッサージをしていると、宗貴さんが俺の座るソファへとやってきた。

俺は宗貴さんに視線を向ける。

今日の宗貴さんは、黒いレザージャケットに青いジーンズというロック系ファッションを思わせる出で立ちで、家の親父が好きそうな格好をしている。中々にワイルドな格好だ。

その宗貴さんは、空いている俺の隣に腰掛けると、軽く微笑み、やや小声で話しかけてきたのである。

「日比野君が、まさか、鬼一法眼様の弟子だったなんてね。今日はこの魑魅の事といい、驚くことばかりだよ」

「すいません、鬼一爺さんの事を黙っていて……」

俺はやや罪悪感があった為、とりあえず、頭を下げて謝罪した。

「いや、別に謝らなくてもいいよ。日比野君が悪いわけじゃないしね。それは兎も角……」

と、そこで宗貴さんは、ジャケットの内ポケットから黒い名刺入れを取り出す。

そして俺に一枚の名刺を差し出すのだった。

「日比野君。俺は普段、神代総合商事 第4事業部の部長をしている。何か困ったことがあったら、連絡して来てくれ。力になるよ。

まあ俺からも色々とお願ひする事があるかもしれないが、ハハハ」

受け取った名刺には『第4事業部 取締役部長』と書いてあった。それを見た俺は、当然、こう思った。

すげえ、この若さで部長って……。しかも取締役って、確か、経

営者になるから普通の役職じゃないし……。

そう思った俺は、驚きながらも言った。

「宗貴さんは取締役部長なんですね。……凄いですね」

「まあ、この会社の株主は殆どがソツチ系だから、色々あるんだよ」

宗貴さんはそう言うと、やや疲れた様に頷垂れた。

深く詮索するつもりはないが、多分、土御門家自体が神代総合商事の株主でもあるのだろう。

またその他にも、土御門家という家柄上、複雑な事情があるのかも知れない。

俺はそんな事を宗貴さんの態度から汲み取ると、やや同情しながらも言った。

「そうなんですか、色々大変なんですね……ン？」

と、その時だった。

ホテルの入口から2人の人物が、俺達の所へと小走りにやってきたのである。

1人は中肉中背の眼鏡をかけた初老の男性で、上下ベージュ色の作業服を着ていた。

そして、短く刈りそろえられた白髪交じりの頭髪の所為か、やや頑固そうに見える人である。

もう1人は40代くらいの茶色いスーツ姿をした男性で、身長180cmほどの、ややゴツイ体型をした人である。

髪型は整髪料で綺麗に流したオールバックで、なんとなく強面の男であった。俺は一瞬、その筋の人かと思ってしまった。

その2人を見た一将さんは、座っていた椅子から立ち上がると、まず一礼をする。

すると眼鏡をかけた初老の男が、一将さんに口を開いたのだった。「一将さん。お待たせしまして、すいません。此方が、高御上警察

署の刑事さんです」

オールバックの男の人は、一将さんに一礼すると言った。

「初めまして、高御上署の吉田と言います。遠路はるばるご足労、ありがとうございます」

「八神さんに吉田刑事。お待ちしておりました」

一将さんは2人と握手をする。

今のやり取りを見ると、初老の男性が八神さんという人で、ゴッイ人は吉田という刑事さんのようだ。

吉田刑事はチラッとロビーに目を向けると言った。

「とりあえず、此処では何ですので、現場に向かいながら私の車の中でお話しましょう」

「そうですね。では参りましょう」と言った一将さんはソファアに座る俺達に視線を向ける。

そして言った。

「では私と土門長老は、この刑事さんの車に同乗する。他の皆は各自の車で付いて来てくれ」

それを聞いた宗貴さんと一樹さんは無言で頷く。

という訳で俺達は、被害のあった集合住宅へと向かう為、移動を始めるのであった。

一将さんと土門長老を除いた俺達4人は、宗貴さんのランドクルーザーで纏まって移動する事になった。

ランドクルーザーの中は外からの見た目どおり、広く快適で、8人乗りという乗車定員にも拘らず、それ以上に乗れそうな感じであった。

車に足を踏み入れた俺は、好奇心から車内を見回す。すると室内の立派な内装が目飛び込んできた。

落ち着いたベージュ色のシートやマット。シフトレバーの周囲や、ハンドル及び肘掛の一部分に施された木目調のパネル。そして最新式のカーナビ。

それらは妙に高級感を漂わせており、クロカンタイプの車なのに、クラウン等の高級車を思わせる様な内装になっているのである。

そして俺は、いつかこんな車に乗りたくないな、などと思いつつ、後部座席のシートに腰掛けるのであった。

俺達が車に乗り込むと、程なくして、吉田刑事の車であるシルバ―のセダン・マークXが動き出した。

それに続き、宗貴さんも車を発進させるのである。

車が動き出して暫くした頃、道中ずつと気になっていた事を俺は思い出す。

その為、俺の隣に座る一樹さんに、気になっていた事を尋ねるのだった。

「一樹さん。G県に来る途中から気になっていた事があるんですけど。全国の警察署には、鎮守の森の関係者が何人が駐在しているのですか？」

「ああ、そうだよ。やはり、一番そういった異常事態に遭遇できるのは、犯罪捜査に携わる人間だからね。それに被害者もまず、警察に連絡するケースが多いから」

一樹さんは俺が想像してたのと同じ理由を言った。

「やっぱり、そうだったんですか。自分もそんな気がしたんですよ」と、そこで一樹さんは何かを思い出したのか、天井を見上げる仕事を草をする。

そして俺に言った。

「そういえば日比野君てさ、霧守高原で土蜘蛛を確か、倒したんだよね？」

「ヘッ？ あ、はい。……あの時はすいませんでした」

俺は予想外の事を聞かれたので、思わず間の抜けた声を出す。

そして当時のモグリ修祓の事を思い出してしまい、つい謝ってしまったのだった。

すると、それを見た一樹さんは、首を左右に振ると、笑顔で言うのである。

「ハハハ、いや、それは別にもういいよ。ただ、あの時も刑事から鎮守の森に通報があったんだよ。で、G県は一応、道摩家の管轄区

域の一つだから、土蜘蛛退治の依頼書が回ってきてね。それに通報した刑事の名前が書かれていたんだ。確か……小島とかいう刑事さなんだったかな。まあ兎に角、日本全国にそういった霊障に関する鎮守の森のネットワークが張り巡らされているって事さ。ああそれと勿論、それらネットワークの中には刑事さん以外の監視者達もいるからね。監視者は多種多様なんだよ」

俺は意外な事実を知った為、驚きを交えながら言った。

「土蜘蛛の時もそうだったんですか。へえ、なるほど。それに、今話を聞く限りでは……鎮守の森って、表に出ないだけで色んなところに繋がり持ってるってそうですね。凄く勉強になりました」

一樹さんは言う。

「まあこの呪術業界は、結構、思いがけないところに手が入ってたりするからね。……ああ、それと1つ付け加えておくと、刑事さんにして、他の監視者にして、修被はしないからね。あくまでも通報するだけだから。一応、鎮守の森の規定では浄土の称号を持つ者以外は修被してはいけない決まりになっているからね。そういうことさ。まあ刑事が通報するっていうのもおかしな話なんだけどね。ハハハ」

「監視者は通報するだけなんですか……。なるほど、覚えておきます」

と言った俺は、今話を頭の中で整理する。

だが、一樹さんの言った言葉の中に、やや気になる部分があった。なので、とりあえず、それを聞いてみる事にした。

「ところで、今、一樹さんが言った管轄区域の事なんですけど、そんなのあるんですか？」

「日比野ツチって、何も知らないのね……」

だが、一樹さんではなく予想外の所から声が聞こえてきた。

助手席にいる明日香ちゃんである。

明日香ちゃんは此方に振り向くと言った。

「まあいいわ、教えてあげる。私達土御門家や道摩家といった呪術大家は、歴史が長い分、一門から生まれていった分家やその流れを

汲む呪術家が幾つもあるのよ。だから必然的に、そういった縁の者達を束ねる役目があるの。昔からの慣習みたいなもんだけどね。まあ兎に角、そういう理由から呪術大家は多くの人を動かしやすい立場なの。で、多くの人を動かしやすいって事は、イザという時に迅速に対応できるし、広い地域もカバーできるって事だから、不測の事態になった場合は、そういう役目を鎮守の森から帯びているのよ。でもまあ呪術大家とはいっても、一応、浄将以上の称号を持った修祓者が居るとというのが前提だけどね。まあそういうわけなのよ」

俺にはまだまだ知らないことが沢山あるようだ。
「へえ、色々複雑な事情があるんだね。ありがとっ、明日香ちゃん。分かりやすく教えてくれて」

俺は明日香ちゃんにニコリと微笑むと礼を言った。

すると明日香ちゃんは照れたのか、「べ、別に、お礼なんていいわよ」と言つと共に、サツと顔を背けるのだった。こちら辺は相変わらずである。

とまあそんなやり取りをしつつ、俺達は目的地に向かい進んで行くのである。

ホテルを出発してから15分程の所に被害現場はあった。

その集合住宅は、白い外壁とブロック塀に囲まれているのが特徴の、それなりに新しい感じがする3棟の建物である。

俺達に乗せた車は、その建物に伸びる一本の道路を真っ直ぐに進んで行く。

すると、その先にあるブロック塀入口の左右には、紺色の制服を着た2人の警官が後ろに手をまわし、門番の様に立ち塞がっていたのであった。

また警官の後ろには、『KEEP OUT 立ち入り禁止』と書かれた黄色のテープが、何本も横に張られているのである。

刑事もののテレビドラマとかに良く出てくる光景と、まったく同じである。こんな天気の良い日に似つかわしくない、物々しい光景

だ。

まあそれは兎も角。

俺達は入口近くの道路脇に車を駐車すると、そこで車を降りる。そして吉田刑事を先頭に、警官のいる入口へと向かい、歩を進めるのであった。

吉田刑事は2人の警官の前に行くと、懐から警察手帳を掲げる。それを確認した警官は頷くと共に道を開けてくれた。

そこで吉田刑事は俺達に振り返り、言うのである。

「では、私の後に付いて来て下さい」と。

俺達は無言で頷く。

吉田刑事は張られたテープの間を潜り、敷地内へと入ってゆく。そして俺達もそれに続き、被害現場へと足を踏み入れたのであった。

敷地内に入った俺達は吉田刑事と共に、まず道路側の集合住宅へと向かい、歩いてゆく。

だが、建物の正面部分が視界に入ったところで、俺は衝撃を受け、立ち尽くしてしまったのだ。他の皆も同様に立ち尽くす。

何故なら、道路側からは綺麗な外壁しか見えなかったが、その反対側は惨状といっても差し支えない様相をしていたからである。

建物の白い外壁は、半透明の緑色をした液体が至る所に付着しており、その前の砂利が敷いてある地面は、奇妙な掘られ方をした溝が幾つも走っているのだ。しかも、生ゴミの腐ったような臭いの才マケ付である。

それらが得体の知れない不気味な光景として、俺の目に飛び込んできたのだ。

だがしかし、ひとつ気になる事があった。それは、俺達が佇むこの場所に段ボール箱がポツンと地べたに置かれているからだ。

なんだろう、あの箱？　と思いつつも、俺は他の同行者達に視線を向ける。

すると土門長老や一将さんも、この惨状に目を向け、非常に険しい表情をしていた。

勿論、宗貴さんや一樹さん、そして明日香ちゃんの3人も同様である。

そして鬼一爺さんも、鋭い眼差しでその異様な光景を見詰めているのであった。

一将さんはその惨状に目を向けながら、吉田刑事に言う。

「吉田刑事、私達は中を見ても良いのですかな？」

「ええ、それは構いませんが、一つ条件があります。実はまだ鑑識の方を呼んではおりませんので、あまり不用意に痕跡を残されると、後々、面倒な事になってしまいます」

吉田刑事はそう言うのと、俺が気になっていた段ボール箱から白い手袋と7足の白い作業靴を取り出した。

どうやら、段ボール箱は吉田刑事が用意していたものようだ。

因みに、それらの手袋や靴は全て同じタイプの物である。

吉田刑事は言う。

「ですので、この手袋とこの靴を履いてください。鑑識は足跡も取りますので」

「すみません、お借りします」

一将さんはそう言うのと、俺達皆に靴と手袋を手渡してゆく。

そして全員が装着したところで、俺達は更なる惨状を見るべく、歩を進めるのであった。

そして20分後。

俺は今、現場の外に駐車した車の周囲で、清々しい空気を何時も以上に、目一杯深呼吸している最中であつた。

理由は勿論、あれらの中にある惨状を見たからなのと、あの嫌な臭いの所為だ。

ハッキリ言つて、俺には長時間あんな所にいるのは無理である。

他の皆も同じだったのか、大きく深呼吸していた。

明日香ちゃんなんかは、両手で口の中に空気をかき入れる仕事をしながら、大きく深呼吸している最中である。まあそうしたい気持ちも分からんでもない。トラウマになりそうな臭いだから……。

まあそれは兎も角、中の状況であるが。

道中、一将さんが言っていたように、全住戸の人達は居なくなつたのではなく、消えていた。衣服や装飾品だけを残して……。

全部の部屋を見た訳ではないが、恐らく、どの住戸も同じ様な光景に違いない。

そして、あの現状を見た限りでは、黄泉に喰われたという事なのだろう。

八神さんの話では、封印されていた場所にも、あの緑色の液体が付着していたそうなので、これは黄泉の仕業で確定のようだ。

それに緑色の液体からも微量ではあるが、俺には負の霊力が感じられたし。だから、まず、間違いないだろう。

だが、俺はそれよりも一つ気になる事があったのだ。

それは、この集合住宅の後ろに見える山中から、妙な負の波動が感じられたからである。

妙と言ったのは、普段退治する悪霊が放つものと違っていて、なんとというか、弱く感じたり強く感じたりと、霊波動に大きな波があるのである。

そして何故かは分からないが、俺にはそれが泣いたり怒ったりといった、人の感情表現の様に感じられたのだ。

その為、中の惨状よりもソツチが気になって仕方ないのである。隣にいる鬼一爺さんも同様で、俺と同じく山の方へと視線を向けていた。

俺は考える。『山中で、そんな波動を発しているのは黄泉なのだろうか……』と。

だが、そう単純に考える訳にもいかない。

何故ならば、少しおかしな点があるのだ。

それは、此処に物の怪が入ってきたであろう痕跡はあるのだが、出て行ったと思われる痕跡が無いのである。

入ってきた痕跡は、山とこの集合住宅の間にある田畑に、黒い線を引いたかのように見える溝がそうである。

溝の幅は大体3mくらいだろうか。それを見る限りでは結構大きな物の怪のようだ。

まあそれはさて置き、出て行った跡が見当たらないのだ。もしかすると同じ所を通って出て行ったのかもしれない。

だが、それにしても妙なのである。

溝の底にある土には、進行方向に引き摺ったような跡がついてるのだが、その跡を見る限りでは入ってきた方向のものなのだ。

それだけを見て判断するなら、まだ物の怪はこの中にいる事になる。

しかしそれならば、もう既に、物の怪が放つ負の霊波動を俺の霊感は捉えている筈だ。が、この場所を感じるのは、緑色の液体から発せられる微弱な負の霊波動しかないのである。

これは一体どういう事なんだろう……。吉田刑事や八神さんから少し離れた所で、鬼一爺さんに聞いてみるかな。

フトそんな事を考えていると、土門長老が俺の前にやってきた。

そして柔らかい表情を浮かべながら言うのである。

「どうしたんじゃ、日比野君。難しい顔をしておるところを見ると何か気になる事でもあったのかの？」

「あ、土門長老。はい……。実はさっきから妙な霊波動を感じるんです。向こうの山からなんですが……」

俺はそう言うと共に、集合住宅の後ろに見える山の中腹の、やや右方向を指差した。

すると土門長老は真剣な表情になり、言っているのである。

「妙な霊波動じゃと……。因みにそれはどんな感じなのじゃ？」

「それが、上手く表現できないんですけど。波動が強くなったり弱くなったりといった感じで、大きな波があるといえますか。兎に角、

なんかそんな感じなんです。どう思われますか？」

俺が尋ねると、土門長老は顎に手を当てて、暫し考える。

そして口を開いた。

「……分かん。じゃが、日比野君の言う事は無視できぬ。それに、今は何か手掛かりが欲しいところじゃ。道間殿に言っておこう」

土門長老はそう言うと、やや離れた所で八神さんや吉田刑事と話をしている一将さんの所へ行ったのだった。

そこで土門長老は一将さんに耳打ちをする。

するとその直後、一将さんはやや驚いた表情で俺に視線を向けるのである。

そして土門長老と共に俺の所にやって来るのだった。

俺の前に来た一将さんは言う。

「日比野君。今、土門長老から聞いたのだが、それは本当かい？」

「はい、今も感じます。場所は流石に、此処からだと正確に特定出来ませんが、方角だけは分かります」

「そうか……。で、どの方角だろうか？」

「この方角です」

俺は先程と同じ方向を指差した。

一将さんは俺の指し示す方向を凝視しながら暫し考える。

そして土門長老に言うのであった。

「土門長老、今は奴の足取りが掴めない状況です。それともうこれ以上、近隣住民に被害が出ないように、周囲の警戒も怠るわけには行きません。よって、G県に住まう道摩家縁の修被者達にも応援を頼もうと思います。ですので、ここは日比野君を信じて、至急、対策を考えましょう」

「うむ、そうじゃな。では、場所を変えた方がよいの。此処は本来、儂等がいるべき所ではない。それに、吉田刑事も自分の仕事があるし」

と言った土門長老は、集合住宅と吉田刑事に視線を向ける。

一将さんはそれに頷くと言った。

「ええ、確かに。では一旦、ホテルに戻りましょう」
「うむ」

2人はそう結論すると、八神さんと吉田刑事の元へ行き、事情を説明する。

そして吉田刑事とは此処でお別れという事になり、八神さんは俺達と共にランドクルーザーに乗って、さっきのホテルへと一緒に向かうのだった。

それから1時間後。

俺は一樹さんと明日香ちゃんと共に、負の波動が感じられる山の麓へとやってきていた。

目の前はもう山だが、俺がいる所は結構平坦なところで、地面には枯れた葉をつけた雑草が押し潰されたかのように生えていた。多分、雪の重みでこうなったのだろう。

また、周囲にあるのは田んぼと畑ばかりで、他はそれらの用水に使うであろう、小さな川が流れているだけだ。

遠くに被害のあった集合住宅が、白い点の様に小さく見える以外、近隣には建物は見当たらない。

魑魅の事がなかったら、ごく普通の長閑な田園風景に俺には見えただろう。

しかし、今の現状を考えると、流石に長閑な雰囲気とは程遠く感じてしまうのだ。まあこれは仕方ない。あの惨状を見た後だと……。それはさて置き、此処で何をしているのかというと、魑魅を誘き寄せる罫を仕掛ける為に来ているのである。

ホテルの部屋にて、俺の感じた負の波動を元に対策を練った結果。以前、俺が土蜘蛛退治をした時にやった方法を応用して、黄泉を誘き寄せようという事になったからである。

実はその他にも、山の中に入って霊波を辿り、黄泉を直接叩くという案も勿論あったのだが、八神さんの「まだ山の中には雪が結構

残っているので、雪山に慣れてない人はやめた方が良い」という忠告もあつた為、この方法をとる事にしたのである。

その応用した方法であるが、黄泉が襲うのは獣や人といった特定の種族ではなく、生きとし生けるもの。即ち、生命であるという仮定の元に立てられている。

という訳で俺達は、黄泉に餌と誤認させる為、生命の波動と靈魂の波動という2つの波動を発生させる機器を設置しに来たのだ。

因みにこの機器は修験靈導の儀にて使われた、あの靈波発生装置だつたりする。

何でこんな物があるのかというと。急遽、G県に移動する事になったので、色々と使えそうな術具を慌てて車に詰め込んだ結果、それらの中にこの機器が偶然紛れていたのだ。

そして、それを見た一将さんが物は試しとばかりに、この方法を思いついたという訳である。

まあそんな訳で俺達は今、負の靈波が感じられる山の方に向けて、その機器を設置しているところなのであつた。

作業を始めてから20分程。

機器の設置を粗方終えたところで、一樹さんは俺達に言った。

「2人共、とりあえず、これで準備はOKだ。では今から靈波を発生させる」

一樹さんはそう言うと、機器をコントロールする計測メーターやツマミがついた、一昔前のオーディオ機器のような制御機器に手をやる。

そしてツマミを調整し始めたのだつた。

暫くすると、機器から靈波が感じられる様になる。

またそれと共に、生命が発する一定のリズムを持った波動が、靈波に混ざり発せられるのである。

因みに以前、鬼一爺さんに聞いた話によると、この生命の波動というのが、俗に言う気というやつらしい。

だが、気はあくまでも生命の息吹であって、それ自体には特に不思議な力は無いみたいだ。

とは言うものの、この辺の事は俺もまだ良く分かんので、これから勉強しないとイケない分野ではあるが……。

まあそんな訳で、鬼一爺さんに色々聞いてみなければ、と思っ
ているところである。

さて、その鬼一爺さんかというと、俺の隣で霊圧を下げて大人しくしているのだが、先程からずっと、負の波動が感じられる方向に鋭い視線を向けていた。

表情を見る限りでは、色々と考えているようではあるが、一つ気になる事がある。

それは、集合住宅の惨状を見たあたりから、鬼一爺さんは一言も発しなくなっていたからだ。

俺はそんな爺さんを見た所為か、黄泉という魑魅に少し恐怖してしまう。

だが、今の頼れるのは鬼一爺さんの知識である。

その為、俺は作業が一息ついたら、その心中を聞いてみようと思っ
ているところだ。

と、その時。

一樹さんの声が聞こえてきた。

「よし、これで設定は終わりだ」

俺がそんな事を考えているうちに、一樹さんも機器の調整が終わ
ったみたいである。

調整の終わった装置からは、人の物と比べるとやや強めの霊波が
感じられる。

一樹さんは機器から手を離すと俺達に言った。

「後は夜まで待って、活動を始める黄泉がこれに反応してくれるの
を祈るだけだな……。ところで、2人はお昼まだだよな？」

そういえば、色々とあったので昼飯を食べていない。

だが、気分的に食事という感じじゃないので俺は言った。

「まだですね。でもアレを見た後だと、食欲がイマイチ湧きませんね……」

明日香ちゃんも俺に続く。

「私も、嫌な物を見たのと臭いの事もあるから、日比野ツチと同じだわ」

すると一樹さんは、笑みを浮かべながら言うのだった。

「ハハハ、まあ分からんでもないけど。これから魑魅と対峙しなくちゃいけないから、力をつけておかないとね。やや離れた所にコンビニがあつたから、そこで何か買ってくるよ。それまで、2人は機器を見張っていてくれるかい？」

「はい、いいですよ」と俺。

「それじゃ、ちょっとの間だけ、見張りを頼むよ」

一樹さんはそう言うと、レガシーへと向かい歩を進める。

だが、何かを思い出したのか、5歩ほど歩いた所で立ち止まり、俺に言うのだった。

「……ああそれと、自分が戻る前に父が来たら、そう言うておいてくれるかい？」

「はい、分かりました」

「じゃあ、行って来るよ」

そして一樹さんはレガシーに乗り込み、この場から去っていったのであった。

レガシーが小さく見える様になったところで、俺はそこ等辺にある割と綺麗な石の上に腰掛ける。

そして、鬼一爺さんに視線を向けた。魑魅の事について聞いておきたい事があるからだ。

まあそんな訳で、それを尋ねようと思ったのだが。

丁度その時。明日香ちゃんが、なにやら難しい表情を浮かべながら俺に近寄ってきたのである。

そして明日香ちゃんは俺の前に来ると、何時もより、やや元気の

無い声色で言うのだった。

「ねえ……日比野ツチ。聞きたい事があるんだけど、いい？」

「ん、いいよ。何？」

明日香ちゃんは若干、間を置いてから話し始める。

「……日比野ツチから見て、私ってどう思う？」

俺は明日香ちゃんの頭の天辺から足の爪先まで目を這わす。

今日の明日香ちゃんはフード付きの白っぽいコートにデニムパンツといった出で立ちで、やや厚着ながらも体のラインはスマートに見える。

一通り見た俺は、観察結果を明日香ちゃんに伝えた。

「う〜ん……着痩せするタイプかな」

だが明日香ちゃんは、突如、怒った表情をする。

そして頬を膨らませながら言うのだった。

「ダ・レ・が、スタイルの事を聞いた？ 違うわよツ！ その……」

鬼一法眼様に言われた事よ……」

俺は凄い勘違いをしたたようだ。

「ああ、その事か。それが、実は俺も分からないんだよ。俺もG県に来る途中、車の中で鬼一爺さんに聞いてみたらさ、『まあ折角じやし、涼一も考えてみい』って言われたからね」

車でのやり取りくらいは、言っても良いだろうと思ひ、俺はそれを告げた。

「そ、そうなの……」と、明日香ちゃんはやや元気なく答える。

その姿は何時もの元気な明日香ちゃんより、若干、小さくシヨンボリとして見える。そんな明日香ちゃんを見てたら、少し可哀想になつてきた。

まあ俺も分かるわけではないが、少しくらいアドバイスしてもいいだろうと思ひ、隣にいる鬼一爺さんに視線を向けた。

すると鬼一爺さんも俺の考えが分かったのか、仕方ないとばかりに、大きく息を吐いてを目閉じると、明日香ちゃんを指差したのだった。

多分、助言しても良いという事なのだろう。

俺はそう解釈すると、明日香ちゃんに言うのである。

「明日香ちゃん。……そういえばさあ、車の中で、鬼一爺さんから言われた事があるんだ」

すると明日香ちゃんは、勢い良く顔を上げて聞いてきた。

「な、何を言われたの？」

「明日香ちゃんに足りないのを考えるヒントとして、『今のお主の様に教えを請う身じゃなく、お主自身が秘術を教える立場として考えるんじゃ。さすれば何かが見えてこよう』って言われたんだよ」

「教えを請う身じゃなく……秘術を教える立場……」

明日香ちゃんはそう呟くと共に、目を閉じて考え始める。

暫くそうやって考えると、明日香ちゃんは俺に言うのだった。

「ありがとう、日比野ツチ。私、考え方を少し変えてみるわ」

そして明日香ちゃんは俺に微笑むのである。

どうやら、少し元気が出たみたいだ。良かった。

俺は明るい表情を見せる明日香ちゃんを見てホッとする。

だがその時だった！

強い負の霊波が、突如、俺達のいる付近の山中から感じられる様になったのである。

その為、俺はハッとその方向に振り向いた。

だが妙なのだ。ずっと前から感じている強弱の波がある負の霊波は、そのまま山の奥で変わらずに感じられるのである。

なのに突然、この付近から負の霊波が感じられる様になったのだ。……いや、突然ではない。これは、凄いスピードで迫って来ているのである。

どういう事だ？ これは……。

俺がこの突然の異常事態に悩んでいると、鬼一爺さんが僅かに霊圧を上げ、慌てた表情で声をあげるのだった。

(涼一、不味いッ！ 早く、明日香と共にこの場から離れるのじゃ！)

確かに嫌な予感がする。

俺は鬼一爺さんに頷くと言った。

「オ、オウ。わ、分かった。あ、明日香ちゃん、この場から離れよう！ 何かが迫ってきている」

「エッ？ ど、どうしたの急に」

明日香ちゃんはキョトンとした表情をする。どうやら気付いてないみたいだ。

仕方ない。そう思った俺は、明日香ちゃんの手を取り駆け出した。すると明日香ちゃんは、突然の事態についていけないのか、手を引かれながらも俺に言うのだった。

「ちよっ、ちよっと、どうしたのよ突然。何なのよ、日比野ッチ！」
だがその時。

ドゴォー！

俺達の背後にある山の斜面から、地面の震えと共に、何かが弾ける様な音が聞こえてきたのである。

そして、その直後、まるで地中の奥底から聞こえてくる呻き声のようなものが、俺達の背後から発せられるのであった。

【ヴアアア……… ヴア……… ギギイイアアアア】

そのあまりにも悲しく、苦しい雰囲気を感じさせる呻き声に、俺と明日香ちゃんは思わず立ち止まり、恐る恐る振り返った。

そして……俺達の目に飛び込んできたものは

四拾六ノ巻

《四拾六ノ巻》 魑魅 五

【ヴァアア……ヴァ……ギギイアアア】
恐る恐る呻き声のする方向へと振り返ったその先には、木の根を思わせる不規則に歪んだ1本の長い触手の様なものが、俺達の視界に入ってきたのだった。

その不気味に歪んだ触手は、山の内側から這い出てくるかのよう
に、絶え間なく次々と伸びてくる。

そして山の斜面から飛び出た触手は、タコの様な軟体動物を思わ
せる波うつ動きを繰り返しながら、霊波発生装置の周りをグルグル
と囲み始めるのだった。

霊波発生装置から50mほど離れた所にいる俺と明日香ちゃんは、
その不気味な触手の動きをただ茫然と生唾を飲み込みながら見てい
た。

見た感じでは霊波発生装置が興味対象らしく、今のところ、触手
の様な化け物は俺達には気付いてないようだ。

しかし、早く立ち去らないと不味いには変わらない。が、俺達
はその異様な化け物をついつい目で追ってしまうのだった。

怖いながらも、俺はこの気持ち悪い動きをする奇妙な触手に目を
凝らす。

すると触手の周りには、さっき見た集合住宅のいたる所に付着し
ていた緑色っぽいゼリー状の液体が見て取れるのだ。

またそれと共に、集合住宅にも漂っていた鼻を刺激する腐ったよ
うなあの臭いも、辺りに漂い始めるのである。

もうこれだけ符合するものがあると、間違いなく、これが集合住
宅を襲った化け物なだろう。

だが俺達が標的にしていた、強弱の波がある負の波動は、山の腹辺りから変わらずにそのままなのだ。

おまけに、この化け物からも同じような波動を感じるのである。これは一体どういう事だ……。黄泉は2体いるのだろうか……。フトそんな事を考えたが、とりあえず、俺は視線の先にいる悍ましい触手へ更に目を凝らす。

触手は一本だけだが、それらが山の内部から絶え間なく出て来ており、俺の目測では既に200m以上の長さは出ているように感じる。

そして、それらがまるでモンブランケーキを連想させるかのよう
に、トグロを巻いて霊波発生装置を覆い尽くしてゆくのである。

すると次第に、霊波発生装置を設置した場所には、直径20m程
はありそうな歪な半円形の触手ドームが形成されたのであった。

だがそんな触手に目を凝らしていると、とんでもない物が、俺の
目に飛び込んできた。

「な、なんだよアレ……」

俺はあまりの異様さに思わずそう呟いた。

その異様さとは……触手そのものの正体であった。

信じがたいことだが、触手は大小さまざまな人や獣の骨が歪に繋
ぎ合わさって出来ているのだ。

半透明な緑色の液体越しになるので不鮮明ではあるが、人間や犬に
猪や熊の様な動物の頭蓋骨や背骨に大腿骨、そしてあばら骨等が所
々に垣間見えるのである。

だが、それだけではない。

その触手からは、今も山の中腹から感じる強弱のある負の波動が、
絶え間なく発し続けられているのだ。

まるで触手自体が泣いているかのよう……。――

隣にいる明日香ちゃんは、振り絞るように震えた声で俺に言った。

「ひ、日比野ツチ。何よ、あ、あの気持ち悪い化け物は……。あ、
あんな馬鹿でかい化け物、今まで見たことないわよ……。――」

「お、俺だつて見たことないよ。でも多分、あ、あれが集合住宅を襲ったんだと思う」

「そ、そんな事、私にも分かるわよッ！」

俺達は、異様な骨の触手の行動を何故か呆然と立ち尽くし目で追う。

そんな風にモタモタしていると、鬼一爺さんが霊圧を低く抑えつつ、俺にやや焦った表情で再度忠告をしてきた。

（涼ー！ 早く明日香と共に此処から去るのじゃ。不味いぞい。これは我の勘じゃが、かなり厄介な化け物じゃ。早うせいッ）

「お、おうッ」

だが、俺がそう返事したその時であつた。

【ヴアアアア……ギギイイアアアア】

霊波発生装置をドーム状に、こんもりと幾重にも囲んだその骨の触手は、地の底から響くような呻き声を上げたのである。

そして間髪をおかずに、触手ドームは深紫色をした煙状の瘴気を勢いよく、周囲に大量に撒き散らすのだった。

その瞬間、先程までの長閑な雰囲気とは打って変わり、禍々しい負の霊波動が辺りに漂い始めるのである。

これは不味い！

「……チッ」

俺は周囲の変化に思わず、舌打ちをした。

何故ならば、悪霊が集まりやすい環境に、周囲が一変した為である。

俺は明日香ちゃんに言う。

「あ、明日香ちゃん。やばい、早く此処から離れようッ。この濃い瘴気の所為で、悪霊まで集まってくるッ」

「う、うん。そ、そうみたいね……ゴクリッ」

明日香ちゃんは生唾を飲み込みながら、そう返事した。するとその時だった。

「ズザザザッ」という地面を掘るような音が、触手ドームの方から

聞こえてきたのである。

何か嫌な予感がしたが、俺と明日香ちゃんは化け物を正面に見据えながら、化け物に気付かれないよう、ソツと忍び足で後退り始めるのだった。

そして、ある程度の距離を確保し、一気にこの場を離れようと正反対に方向転換をした、丁度その時！

「ウワツッ！」

「キヤアア！」

俺達の足元から、一本の触手が勢いよく飛び出るように、地面から、突如、現れたのである。

間一髪だったが、俺達は左右、横に飛び退いて何とかかわした。すると地面から飛び出した触手は、俺と明日香ちゃんを窺うかのように、海に生えた昆布の様にユラユラと縦に波打つ。

そんな触手を見据えながらも俺はこの時、ある一つの疑問が浮かび上がってきたのだ。が、先ずはこの状況を切り抜けなければならぬ。

その為、俺はとりあえず、相手の隙をついてこの場から去る方法を探る。

相手は、鬼一爺さんですら得体の知れない化け物だから、この選択は仕方がない。

だが、その時だった。

明日香ちゃんが突然、波打つ化け物の地面近くの生え際にめがけて、霊力の籠った蹴りと拳を数発、叩きつけたのである。

しかし、化け物は逆に明日香ちゃんの霊力に反応する。

そして間髪入れず、触手の先端部分は緩やかにカーブし、明日香ちゃんに狙いを定めて襲い掛かったのであった。

「クツ！ 何よ、この化け物。全然、攻撃が効いてないじゃないッ」
そう愚痴りながら、明日香ちゃんは後方にジャンプして触手を避ける。

だが更に素早いその触手は、着地した明日香ちゃんの右足に絡め

取るように巻き付くのである。

「コ、コノオ！」

すると明日香ちゃんは、巻き付いてきた触手を振り解こうと、残った左足に靈力を込めて触手を踏み抜いた。

だがしかし、骨の触手はその程度の攻撃など意を返さず、明日香ちゃんを宙にひっぱり上げると共に、更に地面から這い出てくる。そしてあつという間に明日香ちゃんの身体は5m位の高さから、タロットカードの吊られた男の様に宙吊り状態になってしまったのだ。

これは大ピンチである。

だが実戦経験の浅い俺は、こんな場合どうしていいか分からない為、ただオロオロする。

と、そこで鬼一爺さんが俺に即座に言うのだった。

（涼一ツ、飯綱の太刀を使って化け物と明日香を斬り離すのじゃ！

急げッ）

「お、おう。分かったッ」

鬼一爺さんの一言で冷静さを取り戻した俺は、直ぐに靈圧を上げて印を組み上げる。

そして飯綱の太刀を発動させた。

指先から飛び出た靈力の刃を確認した俺は、すぐさま、明日香ちゃんを宙吊りにしている触手に向かい袈裟に斬りつけた。

以前、岩で試し斬りをした時と同じように、スパツと何の抵抗もなく刃が通り、骨の触手はすんなりと断ち斬れる。

すると当然、万有引力の法則に従って「キヤア」と言う声と共に、明日香ちゃんが落下してくるわけである。

一応、そうなる事を予想していた俺は、印を解き、明日香ちゃんを受け止めるべく、前屈みになりながらも両手を前に突き出した。

明日香ちゃんを受け止めると共に、ずっしりとした重みが両手に伝わってくる。

ついでに、やや前のめりの態勢で受け止めたので両膝がやや辛い

状態だ。

だが、今はそんな事を言っている場合じゃない為、即座に明日香ちゃんを地面に下ろす。

何故ならば、こうしている間にも化け物は斬られた部分を補うかのように更に地面から這い出てきているのだ。

すぐにでも立ち去らねばならない。

とそこで、鬼一爺さんが再び俺に言うのであった。

（涼一、お主の近くにある化け物が這い出てくる穴に向かって、浄化の炎を放つのじゃ。そして、その隙に明日香と共にこの場を去れ
ッ）

俺は鬼一爺さんの指示に無言で従い、霊圧を上げて【浄化の炎】の真言を唱える。

《 ノウモ・キリク・カンマン・ア・ヴァータ 》

真言を唱えると、見慣れた直径40cm程の青白い火球が右掌に出現する。

だがその時だった。

火球が現れるや否や、化け物はまるで浄化の炎を嫌がるかのように、俺達から距離を取り出したのである。

浄化の炎が苦手なのだろうか？

フトそんな事が頭を過ぎったが、今はすべき事を優先させなければいけない。

その為、火球の出現を確認した俺は、すぐさま触手が這い出てくる地面の穴に向かって右掌を突出し、術を放ったのであった。

穴に直撃した火球は、勢いよく爆ぜると共に、地上に這い出てくる触手部分にも火の手が回り、触手を焼きつくし始める。

またそれと共に、触手の動きも鈍くなるのだった。

だが、これは一時的な効果しかない。

何故ならば、霊波発生装置のある場所には、さつきと変わらずにあの化け物が居るからである。

早く立ち去らないとエライことになる……。

とりあえず、この濃い瘴気の漂う範囲は、俺の見立てだと恐らく、化け物を中心に半径100m程だろう。

俺達は今、大体、化け物から60m程離れた箇所にいる。瘴気の圏外に出るには最低でも40m以上移動しなければいけない。安全を確保する為には更にかかなりの移動が必要だ。

短い時間の中でそう考えた俺は、300m程先に黒い線のように見える舗装された道路を指さして、明日香ちゃんに言うのだった。

「明日香ちゃん、とりあえず、アソコに見えるさつき通って来た県道まで、全力で走るよ！」

「う、うん……」

明日香ちゃんは浄化の炎に焼かれている化け物を見ながら、弱弱しくそう返事すると、急いで立ち上がる。

そして俺と明日香ちゃんは、化け物が焼かれている隙について、脇目も振らずに全力疾走で、この場から撤退を始めたのであった

息も絶え絶えに、ようやく道路まで辿り着いた俺達は、後ろを確認して化け物が居ないのを確認する。

それから俺は霊的感覚を研ぎ澄まし、付近の負の霊波動を注意深く探るのである。

どうやら今のところ、この辺りはまだ瘴気の影響はない。とりあえず一安心といったところだ。

そうやって付近の安全を確認した後、俺達は呼吸を整える為に路肩で小休止する事にしたのである。

俺達は両膝に手を付きながら前に屈んだ姿勢になり、肩で息をしながらかも呼吸を整える。

額からは大粒の汗が絶え間なく落ちており、足元のアスファルト路面をポタツポタツとした音と共に濡らしていた。

まだ周囲の外気が冷たい所為か、出てくる汗がひんやりとしたものに感じる。

そんな風に2分ばかり休んだところで、明日香ちゃんがやや控え

気味に俺に話しかけてきたのだった。

「さっきはありがとう、日比野ツチ……」

俺は明日香ちゃんに振り向くと、笑顔を作りながら言った。

「ヘッ？ ああ、いいよ。気にしないで。とりあえず、持ちつ持たれつという事で」

すると明日香ちゃんは、曇った表情を浮かべ、やや間を開けてから聞いてきた。

「ところで……さっき化け物に使った術って、鬼一法眼様から教えてもらった術なの？……」

「まあ一応……爺さんから習った術だよ」

と返事をしたところで、俺は鬼一爺さんに言われるがままとはいえ、土門長老達から「成るべく使わない様に」と言われていた、古の術を使ってしまったのを自覚するのだった。

まあでもあの状況だと仕方ないだろう。鬼一爺さんの判断に従わなければ、どうなっていたか分からんし……。

俺がそうやってさっきの化け物とのやり取りを思い返していると、明日香ちゃんはボソツと一言、弱弱しく言うのだった。

「そ、そうなの……」と。

今の明日香ちゃんは化け物の事よりも、鬼一爺さんの課題の方をかなり意識しているのだろう。

まあ無理もない。が、今後は非常に危険な化け物とのやり取りが、これからも予想される。

その為、俺は明日香ちゃんに忠告の意味を込めて言うのだった。

「明日香ちゃん、鬼一爺さんの言った事が気になるかもしれないだろうけど、今は化け物の事を優先しなければいけない。あまり他の事に気を取られていると、自分の身にも危険が及ぶよ」

すると明日香ちゃんは、キツと俺に強い眼差しを向けて言い放った。

「そ、そんな事、日比野ツチに言われなくても分かってるわよッ！
何よッ、私の気も知らないでッ」

「そんなに怒らないでよ。……俺も、明日香ちゃんが心配だから言ってるんだよ。今回の化け物は合同修被訓練の時と違って、対応を少しでも間違えると、本当に命取りになりそうなヤバい相手だからさ。……分かるだろ、明日香ちゃん？」

俺は憤る明日香ちゃんにややたじろぎながらも、念を押すために再度、そう忠告をしたのだった。

何故ならば、先程の化け物への対応にしても、少し向う見ずな感じがした為である。

おまけにそれが原因で、明日香ちゃん自身的身にも、実際、危険が及んでるし……。

幾らなんでも、得体の知れない化け物相手に軽率すぎるだろう。そう思ったから、俺は再度忠告をしたのである。

すると明日香ちゃんは、少し思いつめたのか、シヨンボリと肩を落とす。

だが20秒程度俯いたところで勢いよく顔を上げると、吹っ切れた様に肩の力を抜き、幾分か和らいだ表情で俺に言うのであった。

「……そうね。確かに日比野ツチの言うとおりだね。今は魑魅の方に意識を向けて、鬼一法眼様の事は、とりあえず、置いておく事にする。……死んだら、術の修行どころじゃないもんね」

「そうだよ。まずは無事、この仕事を終えることが先決だよ。こんなところで死んだら元も子もないからね」

とりあえず、明日香ちゃんは魑魅の方に意識を向けてくれるようだ。

そんな明日香ちゃんを見て少し安心すると、先程、触手に襲われた時に過ぎった疑問を俺は思い出すのだった。

早速、その疑問を俺は鬼一爺さんに問いかける。

「鬼一爺さん、聞きたい事がある。それと爺さんの声だけでも、明日香ちゃんに聞こえるよう、霊圧を調整してくれ」

(なんじゃ、涼一。何を聞きたい?)

鬼一爺さんの声を聞いた明日香ちゃんは「エッ?」とやや驚くし

ぐさをすると、俺に言った。

「き、鬼一法眼様は今、此処にいるの？」と。

そういえば、鬼一爺さんと俺の関係を話してなかったのを思い出す。

なので、まずそれを告げることにした。

「ああ、いるよ。鬼一爺さんは俺に憑いているようなもんだからね」

「そ、そうなの……ハハッ」

すると明日香ちゃんは、やや引き攣った笑みを浮かべながら返事したのだった。なんか知らんが、予想外だったのだろう。

まあそれは兎も角、俺は疑問を問いかける。

「さつき、化け物が俺達の足元の地面から現れたとき、俺は迫りくる負の霊波を感じなかったけど、何でだ？ 最初、現れたときは感じたのに……」

俺の疑問を聞いた鬼一爺さんは、目を閉じて腕を組むと、ゆっくりと口を開いた。

(……フム、それはのう。あの化け物が周囲に撒き散らした濃い瘴気が原因じゃの。濃い瘴気がお主の霊的感覚を鈍らせたのじゃよ。

しかも、あの場に漂っていた瘴気の波長はあの化け物と同じ様な波動じゃった。例えるならば、霧が深く目目の前の視界が悪くなるのと同じ様な理^{ことわり}じゃ。このような状況になってしまえば、流石にお主の優れた霊的感覚でもどうにもならんわ)

「だからか……。だとしたら、すぐく、不味いな……」

俺は鬼一爺さんの言葉を聞き、幽現成る者の感覚を持つてしてもあの濃い瘴気に覆われた中では奴の負の波動を見つけれない、という現実に恐怖感を覚えるのだった。

何故ならば、幽現成る者である俺自身が持つ一番のアドバンテージが無くなるからである。

これは非常に危険な事態である。早急に打開策を考えねばならない。

俺の不安をよそに、鬼一爺さんはさっきの化け物がある山の麓に

視線を向けながら続ける。

（これは私の考えじゃが……。恐らく、お主等が襲われたのは、あの濃い瘴気が原因かもしれないね）

「濃い瘴気が原因？ ……どういう事だよ」

（逆に考えるのじゃ。あのように濃い瘴気は、涼一や明日香にとっては負の靈波を辿れない為に身動きしづらい霧になる。じゃが、あの魑魅にとっては蜘蛛の巣と同じような意味合いを持つものかもしれない、という事じゃ。何より、あの魑魅……濃い瘴気を撒き散らして、一時ではあるが、己の周りに死の世界を形成してあるからの。その瘴気の中で、夜空に輝く星々の様に、より一層浮き彫りになった正反対の輝きを放つ生命を探しておるのじゃろう。この世の生命を喰らう為の……。そして喰らう度、更に、魑魅は強大になってゆく（のじゃ……）

俺は鬼一爺さんの話を聞いてゆくうちに、ゾゾツと背筋に悪寒が走ると共に鳥肌が立ってきた。

要するにあの魑魅は、獲物を捕らえやすいよう、リーダー代わりに瘴気を放っているかもしれないのだ。

その可能性は大いにあり得る。というかその可能性の方が、現状、一番高いのである。

隣にいる明日香ちゃんも、鬼一爺さんの話を聞くなり、両腕を交差して反対側の腕をつかみ委縮していた。

まあこれは仕方ないだろう。

もしそれが本当なら、少数の術者では対応しきれない程、影響範囲が大きい化け物だからだ。

だが、そこでフト気になる事を俺は思い出す。またそれと共に、嫌な予感もするのである。

それは魑魅が瘴気を放つ前に感じていた違和感であった。

俺はそれも鬼一爺さんに問いかける事にした。

「鬼一爺さん、実はもう一つ気になっている事があるんだ。今もあの麓からは化け物の負の波動を感じるが、最初に山の中腹辺りから

感じた強弱のある負の波動はそのままだ。どういう事だ一体？ なんかどちらと同じような感じがする波動を感じる。俺には化け物が二体居るといふよりも、どちらも同じ化け物の様な気がするんだが……」

すると鬼一爺さんは（フム……）といった後、少しの間、黙り込む。

何か色々と考えているのだろう。

2分ばかり静かな時が過ぎたところで、鬼一爺さんは口を開いた。（恐らく、山の中腹におけるのは本体の方やもしれぬ……。そして涼一達を襲った根っこの様な化け物は、魑魅の手足みたいなものなのじゃろう。そう考えれば、今も2か所で感じる同じような負の波動の辻褄が合うからの……。しかも、あの魑魅……。まだ日が高いというのに出てきたという事は、本体は動けずともあのような形でなら、日中でも動けるといふ事じゃろう。真に厄介な魑魅じゃわい）

「……やっぱりか。……まだ太陽が照っているのに偉く活動的だったから変だと思ったんだよ」

鬼一爺さんの話を聞いた俺は、弱弱しくそう呟いた。

今の内容は、実を言うと俺も思っていた事である。

しかし、認めたくはない為、一応、鬼一爺さんに確認の意味を込めて聞いたのだった。

それらを踏まえたうえで俺は鬼一爺さんに尋ねた。

「だ、だとするとだよ。あそこで俺達が襲われた現実と照らし合わせる……あまり考えたくないけど、今やもう、あの山自体が魑魅の根城ということだよ。もしそうなら警戒範囲が広すぎて、生半可な手段じゃ焼け石に水だよ。何かいい方法はないの？ 鬼一爺さん」

すると鬼一爺さんは、ややビビりながらした俺の問いかけに、不敵な笑みを浮かべて言うのだった。

（確かに、生半可な手段では太刀打ちできぬの。じゃが、先程の涼一と化け物のやり取りのお蔭で、一つあることを我は知る事が出来た。涼一も気付かなんだか？ お主が浄化の炎を行使した時の事じ

や)

俺は鬼一爺さんに言われて、その時の光景を思い返す。

それと同時に、あの時気になったことを思い出したのである。

「アツ……そういえばあの化け物、浄化の炎を発動した途端、やけに俺達から距離を取り始めたな……。まるで、避けるかのように」

俺は顎に手を当てながらそう呟いた。

鬼一爺さんは頷くと言う。

(ウム、そうじゃ。じゃが、化け物のあの反応は浄化の炎という術に反応したのではなく、【炎】そのものに反応した様子じゃった)

「エツ炎自体にか？」

俺はその辺の細かい事はよく分からなかったが、数多くの経験を持つ鬼一爺さんの目には、何か別の反応が見えたのだろう。

(……我にはそう見えたという事じゃ。兎も角、今は確実な手立てが欲しい。そこでじゃ、涼一。お主に今すぐ、やってもらいたい事がある)

俺は首をかしげつつ聞き返す。

「やってもらいたい事？　なんだ一体？」

(お主に教えた烏天狗の式があつたじゃろう。アレを使い、あの化け物に霊力の炎ではなく、本物の火を放ってほしいのじゃ。この方法ならお主の危険も少ないからの。それに、つい先日した修練の様子を見た感じじゃと、今のお主ならこの距離でも十分操れるはずじゃ。まあそういう訳じゃから、式を通して魑魅の反応を確かめてほしい。どうじゃ、やってくれぬか？)

「ああ、それは分かったけど。……何か火種が欲しいな。そんなの持ってきてたかな……」

俺はそういうと、ライターやマッチの様な火をつけるものがないかと、自分の上着やジーンズのポケットを探る。が、何も見つからない。

まあ、持ってきた覚えもないので、当然と言えば当然である。

参ったなあ、と思いつつコメカミをポリポリと人差し指でかいて

いると、明日香ちゃんがポケットから一つの珠を取り出して言うのだった。

「日比野ツチ、火霊珠ならここにあるから種火として使ったら？火霊珠自体は霊力で燃えるけど、これでその辺の棒切れを燃やせば普通の火になると思う」

俺はとりあえず、確認の為に鬼一爺さんに聞いてみた。

「爺さん、この術具の火を種火に使うくらいならいいよな？」

（ムウ、あまり良くはないが、無いのなら仕方あるまい。それで構わぬ。兎も角、早くせぬと奴はまた姿をくまます。急ぐのじゃ涼一）
「お、おう」と、返事したその時だった。

向こうから一台の白い車が俺達の方向にやってきたのである。

それは宗貴さんのランドクルーザーであった。

ランドクルーザーは近づくにつれてスピードを落とし、路肩にいる俺達の横につける。

そして乗っていた土門長老と宗貴さん、そして一将さんの3人がドアを開けて、すぐさま降りて来たのである。

3人は俺達に寄ると、まず、土門長老が怪訝な表情で口を開いた。
「日比野君に明日香、こんな所でどうしたんじゃ、一体？何かあったのかの？」

俺はとりあえず、時間がないので今あったことを簡単にだが、説明をする事にしたのだった。

「ええ、実は……」

俺は簡単に掻い摘んで、今までの経緯を2分ほどで説明をした。

すると、宗貴さんがランドクルーザーのバックドアを開き、20Lポリ容器にライターと新聞紙といった物を持ってきたのである。そして宗貴さんは、俺の前にそれを差出して言うのだった。

「日比野君、これを使うといい。一応、念のため、さっき外での暖房用に灯油を購入してきたんだよ。まだ外は寒いからね」

もうこれは願ってもない、高級放火アイテムである。
俺は宗貴さんに感謝の意を伝える。

「ありがとうございます、宗貴さん。では早速、使わせていただきます」と。

ここで予想外にも欲しかったものが一式揃ったので、俺は早速、鬼一爺さんに言われた事を実行する為に霊符入れから式符を取り出す。

そして、烏天狗をこの場で出現させるのだった。

式が展開されると共に「何よ、この式ッ」という明日香ちゃんの驚いた声が聞こえてきた。

まあ化け物っぽい式だから、驚くのも仕方ない。

俺も最初は驚いたし……。

それはさておき、俺は烏天狗の両手と足にポリ容器とライターと新聞紙を持たせると、さっきの化け物がいる山の麓へ向かって式を飛ばたかせたのであった

俺は目を閉じ、式を通じて物を見る。

周囲一帯に広がるまだ作物の作付けがされていない、やや殺風景な田園風景を空から見下ろしつつ、その先にある山の麓へと視線を移す。

今、上空から見た感じだと、この辺りには俺達以外誰もいないみたいである。

化け物の被害に遭う人は近くに居なさそうなので、一先ずは安心だ。

おまけに、今飛ばしている式の姿は誰にも見られないだろうから、遠慮なく飛ばせられるし。

俺はそんな事を考えつつ、式を飛ばたかせて化け物の居る山の麓へと飛行させる。

それから程なくして、式は化け物の付近の上空に辿り着いた。

そこで一旦、化け物と周辺の様子を俺は見る事にした。

俺達が襲われた時、この辺りに漂っていた濃い瘴気も、今はだいぶ薄まっているみたいである。

この分だと、化け物にかなり近づけそうだ。

今度は化け物自体に視線を向ける。

すると霊波発生装置を覆う骨の触手で出来た、直径20m程ありそうである歪な半円形のドームは、さつきと変わらず其処にあった。どうやら、霊波発生装置に今も魑魅はご執心なようだ。

多分、相手が機械なので、生物と違って魑魅自身を取り込んだり、消化したりできないからなのかもしれない。

まあでも、霊波発生装置のバッテリーが切れたら、流石に魑魅も関心が無くなるかもしれないが……。

それは兎も角、今の状況を確認した俺は、高度40m位を保ちつつ、触手ドームの真上に式を移動させる。

そして烏天狗の手に持たせたポリ容器の口を真下に向け、触手ドームの天辺に遠慮なく灯油を振り掛けたのであった。

すると化け物は、灯油が掛かるなり、若干、全体的に小刻みに震えだした。が、それだけであつた。別段、他に変化はない。

次に、俺は式の高度を下げる。

これはこの高さからだとかや風があつて着火しにくい為だ。

触手ドームから20m程の高度に式を下げたところで、俺は式に持たせた新聞紙を棒状に丸めると、その先をライターで炙つて着火し、即席の松明を作るのだった。

火が着いたのを確認した俺は、一気に化け物に向かって高度を下げる。

そして灯油に塗れた触手ドームの天辺部分に向かい、火の着いた新聞紙をくべたのであつた。

その瞬間！

ポウツと触手ドームに火の手が上がつた。

またそれと共に【ヴアアア……ギギイイアアア】という地の底から響くような呻き声を化け物は発し始めたのである。

だがそれだけではない。

幾重にも重なってドームを形成していた骨の触手は、まるで布生地が解れたかのようにバラバラになってゆくのだった。

それらは慌てふためいたかのように小刻みに波打ち、火の手から逃れようともがいているように見える。

すると慌てふためく触手は、這い出てきた穴に、まるでビデオを逆再生した映像のように、山の内部へと慌てて戻りだしたのであった。

これはもう、鬼一爺さんの言った通り、火が苦手という事で間違いないようだ。

そして俺はこれらの一部始終を見届けた後、式を俺達の元へと帰還させるのであった。

四拾七ノ巻

《四拾七ノ巻》 魍魅 六

俺は化け物の所へと飛ばしていた式を自分の所に戻す。

そして閉じていた目を開くと共に、式符術を解いた。

その瞬間、烏天狗の式は幻であったかのようにサツと唯の紙へと戻り、地面にフワツと舞い落ちるのだった。

俺は落ちた式符を回収すると、皆の顔を見回して今の実験結果を伝える。

「鬼一爺さんの言ったとおりでした。式で魍魅に火を放ちましたら、慌てたように這い出てきた穴から山の内部へと戻っていきましたよ。奴は確実に火を嫌っておりますね」

結果を聞いた鬼一爺さんは、さっきと同じく、少しだけ霊圧を上げ、声だけバージョンで言った。

因みにだが、俺には霊圧関係なしに鬼一爺さんは見えている。

（やはりの、思った通りじゃわい。さて、ではそれを踏まえてじゃが……一将殿に一つ聞きたい事がある）

突然話を振られた一将さんは、ハツと顔を上げると、やや驚きつつも口を開いた。

「鬼一法眼様。聞きたい事とは、何でございましょうか？」

（朝方、『まんしょん』とやらで言っておったの。道摩家の古文書に、黄泉という魍魅の事が書かれておると……。我はその内容が知りたいのじゃ。で、その古文書とやらには、如何にして魍魅を追い詰めたかの記述はなかったのかの？）

一将さんは短く綺麗に刈りそろえられた顎髭を人差し指で撫でつつ、目を閉じる。

そのまま何かを思い返すように沈黙をはじめた。

そして20秒程すると、目を閉じたまま落ち着いた口調で、静かに話し始めるのである。

「……それが実は、その古文書にはどうやって黄泉を追い詰めたかの細かい記述は無いのです。大まかに、先祖を含めた200名以上の呪術者達と共同で追い詰め、封印をしたとだけ書かれているだけなのです。ですが……先程、日比野君が言った【奴は火を嫌う】という言葉を聞いて、古文書のある記述の部分を思い出しました」
すかさず、土門長老は尋ねる。

「ある記述？ 道間殿。それは一体、どのような記述なのじゃ？」

一将さんは閉じていた目を開くと共に、皆の顔を見回してから言った。

「その内容ですが。古文書には、黄泉の封印を施す前に、あの荒守の集落がある付近一帯の木々を切って山焼きを行ったという記述がありました。更にその前後の記述では、かなりの術者が黄泉との戦いで命を落としたとも……。それらを踏まえますと、恐らく、もはや手段を選べる状況では無かったでしょう。事の真相は分かりかねますが。私が思うに、黄泉の大体の位置を把握した先祖は、恐らく、日の光を利用して黄泉の行動範囲を狭める事と、呪術成功率を上げる為に障害物を無くす事を考え、あの辺り一帯の木々切り倒して山を焼いたという事なのかもしれません。まあこれはあくまでも私の勝手な想像ですが」

(フム、なるほどのう、山焼きか……)

一将さんは鬼一爺さんの言葉に、「ええ」と相槌を打つと続ける。「そして、今言った古文書の記述と、先程の日比野君の話とを照らし合わせますと。それらが結果的に、偶然にも奴の弱点を突いていたのかもしれない」

だが一将さんの話を聞いた鬼一爺さんは、腕を組むと眉間にしわを寄せる。

それから更に難しい表情をしながら言うのであった。

(じゃが、あの魑魅の反応……。我には普通の弱点とは、また違う様に見えるのじゃ。いや、寧ろ、それらの事があつた所為で弱点になつたのかもしれない。我も真相は分からぬが。兎も角、先程の涼一とのやり取りを見た感じじゃと、魑魅自体が火に弱いという事でなく、火に対して嫌悪感を抱くような動きに見えたのじゃ。奴は火の何かを恐れておるのかもしれない。それは山焼きの事もかもしれぬし、もしやもすると、嘗ての封印された時の事をまざまざと思いだし、それを恐れたからなのかもしれない)

鬼一爺さんの説明を聞いた俺は、今の内容を噛み砕いて口にした。「……という事は、元々、火は苦手ではなかつたけど、過去のトラウマから火を嫌っている可能性もあるって事が……」

(ウム。そういう事も有り得るといふ事じゃ。あれらも厄介なことに、強大になるにつれて知恵をつけてゆくからの)

今、鬼一爺さんは聞き捨てならない言葉を言った。

その為、俺はすぐに問いかけた。

「鬼一爺さん、今、知恵をつけるって言ったけど、マジか？」

(ここに来る道中、涼一に言つたと思うが、ある日突然生まれる邪悪な魑魅というのは、多くの生命を喰らつて変化し、じきに強大になつてゆく。じゃが、それは単に力や体だけが変化して強大になるという意味ではない。人が色々な事を経験し成長していくのと同様、魑魅もまた同じく成長してゆくという意味じゃ……。しかも、このような魑魅は条件が揃えば短い時で、あっという間に成長してゆく。そこが、この類の化け物の一番厄介な性質たちでもあるのじゃよ。あの時、魑魅の変化次第で手を変えねばならぬというたのは、正に、そこなのじゃ)

今の話聞いた俺は、それまで抱いていた魑魅という化け物のイメージを大きく覆されたのだつた。

実をいうと俺は、大きな力を持つとはいへ、魑魅の事を本能のみで動き回る動物的な化け物だと思つていた。

だが、知恵がまわつて強大な力をもつとなると、根本的に考え方

を改めないといけない。

またそう考えると共に、俺の背筋に寒い物が走るのであった。

何故ならば、早く仕留めるなり封印するなりしないと、物凄い被害を出しながら、延々といたちごっこを続ける羽目になるからである。

鬼一爺さんの話が本当なら、この黄泉というのは、何としても早期に決着つけねばならない化け物なのだ。

俺がそんな風に畏怖する中、鬼一爺さんは続ける。

(……しかし、残念じゃが、此度は山焼きという手は使えぬな。山中には、まだ雪が多く残っており。おまけに今の世じゃと、山焼きという手段は色々都合が悪かるう。我も涼一と行動をする様になつてから、少しは今の世の事を学んだからの)

すると土門長老が頷きながら、鬼一爺さんの言葉に相槌を打つ。

「……ええ、確かに。鬼一法眼様の仰る通り、雪の有無に関わらず、山焼きは不味いですな。とりあえず今は、【黄泉は火を嫌う】という事が分かっただけでも大きな収穫ですじゃ。ですので、その性質を利用して、黄泉を追い詰める策を練った方がいいですよ」

(……ウム……そうじゃな)

だが鬼一爺さんは、今の土門長老の話聞き、妙な間を空けながら何処か歯切れの悪い返事をしたのだった。

多分、鬼一爺さんには、何か納得のいかない部分があるのだろう。俺はそれが気になったので、鬼一爺さんに聞く事にした。

「鬼一爺さん。今、なんか歯切れ悪い返事をしたけど、なんか気になる事でもあるのか？」

すると鬼一爺さんは、俺の顔を一度チラッと見ると、今も山の腹辺りから感じる、負の波動の場所に視線を向ける。

そしてゆっくりと話し出した。

(……あの魑魅は火を嫌う。じゃが……恐らく、火で止めは刺すことは出来ぬじゃろう。その昔、最終的に封印という手段を道摩家の者達が取ったのも、そこに理由がある気がするのじゃよ。あの魑魅

を完全に退治するには、まだ、知らねばならぬ秘密があるように我は思うのじゃ)

今の鬼一爺さんが言つとおり、確かにそこは腑に落ちない点である。

嘗ての道摩家の術者達は、黄泉を滅ぼす事が出来なかったが為に、封印という手段と取つたのだ。

退治出来るのなら、既に行っている筈なのである。

では、黄泉を退治できなかった理由とは、一体なんなのだろう…

フトそんな事を考えていると、一将さんが低く重い声で、皆に警告するかのように言つたのだ。

「鬼一法眼様……。実は古文書の記述には、最後にこう締め括られておりました。」 幾度となく、呪を浴びせようと、黄泉は絶えることなく水が湧くかのように必ず何度も蘇る。黄泉の封印は何があつても絶対に解いてはならぬ。道摩の名を継し者はこれを末代まで伝え続けよ」と……

(フム……何度も蘇るか……)

皆はその言葉に驚愕し、周囲には重く息苦しい空気が立ち込める。まるで何かから息を潜めているかのように、皆が口を噤み、静かな時間が過ぎてゆく……。

すると鬼一爺さんは、そんな重苦しい中でも空気を読まず、マイペースに現状を総括して言つたのであった。

(まあとりあえずじゃ。先程の一件で分かつた事は、奴が火を嫌うという事。そして日が高くとも、それなりに強い正の靈波動と生命の波動に対しては、本体からかなり離れていても反応して襲い掛かってくる事があるという事じゃわい。今はこれらの性質を利用して、策を練るしかあるまい)

鬼一爺さんの言葉を聞いた皆は、無言で重々しく頷いた。

勿論、俺もだ。

そんな俺達の表情を一通り見た鬼一爺さんは、やや目つきを鋭く

し、真剣な表情になる。

すると大河ドラマに出てくる戦国武将の様に、どつしりと腰を据えた頼もしい雰囲気を身に纏い、口を開いたのだった。

（さて、ではそれらを踏まえてじゃ。今、我が考えた魑魅への対処方法を大まかにじゃが、話そうかのう）

今の言葉を聞いた皆は、全員がハツとした表情になり、俯き気味だった顔を真つ直ぐにした。

鬼一爺さんは土門長老と一将さんに視線を向ける。

そして二人に尋ねた。

（それでは土門長老に一将殿。一つ聞きたい事がある。今の世でも、【奇門遁甲】^{きもんとんこう}の流れを汲む呪術や霊術というのは、割と使われておるのかの？）

鬼一爺さんは、何やら俺には分からない単語を言いだした。

『きもんとんこう』という名前を聞いた感じでは、どこかの市町村でごく当地名物になっていく郷土料理を思わせる名前である。

まあ今までの話の流れから考えれば、それは絶対にありえないだろう。今、これを言ったら、確実に冷たい視線が飛ぶから言わないでおこう。

俺がそんな馬鹿な事を考えていると、土門長老は言った。

「奇門遁甲の流れを汲む術でございますか……。まあ色んな流派が沢山ございますが、今も使われてますの。割とこの呪術業界では有名な部類のもんですから。それに儂等も時折、使う事がありますからの」

よく分からんが、どうやら『きもんとんこう』というのは、呪術業界だと広く知られているものらしい。

鬼一爺さんはそれを聞き、ややホツとした表情で言った。

（おお、そうであったか。知っておるならば話は早い。実は、我ら賀茂氏には、こういつた強大な魑魅に対処する術法の中に、奇門遁甲を元に作られた【地龍八門の陣】^{ちりゅうはちもん}という結界術があるのじゃ。それを使えば、奴を身動き取れない様に結界内に閉じ込められる筈じ

や。封印するにしろ退治するにしろ、まずは、自由に動ける魑魅をどうにかするのが、この場合、一番の近道のような気がするからの（今の鬼一爺さんの言葉を聞いた一将さんは、驚きの表情を浮かべつつも即座に聞き返す。

「誠にございますかッ、鬼一法眼様。……して、それは、どのような形式の術なのでしょうか？」

（フム。術の大まかな理は、奇門遁甲における八門の關係を知っておれば、大凡、おおよそ理解できるとは思う。じゃが、この地龍八門の陣は、祟り神と呼ばれるほど強大な化け物を結界内に閉じ込め、尚且つ、場合によつては葬り去る為の攻防一体の術法じゃ。となると、当然、必要なものがある。それは行使する為の術者の人数と、術の発動に必要な膨大な量の霊力、そして八門の結界に誘い入れる策じゃ）
意外な言葉を聞いたので、俺はすかさず問いかける。

「エッ？ 今、膨大な量の霊力と術者の人数つて言っただけど、一人でやる術じゃないの？」

すると鬼一爺さんは、やれやれといった感じで俺に言った。

（あのな……涼一。流石にそんな強力な結界術は、一人では到底無理じゃ。この術には最低でも九名の術者が欲しい。しかも九名というのは、かなり成熟した術者の場合じゃ。それに、地脈を流れる地霊力の力も借りんと、術の発動に必要な霊力が確保できぬわい」

「まあ、そりゃそうか……」

確かに、あの化け物の規模を考えると、流石に一人でどうこう出来るような感じではない。

鬼一爺さんは続ける。

（じゃが、そうはいうものの、行使する術者の方は、未熟な者でも人数を掛ければ何とかなると思う。問題は、何処に地龍八門の陣を仕掛け、如何に誘い込むかという事じゃ。それなりに広い場所でも尚且つ、それなりに強い地霊力が通る地脈付近でないと駄目じゃから、自ずと場所も限られてくる。また、そこに誘い込む為の策も幾つか考えねばならんからの）

と、そこで鬼一爺さんは、一旦、話を区切る。

そして一将さんに視線を向けると言うのであった。

(で、どうする一将殿？ もし我が今言った地龍八門の陣を使うならば、色々と今から段取りせねばならぬ。じゃから、決断は急いだ方が良いぞ。幾ら今の世に『じどうしや』や『けいたいでんわ』といった便利な道具があるとはいえ、揃えねばならぬものは揃えんと術は使えんからの)

一将さんは鬼一爺さんの問いかけに目を閉じて思案する。

そして20秒程経過したところで目を開き、頷くと共に言うのであった。

「そうですな……。今は早急に対応を考えねばなりません。放っておけば更に手が付けられなくなる可能性があります。ここは、鬼一法眼様の言った術法にかけてみましょう」

続いて土門長老が言う。

「では、一旦、またホテルの方へ戻るとするか。陣を仕掛ける場所なら、この地に住まう八神さんに聞いた方がええじゃろう。この地の龍脈の事も一番よく知っている筈じゃ。それに、そこに誘い込む策も落ち着いた場所と考えた方が、良い案が浮かぶじゃろうて」

今、土門長老は龍脈と言ったが、以前、鬼一爺さんから地脈の別名だと習ったのを俺は思い出した。

世の中には一つの物や事柄に、色んな呼び方があるので、非常にややこしい。

兎も角、そういう訳で俺達は、また作戦を練る為にホテルへと向かう事になるのであった。

1時間30分後

今の時刻は午後3時30分。

俺は腕時計で時間を確認すると、ビジネスホテルの一室にある窓辺に視線を向ける。

すると、太陽が少し西の空に傾き始めており、丁度、西側にあるこの部屋の窓辺からは、眩しい西日が射し込み始めてるのであった。もうすぐ、日が落ちる……。つまり、奴の時間がもうすぐやってくるという事だ。あの黄泉という死をまき散らす化け物の時間が……。

俺は時間がもう少し欲しいなと思いつつ、視線を元の位置に戻した。

という訳で俺は今、ビジネスホテルの一室にいる。

俺がいるこの部屋はホテルの3階にあり、畳が12畳敷かれた3人用の和室部屋である。

ビジネスホテルなのでそこまで快適な設備はないが、それなりに広さを持った部屋なので、割と落ち着けるところなのだ。

また、和室という雰囲気の為か、温泉宿に来たかのような錯覚も覚える。まあこう思うのは、俺が日本人だからかもしれない。

とまあそれはさておき。

この部屋には俺の他にも、宗貴さんと明日香ちゃん、そして一樹さんに土門長老といった面々がおり、今はこれから始まる黄泉との決戦へ向けての準備をしているところなのである。

話は変わるが。

コンビニに買い出しに行っていた一樹さんは、あの後すぐ俺達と合流した。

その時は事情を知るなり、俺と明日香ちゃんにかなり深く何度も頭を下げた謝ってきたので、ちょっとビックリしてしまったのだ。

俺達は別に何も思ってたなかったので、すぐに頭を上げてもらったが。

まあ責任感の強い一樹さんだから、そういう行動にでたのだろう。という訳で話を戻す。

それで黄泉に対する作戦であるが。

つい30分ほど前に、一応、一通りの事は決まったのだ。

まず、魑魅がいる山の近隣にある村の安全は、夜の間、警察の者達が20人程の規模で警戒に当たってもらう手筈になっている。

ここまでの人数をかけることになったのは、あの集合住宅での事件が、一応、警察の間では集団拉致事件として扱われていることも関係しているようだ。

勿論、その際には村の周辺の明かりは電灯と火を使ったものになるそうである。

これは村周辺を電気無しでも明るくできるという効率的な面からと、気温の下がる夜の警備な為、現場の警官の防寒対策という事で吉田刑事が押したそうだ。

という訳で、近隣の住民たちの事は事件担当者でもある吉田刑事と、幾人か隠れて常駐する鎮守の森の浄土の方に全て任せてあるの
で、俺達はそれほど気にしなくていい。

そして、地龍八門の陣を仕掛ける場所だが。

黄泉本体？の負の波動が感じられる山から少し離れた所ではあるが、良い場所があったので其処に決定した。というか、八神さん曰く、場所的に其処しか無いそうだ。

因みに其処は、だだっ広い田園風景の中にポツンと鎮守の森を形成した、小さな無人の社がある所であった。

入り口正面には、勿論、石でできた白い鳥居があるので、遠目から見てもすぐに神社と分かるところである。

その真下に、かなり強めの地霊力が通る地脈があるので、これを地龍八門の陣を発動させ続ける霊力源にするという訳である。

まあ今回の場合、この小さな神社を現代社会の電気に例えるなら工場やプラントといった電力消費の大きい施設によくある、高圧受電設備みたいなものかも知れない。

で、最期に誘い込む為の方法であるが。

これにはもう一度、あの霊波発生装置を使う事が決まり、更にもう一つ。今度は奴の嫌いな火も同時に使う策で行くことが決まった

のである。

誘い込む道筋は、八門の結界から山の中腹にいるであろう魑魅まで一直線になるよう組まれており、それらを利用して色々細工するというわけだ。

そして今、一将さんと八神さんは、道摩家所縁の術者やこのG県や近隣の県に住む術者達と共に、誘い込む準備に取り掛かっている最中なのである。

聞いた話によると、かなりの数の術者が動員されるらしい。

そして霊波遮断の術式を施した特殊な霊装衣を着た者達が、へりを使って山中にも入り、火霊術を施す為の作業に入るようだ。

まあこれは、かなり広範囲にわたって、山の要所要所に火を使った細工をしないといけないから仕方ないだろう。

因みにへりとかは、一将さんの指示で神代総合商事が手配した物のようである。

今は恐らく、宗貴さんの車の中で明日香ちゃんが言っていた不測の事態なのだろう。

そして、道摩家当主にして浄将の階位称号を持つ一将さんが、その纏め役としての責務を全うしてる状況なのだ。大変である……。

という訳で、俺の知らんところでは、何時の間にかすげえ大がかりな事が進行しているのだった。

またその他にも、八門の結界と誘き寄せる道筋となる区域には、人払いの結界も同時に施され、一般人が立ち入ら無いようにという配慮も、勿論、成されているのである。

ここまで大がかりな事を迅速にできるのは、偏ひとへに日本全国に張り巡らされた鎮守の森のネットワークがなせる業である。もはや、感心しか起こらない。

とまあそんな訳で、全体の内容としてはこんな大掛かりな感じなのである。

で、俺達は今、何をしているのかというと……。

鬼一爺さんから、地龍八門の陣の大まかな流れというものを教えてもらっている最中なのである。

説明によると、八門というのは休門・生門・傷門・杜門・景門・死門・驚門・開門という名前が付けられているらしい。なんかややこしい名前である。

そしてその八門というのは、それぞれ違う術式を施した八つの結果術があり、それが門としての役割を果たすらしいのだ。

要するに八個の結果術を組み合わせて一つの結界を構築する法陣呪術という事らしい。

しかも、その地龍八門の陣というのは、鬼一爺さん曰く、三町以上の広さを持つ正方形の陣だそうで、かなり広域に結界を張る術のようである。

また、鬼一爺さんが言ってるのは尺貫法だからイマイチ感じがつかめなかったが、俺の無駄知識によると三町は、大体、一辺が300mの正方形といった感じなので、結界の規模もそれを基準に考えておいた方がいいだろう。

まあ兎に角、そんな説明を受けているのである。

だが、俺は奇門遁甲なんぞ初めて聞く名前だから、当然、意味も分からない。

なので、なんか外国語の講義を聞いてるみたいな感じなのだ。

他の皆を見る限りだと、大体の意味が分かるのか、鬼一爺さんの説明にウンウンと頷いていた。

その為、なんか俺だけ場違いな感じがするのである。

すると、その時だった。

そんな事を考えていたのが顔に出たのか、鬼一爺さんは俺に向かい言うのである。

（なんじゃ、涼一？ 難しい顔をしておるが、何か気になる事があるのなら言ってみい）

因みに、鬼一爺さんは声だけバージョンを継続している。

「いや、なんか話を聞いていても、想像がつかんというかさ。捉え

どころのない話というか……。まあ俺が、奇門遁甲を知らないのが原因だろうけど」

そんな風に俺が微妙な言い回しをすると、土門長老が頷きながら口を開いた。

「そうじゃろうのう。まだこの業界には日の浅い日比野君じゃ。

知らんのも無理ないの。それに今でこそ、この奇門遁甲は方位術や占術、それに呪術といったものにも利用されておるが、元を辿れば古代中国の兵法じゃったと云われておるものじゃからの」

「エッ、そうなんですか？」

なんか知らんが、意外な話だ。てつきり、呪術業界のみのお約束事なのかと思っていた。

ニコリと微笑むと土門長老は続ける。

「儂も兵法家ではないから真偽の程は分からぬが。嘘か真か、古代中国の周王朝の名軍師である太公望や、三国志にもでてくる蜀の軍師 諸葛孔明が、この奇門遁甲を百戦百勝の兵法として用いたとも云われておるくらいじゃ。日比野君もこれらの名前には聞き覚えはあるじゃろ」

「はい、太公望と孔明は、よく聞いたことありますね。へえ、兵法だったんですか……」

俺はちよつとしたトリビアに、やや驚きつつ頷いた。

だが、そこで意外な人物が声を上げた。明日香ちゃんである。

明日香ちゃんはやや興奮気味に口を開いた。

「そうよ、日比野ツチ！ 奇門遁甲は別名 八門遁甲ともいわれて、日本でも過去の歴史において使われてるのよ。武田信玄で有名な甲斐の武田家が用いた武田八陣形なんかは、名軍師、諸葛孔明が用いたと云われる八門遁甲の陣や八陣図を元にして作られたんだから」

「そ、そうなんだ……へえ」

俺は、やや興奮気味な明日香ちゃんの妙な迫力にたじろぐ。

と、そこで宗貴さんが、明日香ちゃんを諫めるように言うのである。

「おい、明日香。……少し落ち着け。日比野君も困っているじゃないか」

「アツ、ごめん……お兄ちゃん」

明日香ちゃんは、少し恥ずかしかつたのか、肩を窄める。

そして宗貴さんは、苦笑いを浮かべつつ、俺に言うのであった。

「ごめんな、日比野君。明日香は、大の歴史マニアなんだよ。学校でも、日本史研究クラブに籍を入れているくらいだからね」

「ハ、ハハツ、そうなんですか」

俺は少し乾いた笑いを浮かべながら、そう返事した。

今のやり取りで、俺は明日香ちゃんの意外な一面を知ったのだった。まさか、歴女だったとは……。

と、そこで鬼一爺さんが話を戻す。

（涼一、兵法の事は兎も角。今言った地龍八門の陣は、数ある奇門遁甲の系譜の一つというだけで、全く別の術なんじゃよ。ただ、奇門遁甲の事を多少なりとも知っておれば、術を理解しやすいというだけの事なんじゃ）

「なるほどねえ。ただ、俺は奇門遁甲を知らないから、術の説明を受けても理解できないかもしれないよ？」

後々、知ったかぶりするのもアレなので、先に釘を刺しておいた。すると鬼一爺さんは、軽い口調でアツサリと言うのである。

（ああ、言い忘れとつたが。今回は別に、お主は術の理を知らぬでもよいぞ。またこの件が終わったら、嫌でもじっくり教えてやるわい。フオフオフオ）

「フウン。まあそれならいいや。とりあえず、了解つと」

それを聞いた俺は、やや気が楽になったので軽く返事をした。だが鬼一爺さんは、何故かそこで真剣な表情になるのだった。

そして俺に言うのである。

（じゃがの、涼一……。今は理を知らぬでもよいが、この術はお主がおらぬと完成せぬのじゃ。あまり、楽観はするでないぞ）

俺は予想外の言葉を聞いた為、思わず「へっ？」と間抜けな声を

出す。

鬼一爺さんは俺の顔を見ながら続ける。

(……涼一には言わなんだが。実は一将殿にこの術を進言した時、お主が地龍八門の陣を行使する中心術者となる事を前提に、我は言ったのじゃ。何故ならば、今、話をした八門の他に、もう一つ重要な法陣術があるのじゃよ。それは、八門を統べる役割を持つ【地龍の陣】じゃ)

「地龍の陣？」と俺。

これは新しく聞く言葉だが、話の内容はなんとなく理解できる。

また、八つの結界術を組み合わせたものだとばかり思っていたが、この地龍八門の陣というのは、正確には地龍の陣と八門の陣を組み合わせた九つの結界術をつかう法陣術の様である。

まあそれは兎も角。

俺は若干首を傾げつつも、鬼一爺さんの話の続きに耳を傾けた。

(ウム。その地龍の陣がこの術の要なのじゃ。地龍の陣を発動させるにはかなり霊力の扱いに長けた者であるのと、その上で八門を操る事が出来る者でなければならんからの)

今、聞き捨てならない事を言った為、俺は即座に問い返した。

「エツ？ でもさつき、術の理は知らなくてもいいって俺に言わなかったか、鬼一爺さん？」

すると鬼一爺さんは笑みを浮かべ、今度は少し柔らかい表情になつて言うのである。

(フオフオフオ、まあ今回は我がお主の傍にいて指示をする。じゃから、涼一は地龍の陣を発動させたら、我の指示に従い八門の陣を操ればよいという事じゃよ)

「ああ、そういうことか。でもなんかさ……指示してくれるとはいえ、ぶつつけ本番の術だと不安だな」

知らないことをいきなり指示通りにやれ、と言われても俺は不安なので、それは正直に言った。

(勿論、後で一通りの説明をするつもりじゃ。じゃが、今は此処に

いる者達で八門の陣の術式と地龍の陣の術式を作るのが先じゃ。まずはそれら術式模様の下書きから取り掛かるぞい)

鬼一爺さんはそう言うのと、今度は何故か明日香ちゃんへ視線を向けた。

そしてニコリと微笑むと言うのだった。

(では今から明日香に、少しの間、手を貸してもらおうかの)と。

「エッ！ わ、私ですか？ 鬼一法眼様……」

明日香ちゃんは意外だったのか、ビックリしたように体を起こして返事をした。

まだ鬼一爺さんに対してかなり緊張しているのか、珍しく言葉がどもっていたのである。

まあこれはあの一件があるから仕方ない。

(ウム)

「で、な、何をすればよいのでしょうか？」

明日香ちゃんがそう尋ねると、鬼一爺さんは人の良い笑みを浮かべて言うのだった。

(それでは明日香、この部屋の真ん中に立って、大きく息を吸い大きく息を吐くというのを少しの間、繰り返ししてくれんかの)と……。それを聞いた俺は、一瞬、デジャブの様なものを感じた。

いや、訂正。以前、これと同じような事があったのを思い出した。それと同時に、今から何が起こるのかも大よその見当がついたのだった。

このジジイ……アレをまさか此処でやるのか……。

俺は嘗ての事を思い返しながら、明日香ちゃんに視線を向ける。すると明日香ちゃんは何の疑いもせず立ち上がり、部屋の中央に移動していたのである。

そして緊張しながら、鬼一爺さんに言うのだった。

「き、鬼一法眼様。じゃあ、始めますね。スウウウウハアアア

明日香ちゃんは何の疑いも持たずに深呼吸を始めた。

（おお、そうじゃそうじゃ。エエ感じじゃ、エエ感じじゃ。上手じやぞお明日香。その調子じゃあ）

鬼一爺さんは今から始める事への疑念を抱かせない為に、煽^{おた}てながら適当なことをぬかしている。

ある意味、今の鬼一爺さんは性質の悪い悪霊の様に、俺には見えただった。

だがそれと共に、俺の中に罪悪感みたいなものが沸き起こってくる。……でも何も言えない。

他の皆は、何が始まるんだろう？ といった感じで事の成り行きを見守っている。……でも何も言えない。

ちよつと気の毒な為、一部始終を見てられない俺は、一人だけ畳に視線を向けるのだった。

と、その時だった。

バタリツという音と共に、明日香ちゃんが畳の上に倒れたのである。

当然、他の3人は慌てだした。

「あ、明日香！ どうしたんじゃ、急に！」

「明日香ッ！」

「だ、大丈夫かいッ明日香ちゃん！」

他の3人は緊急事態だとばかりに、倒れた明日香ちゃんに急いで駆け寄った。

だが5秒ほどすると、何事もなかったかのようにムクリと起き上がり、皆に元気よく振り向いたのである。

そして俺達にニコリと微笑みながら、意気揚々と口を開くのだった。

「ヨッシャア、憑依は上手くいったわい。さて、それじゃあ早速、地龍八門の陣の術式を作る作業に取り掛かるぞい。我が直接、書いて教えた方が正確に早く教えられるからかう」と。

それを聞いた他の3人は、事態についていけなかったのか、少しの間、口を開けっぱなしで時間が止まったかのように固まっていた。

無理もない。3人にとっては、まさか、展開だろうから……。
まあそういう訳で俺達は、仮の身体を手に入れた鬼一爺さんの直接指示のもと、これから九つの法陣術式を描いた図面を作り始めるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9022h/>

霊異戦記

2011年12月9日00時18分発行